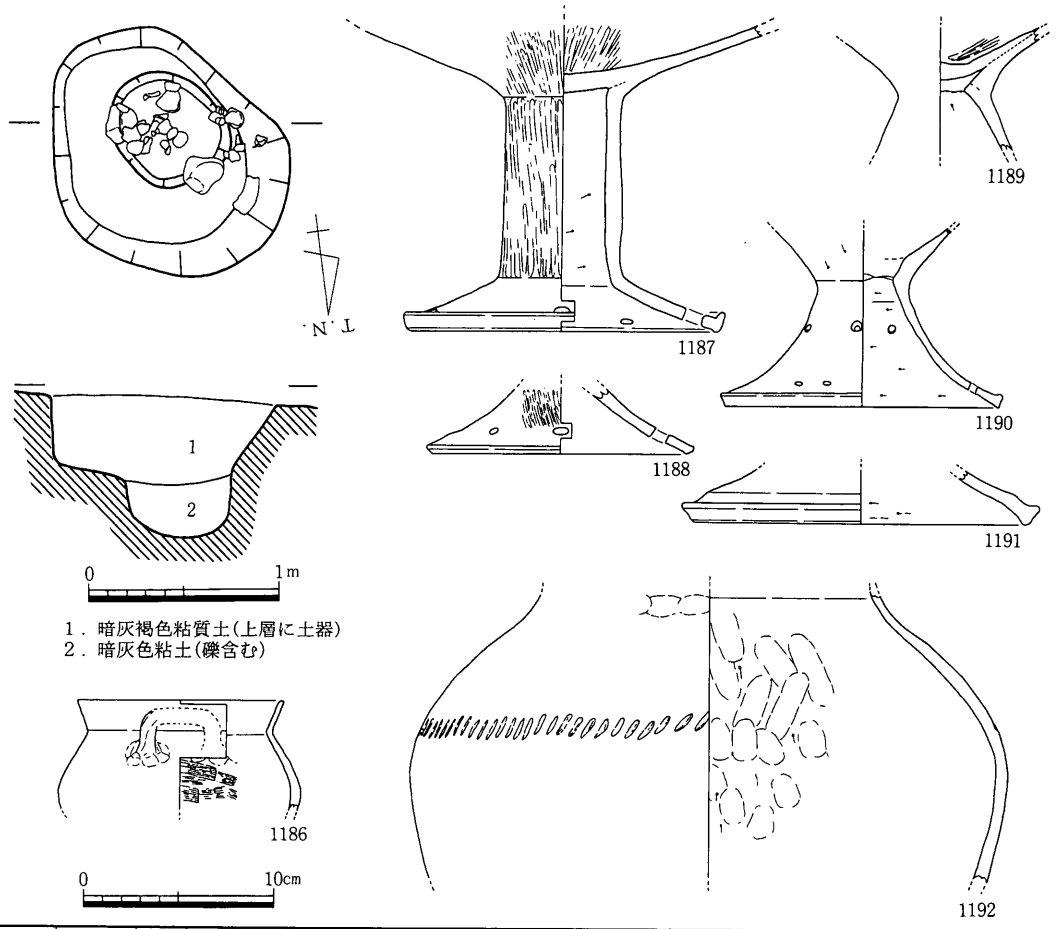
目を残す。近畿地方との関係で理解すべき形態である。(1147～1149) は後期初頭の最も一般的な形態。口縁端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。ただし，口縁部がやや伸びていることや端部の拡張がやや微弱になっている点はその時期でもより新しい様相と見るべきであろう。同じことは高坏の一部でも観察できる。拡張口縁形態 (1152～1154) は坏上半部の外傾が増し，屈曲部がやや鈍い。(1155・1156) は直立口縁形態の高坏。ミガキ調整の手法も拡張口縁形態とは異なっている。(1157) は外反口縁高坏で内外面に緻密なミガキ調整を見る。新しい様相である。脚 (1158) は端部をわずかに肥厚するが，この種の形態にしては珍しく内面のケズリ調整がきわめて不十分である。この資料から逆に通常この形態で目立つ脚端部の肥厚が内面ケズリ調整によって強調されていることがよくわかる。(1160) は脚端部を肥厚する形態で (1158・1159) と同系統であろうが，端部肥厚がかなり微弱な新しい様相を示す。(1161) は箆描並行沈線を施す。こうした脚部への施文は，この形態に限らず多くない。(1162・1163) も同系統の脚部形態。本来この形態では内面横ケズリ調整は発達しない。(1164) は柱状脚。(1165) は装飾高坏脚部。屈曲部以下の脚端は開くもののまだ長く発達していない。(1166) は把手付広片口皿の片口部で，強く反り返る。(1169) のように口縁部が発達する形態は小形器台では多くない。また小形器台としたが開きの弱い (1168) は直口壷の可能性も捨てきれない。(1173) は口縁部を小さく屈曲させる形態の鉢。口縁部直下に凹線1条を配する (1174) や端部を小さく肥厚させる (1175) と共に大形鉢の中ではやや小形の類に多い形態である。(1175) は把手付小形鉢。側面に縦位の環状把手を付す。体側部を穿って把手端部を埋め込み装着する。(1177・1178) は拡張口縁形態の大形鉢だが，端部の拡張や屈曲がかなり鈍化している。

以上示した資料では外反口縁高坏 (1157) や脚 (1160) は後出的な形態の可能性があるが，これを除けば後期初頭でも新しい様相と位置づけることができる。

(1182) は片岩製打製石庖丁で短辺の抉りは明瞭ではない。(1183) は明瞭な抉り部の存在から石庖丁としたが，背部と刃部の作りにはっきりした差がない。(1184) は片岩の板状剥片。ちょうど石庖丁製作に都合の良い形態と大きさを持つ。下縁に調整とも見なしうる不明瞭な打撃痕を観察できるので製作途上かも知れない。本遺跡では他にこのような片岩素材 (?) が2例ある。石材流通の興味深い資料である。(1185) は凹み石で，両面の中央部と側縁に打撃痕が集中する。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1186	直口壺	10.8			細・極多	にぶい黄色	やや扁平な体部から弱く折り返して口縁部は短く外傾。端部は四角く納める。肩上部に横位の環状把手。口縁部横ﾅﾃﾞ、体部内面横ﾊｹ。	1/8	角閃石極多、赤色粒、石英等
1187	脚			16.8	細・極多、中・多	黄褐色	円柱状軸部から強く折り返して裾部は強く開く。端部は上下に小さく摘む。坏部内外面放射状ﾐｶﾞｷ、軸部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｹｽﾞﾘ。裾部中形円形透かし5方。円盤充塡	全周	角閃石極多（含粗粒）、石英等、雲母
1188	脚			13.2	細・極多	にぶい褐色	脚裾部は外反して開き、端部は四角く納める。外面縦磨き、内面横ﾅﾃﾞ。中形円形透かし	1/4	角閃石極多、石英等多
1189	脚				細・極多、中・多	明褐色	脚部は緩やかに開く。円盤充塡	全周	角閃石極多（含粗粒）、石英等多
1190	脚			14.3	細・極多	橙色	脚部は外反してよく開く。端部は鈍く肥厚して上下に小さく摘む。坏部外面縦ｹｽﾞﾘ、脚部内面横ｹｽﾞﾘ。円形透かし2段、下段は2孔1対。	1/8	角閃石極多、石英等
1191	脚？			17.3	細・極多	橙色	脚裾部はやや内湾気味によく開く。端部は鈍く上下に摘む。裾部・端面に凹線各1条、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/12	角閃石極多
1192	甕				細・極多、中・多	橙色	体上部最大径部に刺突文列。内面下半縦ｹｽﾞﾘ後上半部指押さえ。	1/3	角閃石極多、石英等・雲母多

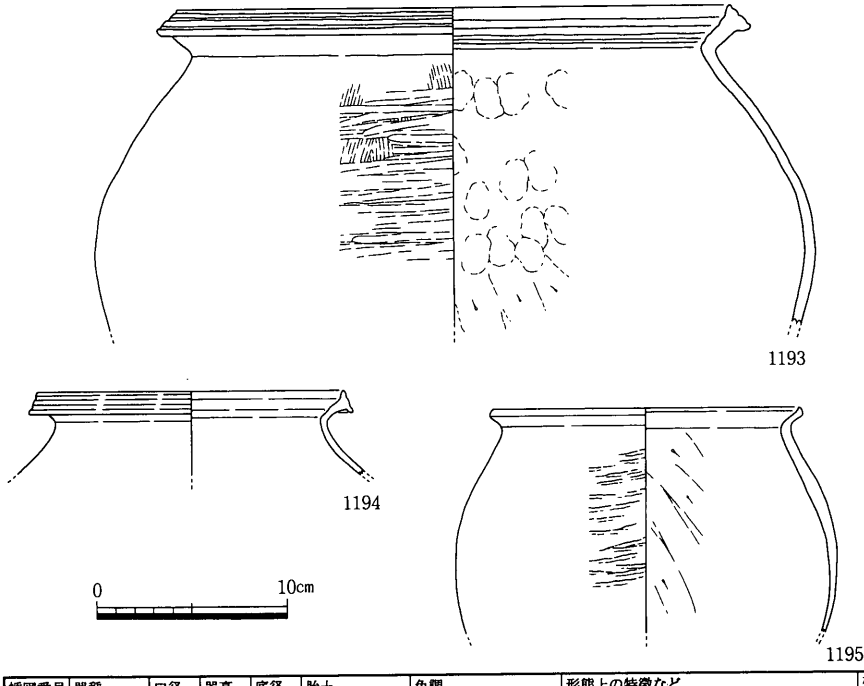
第310図　4区ＳＫ02平・断面図（1／40）および出土遺物1（1／4）

ＳＫ02（第310・311図）

Ｂ12区北端で検出した。4区西半の掘立柱建物群の南側にあり，西側には溝状遺構ＳＤ

08がある。また本土坑の東には弥生時代の同規模の土坑2基が接しているが，それらから遺物は検出していない。本土坑の平面形は南北方向に主軸を持ついびつな楕円形で，床面南半部が一段低くなる二段掘り状を呈する。長軸1.45m，短軸1.1mを測る。四周の壁立ち上がりは比較的きつく，上段部分で深さ0.45m，下段まででで0.75mで，床面の標高は14.8mとなる。埋土は2層に分かれほぼ上段部に対応する上層は暗灰褐色粘質土，下層は礫混じりの暗灰色粘土となる。上層上半部に小児頭大の川原石と共に土器片がまとまる他，上層下面付近で坏上半部を欠く高坏（1187）等を出土している。本土坑は平面形態および，床面レベルの点でＳＫ15などの井戸状遺構に類似する。

脚（1187）は柱状軸部と強く折り返して開いた裾部をもつ典型的な柱状脚形態。端部は小さく上方に摘み出し，裾部にはやや大形の円形透かしを見る。坏部の内外面を放射状ミガキで仕上げる点はこの形態の特徴である。（1188・1190）は脚端部を肥厚させる形態の



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1193	大形甕	29.0			細・多、中・多	にぶい橙色　浅黄色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚して上下に摘む。端面凹線。外面縦ﾊｹ後横ﾐｶﾞｷ、内面下半部縦ｹｽﾞﾘ後上半部指押さえ。	1/5	角閃石多、石英等多　搬入品？
1194	甕	16.0			細・極多	明褐色	痕跡的な頸部から折り返して口縁部は短く開く。端部はわずかに肥厚して上下に摘み出す。端面凹線。	1/5	角閃石極多
1195	甕	16.0			細・極多、中・多	明褐色	口縁部は強く折り返して短い。端部は小さく上方に摘み出す。体部外面叩き目残し、内面縦ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多（含粗粒）、石英等、赤色粒

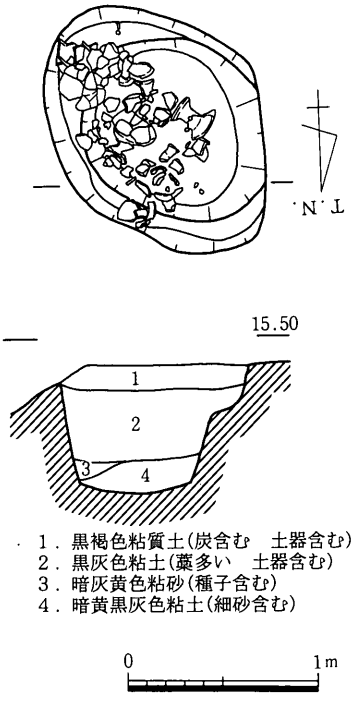
第311図　４区ＳＫ02出土遺物２（１／４）

やや後出的なものであろう。脚端部の肥厚・拡張がひどく退化している。小形器台脚（1191）は裾部に1条だけ凹線がめぐる。（1186）は小形壷で脱落しているものの肩部に横位の環状把手を持つ形態。やや開き気味で短い直口形態の口頸部を持つ。大形甕（1192）の肩部刺突文列の類例は多くない。大形甕（1193）は口縁部内面に凹線状の鈍い凹凸が目立つ。また体上半部に横ミガキを加えるもので，搬入品である。甕（1194）は後期初頭の主流的な形態だが，（1195）は口縁部形状・調整などから明らかに後出する形態と見做し得るものである。

本土坑資料は明らかに後期初頭段階と，脚（1188・1190）や甕（1195）のようなこれより後出的な段階の2時期の資料を含む。

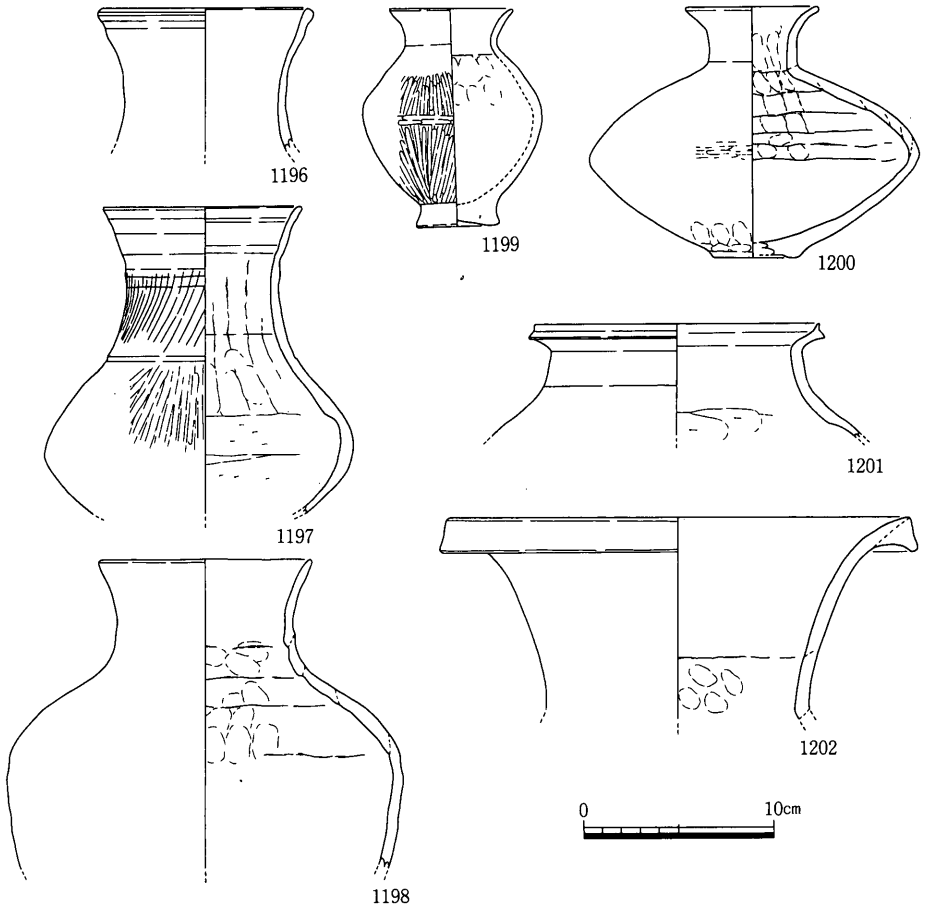
ＳＫ03（第312～316図）

Ｂ12区中央部で検出した土坑である。ＳＤ08，ＳＤ09に挟まれ，東縁部がＳＤ08・09とわずかに重複するが，前後関係は確定しがたい。平面形は北西－南東方向に主軸を持つ楕円形を呈し，長軸1.5m，短軸1.1mを測る。断面形は2段掘り状を呈し，床面は地山表層を抜いて下位の青灰色砂礫層まで達している。四周壁の立ち上がりが急である。上段部分の深さ0.25m，床面までで0.65mを測り，床面の標高は14.8mとなる。埋土は3層に区分できる。上層は炭混じりの黒褐色粘質土，中層は藁状の植物遺体を多く含む黒灰色粘土，下層は砂混じりの灰黄色粘土で瓢箪の種子を含む。（第4章鑑定報告参照）また上層～中層に大形片を含む濃密な土器の集積が認められる。本土坑も規模・形状・床面レベルの点でＳＫ06以下の井戸状遺構に近似するものといえる。



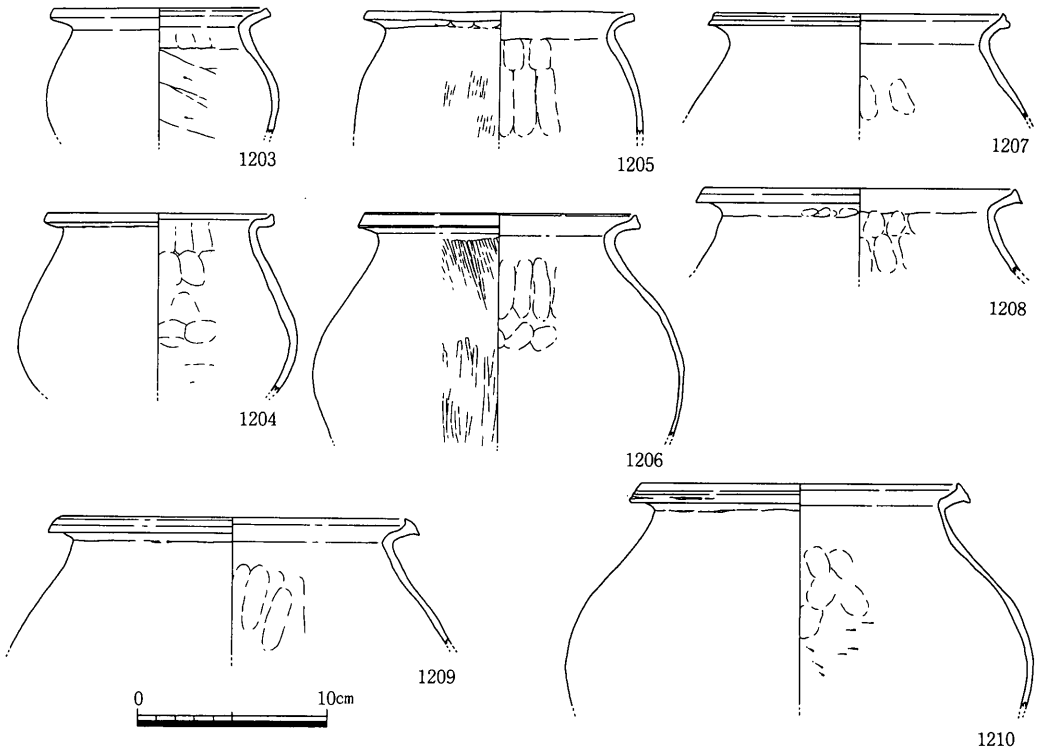
第312図　4区ＳＫ03平・断面図（1／40）

直口壷（1196）は口縁部直下に1条だけ凹線を施し，端部は四角く納める。（1197）は直口壷としては最も主流的な形態で，頸部下半に長めの斜線文を配し，体部の張りは強い。（1198）はやや短頸形態の直口壷で調整がやや粗雑となる。（1199）は小形の直口壷。短頸形態で頸部は開く。明瞭な突出底が特徴的である。



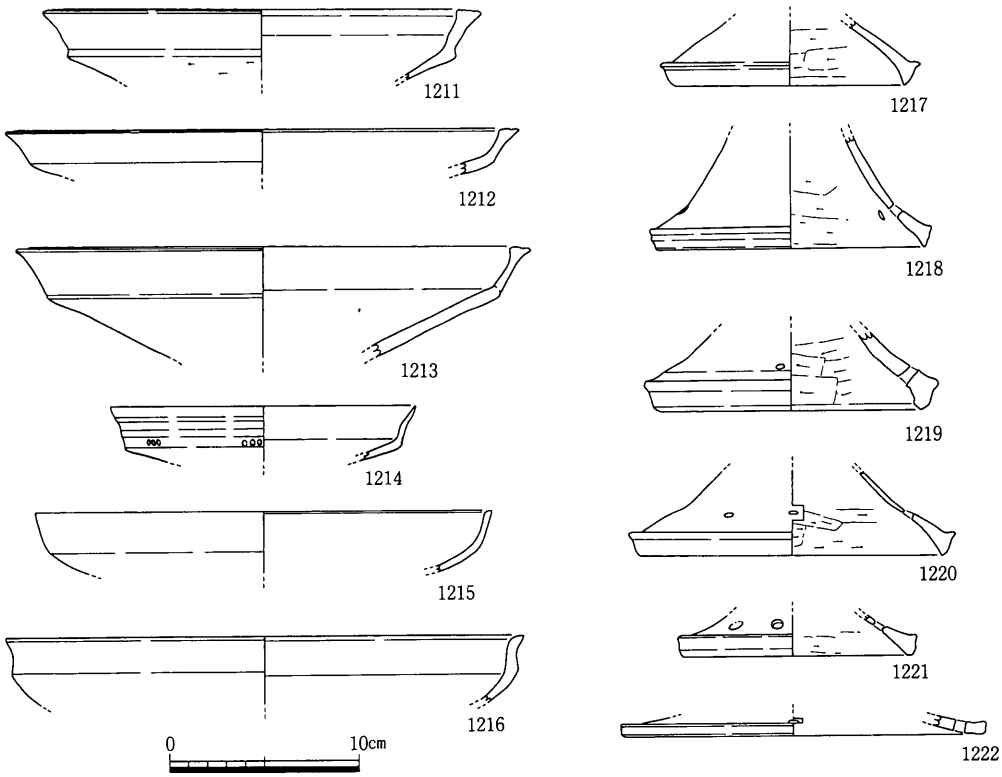
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1196	直口壺	10.8			粗・普	橙色	口頸部はやや外反して立ち上がり端部は四角く納める。口縁部直下に不明瞭な凹線1条。	1/2	石英等　搬入品　片岩？
1197	直口壺	10.4			細・極多、中・多	黄橙色	強く張った体部肩・頸部境は不明瞭。口頸部は弱く外反して立ち上がり端部は丸く納める。上半部内外面不明瞭な凹線、下半部斜線文肩部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面肩部以上指押さえ後最大径以下横ｹｽﾞﾘ	全周	角閃石極多、石英等多
1198	直口壺	11.0			中・多	淡橙色	最大径の高い肩の張った体部から口頸部はやや外反して短い。端部は丸く納める。肩部内面指押さえ顕著で接合痕よく残す。	1/3	石英等・赤色粒多　搬入品
1199	短頸壺	6.4	11.0	4.2	細・極多、粗・普	明黄褐色	体部の張りは強く明瞭な突出底。口頸部は短く開き端部は丸く納める。体部外面縦ﾐｶﾞｷ、最大径部横ﾐｶﾞｷ。内面ﾅﾃﾞで上端部指押さえ	ほぼ完存	角閃石極多、石英等
1200	細頸壺	7.0	12.7	4.5	細・極多	明黄褐色　黒褐色	強く張った算盤玉形の体部で、鈍い突出底。短い口頸部上半部は強く開く。端部は丸く納める。口頸部内外面横ﾅﾃﾞ、体部最大径横ﾐｶﾞｷ、下端部指押さえ。内面上半部指押さえ顕著で接合痕よく残す。下半部横ﾅﾃﾞ	ほぼ完存	角閃石極多、石英等多
1201	広口壺	15.0			細・極多、中・多	橙色	やや内傾する短い頸部から強く折り返して口縁部は短い。端部は小さく上下に摘む。内面肩上端まで横ｹｽﾞﾘ、他は横ﾅﾃﾞ。	1/3	角閃石極多（含粗粒）、石英等・雲母
1202	広口壺	24.2			細・極多、粗・多	明黄褐色	口頸部は緩やかに外反し端部は粘土帯を付して断面三角形の垂下口縁。	3/4	角閃石極多（含粗粒）、石英等多

第313図　４区ＳＫ03出土遺物１（１／４）



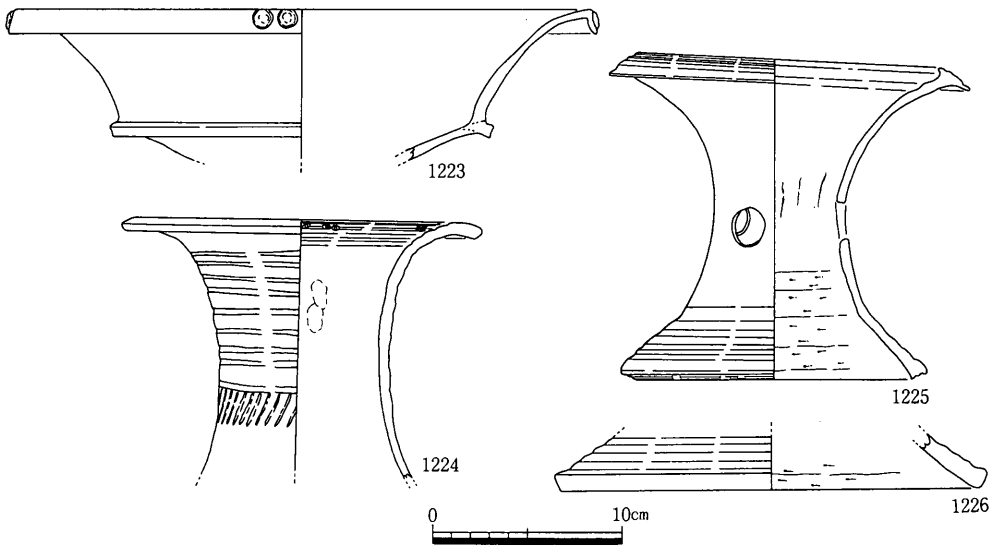
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1203	甕	11.1			細・極多	橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部はわずかに摘み上げる。内面横ｹｽﾞﾘ後上端指押さえ。	9/10	角閃石極多、石英等・雲母少
1204	甕	11.8			細・極多	橙色	最大径は体中位。口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく摘み上げる。内面最大径以下ｹｽﾞﾘ後、上半部指押さえ。	1/2	角閃石極多
1205	甕	13.8			細・極多	ｵﾘｰﾌﾞ黒色　浅黄色	体部の張りは弱く口縁部は強く外反して短い。端部は四角く納め外面に指押さえ。体部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、雲母多
1206	甕	14.2			細・極多、中・普	明黄褐色	最大径は体上部のやや低い位置。痕跡的に立ち上がる頸部から強く折り返して口縁部は短い。端部は小さく摘み上げると共に下端もやや張る。外面頸部以下縦ﾊｹ後最大径以下縦ﾐｶﾞｷ、肩部内面指押さえ。	9/10	角閃石極多、石英等
1207	甕	15.0			細・極多	橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく上下に摘み、端面に凹線１条。肩部内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等
1208	甕	16.2			細・極多	にぶい橙色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上方に摘み出すと共に下方も張る。口縁部外面と肩部内面指押さえ。	1/6	角閃石極多、石英等少
1209	甕	18.0			細・極多、中・多	橙色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等多
1210	甕	16.6			細・極多	明黄褐色	最大径は体上部のやや低い位置。痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短い。端部は上方に摘み出すと共に下方に張り内傾する端面に凹線。内面最大径以下ｹｽﾞﾘ後肩部指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等多

第314図　４区ＳＫ03出土遺物２（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1211	高坏	20.6			細・極多	橙色	中位で鋭く屈曲して上半部は外傾する。屈曲部は鈍い段。口縁部は外方に張り出すと共に内方に小さく突出して頂部に凹線。上半部横ﾅﾃﾞ外面下半部横ｹｽﾞﾘ	1/9	角閃石極多、石英等
1212	高坏	25.2			細・極多	明黄褐色	中位で鈍く屈曲して上半部は外傾する。口縁端部は外方に摘み出すと共に内方にもわずかに突出する。横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、石英等多
1213	高坏	24.8			細・極多	黄褐色	中位で屈曲して上半部は短く外傾する。端部は外方に小さく摘み出すと共に内方へもわずかに突出して頂部に狭い平坦面。	1/8	角閃石極多
1214	高坏	16.0			細・極多	明褐色	中位で屈曲して上半部はやや外傾し端部は薄く尖る。上半部内外に鈍い凹線、屈曲部に３個１対の円形刺突文	1/6	角閃石極多、石英等多
1215	高坏	24.0			細・極多	明黄褐色	中位で緩やかに屈曲して上半部はやや外傾する。端部は外方に張り気味に四角く納める。	1/16	角閃石極多、石英等少
1216	高坏	27.0			細・極多、中・多	明褐色	中位で鈍く屈曲して上半部は短く立ち上がる。口縁端部は小さく摘み出す。	1/8	角閃石極多、石英等多
1217	脚			12.0	細・極多	明褐色	脚端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上方も突出して断面三角形。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/10	角閃石極多、石英等・雲母
1218	脚			14.0	細・極多	明黄褐色	脚端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上方も小さく張り出し断面三角形。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｹｽﾞﾘ。２孔１対の円形透かし。	1/5	角閃石極多
1219	脚			13.6	細・極多、粗・多	ｵﾘｰﾌﾞ黒　黄褐色	脚端部は鈍く肥厚しつつ下方に引き出すと共に上方もやや突出する。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｹｽﾞﾘ。裾部に円形透かし。	1/4	角閃石極多（含粗粒）、石英等
1220	脚			15.8	細・極多	明黄褐色	脚端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上方も突出して断面三角形。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｹｽﾞﾘ。裾部に２孔１対の円形透かし。	1/4	角閃石極多、石英等・雲母
1221	脚			12.0	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は強く開き端部は鈍く肥厚する。内面横ｹｽﾞﾘ、２孔１対の円形透かし	1/4	角閃石極多、石英等多
1222	脚			18.8	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は水平に開き端部は四角く納める。脚裾部に円形透かし。	1/10	角閃石極多、石英等多

第315図　４区ＳＫ03出土遺物３（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1223	装飾高坏	32.0			細・極多、中・少	明黄褐色　灰黄褐色	中位で屈曲して上半部は大きく外反して開く。口縁端部は粘土帯を付して板状の垂下口縁、端面に２個１対の円形浮文屈曲部には矩形の突帯を付す。	1/4	角閃石極多、石英等少
1224	直口壺？	17.0			細・極多、粗・多	橙色	中位はほぼ直立し口縁部で強く外反して端部は四角く納める。口縁部内面は凹線と３個１対の円形刺突文、外面上半部縦ﾊｹ後凹線中位に斜線文	1/2	角閃石極多（含粗粒）
1225	小形器台	15.9	16.6	14.4	細・極多、中・多	明赤褐色	口縁・脚共に強く外反して鼓状。口縁端部は外方に引き出すと共に内方も突出して強く内傾する端面に凹線。脚端部は鈍く肥厚して端上部を小さく摘み出し裾部と端面に凹線。脚部内面横ｹｽﾞﾘ、中位に大形円形透かし３方。	全周	角閃石極多、石英等多
1226	器台			21.0	細・極多、粗・多	明黄褐色	脚裾部は強く外反して開き、端部は四角く納める。外面凹線、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/12	角閃石極多（含粗粒）

第316図　４区ＳＫ03出土遺物４（１／４）

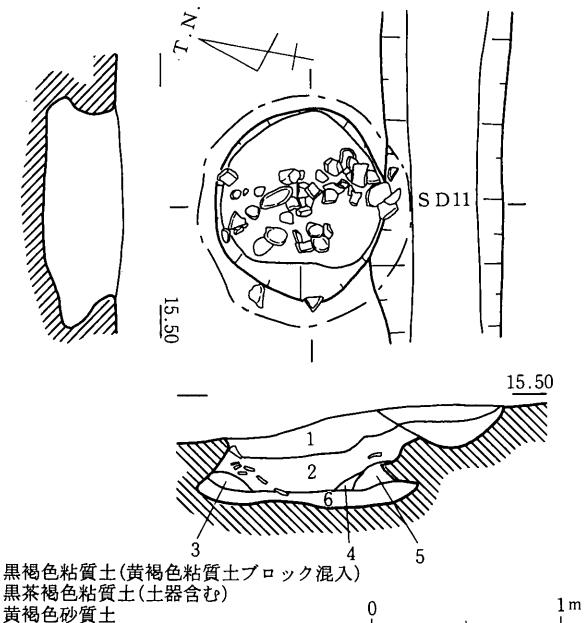
（1200）は短頸形態の細頸壺で，底部縁辺が鈍く隆起して一見高台状を呈する。（1201）の短くやや内傾する頸部形態と矮小化した口縁端部は，広口壺としては後出的な様相である。（1202）の垂下口縁は，この形態の壺に多いが，肥厚部がやや退化しており加飾もない。（1203～1205）の口縁部がやや伸びるか端部の拡張が痕跡化した「く」字口縁甕は後出形態であろう。（1206～1208）は後期初頭の枠内で位置づけられるが，伸びかけた口縁部と拡張の鈍化した端部形態は新しい様相である。甕（1209・1210）はこれらより古い特徴を持つ。口縁部拡張形態の高坏（1211）は上半部が外傾して端部の摘み出しは弱い。（1212・1213）は，中位の屈曲がやや鈍く頂部平坦面も狭い。新しい様相である。（1214）は後期初頭段階に属する外反口縁形態。中位の強い屈曲部の３個１対の円形刺突文と上半部の凹線が特徴的である。（1215）の直立口縁形態は中位の屈曲が緩やかで端部の張り出しも弱

い。これに比べ，(1216) の外方に摘み出した口縁部形態は新しい様相といえる。端部を肥厚する形態の脚部 (1217～1221) のうち，特に (1218) は端部肥厚が矮小化し新しい様相といえる。(1222) は柱状脚形態の裾部片。脚端の摘み出しは弱い。(1223) 装飾高坏は強く発達した口縁部を持ち，後出的な形態と見做し得る。(1224) は小形器台としたが，この器種で斜線文の採用は少ない。(1225) は鼓状を呈する後期初頭の典型的な小形器台の形態を示す。

以上の資料は出土状況を見る限り，明確な分離は困難であるが，後期初頭でも新古の様相を含み，更にそれよりも明らかに後出する形態をも認める。

ＳＫ04 (第317～319図)

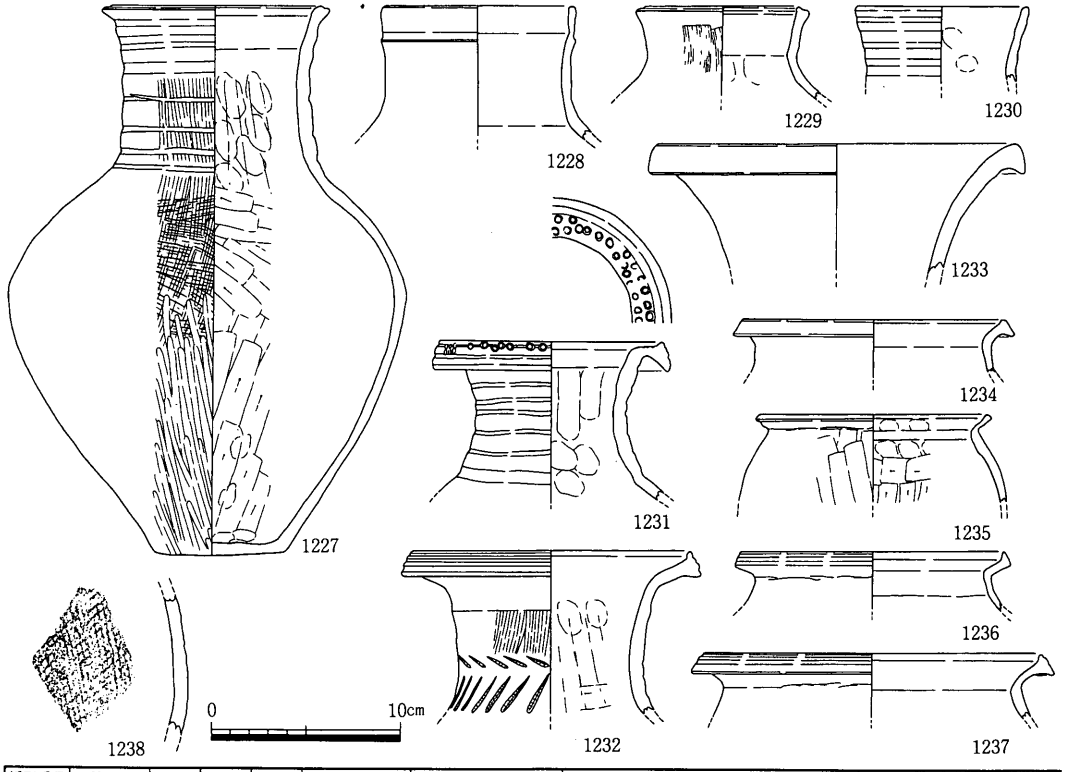
Ｃ13区北部で検出した井戸状遺構である。溝状遺構ＳＤ11に北接し，一部をこれに切られる。Ｃ13区北端は水田造成時の削平が顕著で，全般的に遺構の残存状態は良くない。本遺構の検出レベルも南半部に比べ0.4m程度低い。平面形は略円形を呈し，南北0.95m，東西1.0mを測る。遺構面の削平を考慮に入れても他の井戸状遺構よりかなり小型となる。最大深は約0.5mを測り，床面レベルは標高14.9mとなる。床面はほぼ平坦である。床直上の壁面下部 (標高15.0m付近) が四周共に大きく抉れ込む。最下層に黒色粘土が薄く堆積し，その直上すなわち抉れ部レベル付近には砂質土の堆積が認められる。中位に土器片・川原石を多く交える黒褐色粘質土が堆積し，上層黒褐色粘質土には地山土ブロックが認められる。遺物は井戸機能時ではなく，廃絶後に比較的短期間に投棄されたものと思われる。



1．黒褐色粘質土(黄褐色粘質土ブロック混入)
2．黒茶褐色粘質土(土器含む)
3．黄褐色砂質土
4．黒灰色粘土
5．黄褐色砂質土
6．黒色粘土

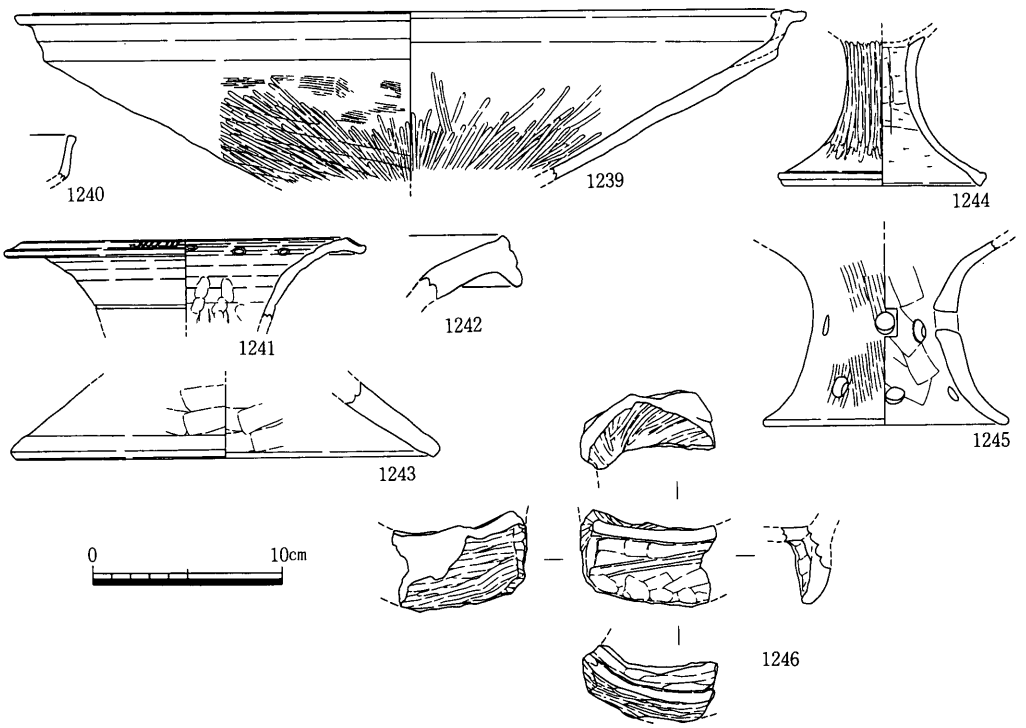
第317図　４区ＳＫ04平・断面図 (1／40)

(1227) の直口壷は口縁端部を丸く納めずに，小さく外方に摘み出す。この系統の直口壷では頸部凹線が退化し，また体部の張りも



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1227	直口壺	10.8	28.2	6.8	細・極多	橙色	最大径は体上部、底部薄作り、口頸部はほぼ直立し上端でわずかに外反する。端部は外方に張り出し頂部凹線。頸部外面縦ﾊｹ後凹線、内面指押さえ体部外面上半部縦ﾊｹ後下半部縦ﾐｶﾞｷ内面削り	全周	角閃石多、石英等多
1228	直口壺	9.7			細・極多	橙色　黄褐色	ほぼ直立する頸部から口縁部は鈍い段を持って短く直立する。端部は丸く納める。	1/10	角閃石極多、石英等普、赤色粒少
1229	直口壺	7.9			細・極多、粗・少	暗褐色	口縁端部内方に小さく突出して頂部に凹線、頸部縦ﾊｹ内面指押さえ	1/8	角閃石極多、石英等多
1230	直口壺	8.6			細・極多、中・少	橙色	わずかに外傾し立ち上がる口頸部で外面に鈍い凹線。端部は丸く納める。	1/8	角閃石極多、雲母・赤色粒・石英等少
1231	広口壺	11.8			細・極多	明褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は下方に引き出すと共に上方に小さく突出して内傾する平坦面。口縁部内面・端面に円形刺突文頸部凹線、内面指押さえ	1/3	角閃石極多、石英等、赤色粒少
1232	広口壺	14.4			細・極多、中・普	明褐色	ほぼ直立する頸部から口縁部は緩やかに折り返す。端部は上下に摘み出し、端面に凹線。頸部外面縦ﾊｹ後基部にﾊｹ原体刺突の斜線文を２段に配す。内面頸基部まで横ｹｽﾞﾘ	1/4	角閃石極多、石英等多、雲母少
1233	広口壺	18.6			細・極多、粗・少	黒褐色　褐色	口頸部は緩やかに外反し端部は粘土帯を付して断面三角形の垂下口縁。	1/4	角閃石極多、石英等多
1234	甕？	13.6			細・極多	明黄褐色	不明瞭な頸部からゆるやかに折り返して口縁部は短い。端部は肥厚しつつ上下に摘み出し端面に凹線。	1/8	角閃石極多、石英等少
1235	甕	11.8			細・多	明褐色　明黄褐色	口縁部は緩やかに折り返して短く開く。端部はわずかに張り出して端面持つ。体部外面縦ﾅﾃﾞ、内面ｹｽﾞﾘで上端指押さえ。	1/5	角閃石・雲母・石英等多　外面煤
1236	甕	13.8			細・極多	黄橙色	不明瞭に内傾する頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は摘み上げて端面凹線	1/6	角閃石極多、雲母・赤色粒
1237	甕	17.6			細多、中・多	にぶい黄褐色	不明瞭に内傾する頸部からゆるやかに折り返して口縁部は短く開く。端部は肥厚しつつ上下に摘み出し端面に凹線。	1/8	石英等多、雲母少搬入品
1238	甕？				細・極多	にぶい黄褐色	外面顕著な格子目叩き、内面ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、石英等・雲母少

第318図　４区ＳＫ04出土遺物１（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1239	大形鉢	37.9			細・少、粗・多	橙色　浅黄色	中位で屈曲して上部はやや外傾する。端部は外方に大きく引き出すと共に内方も突出して頂部に広い平坦面。屈曲部は鈍い段。上半部横ﾅﾃﾞ下半部外面横ﾊｹ・横ｹｽﾞﾘ後放射状ﾐｶﾞｷ、内面放射状ﾐｶﾞｷ	1/8	石英等多、角閃石・雲母少　搬入品
1240	高坏				細・極多	橙色　暗赤褐色	中位で折り曲げて上半部はわずかに外傾。端部は鈍く外方に摘み出す。		角閃石極多、雲母・石英等少
1241	小形器台	17.0			細・極多	灰白色～橙色	口頸部は強く外反して大きく開く。端部は外方に強く引き出し四角く納めると共に上方も小さく突出。強く内傾する端面に６条１単位の短刻線、内面上部に凹線文、円形刺突文、頸部に沈線	1/8	角閃石極多、石英等多
1242	大形器台				細・極多	褐色　黒色	口縁短部は下方に摘み出すと共に上方にも小さく突出。端面に沈線		角閃石極多、雲母・石英等多
1243	器台			21.8	細・極多	褐色	よく開いた脚裾部は肥厚せずに丸く納める。内外面横ﾅﾃﾞ	1/8	角閃石極多、石英等多、雲母少
1244	脚			10.4	細・極多	橙色	柱状の脚上部から大きく外反して裾部は開く。端部はわずかに肥厚して端面に凹線。外面縦ﾐｶﾞｷ内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、石英等少
1245	脚			12.6	細・極多	赤褐色	脚裾は緩やかに外反して端部は丸く納める。外面縦ﾊｹ内面縦ﾅﾃﾞ、大形の円形透かし２段	1/4	角閃石極多、雲母少、石英等・赤色粒
1246	把手付広片口皿				細・極多	褐色	把手部。台形に大きく発達した把手部はやや内湾する。立ち上がり部はほぼ直立。把手部外面横ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指押さえ。体部内面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多　赤色顔料

第319図　４区ＳＫ04出土遺物２（１／４）

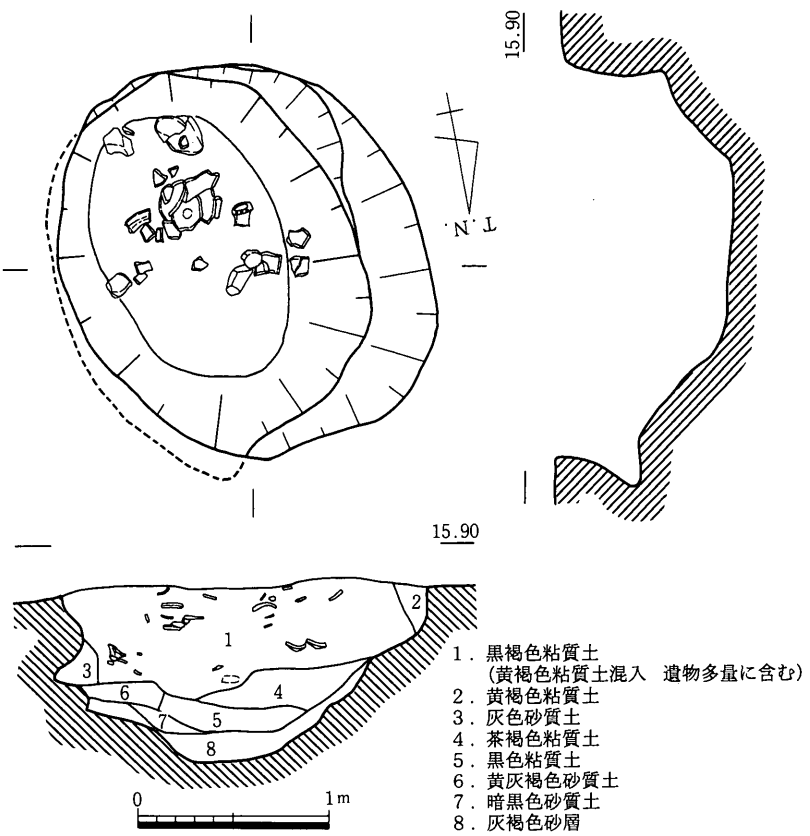
やや弱い形態が多い。本資料も例外ではない。(1228) は鈍い受口状を呈する形態の直口壷。(1229) は短頸形態の直口壷で，この系統に多いように本例も口縁端部はやや肥厚する。(1230) 直口壷は端部は丸く納め，外面は不明瞭な凹線が連続する最も主流的な形態

である。(1231・1232) は共にやや長頸化した広口壷。(1231) は頸部凹線がかなり退化し，口縁部内面にまで円形刺突文が及んでいる。(1232) のように頸部にハケ原体押圧の斜線文を施す例は，この系統の広口壷の場合，やや頸部が長化した類にみるようである。中期末にこの種の施文を有する広口壷の系統とはやや異なるようである。(1233) 広口壷はやや萎縮しているが垂下口縁形態。甕 (1234) は口縁部の折り返しが緩やかなことと端部の下方拡張が強い点で一般的ではない。(1235) の「く」字口縁甕は内面調整などからやや新しい様相の可能性がある。(1236・1237) は後期初頭の主流的な形態であるが，口縁端部の肥厚・拡張がやや弱い。(1238) は明瞭な格子目叩きの甕もしくは壷体部片。(1239) は内外面に放射状ミガキを施す大形高坏。この種の口縁部形態の一般的なミガキ手法ではない。胎土から搬入品の可能性が高い。小形器台 (1241) は口縁端部の肥厚・摘み出しが簡略化されつつ強調された形態。外面短刻線文，内面円形刺突文で加飾する。脚 (1244) は脚端肥厚部がかなり矮小化しており，後期初頭でも新しい様相であろうか。(1245) は高坏脚部ではなく，ある種の壷ないしは鉢の脚台と考える。やや大形の円形透かしを2段に配する。把手付広片口皿 (1246) はやや内湾気味に開く把手部は大きく発達している。

これらの資料は後期初頭でもやや新しい相と考える。

ＳＫ05 (第320～325図)

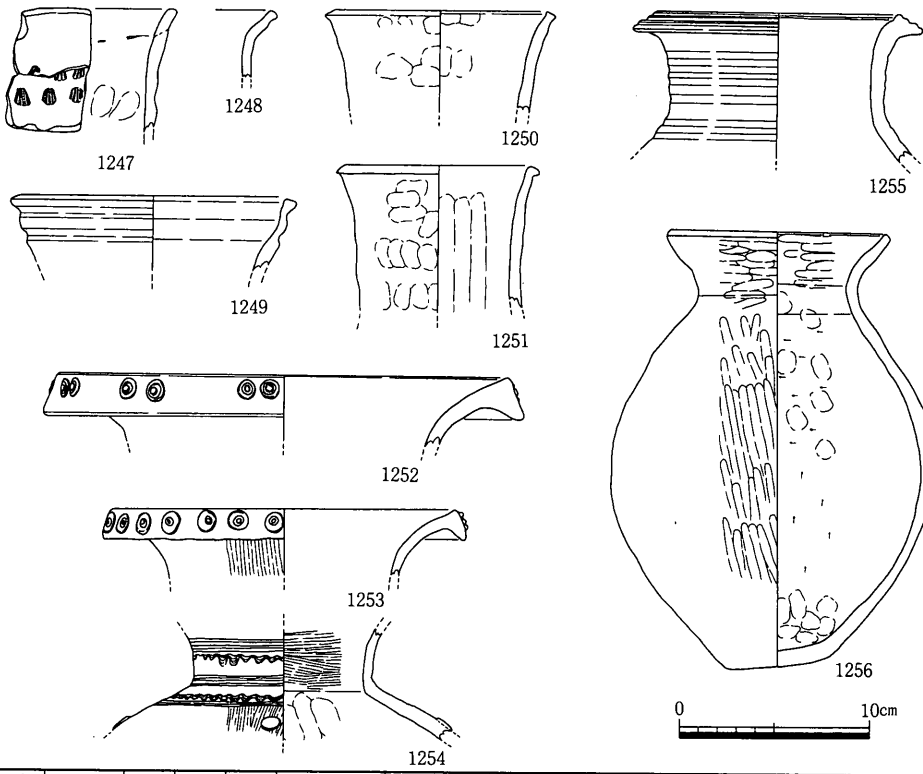
Ｃ13区で検出した井戸状遺構である。4区中心部の竪穴住居密集地区と掘立柱建物群の境付近に位置し，南北に並ぶ3基の井戸状遺構 (ＳＫ05～07) の北端にあたる。平面形は南北に長い楕円形を呈し，南北2ｍ，東西1.8ｍを測る。東南部がやや張り出しているのは後述するようにこの部分の壁面の崩落によるものと思われる。最大深は0.9ｍを測り床面レベルは標高14.8ｍとなる。床面は中央部が緩やかに窪む。壁面は東壁を除き，上半部はほぼ垂直に立ち上がり，この部分を除いて壁面下部 (床面上0.4～5ｍ　標高15.2～3ｍ) が大きく抉れる。堆積状況・断面形状から東壁部分が大きく崩落していると考えられるので，本来的にはやはり四周の下部が深く抉れ込むようである。抉れ部以下では黒褐色～黄褐色砂質土の薄層が連続し，東壁付近ではこれらの直上に比較的地山土に類似した茶褐色土ブロックが認められる。本層位は東壁の崩落に関連するものであろう。上層は地山土ブロックの混入する黒褐色粘質土からなり，この部分に多量の土器片を含む。上層部を井戸廃絶時 (後) の埋め戻しと見れば，これらの資料はその段階で混入したものと考えられる。



第320図　4区ＳＫ05平・断面図（1／40）

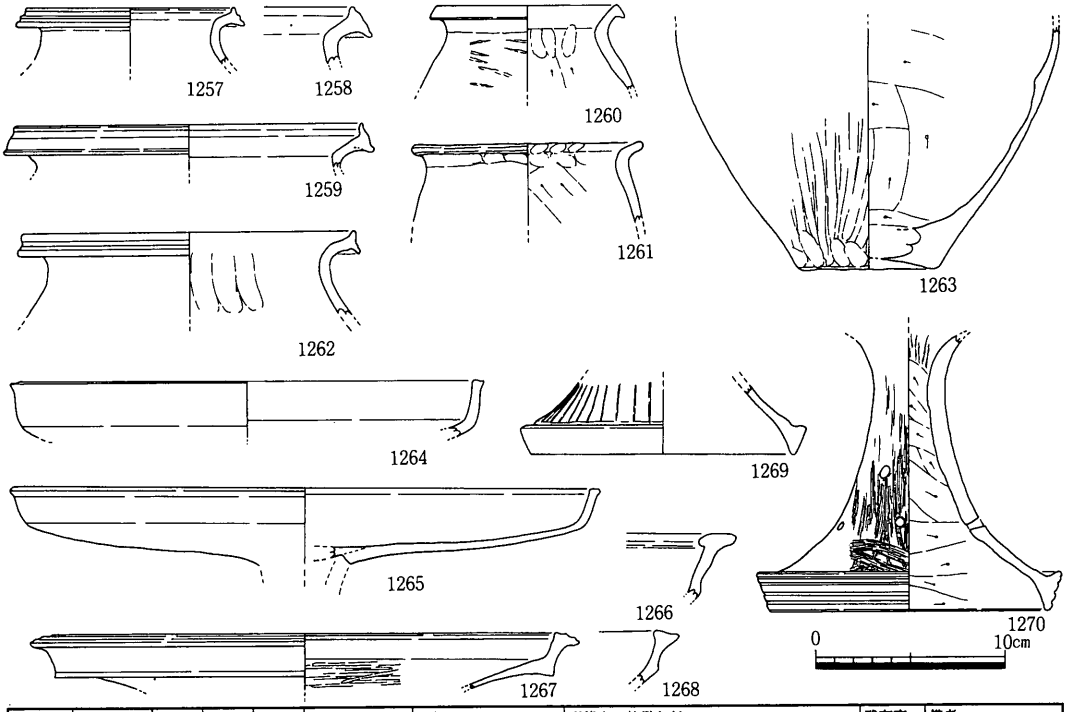
（1247）直口壷は頸部に二枚貝圧痕を配する珍しい例である。（1248）は口縁部で強く外反する形態の直口壷。頸部凹線文は確認できない。（1249）はおそらく短頸形態の直口壷であろう。口縁部直下の凹線文はきわめて明瞭である。直口壷（1250・1251）はやや張り気味に端部を四角く納め頸部は無文となる。指押さえを明瞭にとどめ，調整はやや粗雑。広口壷（1255）の口縁部を鈍く肥厚しつつ端部を外（下）方に強く引き出す形態は本地方よりも吉備南部地方で盛興するものである。本例は胎土から搬入品と推定できる。（1252・1253）は典型的な垂下口縁形態の広口壷。端面は円形浮文で加飾する。頸部から肩上部まで櫛描波状文・並行線文を施した（1254）はおそらく垂下口縁形態の広口壷であろう。これほど加飾の煩雑な他形態はこの時期にまず見ない。（1256）のように体部の張りがここまで弱い形態は多くない。甕（1257～1262）は後期初頭の最も主流的な形態である。口縁端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。（1258）は形態的には違和感がないが，胎土中の角閃石粒が目立って少なく搬入品の可能性が高い。壷もしくは甕体部の（1263）も搬入品である。口縁部を明確に拡張しないいわゆる「く」字口縁形態の小形甕（1260・1261）は折り返しも緩く口縁部もまだ長く伸びていない。後期初頭と見なして良いであろう。（1264・1265）は直立口縁形態の高坏。上半部はあまり開かない。拡張口縁形態の高坏では口縁部を肥厚しつつ外方に引き出すもの（1266・1268）と，内外に摘み出す様相をやや異にするもの（1267）とがある。脚（1269・1270）は端部を比較的強く上下

に摘み出す形態で，この系統の脚部ではあまり多い形状ではない。とくに（1269）では裾部に垂下沈線がめぐる。両例とも胎土から搬入品の可能性が高い。



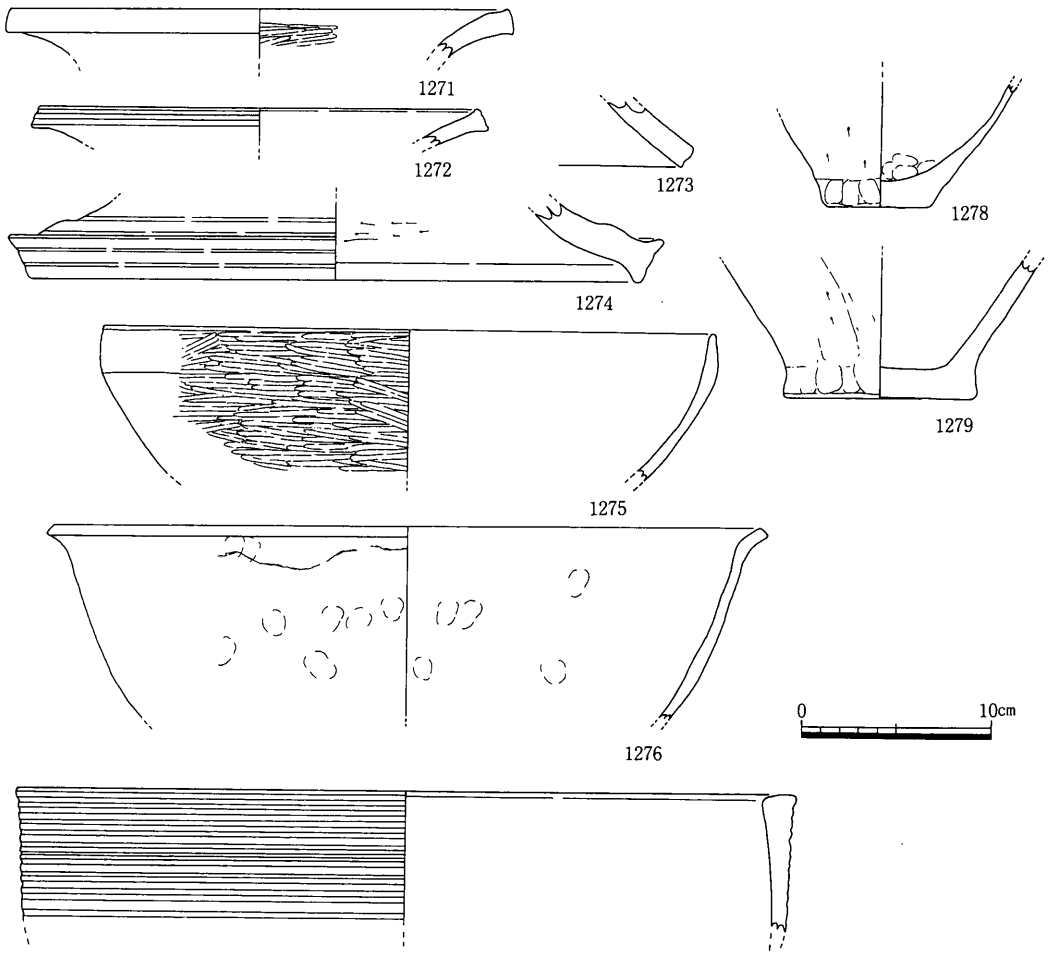
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1247	直口壺				細・極多	橙色	わずかに外反して立ち上がり端部は四角く納める。外面二枚貝圧痕を２段に配す。		角閃石極多、石英等多
1248	直口壺				細・極多	黒褐色	ほぼ直立する頸部から口縁部は短く緩やかに折り返して端部は小さく外方に摘む。外面凹線。		角閃石極多、石英等・雲母
1249	直口壺	13.8			細・極多、中・多	黄橙色	口縁部はやや外傾して端部は四角く納める。口縁部直下に強い凹線２条	1/8	角閃石極多、石英等多
1250	直口壺	11.1			細・極多	黒褐色	わずかに外反して立ち上がり端部は内外に張り出し気味に四角く納める。内外面指押さえ	1/3	角閃石極多、石英等多、赤色粒少
1251	直口壺	9.6			細・極多	浅黄橙色	上部でわずかに外反し、端部は小さく外方に摘み出す。外面指押さえ、内面縦ﾅﾃﾞ	全周	角閃石極多、赤色粒・石英等少
1252	広口壺	23.5			細・極多	浅黄橙色	口縁部は緩やかに折り返して短く開く。端部は粘土帯を付して断面三角形の垂下口縁。端面に２個１対の円形浮文。	1/4	角閃石極多、赤色粒多、石英等
1253	広口壺	18.8			中・極多	明褐色	口縁部は緩やかに折り返して短く開く。端部は粘土帯を付して断面三角形の垂下口縁。端面に円形浮文。頸部外面縦ﾊｹ	1/5	角閃石極多、石英等多
1254	広口壺				細・極多	橙色　浅黄色	強く張った体部に短い頸部を付す。頸・肩部に櫛描平行線・波状文と円形浮文。頸部内面横ﾊｹ、肩部外面縦ﾊｹ内面指押さえ	3/8	角閃石極多、雲母・石英等
1255	直口壺	12.5			細・少、粗・多	黄橙色	ほぼ直立する頸部、口縁部は短く折り返して端部を外方に引き出すと共に上方に小さく突出。強く内傾する端面と頸部に凹線。	1/6	石英等多、角閃石・雲母少　搬入品
1256	短頸壺	11.2	22.7	5.4	細・極多	明黄褐色	最大径の低い長胴から口頸部は短く開く。端部は内方に張り気味に四角く納める。口頸部内外面横ﾐｶﾞｷ、体部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘで底部と体上部に指押さえ。	1/2	角閃石極多、石英等多

第321図　４区ＳＫ05出土遺物１（１／４）



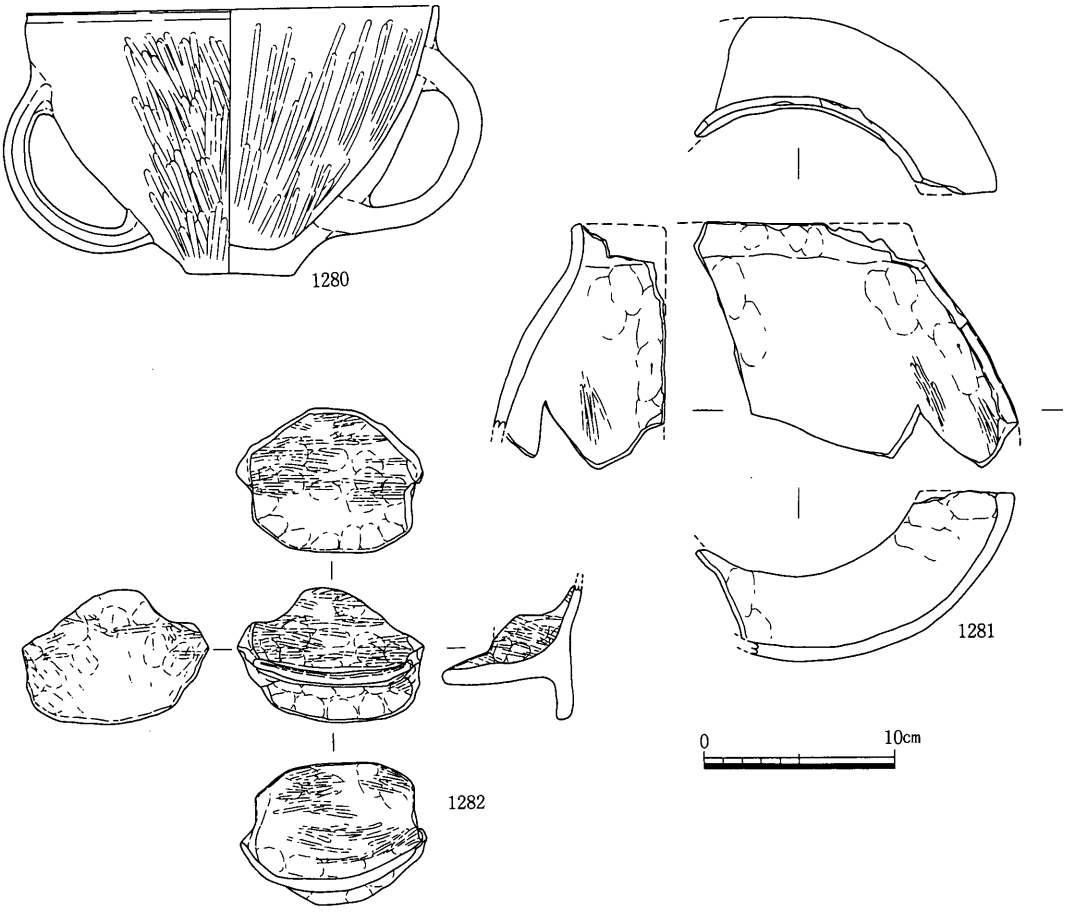
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1257	甕	10.8			細・極多、中・少	明赤褐色	不明瞭な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に摘み出し端面に凹線。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等少
1258	甕				細・多	赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は外方に引き出すと共に上方にも突出して端面に鈍い凹線。		角閃石・石英等多　搬入品？
1259	甕	18.2			細・極多	黄橙色	強く折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に摘み出し端面に鈍い凹線。	1/10	角閃石極多、石英等少
1260	甕	9.4			細・極多	黒褐色　にぶい黄橙色	口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は下方に摘み出す。外面叩き目を残し、内面縦ｹｽﾞﾘで上端部指押さえ。肩部分厚い。	1/6	角閃石極多、石英等少
1261	甕	11.8			細・極多、粗・普	黒褐色	口縁部は小さく折り返して端部は垂れ気味に丸く納める。口縁部内外面指押さえ、体部内面縦ｹｽﾞﾘ。	1/5	角閃石極多、石英等
1262	甕	17.4			細・極多、中・多	明黄褐色　黒褐色	不明瞭な頸部から強くに折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に摘み出し端面に凹線。内面指押さえ。	1/6	角閃石極多、石英等多
1263	壺？			6.9	中・多	黄灰色　灰白色	やや上げ底状の底部で、体部の張りは弱い。外面縦ﾐｶﾞｷ下端部指押さえ内面は強くｹｽﾞﾘ込む。	1/2	石英等多　搬入品
1264	高坏	23.7			細・極多	赤褐色	鈍く折り返して上半部はほぼ直立する。端部は外方に張り気味に四角く納める。	1/20	角閃石極多、石英等・赤色粒多
1265	高坏	30.8			細・極多	橙色	浅い坏部。鈍く屈曲して上半部外傾。端部は外方へ摘み出す。円盤充塡	1/3	角閃石極多、赤色粒多
1266	高坏？	26.4			細・極多	明赤褐色　黒褐色	中位で強く屈曲して上半部は短く外傾する。口縁端部は外方に引き出して頂部凹線。屈曲部は強い稜。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部内面横ﾐｶﾞｷ	1/10	角閃石極多、雲母・石英等少
1267	高坏				細・極多	褐色	屈曲部で鈍い段をなして上半部はやや外傾する。口縁端部は外方に引き出すと共に内方も大きく突出して頂部に平坦面。		角閃石極多、雲母・石英等多
1268	高坏				細・極多	橙色	中位で鈍く屈曲して口縁端部は内外に摘み出し頂部に狭い平坦面。屈曲部は強い稜。		角閃石極多、石英等少
1269	脚			14.0	細・普、粗・多	明赤褐色	脚端部は肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上方にも大きく突出する。裾部に細い垂下沈線	1/12	石英等多、角閃石・赤色粒　搬入品
1270	脚			14.5	細・普、粗・多	橙色	裾部は緩やかに外反して開く。端部は上下に摘み出して幅広の端面に沈線。外面縦ﾊｹ、内面横ｹｽﾞﾘ。円形透かしを２段に配す。	1/4	石英等多、角閃石　搬入品

第322図　４区ＳＫ05出土遺物２（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1271	器台	26.0			細・極多	明褐色	口縁部は強く外反して開く。端部は上下にわずかに張り気味に四角く納める。内面横ﾐｶﾞｷ	1/8	角閃石極多、赤色粒多、石英等
1272	器台	22.6			細・極多	褐色	端部は鈍く肥厚しつつ上下に小さく摘み出し、端面に凹線。	1/8	角閃石極多、石英等
1273	器台				細・極多、中・普、粗・少	橙色	脚端部は肥厚せずに四角く納める。端面に鈍い凹線。		角閃石極多、石英等・赤色粒多
1274	大形器台			31.8	細・極多、中・多	黄橙色	脚裾部は強く外反して大きく開く。端部は上方に摘み出して下方も大きく突出。端面・裾部外面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/6	角閃石極多、石英等多赤色顔料
1275	大形鉢	32.0			細・極多、中・普	黒色　明黄褐色	内湾気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直立して端部は尖る。外面横ﾐｶﾞｷ、内面横ﾅﾃﾞ	1/5	角閃石極多、石英等
1276	大形鉢	37.0			細・極多	橙色	口縁部で短く折り返して端部は四角く納める。指押さえ。	1/12	角閃石極多　赤色顔料
1277	大形鉢	41.0			細・極多、中・多	淡黄色　橙色	口縁部はほぼ直立し端部は鈍く肥厚する。口縁部直下並行沈線。内面横ﾅﾃﾞ	1/10	角閃石極多、石英等多
1278	？			5.5	細・極多	黄橙色　褐灰色	やや突出気味の底部から内湾気味に立ち上がる。外面ｹｽﾞﾘ下端部指押さえ。内面横ﾅﾃﾞ、底面指押さえ	3/5	角閃石極多、石英等・赤色粒少
1279	鉢			9.7	細・極多、中・多	黄橙色	強く突出した底部で縁辺部はやや張り出す。底部縁辺指押さえ、体部外面縦ｹｽﾞﾘ。	全周	角閃石極多、石英等多赤色顔料

第323図　４区ＳＫ05出土遺物３（１／４）



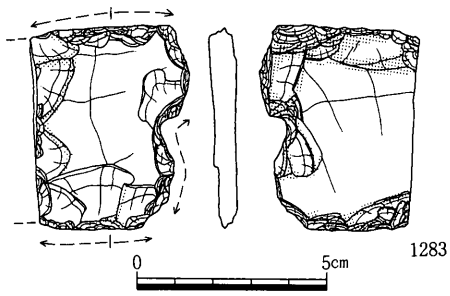
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1280	把手付鉢	21.3	13.7	5.7	細・極多	黄橙色	内湾気味に開いて椀状を呈する。端部は丸く納める。体側部の相対する二方に大きく縦位の環状把手を付す。把手は体部を穿って挿入している。内外面縦ﾐｶﾞｷ	完存	角閃石極多、石英等・赤色粒多
1281	把手付広片口皿				細・極多、中・多	にぶい褐色	片口部。口縁部は鈍く折り返して短く伸び四角く納める。側縁端は肥厚気味に四角く納める。体部内外面縦ﾐｶﾞｷ。片口部横ﾅﾃﾞ	1/3	角閃石極多、赤色粒・石英等多　赤色顔料
1282	把手付広片口皿				細・極多	橙色　灰褐色	把手部。台形状の把手部は水平に伸びて四角く納める。台形状に突出した立ち上がり部はほぼ直立して伸び、四角く納める。外面体部ﾅｽﾞﾘ、立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ。内面体部横ﾐｶﾞｷ、把手部指押さえ。		角閃石極多　赤色顔料

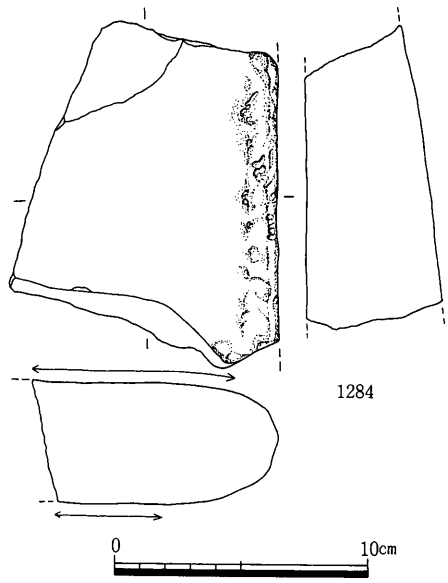
第324図　4区ＳＫ05出土遺物4（1／4）

器台口縁部（1271・1272）と脚部（1273）は端部の拡張が極めて弱い。大形鉢（1275）はボウル状を呈し，端部は尖る。大形鉢に多い形態ではない。口縁部を小さく外反させる（1276）も，全体にやや粗雑な調整で類例は多くない。やや新しい様相であろうか。（1277）は口縁部を鈍く肥厚しつつ外面は並行沈線が連続する。（1280）は大形の把手付鉢である。小型の把手付鉢と類似の体部に大形の環状把手を二方向に縦に付す。（1281）は把手付広

片口皿。片口部の折り返しは緩く端部は丸く納める。側縁部端はやや肥厚気味に四角く納める。把手部片（1282）は尾部の把手が耳朶状に伸びた形態。立ち上がり部の内外面は横方向のミガキで仕上げる。以上の資料は後期初頭に位置づけられるが，個々の説明で述べたようにその中でも新しい様相を持つものも含むとともに，大形鉢（1276）などはより後出するかも知れない。

サヌカイト製打製石庖丁（1283）は，片面から大きく調整剥離を加え，その部分を薄くしてから細かい調整剥離を両面から施し，刃部を作り出す。折損面から加えた剥離が認められ，破損後に転用を図ったかも知れない。（1284）は両面に使用痕をみるものの明確で，平坦な研ぎ面を形成しないので石皿とした。





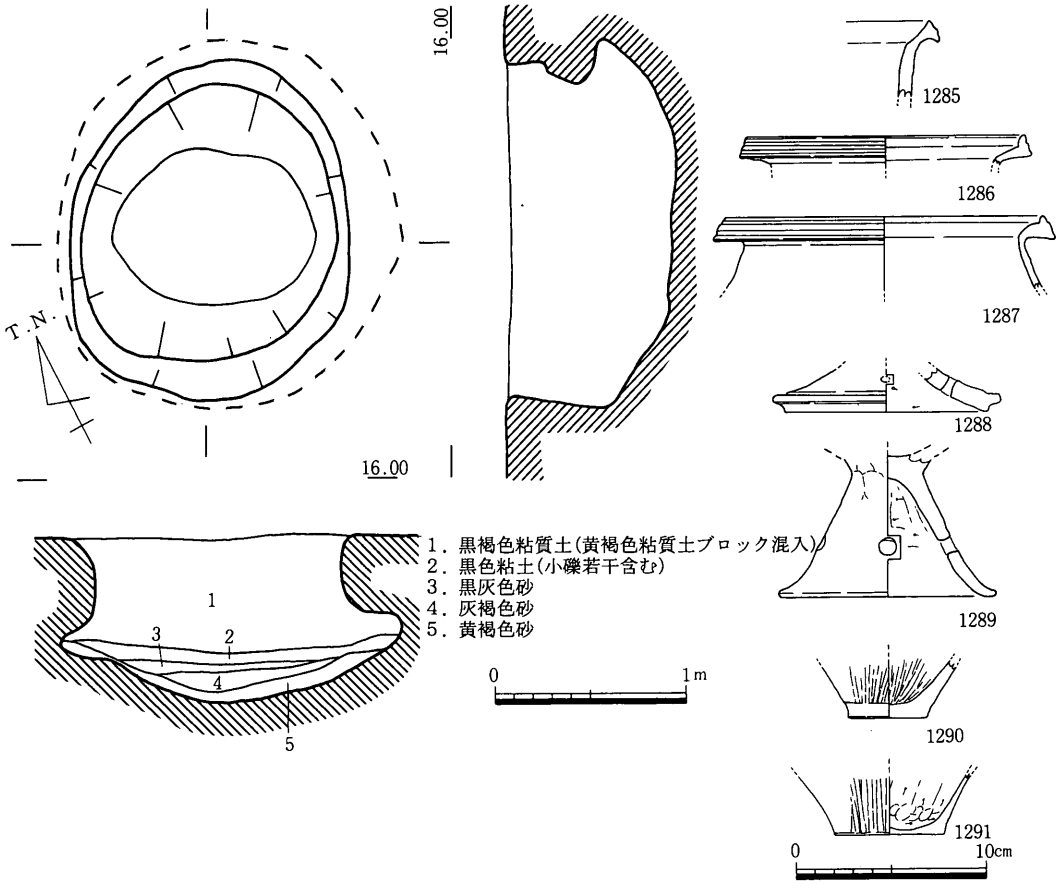
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1283	打製石包丁	4.2	5.4	0.7	26.3	ｻﾇｶｲﾄ	鋸部摩耗	折損
1284	石皿	12.6	10.6	4.8	1009.5	砂岩	両面使用　破損面の一部も顕著に摩耗	折損

第325図　4区ＳＫ05出土遺物５（１／２・１／３）

ＳＫ06（第326図）

Ｃ13区南半で検出した井戸状遺構である。本土坑検出位置は４区中央部の竪穴住居密集地区の北端部にあたり，南北に近接して，井戸状遺構ＳＫ05・ＳＫ07がある。平面形は楕円形を呈し南北1.75m，東西1.5mを測り，最大深は0.85mとなる。床面は中央部が緩やかに窪む。壁面は中位以高ではほぼ垂直に立ち上がるが，下位（床面より約0.3m上方，標

高15.2m付近）で，大きく四周が抉れると云う特異な形状を示す。抉れ部以下では黒灰色～黄褐色砂の薄層が連続し，直上の黒色粘土薄層を挟んで，上位には地山土ブロックを含む黒褐色粘質土が堆積する。下位の砂層堆積は上述した壁面崩落土に起因するものであろう。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1285	広口壺？				細・少、中・多	橙色	口縁部はほぼ直立する頸部から緩やかに外反する。端部は肥厚しつつ小さく上下に摘み、端面に凹線２条。頸部凹線。	1/4	石英等多、角閃石少 搬入品？
1286	甕	14.4			細・極多	明赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に摘み出しやや内傾する端面に凹線。	1/12	角閃石極多、石英等・雲母多
1287	甕	16.6			細・少、粗・多	橙色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は肥厚しつつ上下に摘み出し端面に凹線。	1/8	石英等多、角閃石少 搬入品？
1288	脚			10.3	中・多	灰白色	脚裾部は強く開き、鈍く肥厚し端上部は外方に強く突出する。内面横ｹｽﾞﾘで円形透かし。	1/8	石英等多 搬入品
1289	脚			11.4	細・極多、中・多	にぶい黄橙色	緩やかに開いて脚端部で小さく反って丸く納める。中位にやや大形の円形透かし。内面横ｹｽﾞﾘで、上端絞り目のこる。	1/8	角閃石極多、石英等多
1290	鉢			4.0	細・極多	黄橙色 黒色	わずかに突出気味の底部で内外面縦ﾐｶﾞｷ。外面下端は後横ﾅﾃﾞ。	全周	角閃石極多、石英等多
1291	甕			5.8	細・極多、中・多	黒褐色 にぶい黄橙色	薄作りの底部で外面縦ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘ後底面指押さえ。	全周	角閃石極多、石英等多

第326図　４区ＳＫ06平・断面図（１／40）および出土遺物（１／４）

広口壷口縁部片（1285）の頸部から緩やかに折り返して端部を小さく摘み出す形態は後期初頭では一般的ではない。本例は胎土の点から搬入品と推定できる。

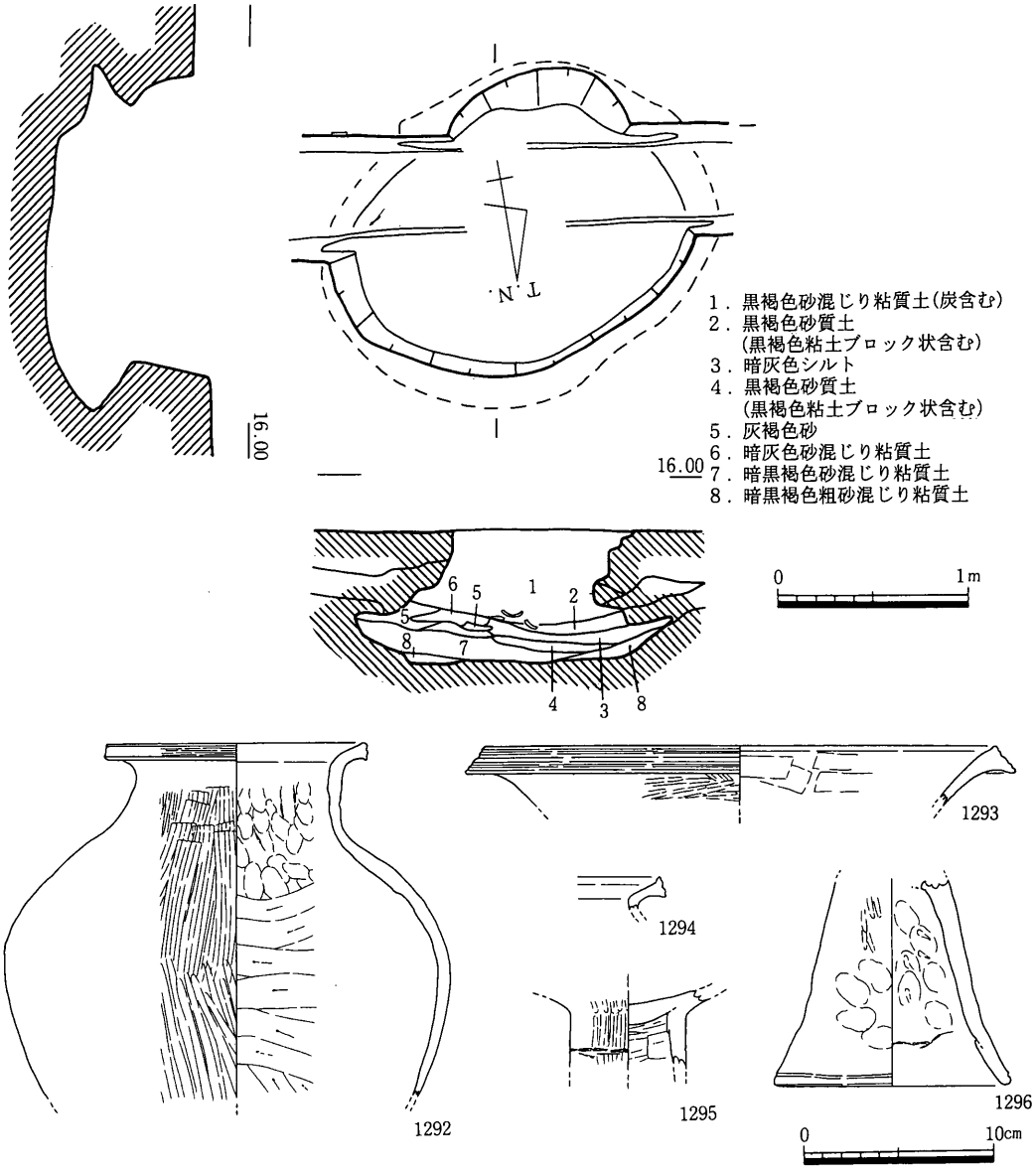
甕（1286・1287）の基本形状は後期初頭にもっとも主流的な形態であるが（1286）の口縁端部摘み上げは多くはない。端部を強く外方に摘み出す形態の脚（1288）は吉備南部地方に多い様相である。胎土から搬入品と考えられる。

脚（1289）は緩やかに開いて脚端部を小さく反り返らせる。やや大形の円形透かしや内面横ケズリの不十分さはこの形態の特徴である。これらの資料は後期初頭に位置づけることができる。

ＳＫ07（第327図）

13区Ｃライン付近で検出した井戸状遺構である。調査当初に設定したＣライン下部確認トレンチによって中心部を損じてしまった。竪穴住居ＳＨ01に近接するなど４区中心部の竪穴住居密集地区に位置する。古代～中世の掘立柱建物ＳＢ06の北東隅柱穴は本土坑と重複している。また同様の井戸状遺構ＳＫ05・06と共に南北に列をなす。平面形は楕円形を呈し，南北1.65m，東西1.9mを測る。深さ0.9mで，床面レベルは標高14.9mとなる。床面は中央部が緩やかに窪む。ＳＫ06同様に上半部壁面は垂直に近い立ち上がりを持つが下位（床面上0.2～0.3m，標高15.1～15.2m付近）では四周が大きく抉れる。抉れ部以下の下位では黒褐色～灰褐色の砂質土・シルト・砂混じり粘質土の薄層が連続する。これ以高は炭混じりの黒褐色粘質土の単一層である。上層下面付近に土器片がまとまる。これらは井戸廃絶直後のかなり短期間の投棄であろう。

広口壷（1292）は口縁端部の拡張が弱く頸部凹線文その他の加飾にも欠ける。頸部は体部から連続する縦ハケ調整で仕上げている。器台（1293）は肥厚した端部を強く外方に引き出す。外面横ミガキ・内面板ナデの組み合わせは端部形状に難があるものの脚部と見ても通用する。甕（1294）は小片だが，端部摘み出しの微弱さとやや伸びた口縁部に，後期初頭でもやや新しい要素を見て取れるようである。内外の調整が比較的粗雑な（1296）は強くくびれた上端の形状から脚としたが，太頸直口壷の可能性も捨てきれない。以上の資料は後期初頭の中で理解できるものである。



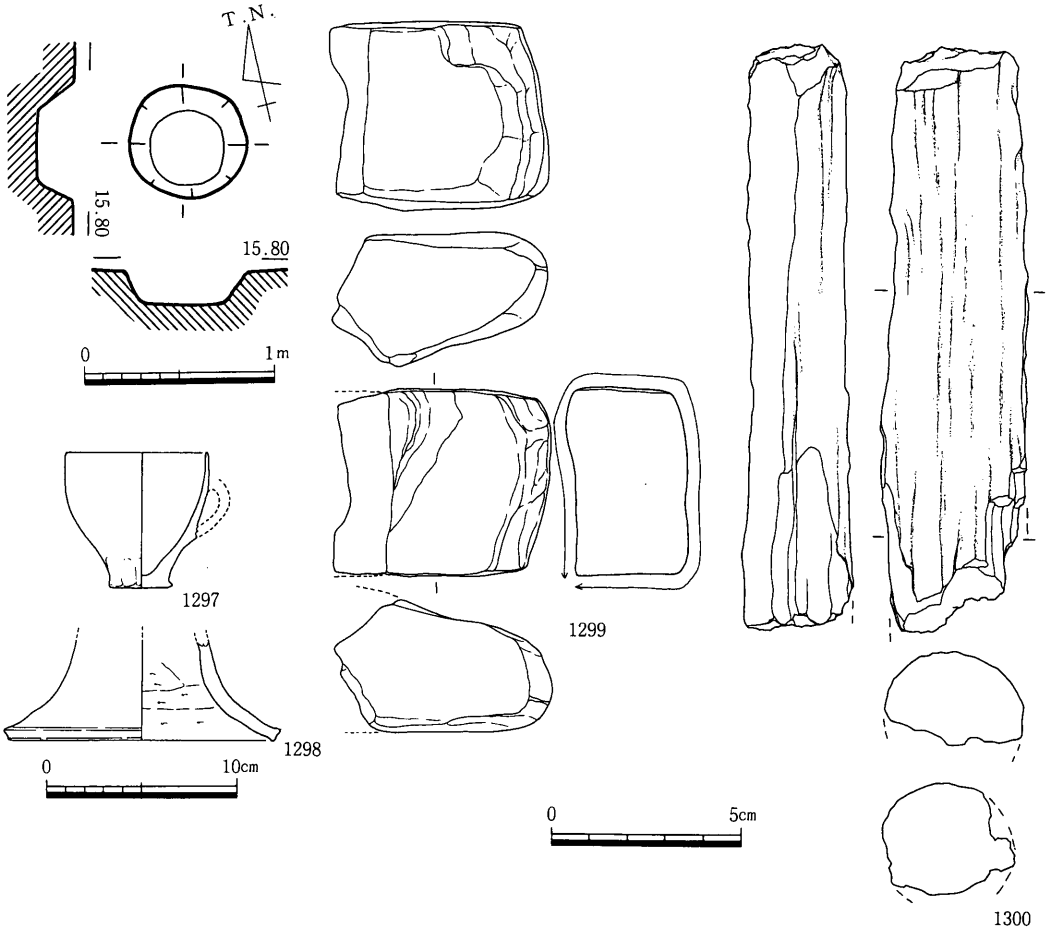
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1292	広口壺	13.6			細・極多	橙色	最大径体上部で鈍い。短い頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部はやや肥厚して端面横ﾊｹ。頸部以下縦ﾊｹ後最大径以下縦ﾐｶﾞｷ。内面頸・肩上部指押さえ以下ｹｽﾞﾘ。	1/2	角閃石極多
1293	器台	26.8			細・極多	暗褐色	外反して開き、口縁端部は大きく外方に引き出し、強く内傾する端面沈線。外面横ﾐｶﾞｷ、内面横ﾅﾃﾞ	1/4	角閃石極多、石英等多
1294	甕				細・極多	明褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に摘み出すと共に下方もやや張り、端面に凹線。	1/14	角閃石極多、雲母・石英等・赤色粒少
1295	脚				細・極多、中・多	黄褐色	柱状軸部で、頂部円盤充塡。外面ﾐｶﾞｷ、内面横ｹｽﾞﾘ。	全周	角閃石極多、石英等多
1296	脚？			12.0	細・極多	橙色	脚部は緩く開き、端部は丸く納め凹線1条。外面指押さえ後縦ﾐｶﾞｷ、内面指押さえ。	1/3	角閃石極多、石英等多

第327図　4区ＳＫ07平・断面図（1／40）および出土遺物（1／4）

ＳＫ08（第328図）

径0.6m，深さ0.2mの円形を呈する浅い土坑である。把手付小形鉢（1297）はやや深めの椀状を呈する体部に縦位の環状把手を付す。口縁部は直立して薄く尖り，底部縁辺は鈍く張り出す。器台脚（1298）は外反してよく開く形態だが，端部は単純に四角く納める。把手付小形鉢を伴うことから後期初頭に位置づけておきたい。

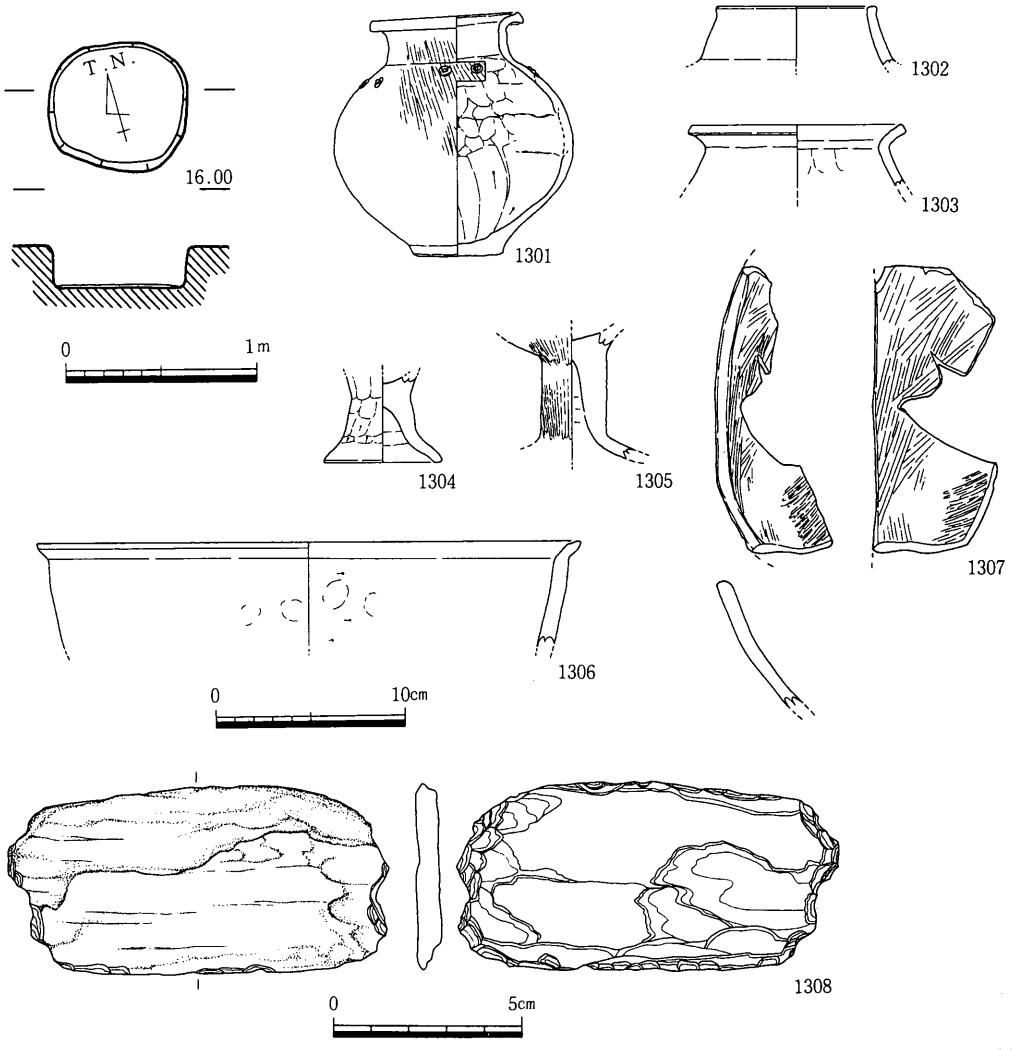
緑泥片岩製の（1299）は柱状片刃石斧破損品転用の砥石であろうか。側面部がよく研ぎ込まれわずかに凹面をなす。（1300）も柱状の石斧転用の叩き石か。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1297	把手付鉢	7.3	7.1	3.0	細・少	灰白色	突出気味の底部から内湾気味に立ち上がる体部の開きは弱い。端部は丸く納める。縦位の環状把手の剝落痕。	1/10	石英等・赤色粒少 搬入品
1298	脚？			13.8	細・極多、中・普	赤色	脚裾部で強く外反して開く。端部は上下に張り気味に四角く納める。内面横ﾅｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多（含粗粒）、石英等、赤色粒

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1299	叩き石（柱状石斧）	5.5	4.9	3.5	142.7	緑泥片岩	磨製石斧転用の叩き石か	折損
1300	柱状石斧？	15.4	3.8	2.9	244.2	片岩	柱状石斧？半截・先端部折損	折損

第328図　４区ＳＫ08平・断面図（１／40），出土遺物（１／４・１／２）



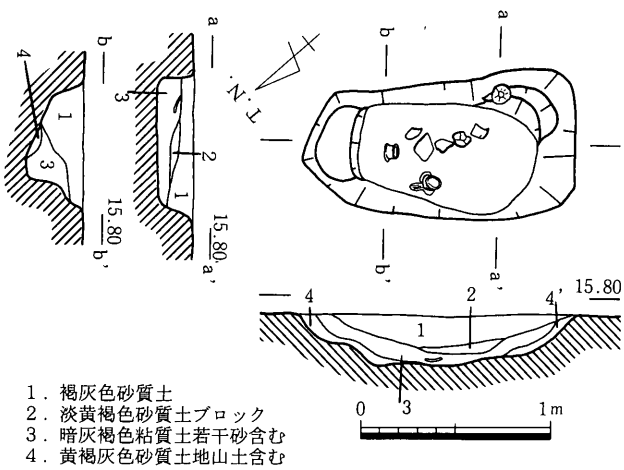
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1301	広口壺	7.5	12.2	4.3	細・極多、中・多	明赤褐色	強く張った球形の体部。底部はやや突出。短く直立する頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は小さく摘み上げると共に下方もやや張る。頸部下半・体部上半縦ﾊｹ。内面下半縦ｸｽﾘ、上半指押さえ。肩上部に2個1対の円形浮文4方。	全周	角閃石極多（含粗粒）、石英等
1302	？	8.0			細・極多	橙色	口縁部は内傾して端部は小さく外方に摘み出す。無頸壺か台付鉢の可能性	1/8	角閃石極多、雲母多
1303	甕	10.8			細・極多	暗褐色～にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返す。端部は小さく摘み上げる。肩部内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等少
1304	脚			6.0	細・極多	黒褐色	短い柱状軸部から緩く折り返して裾部は短く開く。端部は丸く納める。外面指押さえの凹凸顕著。	3/4	角閃石極多
1305	脚				細・極多、中・多	橙色	やや中膨らみの柱状軸部から裾部は強く折り返して開く。坏・軸部外面縦ﾐｶﾞｷ、軸部内面横ｹｽﾞﾘ。	全周	角閃石極多（含粗粒）
1306	鉢	28.6			細・極多	明赤褐色	口縁部で短く屈曲して端部は尖る。口縁部横ﾅﾃﾞ	1/16	角閃石極多、石英等・雲母
1307	把手付広片口皿				細・極多	橙色	体側縁部。端部は四角く納める。内面ﾊｹ調整後底面部に横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多　赤色顔料

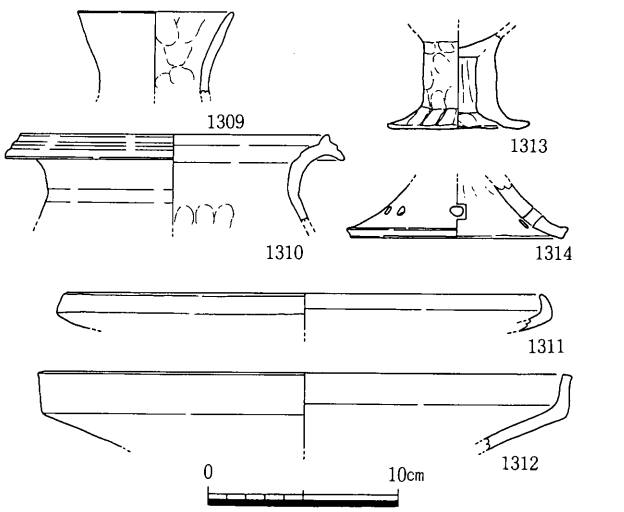
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1308	打製石庖丁	10.1	5.0	0.6	58.4	片岩	縁辺部片面調整	

第329図　4区ＳＫ09平・断面図（1／40），出土遺物（1／4・1／2）

ＳＫ09（第329図）

径0.7m，深さ0.2mの円形を呈する浅い土坑。形状からすれば柱穴の可能性もある。このような規模にも関わらず，遺物の出土量は多い。





（1301）は小形の広口壷。端部の拡張は弱く頸部に凹線文もみないが，肩部に２個１対の円形浮文がある。この系統の広口壷には珍しい施文である。（1302）は器種不明小片。（1303）の「く」字口縁甕は口縁部が直線的に伸びる形態で，後期初頭に位置づけるのであれば，他地方系統の形態であるが，胎土からみて搬入品ではない。後期中葉以降の後出形態の可能性もある。脚（1304・1305）は共に柱状軸部を持つ形態であるが，前者は裾部がかなり矮小化し，全体の調整も粗雑である。後者も小形の軸部で，その上下の屈曲はかなり鈍い。（1307）は把手付広片口皿側縁部片。本器種で内面のハケ

挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1309	直口壺	7.8			細・極多	にぶい黄橙色	外反気味に立ち上がる口頸部は短い。端部は丸く納める。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等・赤色粒・雲母
1310	広口壺？	16.0			細・極多、中・多	黒褐色　明赤褐色	短い太めの頸部から緩やかに折り返して口縁部は短く開く。端部は外方に引き出すと共に上方も突出して内傾する幅広の端面に凹線。頸下半部以下に内面指押さえ。	1/7	角閃石極多、石英等多、雲母
1311	高坏	24.8			細・極多、中・多	橙色	中位で強く屈曲して口縁部は短く内傾する。端部は丸く納める。横ナデ。	1/10	角閃石極多、石英等多
1312	高坏	27.2			細・極多、中・多	明黄褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は短く直立する。端部は張り出し気味に四角く納める。横ナデ。	1/8	角閃石極多（含粗粒）、石英等多
1313	脚			7.5	細・極多	黄橙色	柱状の短い軸部から屈曲して裾部は短く開く。端部は丸く納める。脚頂部は円盤充填。指押さえで凹凸顕著。	全周	角閃石極多、雲母・石英等
1314	脚			11.0	細・極多、中・多	明赤褐色　黒褐色	脚裾部は強く外反して開く。端部は摘み上げ気味に四角く納める。２孔１対のやや大形の円形透かし。	全周	角閃石極多、石英等

第330図　４区ＳＫ10平・断面図（１／40）および出土遺物（１／４）

調整は珍しい。口縁部を小さく外反させる（1306）は大形鉢としてはやや小振りである。以上の資料は後期初頭からやや後出する段階のものまでを含む可能性が高い。

片岩製打製石庖丁（1308）は片方に礫面をとどめる。縁辺部の調整は全て礫面側からの片面調整である。

ＳＫ10（第330図）

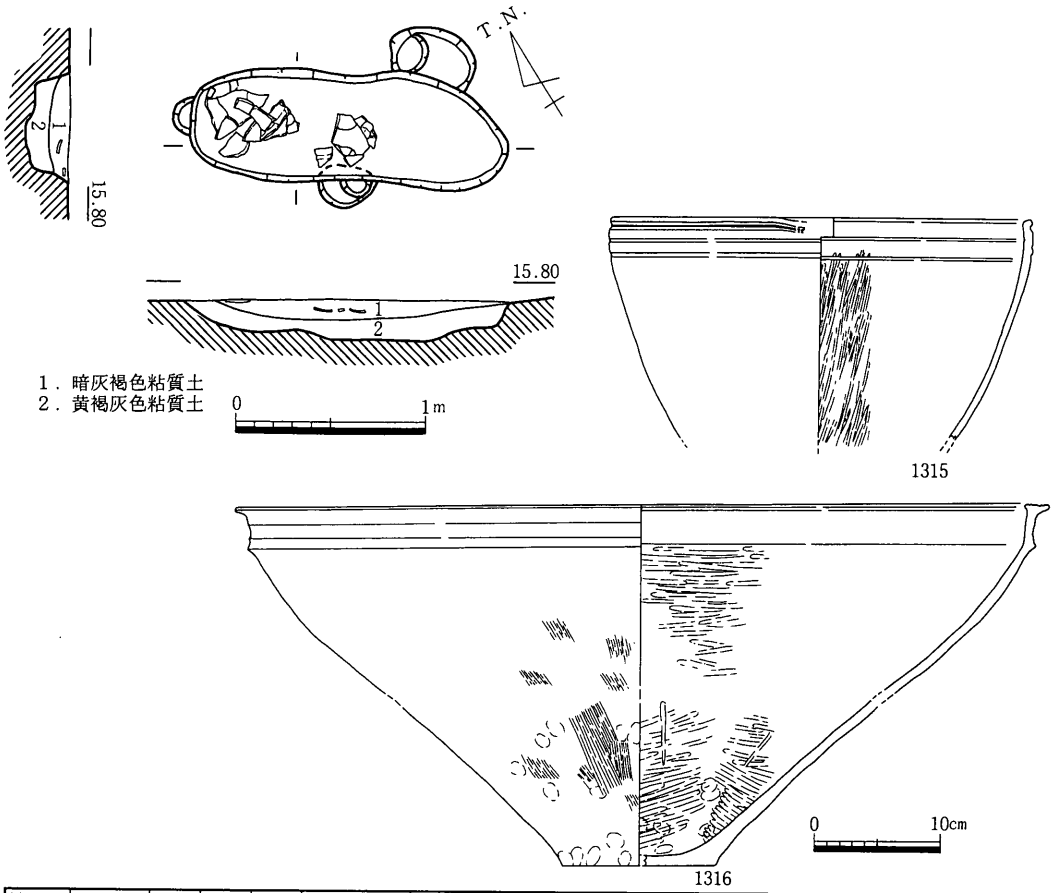
Ｂ14区の竪穴住居ＳＨ05主柱穴列の東側で検出した土坑である。北東－南西方向に主軸を持つ略長方形の土坑である。長辺部分壁面の立ち上がりはややきついが短辺側ではかなり緩やかとなる。四周共に比較的緩やかで，床面はほぼ平坦である。長軸1.45m，短軸0.8m，深さ0.25mを測る。埋土は大別して２群に区分できる。上層は灰褐色砂質土で，下層は地山土を含む暗灰褐色粘質土等からなる。遺物は下層中にややまとまる傾向にある。

（1309）は短頸形態の直口壷で端部は尖る形態。調整がやや粗雑。広口壷（1310）は口縁部を緩やかに折り返し端部は下方に強く引き出す。脚（1313）は短い柱状軸を持つ形態で，裾部はかなり矮小化している。（1314）は透かし孔，２孔１対だが，後期初頭に多い形態ではない。（1311）は端部を強く内湾させる形態の浅い坏部。（1312）は直立口縁形態にしては深めの坏部を持ち，端部は張り気味に四角く納める。以上の資料は後期初頭でも新しい様相である。

ＳＫ11（第331図）

Ｂ13区北端で検出した土坑である。竪穴住居ＳＨ06主柱穴をはじめ，多くの柱穴が密集する地点に位置する。本土坑も３基の柱穴を切って穿たれている。北西－南東に主軸を持つ長楕円形の浅い土坑で，長辺壁面の立ち上がりはかなり急であるが，短辺側は比較的緩やかに立ち上がる。長軸1.7m，短軸0.6m，深さ0.2mを測る。埋土は２層からなり，上層は暗灰褐色粘質土，下層は地山土ブロックを含む黄褐灰色粘質土である。埋土上層に２個体の大形鉢大形片のみを含む。周辺に点在する同様の長方形～長楕円形土坑のように，本土坑も特定は困難であるが竪穴住居付帯施設と見るべきかもしれない。

（1315）はやや深めの大形鉢。口縁部はほぼ直立し，端部は外方に張り気味に丸く納め外面に退化した凹線３条。（1316）は拡張口縁形態の大形鉢。口縁部は肥厚しつつ摘み出し，直下の屈曲もかなり明確な形状を持つ。また口径60cm弱と大形鉢の中でも特に大形である。この資料は後期初頭に位置づけ得る。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1315	大形鉢	32.5			細・極多、中・多	橙色	やや内湾気味に立ち上がり、端部は四角く納める。口縁部直下に凹線３条。内面縦ミガキ。	1/3	角閃石極多（含粗粒）赤色顔料
1316	大形鉢	59.7		11.8	細・極多、中・多	橙色	強く屈曲して鈍い段。口縁部は短く直立して端部は外方に引き出し内方も突出。頂部沈線。底部は縁辺がやや張り出すが薄い。口縁部横ナデ、体部外面縦ハケ、内面分割横ミガキ。	2/5	角閃石極多（含粗粒）、石英等多、赤色粒　赤色顔料

第331図　４区ＳＫ11平・断面図（１／40）および出土遺物（１／４）

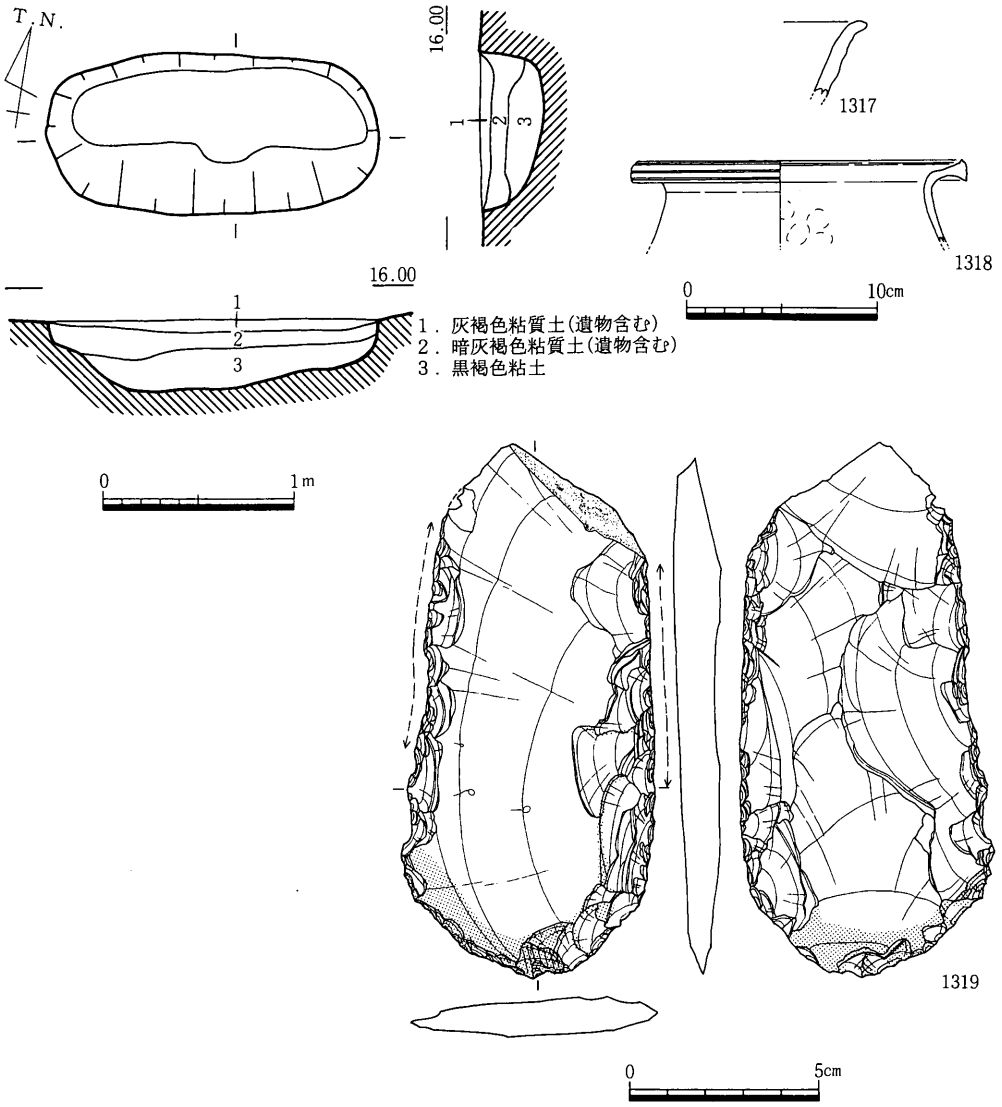
ＳＫ12（第332図）

Ｂ14区東端で検出した土坑である。竪穴住居群の東端に位置し，大形溝ＳＤ16に近い。東西方向の長楕円形土坑で，壁面の立ち上がりは比較的急である。床面は中央に向かって緩く窪む。長軸1.75m，短軸0.8m，深さ0.35mを測る。埋土は３層からなり，上位２層は灰褐色系の粘質土，下層は黒褐色の粘土である。上位２層に少量の土器片を含むのみである。

（1311）は大形鉢口縁部片。端部を小さく外反させ外面には鈍い凹線が連続する。甕（1318）は口縁端部を肥厚するものの摘み出しは弱い。これらは後期初頭に位置づけるこ

とができる。

石鏃（1319）は横長剥片を素材とし，二次調整は縁辺部の浅い調整剥離にとどまるが，整った舌状を呈する。



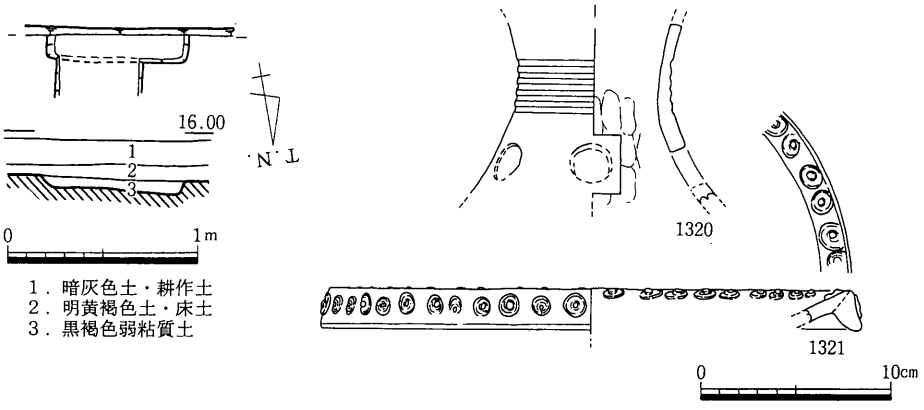
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1317	大形鉢				細・極多	黄橙色	直線的に開き口縁端部は小さく反って丸く納める。外面凹線		角閃石極多
1318	甕	17.1			細・極多	橙色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み、端面に沈線３条。肩部内面指押さえ。	1/8	角閃石極多

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1319	石鏃	14.0	6.6	1.3	135.1	ｻﾇｶｲﾄ	先端部摩耗顕著・左面刃部擦痕	

第332図　４区ＳＫ12平・断面図（１／40），出土遺物（１／４・１／２）

ＳＫ13（第333図）

Ｂ16区の南端で辛うじて一部を確認した土坑である。著しい削平をこうむり，残存深は0.1ｍを計るにすぎない。長0.7ｍ，幅0.15ｍ以上の長方形を呈する。埋土は黒褐色粘質土で単層。遺物量は少ない。器台（1320）は中位に並行沈線文と裾部に大形円形透かしを持つ。（1321）はよく開いた垂下口縁を呈し，口縁端面・上面に円形浮文を配す。後期初頭に位置づけられる。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1320	小形器台				細・極多	橙色	鼓状を呈し中位に沈線５条と下半部に大形円形透かし。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等
1321	器台？	27.4			細・極多	明黄褐色	口縁部は強く開き端部は粘土帯を付し板状垂下口縁。端面・口縁部内面に円形浮文。	1/8	角閃石極多、石英等多、雲母・赤色粒

第333図　４区ＳＫ13平・断面図（１／40）および出土遺物（１／４）

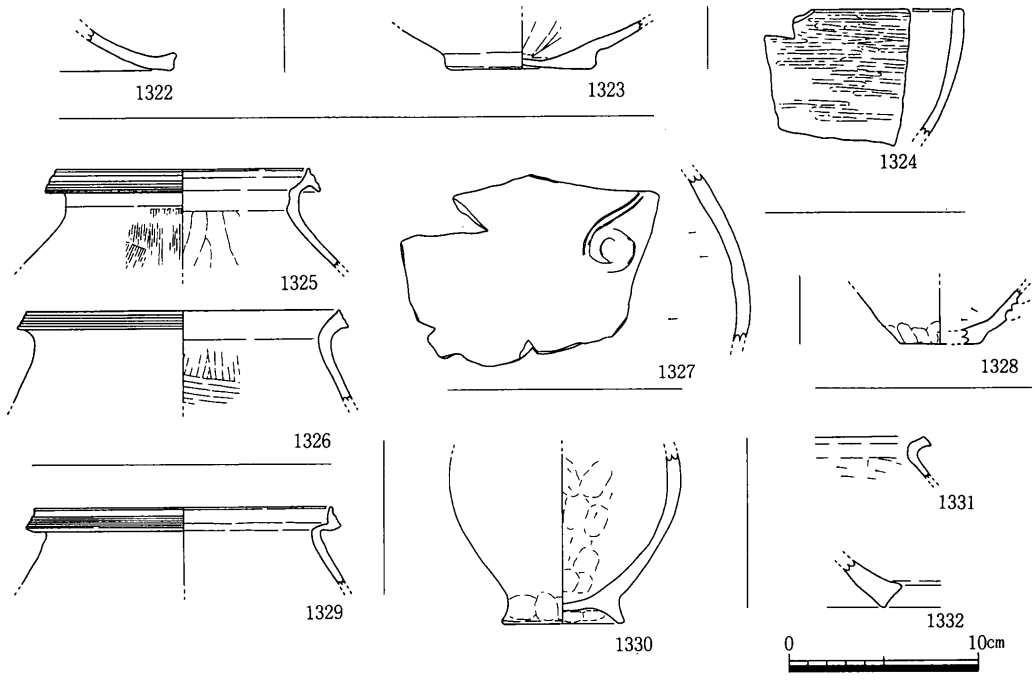
その他柱穴出土資料（第334～338図）

すでに見てきたように，柱痕こそ確認していないものの，柱穴とみなし得る遺構は４区で多数検出している。それらのうち構造物として復元できなかったものは300基以上を数える。それらはいずれも暗褐色～黒褐色粘質土・シルトを埋土とし，この点からでも縄文晩期～弥生後期に納まることがわかる。しかし，その大多数では遺物を伴わないか，図示し得ない程度の細片を検出したにすぎない。以下では図化し得た柱穴出土遺物を全て示し，４区遺構の時期を検討する一つの材料としておきたい。

Ｃ13ＳＰ21　（1322）はやや立ち上がりをもつが，脚端部形態から後期初頭の柱状軸形態の高坏脚と考えられる。

Ｃ13ＳＰ36　（1323）は明瞭に円盤状に突出する形態の底部。体部の張りの強さから細頸壷の可能性が高い。

Ｃ13ＳＰ５　（1324）は把手付広片口皿側縁部。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1322	脚				細・極多、中・普	明赤褐色	脚裾部は強く開き、端部は鈍く摘み上げる。横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、石英等
1323	細頸壺？			7.4	細・極多、中・多	明黄褐色　黒褐色	円盤状に突出する底部から体部は強く開く。内面板ﾅﾃﾞ。	全周	角閃石極多、石英等多
1324	把手付広片口皿				細・極多	褐色	体側縁部。端部は四角く納める。外面ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多、石英等少　赤色顔料
1325	広口壺？	13.2			細・極多	にぶい黄橙色　浅黄色	短く直立する頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上方も摘む。端面沈線３条。口縁部・頸部内面横ﾅﾃﾞで凹面をなす。肩部外面縦ﾊｹ、内面指腹押さえ。	1/8	角閃石極多、赤色粒少
1326	甕	16.4			中・普	黄橙色　橙色	口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は鈍く肥厚して四角く納める端面櫛描沈線。肩部内面縦ﾊｹ後横ﾊｹ。	1/8	石英等　搬入品
1327	壺				細・極多、中・多	橙色	不明瞭だが２条の篦描沈線によるループ状文様。壺肩部か。		角閃石極多、石英等多
1328	把手付鉢			4.2	細・極多、中・多	暗褐色	やや突出気味の底部で縁辺部指押さえ。側面に縦位の環状把手。	1/8	角閃石極多、石英等多
1329	甕	15.6			細・多、中・多	明赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚して強く摘み上げる。端面櫛描沈線。肩部内面上端まで横ｸｽﾞﾘ。	1/8	石英等・雲母多、角閃石少　搬入品
1330	？			6.1	細・少、中・多　普、粗・普	橙色	縁辺部を薄く摘み出す粗雑な上げ底。底部内外面指押さえ。体部内面縦ｸｽﾞﾘ後指押さえ。	全周	石英等・赤色粒多、角閃石少　搬入品
1331	甕				細・極多	黄橙色　黄褐色	口縁部は強く屈曲して短く開く。端部は下方に鈍く摘み出す。口縁部横ﾅﾃﾞ、内面横ｸｽﾞﾘ。		角閃石極多
1332	脚				細・少、中・多	明赤褐色	脚端部は鈍く肥厚して外方に張り出す。		石英等多、角閃石少　搬入品

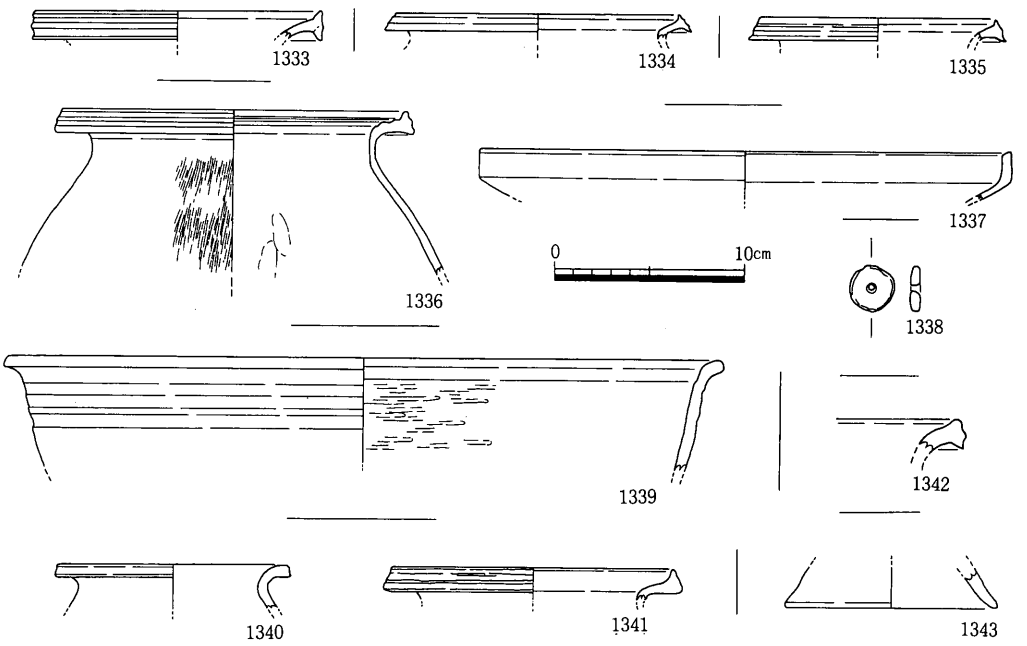
第334図　４区柱穴出土遺物１（１／４）

C13ＳＰ35　甕（1325）は痕跡的な頸部から強く折り返した口縁部を肥厚させつつ上下に摘む後期初頭の形態。甕（1326）は口縁部の折り返しが緩く，端部は鈍く肥厚するだけ

で摘み出しもほとんどないが，端面の施文からやはり後期初頭に位置付けられる。(1327)は壷肩部片。不明瞭ながら並行沈線によるループ状の文様を見る。

C13SP26　(1328) は把手付鉢。底部は鈍く突出気味。

C14SP14　甕 (1329) は口縁部を強く折り返して端部は上方に摘み出す形態で後期初頭



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1333	広口壺？	15.1			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は折り返して短く開く。端部は上下に摘み出して端面に凹線。	1/12	角閃石極多、石英等・赤色粒
1334	甕	14.8			細・極多	黄橙色	強く折り返した口縁部は短く開く。端部は下方に摘み出すと共に上方も突出する。端面に鈍い凹線	1/12	角閃石極多、雲母・石英等多
1335	甕	12.4			細・極多	橙色	強く折り返した口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。端面に凹線	1/4	角閃石極多
1336	広口壺？	18.0			細・極多、中・少	黄橙色	短く直立する頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に摘み出すと共に下方も張り出す。端面に凹線。肩部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/6	角閃石極多、石英等、赤色粒少
1337	高坏	27.9			細・極多	黒褐色　暗灰黄色	中位で鈍く屈曲して上半部は短く直立。端部は外方に張り出し気味に四角く納める。	1/12	角閃石極多、石英等多
1338	土製紡錘車	2.5	0.5		細・極多	明褐色	土器片利用。縁辺部打ち欠き後簡単に研磨。	完形	角閃石極多、赤色粒少
1339	大形鉢	37.4			細・極多	明黄褐色	体部の開きは弱い。口縁部は小さく屈曲して端部は四角く納める。上半部外面鈍い凹線、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/20	角閃石極多
1340	甕	11.6			細・極多	にぶい橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚して四角く納める。端面凹線。	1/8	角閃石極多、石英等
1341	広口壺？	14.7			細・極多	橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚して強く摘み上げる。端面櫛描沈線。折り返し部に稜。	1/10	角閃石極多
1342	広口壺？				細・極多	暗褐色	強く折り返した口縁部は短く開き、端部は上下に小さく摘む。端面に凹線。		角閃石極多、雲母
1343	脚			9.2	細・極多	明黄褐色	脚端部は丸く納める。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多

第335図　4区柱穴出土遺物2 (1／4)

に位置付けられる。

C14SP03　小形壷（1330）は，むしろ脚台と見做すほどの上げ底形態。

C14SP147　甕（1331）は緩やかに折り返した口縁部の下端を鈍く摘み出す。内面上端まで及ぶ横ケズリと共に後期初頭段階の吉備南部の様相を示す。

C14SP 9　高坏脚（1332）の端部肥厚・拡張はやや鈍いが後期前葉まで下らせる必要はない。

B13SP04　甕（1333）は口縁端部をよく上下に摘み出す形態。

B11SP07　甕（1334）は口縁端部をよく上下に摘み出す形態。

B13SP20　甕（1335）は鈍く肥厚させつつ端部を上下に摘み出す。

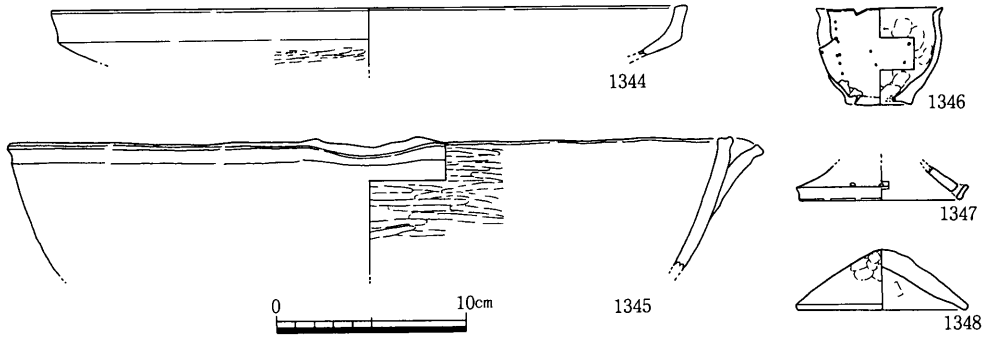
B13SP21　（1336）は頸部が極端に短いものの，口縁部の発達形態から広口壷に含めるべきであろう。口縁端部形状から後期初頭に位置付けてよい。

B13SP21　高坏（1337）の短く直立する坏部形態は後期初頭でも古相を示す。

B14SP17　（1338）は土器片再加工の紡垂車。

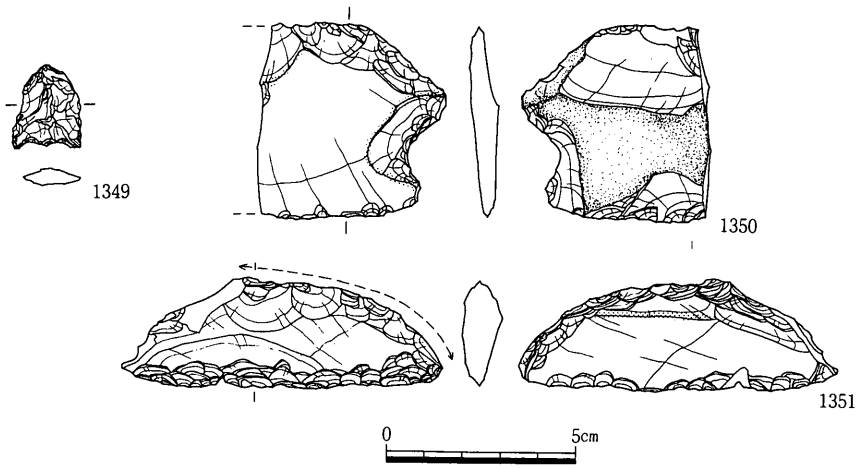
B14SP48　大形鉢（1339）は口縁部を小さく外反させ，直下に鈍い凹線文。

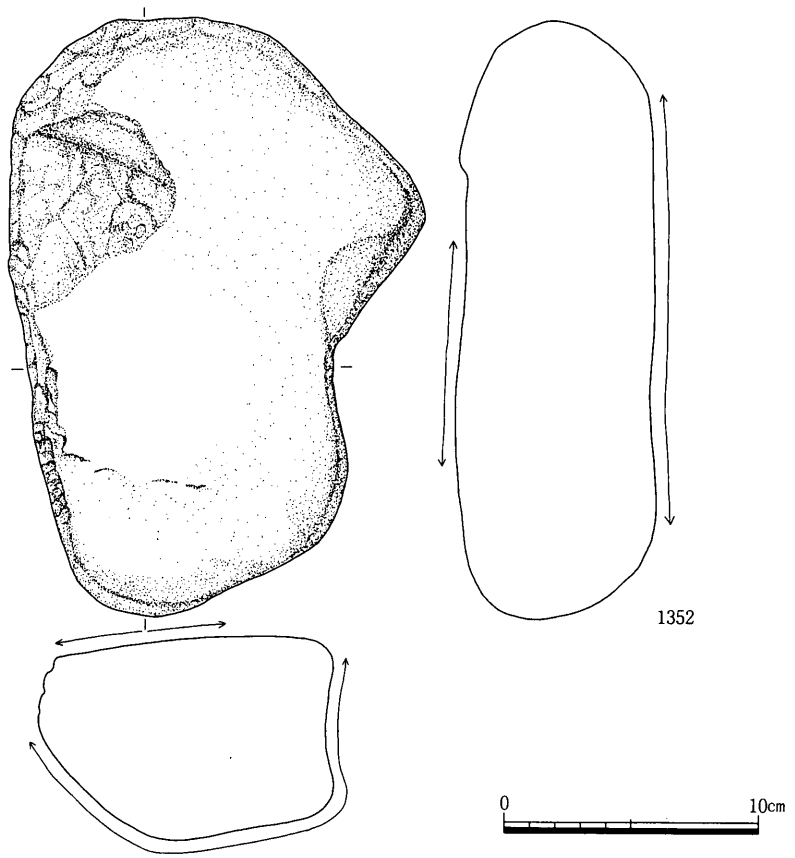
B14SP 3　（1342）は広口壷口縁部であろう。端部の拡張は弱い。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1344	高坏	33.4			細・極多	にぶい赤褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は短くやや外傾する。端部は外方に張り気味に四角く納める。下半部外面横ケズリ後横ミガキ。	1/12	角閃石極多、石英等
1345	大形鉢	37.7			細・極多	橙色	やや内湾気味に開き片口を持つ。端部は内外に張り気味に四角く納める。外面口縁部直下凹線１条。内面横ミガキ。	1/8	角閃石極多　赤色顔料
1346	小形鉢	6.6	5.1	3.4	細・極多	橙色	やや突出した底部で口縁部は小さく反り、端部は尖る。外面横ナデ、内面指押さえ。体部に縦の円形刺突文列。	1/3	角閃石極多
1347	脚			8.2	細・極多	明褐色	脚裾部は強く開き端部は鈍く肥厚する。端面凹線。２孔１対の円形透かし。	1/8	角閃石極多
1348	蓋	9.0	3.2		細・極多	暗灰黄色	低円錐形を呈し端部は四角く納める。頂部指押さえ、他横ナデ。	全周	角閃石極多、石英等

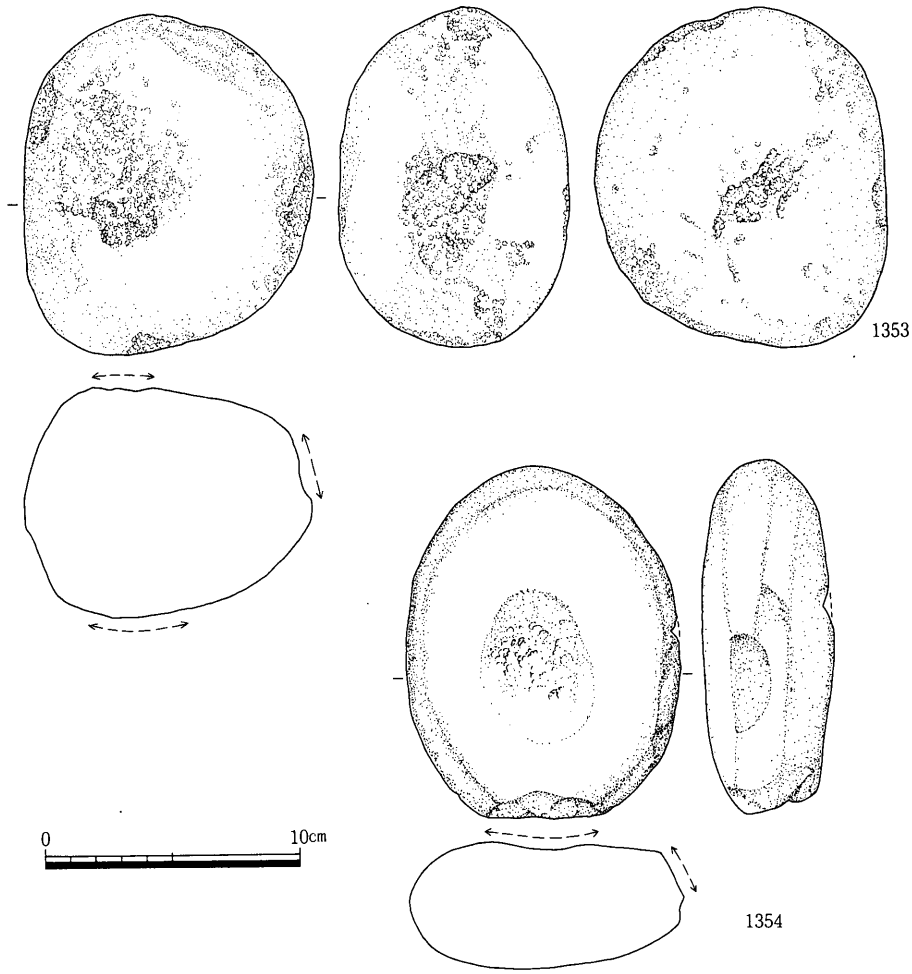
第336図　4区柱穴出土遺物３（１／４）





挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1349	石鏃	2.0	1.8	4.0	1.6	サヌカイト	平基式	
1350	打製石庖丁	4.9	5.1	0.8	24.6	サヌカイト	刃部ほぼ片面調整	折損
1351	スクレイパー	8.5	2.9	1.0	27.2	サヌカイト	肉厚、三日月形　石小刀？	
1352	石皿	23.3	16.4	7.8	4360.0	砂岩	片面使用　縁辺の一部に顕著な敲打痕	

第337図　4区柱穴出土遺物4（1／4・1／3）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1353	凹み石	12.9	11.4	9.1	1762.2	砂岩	両面中央部と縁辺部に敲打痕	
1354	凹み石	13.6	10.7	4.9	1072.3	砂岩	片面中央に敲打痕集中、縁辺に磨面	

第338図　4区柱穴出土遺物5（1／3）

B14SP55　甕（1340）は口縁部がわずかに肥厚するだけで，やや下るかもしれない。甕（1341）は口縁端部を鈍く肥厚させて小さく摘み上げる。後期初頭でよい。

B14SP10　（1343）は高坏脚端部か。

B14SP54　高坏（1344）は口縁部がわずかながら外傾する。外面の横ミガキは直立口縁形態高坏では多くない。大形鉢（1345）の口縁部は，拡張口縁の退化形態か。（1346）は口縁部を小さく外反させる形態の小形鉢。外面に小刺突文をやや乱雑に配する。形態・施文共に類例に乏しい。後期中葉以降の小形鉢とは異なる。高坏脚（1347）は脚端部の肥厚・拡張がやや鈍い。（1348）は紐通し孔を穿たないが，形状から笠形の蓋と判断し

た。本柱穴資料は後期初頭でも新しい様相を示す。

石鏃（1349）はC13SP09出土。小形平基式。（1350）はC13SP98出土。サヌカイト製打製石庖丁で刃部成形は粗雑である。C13SP19出土のスクレイパー（1351）は半月形の形態。刃部は直線的で背部は緩く湾曲する半月形の形態で肉厚。近畿地方に多い，いわゆる「石小刀」に類似し，本地方では見ない形態である。（1352）は片面使用の石皿。縁辺の一部に顕著な敲打痕がある。C14SP59出土。凹み石（1353）は両面の中央部と縁辺に敲打痕が集中する。B13SP73出土。凹み石（1354）は片面中央に敲打痕が集中し縁辺に磨面がある。C13SP100出土。

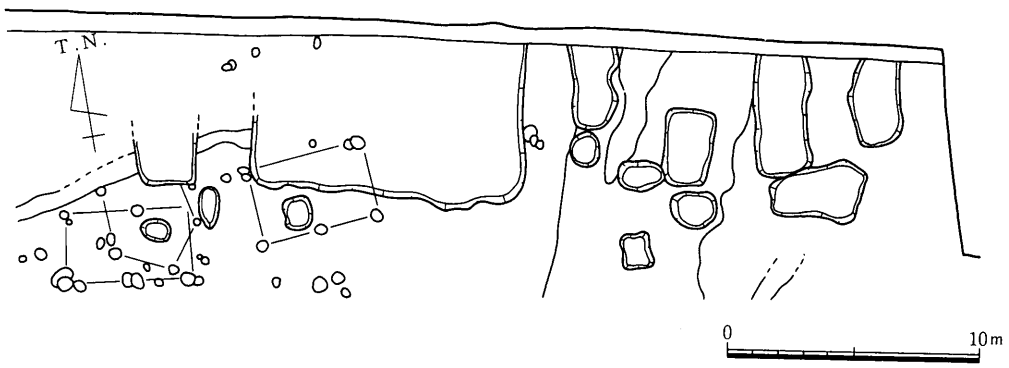
以上のように柱穴出土遺物は明確に中期以前に遡るものはなく，また後期前葉以降に下だる可能性をもつ1例をのぞき，大部分が後期初頭に属する。このことから，すでに示した他種遺構の大多数と同様に柱穴遺構のほとんどがこの時期に比定できる可能性が高い。

撹乱土坑（第339～341図）

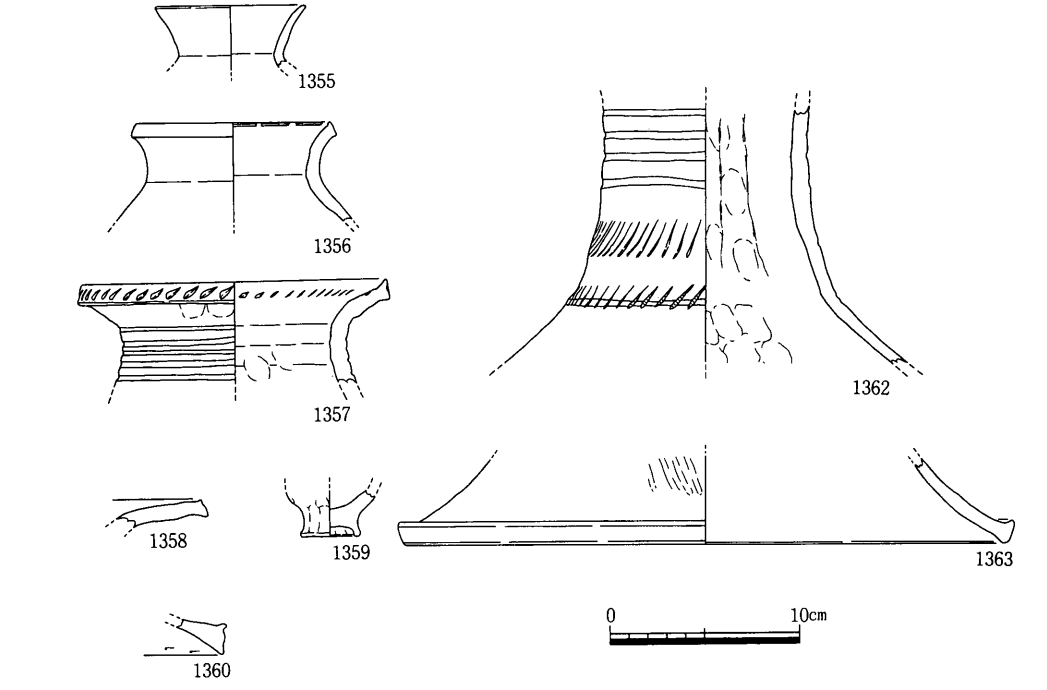
主に，C14～15区北半に集中する浅い方形土坑。概ね方形を呈するが，形態はかなりいびつで，規模の差は大きい。現耕作土・床土直下にあって，旧耕作土層と同質の埋土を持ち，いくつかの例では小児頭大～拳大の円礫が充填されている。性格不明であるが，近世・近代以降の所産であることは間違いない。

特にC15区で大形溝SD16を破壊しているため，多量の弥生後期土器が混入している。それらのうち比較的良好な資料について図化した。

（1355）は短頸形態の小形壷。薄作りで細頸壷の可能性もある。（1356）も短頸形態の

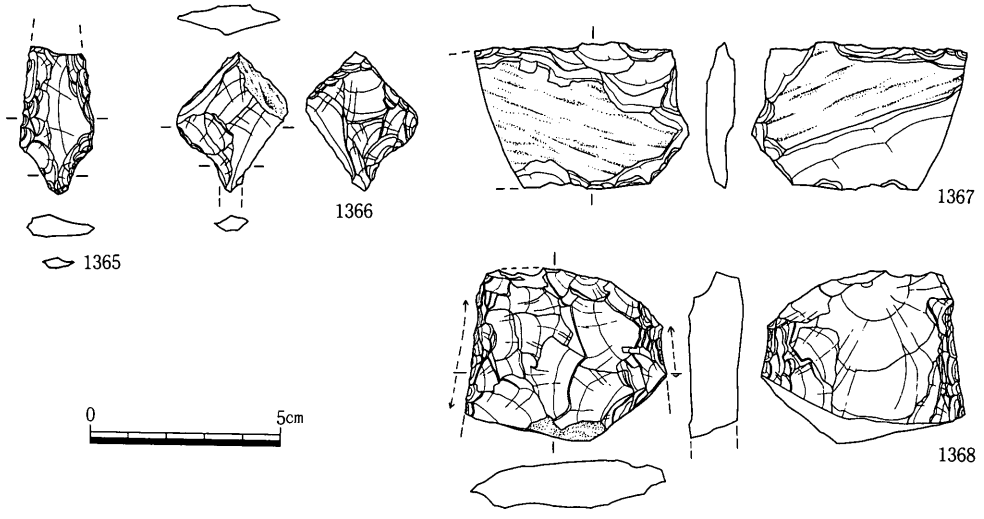


第339図　4区撹乱土坑群平面図（1／300）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1355	短頸壺	7.8			細・極多	明褐色	短く外傾する口頸部はやや薄手。端部は丸く納める。	1/4	角閃石極多、石英等・雲母
1356	短頸壺	11.0			中・多	にぶい黄橙色	弱く外反する頸部は短い。端部は内外に張り気味に四角く納める。	1/4	石英等多　搬入品
1357	広口壺	16.0			細・極多、中・多	橙色	やや内傾する頸部から緩やかに屈曲して口縁部は短い。端部は摘み上げて、狭い端面と内面に刺突文。頸部沈線。	1/4	角閃石極多（含粗粒）、石英等
1358	小形器台				細・極多	明赤褐色　橙色	口縁部は強く開き、端部は下方に小さく摘み出すと共に上方も小さく突出する。		角閃石極多、雲母多
1359	？			3.1	細・極多、中・少	明黄褐色	小形の脚台を持ち体部の開きは弱い。脚部指押さえ。製塩土器に似るが作りが丁寧。	全周	角閃石極多、石英等少
1360	脚				細・極多	明褐色	脚端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み、上端も小さく突出して直立する端面に凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。		角閃石極多、石英等多
1362	直口壺				細・極多	橙色　黒褐色	ほぼ直立する頸部上半と基部に凹線。下半部にはﾊｹ原体刺突の斜線文。内面指押さえで絞り目のこる。	1/4	角閃石極多、石英等
1363	大形器台			31.6	細・極多、中・多	橙色	脚裾部は強く開き端部は摘み上げる。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾅﾃﾞ、脚径の割には器壁薄い。	1/12	角閃石極多（含粗粒）
1364	大形鉢	54.0			細・極多	黄橙色	上半部で鈍く屈曲して段。口縁部はほぼ直立し端部は外方に引き出すと共に内方に突出して頂部に平坦面。	1/16	角閃石極多、雲母・石英等　赤色顔料？

第340図　4区撹乱土坑群混入遺物1（1／4）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1365	石鏃	3.8	1.9	0.6	4.2	ｻﾇｶｲﾄ	有茎	先端部折損
1366	石錐	3.4	2.8	0.8	7.0	ｻﾇｶｲﾄ	刃部欠損	刃部折損
1367	打製石庖丁	5.7	3.8	0.8	20.3	片岩		折損
1368	石鏃	3.8	5.2	1.3	38.8	ｻﾇｶｲﾄ	両側縁部潰し	基部片

第341図　4区撹乱土坑群混入遺物2（1／2）

壷で端部はやや張り気味に四角く収める。壷（1357）は緩やかに折り返した口縁部の上端を小さく摘み出す形態。口縁部内外面に刺突文をめぐらし，頸部並行沈線は類例に乏しい。（1358）は小形器台口縁部か。口縁部の発達は弱い。製塩土器脚（1359）は脚台の小形化した後出形態。頸部の不明瞭な壷（1361）は口縁端部を鈍く肥厚させ，狭い端面に並行沈線を施す。本地方に少ない形態である。（1362）は直口壷頸部。口縁部が強く外反する形態と思われる。後期初頭でも新しい様相である。大形鉢（1364）は強く口縁端部を拡張し，直下の屈曲もまだ形骸化していない。

細身の有茎鏃（1365）は調整剥離は浅く扁平である。（1366）は石錐基部片。片岩製打製石庖丁（1367）は薄い片岩礫の縁辺部を整形するだけで作り出している。（1368）は石鏃基部片か。

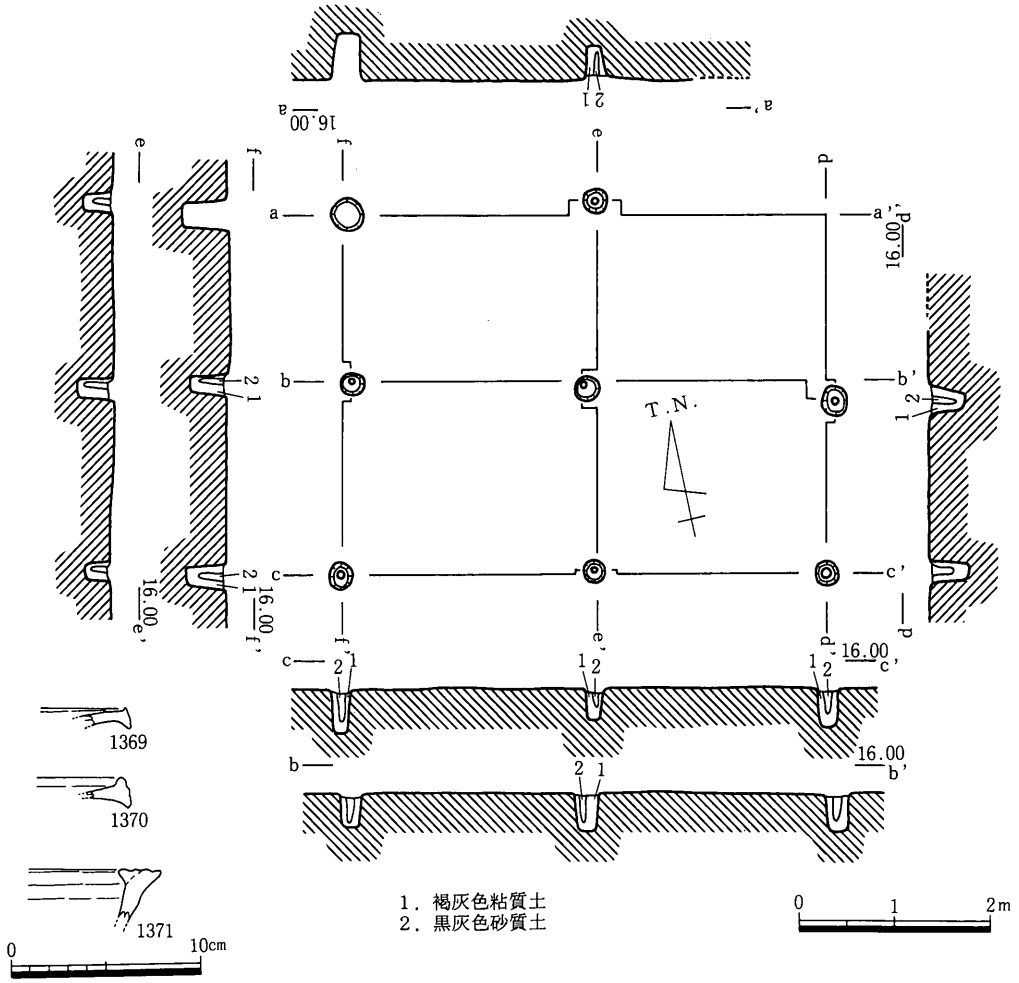
（2）古墳時代以降の遺構・遺物

ＳＢ06（第342図）

4区中央部の遺構密集地域で検出した桁行2間（5.1m），梁間2間（3.7m）の総柱建物である。床面積18.9㎡を測り主軸方位はＮ78°Ｅである。遺物は伴っていないが，条里溝ＳＤ02・04埋土と同質の埋土を持つことから古代～中世の掘立柱建物と推定できる。なお

4区ではこの時期の建物はこのＳＢ061棟だけである。本建物の北東隅柱穴は井戸状遺構ＳＫ07と重複しており調査時に十分識別しえなかった。

確認した柱穴はいずれも径0.2m前後の円形を呈し，深さ0.4m前後残存する。柱痕もしくは，抜き取り痕は径0.1m弱の細身で，その下端レベルは15.4m前後でほぼ揃う。桁行方向の柱間間隔は2.4～2.7m，梁間方向は1.7～2.0mと，共にバラツキが大きく柱通りもあまり良くない。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1369	小形器台				細・極多	明褐色	口縁部は強く開き端部は外方に摘み出すと共に上方にも小さく突出する。		角閃石極多、石英等少
1370	甕？				細・極多	橙色	口縁端部はやや肥厚して上下に摘み出し、端面に凹線		角閃石極多
1371	大形鉢？				細・極多	明黄褐色	上半部短く外傾。端部は内外に引き出し、頂部平坦面凹線。		角閃石極多、石英等・雲母多

第342図　4区ＳＢ06平・断面図（1／80）および出土遺物（1／4）

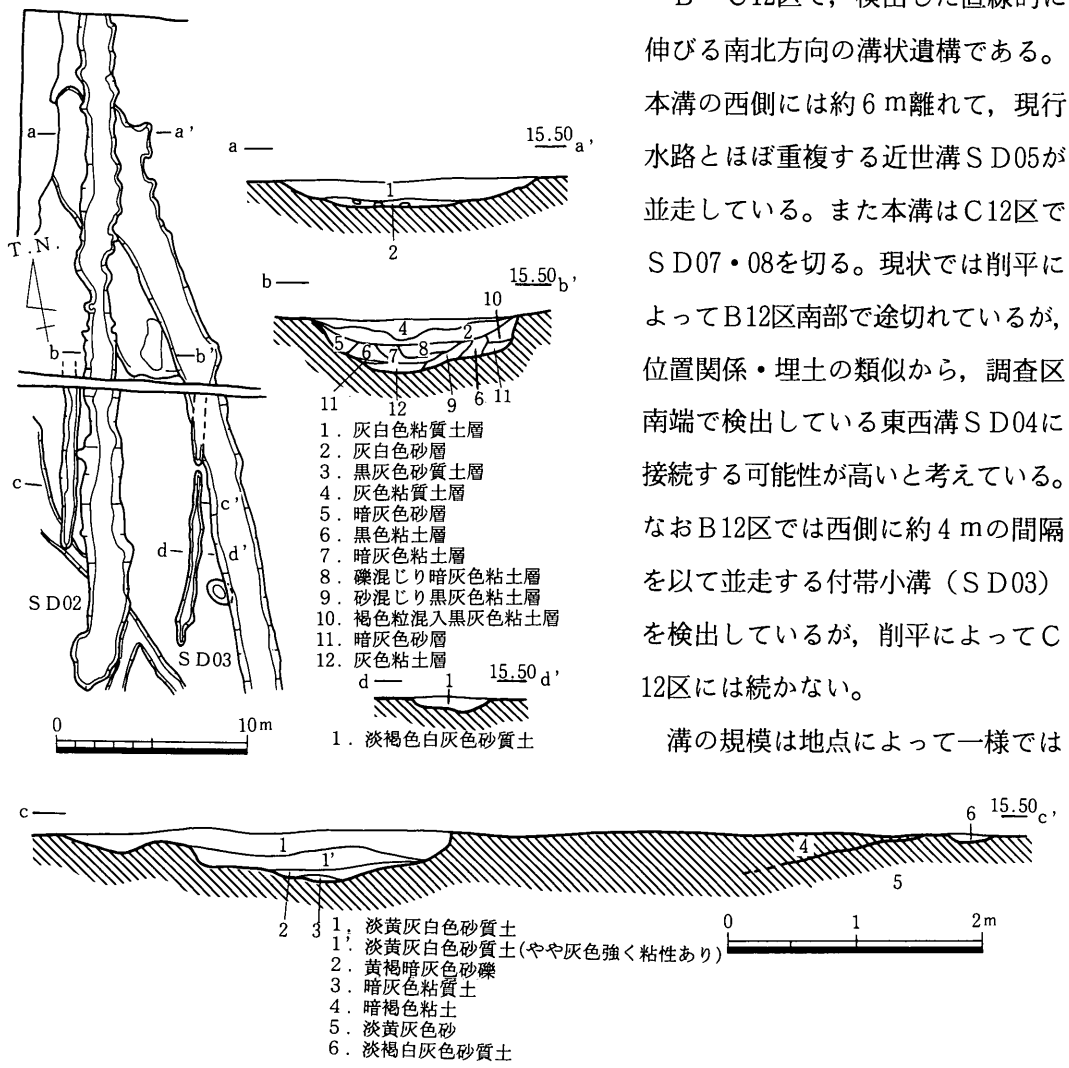
形態・柱穴埋土等から想定される本建物の時期に一致する遺物は伴わない。わずかに混入の弥生土器小片を見るだけである。

ＳＤ02（第343～346図）

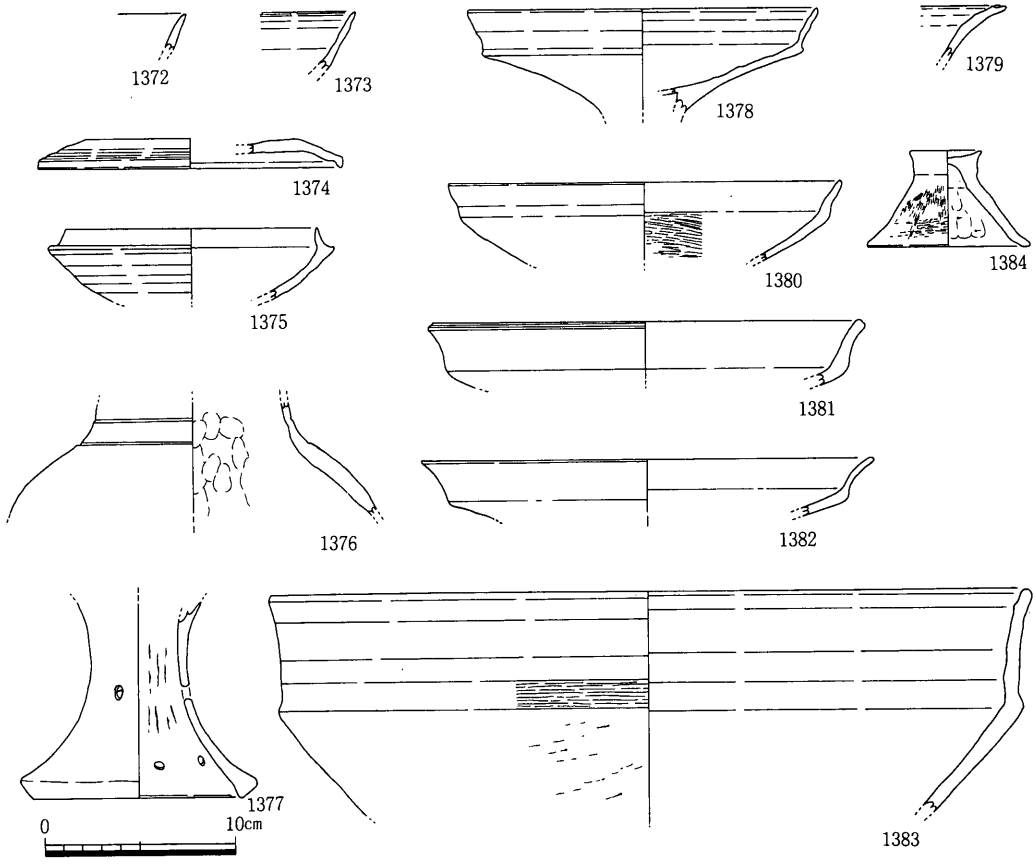
Ｂ・Ｃ12区で，検出した直線的に伸びる南北方向の溝状遺構である。本溝の西側には約６ｍ離れて，現行水路とほぼ重複する近世溝ＳＤ05が並走している。また本溝はＣ12区でＳＤ07・08を切る。現状では削平によってＢ12区南部で途切れているが，位置関係・埋土の類似から，調査区南端で検出している東西溝ＳＤ04に接続する可能性が高いと考えている。なおＢ12区では西側に約４ｍの間隔を以て並走する付帯小溝（ＳＤ03）を検出しているが，削平によってＣ12区には続かない。

溝の規模は地点によって一様ではなく，幅1.2～2.1m，深さ0.2mとなる。ただし，Ｃ12区南端付近では，局部的に深まり，その部分に暗灰色～黒色の粘土等がブロック状に堆積する。この部分を除けば，溝床面レベルはほとんど水平であるが，わずかばかり北端が低くなる。

埋土は灰白色の砂質土ないしは粘質土で，４区包含層と基本的に同質である。なお本溝

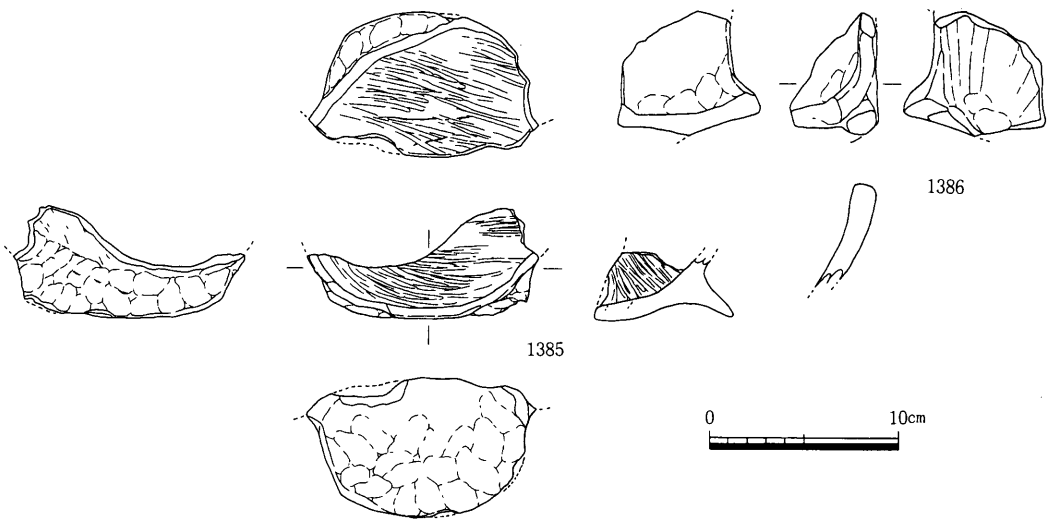


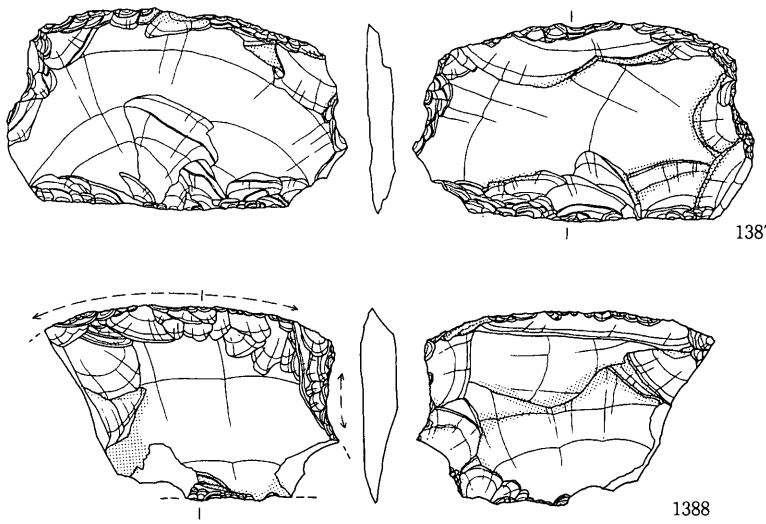
第343図　４区ＳＤ02・03平・断面図（１／400・1／60）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1372	須恵器坏				細・少	緑灰色	やや反り気味に開き端部は尖る。		石英等少
1373	須恵器坏				細・少	灰白色	やや内湾気味に開き端部は尖る。回転ﾅﾃﾞの凹凸顕著。		石英等少
1374	須恵器坏蓋	15.8			細・普	灰色	かなり偏平。端部は小さく摘み出して垂下。頂部2/3弱に回転ｹｽﾞﾘ。	1/6	石英等
1375	須恵器坏	13.2			細・少	灰色	立ち上がり部は内傾するが比較的高い。回転ﾅﾃﾞ。	1/8	石英等少
1376	甕				中・多	灰白色	肩上端部に篦描沈線２条。	1/8	石英等多　搬入品
1377	脚			10.7	細・極多、中・多	黄褐色	脚裾部は緩やかに開き端部は肥厚して下端をやや張り出す。円形透かし２段、下段は２孔１対。内面絞り目のこる。	全周	角閃石極多（含粗粒）、石英等多
1378	高坏	18.4			細・極多、中・多	明褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は短く外傾して端部は尖る。上半部内外面鈍い凹線。円盤充填	1/6	角閃石極多（含粗粒）、石英等少
1379	高坏				細・極多	にぶい橙色	坏上半部は強く外反して開き、端部は尖る。内面凹線。		角閃石極多、石英等・赤色粒　B類高坏
1380	高坏	20.6			細・極多	明黄褐色	中位で鈍く屈曲して上半部は短く外傾。端部は尖る。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ内面横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、石英等
1381	高坏	22.4			細・極多	橙色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部はやや外反して短い。端部は外方に張り気味に四角く納める。	1/8	角閃石極多、石英等・赤色粒
1382	高坏	23.8			細・極多	明赤褐色	中位で強く屈曲して上半部は外反して開く。端部は尖る。	1/12	角閃石極多、石英等多
1383	大形鉢	39.5			細・極多	橙色　にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上反部は弱く外反して立ち上がる。端部は丸く納める。上半部内外鈍い凹面連続。下半部外面横ｹｽﾞﾘ。	1/8	角閃石極多、雲母多　下川津Ｂ類鉢
1384	蓋	8.3			細・極多、中・普	にぶい黄橙色	栽頭円錐形を呈し端部は丸く納める。頂部縁辺は薄く張り出す。外面ﾊｹ、内面指押さえ。	全周	角閃石極多、石英等

第344図　４区ＳＤ02出土遺物１（１／４）

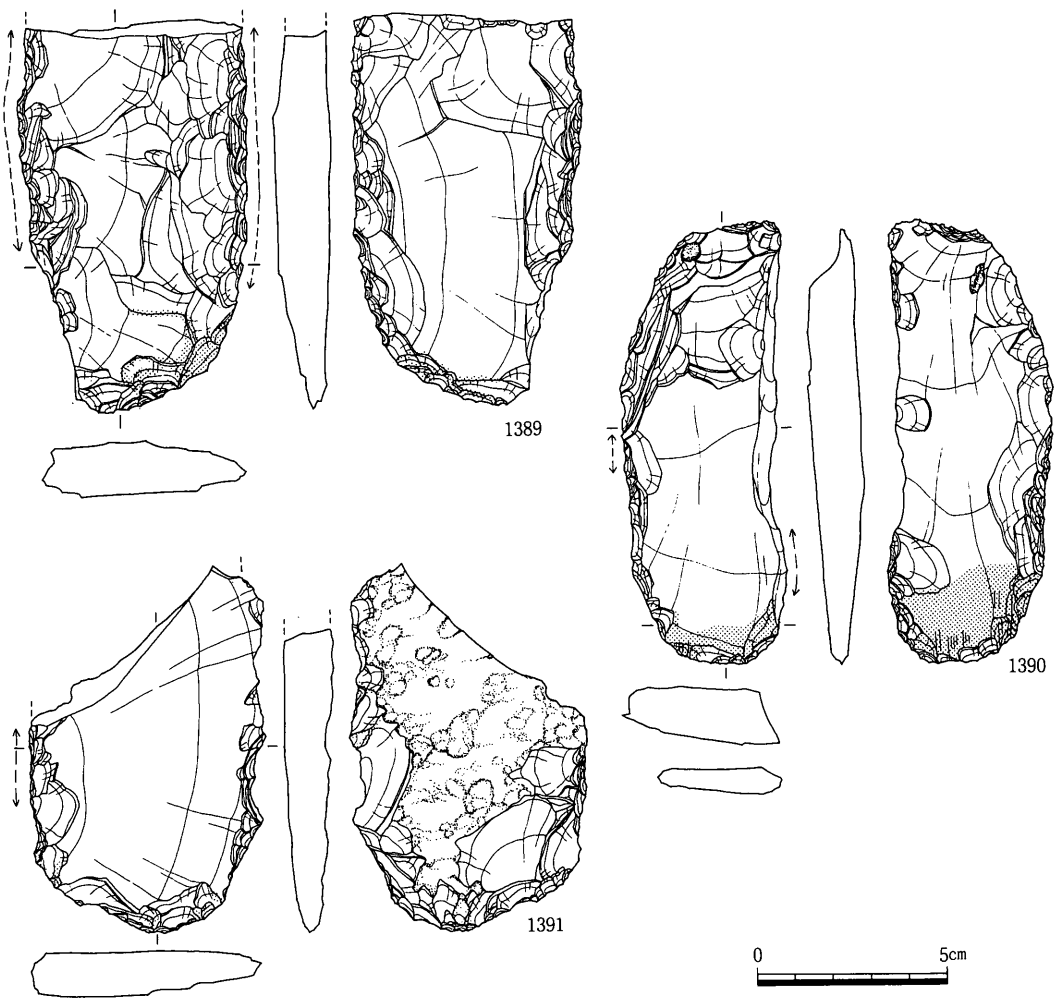




挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1385	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄橙色	把手部。把手部は立ち上がり部下端を薄く外方に引き出して丸く納める。台形状に高く突出した立ち上がり部は内湾気味に四角く納める内面横ﾐｶﾞｷ、外面体部縦ｹｽﾞﾘ。把手部指押さえ。		角閃石極多、雲母多赤色顔料
1386	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄橙色	把手部。側縁部から緩やかに隆起する。側縁端部は肥厚気味に四角く納める。外面ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、赤色粒赤色顔料

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1387	打製石庖丁	9.1	5.2	0.7	48.4	ｻﾇｶｲﾄ	左面穀部摩耗微弱	
1388	打製石庖丁	7.7	5.1	1.1	49.7	ｻﾇｶｲﾄ	摩耗	折損

第345図　4区ＳＤ02出土遺物２（１／４・１／２）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1389	石鏃	9.6	6.0	1.5	122.5	サヌカイト	片面に摩耗・擦痕　両側縁潰し	基部折損
1390	石鏃	11.1	4.1	1.4	85.7	サヌカイト	一側縁折り取り面　他縁辺潰し　先端部両面摩耗顕著 刃部擦痕	
1391	石鏃	8.8	6.2	1.3	76.4	サヌカイト	左面鋭部摩耗微弱	基部折損

第346図　4区ＳＤ02出土遺物３（１／２）

は東西溝ＳＤ04と共に，方格地割り線に合致する溝として注目できる。推定されている香川郡条里坪付に照らし合わせると，４条16里14坪と15坪の界線上にほぼ位置することになる。

本溝では弥生時代前期から奈良時代の幅広い時期の遺物を含む。ＳＤ08・09等を切って穿たれるため最も多いのは弥生時代後期初頭～中葉の資料である。

（1372・1373）は須恵器坏口縁片。焼成は堅緻で先端は直線的に尖るが，やや厚ぼった

い。須恵器坏蓋（1374）と共に奈良時代に納まるであろう。（1375）は TK209式並行期に比定できる。（1376）は弥生前期壷。隣接するＳＤ07からの混入であろうか。図示した弥生後期資料のうち，脚（1377）蓋（1384）は後期初頭に位置付けられるが，他は明らかに後期中葉まで下る形態である。このうち外反口縁の発達した高坏（1378・1379）と，大形鉢（1383）は典型的な下川津Ｂ類に比定できる。把手付広片口皿（1385）は大きく隆起した立ち上がり部と薄く伸びた把手部を持つ。打製石庖丁（1387）は比較的深い調整剥離で刃部付近を薄くした後に細かな調整で仕上げる。石鏃（1389・1391）は横長剥片を素材とするが，これに対して（1390）は大形の剥片を打割して素材とする。側面に折り取り面をとどめる。

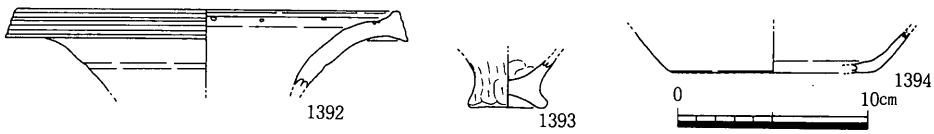
これらのうち本溝の年代をある程度反映し得るのは（1372～1374）で，これによれば奈良時代に位置づけたいが，併走小溝ＳＤ03の年代と若干ずれるし，関連する条里溝ＳＤ04出土遺物が示す時期観と大きく異なる。時期を反映しうる遺物の出土量が僅少であることから，ここでは開削時期の上限を示唆しうる資料と考えておきたい。

ＳＤ03（第347図）

Ｂ・Ｃ12区で検出した南北方向の小溝である。弥生時代後期の溝ＳＤ08西側からその上面に位置し，中世溝ＳＤ02の東にあって約４ｍの間隔を以て並行する。断面皿状で幅0.4～0.6m，深さ0.15mで床面はＳＤ02のそれより0.2ｍほど高い。埋土は淡褐白灰色砂質土で，ＳＤ02同様に暗灰色の包含層に近似する。

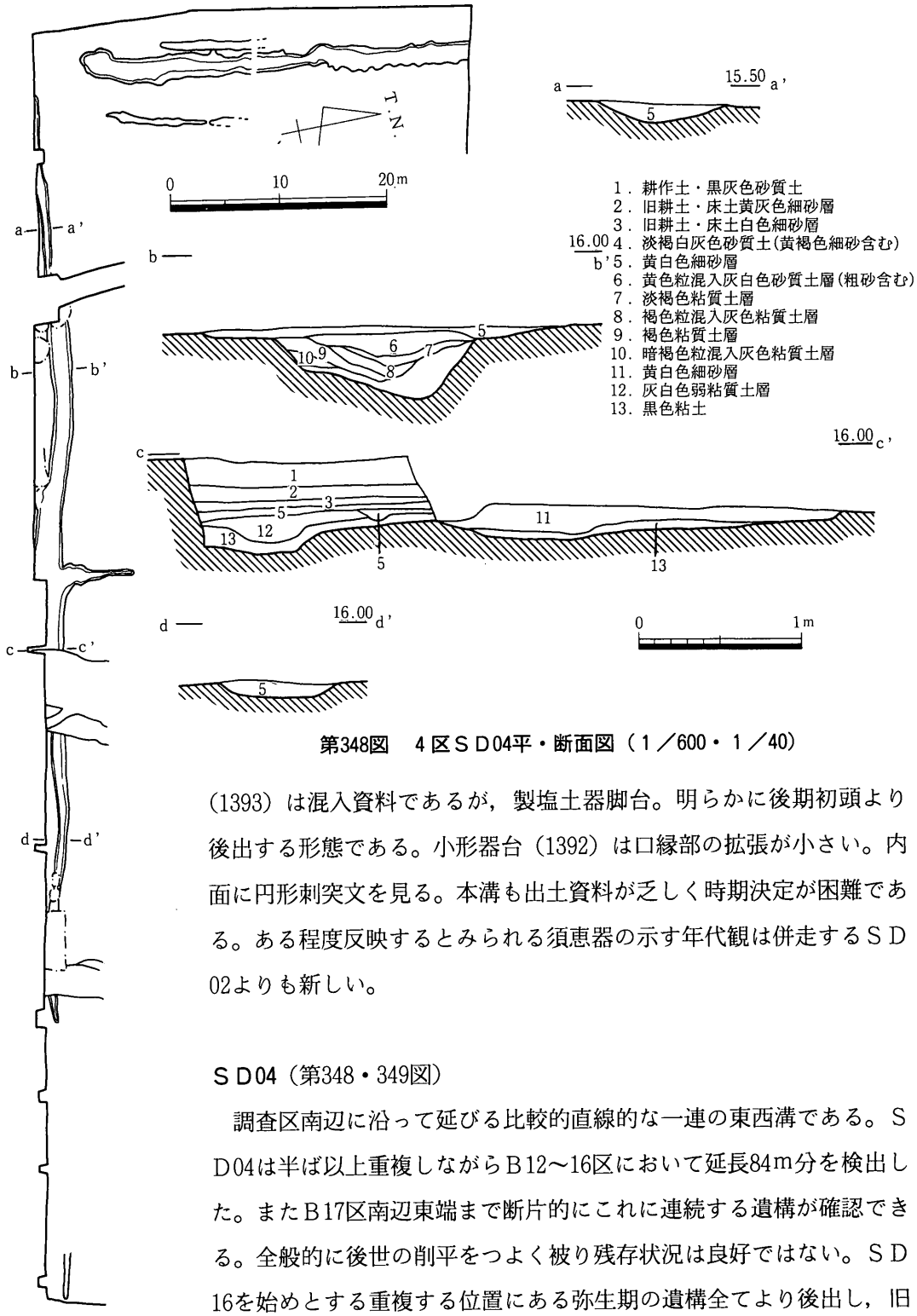
出土遺物中に，少量であるが平安時代の須恵器片を含む。本溝は南北溝ＳＤ02と共存するか，近接した時期の所産と考えてよいであろう。

（1394）は須恵器坏，小片だが薄い均質的な器壁から平安期まで下る可能性が高い。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1392	小形器台	20.0			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して開く。端部は外方に摘み出すと共に上方も突出する。端面・外面に凹線、口縁部内面円形刺突文	1/8	角閃石極多、石英等・雲母
1393	製塩土器			3.9	細・極多、中・普	にぶい黄色	脚部は低いがよく張る。底面充塡部は上下よりよくｶﾀﾞつける。外面ﾀﾃﾐﾘ。	全周	角閃石極多、石英等
1394	須恵器坏			10.8	細・普	淡黄色	薄作りで体底部境に鈍い稜を持ち、よく開く	1/6	石英等

第347図　４区ＳＤ03出土遺物（１／４）



第348図　4区ＳＤ04平・断面図（1／600・1／40）

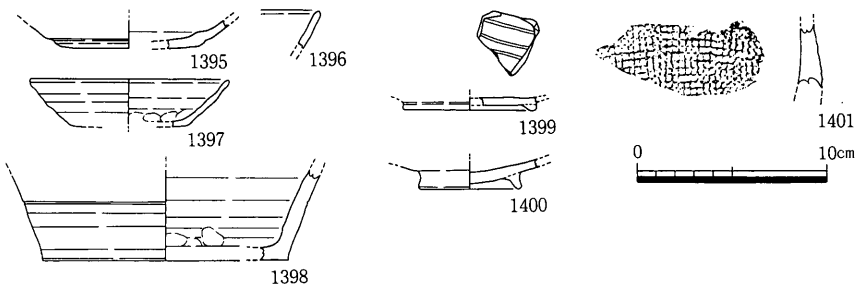
(1393) は混入資料であるが，製塩土器脚台。明らかに後期初頭より後出する形態である。小形器台（1392）は口縁部の拡張が小さい。内面に円形刺突文を見る。本溝も出土資料が乏しく時期決定が困難である。ある程度反映するとみられる須恵器の示す年代観は併走するＳＤ02よりも新しい。

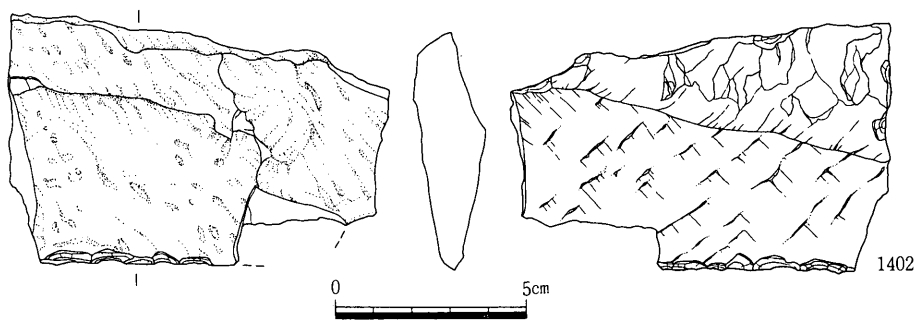
ＳＤ04（第348・349図）

調査区南辺に沿って延びる比較的直線的な一連の東西溝である。ＳＤ04は半ば以上重複しながらＢ12～16区において延長84m分を検出した。またＢ17区南辺東端まで断片的にこれに連続する遺構が確認できる。全般的に後世の削平をつよく被り残存状況は良好ではない。ＳＤ16を始めとする重複する位置にある弥生期の遺構全てより後出し，旧耕作土層・床土層と同質の埋土を持つ近世以降の土坑群よりは確実に

先行する。

ＳＤ04は断面から判断する限り，２段階の溝の重複で，新しい段階の溝がＢ12～16区まで比較的直線的に延びる。西端は中世南北溝ＳＤ02南方で途切れる。前述した削平により溝の規模は一様ではないが，中央部で幅0.8～1.1m，深さ0.15ｍを確認できる。埋土は灰白色細砂を主体とし，旧耕作土・床土に類似する淡黄色粒を混入する。Ｂ14区で，西端から45ｍの位置で，本溝と直交し北に延びる小分流を延長６ｍ分確認している。またＢ14区東半部では溝南辺が膨らむ。調査範囲の関係で十分確認できていないが，同区東端の小トレンチの所見（セクションＣ）では少なくとも，南北幅３ｍに達する。この付近で南に延びる分流が想定できるかもしれない。下層溝はＢ13・14区で延長23m分を確認しているが





挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1395	須恵器坏			7.8	細・少	灰白色	わずかながら円盤状に突出した底部。内外面回転ﾅﾃﾞ。内面火襷	1/2	石英等少
1396	須恵器坏				細・少	灰色	口縁端部は丸く納める。		石英等少
1397	土師器坏	10.4	2.5	6.0	細・少	灰白色	強く外傾して直線的に開き端部丸く納める。底部篦切り、体部回転ﾅﾃﾞの凹凸顕著。	1/3	石英等・赤色粒少
1398	須恵器壺			14.0	中・少	緑灰色	底部ﾍﾗ切り、体部下端外面回転ｹｽﾞﾘで、叩き目残さない。	1/4	石英等少
1399	瓦器椀			6.8	細・極少	灰色	断面蒲鉾形の低い高台。見込み部に暗文。	1/8	角閃石極多（含粗粒）
1400	黒色土器Ｂ類椀			5.1	中・少	明褐灰色　暗褐色	やや踏張った高めの高台	1/2	石英等少
1401	亀山焼　甕				細・少	暗灰色　灰色	瓦質焼成。外面細かい格子叩き目、内面回転ﾅﾃﾞ		石英等少

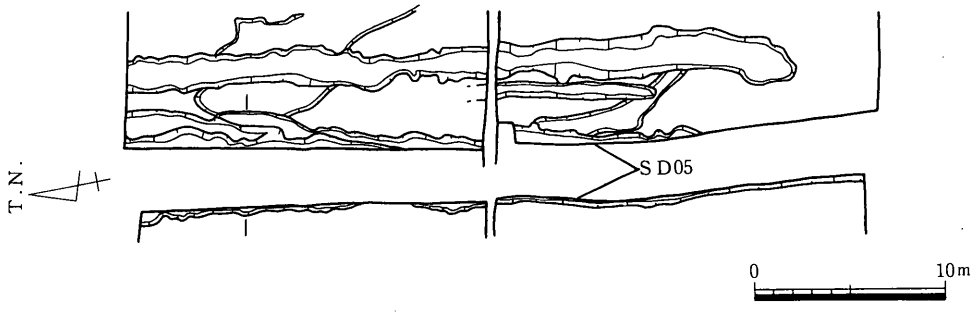
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1402	打製石庖丁？	10.1	6.6	1.7	130.9	安山岩系	背部二次調整無し	折損

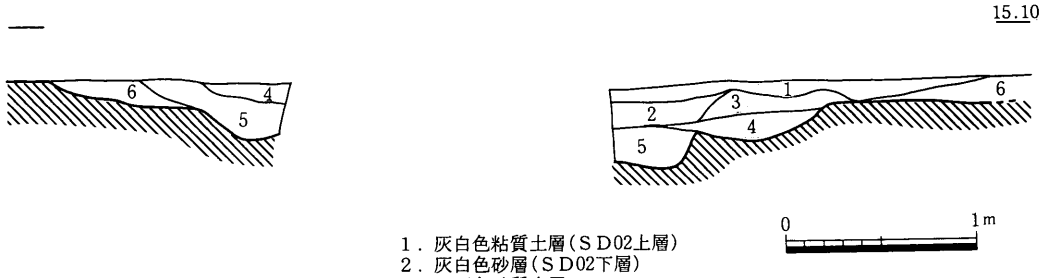
第349図　４区ＳＤ04出土遺物（１／４・１／２）

その東西では南にゆるく湾曲し調査区外に延びるようである。同溝は幅0.85～1.2mで，深さ0.25m前後残存し，埋土は灰色～灰白色の粘質土である。下層溝は床面レベルが標高15.25～15.45m，上層溝は同じく15.3～15.65mとなり，その勾配から共に西流が想定できる。

先行する弥生期の遺構を多く切って穿たれているため，その時期の資料が多く混入するが少数中世前半期まで下る資料を含む。それらの混入資料は細片が多いため，ここでは土器については古代以降の資料に限って図示した。(1395•1396) は須恵器坏。薄作りの前者では鈍く底部が突出して器表に火襷を認める。9～11世紀代に納まる資料であろう。(1397) は土師器坏。底部外面に篦切り痕を残す。須恵器瓶底部 (1398) は体部外面の叩き目と底部形状より8～10世紀代と考えられる。これに対して亀山焼甕 (1401)，瓦器椀 (1399) は13世紀代以降に下る可能性が高い。図示した (1402) は安山岩系の板材で下縁に細かい剥離が連続する。形状・寸法から石庖丁の可能性を考えたい。

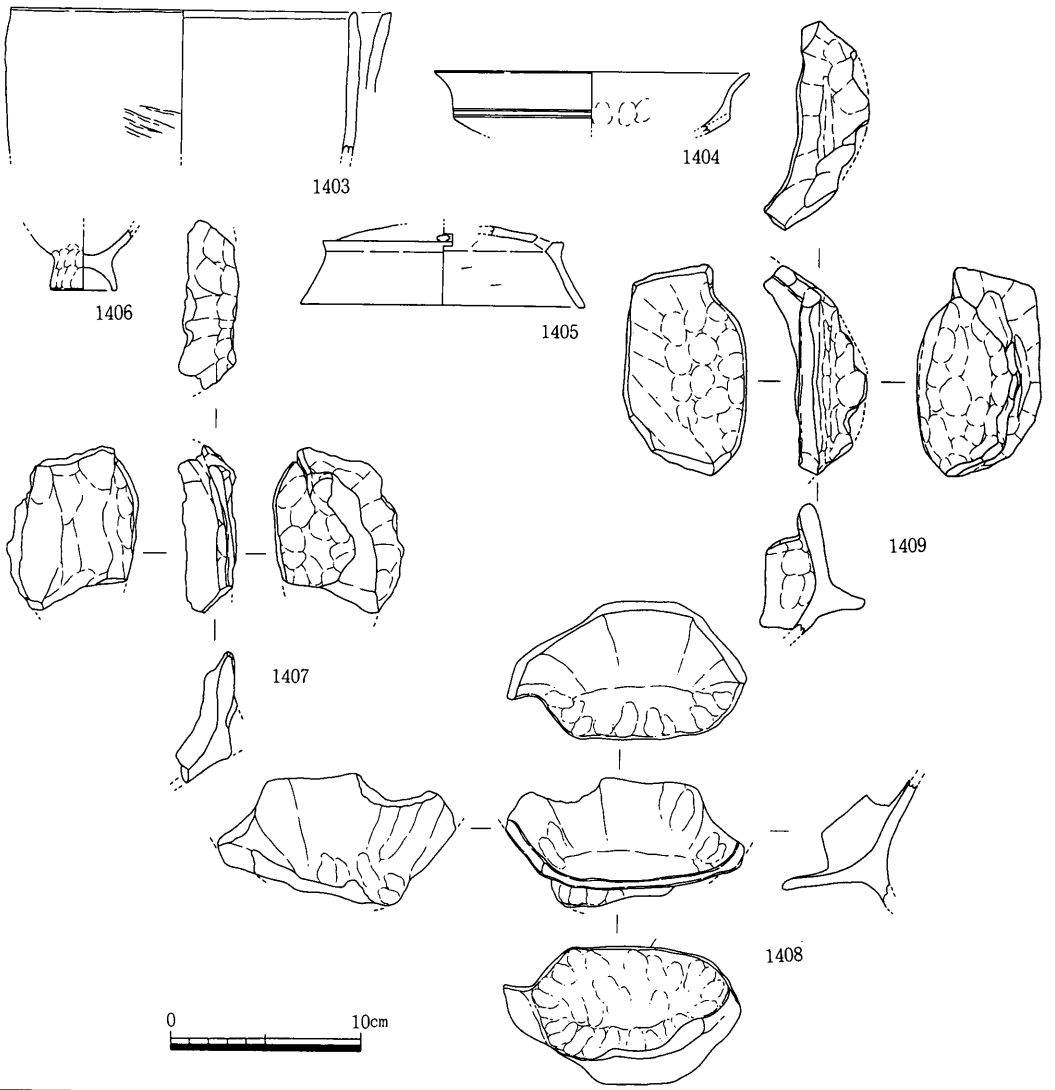
なお本溝は，直交する南北溝ＳＤ02同様に香川郡条里の坪界想定線上にほぼ位置するし，4条16里11坪・14坪界に相当する。





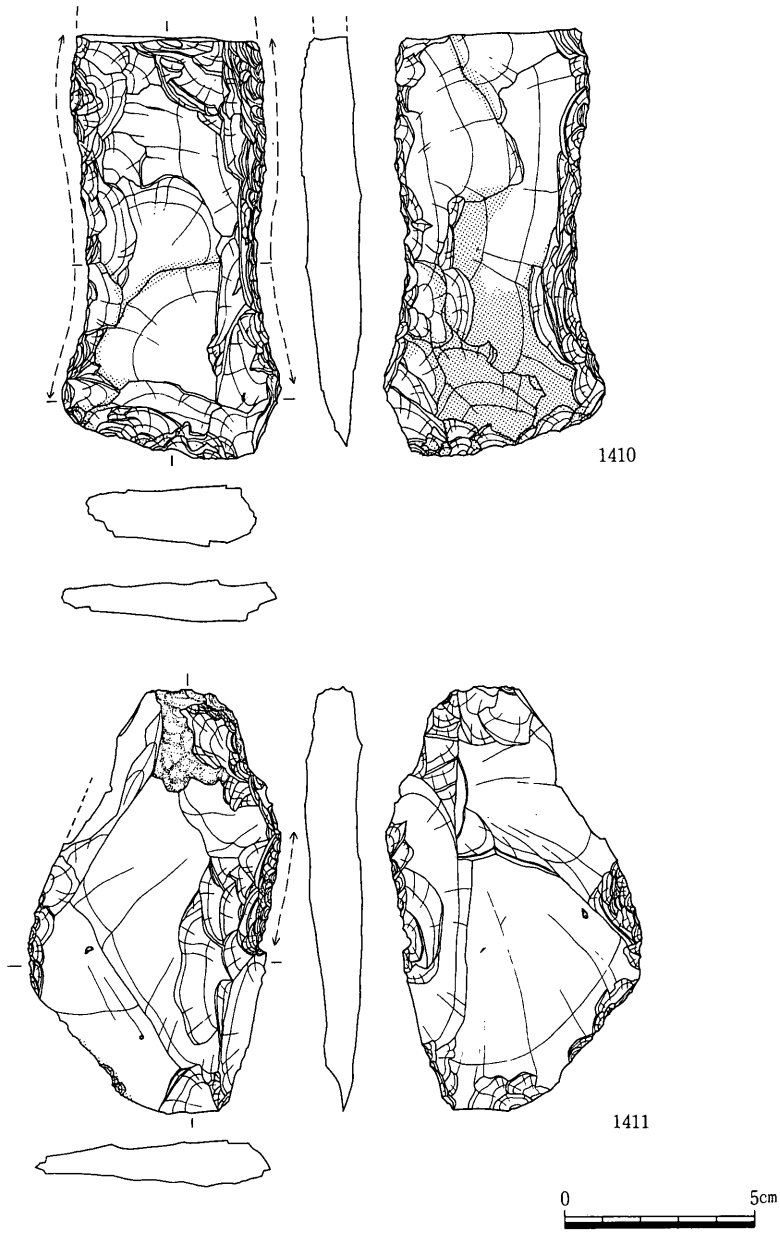
1．灰白色粘質土層（ＳＤ02上層）
2．灰白色砂層（ＳＤ02下層）
3．黒灰色砂質土層
4．黄白色細砂層
5．灰白色粘質土層
6．黒色粒混じり黄白色細砂層

第350図　4区ＳＤ05平・断面図（1／400・1／40）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1403	大形鉢	18.1			細・極多、中・多	にぶい黄褐色	口縁端部は上方に張り気味に四角く納める。外面叩き目残る。	1/8	角閃石極多、石英等多　赤色顔料
1404	高坏	16.6			細・極多、中・普、粗・普	にぶい黄色	中位で強く屈曲して沈線２条。上半部は強く外反して端部は尖る。	1/10	角閃石極多（含粗粒）
1405	装飾高坏			14.9	細・極多	橙色	脚裾部有段。段部小突帯。脚端は反り気味に四角く納める。内面横ｹｽﾞﾘ、上部に円形透かし。	1/8	角閃石極多、石英等多
1406	製塩土器			3.4	細・極多	黄褐色	内外を強く押さえつけた円筒形低脚台。脚端は丸く納める。製塩土器の可能性有るが調整丁寧。	全周	角閃石極多、石英等、赤色粒
1407	把手付広片口皿				細・極多、中・普	黄褐色	立ち上がり部。把手部は剝落。立ち上がり部は外反して伸び、肥厚気味に尖る。立ち上がり部外面指押さえ。体部外面縦ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、雲母・石英等　赤色顔料
1408	把手付広片口皿				細・極多、中・少	淡橙色	立上がり部は台形状に外傾気味に大きく立ち上がる。把手部はやや薄く、強く耳朶状に突出する。内面調整不明、外面ｹｽﾞﾘ		角閃石極多、石英等少、赤色顔料
1409	把手付広片口皿				細・極多	明黄褐色	把手部。半円形に伸びた把手部端は丸く納め、指押さえ顕著。低い台形状に突出した立ち上がり部はやや内湾気味に伸びて肥厚気味に丸く納める。指押さえ。体部縦ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、雲母多　赤色顔料

第351図　４区ＳＤ05出土遺物１（１／４）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1410	石鏃？	10.6	5.8	1.6	129.2	サヌカイト	側縁潰し顕著　右面摩耗顕著　短冊状で特異	基部欠損
1411	石鏃	11.0	6.7	1.5	108.8	サヌカイト	刃部調整粗雑　左面刃部摩耗微弱	基部折損

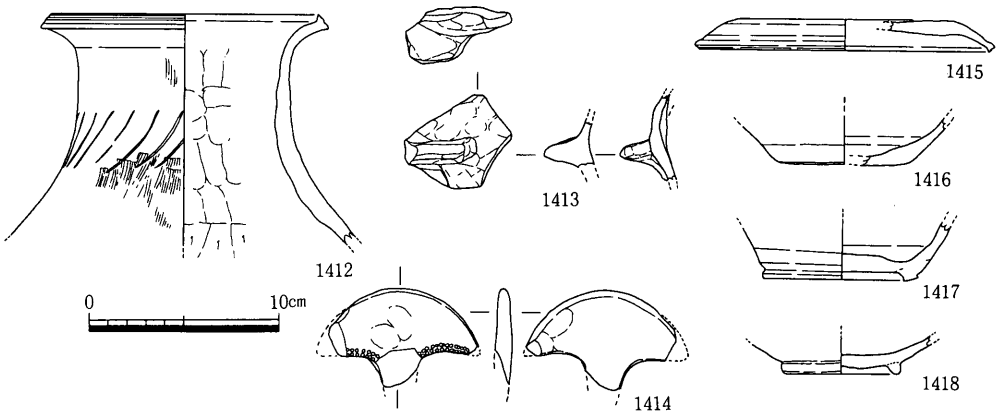
第352図　4区ＳＤ05出土遺物２（１／２）

ＳＤ05（第350～352図）

Ｂ・Ｃ11～12区で検出した南北方向の溝状遺構である。現行南北水路と完全に重複する。最大幅5.5mを測るが，深さは現行水路との重複により不明。また断面観察によって現耕作土直下②旧耕作土層中からの掘り込みが確認できる。したがって東側の中世南北溝ＳＤ

02に後出することは明らかである。埋土は②と同質の黄灰色細砂を主体とする。本溝はSD08を始めとする多くの弥生時代遺構を破壊して形成されているためその時期の遺物が多く混入している。却って近世以降の遺物はわずかな陶磁器細片しか認められないが，掘り込み面・埋土から近世以降の所産であることは疑いない。

（1403）は深めのおそらくバケツ形を呈する大形鉢で，やや小振りである。この形態によく見るように口縁部は肥厚拡張せずに単純に斜めに切り落としたように納める。脚台の小形化した製塩土器（1406），強い外反口縁の高坏（1404）は後期中葉に下る後出的な形態である。装飾高坏脚（1405）も脚端部がやや発達し，後期初頭でも新しい様相を示す。把手付広片口皿（1409）は把手部がやや発達した形態をもつ。石鍬（1410）は刃部が直線的で，中位がくびれた板状鉄斧に似たやや特異な形態である。（1411）は刃部の二次調整も微弱でかなり歪な形状だが，先端部摩耗が観察されるので石鍬とした。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1412	広口壺	14.0			細・極多、中・多	黄褐色	ほぼ直立する頸部から口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は小さく上下に摘み出して端面凹線。頸部外面縦ﾊｹ後斜線文、内面頸部指押さえ、体上部まで縦ｹｽﾞﾘ。	1/5	角閃石極多、石英等多
1413	把手付広片口皿				細・極多	明黄褐色	やや内湾する体側面に小振りの耳朶状把手を水平に貼る。指押さえ。把手付広片口皿側縁の鰭状把手の可能性。		角閃石極多、雲母多、赤色粒
1414	分銅形土製品				細・極多	明褐色	抉り部以下を欠損。抉り部縁辺に小刺突文列2段。	1/2	角閃石極多
1415	須恵器坏蓋	15.2	1.7	11.2	細・極少	灰色	偏平な坏蓋。端部は小さく下方に摘み出す。外面篦切り後回転ﾅﾃﾞ。内面回転ﾅﾃﾞ。	1/6	赤色顔料
1416	須恵器坏			7.0	中・多	灰白色	底部縁辺に強い稜を持ち立ち上がる。外底面ﾍﾗ切り後回転ﾅﾃﾞ、内外面回転ﾅﾃﾞの凹凸顕著	1/3	石英等多
1417	須恵器壺			8.1	細・少	青灰色	底部縁辺に低い高台を付す。回転ﾅﾃﾞ	2/3	石英等少
1418	黒色土器A類椀			5.7	・極少	黒色　灰白色	断面半円形のやや踏ん張った高台。	3/5	赤色顔料

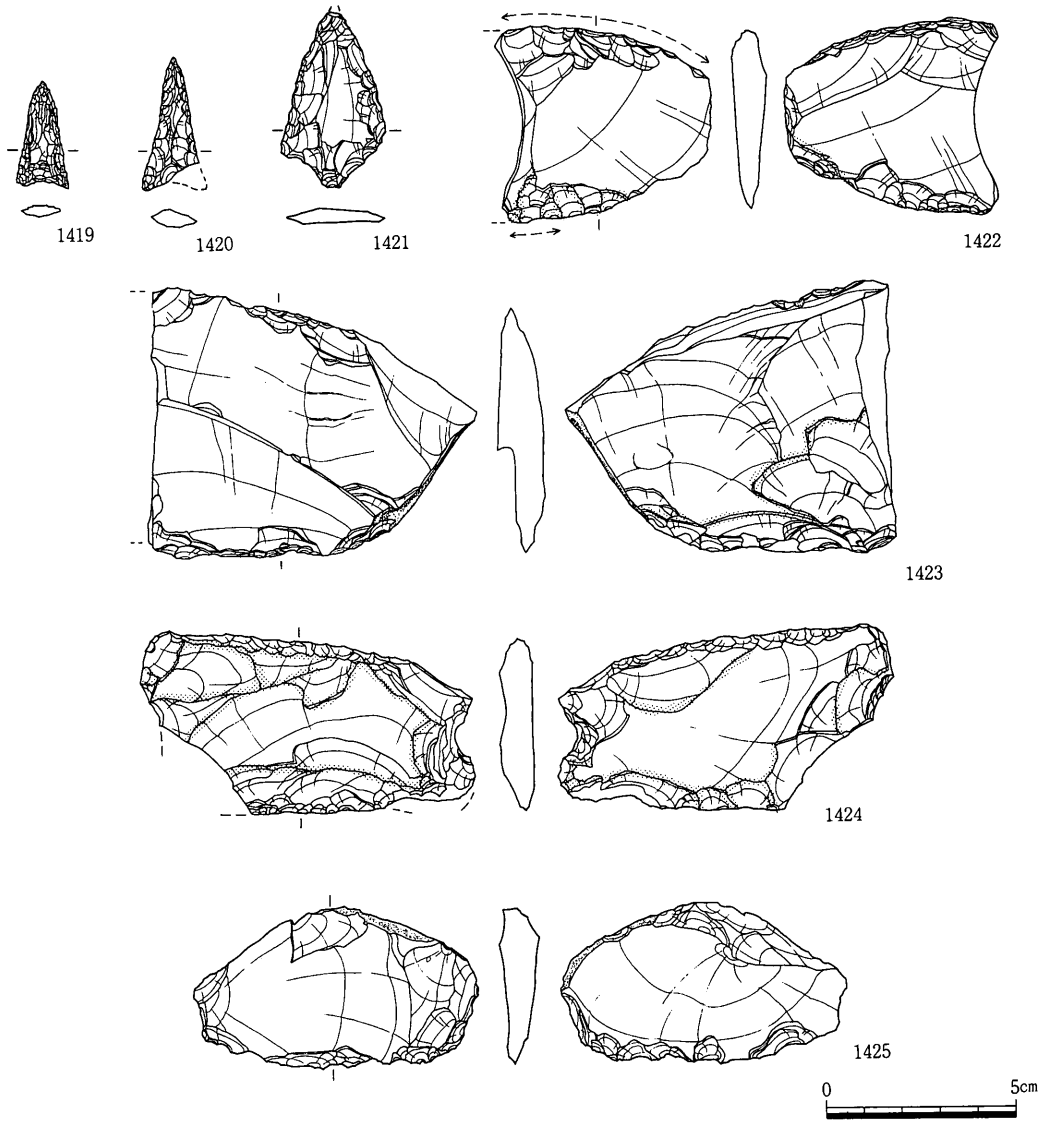
第353図　4区包含層出土遺物1（1／4）

包含層（第353～355図）

ここで，包含層とした暗灰色粘質土・シルト層の堆積状況などは基本層序で説明した。

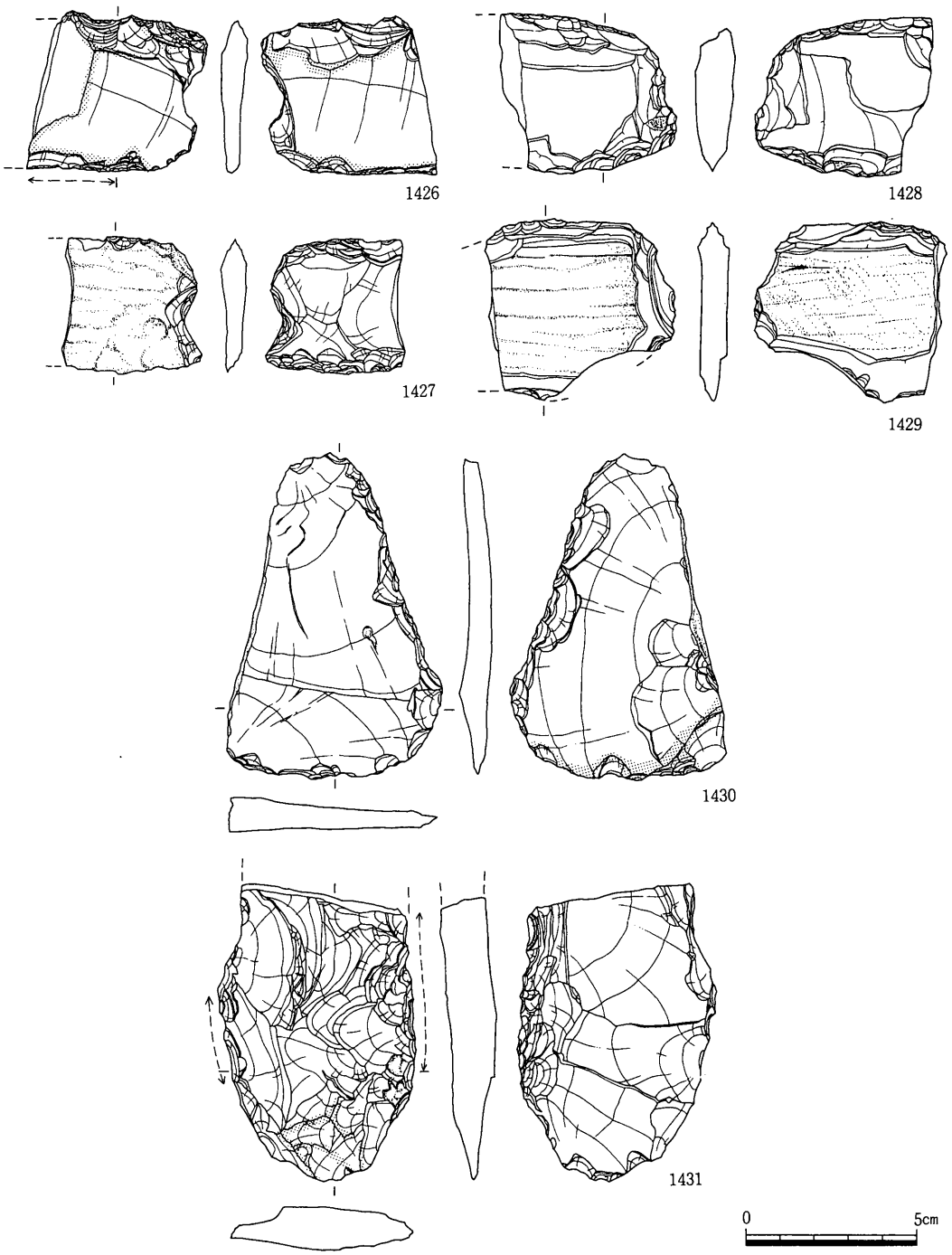
弥生時代遺構を削平・撹乱して堆積するので，弥生後期資料を一定量まじえているが，本層の形成時期を示唆するのは古墳時代後期～平安時代の資料であろう。

壷（1412）は頸部が発達した形態で，斜線文をめぐらす。後期初頭でも新しい様相である。(1413）は小片だが，形状から把手付広片口皿側縁部と判断した。中位に水平方向の



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1419	石鏃	2.5	1.3	0.3	1.0	サヌカイト	凹基	
1420	石鏃	3.4	1.4	0.4	1.1	サヌカイト	凹基	一部折損
1421	石鏃	4.4	2.7	0.4	4.8	サヌカイト	有茎	
1422	スクレイパー	5.6	4.9	0.9	29.2	サヌカイト	刃部摩耗微弱	折損
1423	スクレイパー	8.6	7.1	1.3	94.6	サヌカイト	右面稜部摩耗微弱	折損
1424	打製石庖丁	8.6	4.8	0.9	51.5	サヌカイト	稜部摩耗	折損
1425	スクレイパー	7.6	4.1	1.1	32.4	サヌカイト	刃部調整粗雑	

第354図　4区包含層出土遺物2（1／2）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1426	打製石庖丁	4.8	4.4	0.9	24.4	サヌカイト	刃部調整粗雑　磯部摩耗	折損
1427	打製石庖丁	4.1	4.0	0.8	17.1	サヌカイト	背・刃部片面調整	折損
1428	打製石庖丁	4.8	4.4	1.3	38.9	片岩		折損
1429	打製石庖丁	5.6	5.2	0.9	36.5	片岩		折損
1430	石鏃	9.4	6.2	1.2	58.1	サヌカイト	二次調整少　右面先端部摩耗微弱	
1431	石鏃	8.3	5.7	1.3	80.9	サヌカイト	両側縁潰し　左面先端磯部摩耗微弱	基部折損

第355図　4区包含層出土遺物3（1／2）

舌状突起（把手？）を付す。本遺跡の把手付広片口皿で，側縁部にこのような突起を付す例は他にない。（1414）は分銅形土製品。抉り部縁辺に小刺突文列2条を配するだけで，加飾に乏しい。

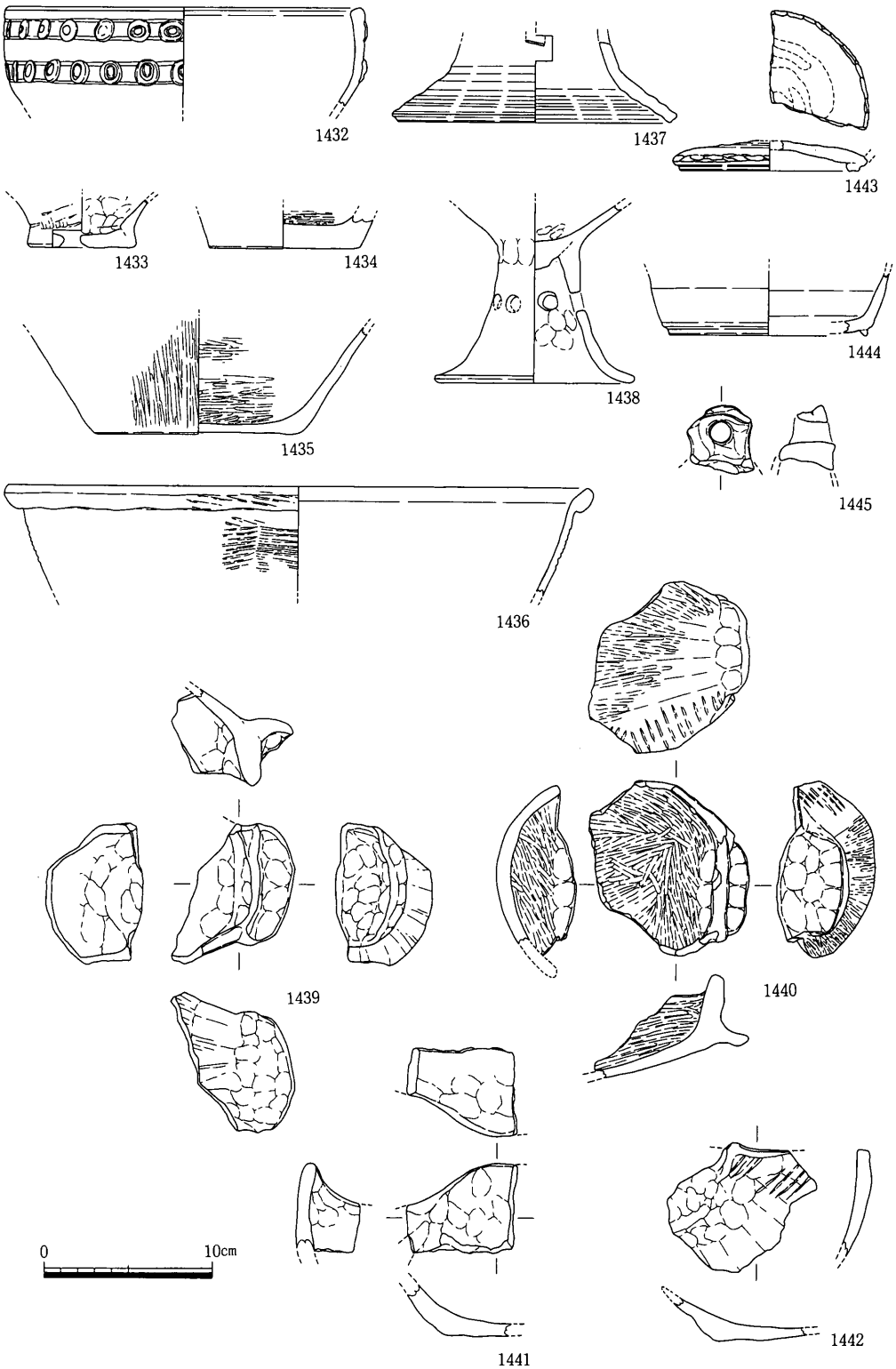
須恵器坏蓋（1415）は端部の形状などから7世紀末に位置付けられる。須恵器坏（1416）は底部縁辺部がやや分厚くなる形状から7世紀代に比定できる。低い高台を付す須恵器壷（1417）は8～9世紀前半の幅に収め得る。黒色土器A類の高台付椀（1418）は高台部の形状から12～13世紀前半に位置付けられるであろう。（1419・1420）は細身の凹基式。（1420）は調整剥離が深く丁寧である。

有茎式（1421）は扁平で縁辺部からの調整剥離は浅い。（1422・1423・1425）は短辺の抉りが見られなかったり，背部と刃部の作り分けが明確でないことからスクレイパーとした。打製石庖丁（1423）は比較的大きな剥離で，両縁辺の薄化を図ってから，背部・刃部を最終的に作り出す。刃部の最終調整は片面加工である。これに対して（1426・1427）の縁辺部作出はやや粗雑である。（1428）は片岩製打製石庖丁としてはかなり肉厚である。（1429）は薄い片岩礫の縁辺部を成形するだけで作り出している。石鏃（1430）は横長剥片を素材とし特に刃部では調整剥離をほとんど加えていない。（1431）は側縁部の調整剥離がかなり丹念に行われ，舌状を呈する。

その他の遺物（第356～360図）

機械掘削・遺構面精査およびトレンチ調査時等に検出した資料で，特定の層位・遺構への帰属を明確にし得なかった資料をここに一括した。

（1432）は口縁部を鈍く肥厚させ，外面を細い凹線と円形浮文で飾る。鉢で，このような加飾は本遺跡では他例がない。（1433）は壷もしくは甕底部。焼成後の穿孔がある。底部穿孔例は少ない。（1434）（1435）は大形鉢底部で内面を緻密に磨く。（1435）のような薄作りの底部はバケツ形の深目の形態に多い。大形鉢（1436）は口縁部に幅広い肥厚部を持つ形態で類例に乏しい。外面には叩き目をとどめる。小形器台（1437）は肥厚せずに開く裾部の内外面に鈍い凹線を持ち，中位に長方形透かしを穿つ。円錐形脚部の高坏（1438）は脚中位にやや大形の円形透かしを穿つ。脚端の外反部分が伸びている点はこの系統では新しい様相といえる。後期前葉まで下らせてよいかもしれない。把手付広片口皿（1439）（1440）はやや発達した形態の把手部だが，立上り部は低い。（1441）（1442）は明瞭な把手部を作り出さず立ち上がり部下縁の鈍い突起にとどまる形態。



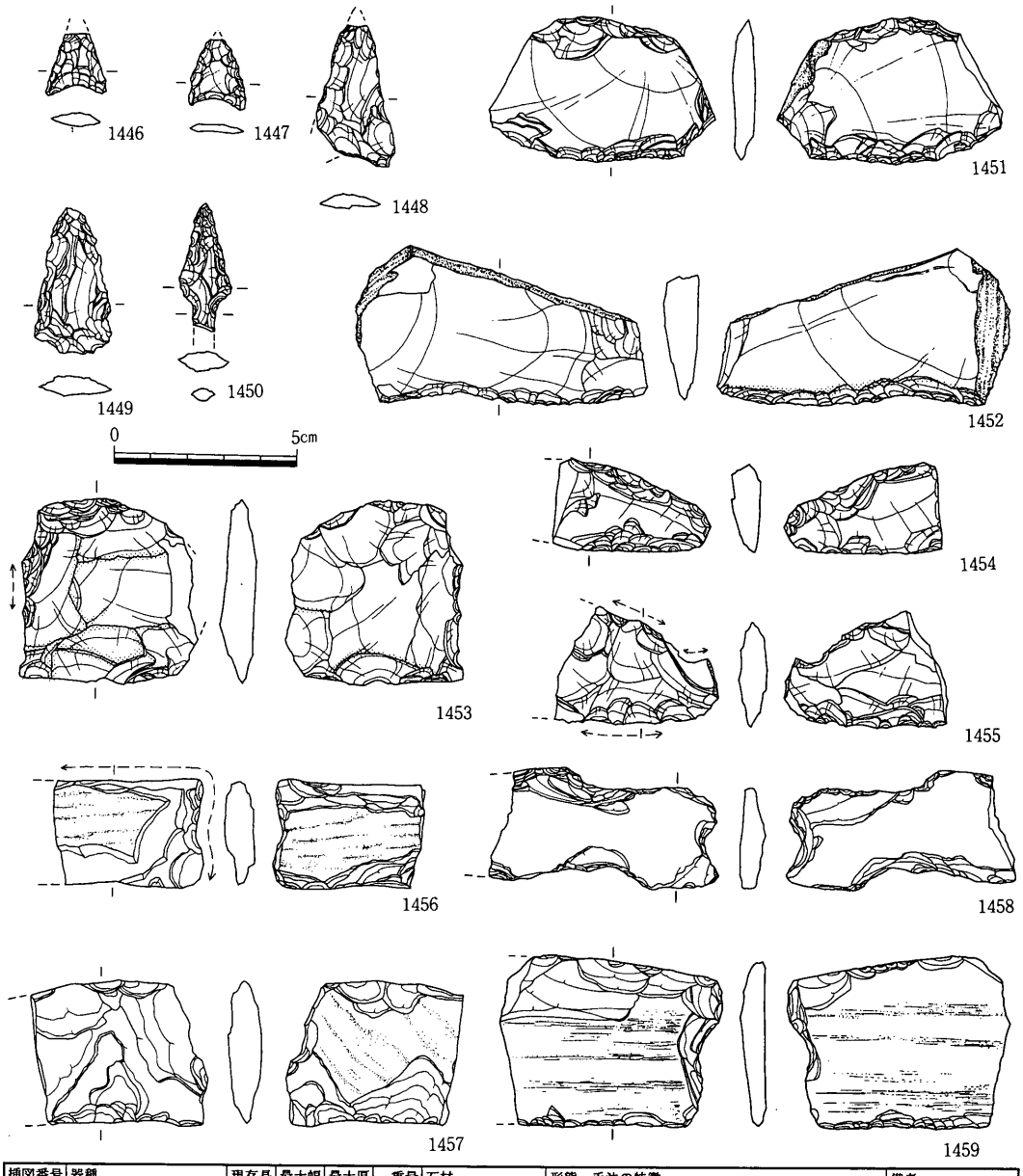
第356図　4区その他遺物1（1／4）

挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1432	鉢	20.8			細・極多、中・普	黄褐色　灰黄色	縁部はほぼ直立して端部は肥厚気味に丸く納める。外面沈線４条・円形浮文２段。	1/6	角閃石極多、石英等
1433	？			6.0	細・極多	明赤褐色　褐灰色	やや突出気味の底部。外面縦ﾊｹ叩き目残る。内面ｹｽﾞﾘ後指押さえ。底部中央に焼成後穿孔	1/2	角閃石極多、雲母・石英等
1434	鉢			8.9	細・極多	にぶい黄褐色	底部はやや分厚い。内面横ﾐｶﾞｷ、外面ﾅﾃﾞ。	全周	角閃石極多　赤色顔料
1435	大形鉢			12.0	細・極多、中・普、粗・少	にぶい黄橙色	底部は薄い。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	3/8	赤色顔料
1436	大形鉢	34.2			細・極多	灰黄色	口縁部は小さく屈曲。端部は肥厚して四角く納める。外面叩き目残る。内面横ﾅﾃﾞ。	1/16	角閃石極多　赤色顔料？
1437	小形器台	16.2			細・少、中・多	褐灰色	脚裾部は外反して大きく開く。端部は四角く納める。裾部凹線。軸部に長方形透かし。	1/7	石英等多、角閃石少　搬入品？
1438	脚			11.4	細・極多、中・多	にぶい黄橙色	脚部は緩やかに開き裾部は鈍く屈曲して短く開く。端部は丸く納める。中位に２孔１対の大形円形透かし３方。円盤充塡	1/4	角閃石極多、石英等多
1439	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄褐色	把手部。耳朶状に発達した把手部は強く内湾する。低い台形状に突出した立ち上がり部はやや外傾して分厚い。把手部・立ち上がり部指押さえ、体部外面縦ｹｽﾞﾘ後ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多　赤色顔料
1440	把手付広片口皿				細・極多、中・少	灰黄褐色	把手部。把手部は短く半円形に開き、指押さえ。低い半円形に突出した立ち上がり部はやや外傾して伸び、端部は四角く納める。指押さえ、体部外面縦ｹｽﾞﾘのち縦ﾐｶﾞｷで、叩き目残る。内面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、石英等少　赤色顔料
1441	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄褐色	立ち上がり部。把手部は剝落。低い半円形に突出する立ち上がり部はやや内湾気味に伸び端部は丸く納める。指押さえ。		角閃石極多、雲母多、石英等　赤色顔料
1442	把手付広片口皿				細・極多	明黄褐色	把手部。把手部は痕跡的な立ち上がり部下端の隆起にすぎない。立ち上がり部は強く外傾し、外面指押さえ。側縁端部は四角く納める。体部外面縦ﾅﾃﾞで、叩き目残る。		角閃石極多、石英等多　赤色顔料
1443	須恵器転用硯			10.8	中・極少	緑灰色	須恵器坏再利用の硯。坏底面のみ残し、立ち上がり部を完全に打ち欠く。見込み部摩耗。		石英等極少
1444	須恵器坏			11.7	中・少	青灰色	底部から強く屈曲して体部は立ち上がる。縁辺のやや内側に小振りの高台を付す。回転ﾅﾃﾞ。	1/6	石英等少
1445	飯蛸壺				細・多	浅黄橙色	体部と明瞭に区別される吊り手部を持つ。指押さえ顕著	全周	石英等多

第356図観察表

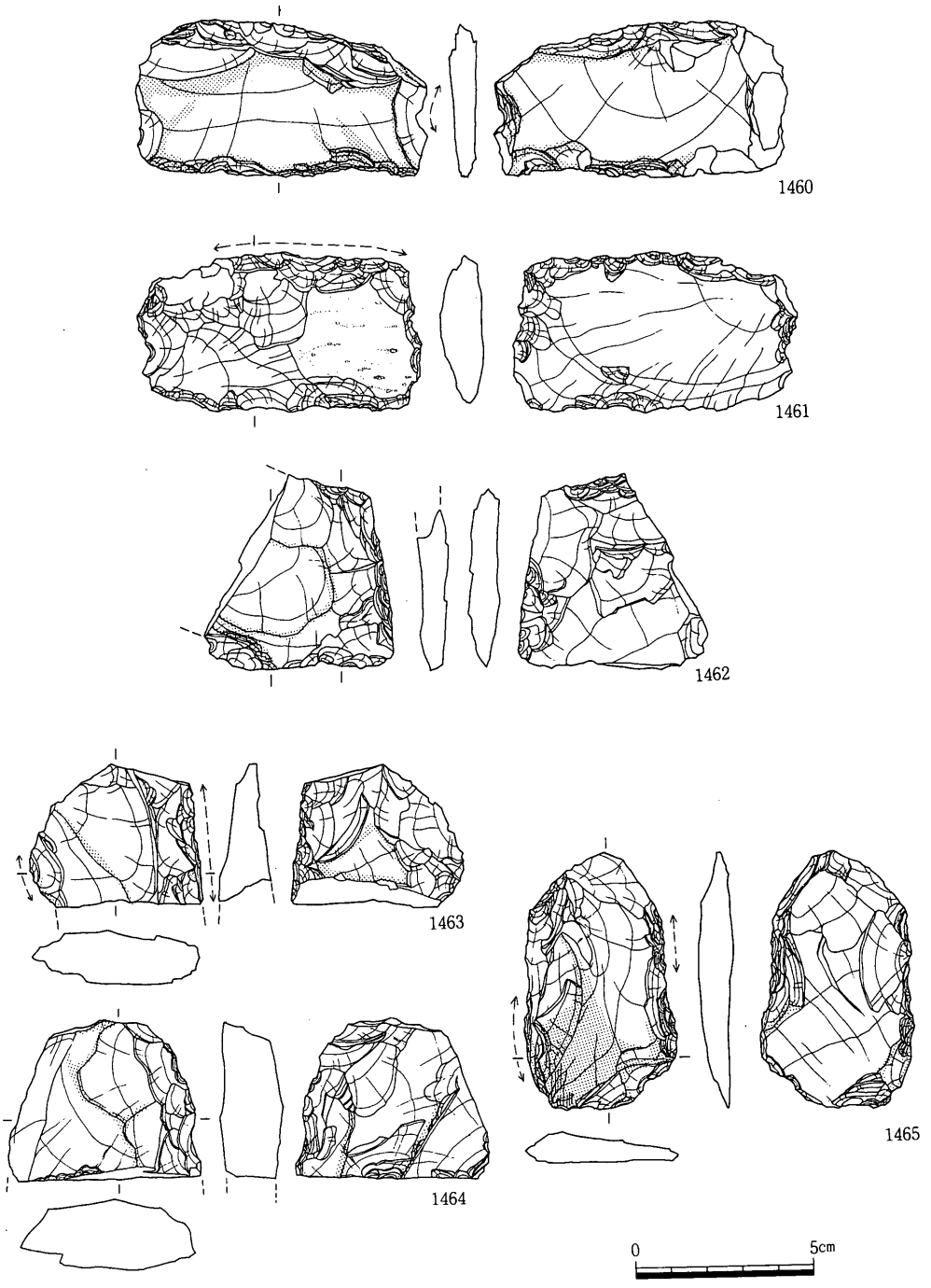
（1443）は須恵器坏転用の硯。高台付坏の立上がり部を打ち欠いて，内底面を硯面とする。高台の形状から８～９世紀初頭に位置付けられる。須恵器坏（1444）も同様の時期に比定できる。（1445）は土師質飯蛸壺の吊り手部である。

石鏃では大形・小形共に凹基式，有茎式が見られる。（1450）は細身の有茎式で肉厚。（1451）は木葉形の小剥片の縁辺部に浅い調整剥離を加えている。石鏃と見るには大形すぎるのでスクレイパーに分類した。（1452・1454・1455）は石鎌状のスクレイパーで，（1452）は背部は自然面のまま，（1454）では明瞭な背潰し加工がある。片岩製打製石庖丁（1456～1459）はいずれも薄い自然礫の縁辺部を整形しただけで作り出す。（1457）は変成が進んでおらず，むしろ粘板岩に近い石材。サヌカイト製打製石庖丁（1460～1462）はいずれも短辺の抉りが明確でない形態。（1460）は縁辺部調整がやや粗雑。（1461・1462）は刃部調整は片面加工。（1465）は小形の石鏃。（1463・1464・1466）は石鏃基部片。（1464）は大形剥片を打割して素材とし側縁に折り取り面を残す。（1468）は両側縁に明瞭な潰し



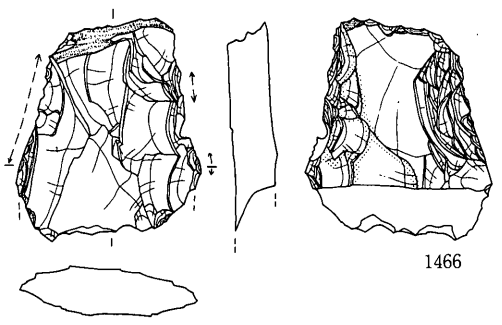
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1446	石鏃	1.7	1.6	0.3	0.7	サヌカイト	凹基	先端部折損
1447	石鏃	2.0	1.6	0.3	0.8	サヌカイト	凹基	
1448	石鏃	3.6	2.1	0.4	3.1	サヌカイト	凹基	一部折損
1449	石鏃	3.9	2.2	0.5	4.4	サヌカイト	有茎　茎部折損	茎部折損
1450	石鏃	3.5	1.4	0.5	1.9	サヌカイト	有茎	茎部折損
1451	スクレイパー	6.1	3.7	0.7	21.2	サヌカイト		一部折損
1452	スクレイパー	7.8	4.1	1.5	47.7	サヌカイト	右面刃部摩耗微弱	
1453	スクレイパー	4.9	5.0	1.0	27.4	サヌカイト	鋭部摩耗微弱	
1454	スクレイパー	4.4	2.5	0.8	9.2	サヌカイト		折損
1455	スクレイパー	4.5	3.3	0.8	13.8	サヌカイト		折損
1456	打製石庖丁	4.1	2.9	0.8	16.6	片岩		折損
1457	打製石庖丁	4.8	4.0	0.9	22.3	片岩		折損
1458	打製石庖丁	6.2	2.9	0.6	16.2	片岩	刃部内湾化	折損
1459	打製石庖丁	5.9	4.7	0.8	32.5	片岩		折損

第357図　4区その他遺物2（1／2）

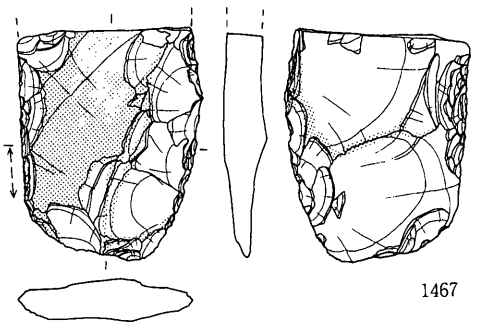


挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1460	打製石庖丁	8.2	4.1	0.8	38.8	サヌカイト	摩耗	折損
1461	打製石庖丁	7.8	4.3	1.2	60.9	サヌカイト	刃部片面調整　背部潰し	
1462	打製石庖丁	5.3	5.5	1.0	32.4	サヌカイト	左面稜部摩耗微弱	折損
1463	石鏃	3.0	4.9	1.5	32.1	サヌカイト	両側縁潰し　稜部摩耗	基部片
1464	石鏃	4.5	5.5	1.7	54.6	サヌカイト	稜部摩耗	基部片
1465	石鏃	7.2	4.2	1.0	39.4	サヌカイト	左面摩耗顕著・刃部擦痕	

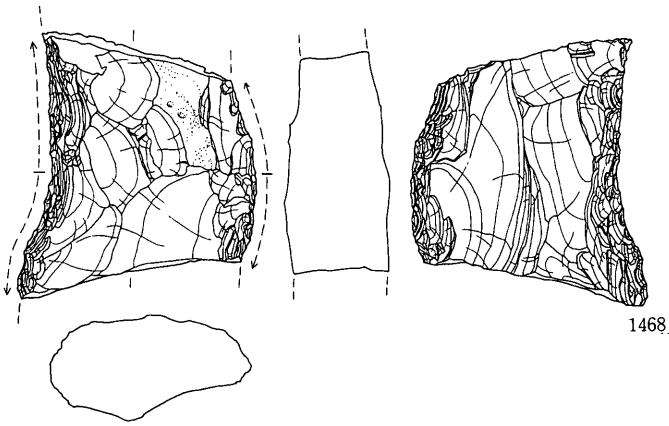
第358図　4区その他遺物3（1／2）



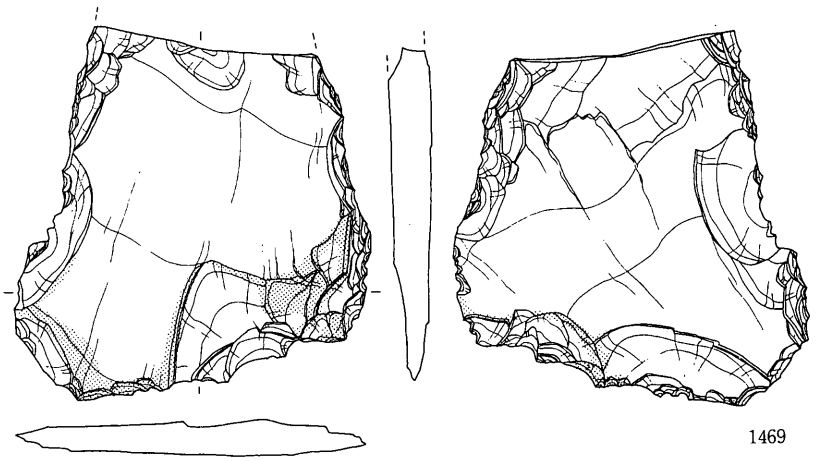
1466



1467



1468

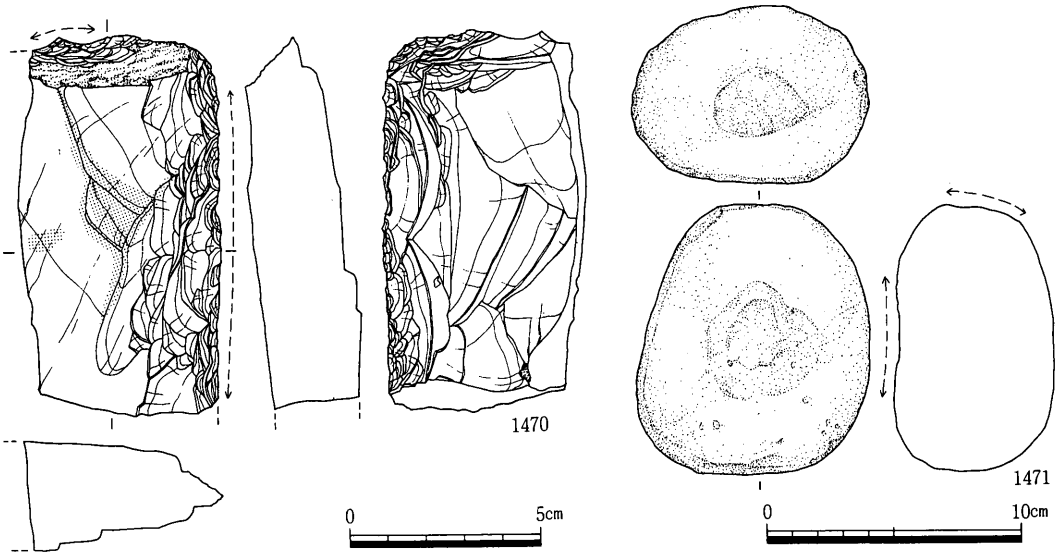


1469

0 5cm

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1466	石鏃	5.8	4.9	1.2	38.1	サヌカイト	両側縁潰し　右面抉部摩耗	先端部折損
1467	石鏃	5.9	4.7	1.1	40.1	サヌカイト	刃部片面調整　左面摩耗顕著	基部折損
1468	石鏃	6.7	5.9	2.7	138.2	サヌカイト	両側縁潰し	両端折損
1469	石鏃	9.8	9.4	1.1	110.5	サヌカイト	先端部摩耗顕著	基部折損

第359図　4区その他遺物4（1／2）



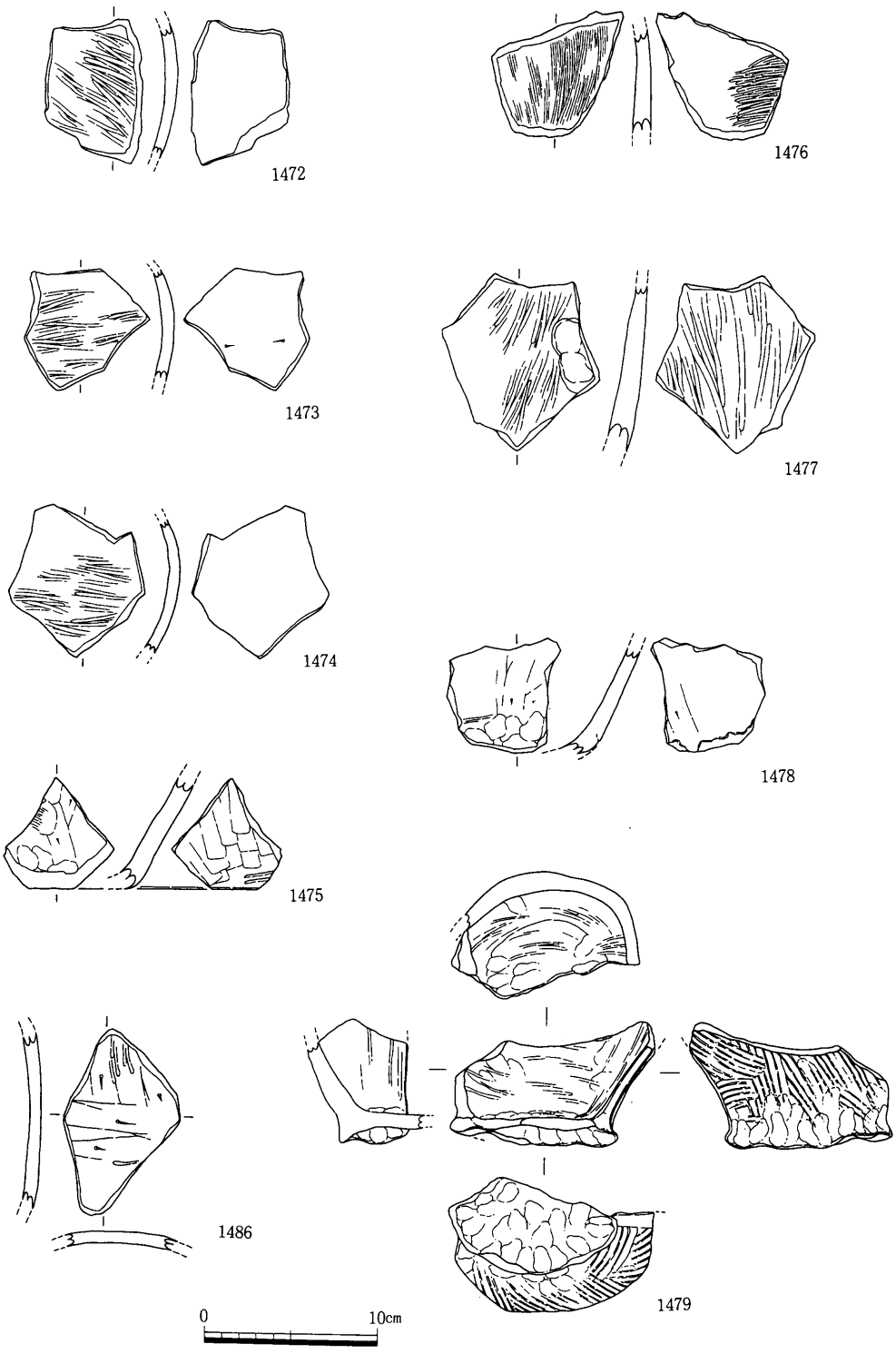
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1470	?	9.6	5.3	2.3	200.4	ﾘﾕｶｲﾄ	左面摩耗少	折損
1471	凹み石	10.1	9.2	6.2	864.4	砂岩	片面の中央に敲打痕集中　縁辺の一部に磨面	

第360図　4区その他遺物5（1／2・1／3）

加工を見ることから石鏃片とした。(1469) は大形剥片の縁辺部に粗雑な小剥離を加えただけだが，先端部が顕著に摩耗することから石鏃とした。凹み石 (1471) は片面の中央部に敲打痕が集中し，縁辺の一部に明瞭な磨面を見る。

補足1（第361図－1）

(1472～1479・1486) は赤色顔料付着資料である。(1477) がＳＤ08資料である他は全てＳＤ16ｆ溝資料である。諸般の事情により両遺構関係挿図に組み込まなかった資料をここで一括して報告しておく。(1472～1474・1476・1477) は器種不明の小片。内面の赤色顔料付着は顕著である。いずれも内面に緻密なミガキ調整を認める。大形鉢ないしは把手付広片口皿片であろう。(1475) は底部縁辺部片内面には横ハケ調整とミガキ調整とを見る。(1478) は断定しがたいが，把手付広片口皿片か。把手部は剥落している。(1479) は把手付広片口皿。立ち上がり部は半円形に高く隆起するが，把手部は下縁の鈍い摘み出しに過ぎない。体部外面に並行叩き目を顕著にとどめる。



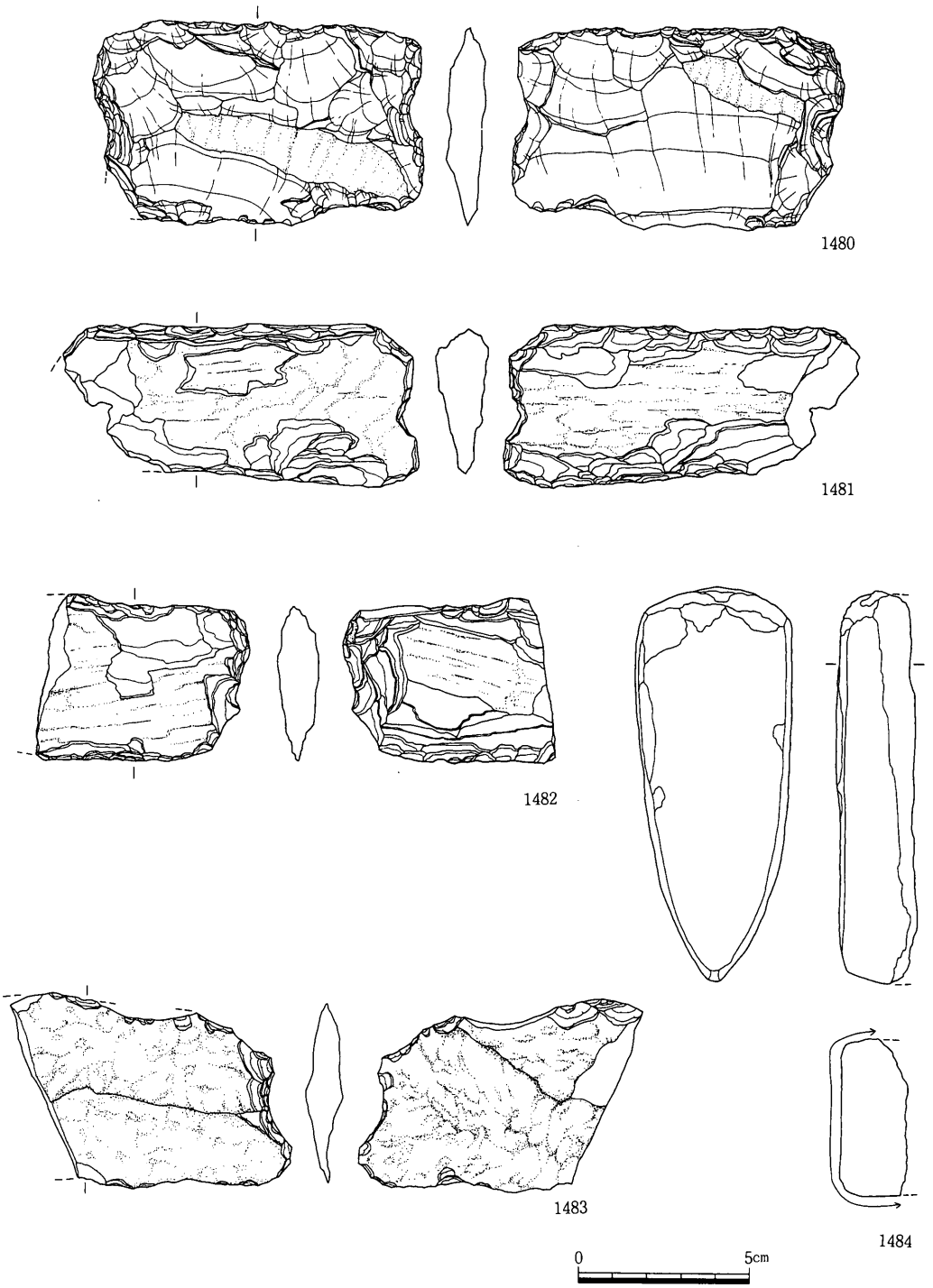
第361図－１　赤色顔料付着資料（補遺１）（１／４）

挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1472	?				細・極多、中・少	にぶい黄褐色	大形鉢もしくは把手付広片口皿。内面緻密なﾐｶﾞｷ調整		角閃石極多、石英等少、赤色顔料
1473	?				細・極多、中・少	褐色	大形鉢もしくは把手付広片口皿。内外面緻密なﾐｶﾞｷ調整		角閃石極多、石英等少、赤色顔料
1474	把手付広片口皿?				細・極多、中・少	褐色	内面に緻密なﾐｶﾞｷ調整を認める。		角閃石極多、石英等、赤色顔料
1475	大形鉢?				細・極多、中・昔	灰黄褐色	底部縁辺部片。外面下端叩き目、他は縦ｹｽﾞﾘ、内面横ﾊｹ後ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、赤色顔料
1476	?				細・極多、中・少	黄褐色	大形鉢もしくは把手付広片口皿。内面ﾊｹ後緻密なﾐｶﾞｷ調整、外面ﾊｹか		角閃石極多、石英等、赤色顔料
1477	大形鉢?				細・極多	にぶい黄橙色	内外面緻密な縦ﾐｶﾞｷ		角閃石極多、雲母、赤色顔料
1478	把手付広片口皿?				細・極多	にぶい黄色	把手部の剝落した片口皿か？外面ｹｽﾞﾘ、内面ﾐｶﾞｷ、剝落面にも顔料付着。		角閃石極多、赤色顔料
1479	把手付広片口皿				細・極多、中粗・少	にぶい黄褐色	立上がり部は半円形に隆起し、把手部は下縁を小さく摘み出すのみ。外面叩き目顕著、内面緻密な横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、石英等少、赤色顔料
1486	把手付広片口皿片				細・極多、中粗・少	褐色　灰褐色	把手付広片口皿体部片。外面ｹｽﾞﾘ後部分的にﾐｶﾞｷ、内面ﾐｶﾞｷか		角閃石極多、石英等少、赤色顔料

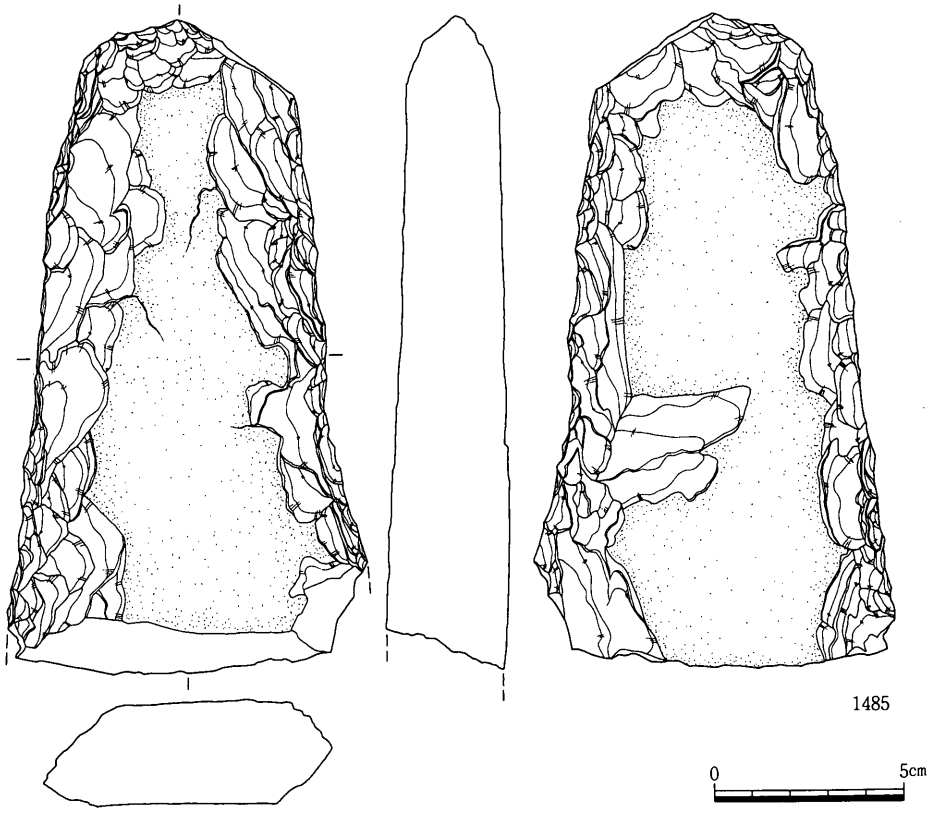
第361－1図観察表

補足2（第361図－2・3）

ここで掲載する資料は諸般の事情により，各遺稿関係挿図に組み込めなかった石器資料である。(1480) はＳＤ08出土。やや粗悪なサヌカイト製打製石庖丁。両端部の抉りは丁寧に作り出すが，刃・背部調整はやや粗雑である。(1481・1482) はＳＤ16出土。片岩製打製石庖丁。端部に抉りを作り出す。(1482) はやや肉厚。(1483) はＳＤ08出土。安山岩系打製石庖丁。自然礫の縁辺を簡単に調整して作り出す。(1484) はＳＤ16出土の片岩製。柱状石斧だが両刃である。(1485) は包含層出土。安山岩系の自然礫を比較的丁寧に加工している。大形の石鍬。



第361図－２　４区出土石器（補遺２）（１／２）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1480	打製石庖丁	9.6	5.7	1.1	89.0	ｻﾇｶｲﾄ	両面に自然面。両端浅い抉り、刃部調整粗雑	端部欠損
1481	打製石庖丁	10.3	4.7	1.5	90.5	片岩	端部に浅い抉り。刃・背部調整浅い。	端部欠損
1482	打製石庖丁	5.9	4.8	1.2	54.4	片岩	やや肉厚。刃・背部調整浅い。	折損
1483	打製石庖丁	7.2	5.3	1.1	38.5	安山岩系	薄く剝がれた自然礫使用。端部抉り、刃・背部調整浅く粗雑。	折損
1484	柱状石斧	11.4	4.6	2.0	238.0	片岩	肉厚の柱状石斧だが両刃。	折損
1485	石鍬	15.5	9.3	3.2	682.9	安山岩系	偏平な自然礫使用。側縁部調整丁寧。	刃部欠損

第361図－３　４区出土石器（補遺３）（１／２）

第362図　5区遺構配置図（1／200）

第5節　5区の調査

1．調査区の概要（第362図）

5区は南北約30m，東西60mで，調査区の南端は現有の用水路，西端は現有の道路となっている。調査区の地表面は西端で標高16.4m，東端で標高15.9m前後となっており，緩やかに東に下っている。また北端の標高は15.9m，南端は16.0mで若干北側に向って下っている。

5区では耕作土下0.2～0.4mで遺構面に至るが，現地表面が西側ほど高くなっていることから，遺構面は西に行くにつれて地表面から深くなっている。遺構面の標高は15.8～15.9mとなっている。遺構面は1面で，弥生時代～近世の遺構が検出された。遺構面は基本的に耕作土直下で，褐色粘質土あるいは褐色砂礫土となっている。この褐色砂礫土は5～10cm大の砂礫で構成され，波状に上がったり下がったりする層で，上がった部分が遺構面に露出している。

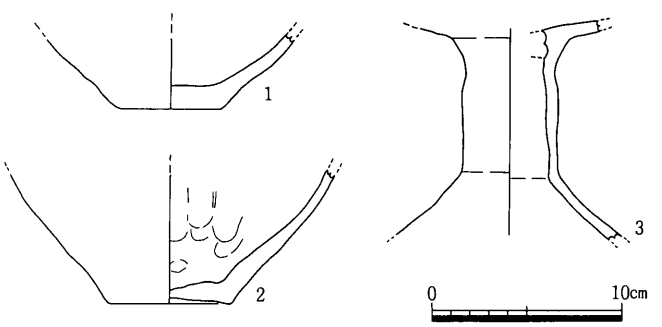
遺構は東へ向うほど疎になり，調査区の東の大きな自然河川状の溝（SD01）が3，4区で弥生時代の集落が形成された微高地の東端になるものと思われる。

2．調査の成果

（1）弥生時代の遺構・遺物

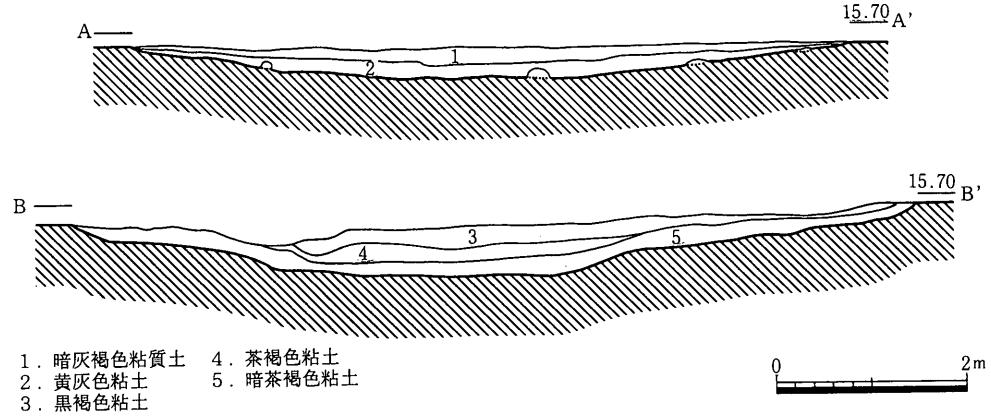
SD01（第363・364図）

調査区の東側で検出した北北西－南南東方向のほぼ直線の溝である。幅は7.6～13m余りで，中央部が狭く北側と南側が広くなっているが，全体としてはほぼ均一である。深さは0.3mほ



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
1	弥・壷			5.5	細・普	灰、にぶい黄褐	外面ナデ、内面マメツ	底部完存	角閃石
2	弥・壷			6.4	中・少、細・普	にぶい黄橙、橙	底部内面指押え顕著、外面マメツ	底部完存	角閃石
3	弥・高杯				中・普	黒褐、にぶい黄褐	外面マメツ、内面ナデ	脚部3/4	角閃石

第363図　5区SD01出土遺物（1／4）



第364図　5区ＳＤ01断面図（1／80）

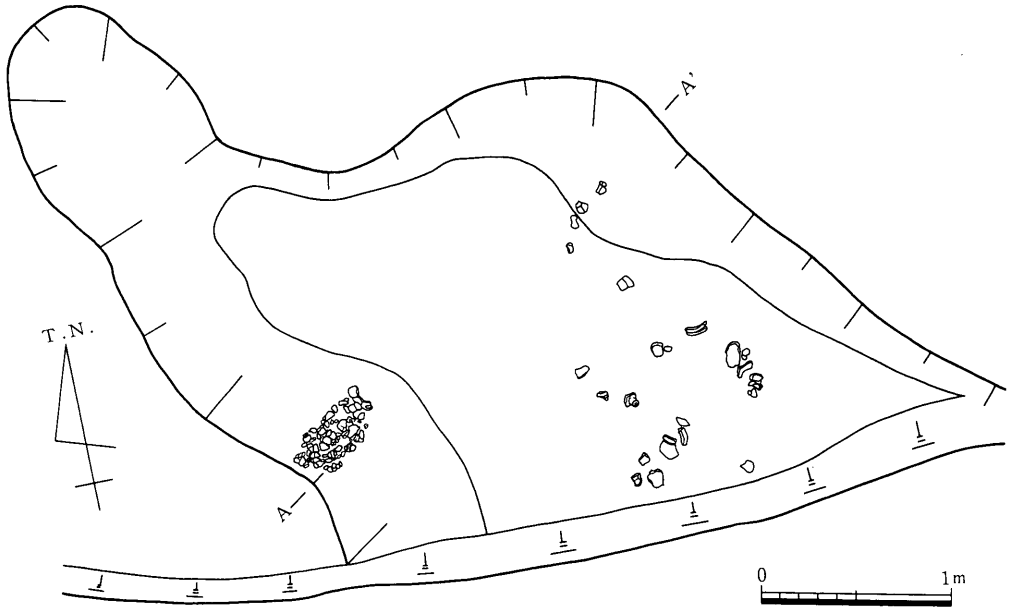
どで，断面は浅い皿状であるが，溝の南半部の東側は緩やかな段掘りとなっている。埋土は溝の中央部分では，上層に暗灰褐色粘質土が，下層に黄灰色粘土が堆積していた。しかし南側に行くほど暗褐色系の粘土が堆積している。ＳＤ01は自然河川状の溝で，３区から続く弥生時代の集落の東限に相当するものと考えられる。遺物は全体として少量で，細片のものが多かった。

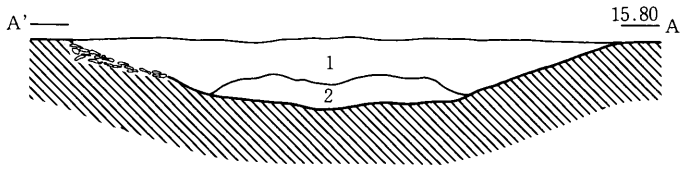
１・２は壷の底部で，しっかりとした平底となっており，２の底部内面には指押えによる凹凸が著しい。３は高坏の脚部で脚柱部はエンタシス状で，円盤充填となっている。

ＳＤ02（第365図）

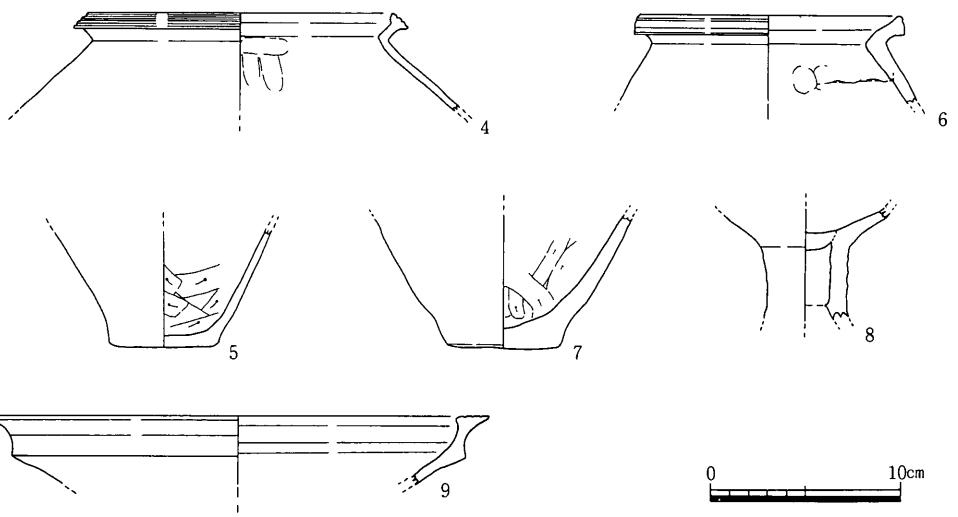
５区の南壁際やや東寄りで検出した溝である。北西－南東方向の溝であるが，南壁から北西に４ｍの所から溝が始まり，南側の調査区外へと続いて行く。溝は始まり部分の幅が0.96ｍと細く突出しており，テラス状に浅くなっている。壁際では幅2.85ｍほどで，断面は緩やかなＵ字形となっている。埋土は２層に大別出来るが，下層の褐色粘質土は部分的に堆積しているのみで，大部分は暗褐色粘質土の単一層といえ，この層の下部から土器が出土した。土器は主に溝の下部から出土したが，溝の西側の落ち際に，甕が１個体分，押し潰された状態で出土した。

４は甕で口縁部は短く屈曲し，内面には鋭い稜を形成している。５は４と同一個体と思われる甕の底部で，内面にヘラケズリを施す。４・５とも溝の西側の落ち際で出土したものである。６は口縁部の屈曲部が肥厚しており，口縁部端部は上下に若干拡張する。８は高坏の坏部と脚部の接続部分で，円盤充填となっている。脚部は短く，直立する脚柱部の





1．暗褐色粘質土
2．褐色粘質土



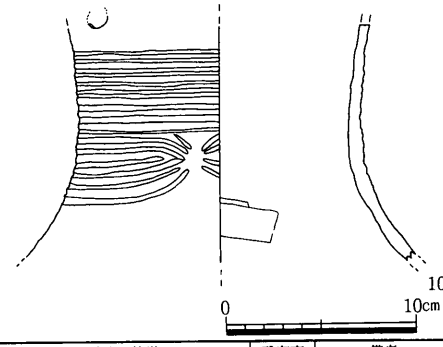
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
4･5	弥・甕	16.0		5.8	粗・多	にぶい黄橙	外面ナデ、内面下半ケズリ・上半ナデ	口径3/4	
6	弥・甕	26.3			細・普、粗・少	にぶい黄橙、橙	外面ナデ、内面指押え→ナデ	口径1/3	角閃石
7	弥・壷			4.9	細・多、中・多	黒褐、褐	外面マメツ、内面抉るようなケズリ	底部完存	
8	弥・高杯				中・普	黒褐、明褐・灰黄褐	脚内面指ナデ	柱部完存	
9	弥・高杯	26.3			粗・少、細・普	橙、にぶい黄橙	口縁外面ナデ、内面マメツ	口径1/12	角閃石

第365図　5区ＳＤ02平・断面図（１／40），出土遺物（１／４）

下半は屈曲して端部に至るものと思われる。9は坏部の口縁部端部は肥厚し，上面に平坦な面をもち沈線が3条巡っている。外面を強くナデている。

ＳＤ03（第366図）

5区の西半部のほぼ中央を，西北西－東南東の方向に途中で2箇所ほど途切れながら続く溝である。溝は東南東部の先端から11ｍほどの地点で，南方向からの溝と合流するが，切り合いは認められず同一の溝と考えられる。溝の幅は大部分は0.2ｍほどで，南からの溝の合流部分付近は幅0.8～１ｍとなっている。断面形はＵ字形で深さは0.1ｍ前後である。全体に削平が著しく，溝の底部が残存している状況で，埋土は黒褐色粘質土の単一層である。東南東方向の先端は，ＳＤ02の先端突出部の延長上にあり，出土遺物から時期的に同じであることから，元々は同じ溝であった可能性もある。10は器台の筒部の破片である。上部に円形の透かし穴が1個残存している。外面にはヘラ描き沈線が施されているが，このうち一部は，求心状に1点に向かって収束する文様となっている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
10	弥・器台				中・普	褐	外面ﾅﾃﾞ、内面下半は板ﾅﾃﾞ、透し穴現存1個	体部1/4	角閃石

第366図　５区ＳＤ03出土遺物（１／４）

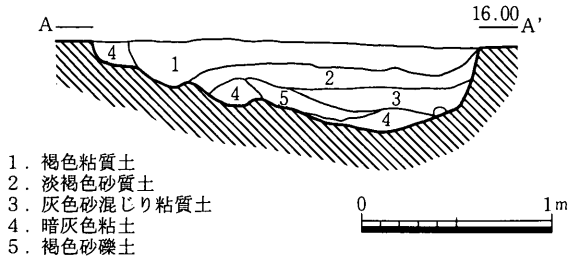
ＳＤ04

5区の中央部を北壁から南南西方向に，直線的に延びる溝である。溝は北壁から17ｍのところでＳＤ03を切っており，さらに4ｍのところで西に短く屈曲して収束する。幅は0.3～0.5ｍ，深さは0.1ｍ程度で断面はＵ字形の小規模な溝で，埋土は淡黄褐色粘質土の単一層である。埋土からは，弥生時代後期初頭と考えられる高坏を含む土器が少量出土したにとどまる。

ＳＤ05（第367図）

5区の南西隅から東へ6ｍのところで検出した溝である。溝は南壁から北に2.5ｍで収束し，南側は調査区外へ続く。幅は0.8～1.6ｍで，中央部が膨らむ不整形となっている。

溝の東側の掘り込みは段状に掘り込まれており，深さは0.4～0.5ｍ程度である。埋土は上部には褐色系の粘質土と砂質土が，最下層には粘性の強い暗灰色粘土が堆積していた。埋土からは弥生時代後期後半と考えられる土器の細片が少量出土したのみである。

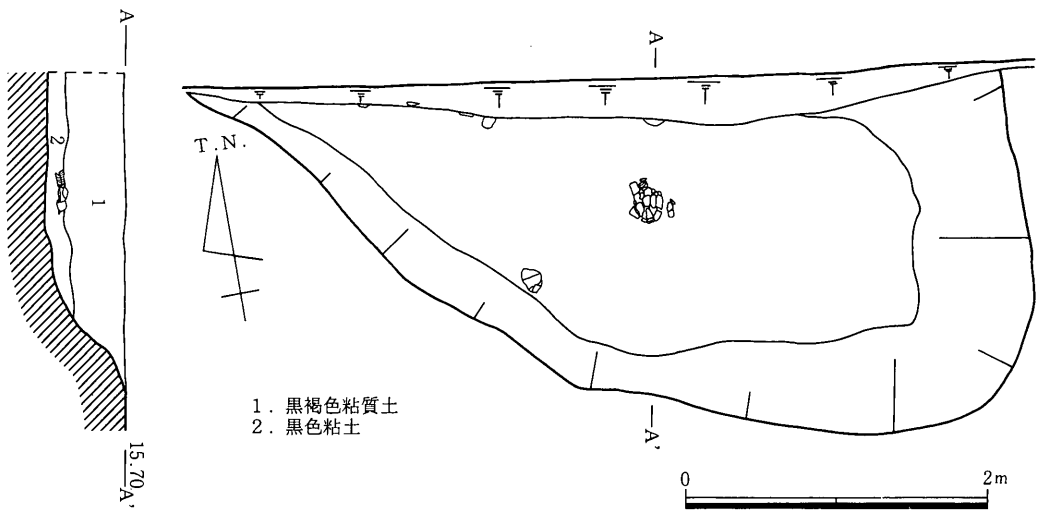


第367図　５区ＳＤ05断面図（１／40）

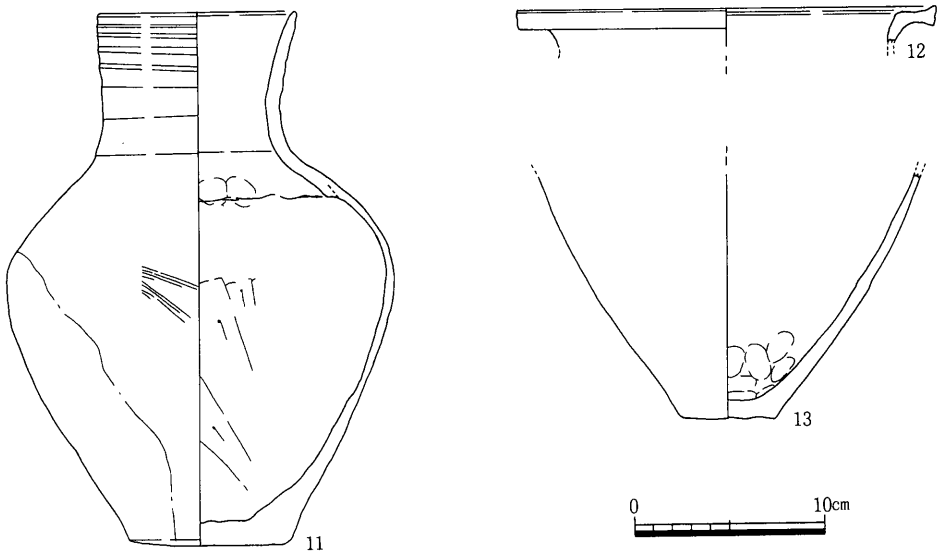
ＳＫ01（第368・369図）

５区の北東隅のやや東側で検出した土坑である。遺構が調査区外へ続くため，全体の形は不明である。溝の先端部の可能性もあるが，先端の掘り込みが急激に深くなり，底部が平坦であることから土坑と判断した。平面形は調査区内で，長楕円形を斜めに切ったような形をしている。東西方向が5.4m，南北方向が2.3m，深さは0.5ｍほどである。埋土は上下２層に大別され，上層には黒褐色粘質土が，下層には粘性の強い黒色粘土が堆積している。下層の上部から土器が出土した。また土坑のほぼ中央部から壷が１個体ほぼ完形で出土した。

11は壷で，頸部は緩く外反しそのまま口縁部端部に至り，外面には凹線が施されている。体部は中央部分の器壁は薄くなっているが，下半部は肥厚している。底部は安定した平底



第368図　５区ＳＫ01平・断面図（１／50）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
11	弥・壷	10.2	27.2	8.2	中・普	褐灰	口縁部ﾅﾃﾞ、体部外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	ほぼ完存	角閃石
12	弥・壷	22.0			細・普、粗・少	にぶい褐・灰、明赤褐	外面マメツ、内面ナデ	口径1/8	
13	弥・甕			4.7	中・多、粗・普	黄灰、にぶい褐	外面マメツ、底部内面指押え	底部完存	

第369図　５区ＳＫ01出土遺物（１／４）

となっている。12は壷の口縁部で，頸部から横に屈曲し，端部は上下に拡張している。13は甕の底部と思われる。

ＳＫ02

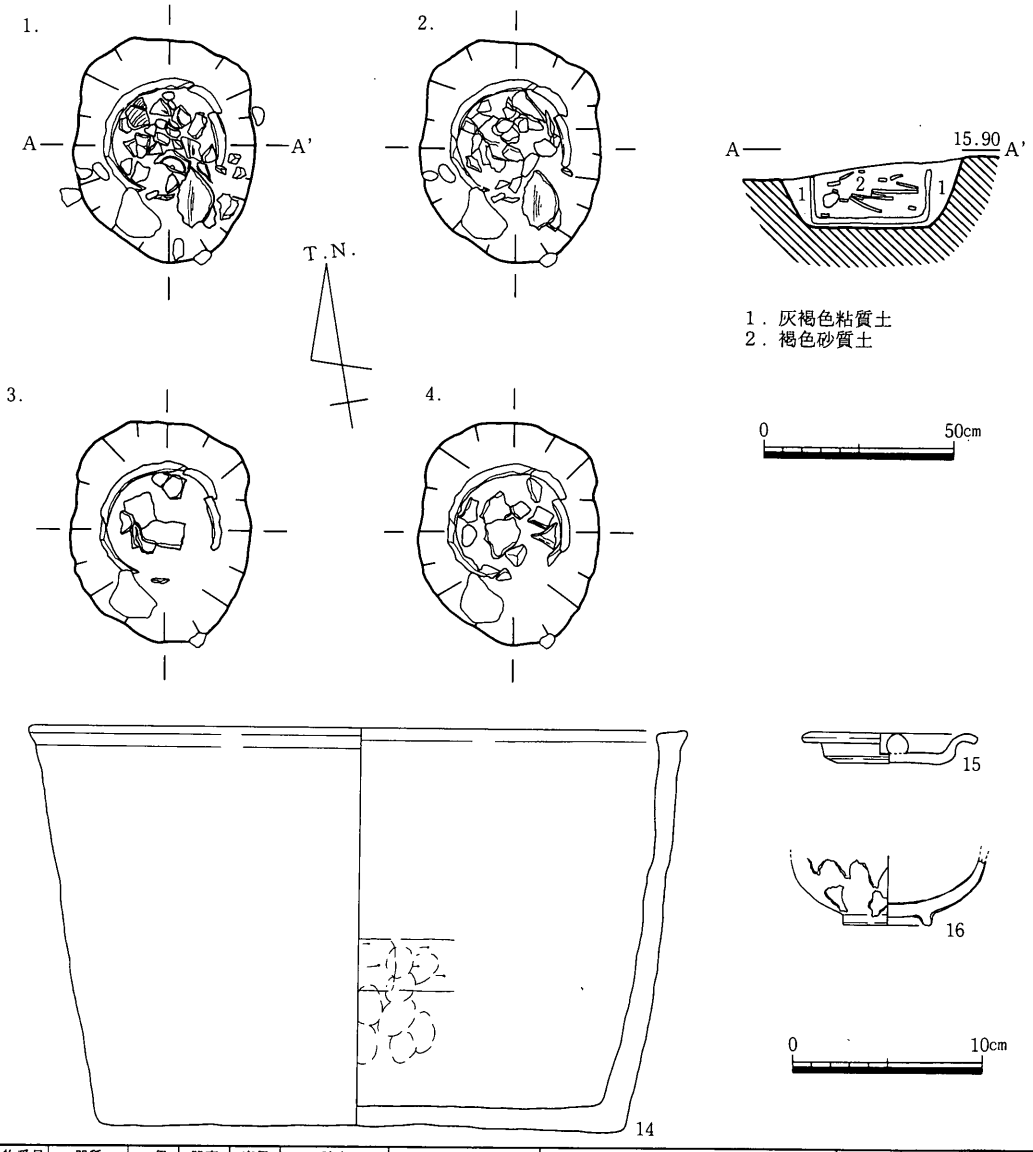
５区の西部で，ＳＤ03の北側に隣接して検出した土坑である。平面形は楕円形で，長径1.7m，短径0.9m，深さ0.1mと非常に浅いもので，上部が削平されたものと考えられる。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で，脚付き鉢と甕を含む土器の細片が少量出土したのみである。

（２）近世の遺構・遺物

ＳＰ01（第370図）

５区のほぼ中央部でＳＤ03に隣接して検出したピットである。平面形は楕円形に近く，長径0.58m，短径0.48mとなっている。上部は削平されており，深さは0.16mと残りは悪い。ピットの中央部に大型の鉢を据えており，その中から陶磁器類が出土した。鉢の外側からは土器類は出土せず，すべて鉢の中から出土したことから，この鉢の中に意図的に入

れて埋めたものと考えられる。ピットの埋土は灰褐色粘質土の単一層で，鉢の中には褐色の砂質土が流入していた。14は土師質の大型の鉢で，体部は緩く外傾するが，ほぼ直線的である。口縁部端部は外側に肥厚し，上側に面を作る。底部外面にはヘラケズリの後にナデている。15は落し蓋で，中心からずれた所につまみを貼りつけている。16は外面に漬け掛けの釉が付着している。その他に磁器碗が2個体出土している。

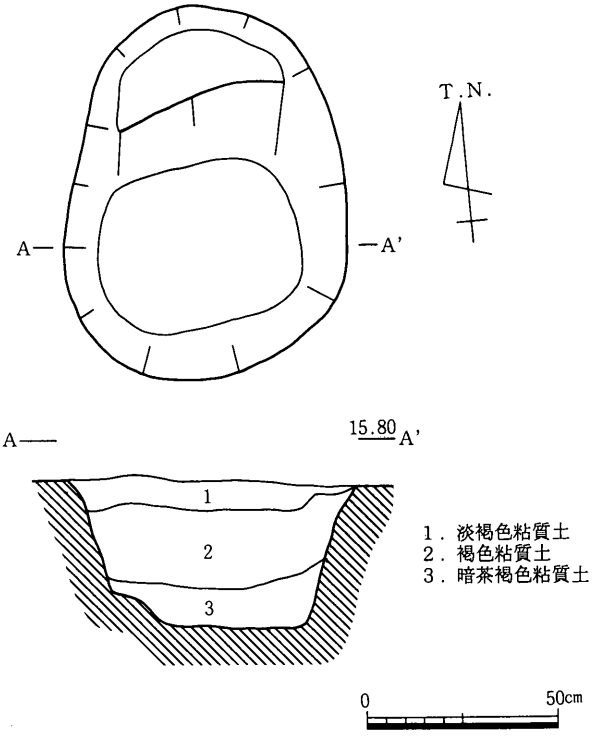


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
14	土・鉢	34.6	20.9	27.6	中・少	にぶい黄褐	体部外面ﾅﾃﾞ、内面ｹｽﾞﾘ→上半ﾅﾃﾞ、底部外面ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	ほぼ完存	
15	磁・蓋	9.3	1.6		微・少	灰白	体部外面・内面ナデ、底部外面ケズリ	ほぼ完存	
16	磁・碗			4.6	精緻	灰白、にぶい赤褐	内・外面ナデ、高台外面以外施釉	底径2/3	

第370図　5区ＳＰ01平・断面図，遺物出土状況図（1／20），出土遺物（1／4）

SP02（第371図）

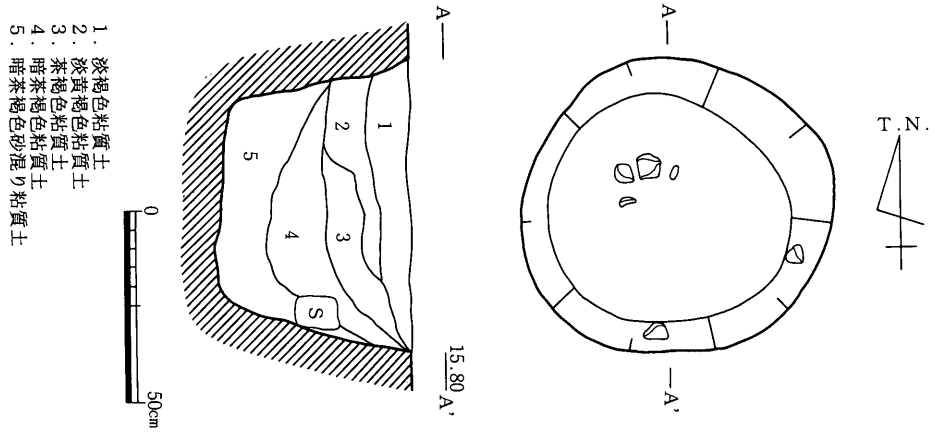
5区の西端部の西壁添いで検出したピットである。平面形は幅広の楕円形で，長径0.94m，短径0.75m，深さ0.4m前後となっている。北側部分は浅くテラス状の平坦面を形成した後に底部に向かって落ちる。底部は平坦になっている。埋土は3層に分層出来たが，最下層の上部より土器が出土した。土器が少量出土したのみであるが，すべて細片で図化は出来なかったが，土師質の大型の鉢の口縁部が出土している。



第371図　5区SP02平・断面図（1／20）

SP03（第372図）

5区のほぼ中央部のSD03の北側で，SP01の北約4mの所に位置するピットである。直径は0.8m前後の円形で，深さは0.5mとなっている。また底部はほぼ平坦になっている。

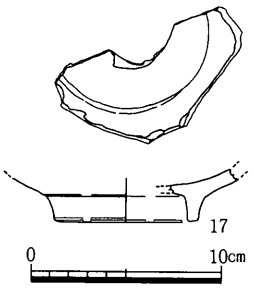


第372図　5区SP03平・断面図（1／20）

埋土は5層に分層され，埋土は粘質土が主体となっている。埋土から磁器の碗の細片が少量出土したのみであった。

ＳＰ04（第373図）

5区のほぼ中央で，ＳＤ04の西側に隣接して検出したピットである。長径1.1m，短径0.9mの幅広の楕円形で，深さは0.2m前後と残りは悪い。埋土は淡褐色粘質土の単一層である。17は磁器の碗で，内面見込み部分は釉剥ぎとなっている。この他に図化出来なかったが瓦質の焙烙が出土している。

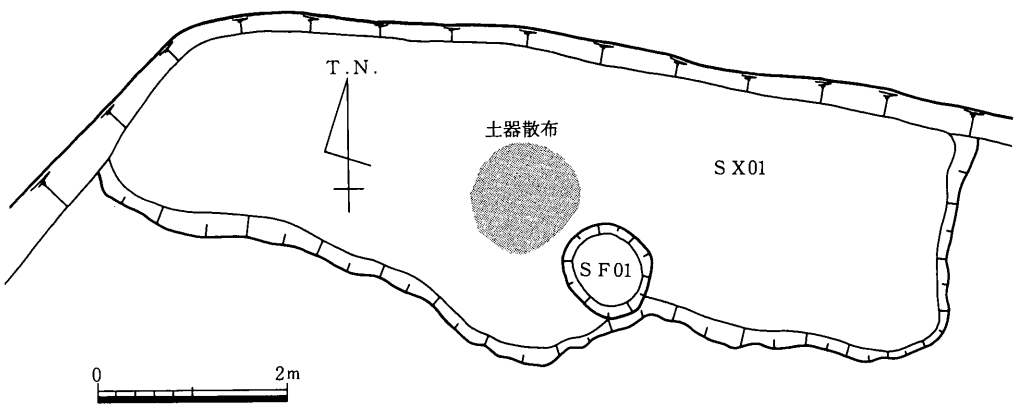


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
17	磁・碗			7.6	精緻	灰	外面回転ｹｽﾞﾘ、内面ﾅﾃﾞ、見込み蛇目釉はぎ	底径1/2	

第373図　5区ＳＰ04出土遺物（1／4）

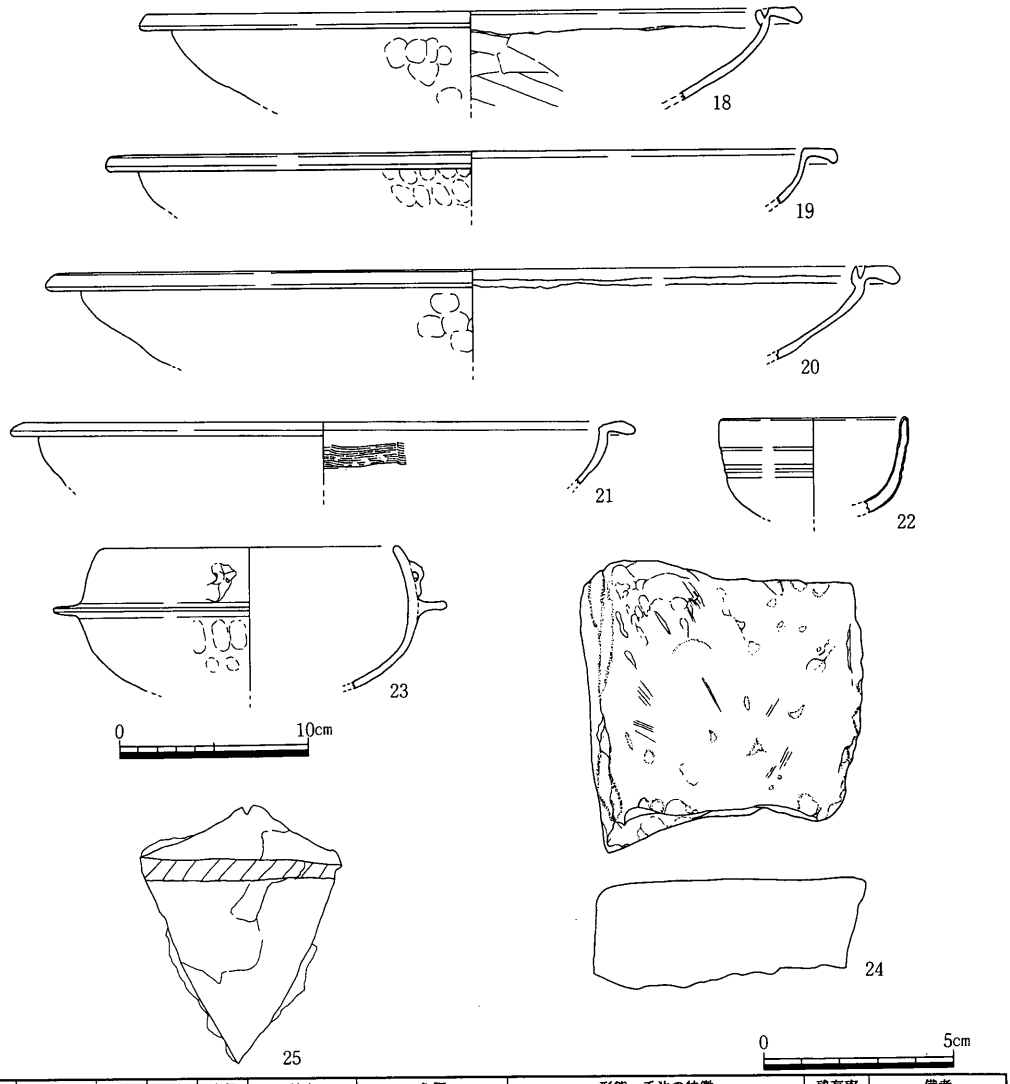
ＳＦ01，ＳＸ01（第374・375図）

5区の北西隅で検出した，落ち込み状の遺構（ＳＸ01）である。北側は調査区外へ続くので全体の形は不明であるが，調査区内では不整形であるが長方形に近くなっている。長辺は9.2m，短辺は調査区内で2.6mとなっている。北側へ向かって緩るやかに下っているが，北壁際の部分で0.3m前後と全体に浅いものである。埋土は全体に茶褐色粘質土の単一層であった。南辺部の中央やや東寄りに直径1mの円形の土坑状の窪み（ＳＦ01）が検出された。これは深さ0.15m程度のものであるが，中は全体が焼土となっており，表面は



第374図　5区ＳＦ01・ＳＸ01平面図（1／80）

硬く締まっていた。明らかにここで火を使用しており炉のようなものと考えられる。そしてこの炉（ＳＦ01）の北西部には焙烙を中心とした土器類が散布しており，ここで煮炊きをしたものと考えられる。そしてこの落ち込み状の遺構（ＳＸ01）はそうしたものに伴う



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
18	瓦質・焙烙	35.0			細・少	黒	口縁ﾅﾃﾞ、体部外面指押え・ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ	口径1/2	未貫通の穿孔２ヶ所
19	瓦質・焙烙	38.6			細・普	黒褐	口縁ナデ、体部外面指押え、内面ナデ	口径1/10	
20	瓦質・焙烙	45.2			細・少	灰黄、黒	口縁ナデ、体部外面指押え・ナデ、内面ナデ	口径1/12	未貫通の穿孔２ヶ所
21	瓦質・焙烙	33.0			中・少、細・少	にぶい黄橙、灰褐	口縁ナデ、体部外面ナデ、内面ハケ目・ナデ	口径1/5	焼成不良
22	碪・碗	10.0			精緻	灰白	内外面ナデ、体部中央に凹線３条	口径1/2	
23	瓦質・羽釜	15.6			精緻	にぶい黄、黄灰・黒褐	口縁ﾅﾃﾞ、体部外面指押え・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	口径1/4	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
24	砥石	7.6	7.3	2.8	253.6	安山岩	擦痕少々有り	

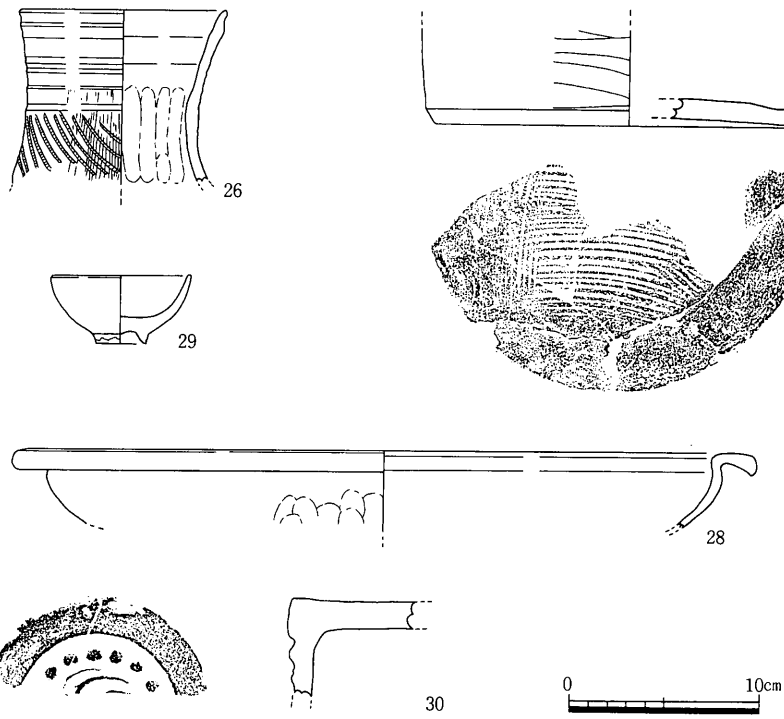
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	形態・手法の特徴	備考
25	用途不明	6.8	5.3	5.5	29.1	鉄		

第375図　５区ＳＸ01出土遺物（１／２・１／４）

作業場ではないかと思われる。18～21は瓦質の焙烙で，いずれも口縁部を横へ大きくつまみ出している。18・20は口縁部上面に未貫通の穿孔が2箇所認められる。22は磁器碗で，外面下半にオリーブ黒色の釉が，上半と内面に灰白色の釉がそれぞれ施されている。23は瓦質の羽釜で，体部は扁平である。体部と口縁部の境に鍔状突帯を水平に貼り巡らせている。口縁部は緩く内湾し，端部は丸く納めている。さらに鍔状突帯の上部に穿孔された耳状突起を1つ貼りつけている。24は砥石であるが，あまり使用されておらず刃を研いだとみられる擦痕が僅かに見られる程度である。25は用途不明の鉄製品である。平面形は菱形であるが，最大幅は上部に偏る。

（3）包含層出土の遺物（第376・377図）

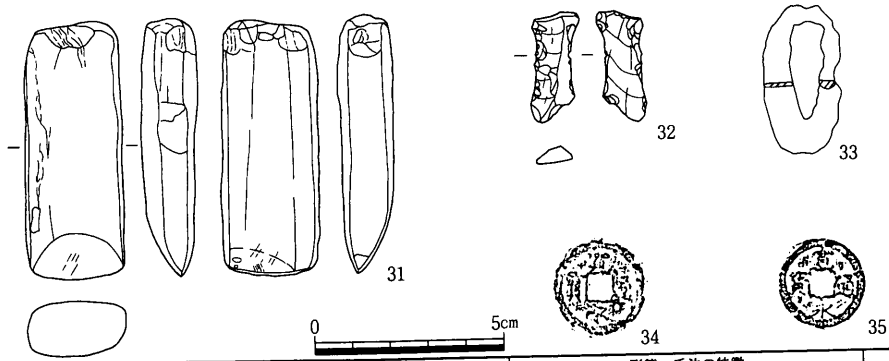
26は弥生土器の壷で，頸部は緩やかに外反し口縁部端部は強くナデられ先細りとなって



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
26	弥・壷	11.0			中・普	にぶい褐	口縁ナデ、頸部外面ハケ目、内面ナデ	口径完存	角閃石・雲母
27	土・鉢			20.4	微・多	にぶい黄橙	外面板ナデ、内面ナデ、底部外面粗いハケ目	底径1/2	
28	瓦質・焙烙	39.2			微・少	にぶい黄褐、暗褐	口縁ナデ、体部外面指押え・ナデ、内面ナデ	口径1/10	
29	磁・碗	7.2	3.6	2.6	精緻	灰白	内外面ナデ、高台接地面は無釉	全体2/3	

遺物番号	器種	直径	内区径	弁幅	弁数	外区幅	外区内縁幅	外区外縁幅	外区外縁高	現存長	筒部長	筒部径	瓦当部厚	筒部厚	形態・手法の特徴
30	軒丸瓦	11.9	8.3		3	3.6	1.6	2.0	1.3	6.7	5.6	11.5	1.7	1.5	三巴文、巴の尾部が長い

第376図　5区包含層出土遺物1（1／4）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
31	扁平片刃石斧	6.6	2.6	1.4	53.8	緑泥片岩	磨製	
32	縦長剝片	2.7	1.2	0.4	2.2	チャート？		

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
33	鍔留め	3.8	2.0	0.2	1.8	銅		
34	銅銭(寛永通宝)	2.4	2.4	0.1	2.1	銅		
35	銅銭(寛永通宝)	2.3	2.3	0.1	1.8	銅		

第377図　5区包含層出土遺物2（1／2）

いる。頸部には凹線文が施され，下部にヘラ圧痕文が巡っている。27は土師質の鉢で底部外面に非常に粗いハケ目が施されている。28は瓦質の焙烙で，口縁部は横へ大きく開き，端部は肥厚している。29は磁器碗で，全体に灰白色の釉がかかる。30は軒丸瓦である。外区外縁は素縁で，外区内縁には大きめの珠文を配している。内区には巴文の長い尾部が見える。31は磨製の扁平片刃石斧である。刃部には擦痕が僅かに認められる。側縁部の中程が若干抉れているが，柄との装着部分に相当する可能性が高い。32は縦長剝片であるが，側縁部の一部に細かい剝離調整を加えている。33は銅製の刀の鍔の留め具と思われる。34・35は寛永通宝である。

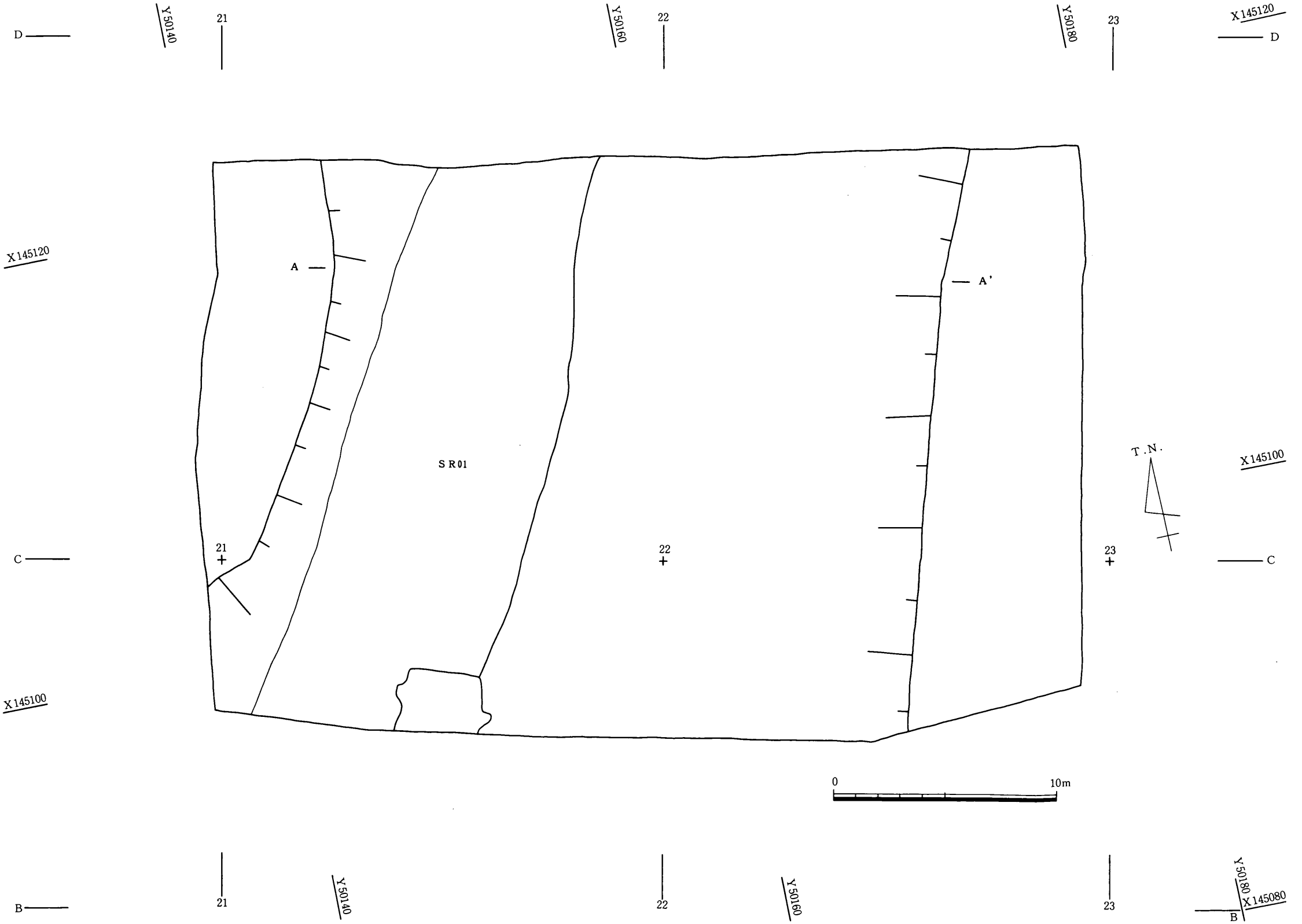
3．小結

5区では弥生時代と近世の遺構・遺物を検出したが，全体的に遺構・遺物とも少なかった。

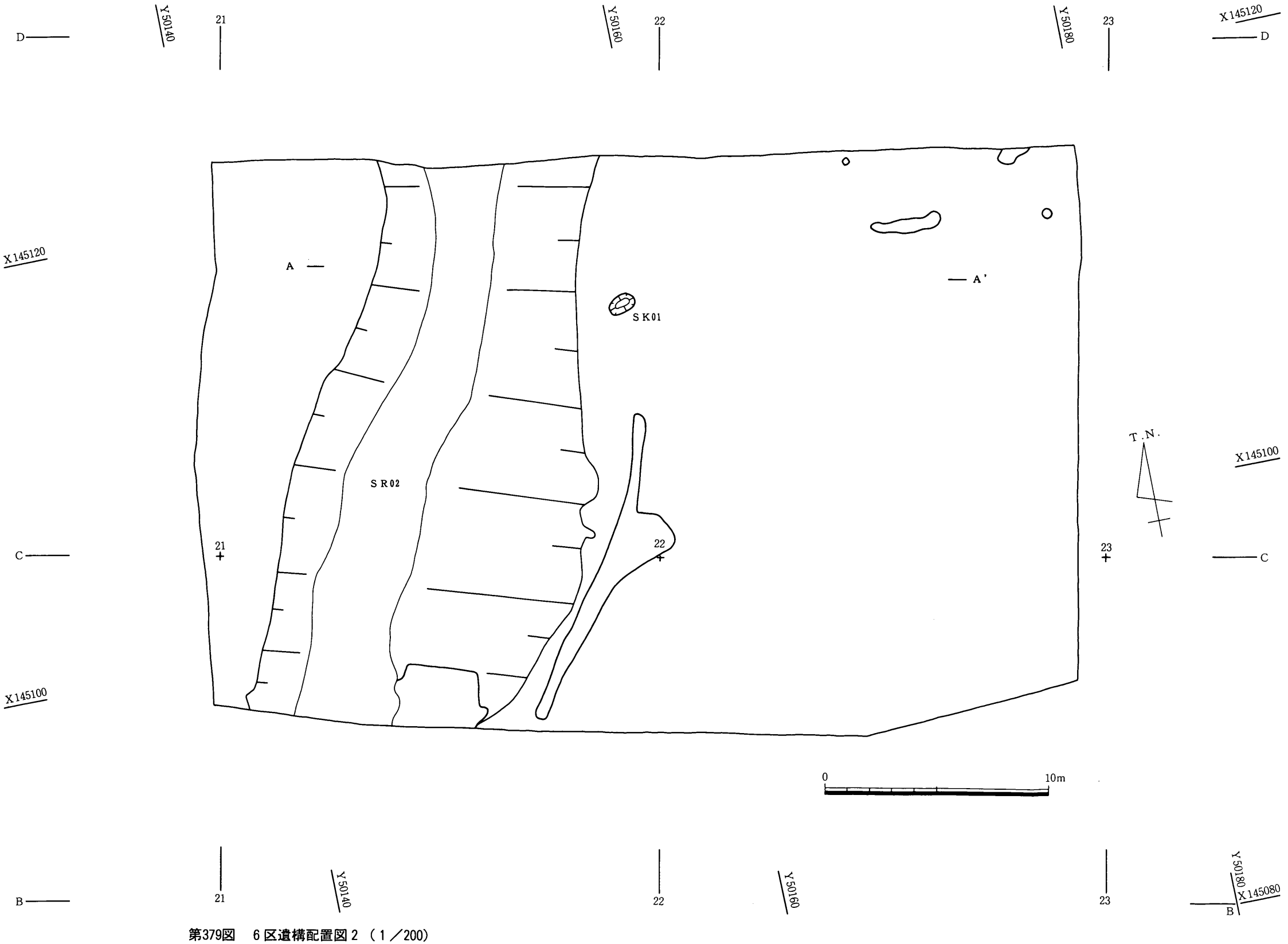
弥生時代では，4区で竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されたのに対し，5区では住居跡は検出されなかった。また5区のＳＤ01を境に東側では遺構は激減し，弥生時代のものはほとんど無いことから，ＳＤ01が3区から続いてきた弥生時代の集落の東限に相当するものと考えられる。5区での弥生時代の遺構は溝と土坑が中心で，弥生時代後期初頭を中心とするものである。

近世ではピットと落ち込み状遺構，炉を検出した。特に落ち込み状遺構（ＳＸ01）は炉

を伴い，焙烙を中心とした土器が出土したことからその場で直接煮炊きしたものと思われる。



第378図　6区遺構配置図1（1／200）



第379図　6区遺構配置図2（1／200）

第6節　6区の調査

1．調査区の概要（第378・379図）

6区は南北約27m，東西40mである。調査区の地表面は西端で標高15.9m，東端で標高15.8mとなっておりほぼ平坦である。また北端は15.8m，南端も15.8mで平坦になっている。

6区では耕作土下0.2～0.3mほどで遺構面に至るが，調査区の中央部付近は遺構面が凹地のように低くなっており，遺構面が耕作土下0.6～0.7mのところもある。遺構面は基本的には1面で，大きな旧河道とその埋土上に遺構が掘り込まれている。遺構面は調査区の西側では1～10cmほどの礫を多く含む暗褐色砂礫土で，東側は2～5cmほどの礫を大く含む黒褐色礫混じり粘質土となっている。

遺構は旧河道（SR01），その埋没後に形成された旧河道（SR02），土坑が検出されたが，遺構密度は疎で，遺物も少なかった。

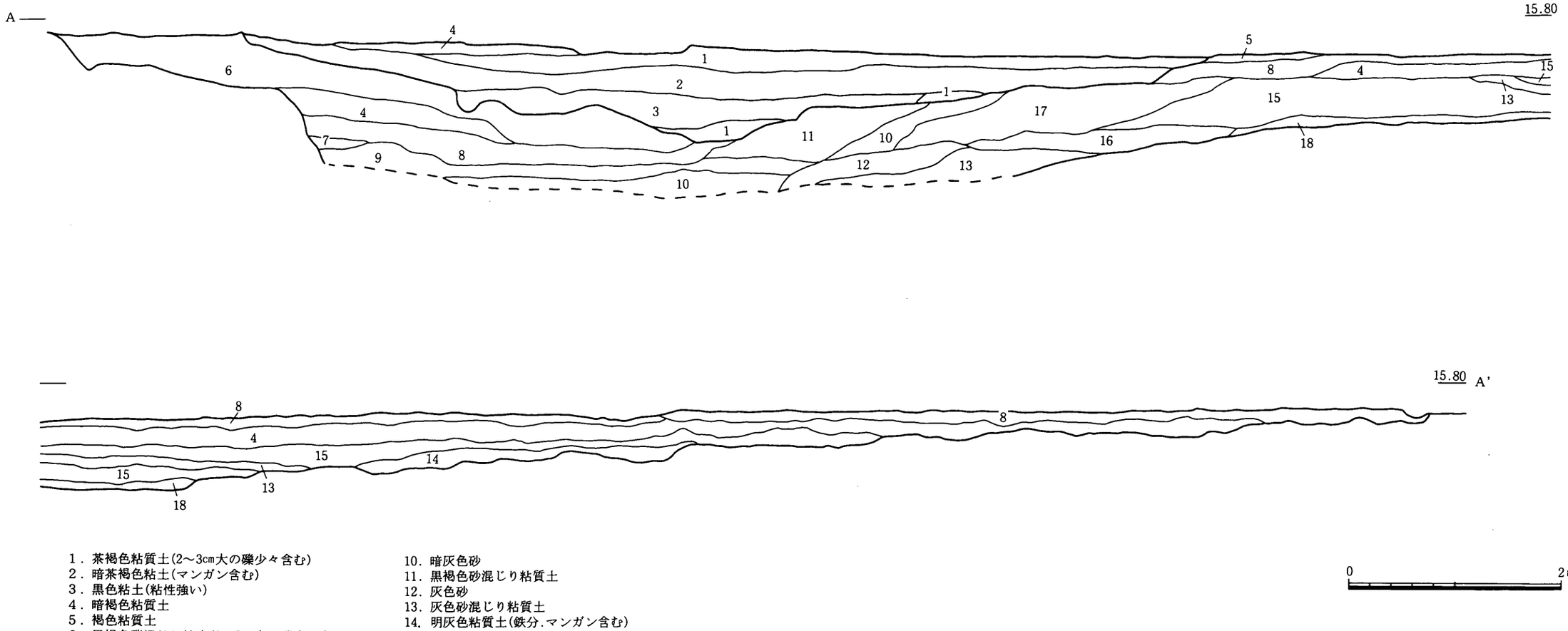
2．調査の成果

（1）縄文時代の遺構・遺物

SR01（第380・381図）

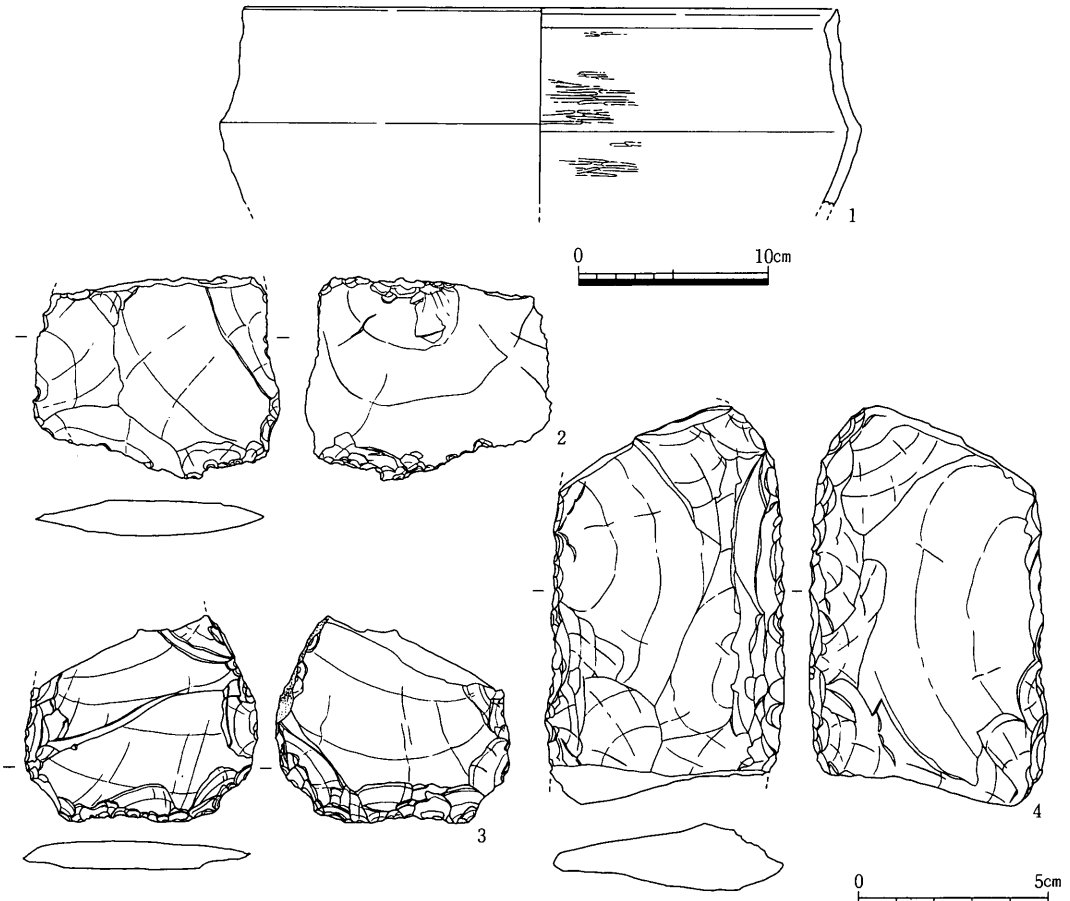
6区の中央部で検出した，ほぼ南北方向の旧河道である。幅は28～32mと広く，最も深いところで1.6mである。西側の岸はテラス状の面を形成した後に，急激に落ち込んでいる。これに対して東側の岸は，なだらかに徐々に深くなっている。このことから流れの本流は大きく西側に偏っていたと考えられる。東側の上層には暗茶褐色砂混じり粘質土が，下層には暗褐色粘質土と，鉄分が沈着したために橙色化した砂を含む粘質土が堆積している。また本流部分では上層に2～5cm大の礫を多く含む黒褐色粘土が堆積し，下層は粘質土が堆積し，最下層は砂層となっている。

遺物は少量であるが，上層の黒褐色礫混じり粘土層から出土した。1は浅鉢で，口縁部は内傾して立ち上がる。口縁部端部を上方につまみ上げ，内側には沈線を意識したような強いナデを施している。外面は剥離しており調整は不明であるが，内面にはヘラミガキを丁寧に施している。2はスクレーパーであるが，主要剥離面のバルブを細かい調整によって潰している。下部には刃部を粗く作り出している。3・4は打製石斧である。3は撥形



1．茶褐色粘質土(2～3cm大の礫少々含む)
2．暗茶褐色粘土(マンガン含む)
3．黒色粘土(粘性強い)
4．暗褐色粘質土
5．褐色粘質土
6．黒褐色礫混じり粘土(2～5cm大の礫多く含む)
7．暗褐色砂礫土(1～10cm大の礫多く含む)
8．暗茶褐色砂混じり粘質土(1～2cm大の礫少々含む)
9．暗灰色粘質土
10．暗灰色砂
11．黒褐色砂混じり粘質土
12．灰色砂
13．灰色砂混じり粘質土
14．明灰色粘質土(鉄分.マンガン含む)
15．橙褐色砂混じり粘質土(鉄分含む)
16．橙色粘土
17．明橙色砂混じり粘質土
18．褐色砂

第380図　6区ＳＲ01・02断面図（1／50）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
1	鉢・浅鉢	31.2			細・多、中・多	灰黄褐・黄灰	外面マメツ、内面ミガキ	口径1/4	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
2	スクレイパー	6.5	5.3	0.9	34.9	サヌカイト		
3	打製石斧	5.2	6.1	0.9	34.2	サヌカイト	中央部がくびれる	
4	打製石斧	9.7	6.2	1.8	175.8	サヌカイト		

第381図　6区ＳＲ01出土遺物（1／2・1／4）

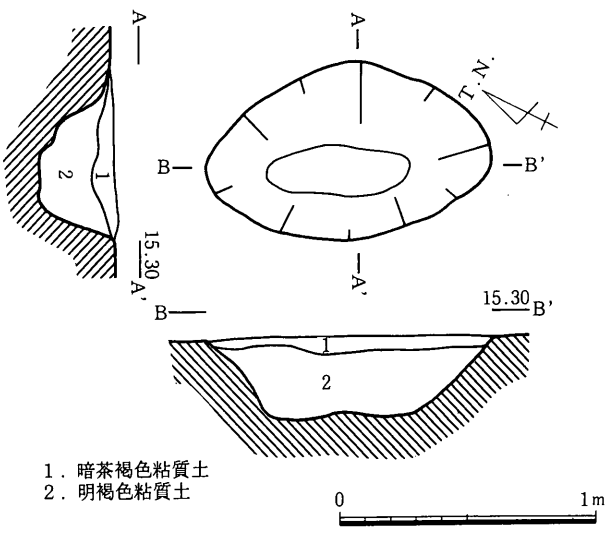
のものと思われ，刃部は両面から加工している。4は短冊形のもので両側縁は平行となっている。刃部と基部は欠損している。全体に遺物量が少なかったが，1の浅鉢から縄文時代晩期後半の時期のものと考えられる。

（2）弥生時代の遺構・遺物

ＳＫ01（第382図）

6区の中央部やや北寄りで検出した土坑である。平面形は楕円形で長径1.1m，短径0.7m，深さ0.3mとなっている。埋土は上層に暗茶褐色粘質土が薄く堆積し，下層には明褐

色粘質土が厚く堆積している。掘り込みの角度は急になっており，底はほぼ平坦であるが狭くなっている。この土坑からは遺物は出土しなかった。しかし縄文時代晩期の旧河道の埋土の上面から掘り込まれていることと，後述する弥生時代のＳＲ02と同一面ということから，消極的ではあるが弥生時代のものと考えておきたい。

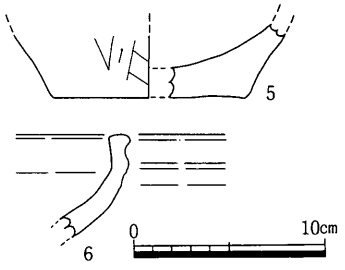


第382図　６区ＳＫ01平・断面図（１／30）

ＳＲ02（第380・383図）

６区の西部で検出した南北方向の旧河道である。ＳＲ01が埋没した後に，ＳＲ01の西側の本流部分の上側に重なって形成されている。幅は10～14ｍで中央部が膨らみ，深さは0.9ｍほどである。掘り込み部分は東側のほうが浅く広くなっている。調査区の北壁から南へ６～９ｍのところの東岸部分には，10㎝前後の河原石が密集していた。これが集石遺構なのか自然のものであるのかは不明である。埋土は上部には茶褐色の粘質土が堆積し，２～３㎝大の礫が少々混じっていた。最下層には粘性の非常に強い黒色粘土が堆積していた。

遺物は極めて少量である。５は壷の底部と思われ，外面にヘラケズリを施している。底部は安定した平底となっている。６は大型の鉢の口縁部である。口縁部の外面には凹線が２条巡っており，内・外面ともナデている。６から弥生時代中期後半～後期初頭のものと考えられる。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
5	弥・壷			10.0	微・多	にぶい黄、明褐	外面一部ケズリ、内面マメツ	底径1/3	
6	弥・鉢				中・普	褐灰、にぶい黄褐	外面ナデ、内面ナデ	口縁細片	角閃石

第383図　６区ＳＲ02出土遺物（１／４）

3．小結

6区では縄文時代晩期と弥生時代の旧河道を2本検出した。しかし両者とも遺物は非常に少なく，また他に遺構も乏しいことからも6区は人々の生活の場ではなかったことがわかる。しかし量的には少ないが，まだ高松平野では報告例の少ない縄文時代晩期の遺物が出土したことで貴重な資料と言えよう。

第７節　７区の調査

１．調査区の概要

７区は南北約32m，東西約62mである。調査区の地表面は西端で標高16.0m，東端では16.0mでほぼ平坦である。また，北端と南端も16.0mと平坦である。しかし調査区全体に最上部に造成用の土が約0.5mほど堆積しており，地表面は造成以前の耕作土面を表しているものではない。

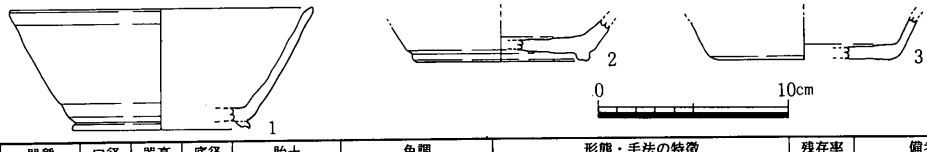
７区では遺構は全く検出されなかった。６区の遺構面に相当する標高15.5m前後は，７区では旧耕作土面に相当している。このことから７区では遺構面があるとすれば６区より低くなり，旧地表面は６区から７区に向かって下っていたものと考えられる。

２．調査の成果

７区では遺構は全く検出されなかった。包含層と考えられる暗灰褐色粘質土が部分的に0.1mほど堆積しているが，遺物は須恵器の細片が僅かに出土したにとどまる。この包含層と考えられる層の下に，６区からの続きの旧遺構面と考えられる灰褐色粘質土層があり，標高は15.4m前後である。

（１）包含層出土の遺物（第384図）

１～３は包含層出土遺物で，須恵器坏である。１は体部は直線的に長く伸びている。底部には外側に大きく開く高台を貼り付けている。２は断面方形の高台を貼り付けている。

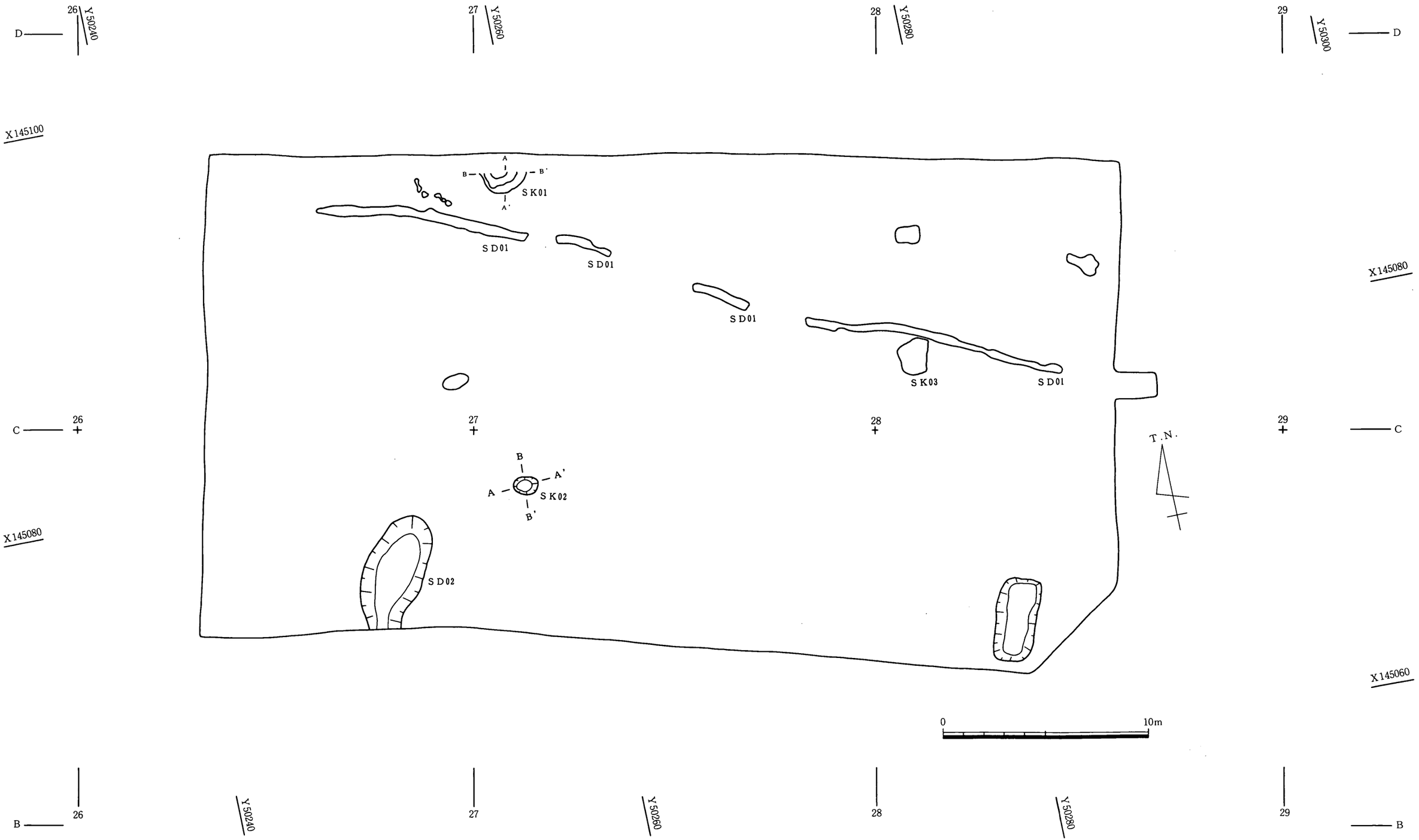


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
1	須・杯	16.0	6.4	9.3	細・普	灰	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ、高台外方に大きくふんばる	口径1/7	
2	須・杯			9.0	微・少	灰	体部外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ、底部外面回転ｹｽﾞﾘ	底径1/6	底部ヘラ切り
3	須・杯			9.2	微・少	灰	体部外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ、底部外面回転ｹｽﾞﾘ	底径1/4	

第384図　７区包含層出土遺物（１／４）

３．小結

７区は遺構は全く検出されなかった。しかし包含層からは古代の須恵器が出土している。他の調査区からはこの時代の遺構・遺物は検出されていないため，７区の北側か南側に古



第385図　8区遺構配置図（1／200）

代の遺構が広がる可能性がある。しかし７区は上部全体が削平されているため，本来は古代の遺構があったのかもしれない。

第8節　8区の調査

1．調査区の概要（第385図）

8区は南北約36m，東西48mである。調査区の地表面は西端で標高16.1m，東端で15.5mと西から東に向かって下っている。また北端は15.6m，南端は15.6mで南北は平坦である。

8区も全体に上部に0.4～0.6mほど造成土が盛られており，下部も撹乱が著しい。地表面から0.5mほど下の標高15.1mほどが遺構面となっており，遺構面は基本的には灰色砂礫土であるが，南西部では一部暗灰色砂土となっていた。

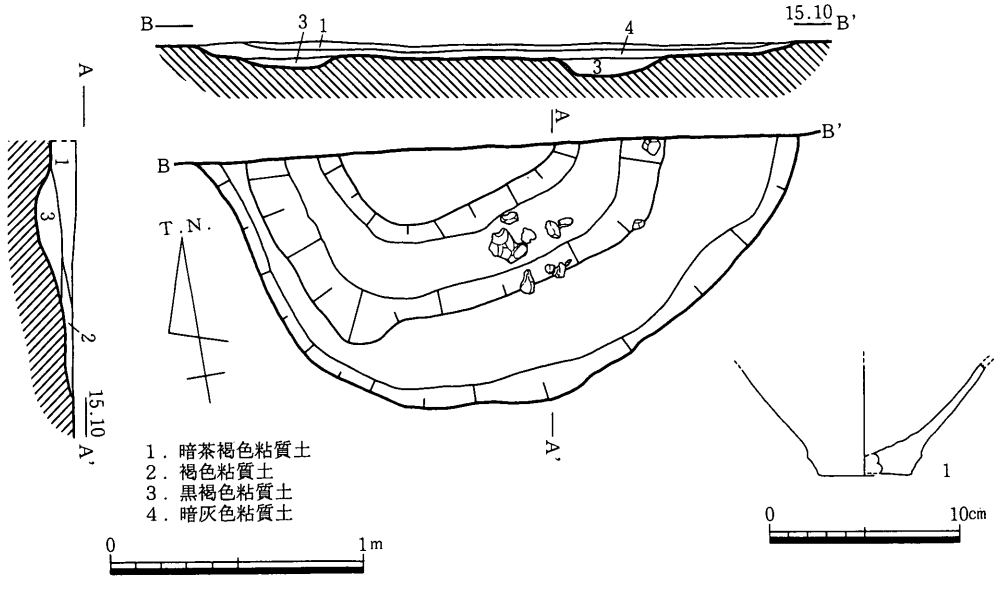
遺構は少なく，いずれも上部が削平されており残りの悪いものである。

2．調査の成果

（1）弥生時代の遺構・遺物

SK01（第386図）

8区の北壁際の中央やや西寄りで検出した土坑である。土坑の北側は調査区外へ続くた



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
1	弥・甕			5.0	細・多	黄灰	全体にマメツ	底径1/2	

第386図　8区SK01平・断面図（1／30），出土遺物（1／4）

め全体の形は不明であるが，調査区内の形から推定するとおそらく円形に近いものと思われる。調査区内では半月形で，長径2.4m，短径1.0mとなっている。土坑の内部には幅0.4mの溝が外郭に沿って掘られている。この溝は土坑の掘り込み面から6cmほど下の所から掘られ，深さは0.1m前後で埋土は黒褐色粘質土となっている。この溝の上には水平堆積する層が2層見られることから，この溝が土坑に伴うものであることは確実である。

遺物は土坑内の溝の中から少量出土した。1は甕の底部で突出気味である。砂粒の多い胎土である。弥生時代のものと考えられるが，詳しい時期は不明である。

SD01

8区の北部で検出した西北西－東南東方向の溝である。途中で2箇所ほど途切れているが，上部が削平されて溝の深い部分のみが残存した結果と考えられる。溝は断続的に30mほど続き，幅は0.5m前後で深さは0.1～0.2mである。断面は緩やかなU字形で，埋土は黒褐色粘質土の単一層である。遺物は出土しなかったが，消極的であるが埋土の色から弥生時代のものと考えておきたい。

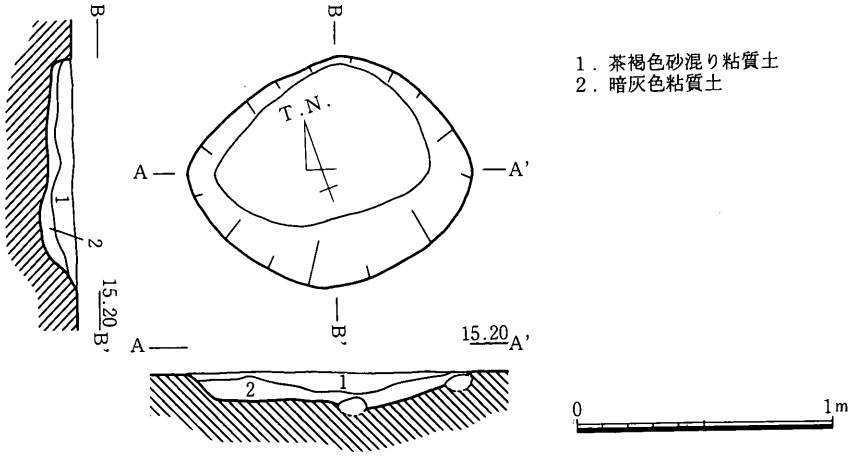
（2）近世の遺構・遺物

SD02

8区の南西部で検出した溝である。南壁から北へ6mの所から始まり，南側の調査区外へ延びている。先端部はやや北北東に曲がり膨らんでいるが，調査区の南壁際では細くなって調査区外へ至る。溝の幅は1.5～3.0mで，深さは0.2mほどである。断面形は緩やかなU字形で，埋土は黄褐色砂混じり粘土の単一層である。遺物は出土しなかったが，埋土や周辺との関係で近世のものと推測される。

SK02（第387図）

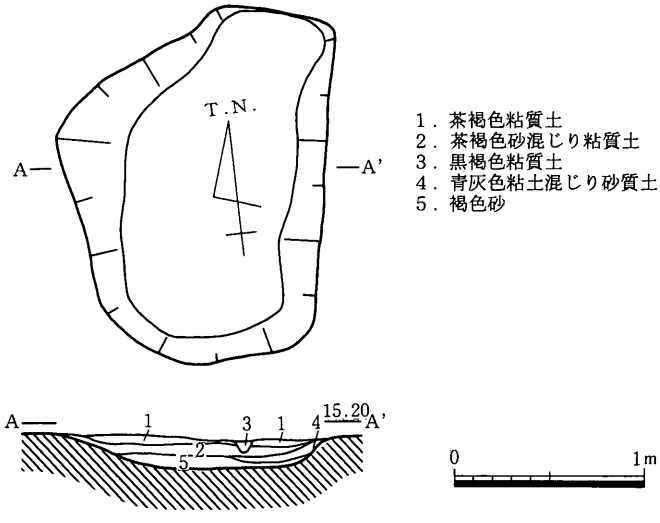
8区の中央やや南西寄りで，SD02の北東約4.5mの所で検出した土坑である。平面形は楕円形で，長径1.13m，短径0.87m，深さ0.14mとなっている。掘り込みの角度は北側が急になっている。底部はほぼ平坦であるが，やや南側が少し深くなっており，さらに地山の礫が一部露出している。埋土は上下2層に分層され，上層には茶褐色砂混じり粘質土が，下層にはやや粘性の強い暗灰色粘質土が堆積している。遺物は全く出土しなかったが，埋土や周辺との関係で近世のものと推測される。



第387図　8区ＳＫ02平・断面図（1／30）

ＳＫ03（第388図）

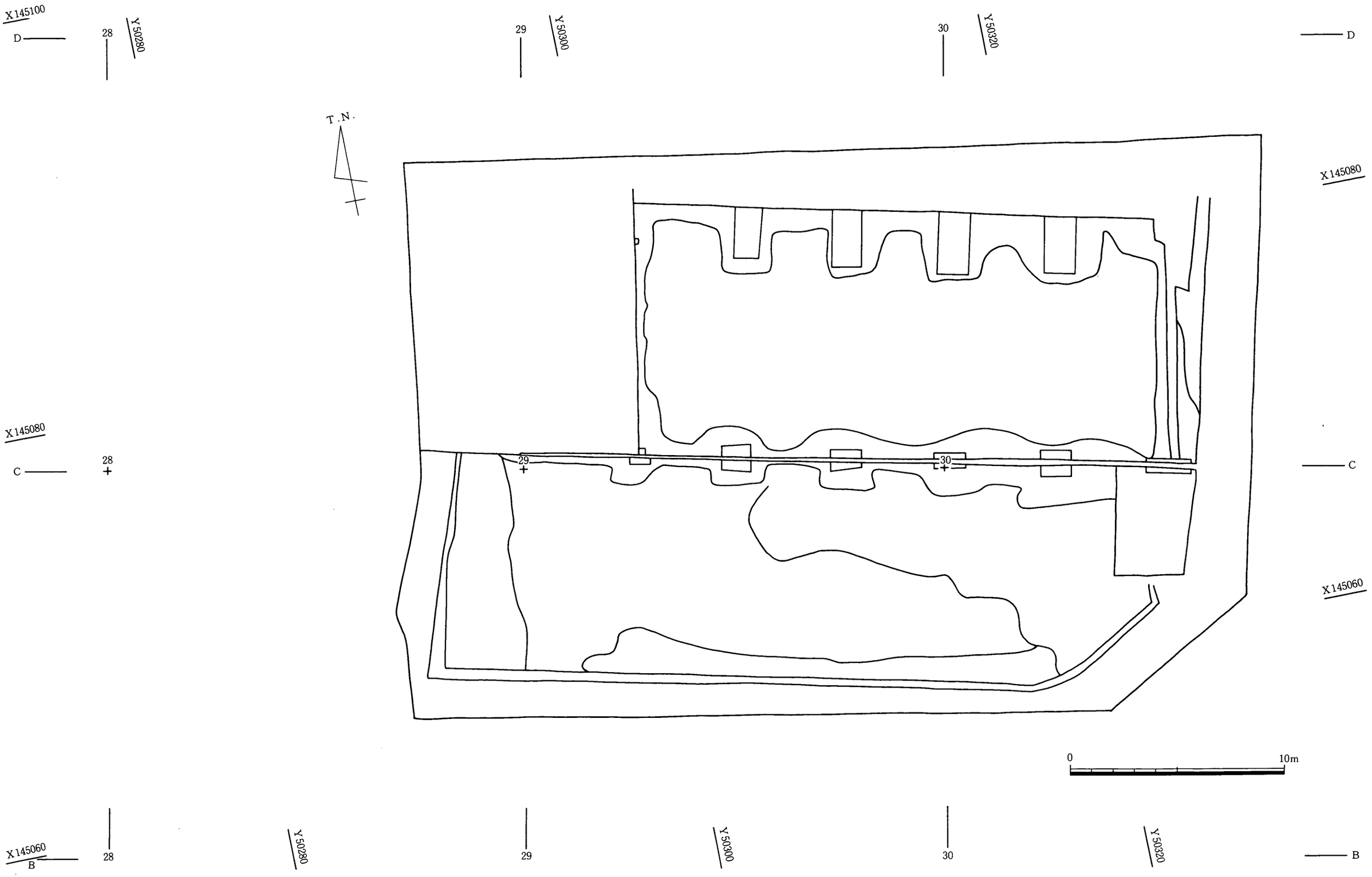
8区の東部で，ＳＤ01の南側に隣接する土坑である。平面形は不正形な五角形で，北側部分が突出している。掘り込みの角度は北側が急になっており，西側は緩くなっている。底部はほぼ平坦である。埋土は最上層に粘質土が堆積している他は，砂質土が中心で，最下層には褐色砂が堆積している。遺物は出土しなかったが，埋土などから近世のものと推測される。



第388図　8区ＳＫ03平・断面図（1／40）

3．小結

8区では弥生時代と近世の遺構を検出したが，遺構密度は疎で遺物もほとんど出土しなかった。遺構面も上部が削平されており，遺構の下部が僅かに残る程度であった。基本的に人々の生活の場ではないものと考えられる。



第389図　9区遺構配置図（1／200）

第9節　9区の調査

1．調査区の概要（第389図）

9区は南北35m，東西40mであるが東端部分が現有の国道に取り付くため広がっている調査区の地表面は西端で標高15.6m，東端で15.7mで平坦である。また北端と南端は15.6～15.7mでほぼ平坦である。

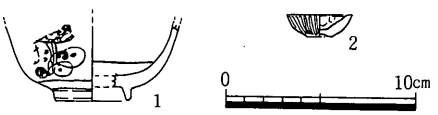
9区は鉄筋の建物が立退いた跡なので，建物の基礎が調査区内に残っていた。また造成土が全体に敷き詰められており，調査区全体が撹乱されていた。現地表面下0.7～0.8mで撹乱層が終わり，その下に削平された地山が検出された。地山は3～10cm大の礫を含む灰色砂礫層と灰色砂混じり粘土層で構成されている。

2．調査の成果

9区では撹乱のためか明確な遺構は検出されなかった。調査区の南半分の主に東側で，深さ5cm程度の落ち込み状のものを検出した。しかし遺物は出土せず，それが遺構の残存部というよりは自然の落ち込みか堆積と考えたほうが良いと思われる。

（1）包含層出土の遺物（第390図）

1・2は包含層から出土した遺物である。1は磁器碗で，体部は丸味をもって立ち上がる。2は緑釉陶器の紅皿と考えられる。口径3.4cm，器高1.1cmと小型のものである。底部には小さな削出し高台が付く。体部は肥厚しており，外面にはひだ状の沈線を縦に施している。内・外面に緑釉が付着していたが，外面のものは剥離している。紅の付着はなかった。



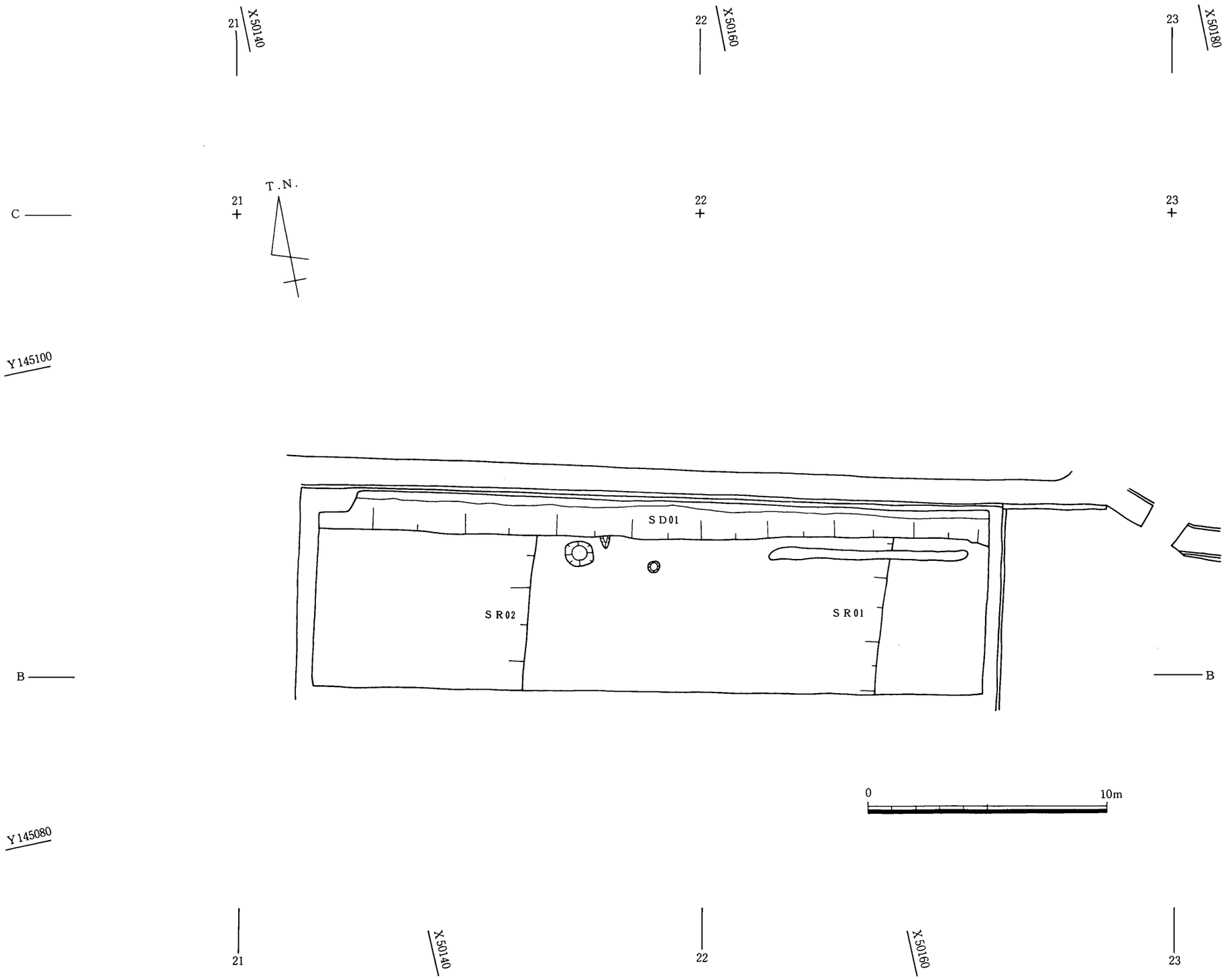
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
1	磁・碗			4.0	精緻	灰白	外面ナデ、内面ナデ、全体に釉	底径1/4	
2	緑・紅皿	3.4	1.1	1.2	精緻	灰白	外面ﾅﾃﾞ、内面指押え、削出し高台	全体1/2	内面に緑釉付着

第390図　9区包含層出土遺物（1／4）

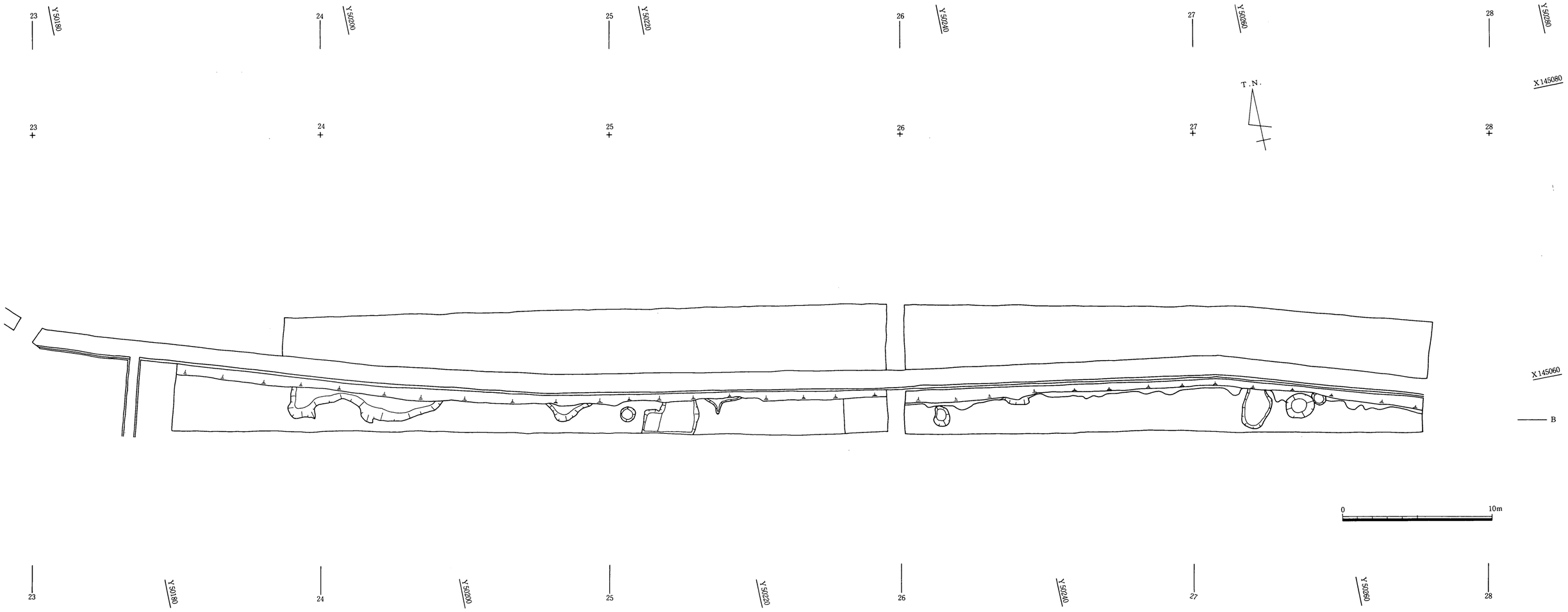
3．小結

9区では明確な遺構は検出されず，包含層から近世の遺物が少量出土したのみである。遺構面が全体に撹乱を受けており，本来の状態は分からない。9区の東側500mの所から始まる太田下・須川遺跡の西端の調査区では中世末の掘立柱建物を検出しているが，9区

と太田下・須川遺跡の間は撹乱が著しく，基本的に氾濫原である。9区の地山面が砂礫層と砂混じり粘土層であることから，ここも氾濫原の一部と考えられる。



第391図　10区遺構配置図１（１／200）



第392図　10区遺構配置図２（１／200）

第10節　10区の調査

1．調査区の概要（第391・392図）

10区は6～8区の南側に位置する，南北6～9m，東西140mと東西に細長い調査区である。調査区の地表面は東端で標高15.9m，中程の7区の南側で16.0m，西端で15.8mとなっており，7区の南側を頂点に東西へそれぞれ緩く下っている。また調査区の中央部分に現有の用水路があり，用水路より北側の部分はすべて撹乱されていた。

10区では東側部分で耕作土下0.5mの標高15.5m前後で，西側も耕作土下0.3～0.4mの標高15.4mぐらいで遺構面に達する。遺構面は東側で暗灰色砂質土，中程で黄灰色砂混じり粘質土，西側も黄灰色砂混じり粘質土となっている。

遺構・遺物とも全体的に少なく，現有の用水路の南側の部分で検出された。

2．調査の成果

（1）縄文時代の遺構・遺物

SR01（第393図）

6区の南側部分で検出した旧河道で，6区のSR01の続きである。旧河道の東側の部分を検出したにとどまり，全体の幅は不明である。東側の肩から緩やかに西に向かって深くなっており，深い部分で1.5mである。埋土は上層では粘質土，中層では砂層，下層には粘性の強い粘土層が主に堆積している。10区部分では遺物は出土しなかったが，6区のSR01と同じ縄文時代晩期と考えられる。

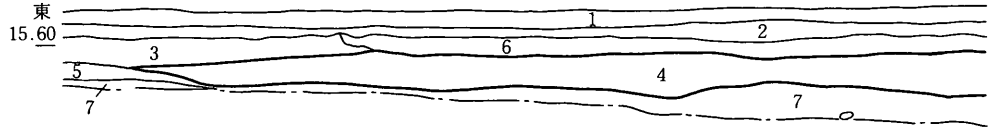
（2）弥生時代の遺構・遺物

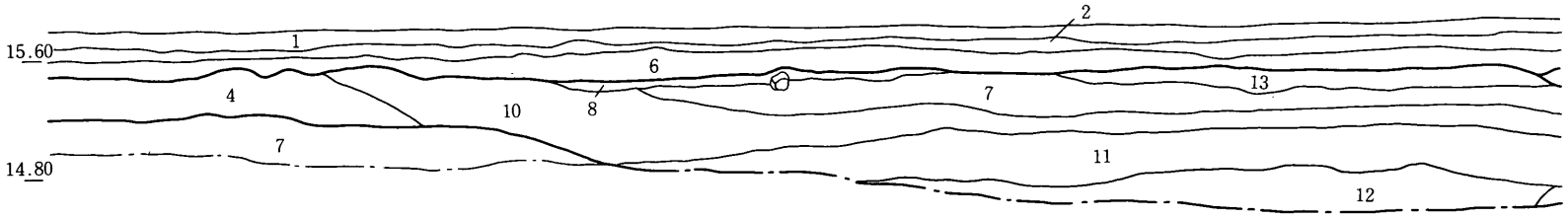
SR02（第393図）

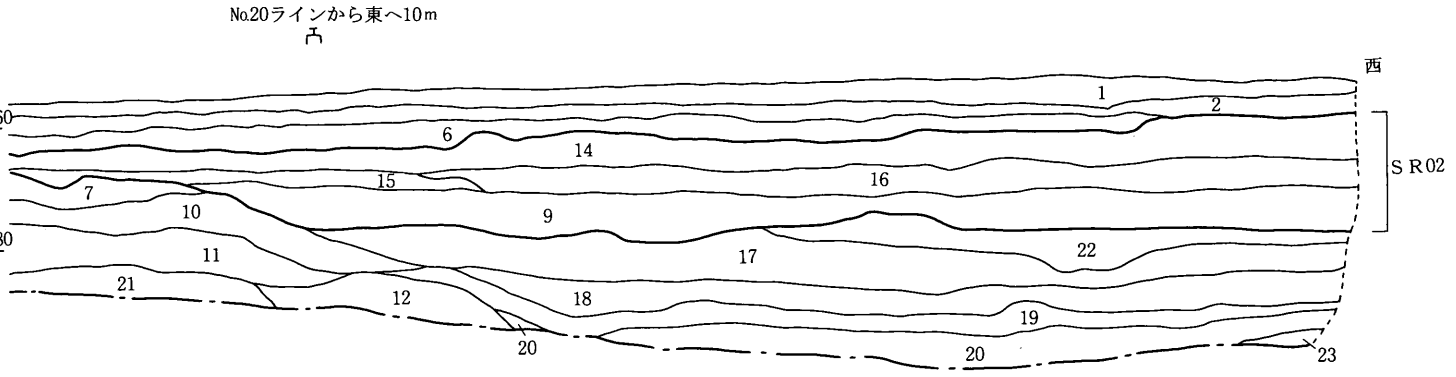
6区の南側部分で検出した旧河道で，6区のSR02の続きである。旧河道の東側の部分を検出したにとどまり，全体の幅は不明である。深さは0.7m程度で，中央部には粘性の強い黒色粘土が堆積しており，最下層には灰色砂混じり粘質土で，鉄分が沈着しており，一時期水が堆積していたものと考えられる。10区部分では遺物は出土しなかったが，6区のSR02と同じ弥生時代中期後半～後期初頭と考えられる。

第393図　10区南壁部分ＳＲ01・02断面図（１／50）

1．黄褐色砂質土
2．褐灰色粘質土
3．黄灰色砂混じり粘質土
4．暗黄灰色砂混じり粘質土
5．灰色砂混じり粘質土
6．暗褐色砂混じり粘質土
7．灰色砂質土
8．灰色砂
9．灰色砂混じり粘質土
10．燈褐色砂混じり粘質土
11．９より砂質強い
12．８より砂粗い
13．褐色粘質土
14．茶褐色粘質土
15．暗茶褐色粘土
16．黒色粘土
17．青灰色砂質土
18．青灰色砂
19．青灰色粘土
20．16より粘性強い
21．灰褐色砂礫土
22．灰褐色砂質土
23．暗灰色砂礫土







（3）近世の遺構・遺物

ＳＤ01

10区の西側で，６区の南側部分で検出した溝である。溝はＮ－81°－Ｅの方向に直線的に延びる。溝の北側は現有の用水路によって壊されており，全体の幅などは不明である。また７～８区の南側部分では，丁度現有の用水路と重なっているものと思われ，全く検出することはできなかった。検出できた部分では深いところで0.3ｍほどで，緩やかに北側に向かって深くなっている。埋土は淡黄灰色粘質土の単一層であった。遺物は近世の磁器碗などが少量出土したにとどまる。

３．小結

10区は東西に長く南北幅の狭い調査区であり，その中央部を東西方向に現有の用水路があるため，大部分は撹乱されていた。しかし用水路の南側では僅かに遺構が残っており，６区で検出した旧河道の続きを検出した。さらに６区の南側の部分では，用水路に半分壊されているが，近世の溝ＳＤ01を検出した。この溝は大部分が用水路に重なっているものと思われ，東側では検出されなかった。しかしＳＤ01は条里制に伴う溝と考えられ，このような条里制に伴う溝がなかなか検出出来ないのは，現在の溝や道に重なっていることが多いためと考えられる。その他には，近代～現代の土坑や落ち込み状遺構，野壷などが散在しているにとどまる。

高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第六冊

上天神遺跡

第1分冊

平成7年12月20日　発行

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762　香川県坂出市府中町字南谷5001－4
電話　（0877）48－2191（代表）

発行　香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

印刷　タナカ印刷株式会社
住所　香川県大川郡大内町三本松658－3
電話　（0879）25－0185

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第6冊

上天神遺跡

第2分冊

1995.12
香川県教育委員会
㈶香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第6冊

上天神遺跡

第2分冊

1995.12
香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

上天神遺跡　第2分冊

本文目次

第4章　自然科学調査の成果
第1節　井堰構築材および土坑から出土した種実の種類 …… (1)
第2節　上天神遺跡出土土器の胎土分析 …… (12)
第3節　高松市上天神遺跡出土土器に付着している赤色顔料 …… (30)
第5章　まとめ
第1節　高松平野における弥生時代の石器生産と流通 …… (37)
第2節　上天神遺跡における弥生後期土器の構成 …… (51)
第3節　上天神遺跡資料に先行する資料群 …… (94)
第4節　後期前半段階の資料群 …… (103)
第5節　上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器 …… (114)
第6節　上天神遺跡の他系統「在地」土器 …… (136)
第7節　上天神遺跡における石器石材の搬入状況 …… (140)
第8節　上天神遺跡出土赤色顔料付着資料について …… (145)
第9節　上天神遺跡の集落構成 …… (173)
第10節　基幹的潅漑水路と潅漑単位 …… (180)

挿図目次

第394図　木材（1）…… (8)
第395図　木材（2）…… (9)
第396図　木材（3）…… (10)
第397図　木材（4）・種実 …… (11)
第398図　胎土分析資料（4区SD08砂粒分類1）…… (14)
第399図　胎土分析資料（4区SD08砂粒分類1・2）…… (15)
第400図　胎土分析資料（4区SD08砂粒分類2・3）…… (16)
第401図　胎土分析資料（4区SD08砂粒分類3・4）…… (17)
第402図　胎土分析資料（4区SD08砂粒分類5・6，4区SK08）…… (18)
第403図　K_2O-CaO　散布図　上天神遺跡甕形土器の形態・
技法・胎土・色調の違いによる分析値の比較 …… (23)
第404図　$Fe_2O_3-TiO_2$　散布図　上天神遺跡甕形土器の形態・
技法・胎土・色調の違いによる分析値の比較 …… (23)
第405図　Sr－Rb　散布図　上天神遺跡甕形土器の形態・
技法・胎土・色調の違いによる分析値の比較 …… (24)
第406図　K_2O-CaO　散布図　讃岐各地域の遺跡出土土器の比較 …… (24)
第407図　$Fe_2O_3-TiO_2$　散布図　讃岐各地域の遺跡出土土器の比較 …… (25)
第408図　Sr－Rb　散布図　讃岐各地域の遺跡出土土器の比較 …… (25)
第409図　高松市内遺跡分布図 …… (42)
第410図　石器組成変遷図 …… (46)
第411図　金山付近遺跡分布図 …… (48)
第412図　広口壷A …… (53)
第413図　広口壷B …… (54)
第414図　広口壷C …… (54)
第415図　広口壷D …… (55)
第416図　広口壷E …… (56)
第417図　広口壷F …… (56)
第418図　直口壷A …… (57)

第419図　直口壷B …… (58)
第420図　直口壷C …… (59)
第421図　直口壷D …… (59)
第422図　直口壷E …… (60)
第423図　直口壷F …… (60)
第424図　直口壷G …… (60)
第425図　短頸壷A …… (61)
第426図　短頸壷B …… (61)
第427図　無頸壷 …… (62)
第428図　細頸壷 …… (62)
第429図　甕A …… (63)
第430図　甕B …… (64)
第431図　甕C …… (65)
第432図　甕D …… (65)
第433図　甕E …… (65)
第434図　甕F …… (66)
第435図　甕G・H …… (67)
第436図　大形甕 …… (68)
第437図　高坏A …… (70)
第438図　高坏B …… (71)
第439図　高坏C …… (72)
第440図　高坏D …… (72)
第441図　高坏E …… (73)
第442図　高坏F …… (73)
第443図　高坏G …… (74)
第444図　脚A …… (75)
第445図　脚B …… (77)
第446図　脚C …… (78)
第447図　脚D …… (79)
第448図　脚E・F・G・H …… (80)

第449図　装飾高坏 …… (81)
第450図　小形器台 …… (82)
第451図　小形器台脚 …… (83)
第452図　大形器台 …… (85)
第453図　大形鉢Ａ・Ｂ …… (87)
第454図　大形鉢Ｃ・Ｄ …… (88)
第455図　大形鉢Ｅ・Ｆ・Ｇ …… (89)
第456図　大形鉢Ｈ・Ｉ・Ｊ …… (90)
第457図　蓋・把手付鉢 …… (92)
第458図　支脚 …… (93)
第459図　彼ノ宗遺跡ＳＴ１９ …… (94)
第460図　矢ノ塚遺跡ＳＤ８５０３１ …… (95)
第461図　矢ノ塚遺跡ＳＸ８５００２ …… (96)
第462図　仲善寺遺跡ＳＨ９２０２ …… (98)
第463図　久米池南遺跡２号テラス（１） …… (100)
第464図　久米池南遺跡２号テラス（２） …… (101)
第465図　大空遺跡（１） …… (104)
第466図　大空遺跡（２） …… (105)
第467図　大空遺跡（３） …… (106)
第468図　小山南谷遺跡ＳＨ０３ …… (107)
第469図　林坊城遺跡ＳＸ０３（１） …… (108)
第470図　林坊城遺跡ＳＸ０３（２） …… (109)
第471図　空港跡地遺跡ＳＫ０１・０２・ＳＥ０１（１） …… (110)
第472図　空港跡地遺跡ＳＫ０１・０２・ＳＥ０１（２） …… (111)
第473図　高松平野における「胎土１類」土器の分布状況 …… (115)
第474図　高松平野における「胎土１類」土器出現頻度 …… (116)
第475図　搬入土器・讃岐（１） …… (121)
第476図　搬入土器・讃岐（２） …… (122)
第477図　搬入土器・吉備南部 …… (123)
第478図　搬入土器・阿波 …… (124)

第479図　搬入土器・西部瀬戸内諸地方 …… (125)
第480図　搬入土器・その他系統不明 …… (126)
第481図　近畿地方系統の「在地」土器 …… (137)
第482図　内面赤色顔料付着土器（1） …… (146)
第483図　内面赤色顔料付着土器（2） …… (147)
第484図　内面赤色顔料付着土器（3） …… (148)
第485図　把手付広片口皿の形態 …… (150)
第486図　把手付広片口皿の分類 …… (152)
第487図　把手付広片口皿の諸形態 …… (153)
第488図　上天神遺跡　集落単位1 …… (175)
第489図　上天神遺跡　集落単位2 …… (176)
第490図　上天神遺跡　集落単位3 …… (177)
第491図　上天神遺跡　集落単位4 …… (177)
第492図　上天神遺跡の集落構成 …… (178)
第493図　上天神遺跡の大形潅漑水路 …… (181)

図版目次

図版1　1区ＳＢ04・05（南から），ＳＢ02（南から）
図版2　1区ＳＤ01検出状態（南から），ＳＤ01上層砂層除去（西から）
図版3　1区ＳＤ07・ＳＢ06・07（西から），ＳＤ08・09（南から）
図版4　1区ＳＤ10・11（西から），ＳＲ01土層断面（南から）
図版5　3区全景，3区全景（東から）
図版6　3区ＳＢ01（北から），3区ＳＢ02（西から）
図版7　3区ＳＢ03（西から），3区ＳＢ04（東から）
図版8　3区ＳＤ01（南から），
　　3区ＳＤ01・02交点部分断面（Ｄ－Ｄ’）（南から）
図版9　3区ＳＤ02（北から），3区ＳＤ02遺物出土状況（南から）
図版10　3区ＳＤ02遺物出土状況（北から），
　　3区ＳＤ02遺物出土状況（南から）

図版11　3区ＳＤ02遺物出土状況（西から），
　　3区ＳＤ04遺物出土状況（北から）
図版12　3区ＳＫ01上層遺物出土状況（西から），
　　3区ＳＫ01中層遺物出土状況
図版13　3区ＳＲ01（東から），3区ＳＲ01井堰（東から）
図版14　3区ＳＲ01井堰（東から），3区ＳＤ03・ＳＲ02（北東から）
図版15　4区全景写真（東から），同上（南から）
図版16　4区調査前風景（西から），同上（南から）
図版17　4区C12•13遺構検出状態（南から），C13•14遺構検出状態（南から）
図版18　4区B13•14遺構検出状態（東から），C14•15遺構検出状態（南から）
図版19　4区C11•12遺構完掘状態（西から），B13•14遺構完掘状態（西から）
図版20　4区B15近世以降撹乱土坑群，BC16•17遺構完掘状態（南から）
図版21　4区ＳＨ01（南から），ＳＨ02（北から）
図版22　4区ＳＨ02中央穴，ＳＨ02付帯土坑（ＳＫ14）遺物出土状態
図版23　4区ＳＨ04（西から），ＳＨ04付帯土坑（ＳＫ19）
図版24　4区ＳＨ04付帯土坑（ＳＫ20），ＳＫ20遺物出土状態
図版25　4区ＳＢ01柱痕検出状態（西から），
　　ＳＢ03柱痕検出状態（南から）
図版26　4区ＳＢ04（東から），ＳＢ10（北から）
図版27　4区ＳＢ12（東から），ＳＢ14・15（西から）
図版28　4区ＳＢ15（西から），ＳＢ16（西から）
図版29　4区C12　ＳＤ02・05・08検出状態（南から），
　　B12　ＳＤ02・03・08・09検出状態（北から）
図版30　4区ＳＤ09完掘（北から），B12　ＳＤ08遺物出土状態（北から）
図版31　4区B12　ＳＤ08（北から），ＳＤ08土層断面
図版32　4区C12　ＳＤ08遺物出土状態（南から）
図版33　4区C15　ＳＤ16ａ・ｂ・ｃ・ｉ溝（南から），
　　C15　ＳＤ16ｆ溝完掘（南から）
図版34　4区B15　ＳＤ16検出状態（北から），B15　ＳＤ16ａ～ｃ溝（北から）
図版35　4区B15　ＳＤ16ｄ・ｅ溝（北から），

ＳＤ16ｆ溝遺物出土状態（北から）
図版36　4区B15　ＳＤ16ｆ溝完掘（北から）
図版37　4区C15　ＳＤ16ａ・ｂ・ｃ・ｉ溝検出状態（東から），
C15　ＳＤ16ａ・ｂ・ｃ・ｉ溝（東から）
図版38　4区C15　ＳＤ16ｆ溝遺物出土状態
図版39　4区ＳＤ16ｆ溝遺物出土状態
図版40　4区B15　ＳＤ16検出状態（西から），B15　ＳＤ16ａ～ｃ溝（西から）
図版41　4区B15　ＳＤ16ｆ溝遺物出土状態（西から），
ＳＤ16ｆ溝完掘（西から）
図版42　4区ＳＤ17検出状態（西から），ＳＤ17土層断面
図版43　4区ＳＤ04（西から），（東から），ＳＤ04土層断面
図版44　4区ＳＤ05（南から），ＳＢ06（北から）
図版45　4区ＳＫ01遺物出土状態，ＳＫ01
図版46　4区ＳＫ02遺物出土状態，ＳＫ03遺物出土状態
図版47　4区ＳＫ04，ＳＫ04遺物出土状態
図版48　4区ＳＫ05土層断面，ＳＫ05遺物出土状態
図版49　4区ＳＫ07，ＳＫ07土層断面
図版50　4区ＳＫ06土層断面，ＳＫ10遺物出土状態
図版51　4区ＳＫ11遺物出土状態
図版52　4区作業風景
図版53　5区全景，5区全景（東から）
図版54　5区ＳＤ03（東から），5区ＳＫ01（南から）
図版55　5区ＳＰ01遺物出土状況，5区ＳＸ01・ＳＦ01（東から）
図版56　5区ＳＸ01遺物出土状況，6区ＳＫ01（南東から）
図版57　6区ＳＲ01（東から），6区ＳＲ02（西から）
図版58　6区ＳＲ01・02断面（南から），7区全景（西から）
図版59　8区全景（西から），8区ＳＤ01，ＳＫ01（西から）
図版60　8区ＳＫ01（北から），9区全景（西から）
図版61　10区（8区南側）全景（東から），10区（7区南側）全景（西から）
図版62　10区（6区南側）ＳＤ01（東から），

10区（６区南側）ＳＲ01（東から）
図版 63～図版 71　１区出土遺物（１）～（９）
図版 72～図版138　３区出土遺物（１）～（67）
図版139～図版234　４区出土遺物（１）～（96）
図版235～図版237　５区出土遺物（１）～（３）
図版238　６区～９区出土遺物

表　目　次

第14表　井堰構築材の樹種同定結果 …… （２）
第15表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（１）…… (26)
第16表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（２）…… (27)
第17表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（３）…… (28)
第18表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（４）…… (29)
第19表　試料一覧と分析結果 …… (35)
第20表　上天神遺跡石器組成（遺跡全体）…… (38)
第21表　上天神遺跡石器組成（縄文晩期～弥生前期）…… (39)
第22表　上天神遺跡石器組成（弥生後期）…… (40)
第23表　上天神遺跡　弥生後期土器器種構成表 …… (52)
第24表　高松平野の弥生後期前半段階土器編年案 …… (112)
第25表　４区ＳＤ08「搬入」土器比率 …… (119)
第26表　４区ＳＤ16ｆ溝「搬入」土器比率 …… (120)
第27表　１・４区「搬入」土器一覧（１）…… (128)
第28表　１・４区「搬入」土器一覧（２）…… (129)
第29表　１・４区「搬入」土器一覧（３）…… (130)
第30表　１・４区「搬入」土器一覧（４）…… (131)
第31表　１・４区「搬入」土器一覧（５）…… (132)
第32表　１・４区「搬入」土器一覧（６）…… (133)
第33表　他系統「在地」土器の出現頻度 …… (138)
第34表　安山岩系統石材搬入量 …… (141)

第35表　サヌカイト搬入量 …… (142)
第36表　片岩系統石材搬入量 …… (143)
第37表　内面赤色顔料付着土器（1） …… (157)
第38表　内面赤色顔料付着土器（2） …… (158)
第39表　内面赤色顔料付着土器（3） …… (159)
第40表　内面赤色顔料付着土器（4） …… (160)
第41表　内面赤色顔料付着土器（5） …… (161)
第42表　内面赤色顔料付着土器（6） …… (162)
第43表　内面赤色顔料付着土器（7） …… (163)
第44表　内面赤色顔料付着土器（8） …… (164)
第45表　内面赤色顔料付着土器（9） …… (165)
第46表　内面赤色顔料付着土器（10） …… (166)
第47表　内面赤色顔料付着土器（11） …… (167)
第48表　内面赤色顔料付着土器（12） …… (168)
第49表　内面赤色顔料付着土器（13） …… (169)
第50表　内面赤色顔料付着土器（14） …… (170)
第51表　外面赤色顔料塗布土器（1） …… (171)
第52表　外面赤色顔料塗布土器（2） …… (172)
第53表　上天神遺跡　竪穴住居一覧 …… (173)
第54表　上天神遺跡　掘立柱建物一覧 …… (174)

第4章　自然科学調査の成果

第1節　井堰構築材および土坑から出土した種実の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高松平野における過去の植物利用に関する検討は，林・坊城遺跡や東山崎・水田遺跡などから出土した木製品の樹種同定を通じて行われてきた（パリノ・サーヴェイ株式会社，1992,1993a)。また，丸亀－坂出平野に位置する遺跡から出土した木製品についても樹種同定が行われており（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表)，いずれの場合も木材は主として遺跡周辺から得ていたと考えられる。

今回発掘調査が行われた上天神遺跡では，弥生時代後期中葉～後半と考えられる旧河道(SR01）から井堰が検出された。このような構築材は，その用途を考慮すれば容易に入手が可能な木材を使用し，特に樹種の選択はなかったと考えられる。川津下樋遺跡から出土した遺跡の樹種同定結果（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表）で構築材の種類数が多く，また転用材なども含まれていることは構築材に樹種の選択がなかったことを示す例といえる。したがって，構築材の樹種構成は，当該期の遺跡周辺の植生を反映している可能性がある。

本報告では，井堰の構築材について樹種同定を行い，その種類を明らかにするとともに，井堰周辺の植生について検討する。また，SK03から検出された種実についても，その種類を明らかにする。

1．井堰構築材の樹種

（1）試料

旧河道SR01（弥生時代後期中葉～後半）に構築されていた井堰の構築材45点（試料番号1～45）である。

遺構	時代・時期	番号	用　途	樹　種　名
旧河道（SR01）	弥生時代後期中葉～後半	1	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		2	井堰構築材（杭）	ヒノキ属
		3	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		4	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		5	井堰構築材（杭）	ヒノキ属
		6	井堰構築材	ヤマグワ
		7	井堰構築材	ヤマグワ
		8	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		9	井堰構築材	バラ属
		10	井堰構築材	マツ属複維管束亜属
		11	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		12	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		13	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		14	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		15	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		16	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		17	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		18	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		19	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		20	井堰構築材（杭）	広葉樹
		21	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		22	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		23	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		24	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		25	井堰構築材	広葉樹
		26	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		27	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		28	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		29	井堰構築材	広葉樹
		30	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		31	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		32	井堰構築材（杭）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		33	井堰構築材	広葉樹（散孔材）
		34	井堰構築材	ヤナギ属
		35	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		36	井堰構築材	広葉樹（散孔材）
		37	井堰構築材	広葉樹（散孔材）
		38	井堰構築材	ムクノキ
		39	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		40	井堰構築材	広葉樹
		41	井堰構築材	シイノキ属
		42	井堰構築材	ツブラジイ
		43	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		44	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		45	井堰構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

第14表　井堰構築材の樹種同定結果

（2）方法

剃刀の刃を用いて，試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製する。作製したプレパラートは，生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し，種類を同定する。

（3）結果

樹種同定結果を第14表に示す。試料には保存状態が良好でないために樹種の同定に至らないものも多かった。そのような試料については，確認できた範囲で木材組織の特徴などを記した。確認できた種類は，針葉樹2種類（マツ属複維管束亜属・ヒノキ属），広葉樹8種類（ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・ツブラジイ・シイノキ属・ムクノキ・ヤマグワ・バラ属）であった。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・**マツ属複維管束亜属**（*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.）　　**マツ科**

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで，晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状，放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は，単列，1～15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

・**ヒノキ属**（*Chamaecyparis* sp.）　　**ヒノキ科**

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか，分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列，1～15細胞高。

・**ヤナギ属**（*Salix* sp.）　　**ヤナギ科**

散孔材で，大型の道管が年輪全体にほぼ一様に分布する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，単列，1～15細胞高。木材組織の特徴から，試料は根材と判断できる。

・**コナラ属コナラ亜属クヌギ節**（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect.*Cerris* sp.）

ブナ科

環孔材で孔圏部は1～3列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・**コナラ属コナラ亜属コナラ節**（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect.*Prinus* sp.）

ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・**ツブラジイ**（*Castanopsis cuspidata*(Thunberg)Schottky）　**ブナ科シイノキ属**

環孔材～放射孔材で孔圏部は3～4列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

・**シイノキ属**（*Castanopsis* sp.）　**ブナ科**

環孔材～放射孔材で孔圏部は3～4列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～20細胞高。

上述したツブラジイまたはスダジイ（*C.cuspidata* var.sieboldii(Makino)Nakai）であるが，両種を分けるには至らなかった。

・**ムクノキ**（*Aphananthe aspera*(Thunb.)Planchon）　**ニレ科ムクノキ属**

散孔材で，道管は単独または2～3個が複合する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型，1～5細胞幅，1～20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・**ヤマグワ**（*Morus australis* Poiret）　**クワ科クワ属**

環孔材で孔圏部は1～5列，晩材部へ向かって管径を漸減させ，のちに塊状に複合する。道管は単穿孔を有し，壁孔は密に交互状に配列，小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型，1～6細胞幅，1～50細胞高で，しばしば結晶を含む。

・**バラ属**（*Rosa* sp.）　**バラ科**

環孔材で，孔圏部は1～2列，孔圏外でやや急激に径を減じて散在する。道管は単穿孔を有する。放射組織は異性，単列で1～10細胞高前後のものと，15細胞幅以上，100細胞高以上の大型のものとがある。

（4）考察

井堰の構築材は，川津下樋遺跡で樹種構成が豊富で転用材も含まれること（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表資料）等から，遺跡周辺で入手可能であった木材を利用し，特に

樹種の選択はなかったと推定される。出土した木材は，落葉広葉樹のコナラ亜属クヌギ節およびコナラ節が多く，他に落葉広葉樹3種類（ヤマグワ・ヤナギ属・バラ属），常緑広葉樹3種類（ツブラジイ・シイノキ属・ムクノキ），針葉樹2種類（複維管束亜属・ヒノキ属）が認められた。この結果から，遺跡周辺には，クヌギ節・コナラ節を中心とする落葉広葉樹やシイノキ属等の常緑広葉樹が生育していたことが推定される。本地域の植生は，これまでに行われてきた調査（パリノ・サーヴェイ株式会社，1990，1993bなど）や現在の植生等から，基本的にはアカガシ亜属・シイノキ属・クスノキ科等からなる暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）であったと考えられる。コナラ亜属などの落葉広葉樹についても，林縁部や集落周辺部で普通にみられたものと考えられる。また，弥生時代以降になると，マツ類が分布域を拡大したことも指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993b)。この原因として，稲作などの生業活動の活発化に伴う植生干渉が指摘されており，本遺跡周辺にもマツ林が分布していたことが推定される。

ところで，林・坊城遺跡で行われた花粉分析では，弥生時代以降アカガシ亜属の花粉化石が多産しているが，今回の調査では井堰の構築材にアカガシ亜属は1点も確認されなかった。また，アカガシ亜属の材は，これまでの調査結果から農具等の重要な素材であったことが明らかとなっており（島地・伊東，1988；伊東，1991），井堰の構築材に使用する木材の対象から外された可能性もある。これについては，本地域周辺における過去の様々な木材利用とあわせて考える必要があり，今後さらに資料を蓄積することが必要である。

今回の試料のうち，ヤナギ属（試料番号34）は，木材組織の特徴から根材と判断できる。またバラ属は，現在生育している種類等を考慮すれば，構築材として使用できるほどの太さ・大きさがあったとは考えられない。これらの木材は河道沿いに生育していたものが，何らかの形で流されて井堰でせき止められた場所に堆積したと考えられる。

2．土坑から出土した種実の種類

（1）試料

試料は，4区B-12地区SK03土坑の暗灰黄色粘砂層から採取された種実約200粒である。

（2）方法

双眼実体顕微鏡を用いて観察し，その形態的特徴から種類を同定する。同定後は，40%エタノール中に保存する。

（3）結果

同定の結果，破片も含めてすべてヒョウタン類の種子であった。以下に形態的特徴について記す。

・ヒョウタン類（*Lagenaria siceraria Standl.* sp.）　　**ウリ科ユウガオ属**

種子が多数検出された。褐色。長さ10㎜程度。長楕円形。

（4）考察

栽培植物であるヒョウタン類の利用は，主にヒョウタンは容器に，ユウガオ（カンピョウ）は果肉を食用とする。干瓢はユウガオの果実を細く削って干したものである。種子の検出例は，現在では福井県鳥浜貝塚の縄文時代前期の貝塚が初めてとされ，弥生時代以降には各地で検出される（粉川，1989）。SK03は本遺跡の中心をなす遺構・遺物とほぼ同時期の弥生時代後期初頭の遺構である。したがって，この時代には本遺跡周辺でヒョウタン類の栽培が行なわれていたことが推測される。

なお，今回検出されたヒョウタン類の種子は，色・大きさ・形質などが互いに良く似ていることから，同一の品種とみられる。藤下（1980）によれば，弥生時代中・後期の遺跡より出土したヒョウタン類の果実からは，１果当たり平均154個の種子が取り出せたと報告している。今回の検出種子数はその範囲内にあり，産出状況も同一層準に集中しているため，元は一個の果実中に含まれていた種子とも考えうる。これらの種子は，種子だけあるいは果実ごと土坑内に入ったものと考えられる。SK03の用途が明らかになれば，廃棄されたのか納められたかについての可能性も検討できるであろう。

＜引用文献＞

藤下典之（1980）本邦各地の遺跡から出土したウリ科栽培植物の遺体について　－特に遺跡の編年とCucumis meloの種子の大きさ－.「考古学・美術史の自然科学的研究」，p.223-233，日本学術振興会.

伊東隆夫（1991）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ．木材研究・資料，26，p.91-189

粉川昭平（1989）穀物以外の植物食．金関　恕・佐原　眞編「弥生文化の研究２　生業」，p.112-115，雄山閣.

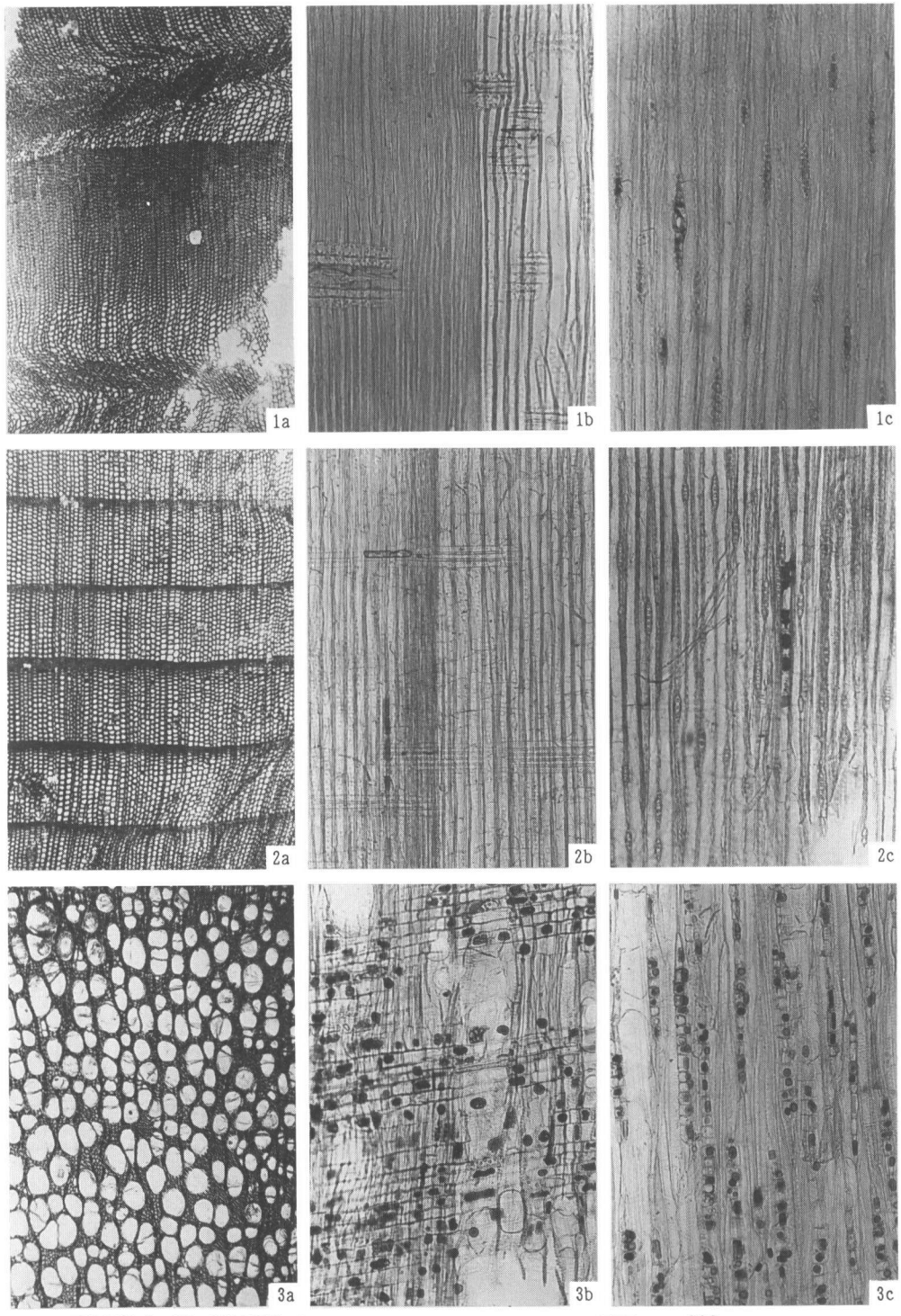
パリノ・サーヴェイ株式会社（1990）下川津遺跡における花粉・珪藻分析委託報告.「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ　下川津遺跡　－第２分冊－」，p.479-519，香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）木製品の樹種.「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊　東山崎・水田遺跡　第1分冊」, p.358-368, 香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993a）林・坊城遺跡自然河川出土木材の樹種.「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　林・坊城遺跡」, p.224-238, ㈶香川県埋蔵文化財調査センター, 他

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993b）花粉分析とプラント・オパール分析.「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　林・坊城遺跡」, p.239-263, ㈶香川県埋蔵文化財調査センター, 他

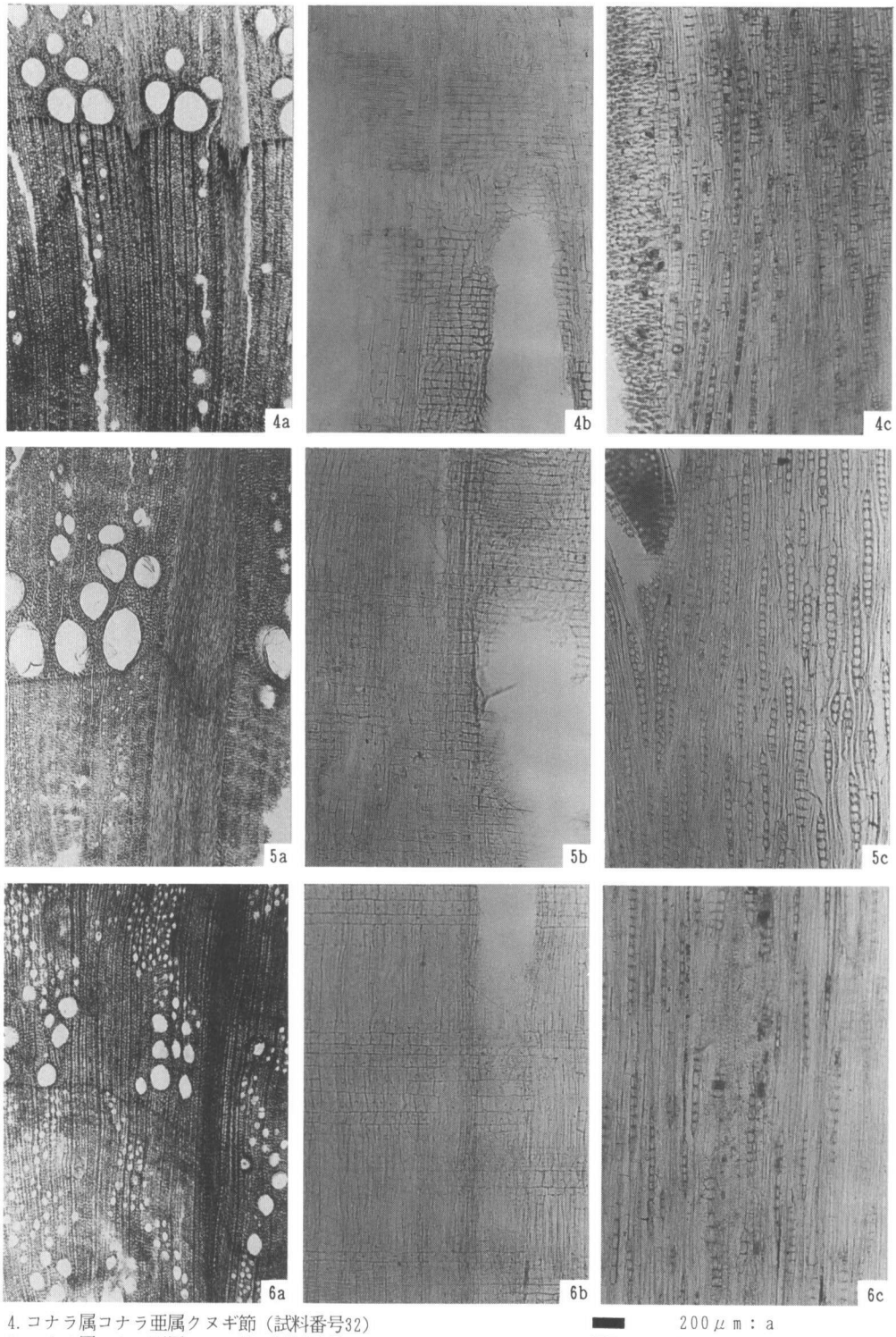
島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧. 296p, 雄山閣



1. マツ属複維管束亜属（試料番号10）
2. ヒノキ属（試料番号５）
3. ヤナギ属（試料番号34）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

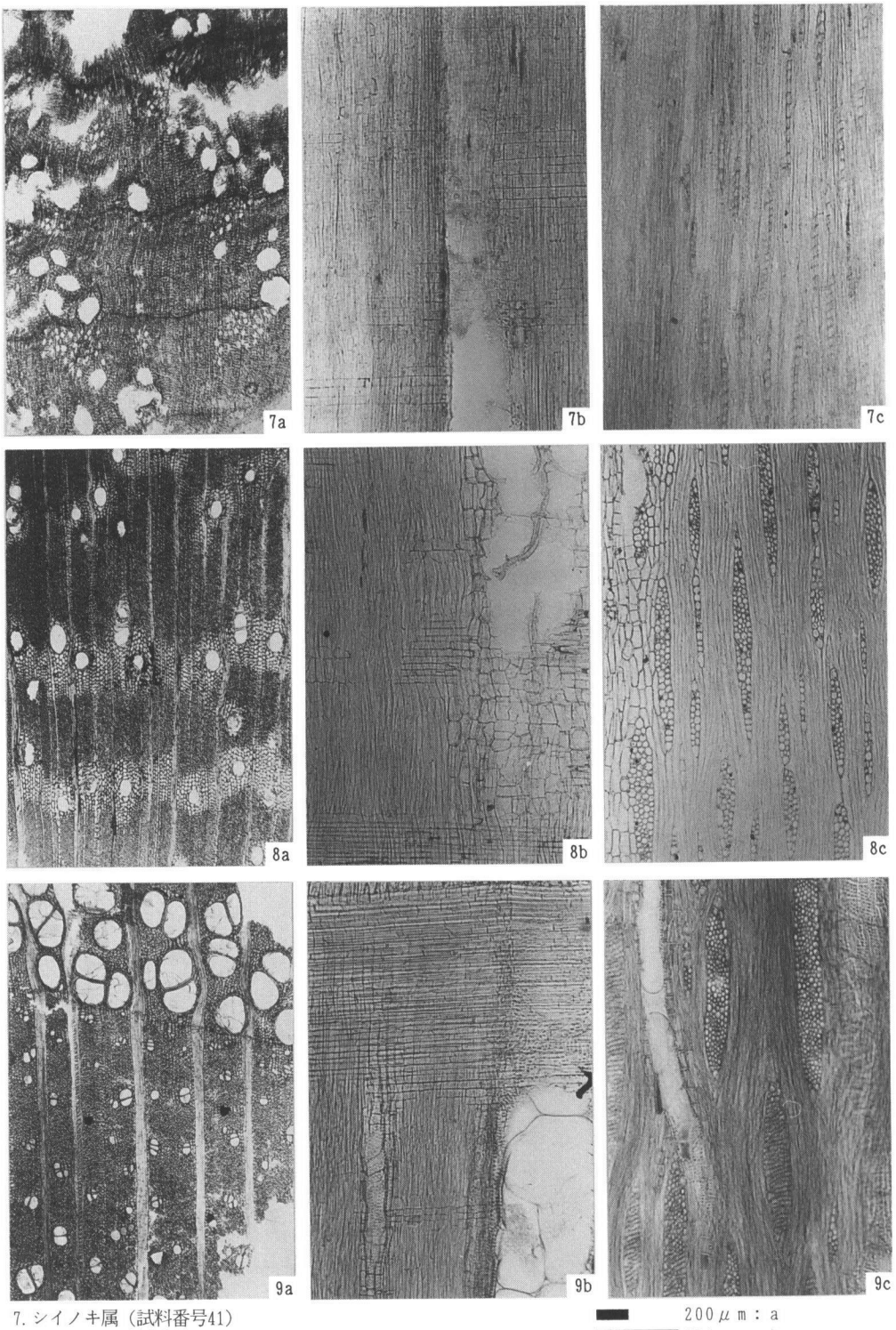
第394図　木材（１）



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号32）
5. コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号31）
6. ツブラジイ（試料番号42）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

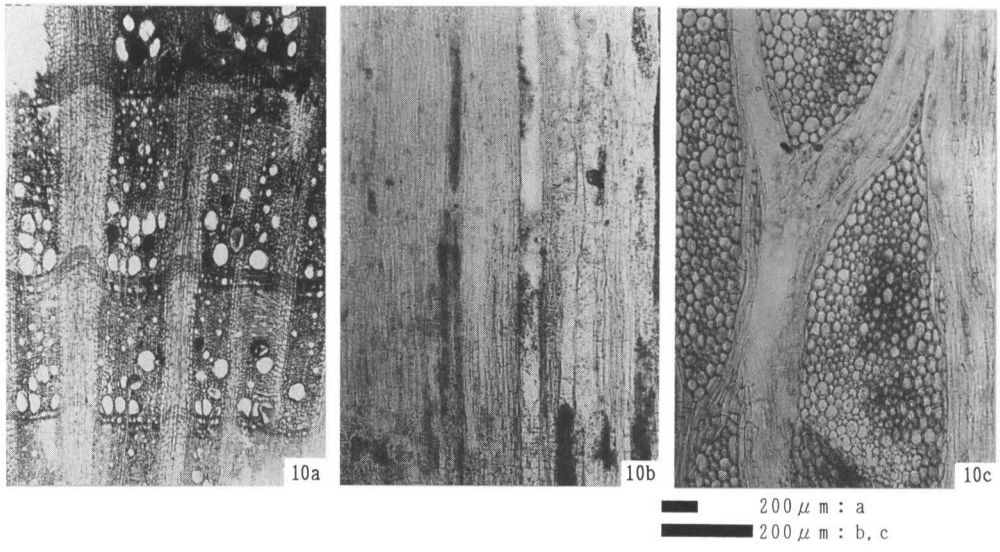
第395図　木材（2）



7. シイノキ属（試料番号41）
8. ムクノキ（試料番号38）
9. ヤマグワ（試料番号６）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

第396図　木材（３）



10. バラ属（試料番号９）　a：木口，b：柾目，c：板目
11. ヒョウタン類 種子（SK03）

第397図　木材（４）・種実

第２節　上天神遺跡出土土器の胎土分析

（１）分析試料説明

１．分析試料の器種分類は第５章２節上天神遺跡における弥生後期土器の構成に示した器種名称による。大部分が後期初頭段階に位置づけうる試料であるが，甕Ｆ類は後期前葉以降の後出形態，同Ｇ類は，いわゆる「下川津Ｂ類」土器に属し，後期後葉に下る試料である。Ｈ類は吉備系二重口縁甕で後期末葉ないしは古墳時代初頭に位置づけられる。また甕Ａ類のうち，Ａ１類は後期初頭（古相）にＡ２類は（新相）に位置づけられている。

２．砂粒分類１～６は依頼者が肉眼観察に基づき暫定的に分類した所見で，次に示した基準による。

１：概ね橙色～灰黄色呈し，0.5㎜以下の角閃石細粒を極めて多く含み，他種砂粒をほとんど交えない。

２：概ね橙色～明褐色を呈し，0.5㎜以下の角閃石細粒を極めて多く含むと共に，同程度の雲母粒を多く含む。

３：概ね橙色～灰黄色を呈し，0.5㎜以下の角閃石細粒を極めて多く含むと共に，１㎜以下の石英などの白色粒を多く含む。

４：概ね橙色～明褐色を呈し，0.5㎜以下の角閃石細粒を極めて多く含むと共に，石英などの白色粒，雲母粒および赤色粒（焼粘土か？）を含む。

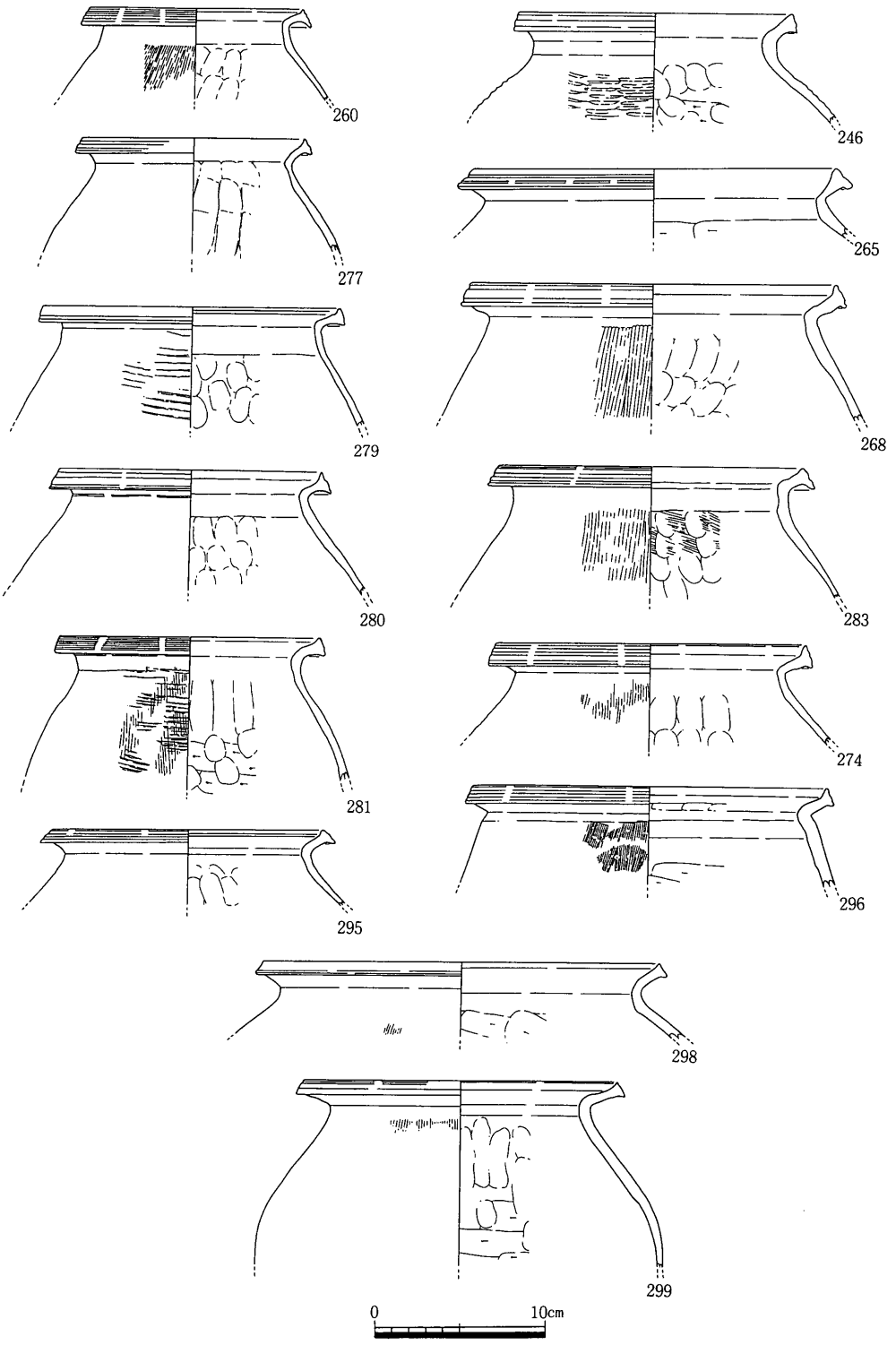
５：概ね灰白色を呈し，石英など白色粒と0.5㎜以下の角閃石細粒を少量含む。

６：概ね淡褐色を呈し，石英など白色粒と0.5㎜以下の角閃石細粒を少量含む。

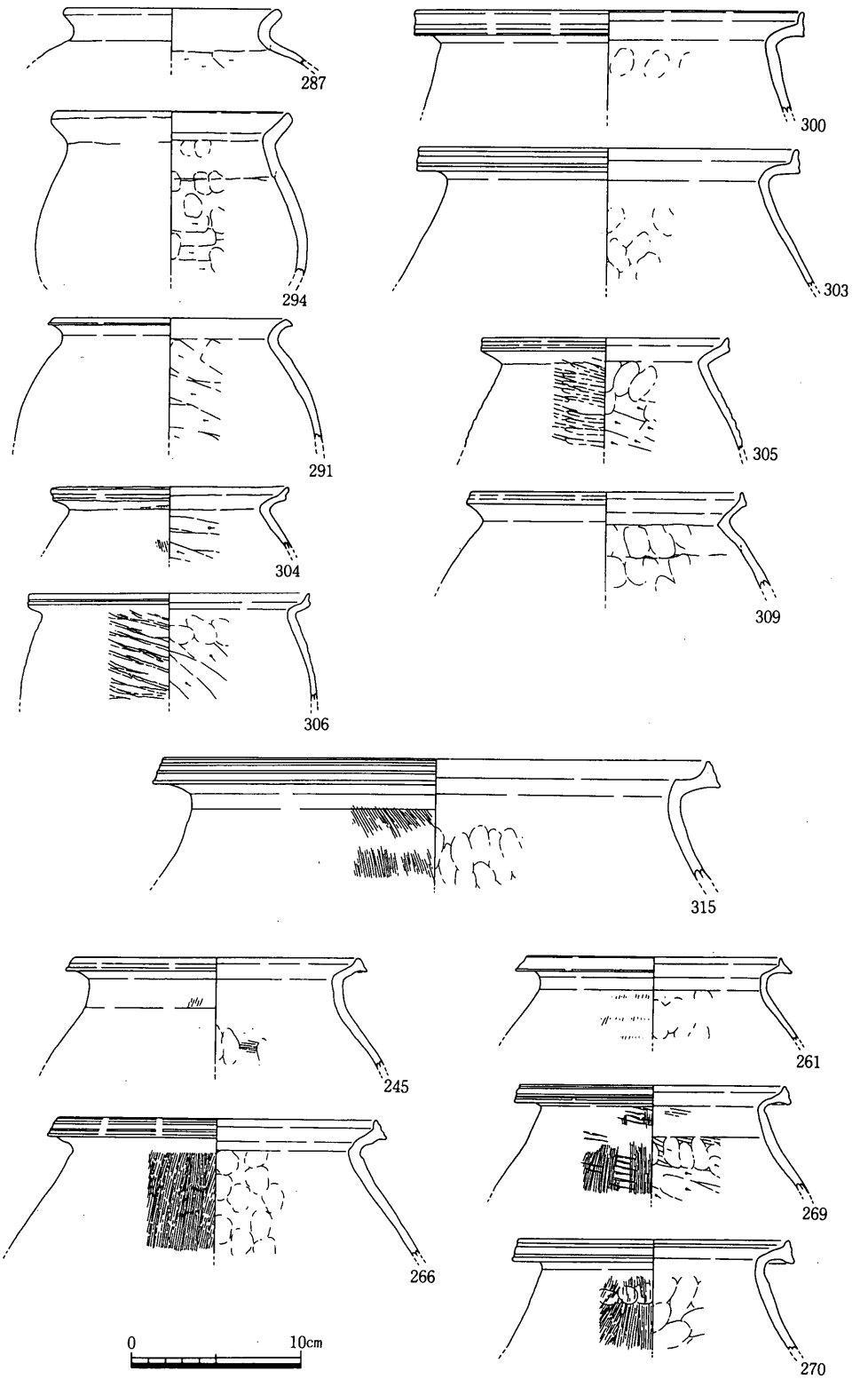
なお以上の分類のうち，第５章第５節で胎土１類「在地品」とした，上天神遺跡資料

の大部分を占めるのは1～4類である。5・6類は「搬入品」としたものである。

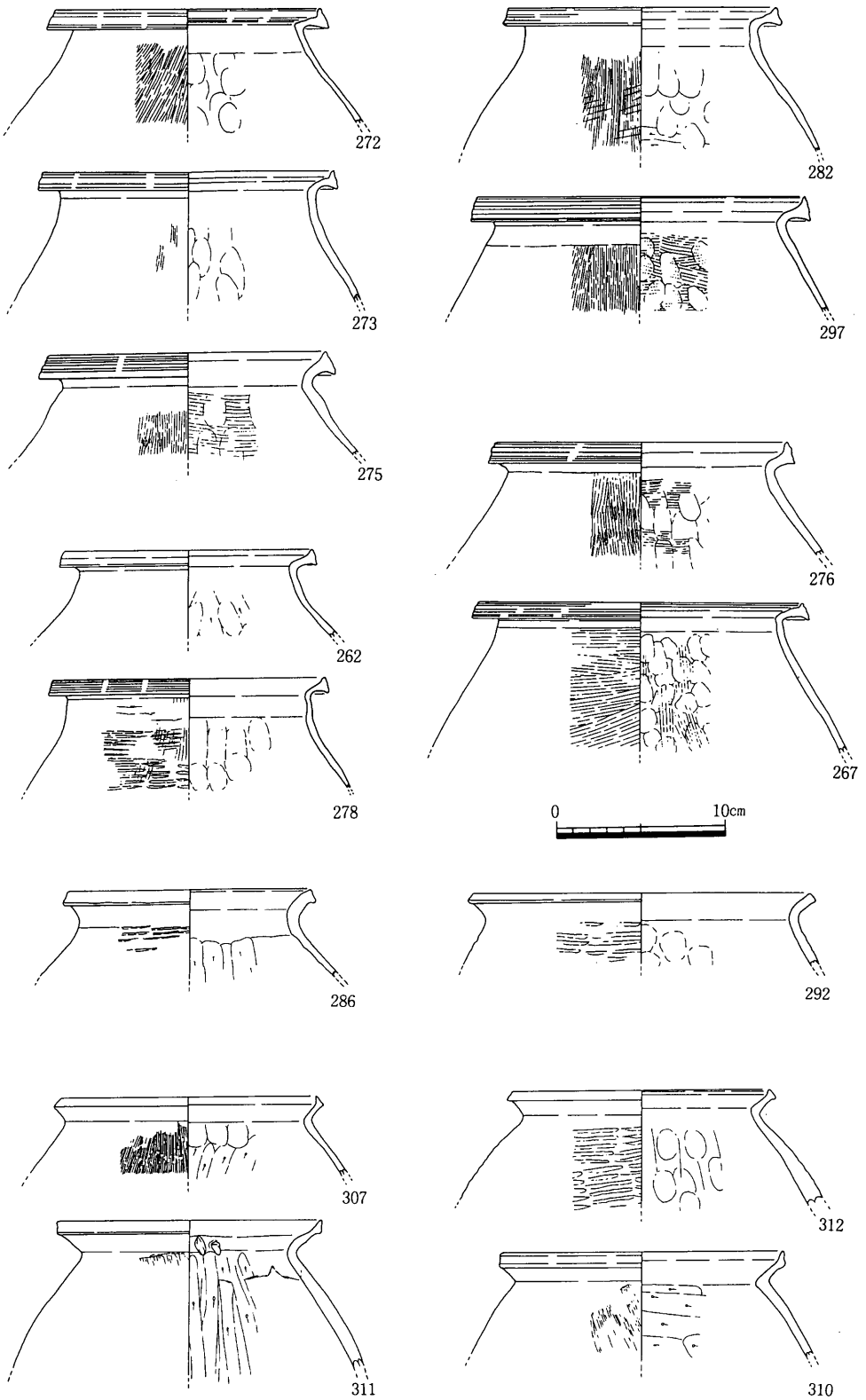
3．善通寺市旧練兵場遺跡，綾歌町石塚山2号墳，大内町仲善寺遺跡，志度町八丁地遺跡の各資料は香川県教育委員会文化行政課等が実施した調査に関わるもので，以前白石氏が分析を行ったものである。今回，上天神遺跡資料の分析にあたって，参考資料として提示いただいた。なお，これらの資料で「高松平野からの搬入」とされたのは，概ね本報告書において「胎土1類」（第5章第5節参照）としたものに該当するが，その識別は各調査担当・報告者の所見で，必ずしも本報告書の所見と合致するものではない。



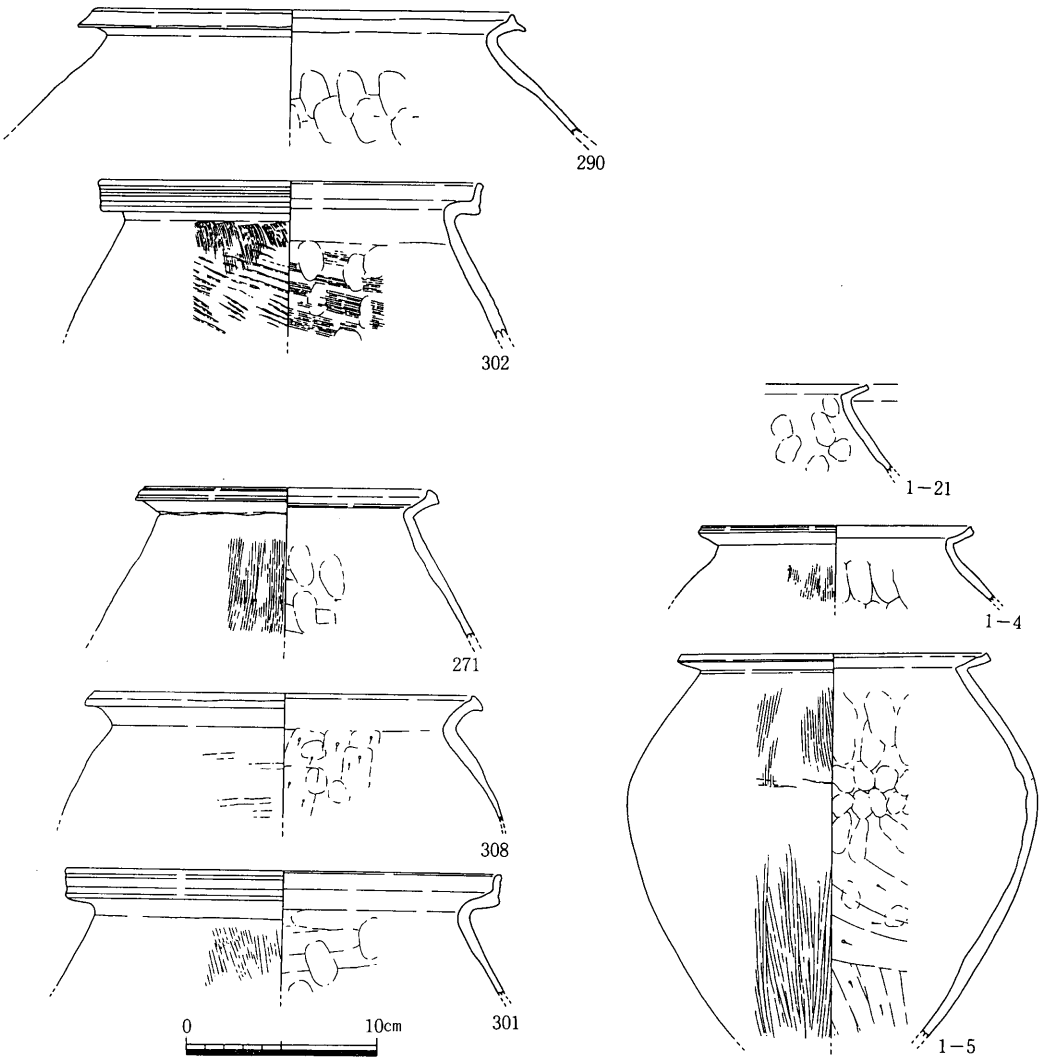
第398図　胎土分析資料（４区ＳＤ08砂粒分類１）



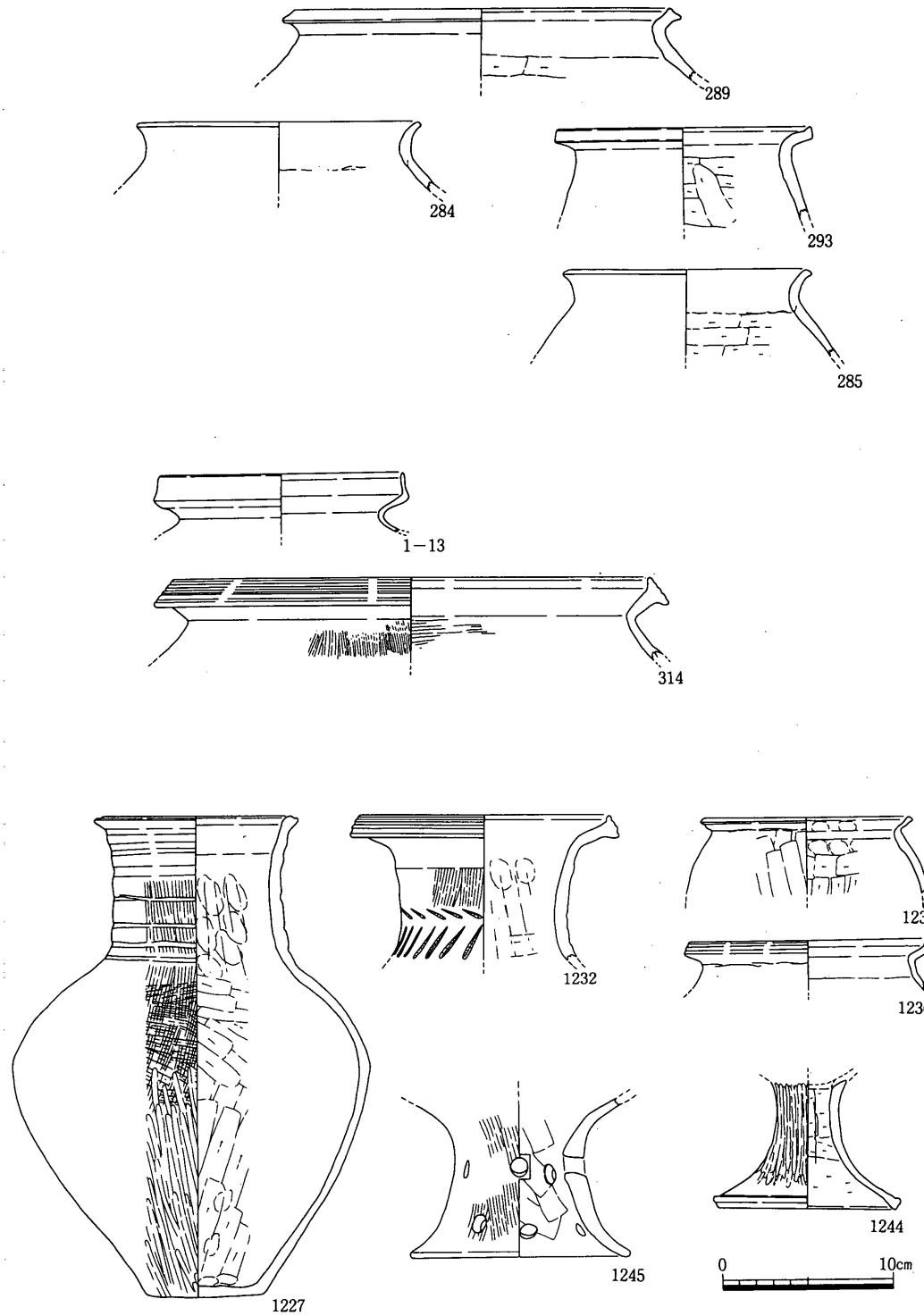
第399図　胎土分析資料（４区ＳＤ08砂粒分類１・２）



第400図　胎土分析資料（４区ＳＤ08砂粒分類２・３）



第401図　胎土分析資料（４区ＳＤ08砂粒分類３・４）



第402図　胎土分析資料（４区ＳＤ08砂粒分類５・６，４区ＳＫ08）

（２）上天神遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白石　純

１．はじめに

この分析では，蛍光Ｘ線分析法による胎土分析で以下に述べる点について検討した。

（１）上天神遺跡出土の弥生時代後期初頭の甕[(1)]で，形態・技法的および肉眼観察による胎土・色調から分類[(2)]した土器群が蛍光Ｘ線分析法でどのように分類されるか。

（２）上天神遺跡出土の土器と讃岐地方の他地域の遺跡出土土器（善通寺市旧練兵場遺跡保育所調査区，綾歌町石塚山２号墳，大川郡大内町仲善寺遺跡２次調査，大川郡志度町八丁地遺跡）との胎土分析値の比較。

（３）讃岐地方と吉備地方の弥生時代後期から古墳時代初頭土器の胎土分析値の差異について。

２．分析方法および試料について

分析装置は，波長分散型蛍光Ｘ線分析装置（理学電機製KG-４型）を用い，測定試料の作製，測定方法・条件は現在まで筆者が行っている方法である[(3)]。

分析試料は，第15～18表に掲載した上天神遺跡64点（甕60，壷２，高杯２），旧練兵場遺跡11点（甕５，壷３，鉢３），石塚山２号墳１点，八丁地遺跡22点（甕19，高杯２，製塩土器１），仲善寺遺跡２次５点（甕４，壷１）の合計103点である。

３．分析結果

（１）の検討課題である上天神遺跡出土の甕類で形態・技法的な分類[(4)]と肉眼観察による胎土・色調からの分類[(5)]が分析値ではどのような差異になるかでは，第403図K_2O-CaO，第404図Fe_2O_3-TiO_2，第405図Sr-Rbの各散布図で検討した。この結果，第403・404・405図とも形態・技法的に分類された甕の胎土が分析値に顕著な差としてあらわれなかった。しかし，肉眼観察により胎土・色調から分類した甕では分析値に差がみられた。

第403図では大きく三つのグループに，第404・405図では二つのグループに分かれた。一つは試料番号１～29，31～34，38～52，54～57，59～64のグループで，胎土に0.5㎜以下の角閃石を多く含み，色調が橙・灰黄・明褐色を呈している。（砂粒分類１～４）。二

つめは30，35，36，37で，石英などの白色粒を含み，灰白色を呈するグループ（砂粒分類5）。三つめは53と58で，単独でほかのグループと離れてプロットし，胎土に石英の白色粒・角閃石を含み褐色を呈している（砂粒分類6）。なお，35は第403図でK_2O量が非常に多く，1点だけ単独でプロットした。

また，砂粒分類5と6は形態・技法的に遺跡の外からの搬入品と考えられており[6]，58は吉備系の甕形土器である。

（2）の検討課題である上天神遺跡と讃岐の他地域の遺跡出土資料とを比較し，讃岐地方の各地域で差異があるかどうかでは，第406・407・408図から以下の4つに分かれることが推定された。

Ⅰ……　上天神遺跡，仲善寺遺跡2次（高松平野からの搬入品[6]），八丁地遺跡（高松からの搬入品），石塚山2号墳

Ⅱ……　旧練兵場遺跡保育所調査区（高松平野からの搬入および在地で生産）

Ⅲ……　八丁地遺跡（在地で生産）

Ⅳ……　八丁地遺跡（形態・技法的には異なるが胎土的には高松平野部に似ている。）

このように，讃岐の東西地域からの遺跡で出土した土器の間では，胎土分析値に差がみられた。たとえば，Ⅰのグループのうち仲善寺と八丁地の高松平野部からの搬入品と考えられる土器は，上天神（高松平野部）の土器と重なることから，現段階では高松平野からの搬入と推測される。また，Ⅱの旧練兵場とⅢの八丁地の在地で生産された土器は，Ⅰと明確に識別できた。

（3）讃岐地方と吉備地方南部[7]弥生時代後期から古墳時代初頭の土器の間での分析値の比較では，（2）でグループ分けしたⅢとⅣが吉備地方の範囲とほぼ重なり，Ⅱも一部分重なった。しかし，Ⅰのグループは吉備地方の範囲とはっきり識別できた（第406・407・408図）。

また，（1）で検討した上天神遺跡の搬入品のうち58（吉備系の甕）は吉備地方（足守川地域）の分布範囲に入り，30，35，36，37も吉備地方の範囲にほぼ入ったが，53は第406・407・408図で讃岐と吉備の中間にプロットされた。そして，八丁地の在地産と形態・技法は異なるが高松平野からの搬入と考えられる土器は吉備の範囲に入る結果となった（第406・407・408図）。

4．まとめ

以上の分析結果をまとめると，

1）上天神遺跡出土の甕形土器の形態・技法的，胎土・色調の差異が分析値でどのようになるかでは，肉眼観察による胎土・色調による差異が分析値にも顕著にあらわれた。この差の起因としては，胎土中に含まれる角閃石の有無および含有量によると考えられる。

2）讃岐の各地域の平野，水系ごとの遺跡出土土器の比較では，今回分析した土器から上天神（高松平野），旧練兵場（西部），八丁地（東部）の3地域に分かれた。これは，各平野，水系ごとに胎土に顕著な差が見られることを示唆しており，今後各平野，水系ごとの土器試料の蓄積を行い再検討しなければならない。

3）讃岐と吉備南部の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器に差がみられた。特に，上天神（高松平野）と吉備との間では明確に識別できた。しかし，八丁地（在地産，形態・技法は異なるが高松平野から）のように，吉備の範囲に入る遺跡もあり，讃岐の各地域の試料を増やして再検討する必要がある。

また，上天神の搬入品と考えられる30，35，36，37，53，58の土器のうち53以外は吉備南部の範囲に入り，この分析データからは吉備からの搬入品と推定されるが，八丁地遺跡のように吉備の範囲に入る土器もあり，どこからの搬入品かを推定するにはさらに多くの試料の蓄積が必要である。

以上，推測の域をでない不十分な分析結果となったが，再三述べているように分析試料の蓄積，器種・時期の限定など分析の前段階での試料選択が必要であることを改めて考えさせられた分析結果であった。

この分析を行うにあたり，香川県教育委員会，香川県埋蔵文化財調査センターの職員の方々には大変お世話になった末筆ながら記して感謝の意を表します。

註

(1) 試料提供者である大久保徹也氏により器種により混和材を変える可能性を想定して，甕の1器種に限定した。

(2) 試料提供者の大久保徹也氏により形態・技法的および胎土・色調で分類された試料を分析した。

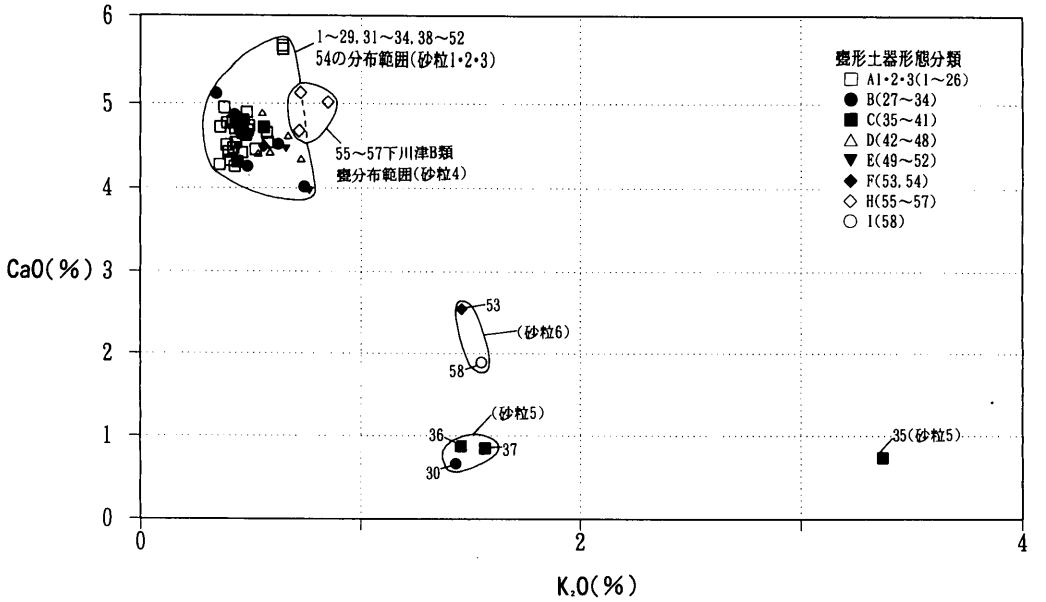
(3) 白石　純「蛍光X線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（Ⅱ）」岡山理科大学蒜山研究所研究報告　第12号　1986.

(4)　上天神遺跡出土の甕の形態・技法的な分類では10形態に分類されている。

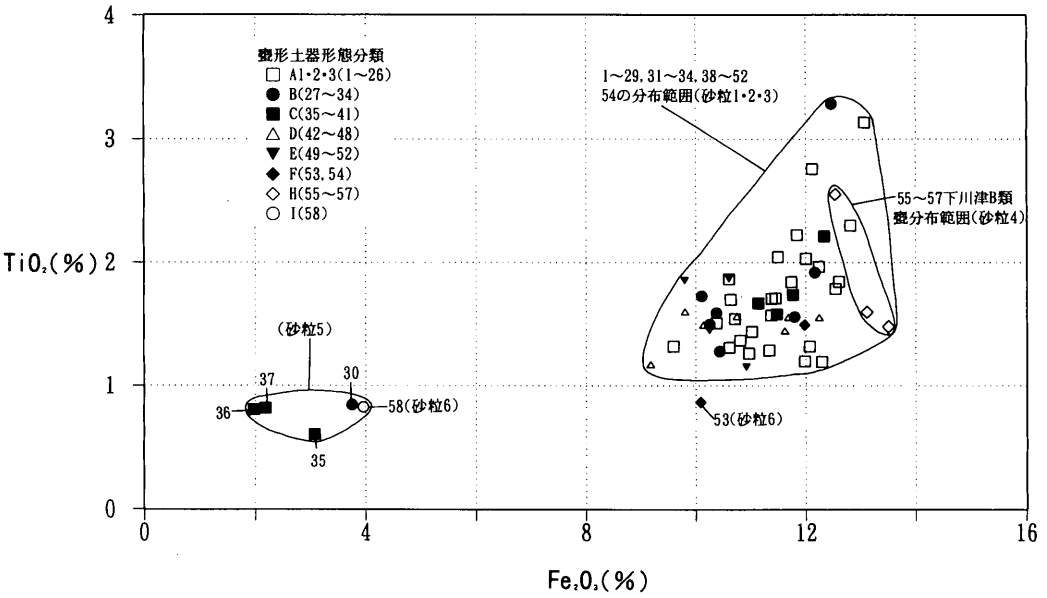
(5)　上天神遺跡出土の甕の肉眼観察による胎土・色調の分類では6分類されている。

(6)　旧練兵場遺跡保育所調査区，仲善寺遺跡2次，八丁地遺跡，石塚山2号墳の形態・技法的および胎土・色調による分類は試料提供者の森下英治氏，國木健司氏による。

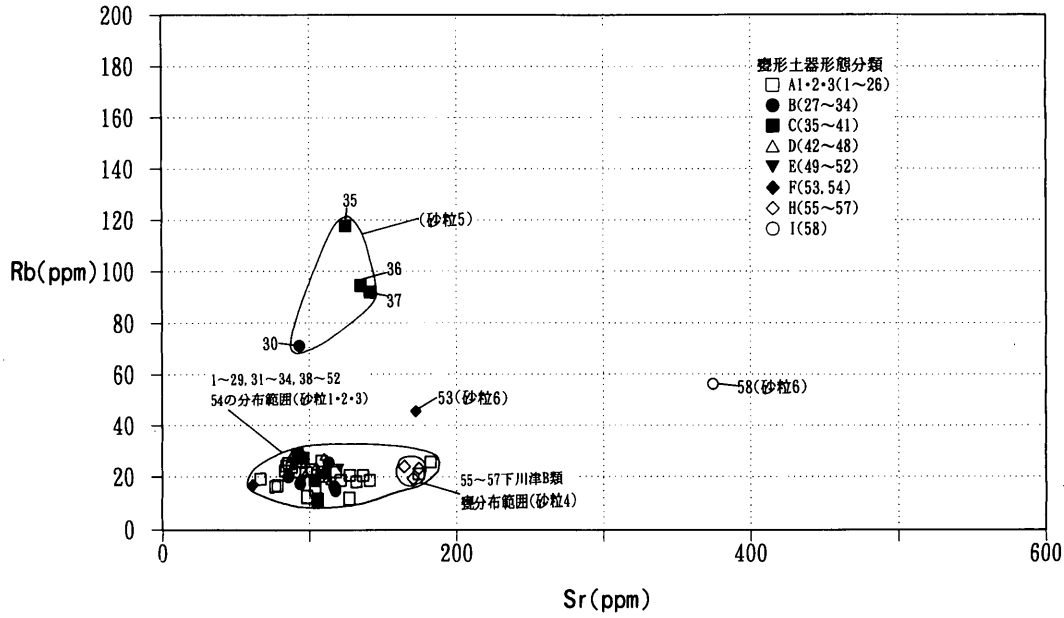
(7)　白石　純「百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 1994.吉備地方で比較した土器は，前記した報文の百間川原尾島遺跡，足守川加茂A・B遺跡，矢部南向遺跡から出土した土器である。



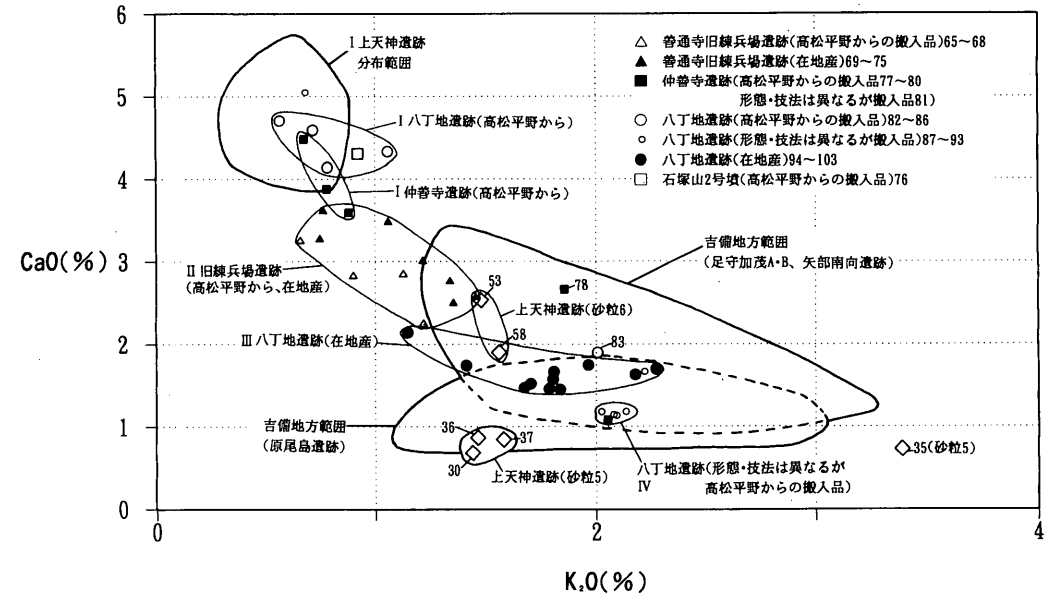
第403図　K_2O-CaO　散布図　上天神遺跡甕形土器の形態・技法・胎土・色調の違いによる分析値の比較



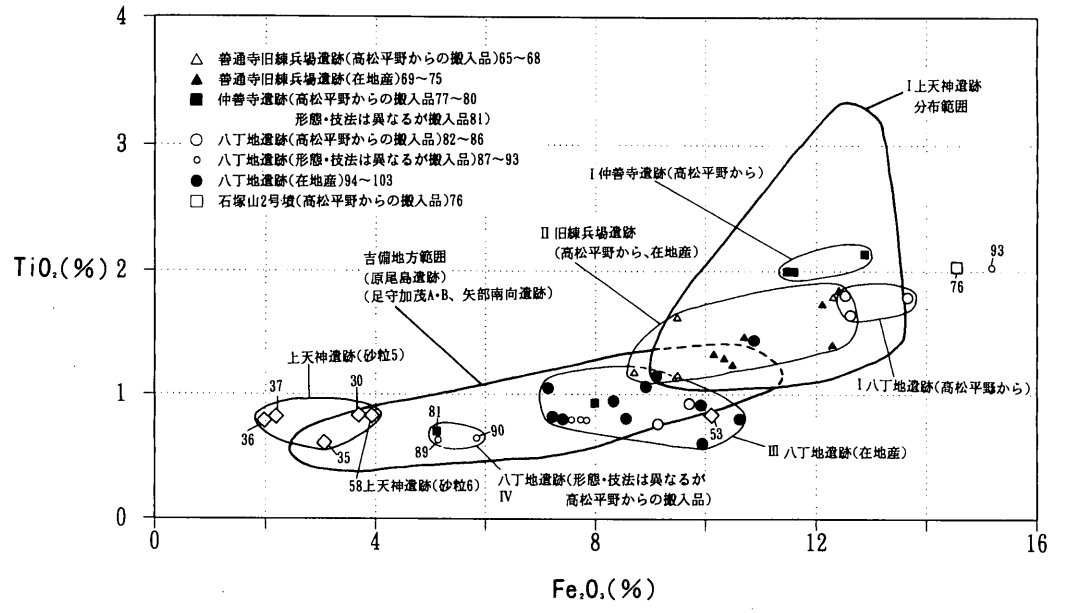
第404図　$Fe_2O_3-TiO_2$　散布図　上天神遺跡甕形土器の形態・技法・胎土・色調の違いによる分析値の比較



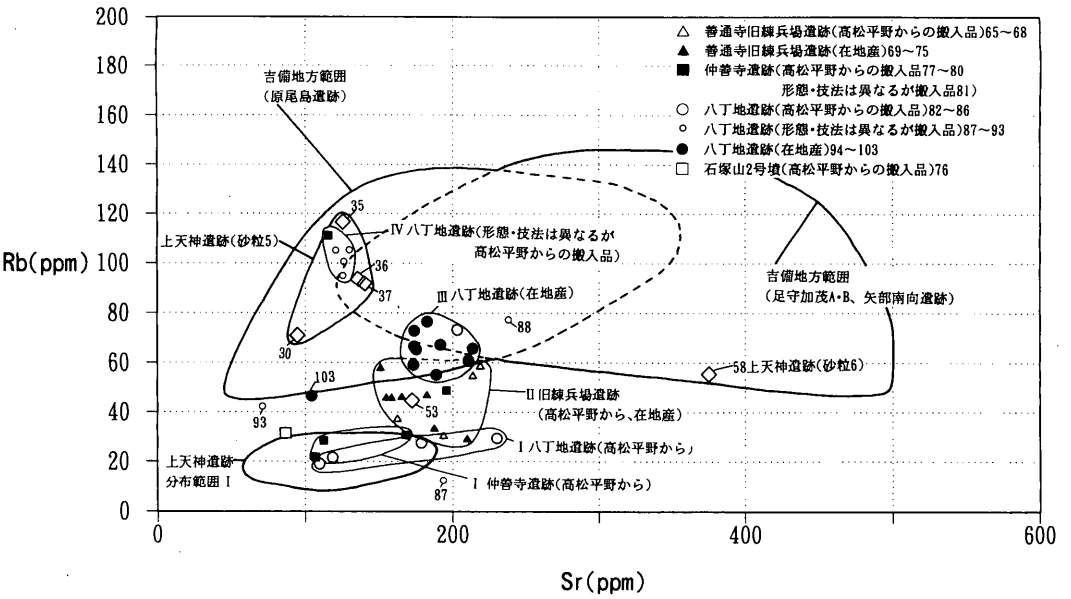
第405図　Ｓｒ－Ｒｂ　散布図　上天神遺跡甕形土器の形態・技法・胎土・色調の違いによる分析値の比較



第406図　Ｋ２０－ＣａＯ　散布図　讃岐各地域の遺跡出土土器の比較



第407図　$Fe_2O_3-TiO_2$　散布図　讃岐各地域の遺跡出土土器の比較



第408図　Ｓｒ－Ｒｂ　散布図　讃岐各地域の遺跡出土土器の比較

試料番号	挿図番号	遺跡名	器種	砂粒分類	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb	備考
1	4-269	高松市上天神遺跡	甕A1	2	0.41	11.32	48.46	1.28	22.41	4.32	4.38	121	19	4区SD08
2	4-270	高松市上天神遺跡	甕A1	2	0.49	10.78	47.98	1.37	21.89	4.73	4.21	132	18	4区SD08
3	4-279	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.65	11.98	48.50	2.03	20.48	5.64	4.24	174	20	4区SD08
4	4-261	高松市上天神遺跡	甕A1	2	0.49	10.95	49.40	1.26	20.88	4.72	4.96	136	20	4区SD08
5	4-274	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.47	13.03	45.48	3.13	21.19	4.41	4.17	84	24	4区SD08
6	4-273	高松市上天神遺跡	甕A1	2	0.45	12.10	46.34	2.76	21.32	4.71	4.97	98	19	4区SD08
7	4-276	高松市上天神遺跡	甕A1	3	0.40	9.58	48.85	1.32	22.37	4.76	5.33	127	12	4区SD08
8	4-272	高松市上天神遺跡	甕A1	2	0.58	12.22	49.89	1.97	19.36	4.64	5.06	101	23	4区SD08
9	4-268	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.39	12.04	47.06	1.32	20.61	4.50	4.14	109	20	4区SD08
10	4-281	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.65	11.35	49.54	1.58	19.82	5.61	5.17	182	25	4区SD08
11	4-271	高松市上天神遺跡	甕A2	4	0.43	11.81	45.06	2.22	22.07	4.69	4.35	105	22	4区SD08
12	4-262	高松市上天神遺跡	甕A1	3	0.58	10.70	49.22	1.54	23.38	4.53	5.87	104	15	4区SD08
13	4-282	高松市上天神遺跡	甕A1	2	0.48	11.42	47.88	1.71	21.78	4.89	4.26	127	20	4区SD08
14	4-267	高松市上天神遺跡	甕A1	3	0.42	10.60	47.55	1.70	22.68	4.78	4.23	141	18	4区SD08
15	4-280	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.44	11.46	46.97	2.04	21.66	4.52	4.08	78	16	4区SD08
16	4-278	高松市上天神遺跡	甕A1	3	0.53	11.00	50.38	1.44	22.49	4.45	5.99	108	26	4区SD08
17	4-260	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.36	12.59	46.36	1.84	21.31	4.28	4.62	76	16	4区SD08
18	4-246	高松市上天神遺跡	甕?	1	0.43	11.71	46.86	1.84	21.14	4.24	4.09	83	22	4区SD08
19	4-245	高松市上天神遺跡	甕A2	2	0.43	10.59	48.73	1.31	21.79	4.53	5.02	118	21	4区SD08
20	4-277	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.43	12.79	47.01	2.30	23.23	4.26	6.32	67	19	4区SD08
21	4-283	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.37	10.35	49.06	1.51	21.05	4.71	5.32	92	22	4区SD08
22	4-299	高松市上天神遺跡	甕B	1	0.38	10.57	48.63	1.86	21.50	4.95	4.95	117	21	4区SD08
23	4-297	高松市上天神遺跡	甕A1	2	0.43	12.28	47.67	1.19	20.49	4.47	5.54	106	20	4区SD08
24	4-275	高松市上天神遺跡	甕A1	2	0.40	11.97	48.60	1.19	20.21	4.42	5.12	98	13	4区SD08
25	4-266	高松市上天神遺跡	甕A1	2	0.47	12.52	45.59	1.79	20.29	4.64	4.05	86	25	4区SD08
26	4-295	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.49	11.36	47.16	1.70	21.76	4.67	4.77	88	23	4区SD08
27	4-290	高松市上天神遺跡	甕B	3	0.74	10.07	49.15	1.73	22.01	4.01	3.72	113	25	4区SD08
28	4-312	高松市上天神遺跡	甕F	3	0.63	10.44	49.35	1.28	21.33	4.52	4.55	95	25	4区SD08
29	4-265	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.43	10.27	50.53	1.50	21.13	4.87	5.75	118	15	4区SD08
30	4-289	高松市上天神遺跡	甕B	5	1.44	3.75	72.12	0.85	16.34	0.67	0.57	93	71	4区SD08
31	4-296	高松市上天神遺跡	甕A1	1	0.43	10.36	48.51	1.59	21.10	4.78	5.25	85	20	4区SD08
32	4-308	高松市上天神遺跡	甕F	4	0.49	12.14	48.95	1.92	21.06	4.24	4.41	93	17	4区SD08

第15表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（%）ただしSr，Rbはppm（1）

試料番号	挿図番号	遺跡名	器種	砂粒分類	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb	備考
33	4-298	高松市上天神遺跡	甕B	1	0.35	12.44	43.04	3.27	20.41	5.12	5.55	116	17	4区SD08
34	4-286	高松市上天神遺跡	甕B	3	0.47	11.78	47.58	1.55	20.75	4.67	4.31	109	21	4区SD08
35	4-293	高松市上天神遺跡	甕C	5	3.39	3.06	67.41	0.61	18.14	0.74	0.34	124	117	4区SD08
36	4-284	高松市上天神遺跡	甕C	5	1.46	1.99	69.11	0.82	17.85	0.88	0.86	134	94	4区SD08
37	4-285	高松市上天神遺跡	甕C	5	1.58	2.19	70.65	0.83	18.13	0.85	0.60	141	92	4区SD08
38	4-287	高松市上天神遺跡	甕C	1	0.49	11.45	49.62	1.58	20.19	4.63	4.84	90	29	4区SD08
39	4-291	高松市上天神遺跡	甕C	1	0.48	11.75	49.52	1.74	19.22	4.79	5.13	103	19	4区SD08
40	4-294	高松市上天神遺跡	甕C	1	0.57	11.12	47.86	1.66	21.10	4.69	4.21	94	26	4区SD08
41	4-292	高松市上天神遺跡	甕C	3	0.45	12.30	46.97	2.21	21.62	4.31	4.75	105	12	4区SD08
42	4-311	高松市上天神遺跡	甕D	3	0.73	9.17	51.20	1.18	20.58	4.35	5.31	109	28	4区SD08
43	4-306	高松市上天神遺跡	甕D	1	0.59	10.73	50.52	1.56	20.40	4.43	4.59	97	22	4区SD08
44	4-304	高松市上天神遺跡	甕D	1	0.47	12.21	48.58	1.55	20.51	4.64	5.01	104	24	4区SD08
45	4-305	高松市上天神遺跡	甕D	1	0.54	11.58	49.17	1.44	20.44	4.41	5.71	96	25	4区SD08
46	4-307	高松市上天神遺跡	甕F	3	0.56	10.14	50.30	1.50	21.99	4.89	6.37	114	19	4区SD08
47	4-309	高松市上天神遺跡	甕D	1	0.57	11.66	47.65	1.55	21.14	4.49	5.04	88	29	4区SD08
48	4-310	高松市上天神遺跡	甕D	3	0.68	9.80	50.74	1.60	21.37	4.62	5.37	96	22	4区SD08
49	4-302	高松市上天神遺跡	甕E	3	0.67	10.21	47.44	1.45	21.40	4.46	4.83	90	24	4区SD08
50	4-303	高松市上天神遺跡	甕E	1	0.45	10.58	48.27	1.86	21.73	4.48	5.64	84	22	4区SD08
51	4-300	高松市上天神遺跡	甕E	1	0.47	9.79	49.02	1.84	22.02	4.54	5.21	96	19	4区SD08
52	4-301	高松市上天神遺跡	甕E	4	0.76	10.90	50.93	1.15	20.01	3.96	4.33	120	23	4区SD08
53	4-314	高松市上天神遺跡	大形甕	6	1.46	10.08	56.83	0.85	18.98	2.52	2.59	172	45	4区SD08
54	4-315	高松市上天神遺跡	大形甕	1	0.58	11.95	49.67	1.47	21.72	4.43	7.63	62	16	4区SD08
55	1-5	高松市上天神遺跡	甕G	4	0.73	13.46	47.32	1.46	20.36	5.09	4.26	171	19	1区SD01
56	1-21	高松市上天神遺跡	甕G	4	0.85	13.09	46.45	1.58	21.48	4.99	4.39	174	22	1区SD01
57	1-4	高松市上天神遺跡	甕G	4	0.72	12.51	46.52	2.52	20.72	4.65	4.10	164	23	1区SD01
58	1-13	高松市上天神遺跡	甕H	6	1.56	3.94	58.29	0.83	24.00	1.87	0.74	374	55	1区SD01
59	4-1235	高松市上天神遺跡	甕C		0.36	10.07	43.34	1.48	19.97	4.73	4.70	121	26	4区SK04
60	4-1236	高松市上天神遺跡	甕A1		0.36	10.91	42.53	2.08	21.11	4.97	4.14	120	18	4区SK04
61	4-1227	高松市上天神遺跡	直口壺B		0.47	10.14	44.85	1.53	18.33	4.81	3.93	114	24	4区SK04
62	4-1232	高松市上天神遺跡	広口壺B		0.50	10.30	43.99	1.90	19.41	4.51	3.42	125	24	4区SK04
63	4-1245	高松市上天神遺跡	脚E		0.51	11.09	40.62	1.50	20.00	4.42	4.12	130	20	4区SK04
64	4-1244	高松市上天神遺跡	脚A		0.43	10.88	44.17	1.54	19.06	4.68	4.16	123	22	4区SK04

第16表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（%）ただしSr，Rbはppm (2)

試料番号	挿図番号	遺跡名	器種	砂粒分類	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb	備考
65		善通寺市旧練兵場遺跡	壺		0.89	12.43	49.57	1.82	17.95	2.82	4.05	162	37	高松平野からの搬入
66		善通寺市旧練兵場遺跡	壺		1.12	8.73	52.78	1.15	18.57	2.83	2.65	219	58	高松平野からの搬入
67		善通寺市旧練兵場遺跡	壺		0.65	9.50	48.94	1.13	21.53	3.24	2.99	194	30	高松平野からの搬入
68		善通寺市旧練兵場遺跡	台付鉢		1.22	9.52	53.38	1.60	17.98	2.24	2.03	213	54	高松平野からの搬入
69		善通寺市旧練兵場遺跡	甕		0.74	12.35	45.14	1.77	19.86	3.25	3.75	188	33	在地で生産
70		善通寺市旧練兵場遺跡	甕		1.21	10.49	53.67	1.22	16.30	2.99	2.75	156	45	在地で生産
71		善通寺市旧練兵場遺跡	甕		1.05	10.70	52.49	1.44	19.71	3.46	3.75	158	45	在地で生産
72		善通寺市旧練兵場遺跡	甕		1.33	10.18	51.35	1.30	18.88	2.74	2.63	183	46	在地で生産
73		善通寺市旧練兵場遺跡	甕		1.45	10.34	54.90	1.26	17.92	2.55	2.50	151	57	在地で生産
74		善通寺市旧練兵場遺跡	鉢		0.75	12.15	47.77	1.71	18.98	3.60	3.55	210	28	在地で生産
75		善通寺市旧練兵場遺跡	鉢		1.35	12.32	50.15	1.39	17.59	2.48	2.22	166	46	在地で生産
76		綾歌町石塚山２号墳			0.92	14.56	47.31	2.03	14.43	4.31	4.94	86	31	高松平野からの搬入
77		大内町仲善寺遺跡２次	壺		0.77	12.89	46.24	2.12	18.28	3.88	2.83	168	31	高松平野からの搬入
78		大内町仲善寺遺跡２次	甕		1.85	7.98	54.60	0.93	18.06	2.67	2.77	196	49	高松平野からの搬入
79		大内町仲善寺遺跡２次	甕		0.87	11.51	52.23	1.99	15.35	3.60	3.68	112	29	高松平野からの搬入
80		大内町仲善寺遺跡２次	甕		0.67	11.60	47.31	1.99	19.03	4.48	4.41	107	22	高松平野からの搬入
81		大内町仲善寺遺跡２次	甕		2.05	5.11	54.26	0.69	20.37	1.09	0.59	115	111	器形・調整は異なるが高松から搬入
82		志度町八丁地遺跡	甕		0.71	12.54	45.39	1.80	17.55	4.58	5.59	109	19	高松平野からの搬入
83		志度町八丁地遺跡	甕		2.00	9.14	57.78	0.75	17.57	1.90	0.59	203	73	高松平野からの搬入
84		志度町八丁地遺跡	甕		0.56	12.63	46.89	1.63	17.17	4.69	5.65	118	21	高松平野からの搬入
85		志度町八丁地遺跡	高坏		0.78	13.68	49.00	1.77	17.59	4.13	2.85	179	27	高松平野からの搬入
86		志度町八丁地遺跡	製塩土器		1.05	9.71	47.77	0.91	23.74	4.32	4.92	230	29	高松平野からの搬入
87		志度町八丁地遺跡	甕		0.67	9.94	47.80	0.58	19.76	5.02	6.47	194	12	器形・調整は異なるが高松から搬入
88		志度町八丁地遺跡	甕		2.22	7.83	57.70	0.77	18.35	1.67	0.66	238	77	器形・調整は異なるが高松から搬入
89		志度町八丁地遺跡	甕		2.13	5.15	61.57	0.62	18.18	1.18	0.54	129	105	器形・調整は異なるが高松から搬入
90		志度町八丁地遺跡	甕		2.02	5.86	60.78	0.63	18.99	1.17	0.33	120	105	器形・調整は異なるが高松から搬入
91		志度町八丁地遺跡	甕		2.09	7.57	59.11	0.78	18.97	1.13	0.61	125	95	器形・調整は異なるが高松から搬入
92		志度町八丁地遺跡	甕		2.08	7.75	58.54	0.79	17.70	1.14	0.81	126	101	器形・調整は異なるが高松から搬入
93		志度町八丁地遺跡	高坏		1.14	15.21	48.33	2.01	18.83	2.12	2.38	71	42	器形・調整は異なるが高松から搬入
94		志度町八丁地遺跡	甕		1.70	7.16	55.89	1.03	19.44	1.50	0.51	188	54	在地で生産
95		志度町八丁地遺跡	甕		1.80	9.11	52.42	1.13	20.45	1.55	0.74	173	59	在地で生産
96		志度町八丁地遺跡	甕		1.96	7.44	60.58	0.77	17.85	1.74	0.57	212	60	在地で生産

第17表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析資料分析値一覧表（%）ただしSr，Rbはppm (3)

試料番号	挿図番号	遺跡名	器種	砂粒分類	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb	備考
97		志度町八丁地遺跡	甕		1.83	8.33	55.49	0.94	19.75	1.43	0.92	174	73	在地で生産
98		志度町八丁地遺跡	甕		1.80	7.24	56.60	0.80	18.34	1.65	0.60	191	67	在地で生産
99		志度町八丁地遺跡	甕		2.18	8.56	58.95	0.77	18.28	1.63	0.45	214	66	在地で生産
100		志度町八丁地遺跡	甕		2.27	10.59	54.86	0.78	16.33	1.69	1.05	183	76	在地で生産
101		志度町八丁地遺跡	甕		1.68	9.91	58.09	0.90	16.90	1.46	0.42	176	65	在地で生産
102		志度町八丁地遺跡	甕		1.79	8.91	54.36	1.04	20.35	1.46	0.65	174	66	在地で生産
103		志度町八丁地遺跡	甕		1.40	10.87	55.95	1.42	18.39	1.73	1.46	103	46	在地で生産

第18表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（%）ただしSr，Rbはppm (4)

第3節　高松市上天神遺跡出土土器に付着している赤色顔料

福岡市埋蔵文化財センター
本田　光子

はじめに

土器に赤色顔料が付着残存する例は時代を問わず多数あるが，土器の器種や付着残存状態の違いからその由来は大きく三通りに分かれる。第1は赤色顔料による装飾を目的としたもの，第2は赤色顔料の貯蔵を目的としたもの，第3は赤色顔料のうち特に朱を液状にして加熱することを目的としたものである。筆者は第3のものを「内面朱付着土器」と呼んでいる。

上天神遺跡では，いわゆる「内面朱付着土器」の特徴を持つ土器が多量に出土している。把手付広片口皿80，大形鉢55，鉢8，高坏3，器種不明4等である。他に内面朱付着土器の範疇で捉えられるかどうかはわからないが，赤色顔料が付着する器台1，大形器台6，壷3がある。ここでは，把手付広片口皿23点，大形鉢10点，鉢3点，高坏1点，大形器台1点，不明2点の計40点の土器試料について赤色顔料の有無，種類等を顕微鏡観察とX線分析により調査した。

出土赤色顔料に関する今までの知見によれば，赤色物は鉱物質の顔料であり，酸化第二鉄を主成分とするベンガラと，硫化水銀（赤）を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては，四三酸化鉛を主成分とする鉛丹がある。これら三種類の赤色顔料を考えて分析を行った。試料の一覧・分析結果とそれにより推定される赤色顔料を第19表に示した。

試料

赤色物が付着している土器片の提供を受けた。赤色の認められる部分とそうでない部分について蛍光X線分析の測定を行った。赤色顔料の残存状態や土器の形状等により測定の際の制約があるものは顕微鏡観察のための試料採取だけを行い，それらについては蛍光X線分析の測定は行っていない。

顕微鏡観察

土器片の内外両面を実体顕微鏡下で観察し，針先に着く程度の量の赤色顔料を採取した。採取試料を透過光・落射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は，赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ，粒子の形状，色調等の外観に認められる特徴の違いから，検鏡により経験的に見極めがつく。

挿図1486等35点に赤色顔料として朱の特徴を持つ粒子を認めた。やや角張った形状，落射光観察時に認められる独特の反射・光沢，透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等である。朱の粒度は，約0.5～60μmの範囲である。また，挿図900にはベンガラの特徴（質感，透明度等）を持つ赤色顔料粒子が認められた。ベンガラ粒子にはいわゆるパイプ状粒子は含まれていなかった。なお，挿図138，487，938，943には赤色顔料の粒子がまったく認められなかった。

蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。理学電気工業(株)製蛍光X線分析装置システム3511を用い，X線管球；クロム対陰極，印加電圧；50kV，印加電流；50mA，分光結晶，フッ化リチウム，検出器；シンチレーション計数管で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀，ベンガラであれば鉄であるので，2種の元素の有無を表中に記した。なお，図466と944については測定を行っていない。

赤色顔料の主成分元素としては図134，487，900，943，947の5点は鉄が，それ以外の35点からは鉄と水銀が検出された。鉄と水銀の他は主として混入の土砂部分に由来するストロンチウム，ルビジウム等の元素が検出された。ただし，鉄は土器胎土や付着の土砂部分にも必ず含まれるので，赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。

全試料とも鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。なお，図1486，943，949，958，1478の5点にはこれらの元素の他に砒素が検出された。砒素は土器の内外両面に認められ，両面の蛍光X線強度は特に大きく変わらない。図134等10点についても微量の砒素が含まれるかもしれない。

X線回析

蛍光X線分析で砒素が検出された図943について，その由来となる鉱物成分の同定を行う目的で実施した。理学電機㈱製X線回析装置RINT2400を用い，X線管球；銅回転対陰

極，印加電圧；50kV，印加電流；200mA，で測定を行った。試料は土器胎土を粉末にして用いた。

今回の測定では，石英，長石，角閃石など土器の胎土に由来する鉱物が同定され，砒素の化合物は同定できなかった。

結果

顕微鏡観察と蛍光X線分析の結果は表に示した通りであり，それに基いて赤色顔料の種類を推定した。

検鏡結果で朱だけが認められ，蛍光X線分析で水銀が検出され，鉄の蛍光X線強度が土器胎土のそれと変わらないものについては，朱であると判断した。検鏡結果でベンガラだけが認められ，蛍光X線分析で水銀が検出されず，鉄の蛍光X線強度が土器胎土のそれより大きいものについては，ベンガラであると判断した。検鏡結果で赤色顔料が認められず，鉄の蛍光X線強度が土器胎土のそれと変わらないものについては，赤色顔料が認められないものと判断した。

蛍光X線分析で砒素が検出された図943について，砒素の由来となる鉱物成分の同定はできなかったが，(財)九州環境管理協会に依頼し，砒素の試験を行った。底質調査方法(昭和63年環水管第127号)Ⅱ.13.1ジエチルジチオカルバミン法により320ppmであった。

考察

赤色顔料が認められなかったものについて

今回の調査で赤色顔料が認められなかったものは4点で，すべて把手付広片口皿である。把手付広片口皿は調査点数23点で，内面に朱が認められたものは19点であり，残り4点は赤色顔料そのものが認められなかった。両者の埋蔵環境は同じで，器面の状態等も特に異なっていない。前者は土器内に朱を入れて使用したために付着残存したもので，後者では朱の使用がなかったものと考える。表面的な肉眼観察では赤色顔料が認められない場合でも，実際には丹念に顕微鏡観察するときわめて僅かではあるが赤色顔料が付着している場合が多いのだが，今回の4点についてはまったく認められない。埋蔵環境の違いにより赤色顔料が残存しないことも否定はできないだろうが，本資料では，赤色顔料の使用はなかったと判断した。

朱が認められないものの中で，図943からは砒素が検出されている。化合物の形で検出できなかったので砒素の由来は不明であるが，砒素を含む（朱以外の）ものが使用された可能性がある。図138，487，938の3点も朱が認められないものであるが，砒素は検出されていない。未使用なのかもしれないが，朱あるいは砒素を含むもの等以外のものが使用されたことも考えられるだろう。朱が付着残存していない把手付広片口皿の存在は内面朱付着土器の用途について非常に興味深い示唆を与える。

朱が認められたものの中で，3点に砒素が検出され，3点に砒素が含まれている可能性があった。朱と砒素に関する知見については後述するが，ここでは朱が残存している把手付広片口皿にも，砒素があるものとないものが存在することを注意しておきたい。

なお，把手付広片口皿以外の土器で赤色顔料が認められない例は，今回はなかった。把手付広片口皿はその特異な形態から「内面朱付着土器」であることがわかるが，鉢類は必ずしもそうではないので，顕著な赤色顔料が肉眼で認められない場合は意識されないことによるかもしれない。

朱と砒素について

朱は天然には辰砂(Cinnabar)という鉱物を砕いたものである。日本列島には7つの水銀鉱床があるが，各々がいつから利用されていたかは，文献以前についてわかるものは僅かである。大和水銀鉱床に属する伊勢地方の辰砂は縄文時代後期から晩期まで利用された可能性が高く，同じ鉱床の宇陀地方では弥生時代の終りから古墳時代に採掘され始めたと考えられる。阿波水銀鉱床では弥生時代後期後半から古墳時代にかけて採掘遺跡が営まれているが，利用そのものについてはさらに遡るとも言われている。

これらの水銀鉱床の随伴鉱物の調査から，矢島澄策氏は伊勢の丹生鉱山産の辰砂には砒素が含まれると報告しており，出土赤色顔料に含まれる砒素の量からその産地を推定できるとしている。筆者も京都府平尾城山古墳出土朱に砒素が含まれることを報告したが，まだ類例に乏しい。

今回の調査で検出された砒素は，図943の例から見れば朱に伴うものではないと考えられる。また，朱が認められる試料に砒素を含むものと含まないものがあることも，これらの砒素が必ずしも朱に伴うものでないことを示している。

「内面朱付着土器」の用途は朱を液状にして加熱するものであるが，その目的についてはいわゆる「仙薬」製造である可能性が高いものと考えている。今回の例からは，朱だけでなく砒素を含むものを加えたり，朱は使わないで砒素を含むものを材料としたりしてい

ることが考えられる。今後は，今回調査できなかった他の内面朱付着土器についても調査を行いさらに詳しく検討を重ねたい。

大形器台の赤色塗彩について

土器の赤色塗彩の残りはその塗彩技法と埋蔵環境に大きく左右される。弥生前期の彩文土器は焼成後塗彩であるため，一般に文様部の残りが悪い。本来は全面黒色下地に赤色で文様を描いたものであるが，発掘時に土の方へ彩文部分が付いてしまったり，運良く残っても剝落する場合が非常に多い。これに対して丹塗磨研土器の赤彩色は焼成前塗彩のため，彩文土器に比べると赤色顔料の残りは良いのが普通である。

赤色顔料による土器装飾法は，大きくこの焼成後塗彩と焼成前塗彩とに分かれる。前者には，弥生前期の彩文土器や縄文時代の土器の赤色塗彩土器がある。これらは埋蔵環境の違いで残り具合いも異なるためはっきりとしたことはわからないが，赤色顔料を固定する膠着剤（漆，膠，油等）の違いもある。縄文土器の赤色塗彩に漆が使われていることは周知の通りである。焼成後塗彩に使われる赤色顔料は朱，ベンガラ（パイプ状粒子を含むものと含まないもの），広義のベンガラとあり，これらを単一で使用するだけでなく，重ね塗りしたり混ぜたりと多彩である。

これに対して，後者は北部九州地方で「丹塗磨研」と呼ばれるものや中期以降の弥生土器，土師器に見られる赤色塗彩であるが，これもまたその内容は多様である。使われる赤色顔料は，酸化鉄による発色を想定した材料以外は考え難く，今までの調査例からもこれは裏付けられている。具体的には，ベンガラを塗彩あるいは擦り込んで焼いたもの，広義のベンガラを同じように使ったもの，ただ「ミガキ」だけのものが焼成でより赤く発色したもの，いわゆる「スリップ（化粧土）」をかけたものなどが認められる。

本例はベンガラを焼成前に塗彩したものと判断した。土器の外面に赤色塗彩されていることからも，土器装飾の範疇で捉えてよいものと考える。

謝辞

今回，調査の機会をいただきました（財）香川県埋蔵文化財調査センターおよび同センター大久保徹也氏に感謝致します。X線分析は九州産業大学総合機器センターで行ったもので，ご協力いただいた同センター助手古賀啓子博士に感謝致します。砒素の定量分析をお引き受けいただいた（財）九州環境管理協会の松岡信明氏，川村秀久氏，種々の御教示をいただきました宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏に感謝致します。

挿図番号	器　種	顕微鏡観察	蛍光X線分析	赤色顔料の種類	特　記
1486	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀，砒素	朱	
134	大形鉢	朱	鉄，水銀，砒素？	朱	
135	鉢	朱	鉄，水銀	朱	
138	把手付広片口皿	赤色顔料なし	鉄	なし	赤色顔料は認められない
462	大形鉢	朱	鉄，水銀，砒素？	朱	
466	大形鉢	朱		朱	
480	大形鉢	朱	鉄，水銀，砒素？	朱	
487	把手付広片口皿	赤色顔料なし	鉄	なし	赤色顔料は認められない
488	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
491	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
493	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
606	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀，砒素？	朱	
900	大形器台	ベンガラ	鉄	ベンガラ	焼成前塗彩
918	大形鉢	朱	鉄，水銀	朱	
931	大形鉢	朱	鉄，水銀	朱	
933	大形鉢	朱	鉄，水銀	朱	
934	大形鉢	朱	鉄，水銀，砒素？	朱	
938	把手付広片口皿	赤色顔料なし	鉄	なし	赤色顔料は認められない
939	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀，砒素？	朱	
942	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀，砒素？	朱	
943	把手付広片口皿	赤色顔料なし	鉄，砒素	なし	赤色顔料は認められない
944	把手付広片口皿	朱		朱	
947	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
949	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀，砒素	朱	
950	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
958	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀，砒素	朱	
980	大形鉢	朱	鉄，水銀，砒素？	朱	
1130	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
1157	高坏	朱	鉄，水銀	朱	
1246	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
1408	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
1434	大形鉢	朱	鉄，水銀，砒素？	朱	
1472	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
1473	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
1474	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	
1475	？	朱	鉄，水銀，砒素？	朱	
1476	鉢	朱	鉄，水銀	朱	
1477	鉢	朱	鉄，水銀	朱	
1478	？	朱	鉄，水銀，砒素	朱	
1479	把手付広片口皿	朱	鉄，水銀	朱	

第19表　試料一覧と分析結果

第5章　まとめ

第1節　高松平野における弥生時代の石器生産と流通

1．はじめに

弥生時代の遺跡を調査すると，少なからず石器や剥片が出土する。弥生時代前期には水稲耕作の伝来とともに，大陸系磨製石器がもたらされ流通した。弥生時代中期になると石鏃や石槍などの石製武器の発達とともに石器生産も広く行なわれたが，弥生時代後期になると石器は急激に消滅の方向に向うことになる。これは鉄器の普及のためと考えられている。

香川県は良好な石器石材であるサヌカイトの原産地である。金山産のサヌカイトを中心に四国だけにとどまらず近畿地方にまでそれは流通し，使用されている。しかし香川県の中においてもサヌカイト以外の石材，たとえば徳島県の吉野川流域に産する結晶片岩が少量ながら使用されている。

本論では，弥生時代の石器の器種組成と使用石材の在り方，さらに石器生産の行なわれ方を検討してみたい。しかし，大多数の報告書ではその時間的制約もあり剥片を含んだすべての石製品について報告されている訳ではない。このような制約はあるが可能な限りその復元を試みたい。

2．上天神遺跡の石器

上天神遺跡では251点の石器を資料対象とした。これは縄文時代晩期～弥生時代前期（上天神遺跡では縄文時代晩期の遺構に弥生時代前期の遺物が少量含まれることが多い）・弥生時代後期のものである。量的には縄文時代晩期～弥生時代前期と考えられるものが59点，弥生時代後期（後期初頭が中心）と考えられるものが180点となっている。その他に時期不明のものが12点である。

時期を問わず遺跡全体での器種組成は打製石庖丁72点，柱状片刃石斧4点，扁平片刃石斧1点，石鍬（打製石斧）66点，石錐5点，石鏃37点，スクレーパー28点，楔形石器1点，

収穫具	打製石庖丁	72	サヌカイト51，安山岩５，結晶片岩16
	磨製石庖丁	0	
	石鎌	0	
伐採具	太型蛤刃石斧	0	
土掘具	石鍬	66	サヌカイト64，安山岩２
加工具	柱状片刃石斧	4	結晶片岩４
	扁平片刃石斧	1	緑泥片岩１
	石錐	5	サヌカイト５
	石小刀	0	
	スクレーパー	28	サヌカイト28
	楔形石器	1	サヌカイト１
	砥石	6	流紋岩１，砂岩３，不明２
武器	石鏃	37	サヌカイト37
	石槍	0	
調理具	石皿	2	砂岩２
	敲石	1	緑泥片岩１
	磨石	0	
	凹石	8	砂岩８
魚撈具	石錘	3	砂岩２，花崗岩１
その他		17	サヌカイト15，結晶片岩１，砂岩１

第20表　上天神遺跡石器組成（遺跡全体）

収穫具	打製石庖丁	1	サヌカイト1
	磨製石庖丁	0	
	石鎌	0	
伐採具	太型蛤刃石斧	0	
土掘具	石鍬	38	サヌカイト37，安山岩1
加工具	柱状片刃石斧	0	
	扁平片刃石斧	0	
	石錐	4	サヌカイト4
	石小刀	0	
	スクレーパー	7	サヌカイト7
	楔形石器	0	
	砥石	1	砂岩1
武器	石鏃	8	サヌカイト8
	石槍	0	
調理具	石皿	0	
	敲石	0	
	磨石	0	
	凹石	0	
魚撈具	石錘	0	
その他		0	

第21表　上天神遺跡石器組成（縄文晩期～弥生前期）

収穫具	打製石庖丁	60	サヌカイト40，安山岩５，結晶片岩15
	磨製石庖丁	0	
	石鎌	0	
伐採具	太型蛤刃石斧	0	
土掘具	石鍬	28	サヌカイト27，安山岩１
加工具	柱状片刃石斧	4	結晶片岩４
	扁平片刃石斧	1	緑泥片岩１
	石錐	1	サヌカイト１
	石小刀	0	
	スクレーパー	21	サヌカイト21
	楔形石器	1	サヌカイト１
	砥石	5	流紋岩１，砂岩２，不明２
武器	石鏃	29	サヌカイト29
	石槍	0	
調理具	石皿	2	砂岩２
	敲石	1	緑泥片岩１
	磨石	0	
	凹石	8	砂岩８
魚撈具	石錘	3	砂岩２，花崗岩１
その他		16	サヌカイト14，結晶片岩１，砂岩１

第22表　上天神遺跡石器組成（弥生後期）

石錘３点，石皿２点，敲石１点，凹石８点，砥石６点，素材剥片１点，二次加工のある剥片８点，用途不明８点となっている。これらを使用石材別にみると，サヌカイト201点(80%)，安山岩７点（３%），結晶片岩21点（８%），緑泥片岩２点（0.8%），流紋岩１点(0.4%)，砂岩16点（6.6%），花崗岩１点（0.4%），不明２点（0.8%）で圧倒的にサヌカイトを使用している。用途別の石材使用状況は，収穫具・土掘具・武器はサヌカイトを，伐採具は片岩を，調理具は砂岩をそれぞれ主体的に使用している。石器の用途に応じて石材を使い分けているようである。

縄文時代晩期から弥生時代前期の状況をみると，石器組成は石鏃38点，スクレーパー７点，石錐４点，石鏃８点，砥石１点，剥片類である。加えて打製石庖丁が１点加わるが，これは弥生時代前期のものと思われる。使用石材は安山岩１点，砂岩１点の他はすべてサヌカイトを使用している。これにくわえて１区の包含層から石鏃３点，石鏃３点，石庖丁１点，石錐１点の合計８点が出土しているが，これらは縄文時代晩期から弥生時代前期に属する可能性が高い。すべてサヌカイトを使用している。

弥生時代後期の石器組成は，打製石庖丁60点，柱状片刃石斧４点，扁平片刃石斧１点，石鏃（打製石斧）28点，石錐１点，石鏃29点，スクレーパー21点，楔形石器１点，石錘３点，石皿２点，敲石１点，凹石８点，砥石５点，素材剥片１点，二次加工のある剥片８点，用途不明７点となっている。使用石材はサヌカイト133 点，安山岩６点，結晶片岩20点，砂岩15点，緑泥片岩２点，流紋岩１点，花崗岩１点，不明２点である。弥生時代後期段階（後期初頭）ではサヌカイトが主体となっていることには変わりがないが，調理具以外で結晶片岩の使用が見られる。

石器の機能・用途別にみると，縄文時代晩期～弥生時代前期では収穫具２%，伐採具０%，土掘具64%，加工具20%，武器14%である。これに対して弥生時代後期では，収穫具33%，伐採具０%，土掘具15%，加工具18%，武器17%，調理具６%，漁撈具２%，その他９%となっている。弥生時代後期段階では土掘具が激減して，収穫具が増加している。加工具・武器はほぼ同じ割合である。

上天神遺跡ではサヌカイトの剥片類はあまり多くなく，また大型の素材剥片も見られない。未製品も希少なことから，集落内では石器を生産しておらず，製品として搬入したと考えられる。これに対し結晶片岩は素材剥片と考えられるものが出土している。しかし結晶片岩の剥片は出土していないことから製品として搬入する際に，素材剥片も同時に搬入したものと考えられる。あるいは，砥石や敲石が少量出土していることから，石器製作の

1．上天神遺跡　2．太田下・須川遺跡　3．浴・長池遺跡
2．林・坊城遺跡　5．摺鉢谷遺跡　6．前田東・中村遺跡
7．久米池南遺跡

第409図　高松市内遺跡分布図

最終工程のみを集落内で行なったのかもしれない。

3．高松平野における弥生時代の石器の様相

上天神遺跡での弥生時代の石器の様相を見てきたが，その比較のため上天神遺跡の所在する高松平野における他の遺跡の様相を検討する。

(1)浴・長池遺跡（高松市林町）

高松平野のほぼ中央部で，上天神遺跡の東約３kmのところに位置している。縄文時代晩期から中世にかけての遺跡である。弥生時代では旧河道・方形周溝墓・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・水田があり，前期末から中期が中心となっている。

遺跡全体で139点が報告されているが，その石器組成は打製石庖丁33点，磨製石庖丁３点，太型蛤刃石斧４点，柱状片刃石斧４点，扁平片刃石斧６点，石錐１点，石鏃22点，石槍８点，スクレーパー32点，楔形石器18点，砥石５点，その他３点である。使用石材はサヌカイト117点（84%），安山岩９点（７%），結晶片岩10点（７%），砂岩３点（２%）で

ある。用途・機能別の比率は，収穫具26%，伐採具３%，加工具47%，武器22%，その他２%となっている。

前期末から中期中葉が中心となっているＳＲ11からは57点の石器が出土している。その石器組成は打製石庖丁13点，磨製石庖丁１点，太型蛤刃石斧４点，柱状片刃石斧４点，扁平片刃石斧４点，石鏃５点，石槍６点，スクレーパー11点，楔形石器７点，砥石２点である。使用石材はサヌカイト42点（74%），安山岩７点（12%），結晶片岩７点（12%），砂岩１点（２%）である。用途・機能別にみると収穫具25%，伐採具７%，加工具49%，武器19%である。

浴・長池遺跡の特徴は，伐採具が少なく，加工具が多くなっている。また土掘具が全く出土していないのが注目される。使用石材ではサヌカイトを多用しているが，磨製石斧は安山岩や結晶片岩などの石材を使用しサヌカイトは使用していない。

(2)久米池南遺跡（高松市新田町・東山崎町）

高松平野の東端部の丘陵の尾根上に位置し，弥生時代中期後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・テラス状遺構などを検出した集落遺跡である。竪穴住居跡やテラス状遺構からは土器・石器とともに鉄玨・鉄鏃などの鉄器が出土し注目される。

遺跡全体では138点の石器が報告されている。石器組成は打製石庖丁21点，石鎌１点，太型蛤刃石斧１点，柱状片刃石斧６点，小型方柱状片刃石斧１点，扁平片刃石斧２点，石錐５点，石鏃65点，スクレーパー５点，楔形石器６点，磨石２点，敲石３点，凹石１点，砥石９点，その他10点である。使用石材はサヌカイト102 点（74%），安山岩６点（４%），結晶片岩10点（７%），流紋岩１点（１%），砂岩14点（10%），その他５点（４%）である。用途・機能別にみると収穫具16%，伐採具１%，加工具25%，武器47%，調理具４%，その他７%である。

久米池南遺跡では，丘陵上に立地するにもかかわらず収穫具が16%ある。伐採具は１%と少ないが，加工具は25%ある。また本遺跡では武器が47%と半数近くを占めている。石材ではサヌカイトを多用しているが，磨製石器には結晶片岩を主体的に使用している。砥石が９点と多めに出土しているが，これは鉄器の保有率と関係があると思われる。

(3)林・坊城遺跡（高松市林町）

高松平野の中央部で，浴・長池遺跡の東約0.5㎞のところに位置している。縄文時代晩

期から中世にかけての遺跡である。縄文時代晩期の諸手鍬や鋤などが出土して注目されている。弥生時代では溝・円形周溝墓・落ち込み状遺構・旧河道が検出されている。

弥生時代の石器は75点が報告されている。石器組成は打製石庖丁３点，柱状片刃石斧１点，石鍬（打製石斧）10点，石錐６点，石鏃46点，スクレーパー３点，楔形石器４点，砥石１点，その他１点である。使用石材はサヌカイト72点（96%），安山岩２点（３%），結晶片岩１点（１%）で圧倒的にサヌカイトを使用している。用途・機能別にみると収穫具４%，土掘具13%，加工具20%，武器61%，その他２%である。

弥生時代前期に限られるＳＲ01流路Ａ中層では，全体で45点の石器が報告されており，打製石庖丁１点，石鍬（打製石斧）５点，石錐４点，石鏃33点，スクレーパー１点，楔形石器１点である。石材はすべてサヌカイトを使用している。用途・機能別にみると収穫具２%，土掘具11%，加工具14%，武器73%である。

林・坊城遺跡では武器である石鏃の割合が高くなっており，加工具・土掘具がこれに次いでいる。収穫具は非常に少なく，打製石庖丁が僅か１点のみである。使用石材は圧倒的にサヌカイトを使用しており，他の石材の使用が少ないのが特徴である。

(4)摺鉢谷遺跡（高松市峰山町）

高松平野の北部の石清尾山の山頂付近の平坦部に位置する遺跡である。遺物はすべて表面採集品であり，遺跡の詳しい内容は不明であるが，弥生時代中期後半の高地性集落と考えられる。

弥生時代中期後半と考えられる石器が87点報告されている。石器組成は打製石庖丁14点，石鎌１点，太型蛤刃石斧５点，柱状片刃石斧13点，扁平片刃石斧４点，石鏃46点，スクレーパー３点，凹石１点である。使用石材はサヌカイト64点（74%），安山岩１点（１%），結晶片岩15点（17%），緑泥片岩２点（２%），砂岩１点（１%），その他４点（５%）となっている。用途・機能別では収穫具17%，伐採具６%，加工具23%，武器53%，調理具１%である。

摺鉢谷遺跡では，加工具である柱状片刃石斧・扁平片刃石斧が目立っている。使用石材も石斧類を中心として結晶片岩・緑泥片岩が全体の19%と一定量を占めている。また山頂付近に立地していながらも，打製石庖丁が14点ほど出土しているのが特徴的である。

(5)前田東・中村遺跡（高松市前田東町）

高松平野の東端で，丘陵から派生する扇状地に位置する遺跡である。遺跡は旧河道から弥生時代中期後半～後期にかけての遺物が多量に出土している。その他弥生時代では竪穴住居跡，掘立柱建物跡，溝，土坑等を検出している。その他に縄文時代後・晩期，古代・中世の遺構・遺物を検出している。

弥生時代中期後半～後期後半の旧河道Ｆ区ＳＲ01・Ｇ区ＳＲ02・Ｇ区ＳＲ04から合計74点の石器が出土している。石器組成は打製石庖丁23点，磨製石庖丁３点，石鎌１点，太型蛤刃石斧１点，柱状片刃石斧７点，扁平片刃石斧１点，石鍬（打製石斧）３点，石鏃４点，石槍３点，スクレーパー17点，凹石１点，砥石４点，その他６点である。使用石材はサヌカイト55点（74%），安山岩２点（３%），結晶片岩６点（８%），緑泥片岩６点（８%），砂岩５点（７%），その他４点となっている。用途・機能別では収穫具36%，伐採具２%，土掘具４%，加工具39%，武器９%，調理具２%，その他８%である。

遺跡全体では，弥生時代後期以前の石器として163点がある。これには縄文時代後期・晩期のものも含まれている。全体の石器組成は，打製石庖丁43点，磨製石庖丁３点，石鎌１点，太型蛤刃石斧２点，柱状片刃石斧12点，小型方柱状片刃石斧１点，扁平片刃石斧１点，石鍬（打製石斧）22点，石錐４点，石小刀１点，石鏃19点，石槍４点，スクレーパー23点，石皿３点，凹石２点，砥石７点，その他15点（石匙３点・石棒１点含む）である。使用石材はサヌカイト122点（75%），安山岩５点（３%），結晶片岩15点（９%），緑泥片岩８点（５%），砂岩11点（７%），その他２（碧玉・黒曜石）（１%）となっている。用途・機能別では収穫具29%，伐採具１%，土掘具14%，加工具30%，武器14%，調理具３%，その他９%である。

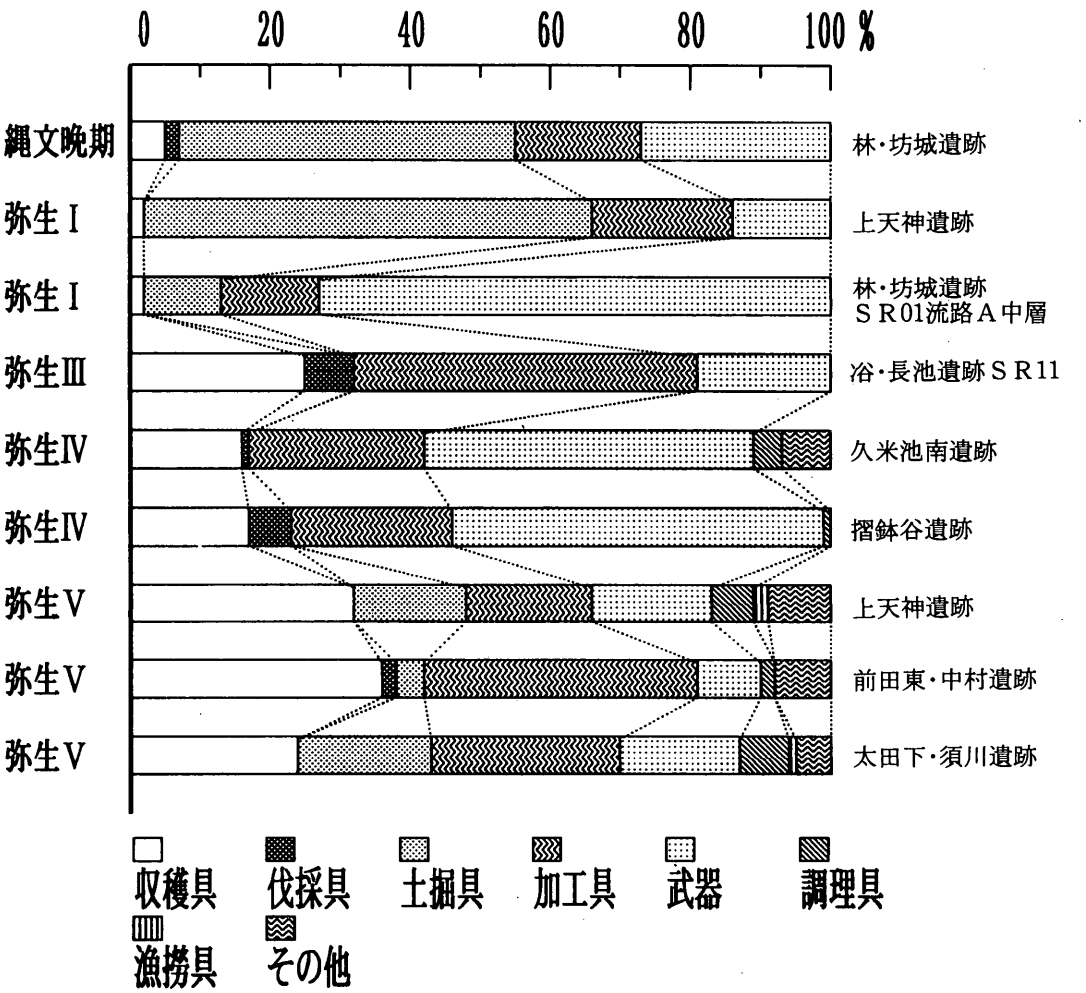
前田東・中村遺跡では収穫具と加工具の割合が高くなっている。これに対して伐採具は非常に少なくなっている。全体で土掘具が14%あるが，これは縄文時代のものが大部分である。また，加工具としての柱状片刃石斧・スクレーパーが多くなっている。使用石材はサヌカイトが主体であることには変わりない。石斧類を中心に結晶片岩・緑泥片岩を使用している。

(6)太田下・須川遺跡（高松市太田下町他）

上天神遺跡の東側に隣接する遺跡である。遺跡は微高地と旧河道が走る低地部からなっており，弥生時代では後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝・旧河道などを検出している。

弥生時代後期の遺構では85点の石器が報告されており，石器組成は打製石庖丁20点，石鍬（打製石斧）16点，石小刀１点，石鏃14点，石槍１点，スクレーパー16点，楔形石器２点，石錘１点，磨石２点，敲石４点，砥石４点，その他４点となっている。使用石材はサヌカイト70点（82%），安山岩４点（５%），結晶片岩２点（２%），砂岩６点（７%），その他３点（４%）である。用途・機能別では収穫具24%，土掘具19%，加工具27%，武器17%，調理具７%，漁撈具１%，その他５%となっている。

太田下・須川遺跡では弥生時代後期にしては土掘具が19%と多く出土している。また収穫具と加工具で全体の半分を占めている。



第410図　石器組成変遷図

4．石器組成からみた弥生時代石器生産

次に石器組成から，弥生時代における石器の推移を追ってみたい。高松平野における弥生時代遺跡では，縄文時代晩期～弥生時代前期にかけてが上天神遺跡，弥生時代前期が林・坊城遺跡ＳＲ01流路Ａ中層，弥生時代中期中葉が浴・長池遺跡，弥生時代中期後半が久米池南遺跡，摺鉢谷遺跡，弥生時代中期後半～後期後半が前田東・中村遺跡，弥生時代後期初頭が上天神遺跡の資料がそれぞれある。各資料とも集落全体における全資料という訳ではないので，問題は残るものの，傾向はつかめるものと思われる。

一般的に時期が下るにつれて収穫具の割合が増えて，弥生時代後期段階では30％ほどを占めるようになる。これに対して土掘具は弥生時代後期に少量見られるものの，全体として弥生時代前期以降は減少して行く。武器は弥生時代中期後半をピークに急激に減少する。また加工具はほぼ弥生時代後期後半段階までは安定して存在している。

高松平野では弥生時代後期後半～終末にかけての資料がないが，空港跡地遺跡では石器はほとんど出土していない。また太田下・須川遺跡では確実に後期後半に下るものは５点で，後期全体の６％ほどに激減する。従って後期後半以降には石器は急激に消滅に向うものと考えられる。

石器の消滅は鉄器の普及と関係がある。高松平野で弥生時代の鉄器が出土しているのは弥生時代中期後半の久米池南遺跡である。久米池南遺跡では工具21点，武器４点，鉄素材２点が出土しており工具類が多くなっている。しかし加工用の石斧類はそれなりに出土しており，鉄斧は１点である。従って加工具すべてが鉄器化しているのではなく，細部加工や仕上げ加工，切削用のものが久米池南遺跡では主に鉄器化しているのである。

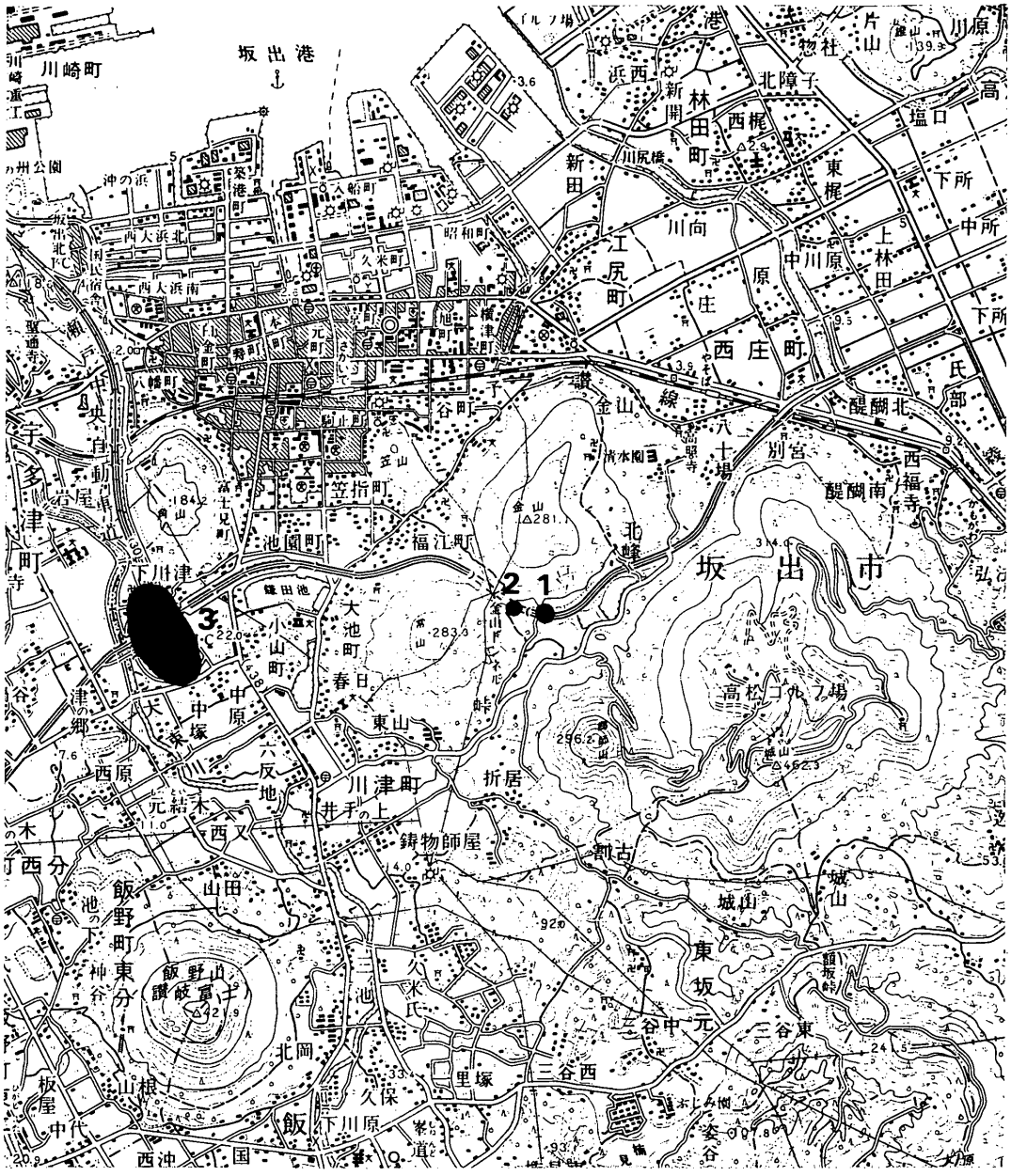
石器の組成からみると加工具は弥生時代後期段階でも20～30％ほどあるが，加工具の中でも石斧類は少なくなっており，スクレーパーが大部分を占めるようになっている。これに対して弥生時代中期段階では加工具の中でも石斧類の占める割合は高くなっており，加工用石斧類の鉄器化は弥生時代後期に急速に進んだものと思われる。

5．弥生時代における石器生産と流通

これまで見てきた遺跡では，いずれも剥片・砕片や未製品がほとんど出土していない。石器の素材となる大型の剥片や原石なども出土してはいない。つまり集落内で石器生産を行なっておらず，従って製品として各集落に石器を持ち込んだものと考えられる。

高松平野の弥生時代遺跡では，これまで石器を製作したと考えられる遺跡はない。香川

県内においても，まだ石器製作跡と断定できるような遺跡は発見されていない。香川県では坂出市の金山産のサヌカイトが石器の材料として多く使用されている。その金山の周辺にいくつか遺跡が点在するが，そのうち金山の南麓に位置する長者原遺跡[7]に注目してみたい。



1．長者原遺跡　　2．ヒコシ峠遺跡　　3．下川津遺跡

第411図　金山付近遺跡分布図

長者原遺跡は金山から東南に派生する尾根からの緩斜面に位置している。発掘調査では弥生時代中期後半の竪穴住居跡が1棟検出された。石器は400点以上が出土しており，石鏃・打製石庖丁などのほかに剝片類が多く出土している。石庖丁のなかには未製品も含まれている。器種の明らかなものは約60点ほどで，他は剝片類や一部に加工を施したものが多い。製品が少なく，未製品を含み剝片類が多いことから，また石器石材の原産地に位置していることなどから，長者原遺跡は石器の製作跡の可能性がある。

詳細は不明であるが，金山周辺のヒコシ峠遺跡[8]などもこのような遺跡の一つかも知れない。また金山東麓にもサヌカイト剝片が多量に散布し製作跡の可能性が指摘されている。

一方，金山の西側の大束川沿いに展開する，弥生時代前期・後期の拠点集落と考えられる下川津遺跡[9]の状況をみると，弥生時代前期の第2低地帯Ⅶ層では総数2060点中，剝片が1254点と61％を占めている。その石器組成は打製石庖丁17点，磨製石庖丁3点，石鎌3点，太型蛤刃石斧3点，扁平片刃石斧？1点，石鍬（打製石斧）68点，石錐5点，石鏃22点，スクレーパー244点，楔形石器16点，石錘2点，石皿2点，磨石6点，敲石34点，砥石3点，その他1631点となっている。使用石材はサヌカイトが1998点と97％を占めている。これに対して弥生時代後期の竪穴住居跡では93点出土している。打製石庖丁1点，石鍬（打製石斧）2点，石錐7点，石鏃24点，石槍3点，スクレーパー12点，楔形石器12点，石錘2点，磨石3点，敲石8点，砥石8点，その他11点（剝片5）となっている。

下川津遺跡では弥生時代前期段階では，剝片の出土が非常に多いが未製品は少ない。収穫具が33点と拠点集落にしては少なくなっている。土掘具は68点とやや多めである。後期段階では定形的な石器は激減している。

以上のことから，石器石材の原産地に隣接している拠点集落である下川津遺跡では，弥生時代前期段階では剝片の多さから，あるいは石器を集落内で製作していた可能性が考えられる。原産地に隣接しているから，製作遺跡を経由せずに自らの集落で行なったのかもしれないし，また製作遺跡がこの拠点集落に本来属するものであったのかも知れない。

高松平野では，今のところ拠点集落の発掘例がなく，そのような集落での石器の在り方は今後の課題である。先に見たように高松平野での弥生時代の集落での石器の在り方から考えると，製品として各集落に持ち込まれたようで，例えば長者原遺跡のような製作遺跡から石器を持ち込んだと考えられる。あるいは未製品の状態で持ち込み，簡単な最終工程のみ集落内で行なったのかもしれない。

これに対して，サヌカイト以外で一定量使用される結晶片岩について考えてみたい。結

晶片岩は徳島県の吉野川流域で産出するもので，各遺跡で10%前後含まれる場合が多い。結晶片岩は石斧を中心とした磨製石器に使用される率が高いので，遺跡における結晶片岩の率は磨製石器の率に近い値となっている。上天神遺跡では結晶片岩の素材剥片と考えられる大型の剥片が出土している。他の集落では結晶片岩の素材剥片や，結晶片岩製の石器の未製品の例が報告されていないので，製品として流通したのか，あるいは素材として流通したのかは今後の課題である。

6．おわりに

高松平野を中心に弥生時代遺跡における石器の在り方を，主にその組成から検討してきた。しかし集落内における製品以外の剥片類の量や，その出土位置などを検討していないので，生産や流通の核心にまで迫ることは出来なかった。今後は各遺跡の報告においてもすべての製品は言うに及ばず，製品以外の剥片類の記述を自らを含めて望みたい。

(1)『浴・長池遺跡』高松市教育委員会　1993
(2)『久米池南遺跡』高松市教育委員会　1989
(3)『林・坊城遺跡』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター　1993
(4)『石清尾山塊古墳群調査報告』高松市教育委員会　1973
(5)『前田東・中村遺跡』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター 1995
(6)『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター 1995
(7)「長者原遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』香川県教育委員会　1979
(8) 井上勝之「サヌカイト製石器の製作址」『香川県自然科学館研究報告』第2巻　1980
上記文献で、井上は金山東麓のサヌカイト散布地を，加工痕のある剥片やチップ，削器状の刃器を石庖丁の未製品として，これらから石器製作跡を考えており、未製品の形で他地域へ搬出したとする。
(9)『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター　1990

第2節　上天神遺跡における弥生後期土器の構成

1．はじめに

すでに第3章で提示したように上天神遺跡では多量の土器資料を得ている。少量の縄文時代晩期後半～弥生時代中期前半及び古墳時代以降の資料を除けば，大部分は初頭を中心とした弥生時代後期資料である。本節では，まずこれらの構成を整理しておく。

2．編年的位置

取りあえず明確な後出的形態を除くと，上天神遺跡資料は総体として以下の特徴を備えている。詳細は後に示すとして，ここではまず概略的な点を押さえておこう。

（1）　器種構成の点では，貯蔵形態では直口壷が高い比重を占める。煮沸形態では1，2の例外を除き，甑が基本構成に加わっているとは言いがたい。供膳形態は圧倒的に高坏の比重が高く，大形鉢も多い。しかし小形鉢は例外的な存在にすぎない。また中期的な無頸壷・把手付鉢が伴うこと，大小の器台が盛行することも重要な特徴であろう。

（2）　調整手法等では，簡略化・鈍化の傾向が見えるとはいえほとんど全ての器種にわたって凹線文が多用される。また成形時に叩き技法の採用は確実であるが，多くの場合に丹念な仕上げ調整を施し，その痕跡を消すことに努めている。仕上げにはミガキ調整が多用される。

また壷・器台では凹線文以外に円形浮文・刺突文が多用される。

（3）　（2）の加飾手法と密接に関わる点であるが，壷・甕類では口縁端部の拡張が比較的顕著である。同様に高坏では特徴的な拡張口縁形態が主流を占める。

以上の諸点は，これまでの編年研究の成果に依拠すれば，ここで分析する資料の大部分は後期初頭，すなわち本地方では高松市大空遺跡資料[1]をもって従来代表されてきた段階，吉備南部地方の上東・鬼川市Ⅰ式（上東遺跡編年[2]），高橋氏編年[3]Ⅶａ～ｃ期に相当するものであることを示す。

明確な後出形態を除く上天神遺跡後期資料の主要部分は，大枠では上記した段階に所属することはまず間違いないが，それ自体一定の時間幅をもつ後期初頭段階にあって，決し

て単一の様相を示す資料群ではない。多くの器種において，時間差に起因するであろう一定の形態差を観察できる。しかし，この点も第3章の記述で了解されるように，上天神遺跡においては出土状態からそれを明瞭に検証することは困難であった。したがって以下で推定する初頭段階の新古相の位置づけは，一部については後段での検討によって補強できたものの，全体としては現段階では不十分な仮説の域を出るものではなく，今後に大きな仮題を残している。

器種	初頭(古相)	初頭(新相)	前葉以降
広口壷	A 1	A 2	E
	B		F
	C		
	D 1・2	D 1・3	
直口壷	A		
	B 1・2		
	C		
	D・E		
	F		
	G		
短頸壷	A・B		
無頸壷	A・B		
細頸壷	A・B		
甕	A 1	A 2	G
	B		F 1・2・3
	C		H
	D		
	E		
大形甕	A・B		
高坏	A 1・2	A 3・4	
	B 1	B 2	G 1・2
	C		
	D 1・2	E	F 1・2
脚	A 1・2・5・6	A 3・4	H
	B 1	B 2	G
	C 1・2		
	D 1・2・3		
	E・F		
装飾高坏			
小形器台	A～F		
大形器台			
大形鉢	A	B・C	I・J
	D		
	E・F・G		
	H		
把手付鉢	A・B		
蓋	A・B・C		

第23表　上天神遺跡　弥生後期土器器種構成表

3．上天神遺跡資料の器種構成

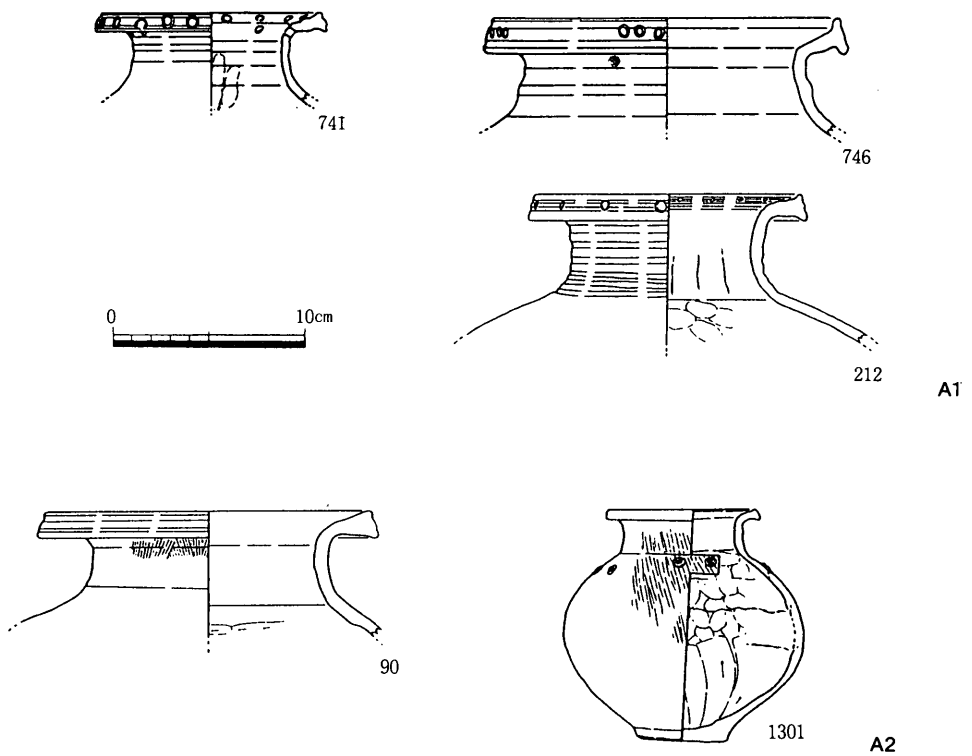
主要な器種構成は壷・甕・高坏・鉢・器台などからなる。更に各器種について主に形態面から細分した。以下煩雑ではあるが，主要器種諸形態について見てゆく。なお全体構成は第23表に示した。

本遺跡資料の圧倒的大多数は全体形状を復元しえない小破片であるため，本分類では，最も各器種の特徴を表わしやすい口頸部および脚部形状に重きを措いた分類にとどまっている。また分類が過度に煩雑となることを恐れてミニチュア土器や，搬入品の一部などで例外的かつ特異な形状はこの分類から除外している。(4)

広口壷A

肩上端と口縁部の間に太めの短い直立ないしは内傾する頸部を持つ。口縁部の折り返しはかなり強いが，それでも口縁部が水平に開くまでには至らない場合が多い。口縁部は鈍く肥厚しつつ端部を摘み出すが，上下に同程度摘み出す形態，下方への引き出しが強い形態，単純な肥厚に留まる形態等の微妙な差異がある。口縁端面および頸部に文様を持つ。端面にはやや不明瞭な凹線2～3条に加え3～6個1対の円形刺突文を施す資料がみられる。短刻線文は多くない。また口縁部内面にも円形刺突文を施す場合がある。頸部にはやや不明瞭な凹線をみることが多い。

強く折り返して短く開く口縁端部を拡張して，原則的に頸部に凹線文を加える形態をA1類とする。口縁部が萎縮し，拡張もほとんど見られない一群をA2類とする。この類型では頸部無文で，仕上げの横ナデすら省略し体部から続けた縦ハケ調整で終わることが多い。

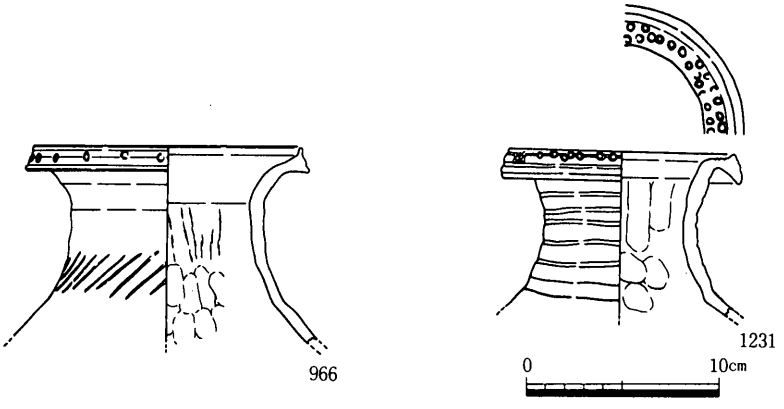


第412図　広口壷A

広口壷B

頸部が広口壷A類に比べやや伸び，同時に口縁部の折り返しや端部の肥厚・拡張が相対

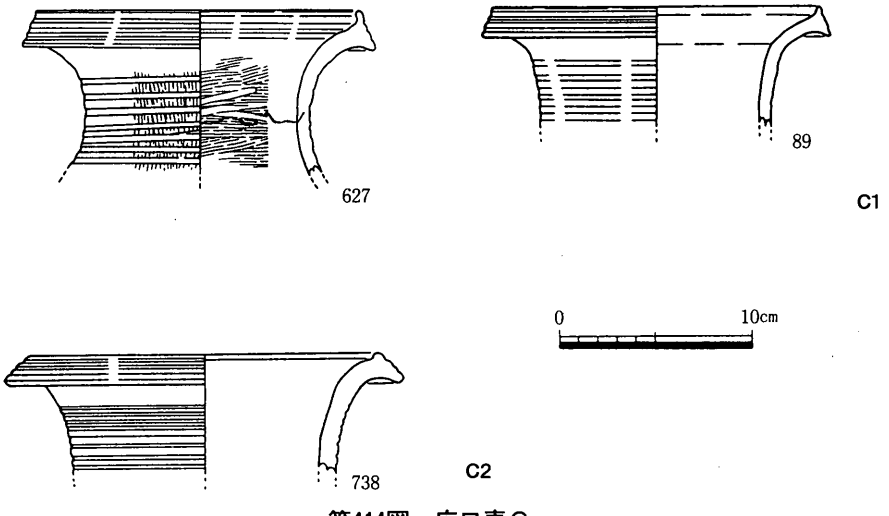
的に弱い形態である。頸部に凹線文を加えることは多くなく，施した場合もかなり疎らで不鮮明なものが多い。むしろ直口壷A類などに多用されるようなハケ原体押圧による斜線文をめぐらすことが多い。



第413図　広口壷B

広口壷C

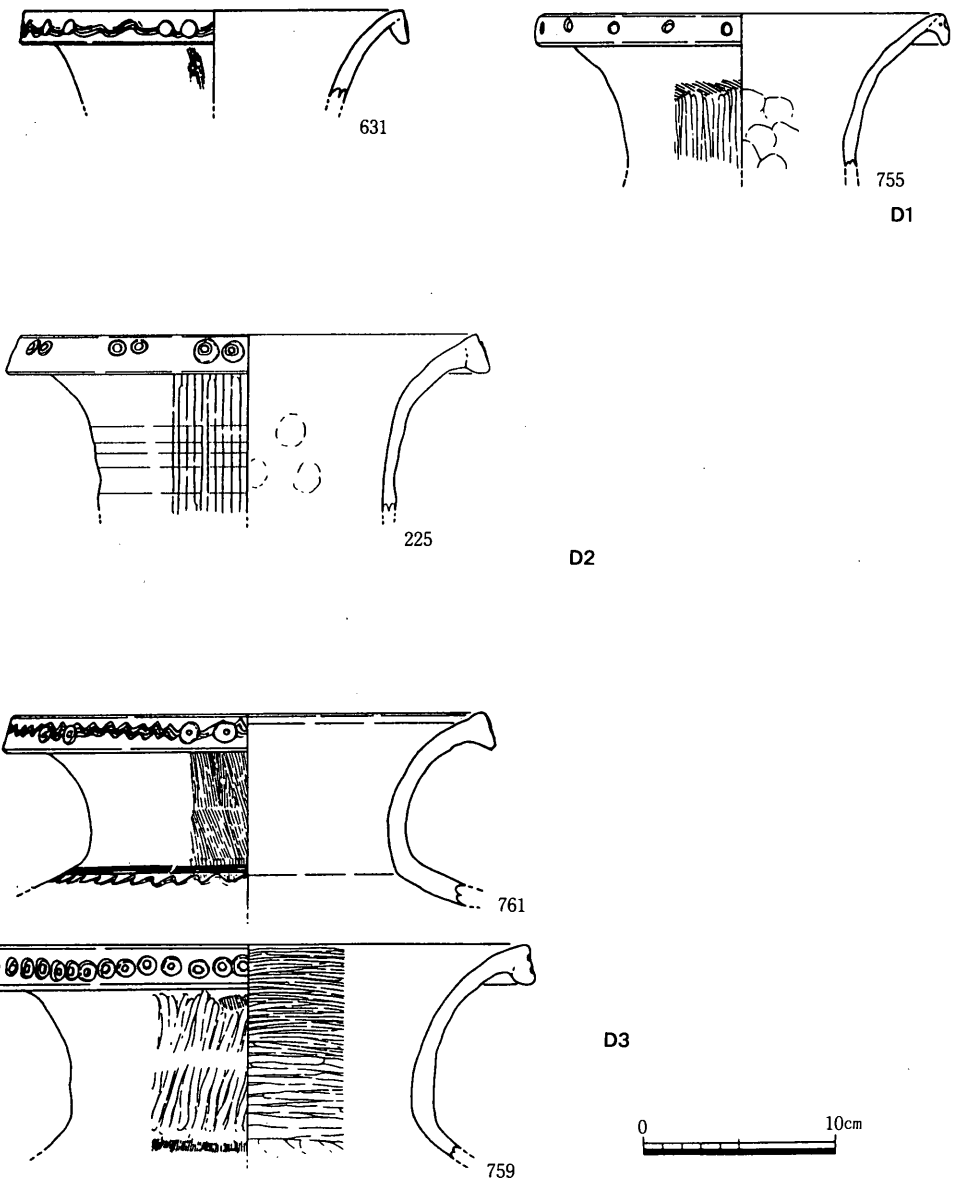
やや外傾する頸部から緩やかに屈曲した短い口縁部を持つ。頸部が外傾する分だけ口縁部の折り返しは鈍い。直口壷B２類の口縁部が発達した形態ともとれるが，ここでは広口壷に含めた。口縁端部は鈍く肥厚して拡張する。上下に端部を摘み出す形態をC１類，下方に引き伸ばして端面が強く内傾する形態をC２類とする。口縁端部には細かい凹線文を見るだけで，広口壷A・B類に多い円形刺突文・短刻線文は認めない。この部分の凹線文は広口壷A・B類や甕の多くほど不鮮明な鈍いものではない。また頸部に凹線文を連続させるが，これも比較的明瞭な施文が多く，並行沈線文に置き替わる例も少なくない。



第414図　広口壷C

広口壷D

口頸部が緩やかに外反して開く形態で，口縁端部下面に粘土帯を付して垂下口縁形態を採るものをD類とした。小形品をＤ１類，大形で相対的に外反が弱い形態をＤ２類，ややそれが強まり口縁部が水平に開く形態をＤ３類とする。本類は広口壷諸形態中，もっとも加飾の顕著な器種である。口縁端面への施文が最も多く，ついで大形品を中心に口縁部内面，また頸部・肩上部の施文例もある。



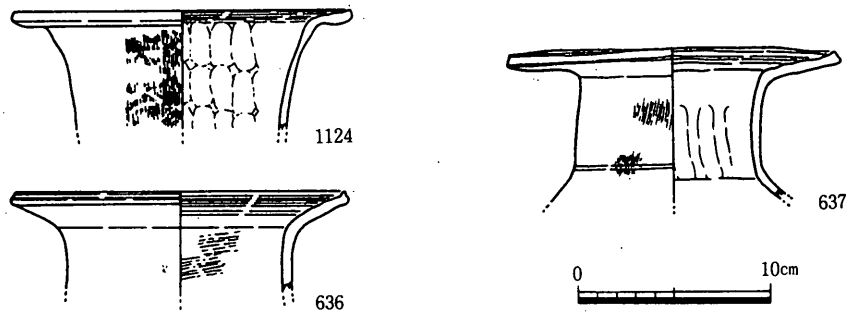
第415図　広口壷D

口縁端面に円形浮文・円形刺突文を見ることが一般的である。またこの部分に波状文を施す例は小形のＤ１類で多い。さらに口頸部が相対的に発達しつつあるＤ３類では口縁部内面の加飾例も認められる。

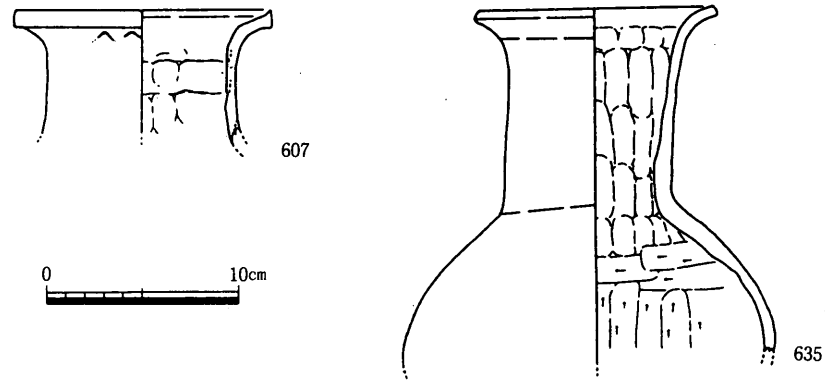
広口壷Ｅ（後出形態）

直立する頸部から強く屈曲して口縁部は水平に開く。一般に広口壷Ｂ種より頸部が伸び，口縁部も大きく発達している。また全体に薄作りで頸部内面に顕著な指押さえをまま認めることも重要な特徴である。本形態は明らかに後出する器種で，古墳時代前期まで続く下川津Ｂ類広口壷の系譜に位置付けられる。口縁端部は肥厚せずに鈍く摘み上げ，狭い端面は内傾する。つまり甕Ｇ（下川津Ｂ類甕）と同一の形態である。

矮小化した口縁端面にはもはや凹線文は施されない。かわって広口壷Ｂ種の一部などにも認められた口縁部内面の凹線文がより顕著に認められるようになる。また本遺跡では確認していないが，近隣の資料では，この系統で頸部に粗雑な箆描並行沈線もしくは綾杉文，あるいは円形刺突文を施す例がある。



第416図　広口壷Ｅ



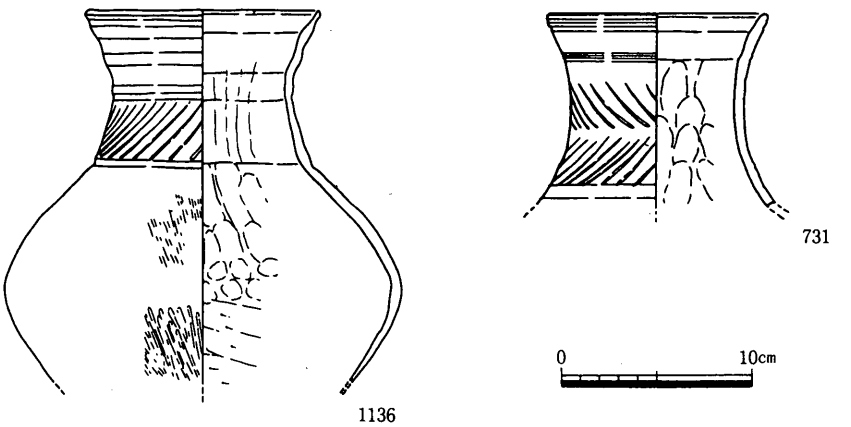
第417図　広口壷Ｆ

広口壷F（後出形態）

長く伸びた頸部から折り返した口縁部は短い。端部はせいぜい小さく摘み上げる程度で明瞭な拡張も持たない。外面無文。

直口壷A

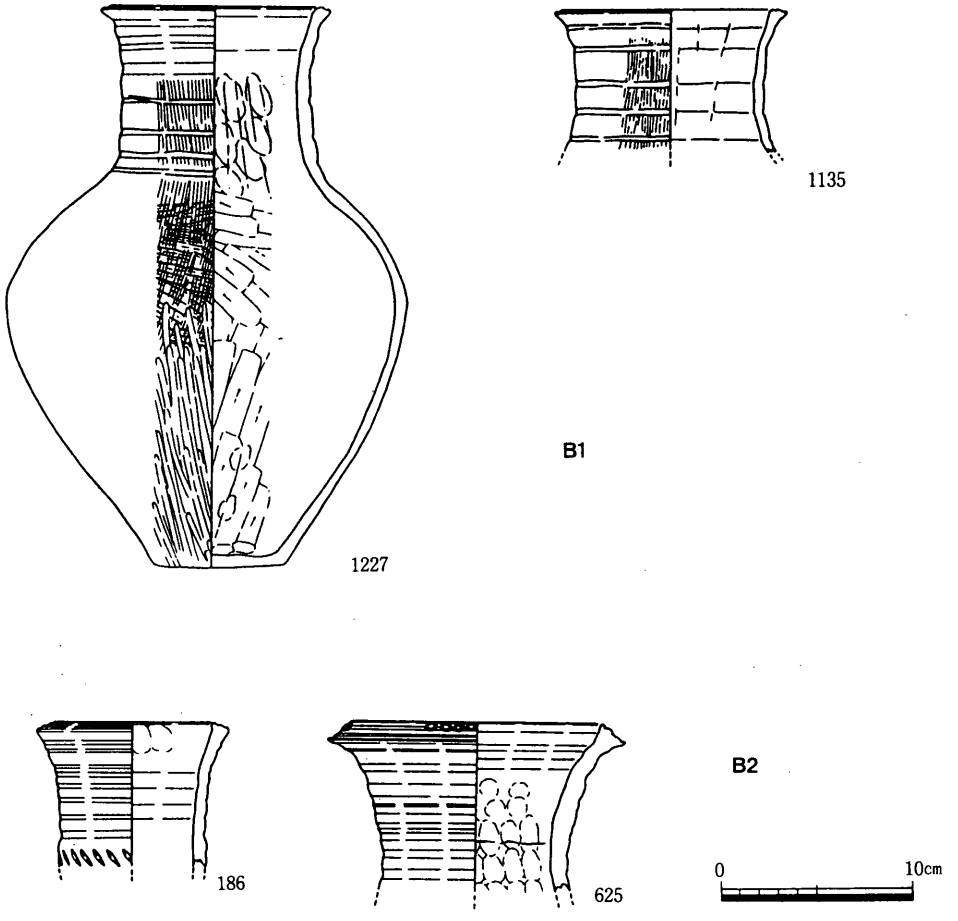
口頸部は緩やかに外反して立ち上がり，口縁端部はほとんどの場合丸く納めるかやや尖る。この形態では体部は強く張り，最大径部がやや低いものが多い。結果として肩上部か明瞭な屈曲点を経ずになだらかに頸部に移行することが多い。口頸部，特に上半部には鈍い凹線文を連続させ，口縁部の外反がやや強い個体では内面上半部までそれが及ぶ。頸下半部には斜線文を1～2段巡らすことも多い。斜線文はハケ原体押圧によるものが一般的で，沈線文の場合も同様に細く長い。



第418図　直口壷A

直口壷B

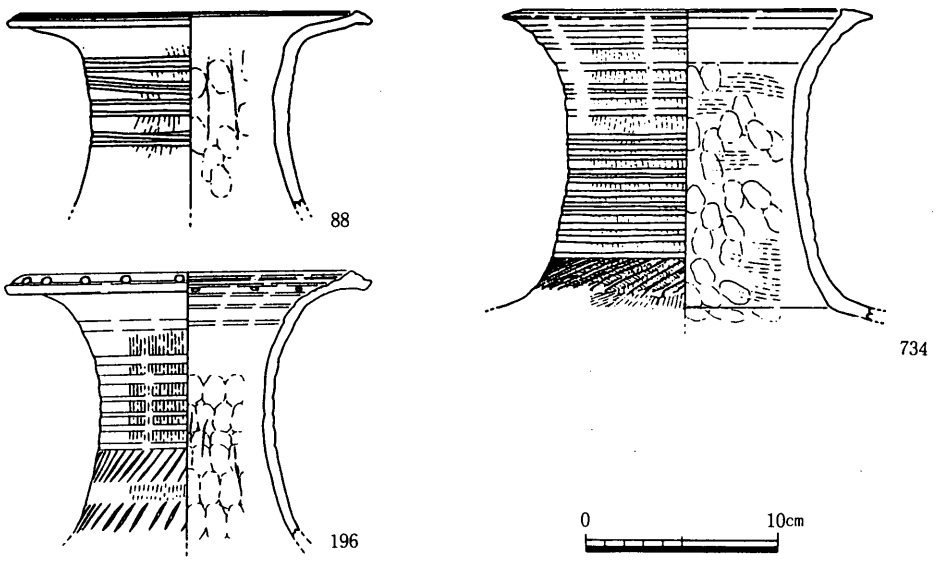
口頸部は弱く外反して立ち上がるが，A類の一部に見られるほど発達するものはない。口縁端部を鈍く肥厚して小さく摘み出すことを特徴とする。相対的に端部の肥厚・拡張が微弱な一群をB1類，全体的にやや厚手で摘み出しの強い一群をB2類とする。口頸部外面にはやはり凹線文を連続させるが，直口壷A類のそれよりも疎らであるか，より不明瞭な場合が多い。頸下半部の斜線文は原則的に見られない。B2類では拡張した口縁端部に円形刺突文を加えることがある。B類，特にB2類では搬入品が多い。



第419図　直口壷B

直口壷C

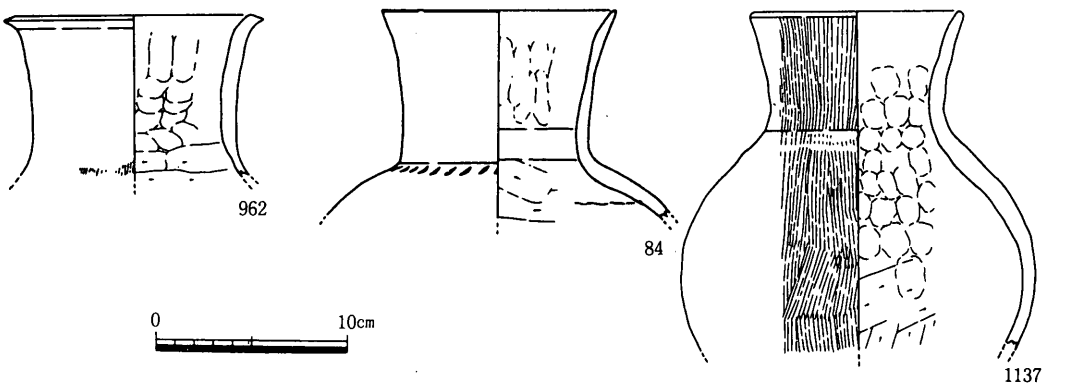
小形器台C・D類に類似した発達した口縁端部形状で，同様に端部に刺突文を見ることも少なくない。口頸部の外反はきわめて強い。むしろある種の広口壷に近い形態すら認められる。口頸部外面にはやはり凹線文を連続させる。少数例これが沈線文に置き替わった個体も見られる。頸下半部の斜線文も認める。



第420図　直口壷C

直口壷D

口頸部に凹線文を加えない一群のうち，口頸部が緩やかに外反して立ち上がるものをD類とした。A類に比べ，外反・頸部長共に小さい。口縁端部は丸く納めるか，やや尖る。頸部外面はナデ調整か体部から連続的に加えられた縦ハケ調整で仕上げる。少数例頸基部に爪形文状の刺突文を加えたものがある。

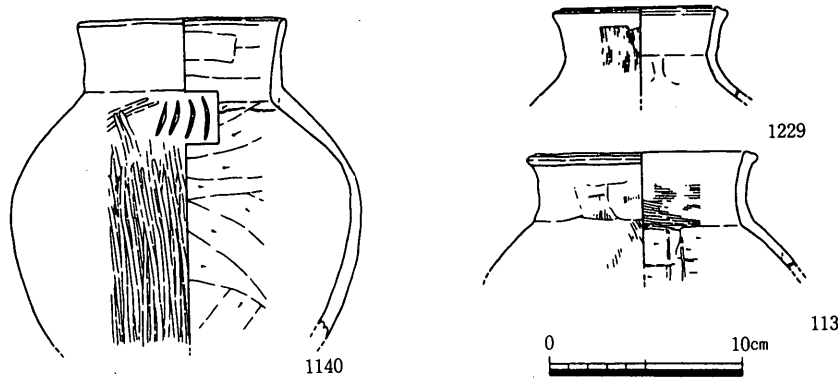


第421図　直口壷D

直口壷E

同じく口頸部に凹線文を加えない一群で，頸部が特に短いものをE類としてまとめた。口頸部の傾斜には差異があるが，強い反り返りは見られない。口縁端部は四角く納めるか，

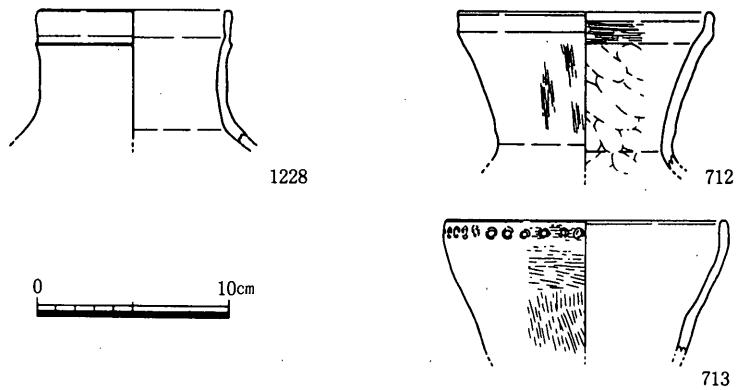
鈍く張り出すものが多い。D類同様にナデか縦ハケ調整で仕上げる。



第422図　直口壷E

直口壷F

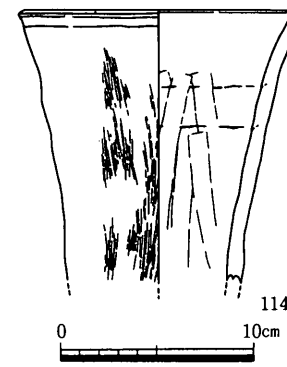
口縁部に退化した受け口状の屈折を有する形態。頸部は比較的短い。明瞭な凹線文を加えることもなく，加飾に乏しい。一例だけ口縁部外面に円形刺突文を加える特異な資料がある。



第423図　直口壷F

直口壷G

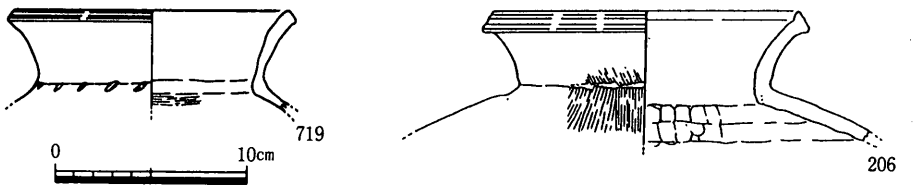
頸部は太く長いが，外反は弱い。口縁端部は四角く納める。口縁部付近の横ナデの強弱で微妙な凹面を形成することがあるが，明瞭な凹線文を加えることはなく，また他の加飾も見ない。



第424図　直口壷G

短頸壷A

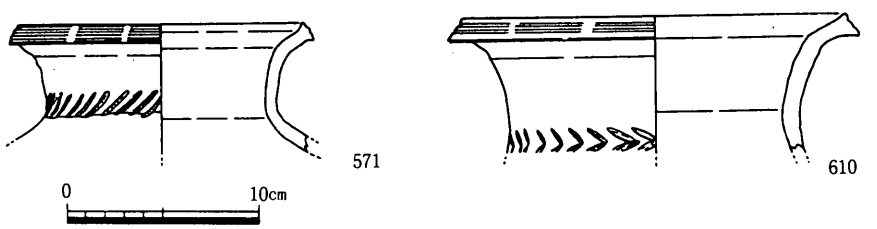
直口壷E類同様の短い口頸部だがよく外反する一群で，比較的大形品に多い形態である。口縁端部は肥厚ないしは内外への摘み出しが見られ，拡張された端面には細かい凹線文を施す。頸基部に刺突文を加えることが多い。



第425図　短頸壷A

短頸壷B

より口縁部の発達した形態を短頸壷Bとした。大形で口縁端部の拡張が明瞭な一群をB1類，小形の一群をB2類とする。B1類の口縁端部に凹線文を見る他は比較的加飾性に乏しいといえる。



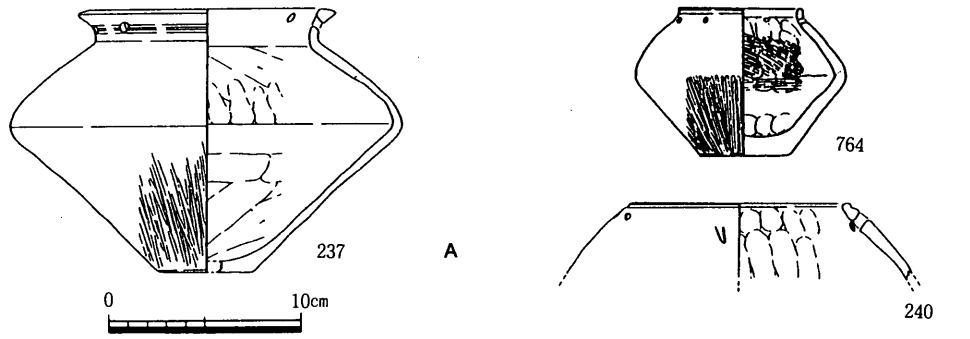
第426図　短頸壷B

無頸壷A

極めて短い口頸部は直立ないしは外傾する。体部の張りは強い。口縁端部は鈍く肥厚し小さく摘み出す。口頸部に2孔1対の紐通し孔を穿ち，口頸部外面や端面に鈍い凹線文を施すことがある。

無頸壷B

口頸部はより矮小化し，肩上端部に付く小さな屈曲部か単なる肥厚部にすぎない。口縁部に2孔1対の紐通し孔を穿ち，体部の張りは強い。

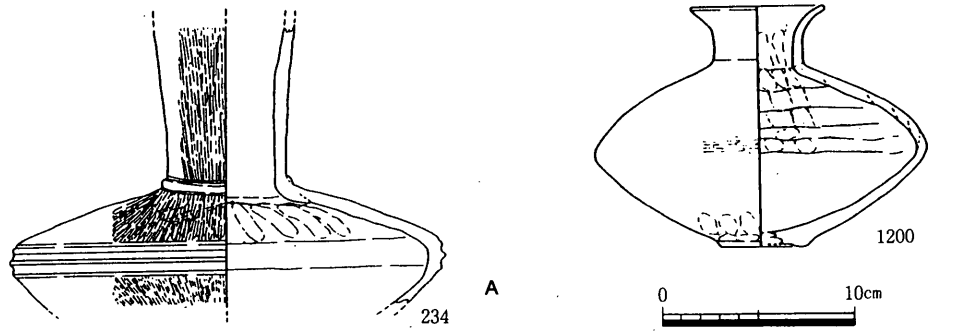


第427図　無頸壷

細頸壷

扁平な算盤玉形の体部に細身の直口の口頸部を付す形態。口頸部形態によって長頸のA種，短頸のB種に区分できる。また底部が明瞭に円盤状に突出する点も特徴である。A・B両形態とも，口縁部は小さく外反して端部を丸く納める。

体部外面は緻密なミガキ調整を原則とする。最大径部には2～3条の小突帯を付し，突帯間に櫛描波状文を加える例もある。また頸基部に小突帯1条を付す例もある。



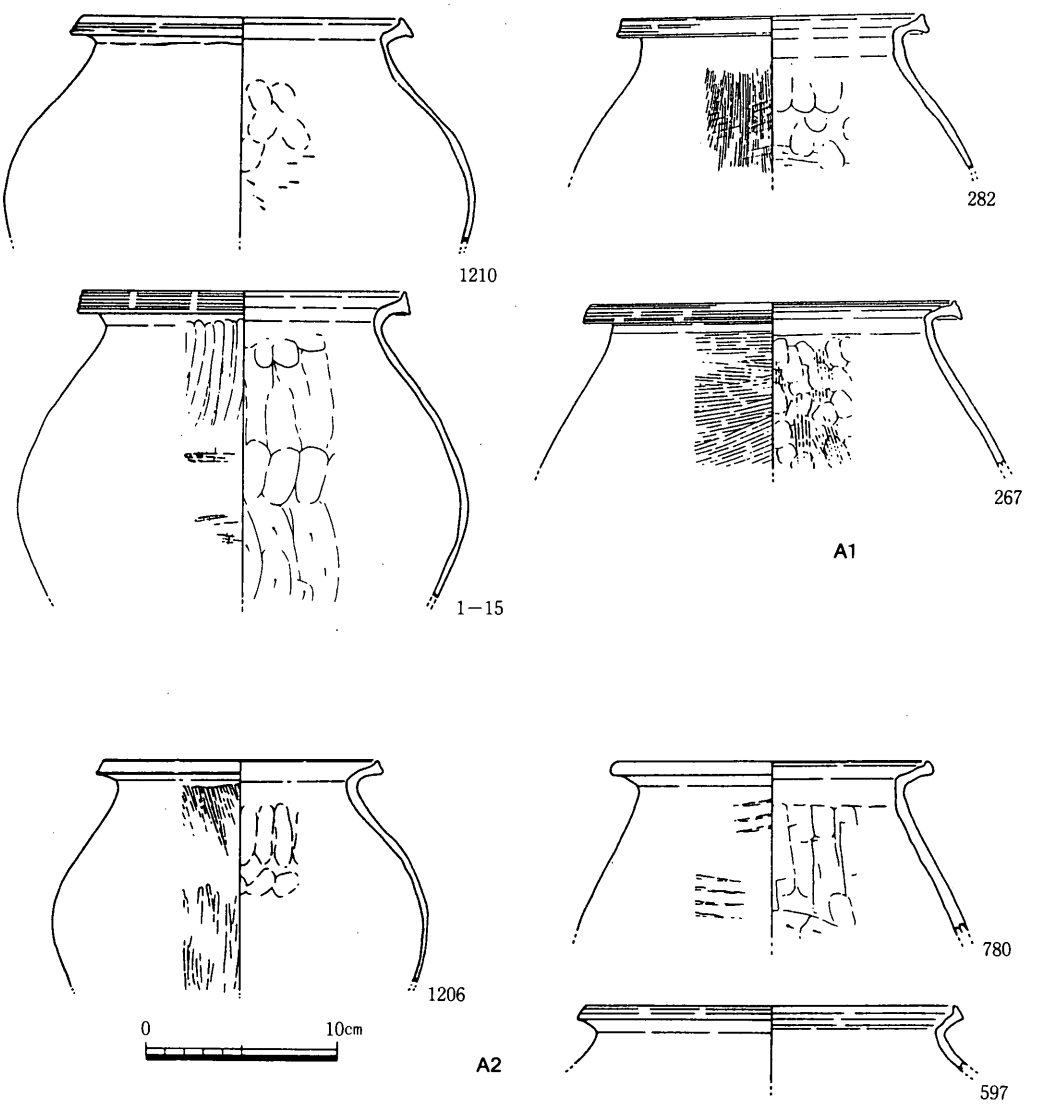
第428図　細頸壷

甕A1

体部は比較的強く張り，やや低い位置にある最大径部での屈曲も強い。肩部はあまり丸みを帯びずラインはかなり直線的となる。口縁部は，肩部とは不明瞭ながらも区別できる短い痕跡的な頸部から強く折り返す形態を基本とする。この痕跡的な頸部は短いながらほ

ぼ直立して肩部と区別しやすいものから肩上端部のわずかな傾斜の差程度に痕跡化した形態までの差異がある。

強く折り返した口縁部は短い。先端に向かって鈍く肥厚し，端上部を内外から挟み付けて摘み上げると共に，下方にも小さく突出させて内傾する狭い端面を作る形態が多い。端面には上記の端部作出に係わる狭く不鮮明な凹線が3条程度認められる。口縁部内面と頸部内面は強い横ナデを施し，しばしばこの部分が明瞭な凹面をなし，これによって折り返し部に鈍い稜を生じることも多い。



第429図　甕A

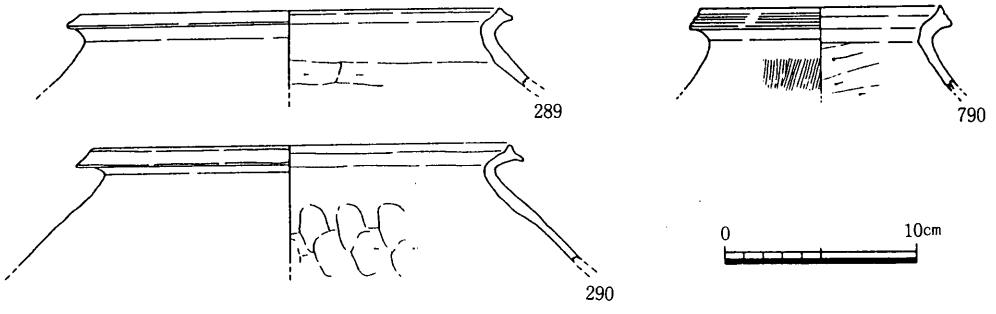
体部内面は最大径からせいぜい肩部下半までをほぼ上限として横削りを施した後に肩部上端まで指押さえを加えることが一般的である。外面上半部は比較的緻密な縦ハケ調整で仕上げ，先行する叩き目を留めることは多くない。

甕Ａ２

基本的な特徴はＡ１類と変わらないが，口縁端部の拡張が相対的に微弱であること，口縁部全体がやや伸びている点で区別できる一群である。外面の仕上げ調整もやや粗雑で叩き目を留めることもままある。

甕Ｂ

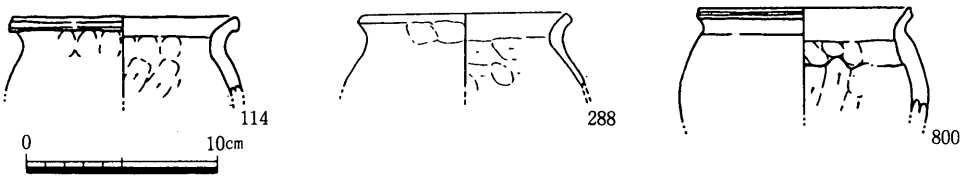
体上部の概形はＡ類によく似るが，痕跡的なものを含めて「頸部」は認めがたい。と共に口縁部の折り返しもかなり緩やかとなる。口縁端部は鈍く肥厚するものの摘み出しはあまり強調されず，鈍く下方へ引き出すことが多い。結果としてＡ類に比べて端面はやや矮小化し，この部分の凹線はより不明瞭か条数が減少する。内面調整では，肩部上半，場合によっては折り返し部直下までケズリが及ぶことが多い。



第430図　甕Ｂ

甕Ｃ

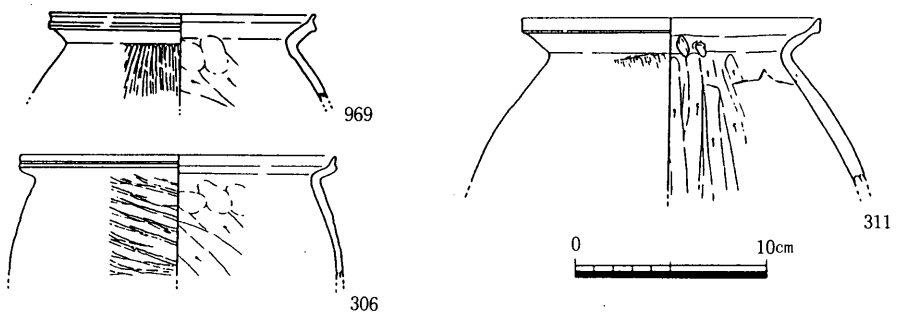
もっぱら小形の甕に採用される形態である。体部の張りは弱く，緩やかに折り返した口縁部は極めて短い。口縁端部は主に下方に小さく摘む程度で顕著な肥厚・拡張はない。外面調整はやや粗雑で，口縁部直下に指押さえの顕著な凹凸を残すこともめずらしくない。内面は上端付近までケズリ上げることが多い。



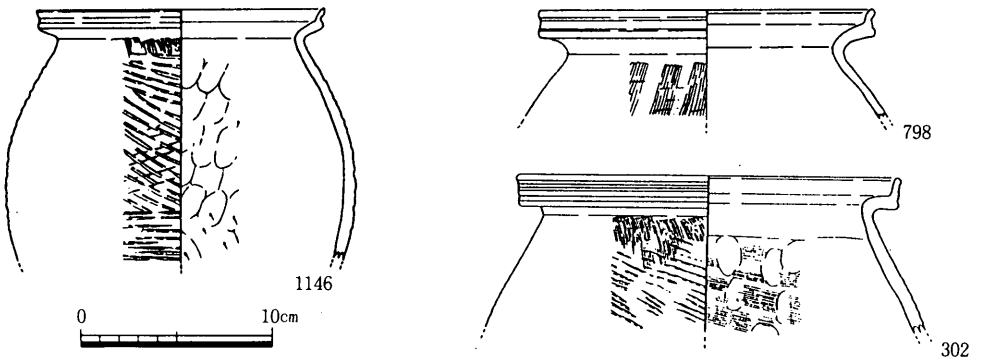
第431図　甕C

甕D

体部の張りはやや弱く，最大径部の屈曲も強くない。口縁部は強く折り返して短く開く。口縁端部は上方に薄く摘み出して上端が尖る。ほぼ直立する端面は強い横ナデで明瞭な凹面を成す。体部内面は折り返し部直下まで縦ないしは斜位のケズリを施すことが多い。また外面に叩き目を留める例も少なくない。



第432図　甕D



第433図　甕E

甕E

体部最大径はやや低く，かなり直線的となる肩部から，口縁部は強く折り返して水平に

短く開く。口縁部はほぼ直立する立上り部を持ち，上端はわずかに肥厚気味に丸く納める。立上り部には，この部分の作出に係わる3条程度の狭い凹線を加える。

肩部内面は横ハケないしは横ナデを施したのちに若干の指押えを加える程度で，原則的にケズリ調整は認めない。

甕F 1

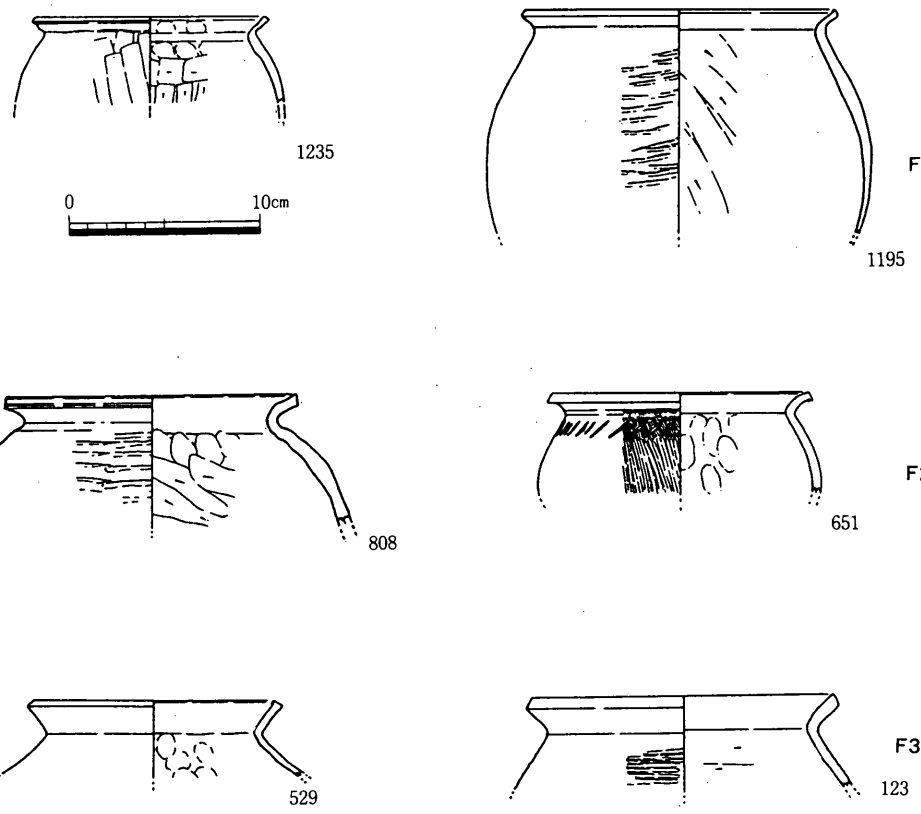
体部の張りは弱い。口縁部は強く折り返すものの短く，端部を小さく摘み上げる。内面は上端近くまでケズリ上げることが多い。

甕F 2

体部の張りはやや強く，口縁部はあまり伸びないが折り返して強く反る点に特徴がある。端部は単純に四角く納めるか，丸く納めるものも多い。口縁部の発達度合い等で細分可能である。

甕F 3

あまり長くないが直線的に開く口縁部形態を特徴とする。



第434図　甕F

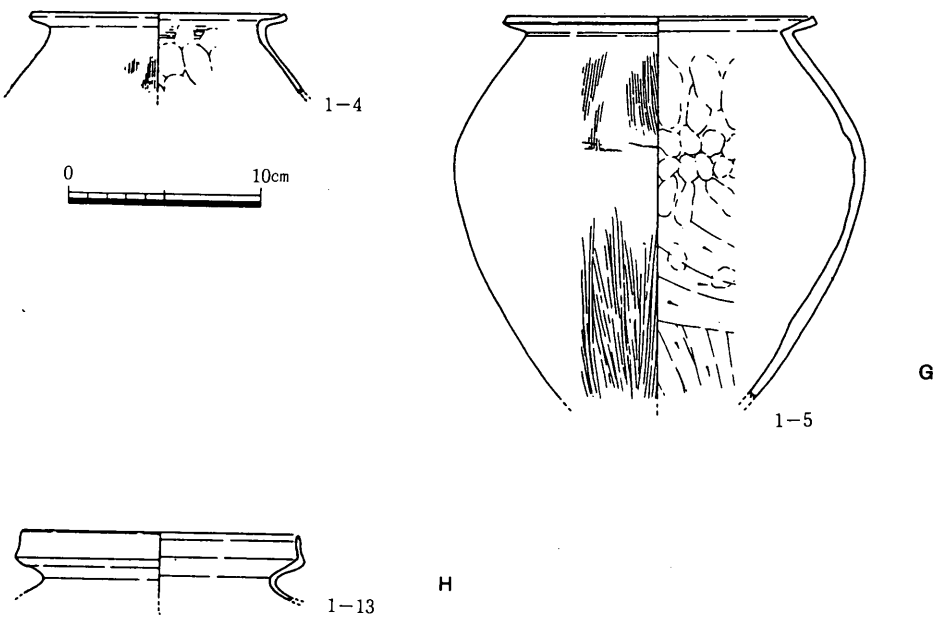
甕G

下川津B類甕。薄作りの底部から反り気味にシャープに立ち上がり，体上位にある最大径部はよく張るというように基本的形態は甕A類をよく踏襲している点は注意したい。痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。口縁部は肥厚せずに端部のみを小さく摘み上げる。口縁部・頸部内面の強い横ナデにより折り返し部に稜をもつことが多い。

矮小化した口縁端面にはもはや凹線文などは認められないが，口縁部内面は不明瞭な凹線をよくみる。この点は広口壷Eと同様であり，広口壷Bや小形器台の一部にも通じる施文である。体部内面は，肩部に顕著な指押さえ，最大径以下は箆ケズリを施す。特に肩部指押さえは下端の最大径付近は深く指頭痕を残し，上位ではやや縦長に指腹痕が目立つという特徴が規則的に認められる。外面上半部は縦ハケ後，最大径以下縦磨きを施す。体部縦ハケに先行する叩き目をかすかにとどめる例もある。

甕H

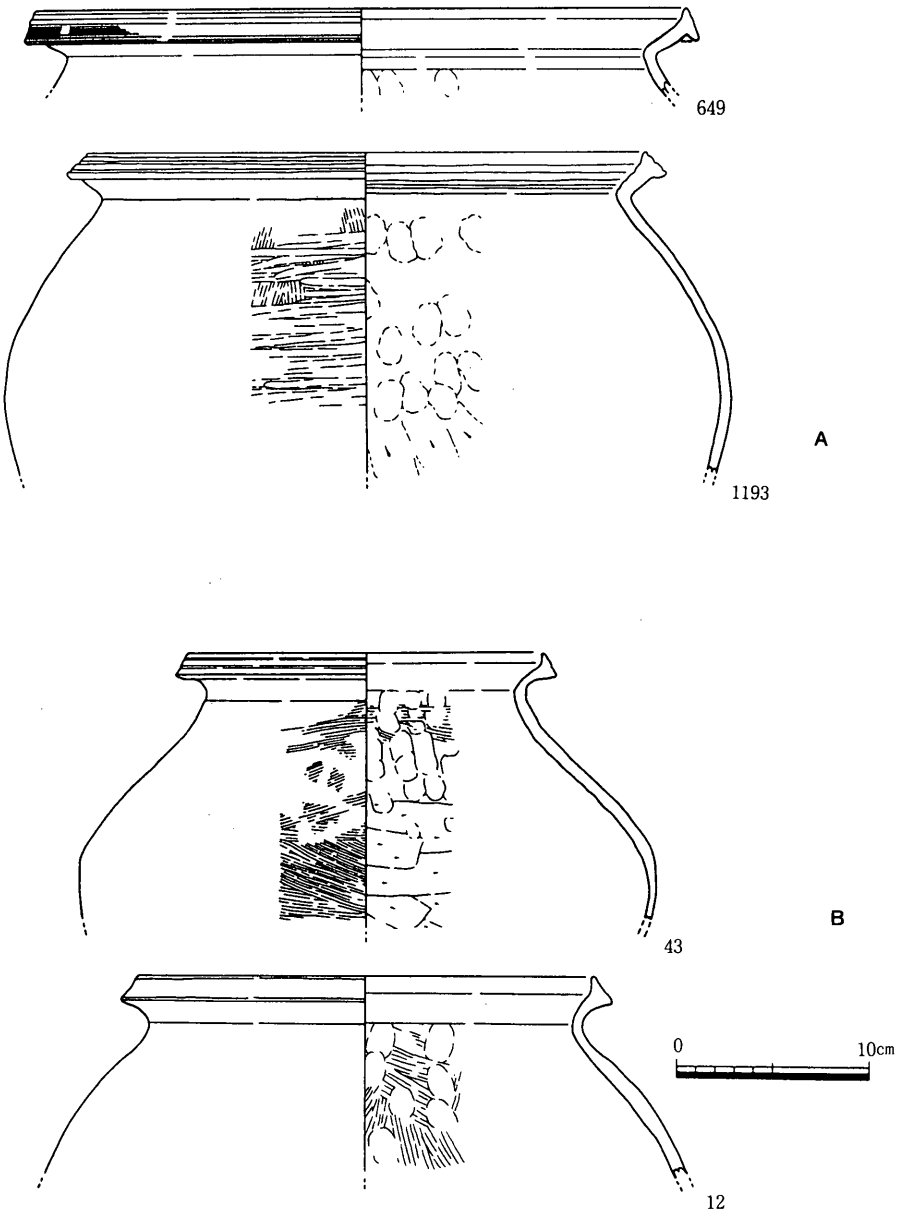
吉備系の二重口縁甕。遺存状態は不良で口縁立ち上がり部櫛描沈線文の有無は不明である。



第435図　甕G・H

大形甕A

全般的に体部の張りはかなり強い。大形甕では甕A類に典型的に見るような「頸部」は明瞭ではない。あったとしてもひどく痕跡的である。口縁部は鈍く肥厚しつつ端部を上下に強く摘み出す。幅広い端面の凹線文は比較的鮮明なものが多く，稀にこれが沈線文に置き替わった個体も見られる。内面は甕A類同様に概ね最大径部まで横ケズリして，それより上方には指押さえが残る。



第436図　大形甕

大形甕B

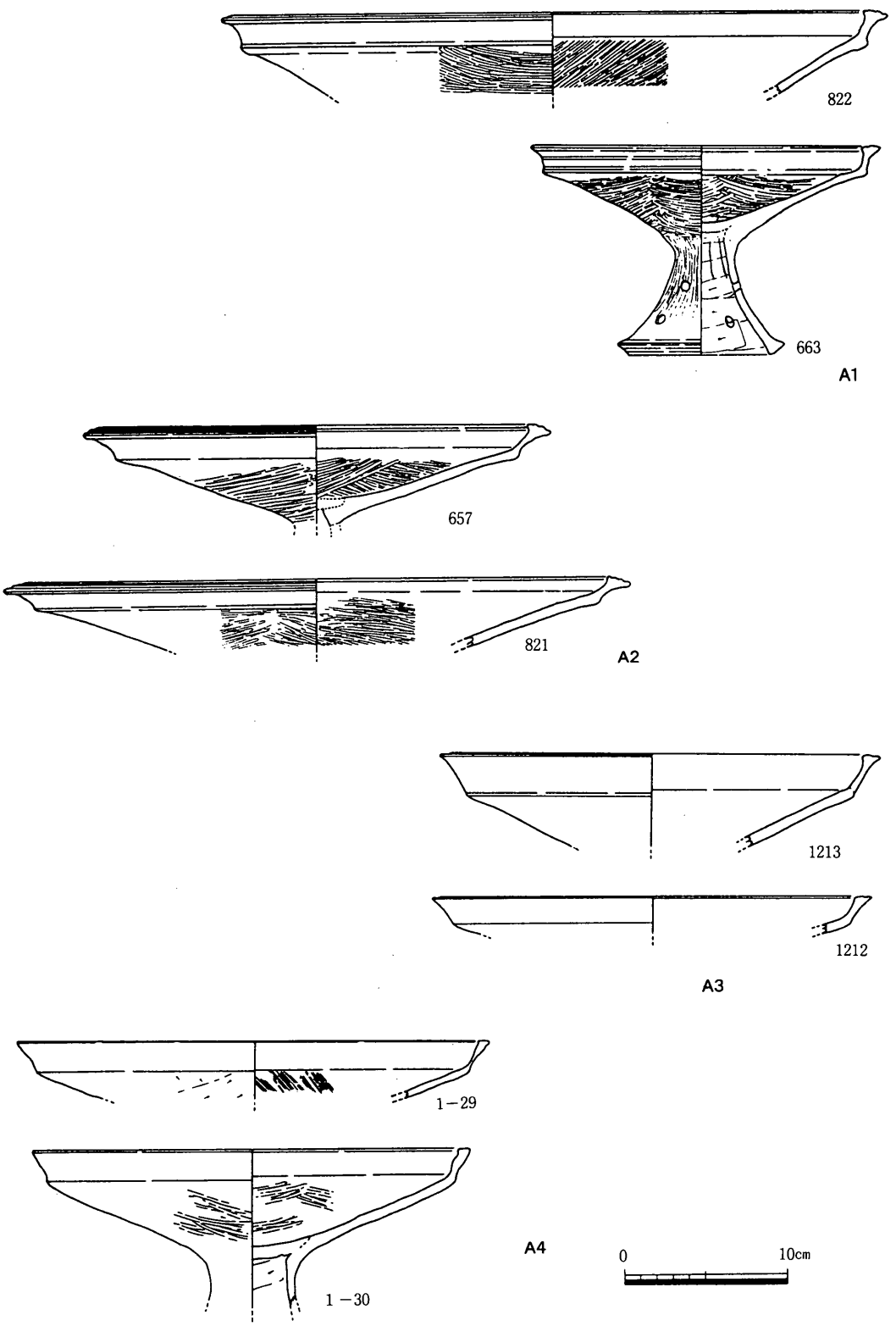
基本形状は大形甕A類と異ならないが，肥厚しつつ上方にのみ強く摘み出す特徴的な口縁部形態から区別できる。

高坏A

後期初頭に本地方では最も主要な高坏形態で，量的に他類型を圧倒する。坏中位で強く屈曲して，上半部は短い。屈曲部外面はそれを強調するように段もしくは強い稜が認められる。口縁端部は肥厚して外方に摘み出し内方にも突出する。その結果頂部には比較的広い平坦面を有する。主に坏上半部の形状－口縁部の拡張度合いや中位の屈曲度合いなど－に変移が大きく細分類可能である。A1類は中位で強く屈曲して上半部はあまり外傾しない。口縁端部は鈍く肥厚しつつ外方に引き出し，内方も明瞭に突出する。外方拡張の方が一般には強いが，内方のそれがひけをとらない場合もまま見られる。A2類は上半部の外傾が強い形態。結果として頂部の平坦面は水平ではなく内傾するにいたり，中位の屈曲は弱まるが，その部分を強調する張り出しや段は留める事例が多い。A3類は口縁端部の拡張が矮小化した形態。外方への摘み出しは小形化しつつも残るが，内方のそれはほとんど消失する。上半部の外傾は強い。A4類は口縁端部を鈍く肥厚するだけで，明瞭な内外の摘み出しを失っている。A3類の傾向がより進んだ形態と考えられる。以上1～4類に分類して示したが，これらの差異はかなり漸移的であると共に状況は複雑である。

頂部平坦面に細かい凹線文が施されることが一般的であるが，口縁部拡張の退化しつつあるA3類ではこれを欠く例が多く，A4類ではまったく認められない。坏上半部横ナデ仕上げ，下半部外面横ケズリ後内外面分割横ミガキは，A1～4類でかなり厳格に守られている。

本類には脚A類が対応し，その最も新しい様相の－後出する脚H類に最も近い－脚A4類が高坏A4類に対応することは出土状態から確認できる。したがって口縁部拡張の退化および上半部外傾の強化は高坏A類のより新しい様相と考えることができるであろう。



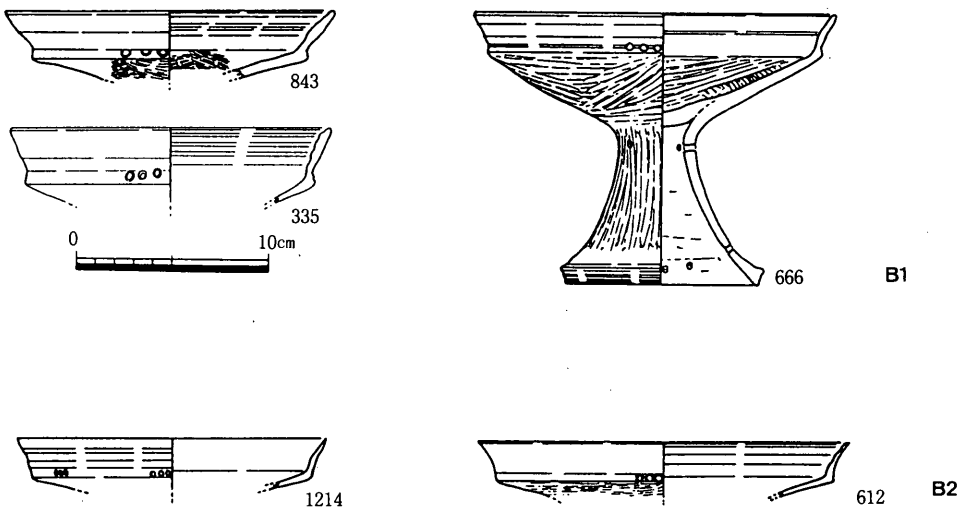
第437図　高坏A

高坏B

中位で強く屈曲して，その部分は高坏A類と同様に鈍い段をなす。上半部はよく開く。後期中葉以降に，この地域で発達する下川津B類高坏（本分類高坏G）に極めて類似した形態だが，基本形状の点でも坏上半部が未発達である点で区別できる。

坏上半部の中位で鈍く肥厚した後に先端に向かって漸次器厚を減じて口縁端部は丸く納める形態をB１類とする。本類では外反は弱く，むしろやや内湾気味に開く例すらある。B２類は屈曲部から漸次器厚を減じて先端部は薄く尖り，外反を認める。

屈曲部外面の段部に３個１対の円形刺突文を配することが本器種の特徴である。装飾高坏の一部を除いて高坏に凹線文（沈線文）以外の加飾を見ることはめずらしい。上半部内外面には，鈍い凹線文を連続させる。内面のそれの方がより鮮明であるが，外面にも相対的に不鮮明とはいえそれが及ぶ点も後述する高坏Gとの識別点である。また坏下半部の内外は分割横ミガキで仕上げ，外面はそれに先行して横ケズリを施す。この調整手法は本類で徹底されており，この点は高坏Aと同様である。

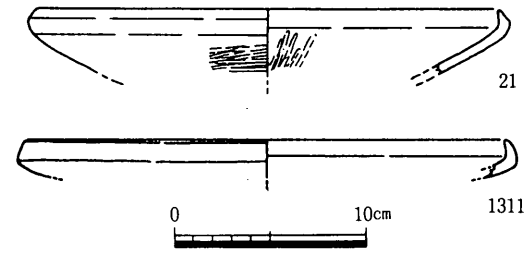


第438図　高坏B

高坏C

浅い皿状の坏部。口縁部は小さいが強く内湾する。強く内湾した口縁の端部は単純に丸く納める。

他種高坏に見るような凹線文などは本器種では認められない。また本形態は類例の乏しい器種で，現状では調整を確認し得る資料に欠ける。

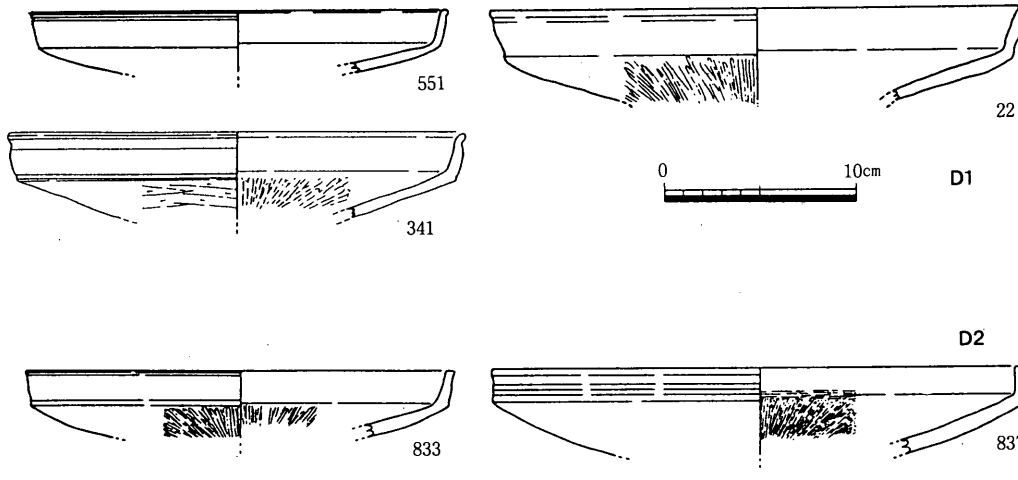


第439図　高坏C

高坏D

浅い皿状の坏部形態で，屈曲して口縁部が短く直立する。D１類は端部を外方に僅かながら張り出し気味に丸く納め，中位の屈曲がやや鈍いことが多い。D２類は同様に端部をわずかに外方へ張り出し気味にするものの，頂部を四角く納め極めて狭い平坦面を有する。中位の屈曲はD１類に比べてやや強く，鈍い稜を認める。

明確な凹線文を施すことが無い。一般に口縁端部外面や中位の屈曲部に，横ナデ時の微妙な凹凸を認める程度である。極少数例，D２類の上半部外面に鈍い凹線文を連続させる例がある。坏上半部横ナデ仕上げで，下半部は放射状ミガキが卓越する。

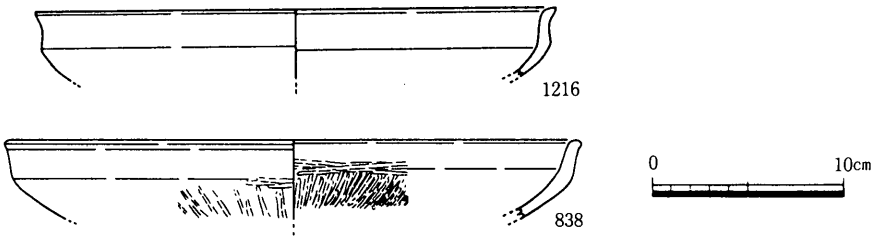


第440図　高坏D

高坏E

高坏Dに似た浅い坏部で，口縁端部の張り出しを強調した結果，短い坏上半部は外傾ないしは弱く外反する。

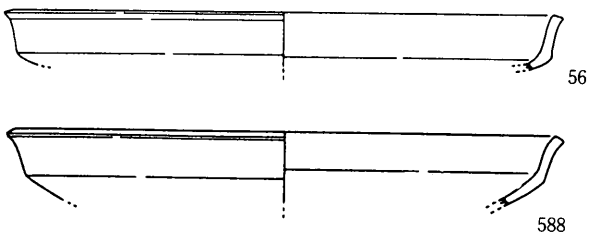
口縁端部は小さく外方に摘み出す形態となる。高坏D同様に坏下半部は放射状ミガキが卓越する。高坏D類のやや後出する形態と考える。

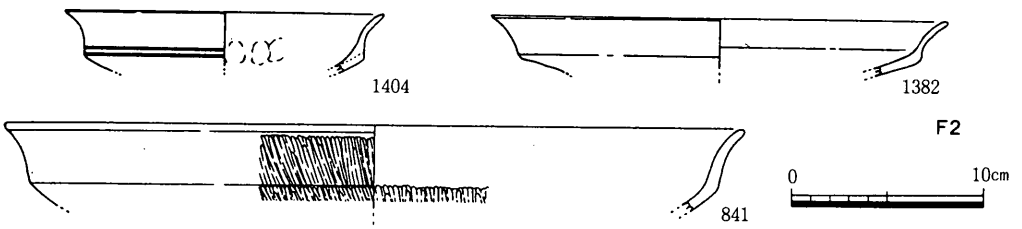


第441図　高坏E

高坏F

坏上半部が発達し，強く外反する形態を一括した。やや上半部の発達が弱い形態をF1類，より発達して外反も強い形態をF2類とした。いずれも中位の屈曲は強い。F1類は端部を四角く納め，F2類では丸く納めるかやや尖る。D類の系統で，外反口縁形態の一般的な変遷からみて，E類よりも後出的である。





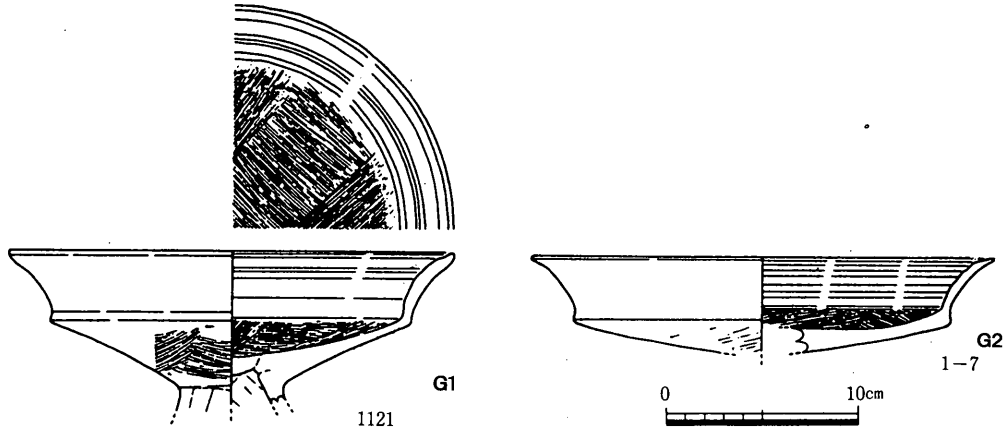
第442図　高坏F

高坏G

中位で強く屈曲して，発達した上半部は大きく外反する。下川津B類高坏に相当する。上半部の中位でかすかに肥厚し，先端部をわずかに内湾させて尖るG1類と，上半部がより強く外反し，先端部が薄く尖るG2類に細分できる。

上半部内面に顕著な凹線文の連続を見る。G1類では特に上端，すなわち口縁端部内面の凹線を以下のそれよりも強調する傾向にあるが，G2類ではその区別はない。

高坏A・B類以来の下半部内外を分割横ミガキで仕上げ，外面は先行して横ケズリを加える手法を厳格に守る。明らかに高坏B類の後出形態である。



第443図　高坏G

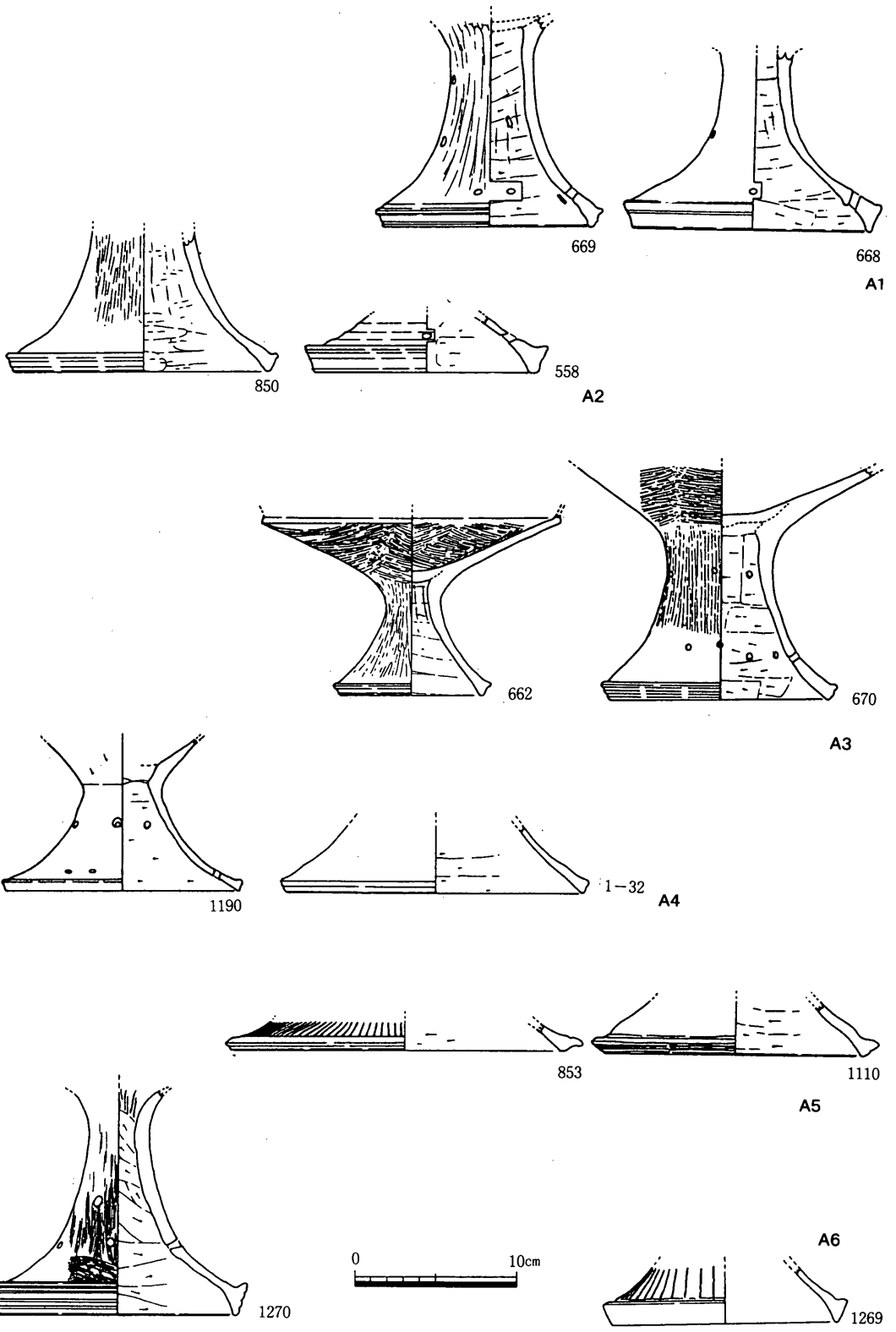
脚部

高坏・台付鉢・台付壷等の脚部を一括して扱う。上述したように資料上の制約から，各器種共に厳密に上部と脚部の対応関係を復元することは困難だからである。ただし推定し得る範囲でそのことについては検討を加えている。

脚A

脚頂部から緩やかに開き，裾部に向かって漸次外反を増すが，軸・裾の区別は明瞭でない。脚端部を鈍く肥厚する。

主に脚端部の形状で細分できる。A1類は肥厚した脚端部を下方に引き出しつつ，端上部を小さく外方ないしは上方に突出させる。A2類は下方への引き出しがやや弱く，逆に端上部の突出が相対的に強い。A3類は肥厚，上下の突出が共にやや矮小化した形態。しかしA1～3類との差異は漸移的で，中間的な形態も多い。A4類は脚端部がわずかに


669
668
A1
850
558
A2
662
670
A3
1190
1-32
A4
853
1110
A5
A6
0
10cm
1270
1269

第444図　脚A

肥厚するだけで明確な突出はない。Ａ５類は肥厚・下方引き出しが弱く，端上部を強く水平方向に引き出す形態で多くは搬入品である。Ａ６類も，肥厚は弱いが，上下を強く摘み出す形態で，搬入品が多い。端部が矮小化するＡ３・４類は，後述する脚Ｈに近い点で，Ａ類のなかではより新しい様相と考える。これらを除いた，Ａ１・２・５・６類ではＡ１類が最も多い。

Ａ類全体を通して原則的に脚部内面は丁寧な横ケズリで仕上げ，外面は横ナデする。さらに縦方向のミガキを加える場合も認められる。また端部の肥厚と引き出しの結果，やや広い端面を有するＡ１～３・６類では脚端面に高坏Ａ類頂部等と同様の不明瞭な細かい凹線文を施す。端部の萎縮したＡ４類や形状の異なるＡ５類では明確ではない。

この他小円形透かし孔と沈線文がある。後者は主にＡ５類やＡ６類の搬入品に多く，脚中位に施された複数段の櫛描並行沈線と裾部の垂下沈線を組み合わせる。搬入品以外に沈線文を施す例も少数認められるが，その場合には施文がやや粗雑となる傾向が強い。また１例だが，Ａ５類搬入品で裾部に円形刺突文を巡らす資料がある。本類に穿たれる円形透かし孔は径３～５㎜ときわめて小形で，裾部に２孔１対，脚上部に単孔で各々３方が標準である。興味深いことに沈線文を施す場合には，原則的に円形透かしが省略されるか，構成を違える。たとえば，Ａ６類搬入品で櫛描並行沈線文・垂下沈線文を持つ（368）は，円形透かし孔は縦列４方の構成をとる。

本類は高坏Ａ・Ｂに対応する。特に脚端部の小形化しつつあるＡ３類は（662・663）に見るように高坏Ｂないしは高坏Ａ３に対応する可能性が高い。また１区ＳＤ０１資料から高坏Ａの新しい様相のひとつ４類に脚Ａ４類が対応することがわかる。

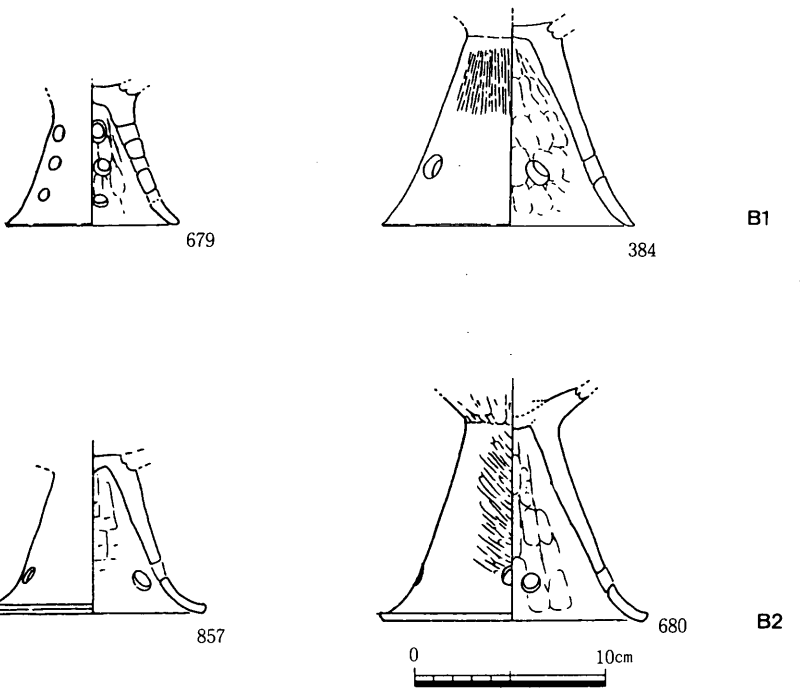
脚Ｂ

脚頂部からスカート状に緩やかに開く形態。脚裾端部で小さく外反するものをＢ１類，外反部がやや伸びたものをＢ２類とする。

Ｂ１・２類共に，脚端部は肥厚せずに尖り気味に丸く収める一般的なものである。

内面はナデ仕上げが多いが，それほど綿密なものではなく，しばしば顕著に絞り目を留める。横ケズリ例は少ないし，脚Ａ類ほど厳密ではない。外面は縦ハケ・縦ミガキ・ナデがある。脚部の円形透かしは，脚Ａ類に比べ，かなり大形のものが多い。穿孔数・位置にはいくつかのパターンがある。Ｂ１・２類では，Ａ類同様の裾部２孔１対３方あるいは単孔３～４方を中心に，縦列，４孔１対もある。

また１例のみ脚上部に並行沈線を施す資料があるが，きわめて例外的な存在である。高坏Ｄ類およびＥ類の一部に対応すると思われる。



第445図　脚Ｂ

脚Ｃ

細身の円柱状の軸部から強く折り返して裾部が開く形態を脚Ｃ類とする。軸部はわずかながら中膨らみ気味となる。大形の一群をＣ１類，小形で，より中膨らみの傾向の強いものをＣ２類と区別する。なお本類は軸部の形状だけみれば，支脚と区別しがたいが，脚Ｃ類の方が，薄作りで調整も丁寧である。注意しなければならないのは，軸部だけでは後述する装飾高坏とおそらく識別が困難な点である。

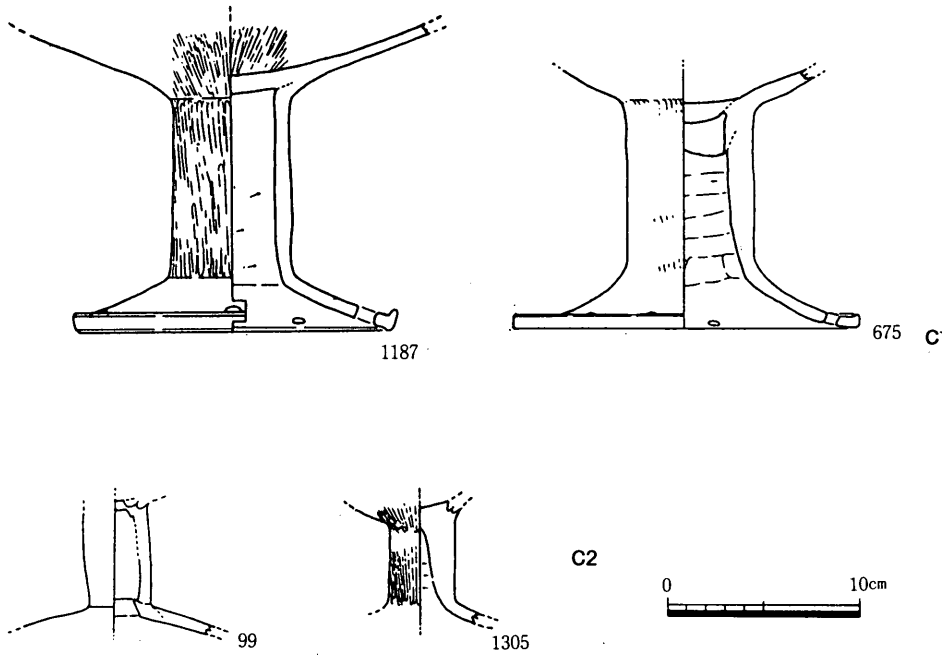
Ｃ１類では脚裾は水平に近く強く開き，端部は断面三角形状に小さく上方に突出するか，小さく反り返る。Ｃ２類で直接裾部の形状を知り得る資料はない。

内面調整に横ケズリを採用しない場合とする場合がある。厳密な比率は示し得ないが，前者がやや卓越する。またケズリ調整を採用する場合でも，脚Ａ類内面ほど入念なそれは認められないことが一般的である。軸外面はナデ・ハケ・ミガキが，裾部はナデ仕上げを認めるが，現時点ではその比率を示すことは困難である。

また，裾部に円形透かしを施すが，脚Ｂ類と同様にやや大形で，脚Ａ類とはかなり異なる。ただしこの場合も２孔１対が多い。なお，１例だが，円形透かしを加える軸部片があ

る。

高坏D類およびE類の一部に対応すると思われる。また脚C類と分類した資料の一部，特に中膨らみ傾向の強いC２類には装飾高坏のそれを含む恐れがある。



第446図　脚C

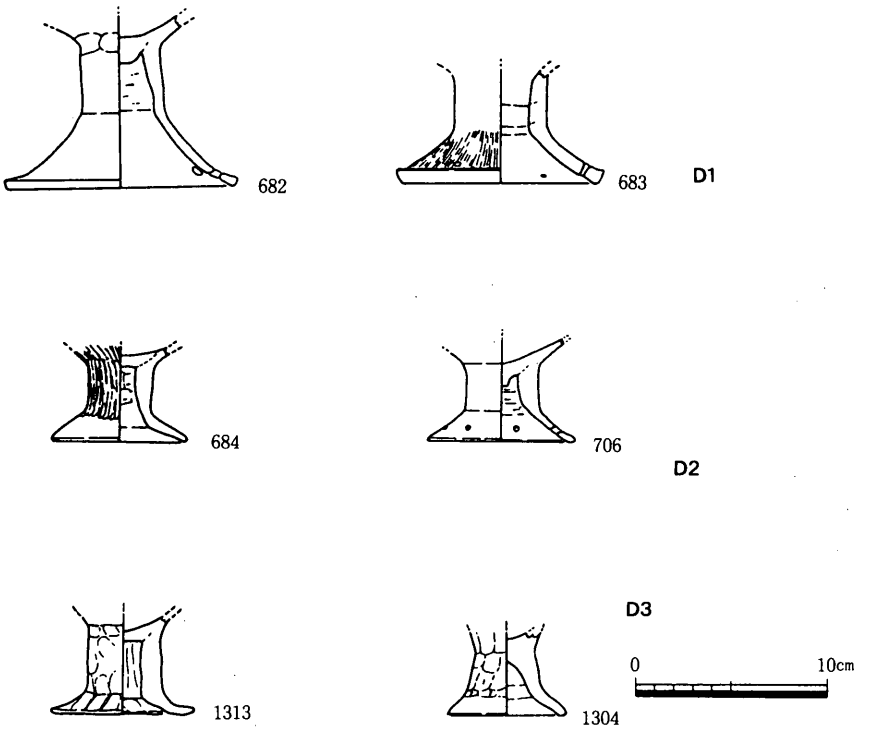
脚D

短い円柱状の軸部から折り返して裾部はラッパ状に開く。裾部の折り返しは全般的にC類よりも弱い。やや大形で裾部の発達したものをD１類，小形で裾部の矮小化したものをD２類，軸・裾部共に指押さえを顕著に残す，粗雑で小形の１群をD３類とする。

C類に比べて端部の突出はかなり微弱ではあるが，D１類では矮小化したそれが認められる。D２・３類では脚端部は単純に丸く納める形態。

調整を知り得る資料に乏しいが，D２類で，軸部外面に丁寧な縦ミガキを施した資料がある。また内面調整はD１・２類では横ケズリも確認できる。裾部の透かし孔は，D１・２類に見るもののC類と異なり，脚A類同様の小形円孔である。

直接的な根拠には乏しいが，脚Cとの共通性から高坏D・Eの一部に対応する可能性を想定する。



第447図　脚D

脚E

倒坏形の低脚である。形態上，古墳時代前期の製塩土器脚部に類似するが，それよりもかなり丁寧な作りである。脚端部は単純に丸く納める形態。透かし孔その他の文様は認められない。

本形態は高坏脚部ではなく，ある種の小形壷ないしは鉢に対応するものと考えるが，直接的な材料は持ち合わせていない。

脚F

低い円筒形を呈し下端は緩やかに開く。脚端部は単純に丸く納める。脚B・Cに見られるのと同様の大形円形透かしを多孔状に配している。本形態も高坏脚部ではなく，ある種の壷もしくは鉢に対応するものと考えるが，直接的な材料は持ち合わせていない。

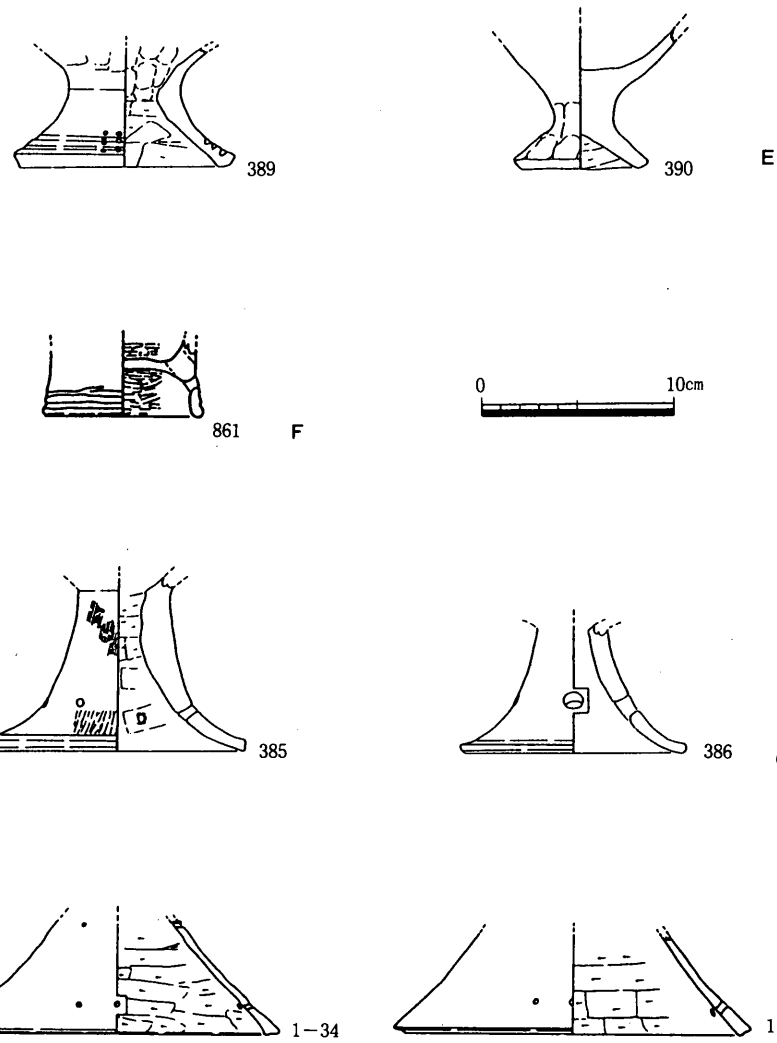
脚G

脚B同様に頂部から緩やかに開く形態だが，下端で緩く反り返り開いた裾部がかなり発

達する。後期前葉～中葉段階に多い（ただし，下川津Ｂ類はこの方向には発展しない。）高坏脚部形態に通ずる。脚端部は肥厚せずに単純に丸く納めるか四角く納める。

内面横ケズリはより例外的となる。透かし孔（円形）には大小あり，裾部単孔３～４方が一般的で，２孔１対はかなり少ない。また脚Ｂ類に見られた縦列などの多孔透かしは見られない。

脚Ｂの後出形態であることから，それと対応する高坏ＤあるいはＥ類の後出形態であるＦ類に基本的には対応するものと考える。



第448図　脚Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ

脚H

脚Aと同様の基本形状だが，脚裾部はかすかに肥厚するのみで端部の突出は全くない。本形態は確実に後期中葉以降の後出形態で，下川津B類高坏脚部である。

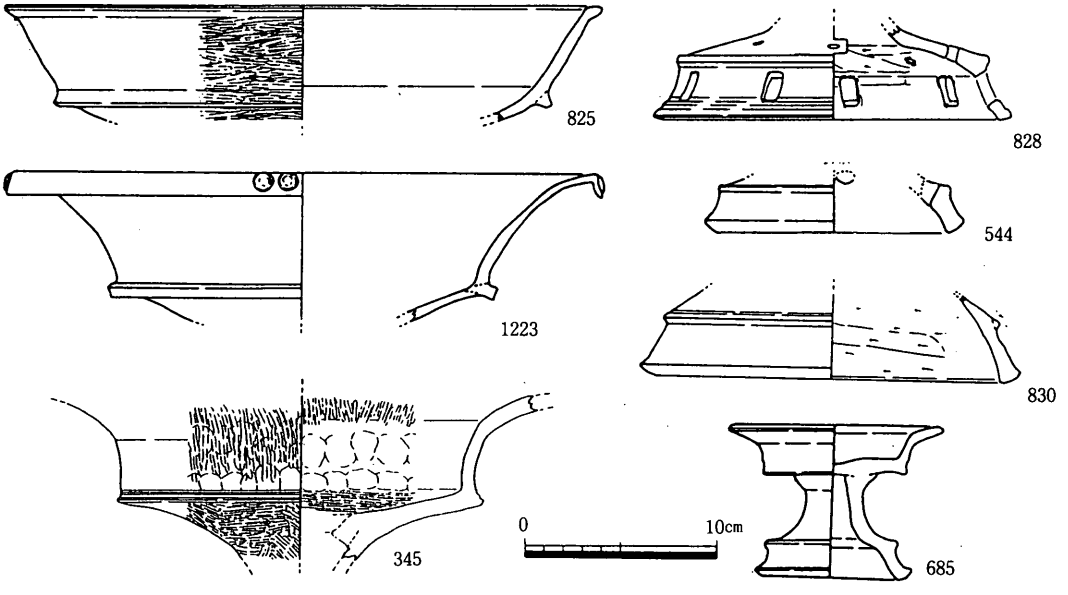
端部の肥厚は微弱で，上下端の強調も顕著ではない。わずかにその痕跡として脚端に狭い平坦面を作り出す。

内面横ケズリの徹底，裾部の小円孔の点でも脚A類の特色を引き継ぐ。しかも透かし孔2孔1対の原則すら保持する例が多く，高坏Gに対応する。

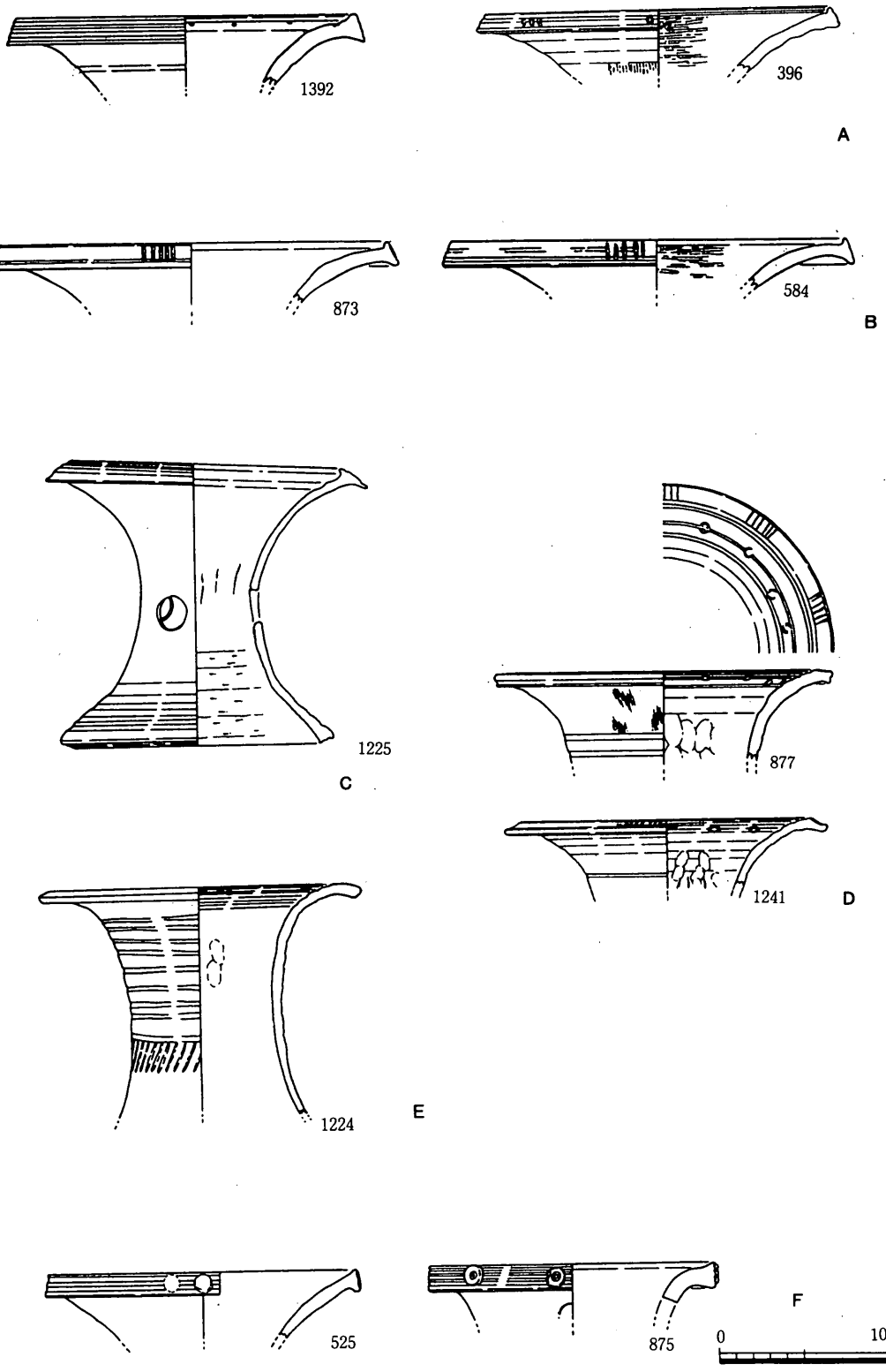
装飾高坏

脚部は柱状の軸部と裾部からなり，坏部・裾部共に中位で屈曲して段をなす。両段部は突帯を貼付するか，強く摘み出すかして，その部分を強調する。坏上部と裾下半部がやや伸びるか，強く外反する形態は後出的なものであろう。

後期前葉以降に盛興する形態のような煩雑な加飾は認めない。口縁部の発達した形態から，最も後出的と思われる（1223）でも貼り付け垂下口縁部端面に円形浮文を見るだけである。その代わり脚裾部の透かし孔は，形態・穿孔位置共に多様な在り方が見られる。通有の円形透かし孔以外に，方形透かし，端部の半円形刳り込み等がある。



第449図　装飾高坏



第450図　小形器台

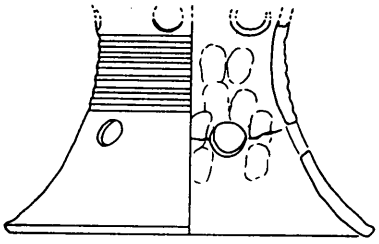
小形器台

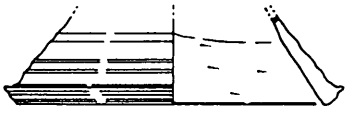
口縁部・脚部共に一定のバリエイションを持つ。本器種についても全体形状を確認できる資料が少ないので，口縁部を主とした上半部の形態と脚部形態とを別個に検討する。

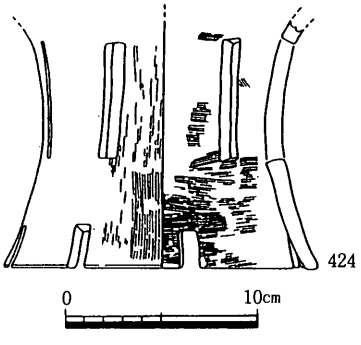
上半部は多かれ少なかれ外反して開く。口縁端部は肥厚あるいは摘み出しを見るが，大形器台におけるほど強調されることはない。主に口縁端部形状によって細分できる。A類は強く外反して開き，端部は鈍く肥厚するが，上下端の摘み出しはそれほど顕著ではない。B類は鈍く肥厚しつつ上下に強く摘み出す。C類はより口縁部が大きく開き，摘み出した端部が強く内傾することを特徴とする。D類はより口縁部の開きが強まり，C類にも顕著な口縁端部の下方拡張がより強調された形態。対照的に本来の口縁端上部は鈍い突出に変化する。E類はこの傾向がさらに強まり，かつての口縁端上部は痕跡もない。D・E類口縁部は，直口壷C類と酷似しており小片では識別が難しい。ただし，直口壷の場合小形器台ほどは外反が強くない。F類は口縁部でゆるく屈曲して短く水平に開く形態で，器台上半部の開きはあまり強くない。この類型では口縁端面がほぼ直立する。

A・B類では口縁端面に細かい凹線文を施したのちに5～7条1対の短刻線もしくは4～6条1対の円形刺突文を加える。内面上半部は分割横ミガキが多く見られ，C～E類のような凹線文はこの部分にはほとんど見ない。また口縁部内面の円形刺突文も多くはない。中位に円形ないしは長方形のやや大形の透かし孔を穿つことが一般的であるが，凹線・沈線文はあまり採用されない。

C類では口縁部の外反がより強まることと関連して上半部内面への凹線施文が目立つ点が特徴である。D・E類ではこ







第451図　小形器台脚

れに加えて端面の短刻線文，口縁部内面の円形刺突文の組合せがかなり一般化する。F類は端面に円形浮文を加える。形態上の点と相俟って本類型の個性を際立たせている。

脚部が比較的強く開き，結果として全体形状が鼓状を呈するものをA類，脚部の開きが弱く器台下半部が円筒形に近い形態をB類とする。A類にしても大形器台に見られるように体中位が明瞭に柱状を呈することはない。

脚端部はA類ではほとんど肥厚せずに四角く納める形態（A1類）と，鈍く肥厚しつつ端上部を小さく摘み出す形態（A2類）がある。脚端部を肥厚する傾向があるとはいえ，高坏脚A類に顕著な下方拡張は小形器台脚部の場合認められない。B類は端部の肥厚・摘み出しがほとんど発達せずに，単純な形態で終わる。

脚A類では大多数の場合，裾部外面に凹線文を連続させ，内面は丁寧に横ケズリする。B類は同様の内面横ケズリは見るものの，裾部の凹線文は顕著ではない。またB類の特異な1例を除き，裾部に透かし孔は設けない。

大形器台

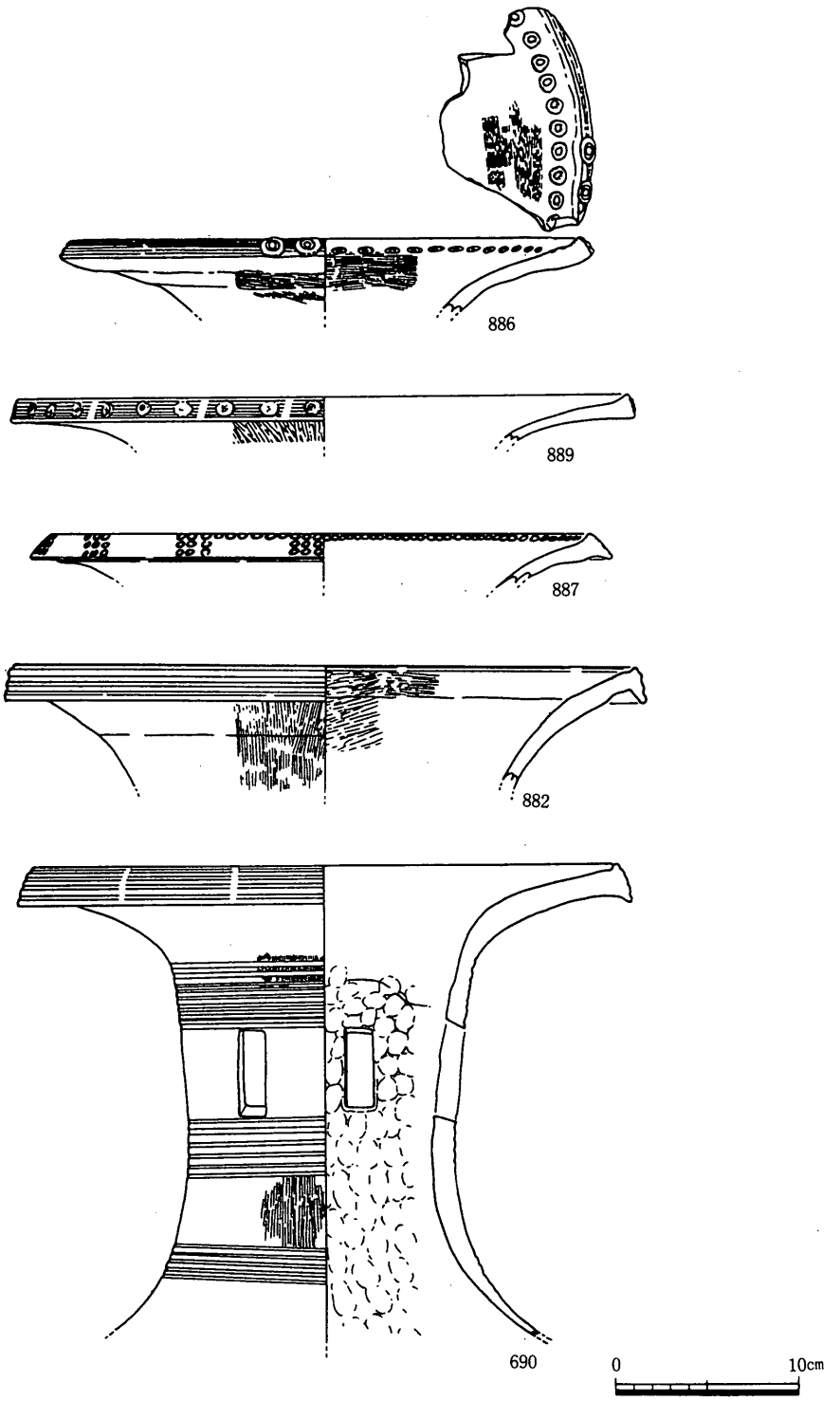
小形器台と同様かそれ以上に口縁・脚部形態や施文その他で大きなバリエイションを持つ器種である。基本形態は口縁部・脚部共に発達した鼓形であるが，小形器台のそれに比べて，中位の円柱部分がより明確になっている。また一般に脚部の開きも強く，小形器台に見るような円筒形の下半部形態は見ない。

口縁端部を大きく拡張した形態が一般的である。拡張部の形態には差異が大きい。上下方向に大きく拡張するが，下方のそれがより強調されることが多い。広口壷E類に多い垂下口縁－特に板状垂下口縁－を採用する例もある。また少数例であるが特に強調された口縁端上部の拡張部が強く内傾して，一種の受口状を呈するものもある。口縁端部形態以上に差異が大きい。鈍い肥厚で終えるものから主に上方に強く拡張する形態まで認められる。

小形器台と最も異なる点は内面，特に下半部の横ケズリ調整が大形器台の場合は一般的とはならない点である。

文様の点では，やはり透かし孔と並行凹線（沈線）が中心となる。前者には同様に長方形・円形共に認められるが，稀に長楕円形透かし孔も見る。後者では中位の施文に沈線文を採用する例が多くなっている。

拡張した口縁・脚端面にはやや不明瞭な凹線文を施し，前者では更に5～6個1対の円形刺突文を加えることが多い。円形浮文もあるがあまり多くない。



第452図　大形器台

また中軸部に，より複雑な構成の文様を見る場合も少数例認められる。箆描の網目文，円形透かし孔の周囲に配された組帯文がある。

大形鉢

後期中葉以降に多量化する小形鉢と区別する意味で，Ａ～Ｊ類を大形鉢として一括したが，法量にはかなり格差があることは認めなければならない。いま少し資料の充実を待ってＨ類などを中心に中形鉢として区分する必要も感じる。

小片が多く確定はできないが大形鉢各種とも，片口を付した形態が多い。おそらく基本的な特徴と見てよいであろう。また内面に赤色顔料の付着した資料が極めて多い点も注意しなければならない。器表の剝落などによって必ずしも全資料についてそれを確認しているわけではないが，少なくとも本遺跡においてはこの大形鉢という器種は基本的機能として，片口の付設とも相俟って液状の赤色顔料使用に関わる用具としての性格を持つものと考える。

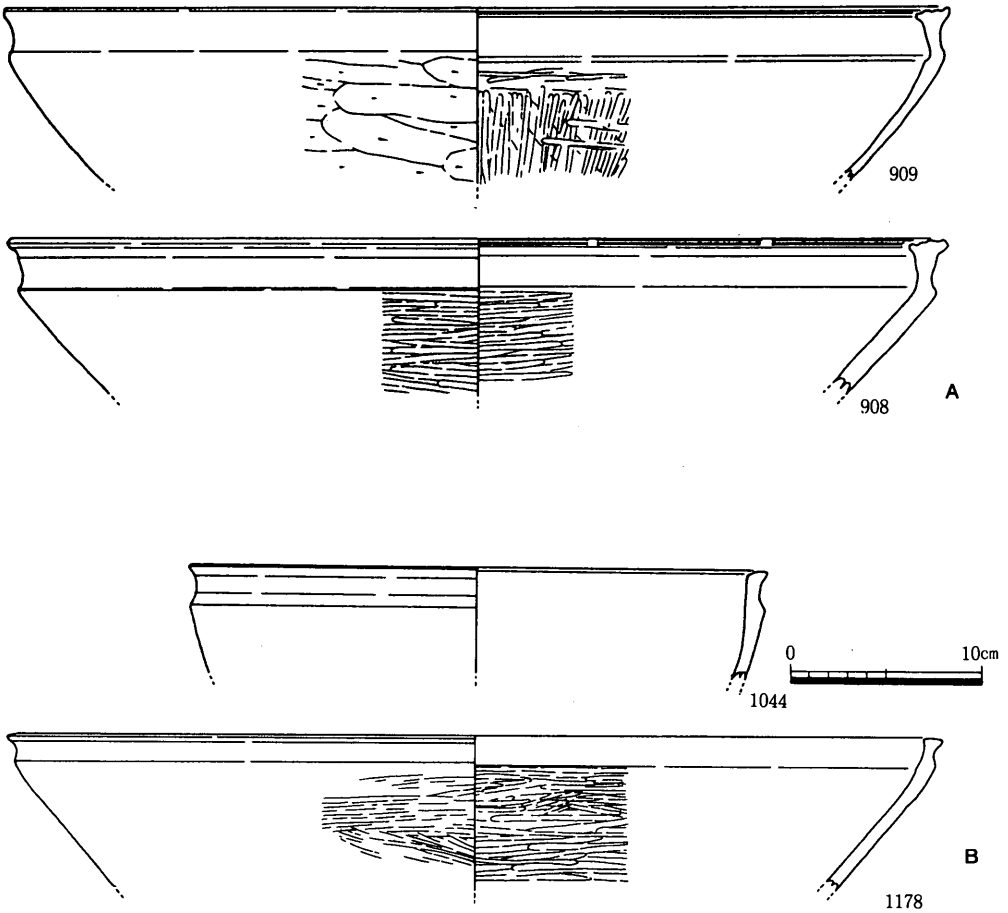
大形鉢Ａ

基本形状は高坏Ａを深くした形態で，口縁部の拡張と口縁部下の屈曲が顕著である。口縁部の拡張は高坏Ａ同様に変化に富むが現状では一括して扱っておく。本類は概ね口径50㎝以上と，大形鉢諸形態中，特に大形の類型のひとつである。

高坏Ａ同様に頂部平坦面に凹線文を施し，屈曲部以上は横ナデ仕上げとなる。ただし屈曲部以下の調整は高坏Ａ類ほど規格的ではなく変化が大きい。

大形鉢Ｂ

大形鉢Ａ類の口縁部拡張・屈曲が退化した形態で，口縁端部は外方への鈍い張り出しに転化し，屈曲は痕跡的な外面の突出と口縁部下の強い凹面に置き変わり，その部分もかなり短縮している。



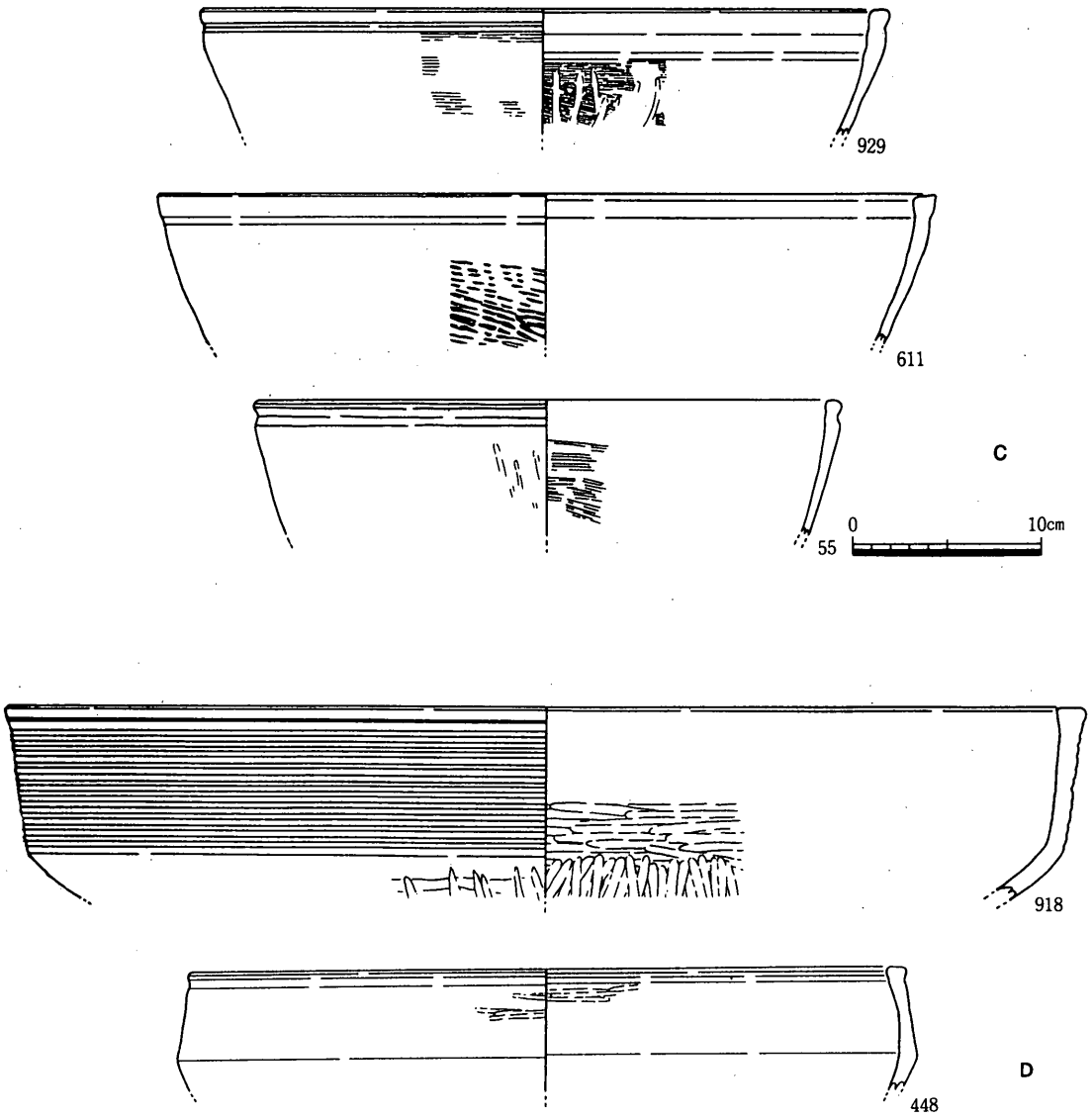
第453図　大形鉢A・B

大形鉢C

大形鉢B類の傾向がより進展した形態。口縁端部はせいぜい鈍い肥厚を認める程度で，口縁部から本来の屈曲部までの形状は単なる1条の凹線文に置き変わっている。法量にはかなりばらつきがありそうである。

大形鉢D

基本形状は鈍く屈曲して口縁部は直立ないしはやや内傾する形態。端部は鈍く肥厚するか小さく摘み出す。直立部外面は凹線か並行沈線で充填されることが一般的だが，稀に粗雑な波状文も見る。



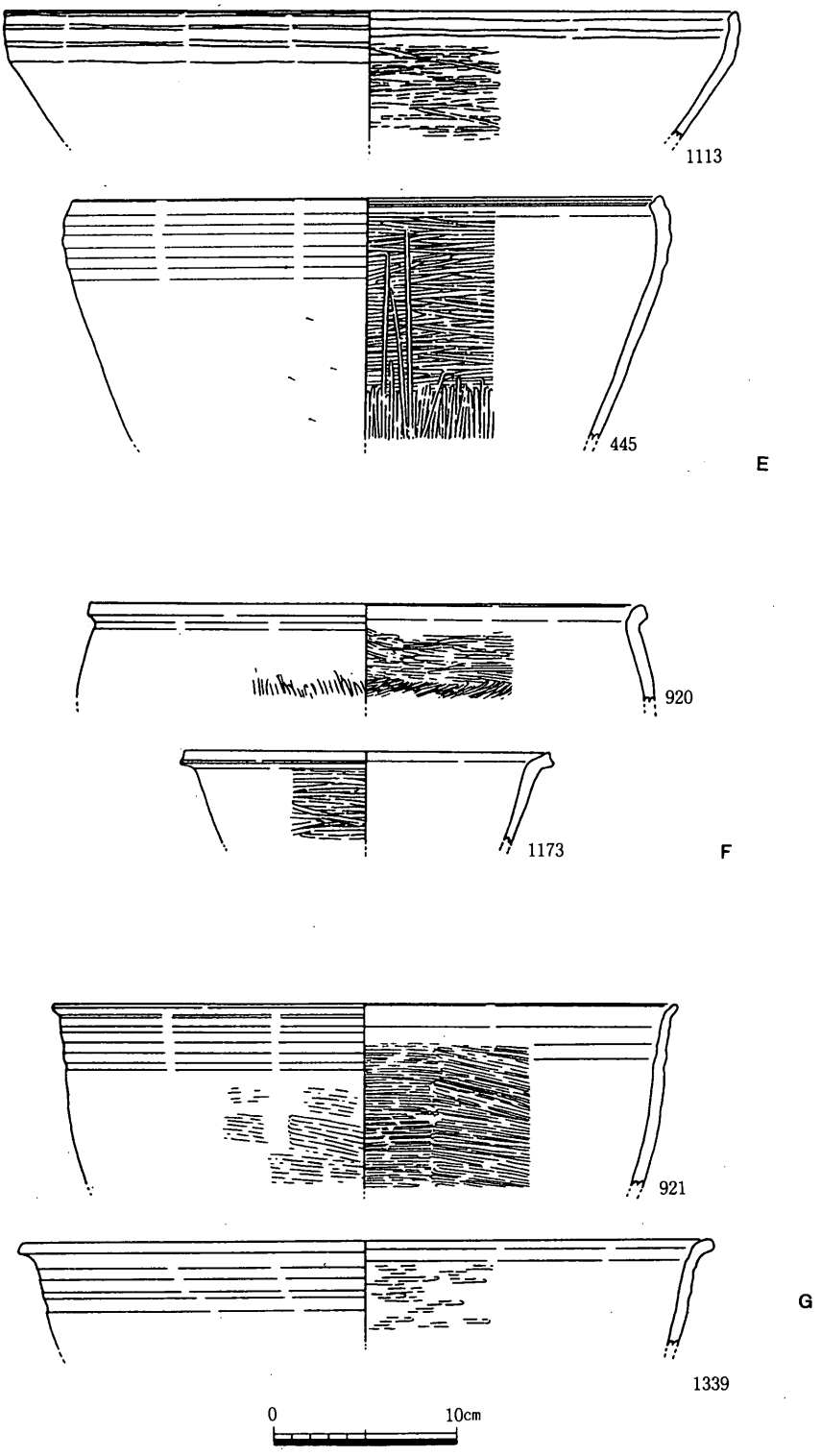
第454図　大形鉢C・D

大形鉢E

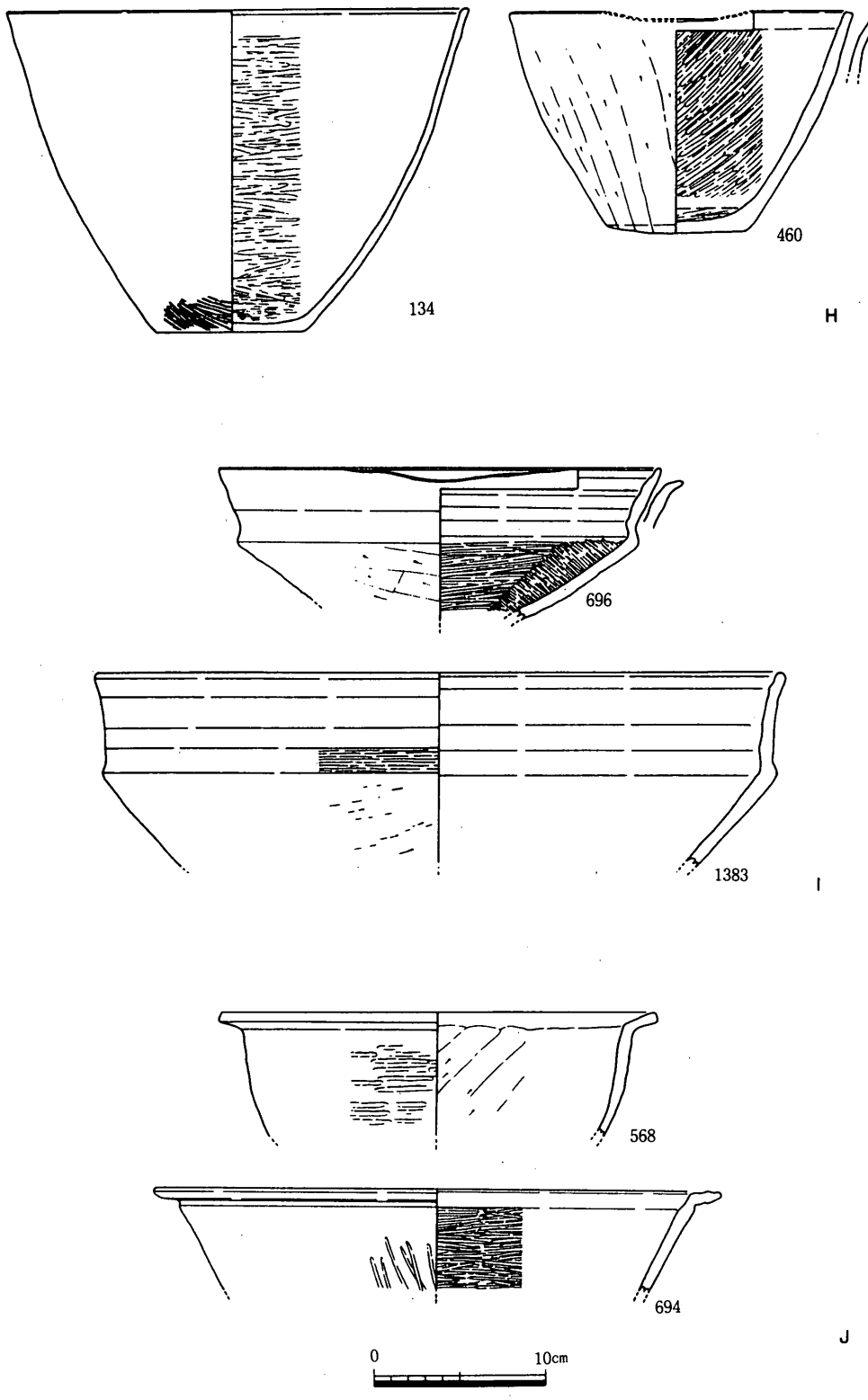
口縁部が緩やかに内湾する形態。端部は小さく摘み出すか，丸く納め拡張はほとんど見られない。口縁部外面に凹線文を見るが，全般的にきわめて不明瞭である。口径50cmをこえる大形品は見ない。

大形鉢F

四角く納めた口縁部を小さく折り返す形態。凹線文・沈線文は見ない。口径50cmをこえる大形品は少ない。



第455図　大形鉢E・F・G



第456図　大形鉢H・I・J

大形鉢G

口縁部を小さく外反させて端部は丸く納める。口縁部直下に鈍い凹線文が連続する。本類型も口径30～40cm程度と大形鉢としては小型の部類に入る。

大形鉢H

単純なバケツ型を呈し，端部は斜めに切り取るように四角く納める。底部はかなり薄作りである。内面は緻密なミガキ調整で仕上げる。分割横ミガキが多用される。外面は対照的にケズリあるいは叩き目をそのまま残すことが多い。口径20cm大の大形鉢としては最も小形の一群である。特に調整面で把手付広片口皿に共通する要素が多い点は注意しておかなければならない。

大形鉢I

中位で強く屈曲して，上半部が外反する形態。上半部内面は凹線文が連続し端部は尖り気味に丸く納める。下半部外面横ケズリ，内面分割横ミガキ。下川津B類大形鉢に相当し，後期中葉以降に下る形態である。

大形鉢J

口縁端部を短く屈曲させる形態。上述のF・G類に比べ，全体としてやや粗雑な作りとなることからそれらより後出する可能性を考えている。

把手付鉢

やや深めの単純な直口形態の鉢に環状把手を付した形態。大形品をA類，小形品をB類とする。大形品では双手例も見られる。小形のB類ではやや突出気味ないしは縁辺部が張り出した形態が多い。

小形鉢（後出形態）

浅めの椀形を呈する。後期中葉以降に多く認められる形態で本遺跡資料もそうした後続時期の所産と考える。口縁部は単純に丸く納めるか，四角く納める。加飾は認められない。

把手付広片口皿

赤色顔料使用に関わる特異な器種である。これについては，赤色顔料付着資料を検討する第8節で詳論するのでここでは略する。

蓋

類例は多くなく，何れも小形である。無頸壷および，広口壷Bのごく一部で，口縁部に紐通し孔を穿つ例があるので，それらと組み合わせるものであろう。

蓋A

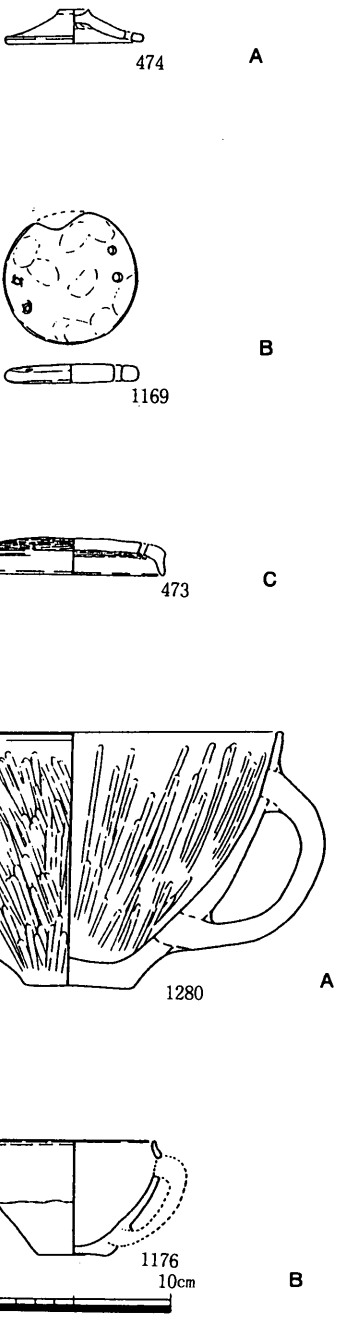
笠形を呈し，頂部が緩く窪む例が多い。端部は折り曲げずに単純に納める。

蓋B

単純な円盤状を呈し，縁辺の相対する二方に紐通し孔を持つことから蓋とわかる。

蓋C

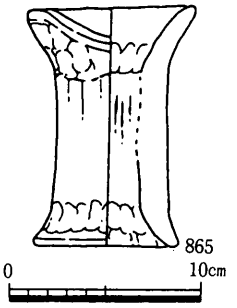
円盤形の縁辺部を小さく折り曲げて箱形を呈する。垂下する縁辺部外面に細かい凹線を施し，全体はミガキ調整で仕上げる。他種蓋よりも仕上げが丁寧な形態といえる。



第457図　蓋・把手付鉢

支脚

脚C軸部に似た円柱形を基本とするが，それよりもかなり分厚い。上下端は折り返して短く開く。口縁部の一方に一見片口状の半円形を呈する刳り込み部がある。



第458図　支脚

(1)鎌木義昌・六車恵一「香川県高松市高松町大空遺跡の土器」『弥生式土器集成　資料編』日本考古学協会

(2)伊藤晃・柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集　岡山県教育委員会1974

柳瀬昭彦・江見正巳・中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会1977

(3)高橋護「弥生土器－山陽」『月刊考古学ジャーナル』173・175・179・181　ニューサイエンス社1980

高橋護「上東式土器の細分編年基準」『研究報告』7　岡山県立博物館1986

(4)出土点数が少ないため製塩土器等は除外している。また例数の少ない他地方系統土器の模倣形態や搬入品の一部も除外した。

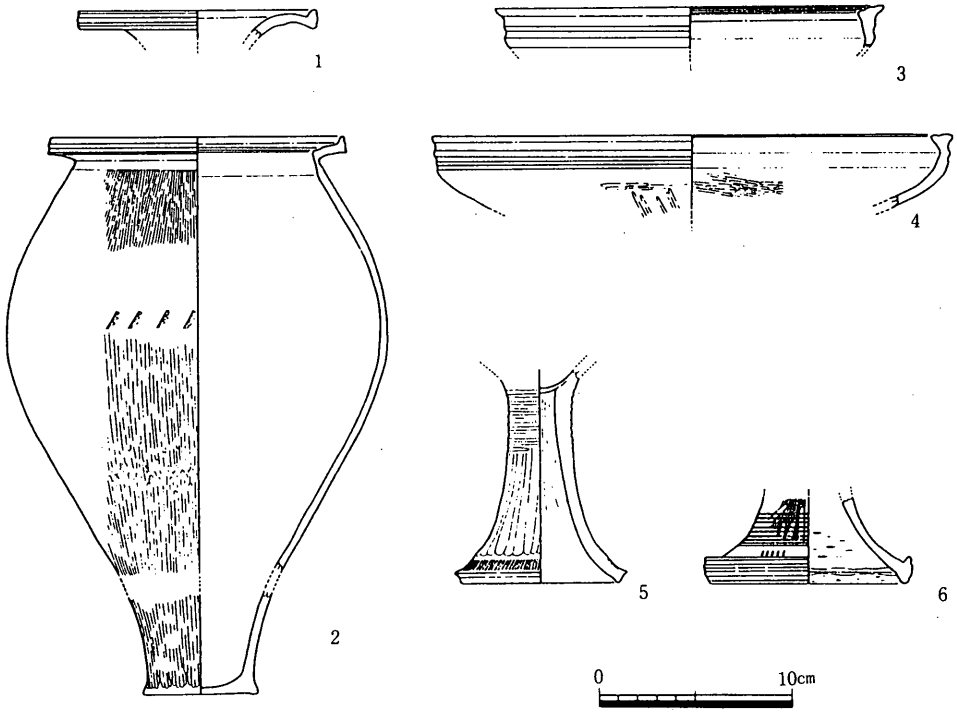
第３節　上天神遺跡資料に先行する資料群

１．

上天神遺跡資料に先行する中期後葉段階，凹線文盛行期の様相を示す資料には善通寺市彼ノ宗遺跡[(1)]ＳＴ19，善通寺市矢ノ塚遺跡[(2)]ＳＤ85031，同ＳＸ85002および大内町仲善寺遺跡[(3)]，高松市久米池南遺跡[(4)]等がある。後二者は後述するように中期末葉に位置づけることが可能であり，前者はそれより古い様相を示す。これらと上天神遺跡資料との関係をここで見ておくことにする。

（１）彼ノ宗遺跡ＳＴ19

（１）は細頸で口縁部の発達した壷Ａ，甕（２）は強く折り返した口縁部を肥厚せずに端部のみをシャープに摘む。上天神遺跡甕Ａ類の祖形となる形態である。高坏あるいは大形鉢（３・４）は口縁部を内外に拡張するが，外面に複条の凹線文を施して上半部は強く内湾する。脚（５・６）は緩やかに開き端部を鈍く肥厚する形態で，上天神遺跡脚Ａ類の

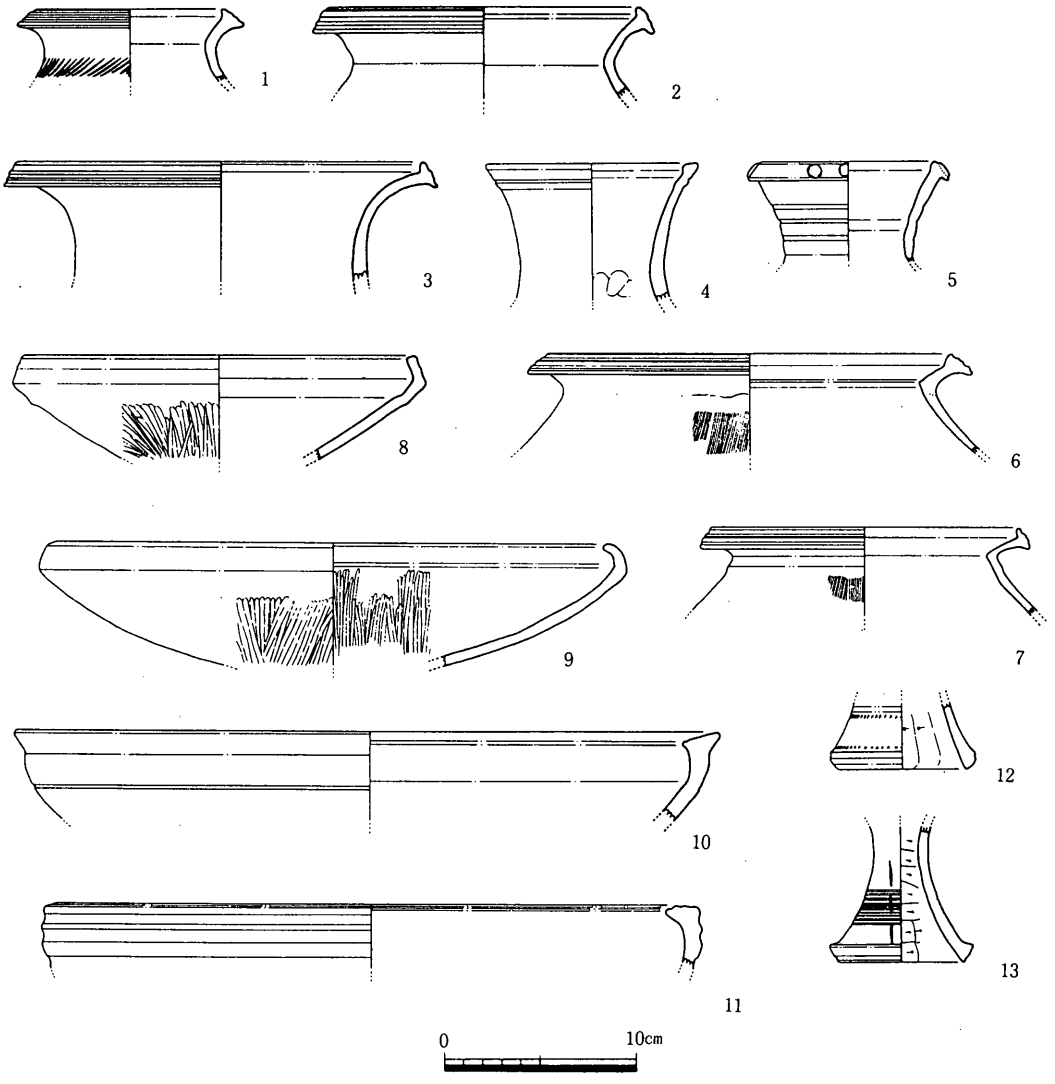


第459図　彼ノ宗遺跡ＳＴ19

祖形であるが，脚端部は肥厚したままで終わるか，上方に摘み出して並行沈線などの加飾が顕著である。

（2）矢ノ塚遺跡ＳＤ85031

壷ではＢ類（3），Ｃ類（1・2），Ｆ類（4・5）がある。甕（6・7）は上天神遺跡甕Ａ類の祖形となる形態である。高坏Ａには上天神遺跡高坏Ｃに近い口縁部を強く内湾する形態（9）と，強く屈曲して内傾する（8）とがある。外面調整は放射状ミガキである。

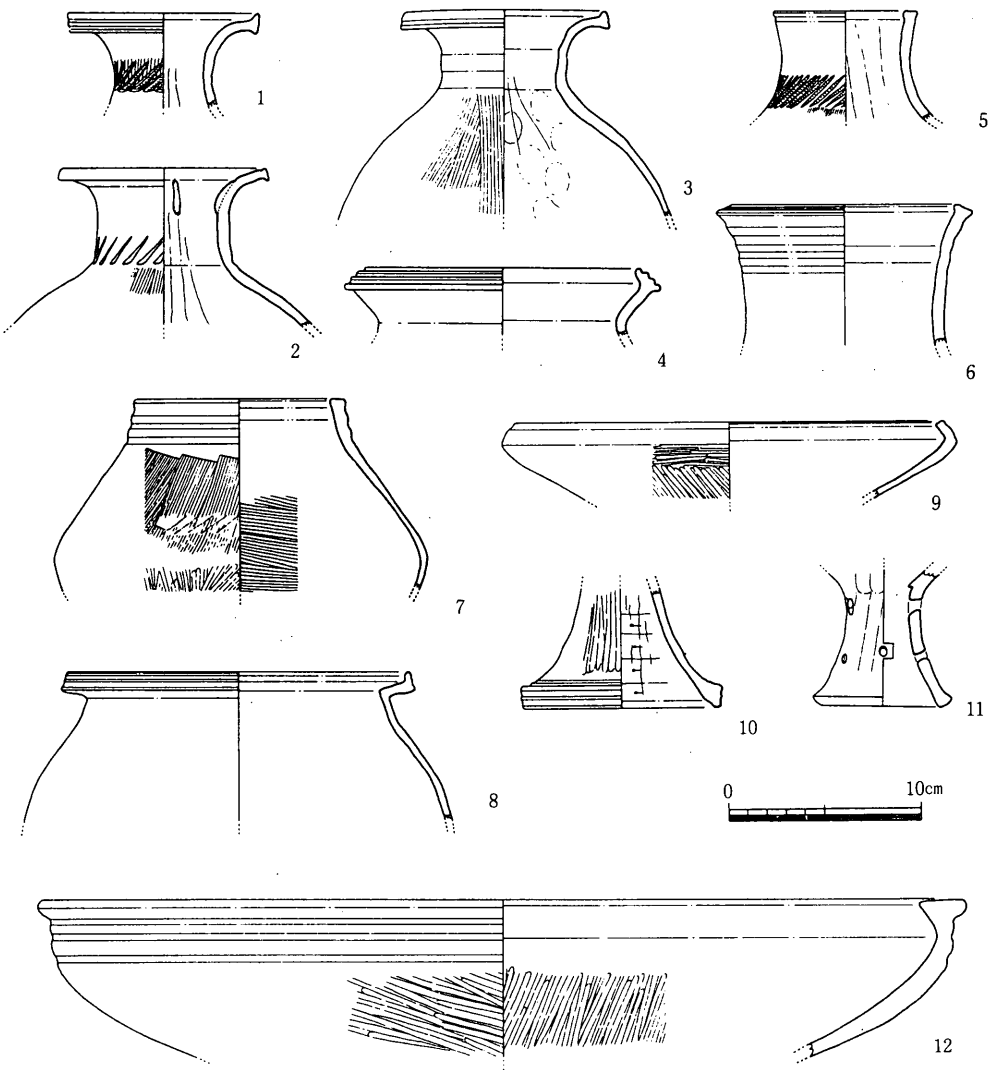


第460図　矢ノ塚遺跡ＳＤ85031

大形鉢（10・11）は彼の宗遺跡資料と同様に内湾して口縁部を拡張する形態。
脚（12・13）も同様に上天神遺跡脚A類の祖形となる形態で，並行沈線，刺突文で飾る。

（3）矢ノ塚遺跡ＳＸ85002

壷A（1～3）は頸部斜線文が目立つ。（4）は壷B，（5・6）は壷Fで，各々上天神遺跡短頸壷B類，直口壷B類に近い。壷H（7）は上天神遺跡無頸壷に比べれば口縁部凹



第461図　矢ノ塚遺跡ＳＸ85002

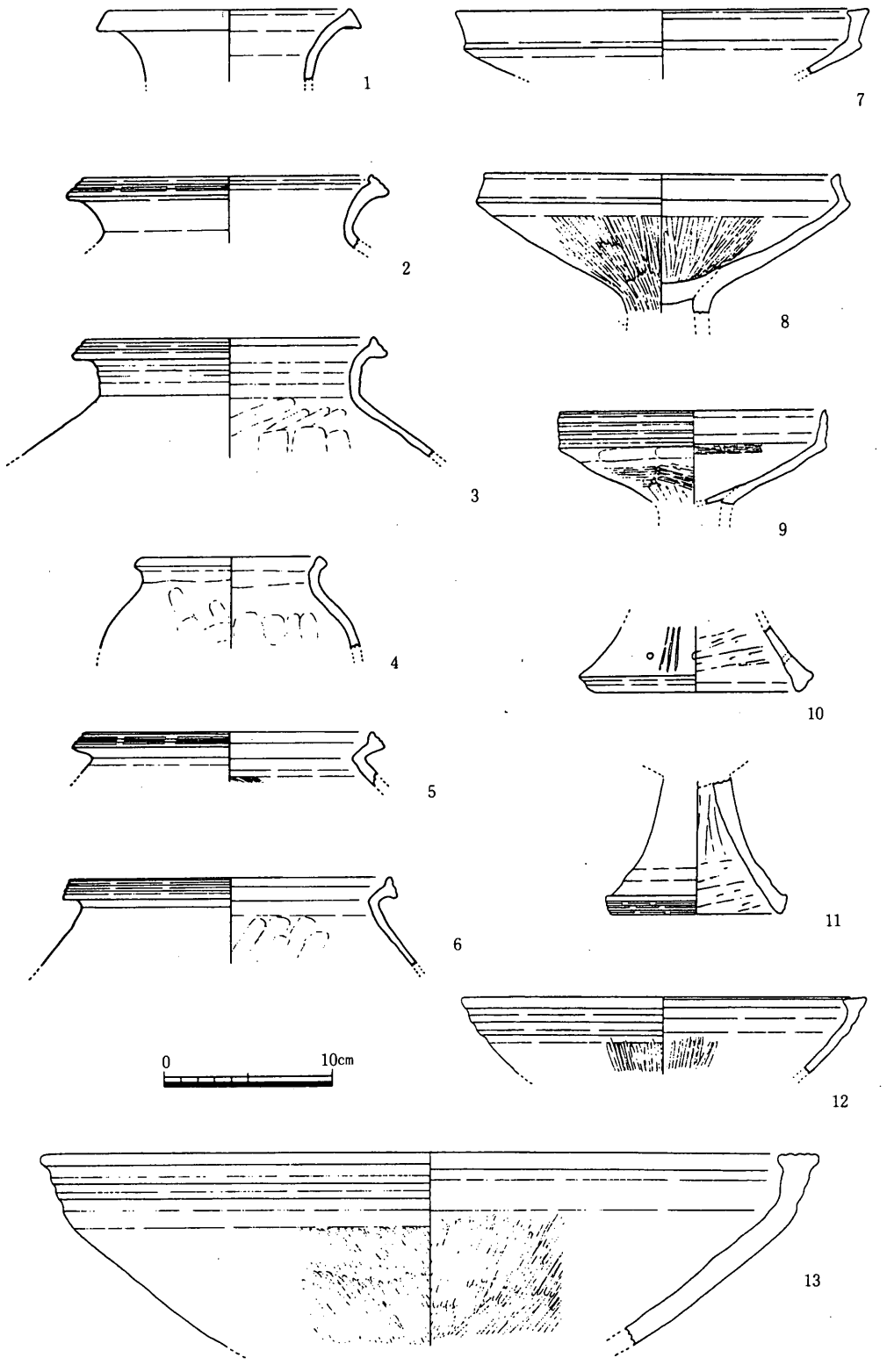
線は施文部分が広く，また明瞭である。甕（8）は口縁部を強く折り返して端部はシャープに摘み出す。高坏（9）は上半部を強く内湾する形態だが，湾曲部に鈍い稜が生じつつある。脚（10・11）は緩やかに開いて端部を鈍く肥厚する上天神脚A類に相当する形態。

以上示した中期後葉の前半段階では，壷類はやや細頸で口縁部がよく発達したA類と，短頸形態のB・C類が中心となる。上天神遺跡資料では直口壷諸形態が，広口壷諸形態にほぼ倍し，短頸壷は少数であるのに対して，矢ノ塚遺跡資料では広口壷・短頸壷がほぼ同程度認められ，直口壷はその半数以下にすぎない。しかも直口壷では上天神遺跡資料のB類の祖形的な形態しか認められない。甕は全て上天神甕A類の祖形形態だが，口縁端部にむかってほとんど肥厚せずにシャープに摘み出す。また高坏では上天神高坏Cに相当する形態，その屈曲が強くなった形態及び大形鉢と同様の上半部を緩やかに内湾して口縁部を拡張する形態がある。脚は上天神脚A類の祖形となる形態ばかりだが，並行沈線・刺突文などによる加飾が顕著である。大形鉢は口縁部で緩やかに内湾して端部を内外に摘み出す形態。直下外面の凹線文は顕著で，明瞭な屈曲部はない。

このほか上記した資料中にはないが，上天神直口壷F類の祖形となる明瞭な受口状口縁形態，ブランデーグラス状の深めの高坏など，後期段階にほとんど継続しない形態が認められる。またこの段階に認められる大形甕（矢ノ塚遺跡壷D）では肩上端に突帯を貼付することが多い。

（4）仲善寺遺跡ＳＨ9202

（3）は上天神遺跡広口壷Aに通じる形態で，頸部に凹線文を施す。（2）は短頸壷Aに近く，口縁端部もあまり発達しない。甕類（5・6）は上天神遺跡甕A類に通じる形態で，口縁端部も鈍く肥厚しつつ拡張する。（4）は折り返しが緩く，端部拡張もほとんどない。高坏（7・8・9）はいずれも前代の主要形態から派生するものであろう。（7）は中位で強く屈曲して上半部は短く直立する。口縁端部は小さく内外に摘み出す。この形態を介すると，紫雲出山遺跡高坏Cと上天神遺跡高坏Aの関係が理解しやすい。（8）は口縁端部を肥厚・拡張しない。（9）は上半部の凹線文を残すものの口縁端部が尖り，上天神遺跡高坏Bに近づきつつある。脚はいずれも上天神脚Aに通じる形態で，（10）は次期に盛行する端部下方拡張の片鱗が見える。また並行沈線・刺突文等の加飾は見られない。大形鉢（13）は先行する後葉前半段階の形態を引き継ぐが，口縁部の緩やかな内湾は鈍い屈曲に変化している。

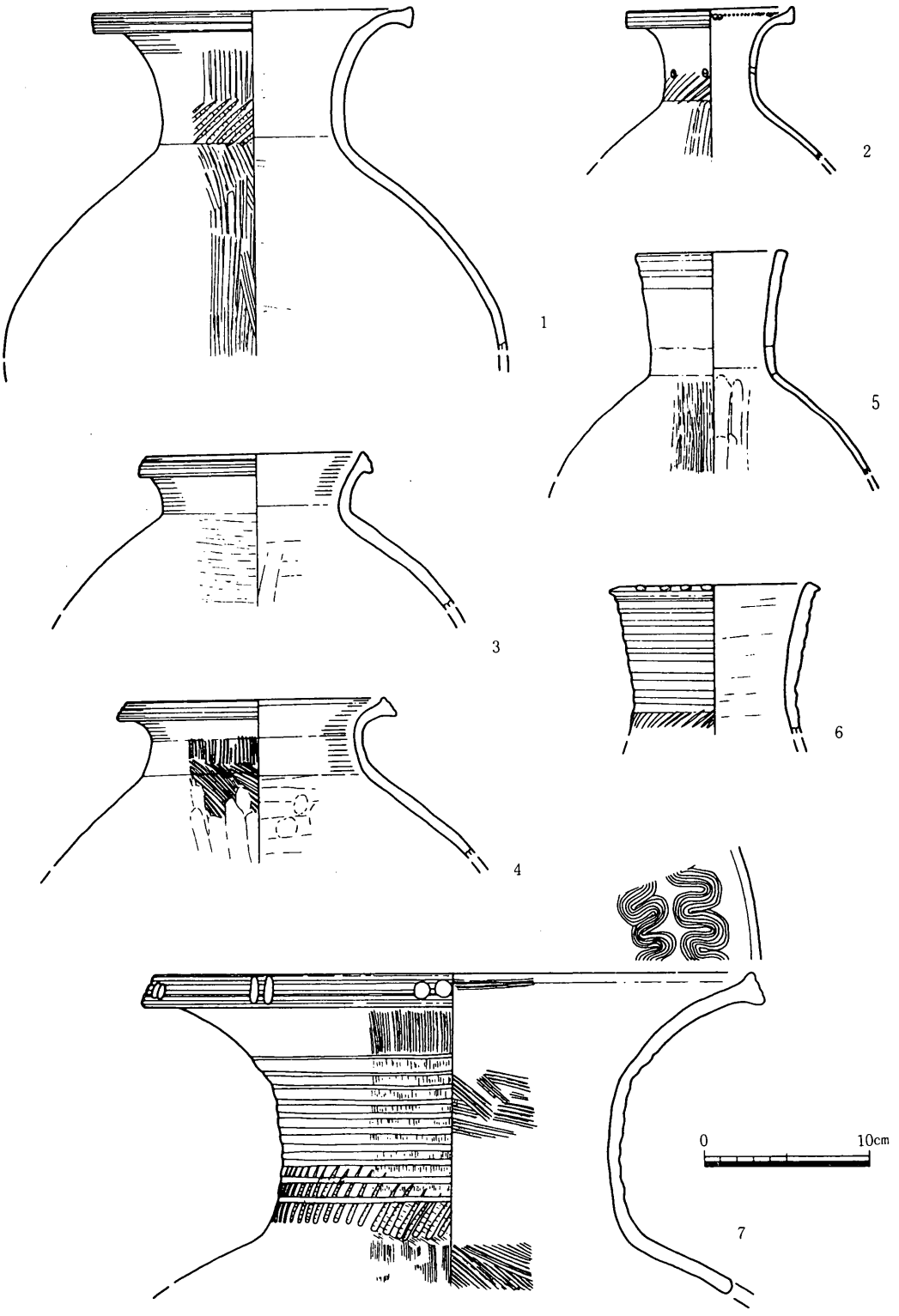


第462図　仲善寺遺跡ＳＨ9202

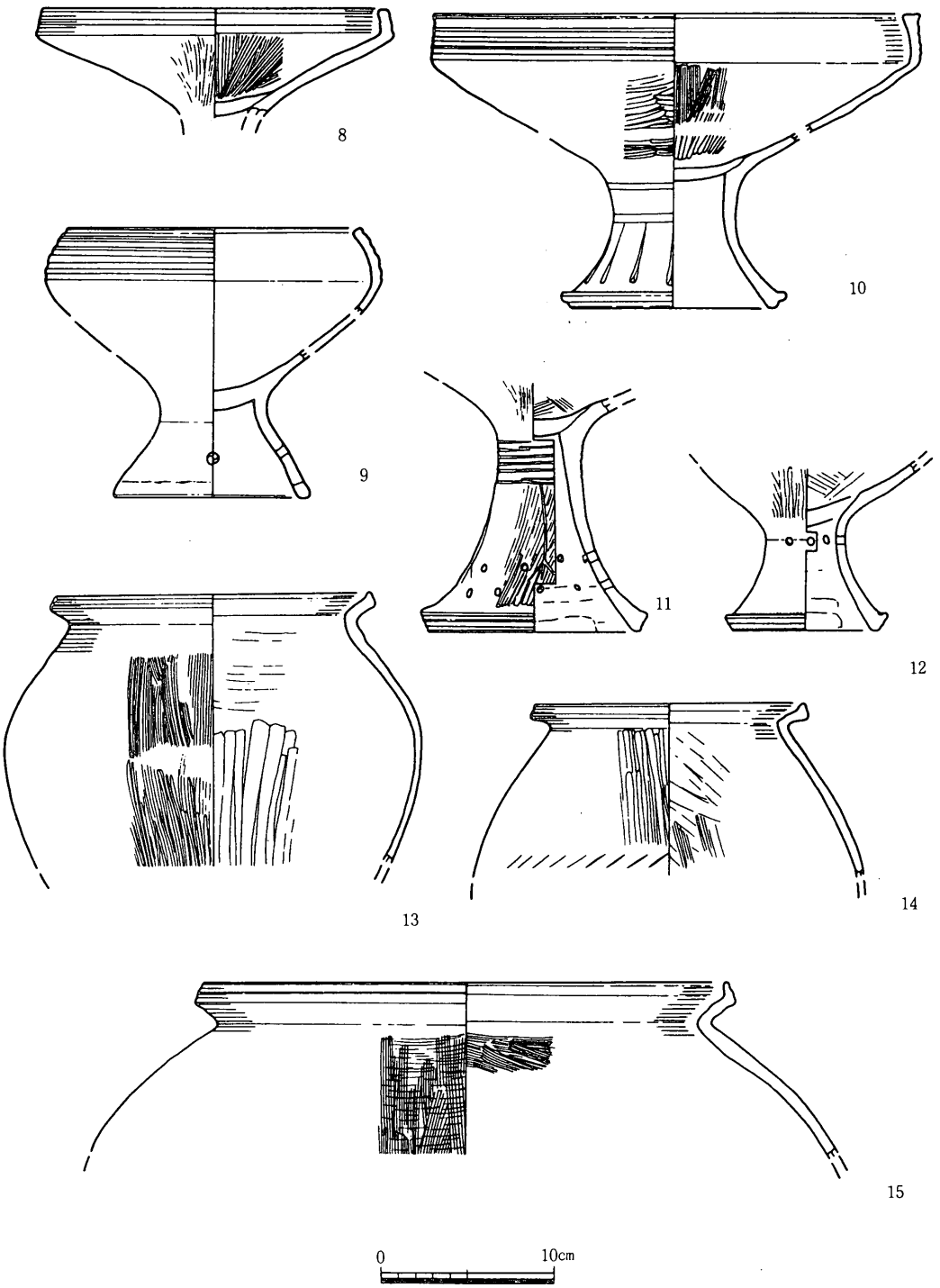
（5）久米池南遺跡2号テラス

（1・2）は細身の頸部を有し，矢ノ塚遺跡壷Aに相当する。やはり頸部には斜線文を配する。（4）は上天神遺跡広口壷Aに近いが頸部凹線文を欠く。（7）は上天神遺跡広口壷Cに近いが，より口縁部の発達が強い。頸部に凹線文を施す。（3）（5）はそれぞれ上天神遺跡短頸壷A，直口壷Dと異ならない。（6）は上天神遺跡直口壷B2に続く形態。甕（13・14）はいずれも口縁端部を鈍く肥厚しつつ摘み出すが，（13）は口縁部の折り返しがやや緩やかである。大形甕（15）は肩上端部に突帯を持たない。高坏（8）は中位で強く屈曲して上半部は短く直立する。端部は単純に四角く納め，上半部内外面に鈍い凹線文を施す。大形台付鉢（9）（10）の形態はそれぞれ上天神遺跡大形鉢D・Eに相当する。脚（11・12）は緩やかに開き端部を鈍く肥厚する形態。端上部を小さく摘み出し，裾部には小円形透かしが多い。かなり退化しているが並行沈線文などの加飾が残る。

後葉後半段階では，前半に壷類で大きな比重を占めた形態（矢ノ塚壷A）が減少して上天神遺跡広口壷Aに近い形態が出現している。しかし依然として直口壷は多くない。甕は口縁端部形状が前半期ほどシャープではなくなる。また高坏では前半期の内湾口縁形態から上天神遺跡高坏A・B類の祖形的形態が派生している。脚は未だ加飾が残る場合もあるがかなり退化しつつある。大形鉢についても後期初頭の形態に直結するものがいくつか出現している。



第463図　久米池南遺跡２号テラス（１）



第464図　久米池南遺跡２号テラス（２）

2.

このように後期初頭段階の形態に向けて，いくつかの器種については漸移的に変化しつつあることが確認できる。しかし上天神遺跡に見られた後期初頭段階の諸形態の全てに亙って本地方の先行する段階に祖形が確認できるわけではない。

上天神遺跡の器種構成中，本地方の中期後半段階にその祖形が用意されていたことが確認できるのは次の通りである。

壷	広口壷A・B　短頸壷　無頸壷　直口壷B・D・F
甕	甕A・B　大形甕
高坏	高坏A・B・C
脚	脚A
鉢	大形鉢A・D・E
蓋	蓋A・C

また上記以外の諸形態のうち，広口壷C，直口壷A・C，甕C，大形鉢F・G・Hは，差違は大きいものの既存の類似形態からの派生としても理解可能であるが，広口壷C・D，直口壷G，甕D・E，高坏D，脚B～Dの各類は後期初頭段階で，本地方の先行する時期に祖形を見いだしがたい。後期初頭に新たに加わる形態で，他地方との関係を考慮しなければならない。

その詳細については第5節で検討する予定であるが，上天神遺跡資料を構成する少なからぬ要素がこの時期に新たに加わったことにここで注意を促しておく。

(1)笹川龍一『彼ノ宗遺跡』善通寺市教育委員会1985
(2)薦田耕作他『矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会1987
(3)國木健司「仲善寺遺跡」『香川県埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会1994
(4)藤井雄三・末光甲生他『久米池南遺跡』高松市教育委員会1989

第4節　後期前半段階の資料群

1.

以前，讃岐中部の坂出市下川津遺跡資料を中心に，弥生時代後期中葉～古墳時代前期の土器様相を検討した（下川津Ⅰ～Ⅶ式）[1]。今回，後期初頭～中葉の状況について簡単に見ておく。ただし現状では並行ないしは近接時期の良好な資料に乏しく，讃岐地方の普遍的様相を整理することが困難であることから，対象を高松平野地域の資料に限る。しかしそれにしても提示されている資料は豊富ではないので，あくまでも将来的な検討に備えた予備的な作業にすぎない。

（1）大空遺跡資料[2]

広口壷B（4），直口壷B（5）・D（1・2），細頸壷A（3），甕A（6・8）・B（7）・C（9），高坏A（12・13）・E（14），把手付鉢B（10），大形器台（15・16）および製塩土器（11）を確認している。上天神遺跡では広口壷だけでも豊富な組成を有するが，ここでは頸基部に退化した斜線文を巡らすB類だけしか見ない。直口壷では主流的な形態A類を欠く。

甕A類は端部の拡張は全体的に鈍く，上天神遺跡資料で新しい様相と考えた，口縁部がやや伸びたA2類を含む。また上天神遺跡では少数派であった甕B類が主体を占め，その形態についてもやはり口縁端部拡張の鈍化が窺える。

高坏Aでは口縁部拡張を極端に簡略化したA4類に近い形態を含み，高坏D類より新しい様相の高坏E類を伴う。

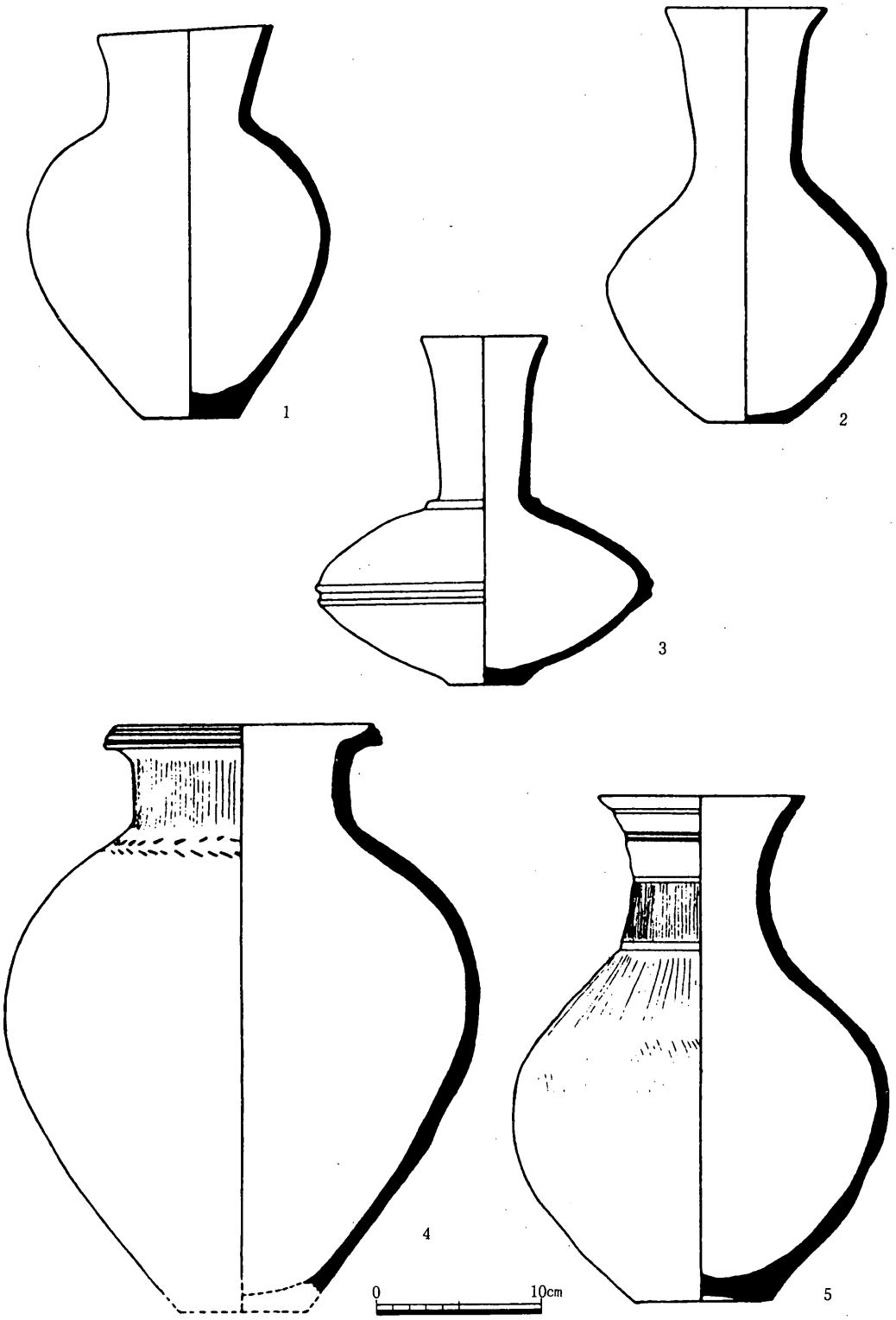
このように，従来讃岐地方の後期初頭段階資料の標識と見なされてきた大空遺跡資料は，後期初頭でもより新しい様相の資料と考えられる。この資料によって上天神遺跡で明確に分離できなかった新古の区別が，少なくとも一部で可能となる。

まとまった内容とはいえ，大空遺跡資料は一土坑資料にすぎないため本来的な構成の一部を欠く可能性が高いが，直口壷A，広口壷C・D，直口壷G，甕D・E，脚C・Dの各類が確認できない。

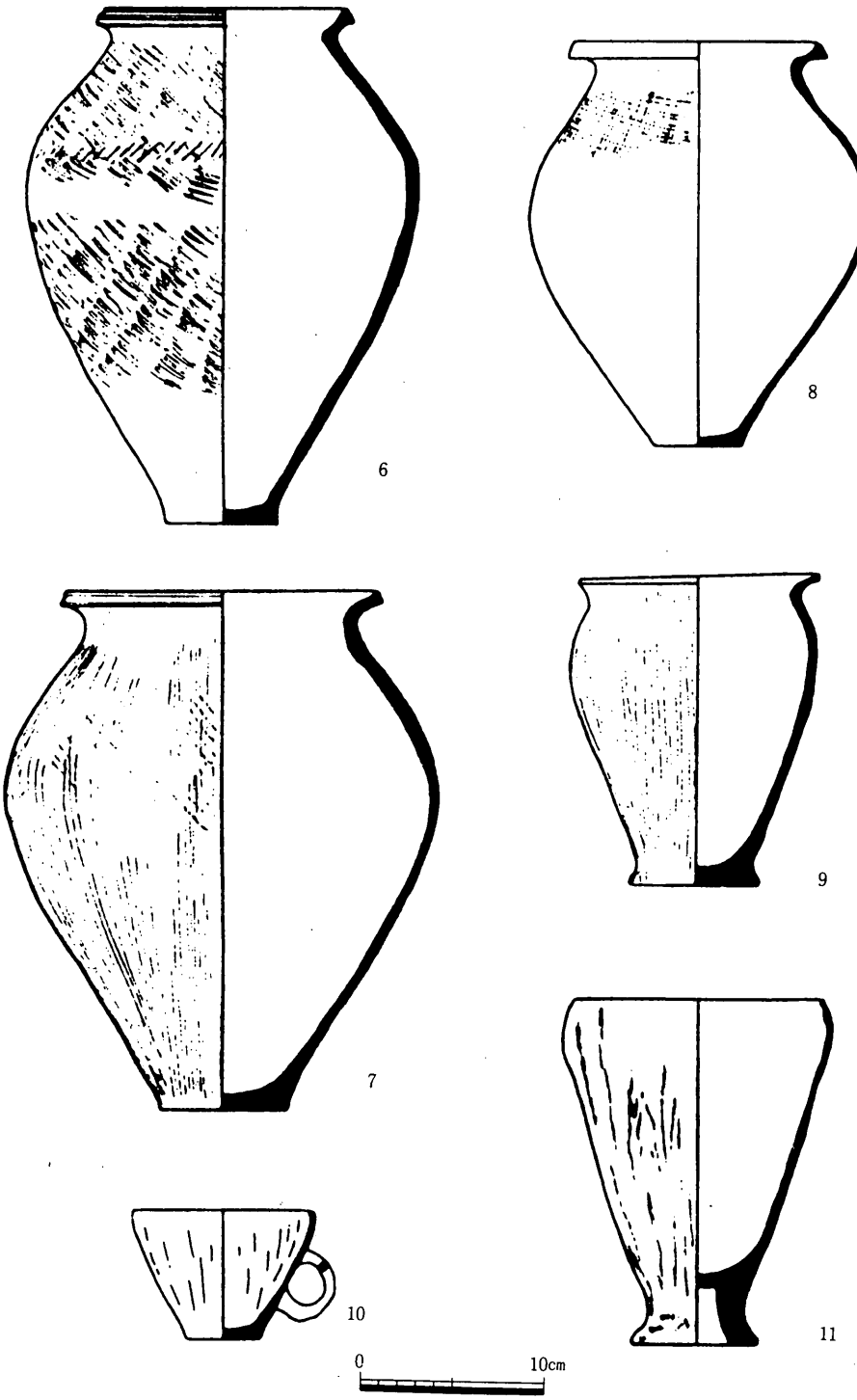
（2）小山南谷遺跡ＳＨ03資料[3]

調査直後の概報で資料の一部が提示されている小山南谷遺跡では，竪穴住居ＳＨ03資料が大空遺跡資料に近い。

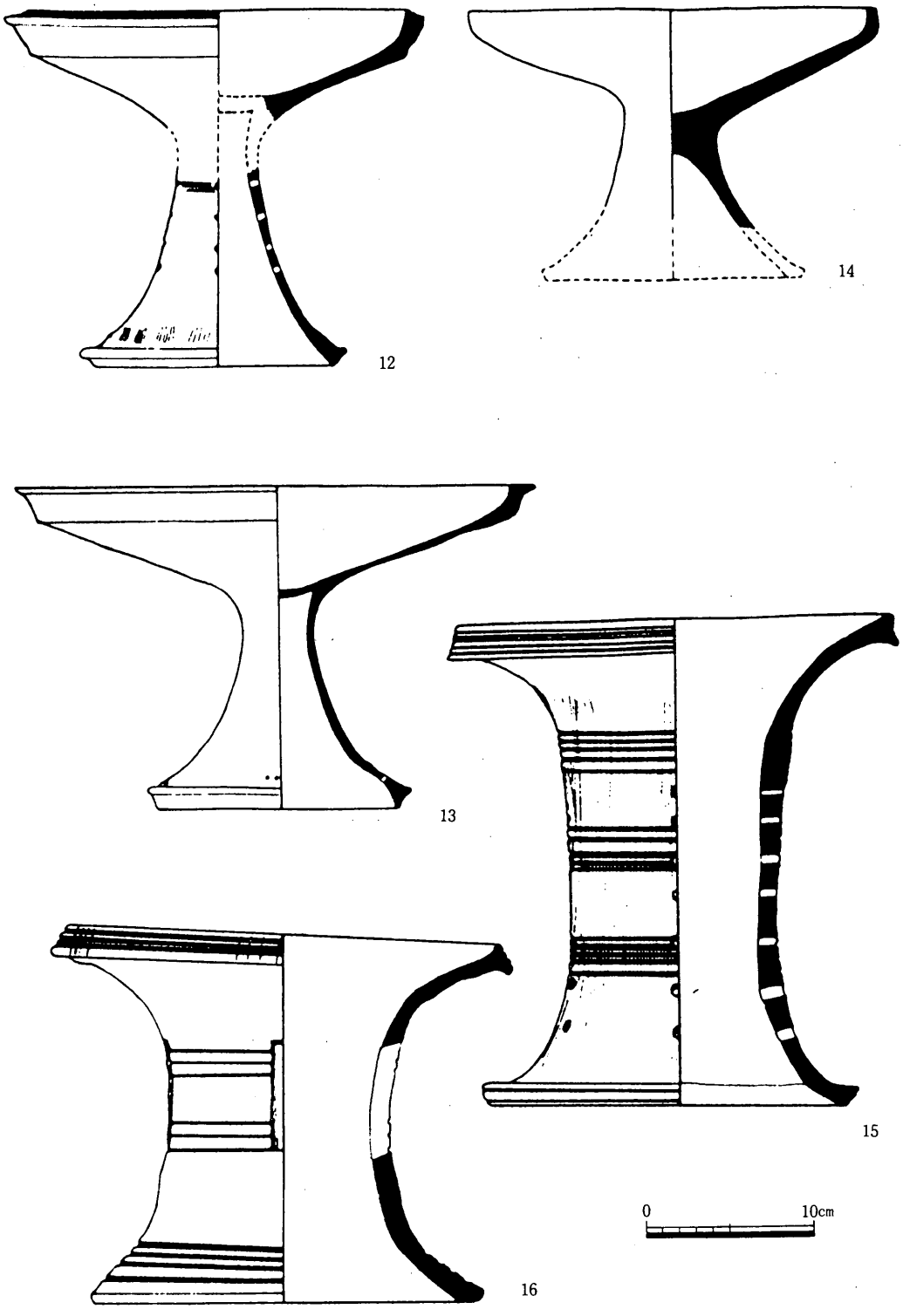
直口壷C（1），甕B（2・3），高坏A（4）等が報告されている。直口壷Cは頸部凹



第465図　大空遺跡（１）



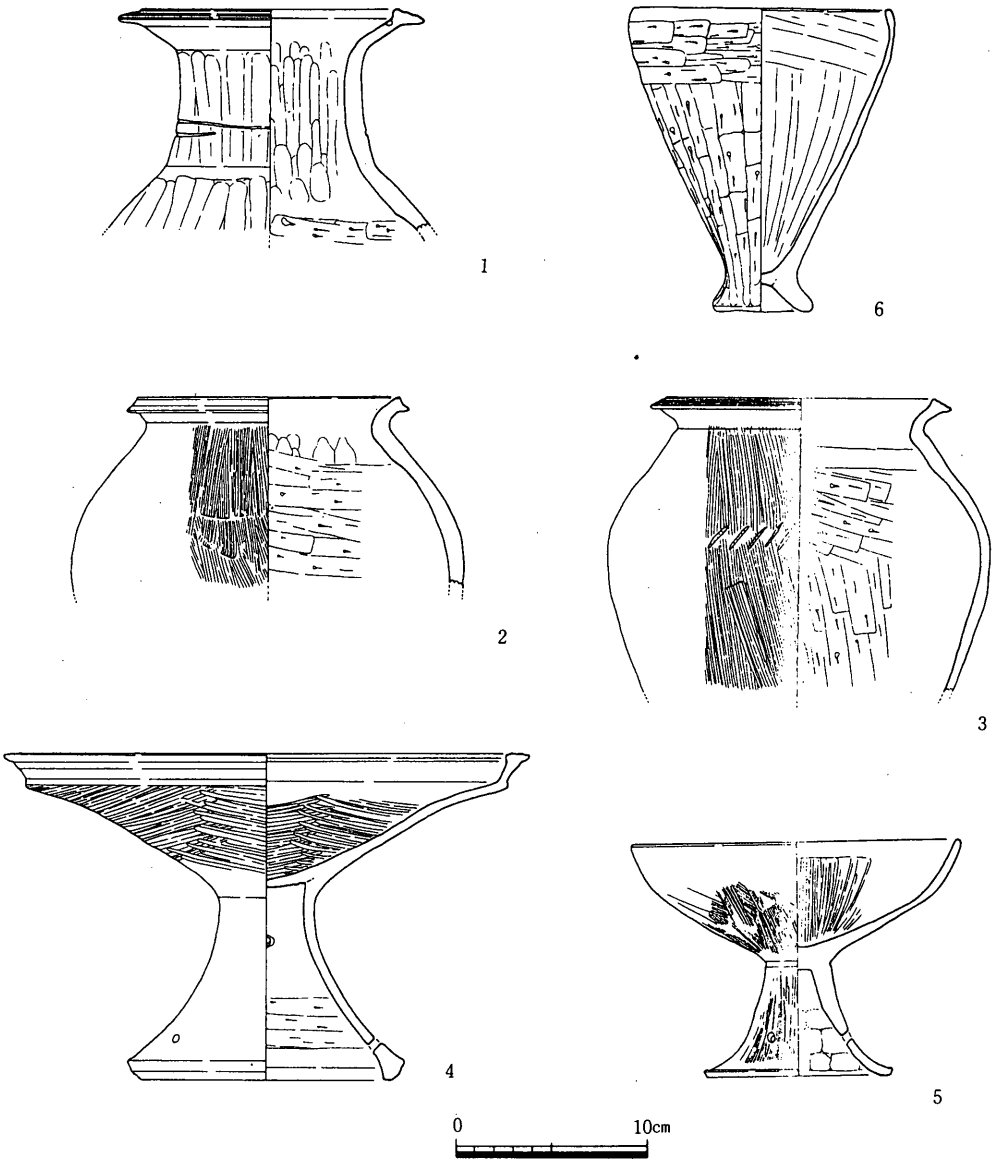
第466図　大空遺跡（２）



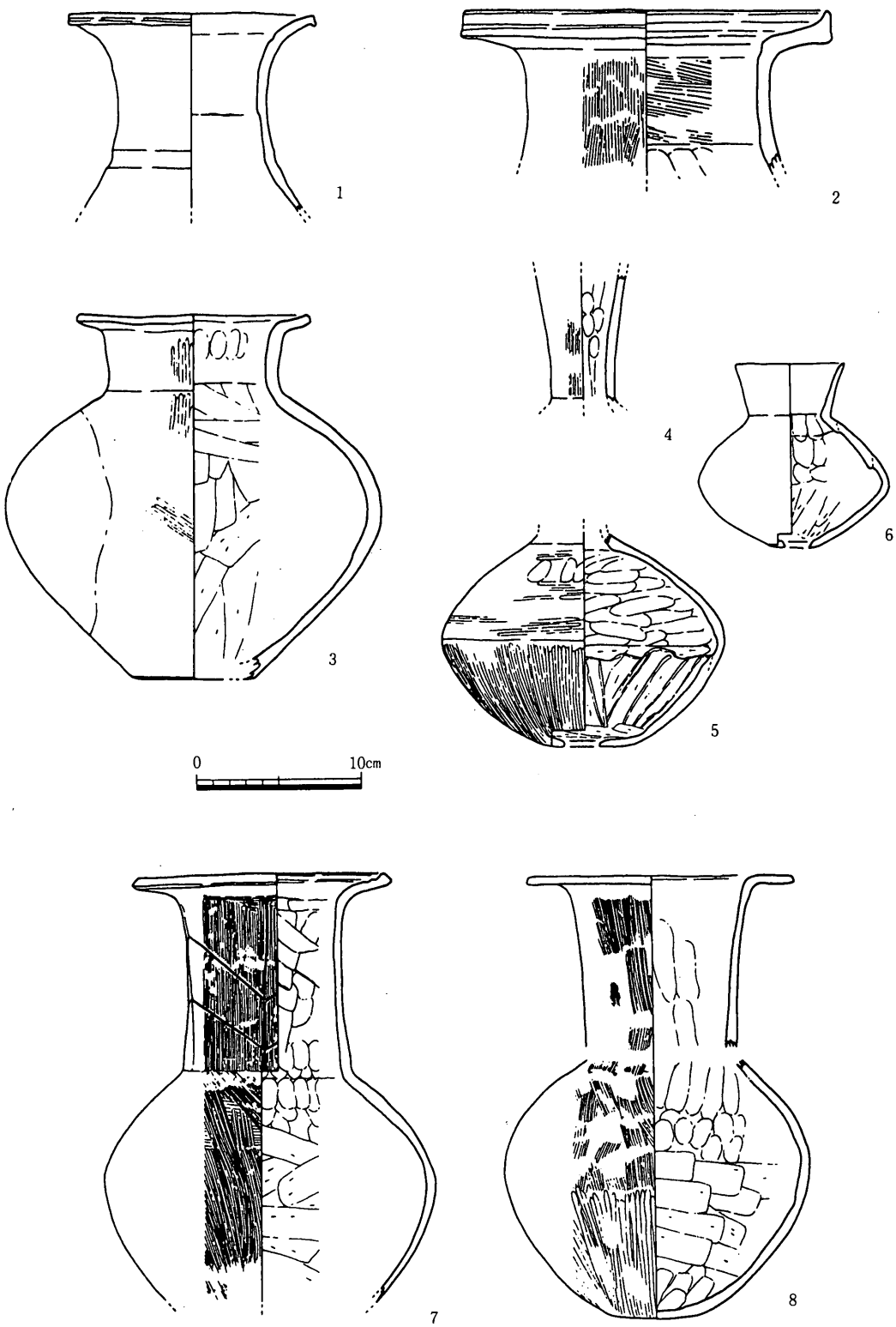
第467図　大空遺跡（３）

凹線文が粗雑な沈線文に転化し，後出的な広口壷Ｅにより近くなる。高坏Ａは坏上半部がかなり開くが端部の肥厚摘み出しはまだ鈍化していない。甕Ｂは口縁端部の下方摘み出しが強いものとそれすら鈍化した形態がある。また上天神遺跡では見られない浅い椀形の坏部を持つ高坏を伴う。それの脚部形状は後出的な脚Ｇに相当する。

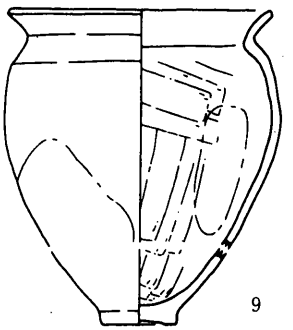
供伴する製塩土器（６）の脚部は「ハ」字状に開き，その部分がまだ円筒形に近い大空



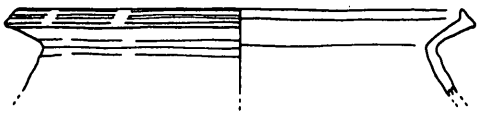
第468図　小山南谷遺跡ＳＨ03



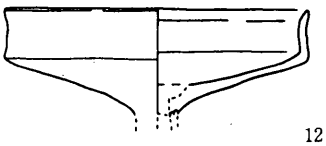
第469図　林坊城遺跡ＳＸ03（１）



9

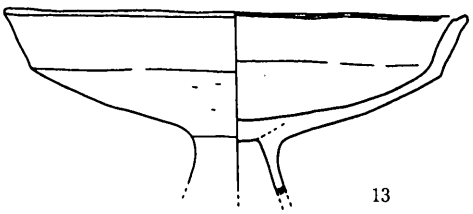


11

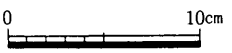


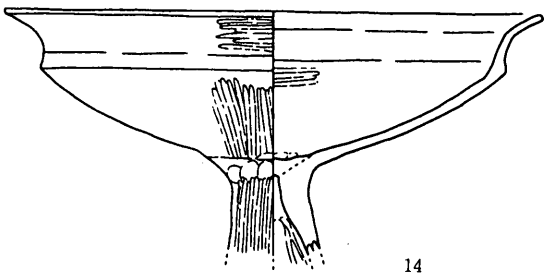
12

10

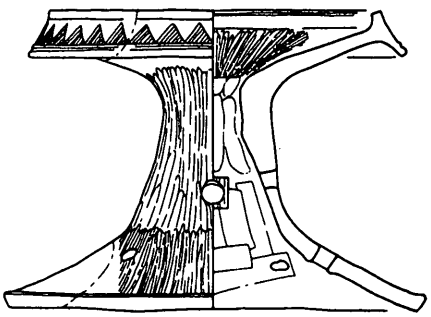


13

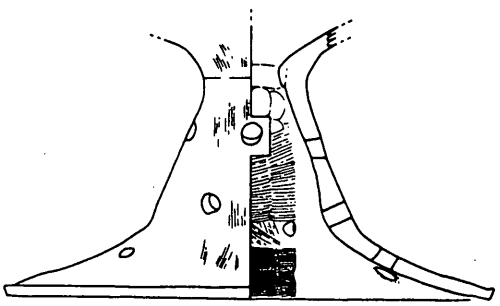




14

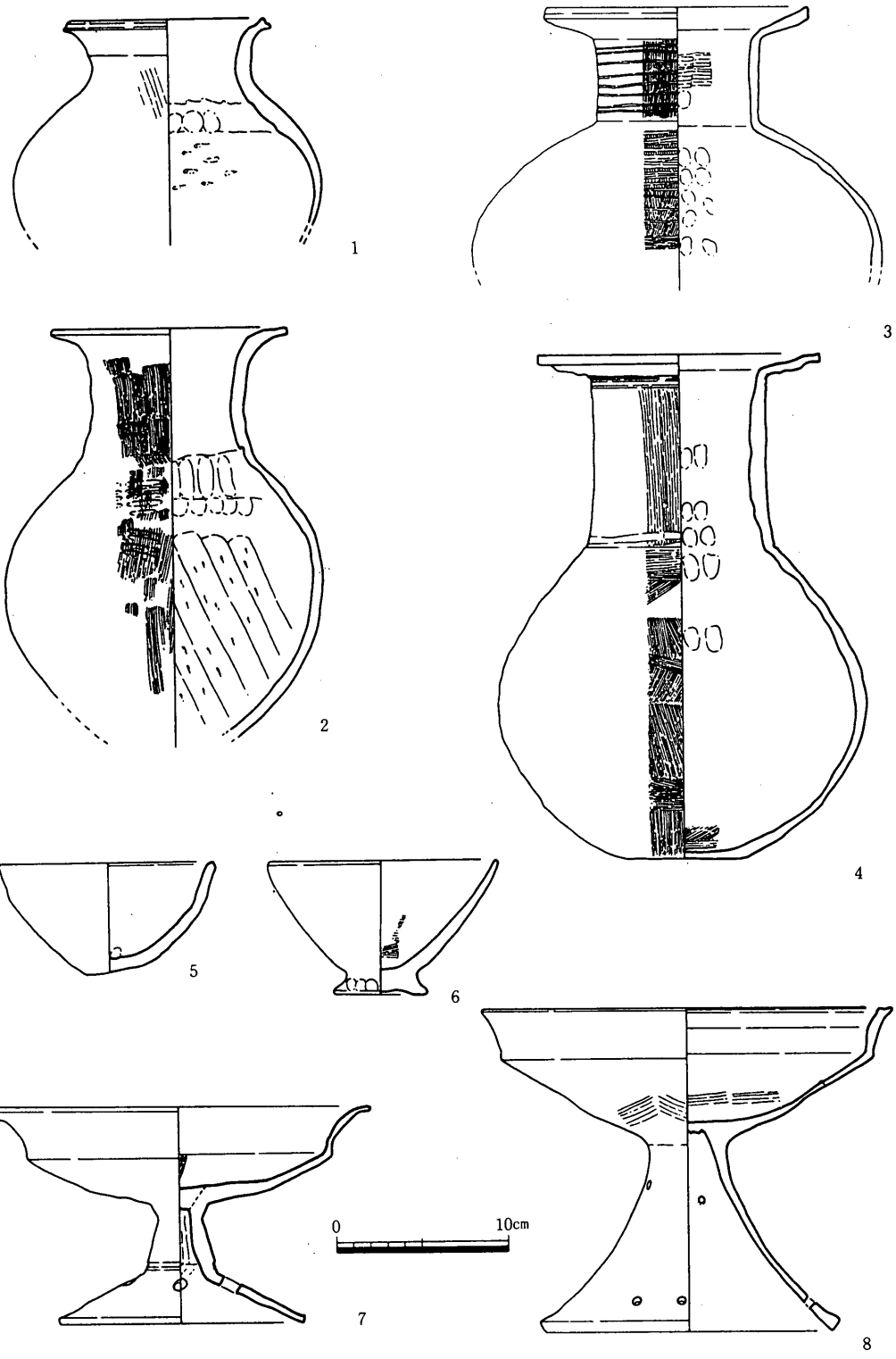


15

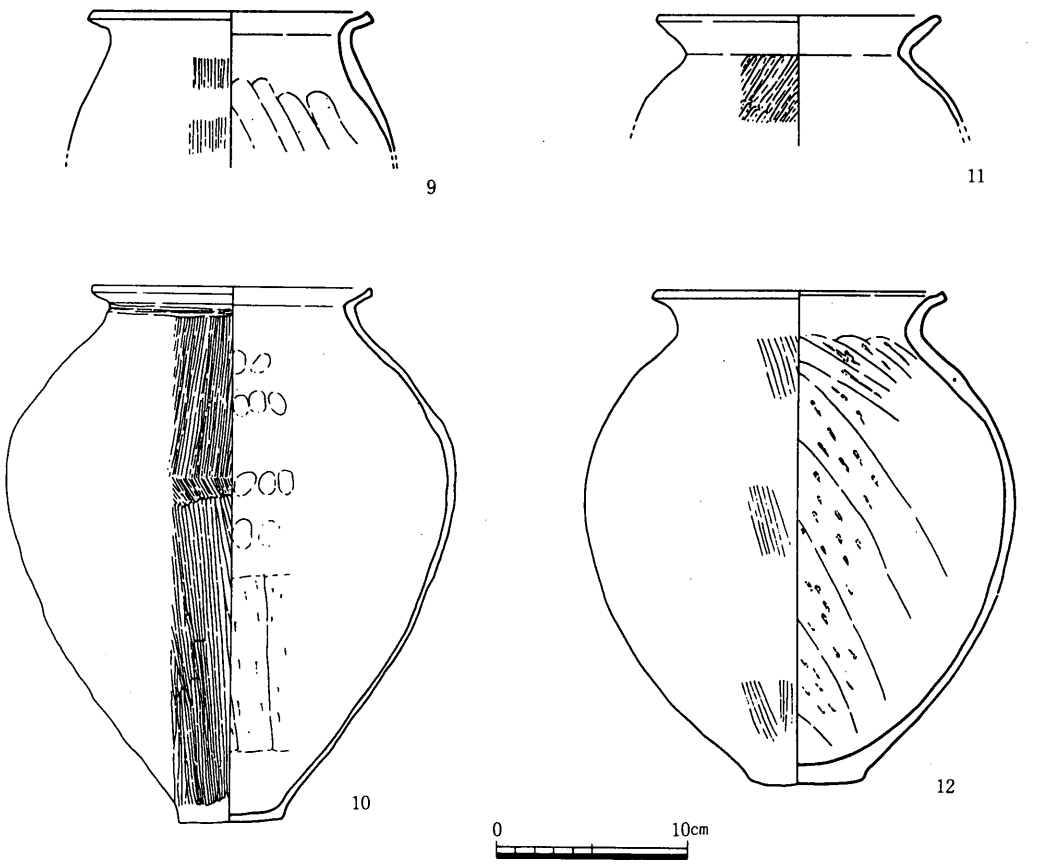


16

第470図　林坊城遺跡ＳＸ03（２）



第471図　空港跡地遺跡ＳＫ01・02・ＳＥ01（１）



第472図　空港跡地遺跡ＳＫ01・02・ＳＥ01（２）

遺跡資料よりも後出しそうである。しかし直口壷Ｃおよび高坏Ａが残るのでさほどの間隔は想定しなくて良いであろう。

（３）林・坊城遺跡ＳＸ03資料[4]

突出部付円形周溝墓の可能性が高い遺構の周溝出土資料である。壷類にはおそらく広口壷Ａの後出形態と思われる（３），同Ｂの後出形態であろう（１）や，直口壷Ｃの後出形態である広口壷Ｅ（７・８）がある。甕類ではＡ２類より後出的な（11）と，Ｆ３類（９）および祖形的な甕Ｇ類（10）－下川津Ｉ式段階よりやや先行する可能性のある祖形的なＢ類甕－がある。高坏では発達した外反口縁のＦ２類（14）と祖形的な高坏Ｇ類（下川津Ｂ類高坏，12・13）がある。本資料は明らかに大空遺跡・小山南谷遺跡ＳＨ03資料より後出する内容であるが，甕Ｇ類，高坏Ｇ類の形態から見る限り，後期中葉の下川津Ｉ式よりは先行しそうである。

（4）空港跡地遺跡ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＥ01資料[5]

未だ各資料とも全体像は報告されていないので，資料間に若干の時期差が存在する可能性はあるが，あまり大きなものとはならないであろう。全体として林・坊城遺跡ＳＸ03資料に後続する内容を持つ。

広口壷Ａ類の後出形態（３），広口壷Ｅ類（４）は共に発達した口縁部形態に，林・坊城遺跡ＳＸ03資料より後出する様相が窺える。高坏では吉備南部地方の鬼川市Ⅲ式のそれに近い短脚形態（７）と，ほぼ下川津Ⅰ式段階の下川津Ｂ類高坏（８）がある。甕はＦ類各種（９・11・12）と下川津Ⅰ式段階のＧ類（10）が見られる。また多量化は確認できないものの，定型化した小形鉢が確実に出現している。

2.

あらためて以上の関係をまとめておくと，高松平野の後期前半段階（下川津Ⅰ式併行期以前）の様相は次の通りとなる。

また上天神遺跡資料で，後期初頭段階よりも後出すると見なした諸形態は概ね以下の通りに位置づけうる。広口壷Ｅ（636・1124）は，林・坊城遺跡ＳＸ03段階，口縁部の発達する（637）は空港跡地遺跡ＳＫ01等よりも未だ後出する。広口壷Ｆ（607・635）は林・坊城遺跡ＳＸ03段階を含めてそれ以前に位置づけられる。甕Ｆ類のうち口縁部の発達しないＦ１類（1235・1195）は林・坊城遺跡段階に，Ｆ２・３類は共に空港跡地遺跡ＳＫ01等段階以後に多い形態である。甕Ｇ類は下川津Ⅰ式並行期の中で理解できる空港跡地遺跡ＳＫ01等段階に出現して古墳時代初頭まで継続する。高坏Ｇ・脚Ｈ類も同様である。このうち古い様相を持つ高坏Ｇ１類は空港跡地遺跡ＳＫ01等段階に比定できる。あまり発達しない外反口縁高坏のＦ１類は林・坊城遺跡ＳＸ03段階もしくはそれ以前，Ｆ２類はそれよりも後出する形態である。脚Ｇ類は短脚形態に先行する形態で，空港跡地遺跡ＳＫ01等段階に先行する。

<table>
<tr><td>上天神（古相）</td><td>末則</td><td rowspan="3">上東・鬼川市Ⅰ</td></tr>
<tr><td>上天神（新相）大空</td><td></td></tr>
<tr><td>小山南谷ＳＨ03</td><td></td></tr>
<tr><td>林坊城ＳＸ03</td><td></td><td>上東・鬼川市Ⅱ（古）</td></tr>
<tr><td></td><td rowspan="2">下川津Ⅰ式</td><td>上東・鬼川市Ⅱ（新）</td></tr>
<tr><td>空港跡地ＳＫ01等</td><td>上東・鬼川市Ⅲ</td></tr>
</table>

第24表　高松平野の弥生後期前半段階土器編年案

(1)大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期の土器について」
『下川津遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
(2)鎌木義昌・六車恵一「香川県高松市高松町大空遺跡の土器」『弥生土器集成　資料編』
日本考古学協会
(3)片桐孝浩『埋蔵文化財発掘調査概報　小山南谷遺跡　平成4年度』香川県教育委員会・
(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1994
(4)宮崎哲治『林・坊城遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
1993
(5)山下平重他『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成3年度』香川県教育委員会・(財)香
川県埋蔵文化財調査センター1992

第5節　上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器

1．上天神遺跡の在地土器

上天神遺跡出土の弥生後期土器の大部分（おおよそ95%内外）は，明橙色～灰褐色を呈し，粒径1mm内外（稀に2～3㎜大の粗粒を含む）黒色細粒（角閃石）を多量に含む特徴的な胎土で作られ，他種類胎土の土器との識別が肉眼観察によっても比較的容易である。後期中葉以降，この種の胎土を使用する土器は形態的にも独自性が顕著になると共に画一性も増し，その点だけでも隣接地域の土器とさえ識別が容易である。(1)しかし後期初頭段階ではまだそれほどの型式学的特性は顕在化していないため，在地品・搬入品の識別はそれだけ土器胎土に頼る部分が大きい。

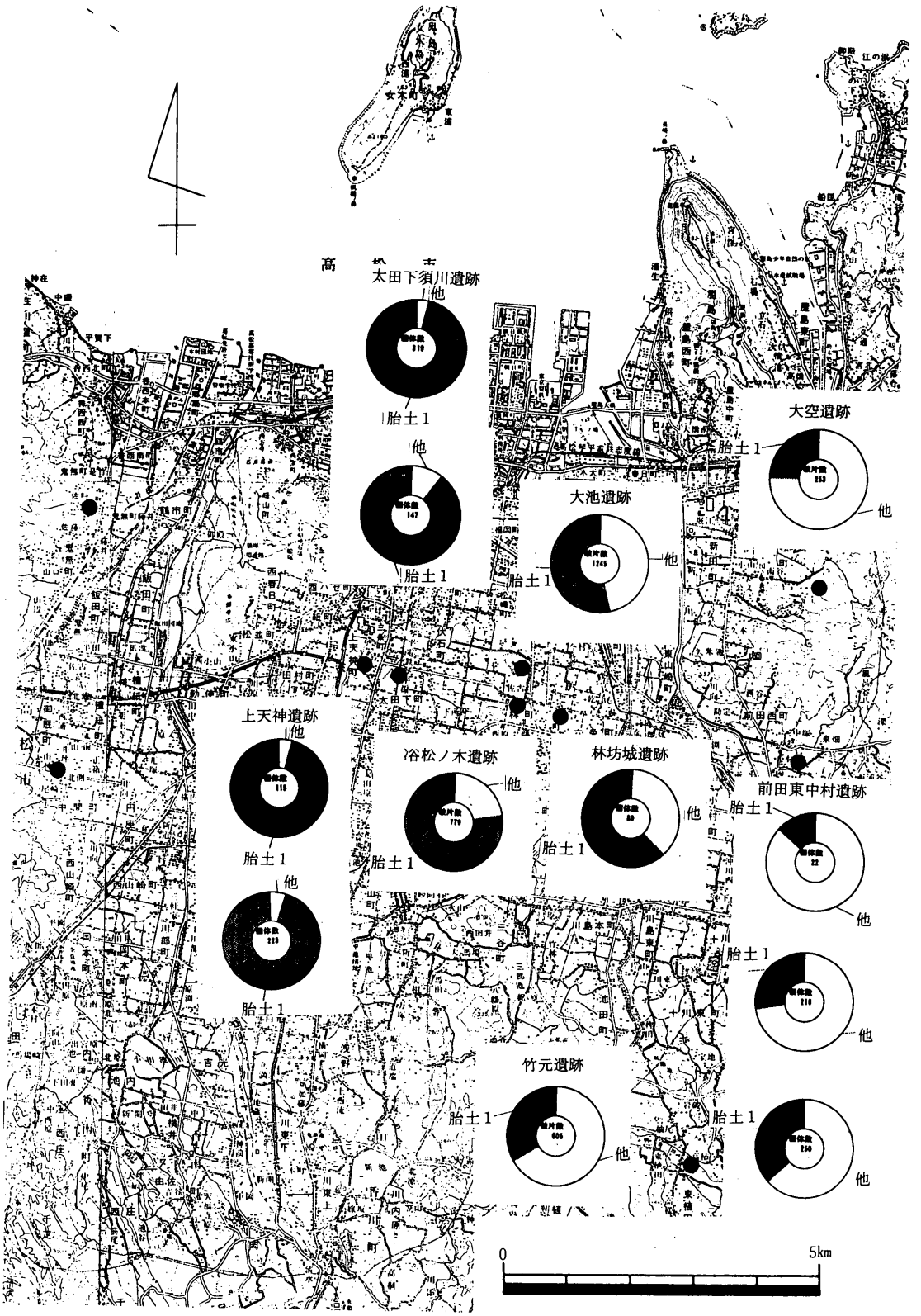
以前，坂出市下川津遺跡の資料を検討する中で，特徴的な形態・技法及び胎土を有する一群を抽出して「下川津B類」と仮称した。そして分布と出現頻度から，その一群が高松平野，香東川流域の後期中葉から古墳時代初頭の土器様式と推定した。(2)上天神遺跡で圧倒的大多数を占める特徴的な土器胎土は，下川津B類とした土器様式の特徴的なそれに等しい。(3)隣接する太田下・須川遺跡の後期資料においても，やはり同種胎土が圧倒的大多数を占め，調査者は胎土1類と呼称している。(4)（以下，太田下遺跡報告書での胎土分類名称に従い，角閃石を多量に含む特徴的な胎土を「胎土1類」と称する。）

これまでに「胎土1類」については，太田下・須川遺跡資料について奥田尚氏による含有砂礫種の同定，(5)主に下川津遺跡資料について三辻利一氏による蛍光X線分析，(6)更に今回の上天神遺跡資料を対象とした白石純氏の蛍光X線分析(7)がそれぞれ試みられている。

奥田氏は「胎土1類」を，閃緑岩質岩起源の砂礫を主に含むと鑑定し，太田下・須川遺跡での土器製作を想定するのであれば，素地粘土あるいは素地粘土と混入砂礫双方を他所から持ち込む必要があるとした。更に調査者の一人，森下友子氏は，高松平野西郊本津川流域の独立丘陵　津内山および平野中央部の石清尾山南部を採取候補地と推定している。(8)

三辻分析では「胎土1類」の化学特性としてK，Rb量が少なく，逆にCa，Fe量が多いこと，つまり見かけ上近似する河内地方，生駒西麓産土器と，化学的特性に付いても類似することを明らかにした。また白石氏分析では大枠として上記した特性を追認しつつ，更にSr量などで「胎土1類」を細分しうる可能性が示唆された。

ところで「胎土1類」は今のところ，中期後葉に突如として出現かのようである。後期初頭段階で，それが極めて高い率を占める上天神遺跡，太田下・須川遺跡においてさえ中

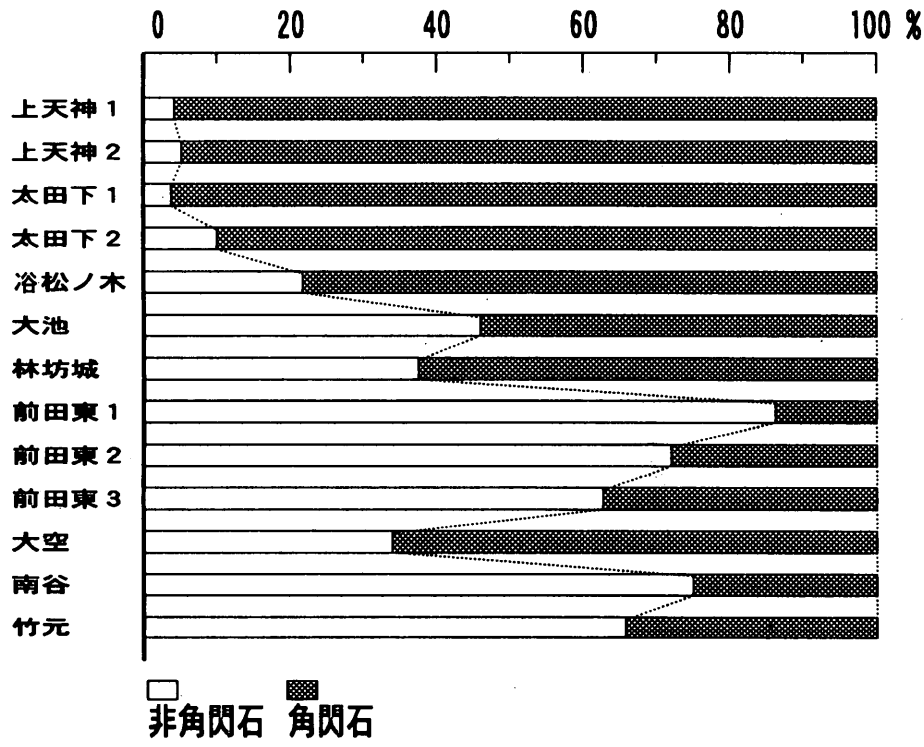


第473図　高松平野における「胎土１類」土器の分布状況

期中葉以前にはこの種の胎土は全く認められない。[9] また「胎土１類」は，遅くとも古墳時代前期の布留式中段階並行期を最後に使用されなくなる可能性が高い。最も後出する「胎土１類」は石清尾山石船古墳出土の供献土器・埴輪，[10] 横立山経塚古墳出土埴輪[11]で確認できる。このように「胎土１類」が明確に時期的に限定される状況は奥田氏，森下氏が推定するように意図的な粘土・砂礫の選別ないしは調合の産物と見なした方が理解しやすい。

このように考えてよければ，「胎土１類」土器の製作範囲は，単純に自然的要因によって決せられるのではなく，土器製作に当たって一定の規範を共有する範囲を示すことになるであろう。

第473図は，高松平野における後期段階の「胎土１類」の出現頻度を示したものである。以前検討したように高松平野以外ではこの胎土は最大でも10%前後しか現れない。[12] 最も頻度が高いのは共に95%前後の高率を占める上天神遺跡，太田下・須川遺跡の後期初頭段階資料である。太田下・須川遺跡の後期前葉～中葉資料では僅かながら減少するものの89.7%に達する。[13] 上天神遺跡の後期前葉以降資料は乏しく統計操作に耐え難いが，一見したところ，太田下・須川遺跡同様に後期初頭段階の出現頻度より大きく低下することはない。同じ香東川流域にあっても東方に向かって出現頻度は漸減する。浴・松ノ木遺跡の後期中



第474図　高松平野における「胎土１類」土器出現頻度

～後葉資料では78.2%とされる。[14]近接する大池遺跡では53.9%となる。[15]後期中～末葉を主体とすることは間違いないが，未整理資料の破片数換算のため中期以前の土器片を含んだ可能性がある。更に春日川に近接した後期前葉でも新しい段階の林・坊城遺跡ＳＸ03資料では62.5%である。[16]新川流域の前田東・中村遺跡ではほぼ後期初頭段階で13.6%，同前葉で27.7%，同中葉では37.2%と次第に増加するが，後期中葉段階でも浴・松ノ木遺跡の半分以下に過ぎない。[17]後期前葉～中葉の南谷遺跡では24.9%となる。[18]春日川上流の竹元遺跡では中葉～後葉の資料でも34%にすぎない。[19]

平野西部については，今のところ統計的な分析を行える資料に欠けるが，本津川下流域の佐料遺跡採集資料（後期中葉）は，少量であるが全て「胎土１類」からなる。[20]しかし同じ本津川流域でも約４㎞上流の中間西井坪遺跡では，過半を超えることはないようである。[21]

以上見てきたように，上天神遺跡，太田下・須川遺跡を中心に香東川水系下流域の諸遺跡における比率が極めて高いことがあらためて確認できる。また平野西部の本津川流域でも下流域においては同様の可能性が高い。とりあえず香東川下流域・本津川下流域の集団が弥生後期段階から少なくとも古墳時代初頭にかけて「胎土１類」を採用したと見なしておきたい。

したがって以上から明らかなように上天神遺跡の95%を占める「在地品」とした土器は，必ずしも全てが上天神遺跡で製作されたものとは限らない。上天神遺跡を中心にして概ね半径４㎞圏内で製作された土器を含みうるのである。この点で「胎土１類」の中に微妙な差異の存在を示唆する白石分析は興味深いといえよう。[22]そして５%の非「胎土１類」土器はこの半径４㎞圏の外部から持ち込まれたと考えられる搬入品である。

ところで，同じく「胎土１類」土器が過半を占めるとはいえ，例えば上天神遺跡と林・坊城遺跡とでは大きな構成比率の差が存在する。すでに示唆したように若干の時期差の問題もあるが，「胎土１類」使用圏とみなした地域の縁辺に向かってその構成比が「空間的に」漸減する現象について先に検討しておきたい。

原則的にはこの現象は遺跡の性格差に起因するのではないと考える。上天神遺跡や太田下・須川遺跡で，極めて高い出現頻度を見るのは，それを製作していることももちろんであるが，それ以上に両遺跡が「胎土１類」使用圏の中心部分に位置することに意味があると考える。ここでは日常的な物資や人間の移動，共同作業を通じて一定範囲の近接した集落間の頻繁に接触するエリアを当該期に認めることができるであろう。両遺跡ではそうした連鎖が，ほぼこの「胎土１類」使用圏内で完結するのに対して，その縁辺近くに位置す

る林・坊城遺跡などではそのエリアが一部圏外にはみ出すので，上天神遺跡などと同様に「胎土１類」土器を製作するにも関わらず，比較的多量の非「胎土１類」土器が流入することになると考えたい。

これを裏返した現象が「胎土１類」使用圏に比較的近接しつつその外部にある平野東縁部の前田東・中村遺跡等に現れている。そこでは日常的な接触エリアの一部分だけが「胎土１類」使用圏と重複するために，一定量のそれが流入しうるのである。この様に考えることは「胎土１類」の採用が意図的な選別である可能性を支持するし，逆にその採用範囲は土器製作法の少なくとも一部について同じ伝統を共有する範囲であることを推定したことと矛盾することではない。生産諸部門における緊密な協業関係や物資の調達等を基礎とした日常的な接触エリアと，技術共有範囲が必ずしも完全に一致すると考える必要はないからである。

ただし上天神遺跡で製作されて他所へ搬出されずに，その場で消費される土器がこの95％のうち，どの程度を占めるのか，換言すると技術共有範囲内でどの程度，製作集落外に土器が流通しているかは明らかにできないが，先に見た縁辺部の状況や上天神遺跡資料に見る同一器種における細部形状などの多様性は，その頻度がかなり高いであろう事を予測させるであろう。

上記の分析から，半径４㎞以内の近接地域での接触が極めて緊密であろう事を合わせて確認しておきたい。

ところで先に若干示しておいた出現頻度の時期的変化の問題についてもここで簡単に考えておきたい。前田東・中村遺跡資料では後期初頭以後，次第に「胎土１類」の出現頻度が増加することが予測された。このことは以前「下川津Ｂ類」の分析時にも認められた傾向である。すなわち下川津Ⅳ式期に讃岐地方に限らず多くの地域で「下川津Ｂ類」搬入量が増加する。このことについて詳細な検討を加える余裕はないが，一つ太田下・須川遺跡の様相が示唆的である。ここでは逆に「胎土１類」の出現頻度が低下すること，換言すれば「搬入品」が増加することが予測される。前田東・中村遺跡をはじめとする「胎土１類」使用圏外部の様相を裏返した状況が認められるのである。より詳細な分析の積み重ねが必要であるが弥生時代末葉に向けて，次第により「広域の」物資流通が活性化する動きを反映したものと見なしうるかもしれない。

2．搬入品の数量

続いて上記した規定に基づく「搬入品」について検討を進める。具体的に上天神遺跡における搬入品の数量については，４区ＳＤ08，４区ＳＤ16ｆ溝の２遺構を対象として，出土した各器種の口縁部片，脚端部片全点について残存率から個体数を復元する方法によって推定した。（第25・26表）

その結果，搬入品は４区ＳＤ01では5.5%，４区ＳＤ16ｆ溝で4.3%を占めることを確認した。上記したように，これらは「胎土１類」土器製作圏（上天神遺跡を中心に概ね半径４kmの範囲と推定できる）外部からの「搬入品」ということになる。同様な基準に基づくものではないので単純な比較は困難であるが，この搬入品率は都出比呂志氏の論考に紹介された弥生時代中後期における畿内地方の土器の移動状況に近似しており興味深い。(23)

また多寡を問わなければ，ほとんどの主要器種について搬入品を認めることができるが，その比率は一様ではなく器種によってかなり異なる。両遺構資料とも，広口壷は平均より多いことが確認できるが，壷類全般には普遍化できない。他の物資流通に伴い，運搬具・貯蔵具として移動する可能性が高い壷・甕類の比率が突出することなく，かえって大形器台の搬入品が目立つことは興味深い。しかし逆に小形器台の搬入品率は平均値を大きく下回っている。赤色顔料に密接に関わる大形鉢も低い比率を示している。また把手付広片口

器種	在地系	構成率	搬入品	構成率	総数
直口壷	24.48	0.968	0.82	0.032	25.3
広口壷	13.84	0.865	2.16	0.135	16
無頸壷	1.37	1		0	1.37
細頸壷	1	1		0	1
壷　計	40.69	0.932	2.98	0.068	43.67
甕	85.7	0.946	4.85	0.054	90.55
高杯	44.20	0.934	3.1	0.066	47.3
装飾高杯	2.25	1		0	2.25
高杯　計	46.45	0.937	3.1	0.063	49.55
小形器台	17.25	0.977	0.4	0.023	17.65
大形器台	4.99	0.914	0.47	0.086	5.46
器台　計	22.24	0.962	0.87	0.038	23.11
大形鉢	7.53	1		0	7.53
総計	202.61	0.945	11.8	0.055	214.41

第25表　４区ＳＤ08「搬入」土器比率

皿は全体で80個体強を出土しているにもかかわらず，確実に同器種に比定しうる資料では搬入品を全く確認できない。

しかし今回は一遺跡のわずか2遺構での分析であり，本地域では同等の比較データも乏しいので，この傾向についてはここでより詳細な検討を続けることは難しい。今後の検討にゆだねなければならない。

器種	在地系	構成率	搬入品	構成率	総数
直口壷	14.03	0.966	0.5	0.034	14.53
広口壷	14.38	0.934	1.01	0.066	15.39
壷計	28.41	0.950	1.51	0.05	29.92
甕	39.33	0.960	1.64	0.04	40.97
高杯	26.25	0.955	1.25	0.045	27.5
小形器台	10.22	0.987	0.13	0.013	10.35
大形器台	3.81	0.927	0.3	0.073	4.11
器台計	14.03	0.970	0.43	0.03	14.46
大形鉢	2.27	0.962	0.09	0.038	2.36
総計	110.29	0.957	4.92	0.043	115.21

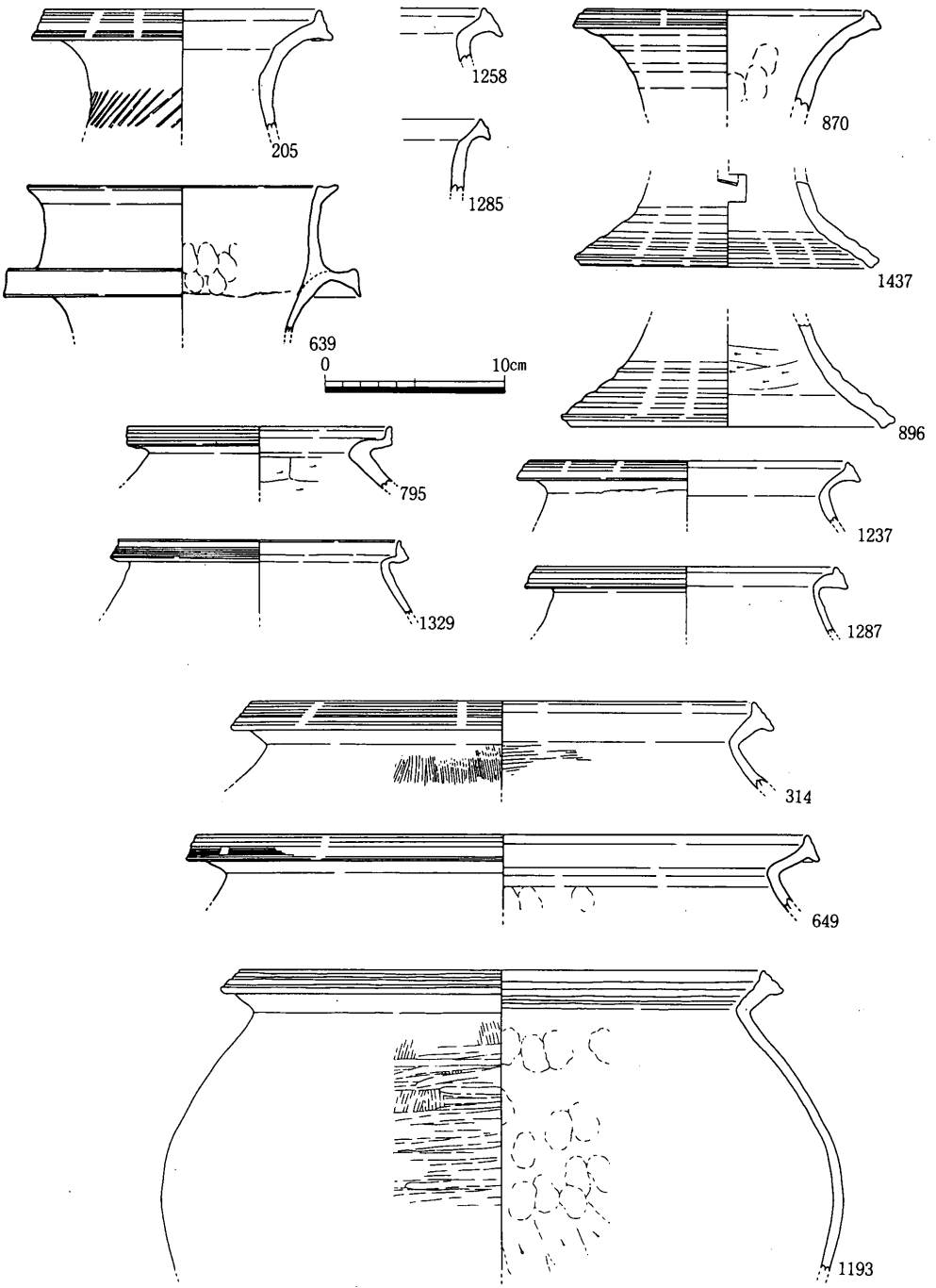
第26表　ＳＤ16ｆ溝「搬入」土器比率

3．搬入品の系統

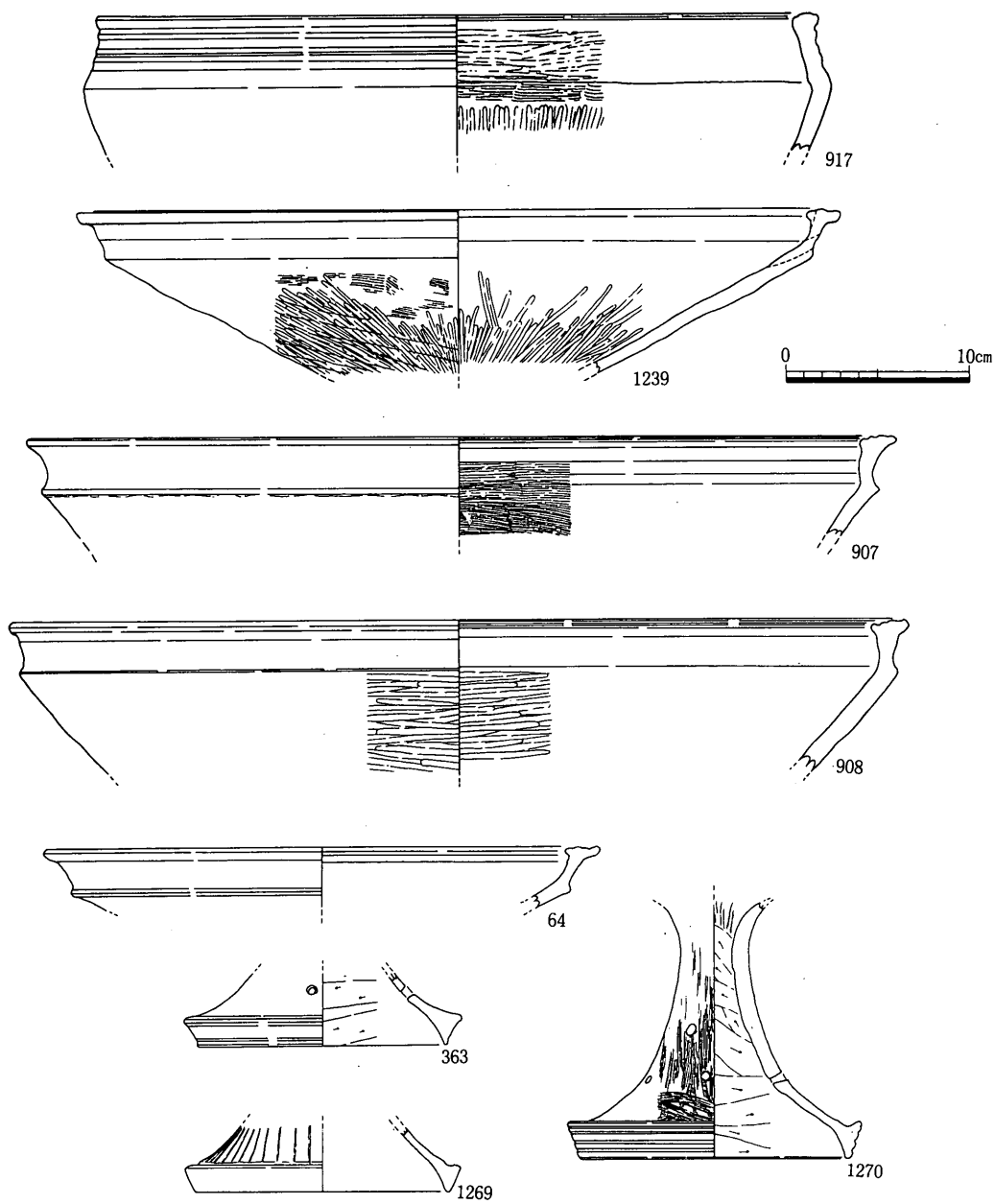
次にこれら「搬入品」の製作地であるが，このことについては，片岩粒を含む阿波系搬入品を除き，現時点では胎土の特徴から産地を同定することは出来ていない。主に形態的な特徴に基づき推定している。しかし，後述するように上天神遺跡の「在地産」土器の中にも，形態・技法的に他地方の強い影響を想定せざるを得ない資料を少なからず見ることができる。この点は「搬入品」の系統を検討する際にもおそらく当てはまるであろう。ここで示す系統は，この誤差を含むものである。なお以下の点数は4区掲載資料中のそれである。

（1）讃岐諸地域

在地品の大多数と形態的特徴を共有する1群である。図化した搬入資料79点中19例を占め，構成比の確認にはいたらないものの主要器種は網羅している。胎土面では黄橙色～褐色を呈し，少量の角閃石を含有するものが多い。



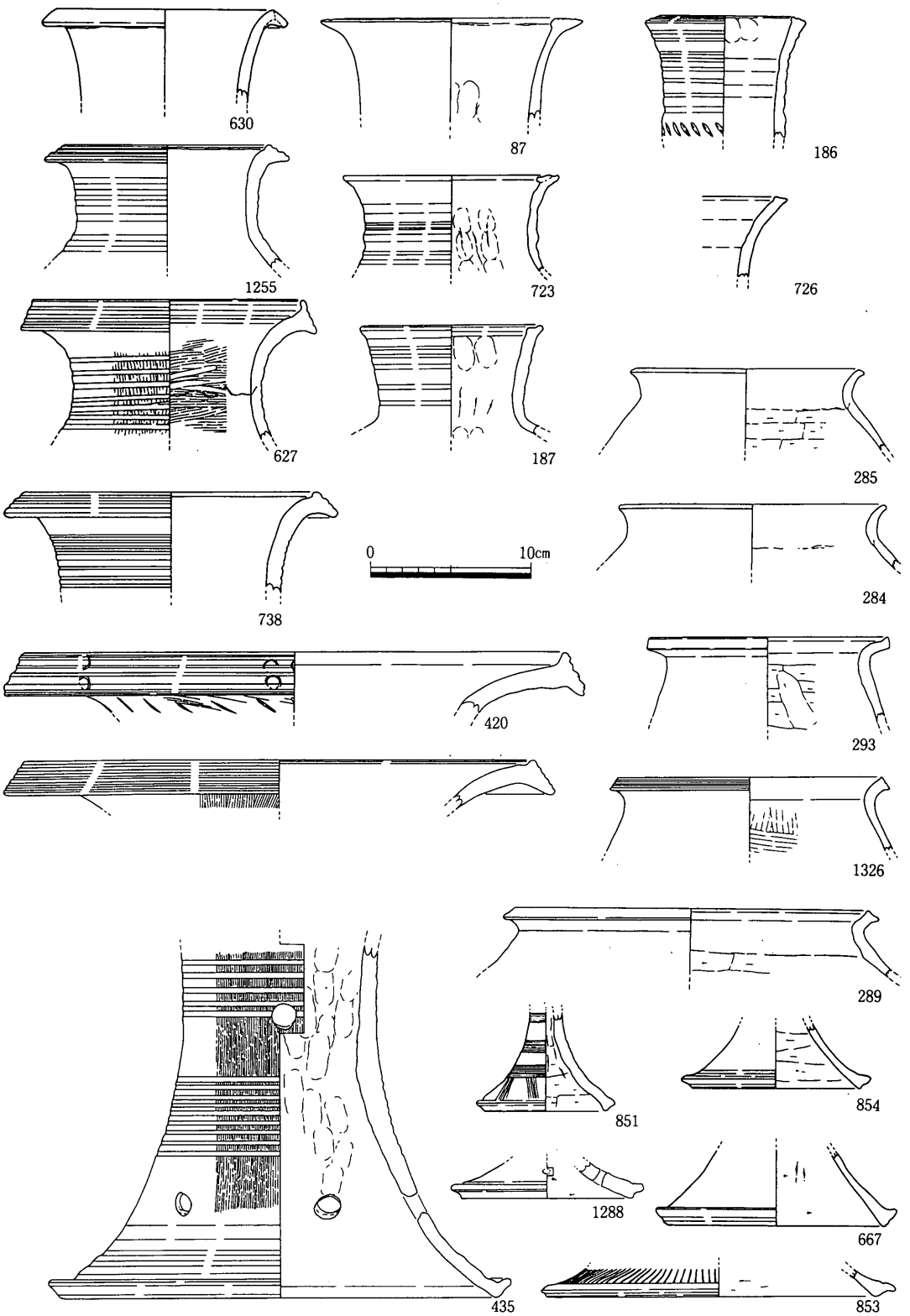
第475図　搬入土器・讃岐（1）



第476図　搬入土器・讃岐（２）

（２）吉備

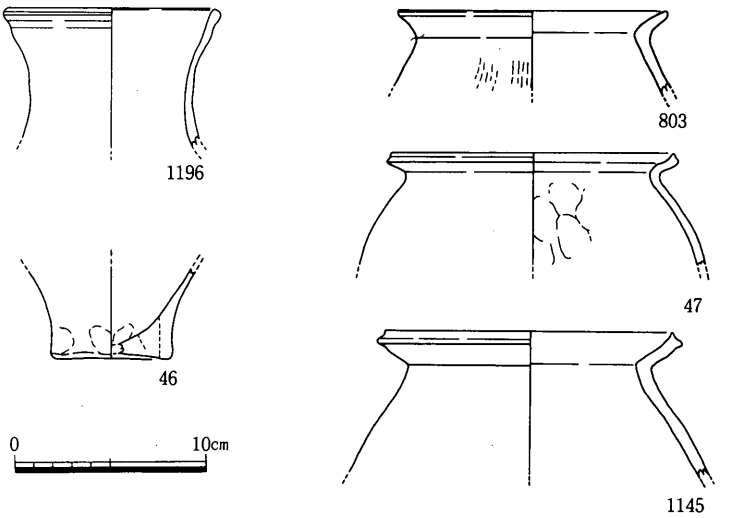
直口壷・高坏・甕などで，当該時期の吉備南部地方に盛行する形態を備えるグループである。図化資料で20点を数える。必ずしも全器種を識別できているわけではないが，主要器種は含むようである。やや粗粒の石英粒が目立つ白色ないしは黄色系統の色調を呈するものが多い。



第477図　搬入土器・吉備南部

（3）阿波

片岩粒を含むグループで直口壷・甕を確認している。わずか6点にすぎない。本遺跡は片岩素材・製品（石庖丁・石斧類）搬入量の豊富さや赤色顔料（水銀朱）使用から，阿波地方の集団との密接な交渉を想定できるにも関わらず土器そのものの搬入例は意外に少ない。凹線文の退化した直口壷や，直線的に開き端部の肥厚・拡張が極めて微弱な甕口縁部形態は，徳島県北原遺跡[24]などに見る当該時期の吉野川流域地方の特徴をよく示している。



第478図　搬入土器・阿波

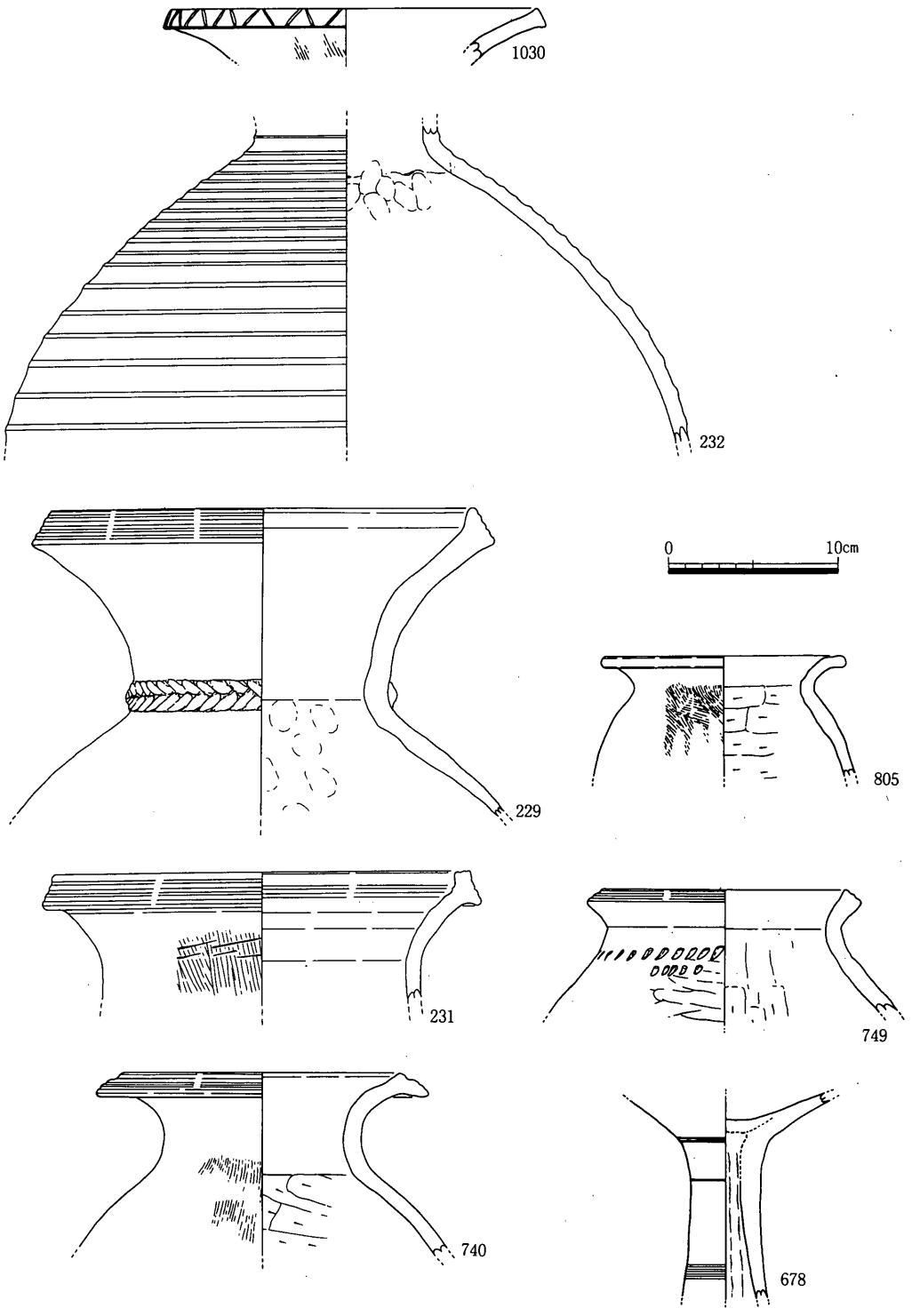
（4）西部瀬戸内諸地方

現段階では厳密な地定比定をなし得ないので，九州東部まで含んだ伊予・安芸地方以西に関係すると思われるものを一括した。8例を認め，うち6例が壷類である。

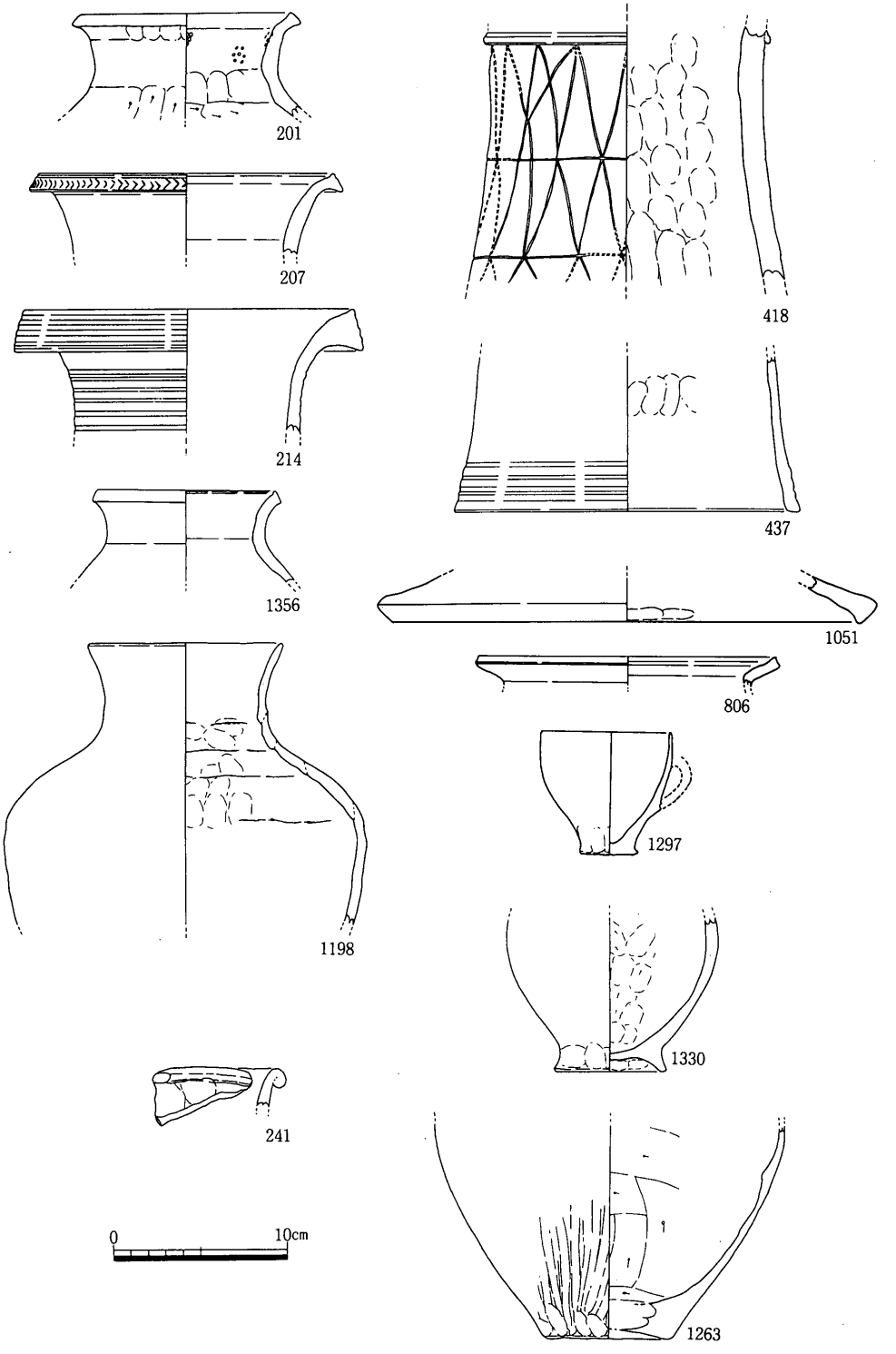
（5）その他・系統不明

この他，現段階では特定地域に比定することが困難な資料も少なくない。また（241）は玉縁状に肥厚した口縁部を有し，その形状はいわゆる朝鮮系無文土器に近似する。非「胎土1類」土器で，外部からの搬入品であることは間違いないが，朝鮮半島からのそれであるか列島内で製作された模倣形態かの特定は現段階では困難である。

系統問題については上記した問題もあり，甚だ不十分な追求しかできていないが，これによって第一に土器の搬入が単純に距離に規定されたものではないことを示唆している。つまり均等に周辺諸地域の土器が持ち込まれているわけではないらしいことは確認できる。特に近畿地方に特徴的な形態が欠落している点は注意を要する。いくつかの徴証からみて，当該時期には近畿地方と讃岐地方とは，後期中葉以降におけるほど断絶的な状態ではない



第479図　搬入土器・西部瀬戸内諸地方



第480図　搬入土器・その他系統不明

ようである。[25]次期以降に比べてはるかに豊富な讃岐産土器の彼の地方への流入が確認されている。その中には本地域，すなわち香東川下流域産も散見される。[26]加えて上天神遺跡において中西部瀬戸内海及び周辺諸地方の搬入品が認められるにも関わらず，近畿地方との「搬入土器」という形態での交渉が欠落することは注意したい。

またこのことと関連するが，阿波地方との関係も示唆的である。片岩製品・素材の一定量の流入や，おそらく阿波地方と密接に関わる赤色顔料の多量使用が認められるにも関わらず，土器の搬入量は決して多いとはいえない。阿波地方の諸集団とは石材・顔料の獲得に関しては密接な関係を保持していたが，「搬入土器」に反映される分野の交渉では必ずしもそうではないことを示している。このことは近畿地方との関係においても，後節で検討するように，「搬入土器」が認められなくてもその交渉総体が貧弱であるとはいいがたいことと同様である。

当該時期の集団間・地域間交渉の親疎が一般論的な「集団間の親縁性」に解消しえない側面を有すること，目的に応じたあるいは分野によって選択的な交渉のあり方を示唆するといえよう。

系統		器種	胎土	色調	形態上の特徴など	備考	出土遺構
讃岐	64	高坏	細・少、中・多	橙色	中位で強く屈曲して段。上半部短く外傾。端部は外方に引き出すと共に内方も突出。頂部平坦面凹線３条。	石英等多、角閃石少　搬入品	４区ＳＢ０４
讃岐	205	広口壺	細・多、中・多	にぶい黄橙色	口縁部は緩やかに折り返して開き、端部は僅かに肥厚し上方に摘み出し、下方も強く張り出す。端面鈍い凹線。頸基部に斜線文。横ﾅﾃﾞ。	石英等多、角閃石多　搬入品？	４区ＳＤ０８
讃岐	314	大形甕	細・少、中・多	灰黄色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返し、端部は大きく上下に摘み出す。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜。端面凹線、肩部外面縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ。	石英等多、角閃石・雲母少　搬入品	４区ＳＤ０８
讃岐	649	大形甕	細・普、粗・普	浅黄色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に強く摘み出し端面凹線。	石英等・角閃石　搬入品？	４区ＳＤ１６ｄ・ｅ溝
讃岐	795	甕	細・普、中・極多	褐灰色　灰黄色	二重口縁。強く折り返して短く水平に開く。ほぼ直立する立上り部の上端は丸く納める。端面沈線。内面横ｹｽﾞﾘ、	石英等極多、角閃石・雲母　搬入品	４区ＳＤ１６ｆ溝
讃岐	870	小形器台	細・多	にぶい黄褐色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は内外に摘み出す。端面・外面凹線。	角閃石・石英等多　搬入品	４区ＳＤ１６ｆ溝
讃岐	896	小形器台	粗・多	赤色	脚裾部は強く外反して開く。脚端部は上部を小さく突出して四角く納める。外面・端面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	石英等多　搬入品	４区ＳＤ１６ｆ溝
讃岐	907	大形鉢？	細・極多、中・多	灰黄色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部ほぼ直立。端部は外方に引き出し内方も突出。端面凹線、外面横ﾅﾃﾞ、内面口縁部横ﾅﾃﾞ、以下横ﾊｹ。	角閃石多、石英等多　搬入品？	４区ＳＤ１６ｆ溝
讃岐	908	大形鉢	細・多、中・多	浅黄色	中位で強く屈曲し鈍い段。上半部短く内傾。端部は外方に引き出すと共に内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部横ﾐｶﾞｷ。	雲母・角閃石・石英等多　搬入品？	４区ＳＤ１６ｆ溝
讃岐	917	大形鉢	細・極多、中・多	明黄褐色　にぶい黄色	緩く屈曲して口縁部は内傾する。端部は鈍く外方に摘み出す。口縁部外面凹線、内面屈曲部横ﾊｹ後横ﾐｶﾞｷ、下半部放射状ﾐｶﾞｷ。	雲母極多、角閃石・石英等多　搬入品	４区ＳＤ１６ｆ溝
讃岐	1193	大形甕	細・多、中・多	にぶい橙色　浅黄色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚して上下に摘む。端面凹線。外面縦ﾊｹ後横ﾐｶﾞｷ、内面下半部縦ｹｽﾞﾘ後上半部指押さえ。	角閃石多、石英等多　搬入品？	４区ＳＫ０２
讃岐	1237	甕	細多、中・多	にぶい黄褐色	不明瞭に内傾する頸部からゆるやかに折り返して口縁部は短く開く。端部は肥厚しつつ上下に摘み出し端面に凹線。	石英等多、雲母少　搬入品	４区ＳＫ０４
讃岐	1239	大形鉢	細・少、粗・多	橙色　浅黄色	中位で屈曲して上部はやや外傾する。端部は外方に大きく引き出すと共に内方も突出して頂部に広い平坦面。屈曲部は鈍い段。上半部横ﾅﾃﾞ下半部外面横ﾊｹ・横ｹｽﾞﾘ後放射状ﾐｶﾞｷ、内面放射状ﾐｶﾞｷ	石英等多、角閃石・雲母少　搬入品	４区ＳＫ０４
讃岐	1258	甕	細・多	赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端	角閃石・石英等多	４区ＳＫ０

第27表　１・４区「搬入」土器一覧（１）

系統		器種	胎土	色調	形態上の特徴など	備考	出土遺構
					部は外方に引き出すと共に上方にも突出して端面に鈍い凹線。	搬入品？	5
讃岐	1269	高坏	細・普、粗・多	明赤褐色	脚端部は肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上方にも大きく突出する。裾部に細い垂下沈線。	石英等多、角閃石・赤色粒　搬入品	4区SK05
讃岐	1285	広口壺	細・少、中・多	橙色	口縁部はほぼ直立する頸部から緩やかに外反する。端部は肥厚しつつ小さく上下に摘み、端面に凹線2条。頸部凹線。	石英等多、角閃石少　搬入品？	4区SK06
讃岐	1287	甕	細・少、粗・多	橙色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は肥厚しつつ上下に摘み出し端面に凹線。	石英等多、角閃石少　搬入品？	4区SK06
讃岐	1329	甕	細・多、中・多	明赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚して強く摘み上げる。端面櫛描沈線。肩部内面上端まで横ｹｽﾞﾘ。	石英等・雲母多、角閃石少　搬入品	4区SP10
讃岐	1437	小形器台	細・少、中・多	褐灰色	脚裾部は外反して大きく開く。端部は四角く納める。裾部凹線。軸部に長方形透かし。	石英等多、角閃石少　搬入品？	4区その他
阿波	46	甕？	粗・普	明褐灰色	底部縁辺が張り出してわずかに窪み底状。外面下端に指押さえ。	片岩　搬入品	4区SH05
阿波	47	甕	中・普	浅黄橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は摘み上げて、狭い端面に凹線1条、内面指押さえ。	片岩・赤色粒　搬入品	4区SH05
阿波	62	壺	中・普	橙色	口縁部は鈍く外反して開き四角く納める	片岩　搬入品	1区SD09
阿波	803	甕	細・少	灰白色	口縁部は強く折り返して短い。端部は四角く納める。外面縦ﾊｹ。	片岩少　搬入品	4区SD16ｆ溝
阿波	1145	甕	細・極多、中・普	暗灰黄色	体部最大径低い。口縁部は強く折り返して直線的に開く。端部は小さく摘み上げると共に下方もやや張る。	雲母・片岩　搬入品	4区SK01
阿波	1196	直口壺	粗・普	橙色	口頸部はやや外反して立ち上がり端部は四角く納める。口縁部直下に不明瞭な凹線1条。	石英等　搬入品　片岩？	4区SK03
吉備	87	直口壺	中・多	橙色　浅黄色	口頸部はやや外反気味に立ち上がり端部は外方に強く摘み出すと共に内方も突出して頂部に凹線と円形刺突文。	石英等多　搬入品	4区SD06
吉備	186	直口壺	細・極多	暗灰黄色	口頸部は僅かに開き気味に立ち上がる。端部は鈍く肥厚して内外に小さく摘む。端面凹線。外面凹線、頸基部に刺突文。	雲母極多、角閃石多　搬入品？	4区SD08
吉備	187	直口壺	細・少	灰白色	短い口頸部はやや開き気味に立ち上がる。端部は外方に鈍く摘み出し、内方も突出。端部・外面凹線、内面指押さえ。	石英等少　搬入品	4区SD08
吉備	284	甕	細・少、粗・普	灰白色	緩やかに折り返した口縁部は短く端部は四角く納める。	石英等、赤色粒少　搬入品	4区SD08
吉備	285	甕	細・多、中・普	灰白色	緩やかに折り返した口縁部は短く端部は四角く納める。内面上端まで横ｹｽﾞﾘ	赤色粒多、石英等　搬入品	4区SD08

第28表　1・4区「搬入」土器一覧（2）

系統		器種	胎土	色調	形態上の特徴など	備考	出土遺構
					。		
吉備	289	甕	粗・多	灰白色	強く張った肩部から口縁部は緩やかに折り返し、端部は外方に摘み出しつつ上方も突出。内面肩部上端まで横ｹｽﾞﾘ。	石英等多　搬入品	4区SD08
吉備	293	甕	細・少	灰白色	張りの弱い体部から強く折り返した口縁部は短いが水平に開く。端部は小さく上方に摘み出す。内面横ｹｽﾞﾘ。	石英等少　搬入品	4区SD08
吉備	420	大形器台？	細・中、粗・多	灰黄色	口縁部は大きく水平に開き、端部は強く上下に摘み出す。端面鈍い凹線後２段に配した円形刺突文。口縁部外面短刻線。	石英等多、角閃石少　搬入品	4区SD08
吉備	435	大形器台	中・多	灰白色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は強く外方に引き出し、上部も突出。端面凹線、外面縦ﾊｹ。裾部は緩やかに外反して開き、脚端部は小さく折り返して外方にのびる。裾部凹線。中位外面縦ﾊｹ後篦描並行沈線２段、中型円形透かし２段。内面指押さえ。	石英等多、赤色粒　搬入品	4区SD08
吉備	627	広口壺	中・多	灰白色	やや外反気味に立ち上がる頸部から緩やかに折り返して口縁部は短く開く。端部は上方に摘み出すと共に下方も強く張り出す。端面凹線。頸部外面縦ﾊｹ後並行沈線、内面横ﾊｹ後部分的に横ﾐｶﾞｷ。	石英等多、赤色粒　搬入品	4区SD16d・e溝
吉備	630	広口壺	中・多	灰白色	口頸部はやや外傾して立ち上がり、口縁端部は短く外方に折り返して丸く納める。	石英等多　搬入品	4区SD16d・e溝
吉備	667	脚	中・普	黄橙色	脚裾部は緩やかに開き端部は鈍く肥厚しつつ上方に摘み出す。端面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	赤色粒・石英等　搬入品	4区SD16d・e溝
吉備	723	直口壺	細・多	浅黄色	口頸部は外反気味に立ち上がり、端部は外方に鈍く摘み出し内方も突出。外面凹線。内面下半部指押さえ。	石英等多　搬入品	4区SD16f溝
吉備	726	直口壺	細・普	灰白色	口頸部は緩く外反して立ち上がり、端部は外方に小さく摘み出すと共に内方も突出。頸部外面横ﾊｹ、他横ﾅﾃﾞ。	赤色粒・石英等　搬入品	4区SD16f溝
吉備	738	広口壺	中・多	灰黄色	やや外傾する頸部から口縁部は強く折り返して短い。端部は下方に摘み出して上部も小さく突出。端面凹線。頸部外面篦描並行沈線。	石英等多　搬入品	4区SD16f溝
吉備	851	脚	中・多	にぶい黄色	脚裾部は緩やかに外反して開く。端部は上下に小さく摘む。内面横ｹｽﾞﾘ。櫛描並行沈線３段と櫛描垂下沈線	石英等多、火山ガラス？搬入品	4区SD16f溝
吉備	853	脚	細・普	灰白色	脚裾部を大きく開く。端部は鈍く肥厚しつつ上部を外方に強く摘み出す。外面垂下沈線。内面横ｹｽﾞﾘ。	石英等　搬入品	4区SD16f溝
吉備	854	脚	細・普	明褐灰色	脚裾部は強く外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ上部を外方に摘み出す。	石英等　搬入品	4区SD16f溝

第29表　１・４区「搬入」土器　（３）

系統		器種	胎土	色調	形態上の特徴など	備考	出土遺構
					裾部に円形刺突文。内面横ケズリ。		
吉備	1255	直口壺	細・少、粗・多	黄橙色	ほぼ直立する頸部、口縁部は短く折り返して端部を外方に引き出すと共に上方に小さく突出。強く内傾する端面と頸部に凹線。	石英等多、角閃石・雲母少　搬入品	4区SK05
吉備	1288	脚	中・多	灰白色	脚裾部は強く開き、鈍く肥厚し端上部は外方に強く突出する。内面横ケズリで円形透かし。	石英等多　搬入品	4区SK06
西部瀬戸内	229	広口壺	中・多	灰白色	よく張った体部から口頸部はやや外反気味に大きく開き、端部は鈍く肥厚して上方に大きく摘み出す。端面凹線、頸基部に頂部に横位の「ハ」字状押圧を加えた突帯1条。体部内面散漫な指押さえ。	石英等多　搬入品	4区SD08
西部瀬戸内	231	広口壺	中・多	灰白色	太めの短い口頸部は緩やかに外反して開きやや肥厚した口縁部で小さく屈曲して直立する。上端は四角く納め、屈曲部は下方に摘み出す。端面凹線、外面縦ハケ後ハケ原体刺突。内面横ナデ。	石英等多　搬入品	4区SD08
西部瀬戸内	232	壺	細・極多	黄橙色	長胴形の体部で最大径は低い。体上半部二は低い突帯を連続的に付しその間を強くなでる。内面ナデ調整で上端部に指押さえ。	雲母・石英等極多　搬入品	4区SD08
西部瀬戸内	678	脚	中・多、粗・少	橙色	強く絞り込んだ細身の軸部。櫛描並行沈線。円盤充填	石英等多、赤色粒　搬入品	4区SD16d・e溝
西部瀬戸内	740	広口壺	中・多	灰黄色	口縁部は強く外反して開く。端部は大きく外方に引き出し上方も突出。端面凹線。口頸部横ナデ、体部外面縦ハケ、内面上端まで横ケズリ。	石英等多　搬入品	4区SD16f溝
西部瀬戸内	749	壺	細・極多、中・普、粗・少	浅黄橙色	口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は肥厚しつつ内方に小さく摘み気味に四角く納める。端面凹線。肩上部刺突文。外面ナデ、内面縦ケズリ。	搬入品	4区SD16f溝
西部瀬戸内	805	甕	中・多	灰白色	口縁部は強く折り返し外反して開く。端部丸く納める。外面斜ハケ。内面上端まで横ケズリ。	石英等多　搬入品	4区SD16f溝
西部瀬戸内	1030	壺	細・少、中・多	橙色	口縁部は強く開き、端部は上下に張り気味に四角く納める。端面に「ハ」字状の短刻線。外面縦ハケ後ナデ。	石英等多、角閃石少量　搬入品	4区SD17上層
?	207	広口壺	細・中	浅黄橙色	短い口頸部は緩く開いて立ち上がり、端部は下方に摘み出し、上部も小さく突出。端面横位の「ハ」字状刺突文。横ナデ。	石英等・赤色粒　搬入品	4区SD08
?	214	広口壺	中・多	灰白色	やや開き気味の頸部から緩く折り返して短い口縁部をなす。端部は肥厚して上下に張り出す。端面鈍い凹線、頸部外面並行沈線。外面横ナデ。	石英等多　搬入品	4区SD08
?	241	朝鮮系無文土器?	中・普	浅黄橙色	口縁端部は粘土帯を付して断面隅丸方形に肥厚する。外面わずかに指押さえ	石英等　搬入品　朝鮮系無文土器?	4区SD08

第30表　1・4区「搬入」土器一覧（4）

系統		器種	胎土	色調	形態上の特徴など	備考	出土遺構
					。		
?	242	壺	細・少、中・普	橙色	口頸部は緩やかに外反して開き、端部は丸く納める。	石英等、角閃石少　搬入品	4区SD08
?	363	脚	細・多、中・多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚しつつ下方に摘み出し、上端も外方に突出。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。小形の円形透かし。	石英等多、角閃石多　搬入品？	4区SD08
?	418	大形器台？	中・多	浅黄橙色	小型の断面矩形の突帯を付す。突帯下に山形文・並行沈線を組み合わせた網目状の文様をめぐらす。内面指押さえ。	石英等、赤色粒多　搬入品	4区SD08
?	437	器台	細・普、中・多	浅黄橙色	脚部の開ききわめて弱い。端部はやや肥厚し外方に張り気味に四角く納める。裾部下端凹線。内面中位指押さえ。	石英等多、赤色粒　搬入品	4区SD08
?	476	直口壺？	細・多、中・多	にぶい黄橙色	横位の環状把手、断面隅丸方形状、把手は体部に差し込み固定する。直口形態の壺肩部か	雲母・石英等多　搬入品	4区SD08
?	638	二重口縁壺	細・極多	明黄褐色	二重口縁。短く直立する頸部から強く折り返して口縁部は短く水平に開く。立上り部は強く外反して開き下端に鈍い段。頸部外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。	雲母極多、角閃石多　搬入品	4区SD16d・e溝
?	639	広口壺	細・少、中・多	にぶい橙色	複段口縁。外傾する頸部から強く折り返して下段の口縁部は水平に短く開く。端部は下方に摘み出すと共に上方も突出。上段口頸部は折り返し部から緩く反り気味に立ち上がり端部は外方に摘み出して頂部凹線。	石英等多、赤色粒・角閃石少　搬入品	4区SD16d・e溝
?	703	鉢？	細・極多	灰黄褐色　灰黄色	器種不明。広口皿把手部か。立ち上がり部下縁を鈍く摘み出すのみ。やや外傾する立ち上がり部上半剝落。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。やや上げ底状の鉢底部の可能性も。	石英等・角閃石多　赤色顔料　搬入品？	4区SD16d・e溝
?	750	広口壺	細・極多、中・多	灰黄褐色	短く外傾する頸部から緩く折り返した口縁部は短い。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。端面凹線・２段に配した円形刺突文	角閃石極多、石英等多　搬入品？	4区SD16f溝
?	806	甕	細・普	淡黄色	口縁部は強く折り返して開く。端部は上方に摘み気味に四角く納める。	石英等　搬入品	4区SD16f溝
?	201	直口壺	中・普	黄灰色	短い口頸部は緩やかに外反して立ち上がり、端部は内外に張り出す。頸部内面に７個１対の小刺突文。体部外面縦ｹｽﾞﾘ、内面上端まで横ｹｽﾞﾘ。	石英等　搬入品	4区SD08
?	13	甕	細・多	にぶい黄橙色	二重口縁。口縁部は強く折り返し短く開く。立ち上がり部はやや内傾し薄く伸びる。端部丸く納める。立上り部外面剝落。	石英等多、角閃石少　搬入品（吉備系）	1区SD01
?	1263	壺？	中・多	黄灰色　灰白色	やや上げ底状の底部で、体部の張りは弱い。外面縦ﾐｶﾞｷ下端部指押さえ内面は強くｹｽﾞﾘ込む。	石英等多　搬入品	4区SK05

第31表　１・４区「搬入」土器　一覧（５）

系統		器種	胎土	色調	形態上の特徴など	備考	出土遺構
?	1270	脚	細・普、粗・多	橙色	裾部は緩やかに外反して開く。端部は上下に摘み出して幅広の端面に沈線。外面縦ﾊｹ、内面横ｹｽﾞﾘ。円形透かしを２段に配す。	石英等多、角閃石 搬入品	４区ＳＫ０５
?	1198	直口壺	中・多	淡橙色	最大径の高い肩の張った体部から口頸部はやや外反して短い。端部は丸く納める。肩部内面指押さえ顕著で接合痕よく残す。	石英等・赤色粒多 搬入品	４区ＳＫ０３
?	1297	把手付小形鉢	細・少	灰白色	突出気味の底部から内湾気味に立ち上がる体部の開きは弱い。端部は丸く納める。縦位の環状把手の剝落痕。	石英等・赤色粒少 搬入品	４区ＳＫ０８
?	1356	直口壺	中・多	にぶい黄橙色	弱く外反する頸部は短い。端部は内外に張り気味に四角く納める。	石英等多 搬入品	４区撹乱土坑群
?	1326	甕	中・普	黄橙色 橙色	口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は鈍く肥厚して四角く納める端面櫛描沈線。肩部内面縦ﾊｹ後横ﾊｹ。	石英等 搬入品	４区ＳＰ０５
?	1330	?	細・少、中・多普、粗・普	橙色	縁辺部を薄く摘み出す粗雑な上げ底。底部内外面指押さえ。体部内面縦ｹｽﾞﾘ後指押さえ。	石英等・赤色粒多、角閃石少 搬入品	４区柱穴
?	1332	脚	細・少、中・多	明赤褐色	脚端部は鈍く肥厚して外方に張り出す。	石英等多、角閃石少 搬入品	４区ＳＰ０９
?	1376	壺	中・多	灰白色	肩上端部に篦描沈線２条。	石英等多 搬入品	４区ＳＤ０２
?	1133	?	細・多、中・多	黄橙色	体部はよく開く。	石英等多、角閃石・雲母少 搬入品	４区ＳＤ２０
?	1051	大形器台	中・多、粗・多	浅黄橙色	脚裾部は強く開き、端部は肥厚して下方に小さく張る。	石英等・赤色粒多 搬入品	４区ＳＤ１７上層

第32表　１・４区「搬入」土器 一覧（６）

（１） 後期中葉段階に，胎土のみならず形態・組成の点でも極めて独自性の強い下川津Ｂ類土器が，この地域の土器様式として成立する。下川津Ｂ類土器は，鉢形土器が小形供膳形態を代表する阿讃地方にあって，最後まで高坏が多量に伴う等の組成上の特徴と，高坏における円盤充填法と坏部分割篦ミガキ法，甕形土器の外面下半篦ミガキ，および凹線文など後期初頭段階までに盛興する諸技法の固執および全般的に精緻な薄作りを特徴とする。さらに本章第２節で示したように後期初頭段階には器種及び各器種の形態の多様性が顕著であるが，下川津Ｂ類土器では器種の淘汰と各器種の画一性がいち早く認められる点も重要な特色である。

（２）大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター１９９０

(3)角閃石細粒を多量に含む。三辻分析（註6文献），白石分析（本書第4章），奥田観察（註5文献）参照

(4)森下友子「胎土1類土器について」『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター1994

(5)奥田尚「太田下・須川遺跡の砂礫」『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター1994

(6)三辻利一「下川津遺跡出土土器の蛍光X線分析」『下川津遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター1990

(7)本書第4章2節白石純報告参照

(8)註4文献

(9)註4文献で森下氏が時期別の出現頻度を示している。しかし森下氏と筆者とで土器編年観に一定の差異があるため，筆者が註4文献「土器観察表」を参考に資料の一部を実見して確認したものである。

(10)表採資料の観察に基づく。

(11)表採資料および下笠居小学校所蔵資料の観察に基づく。

(12)註2文献

(13)註9と同様の理由で筆者が新たに集計した数値である。以下太田下・須川遺跡データについては同様の分析結果である。

(14)山元敏裕他『浴・松ノ木遺跡』高松市教育委員会1994

(15)註2文献

(16)宮崎哲治『林・坊城遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター1993掲載資料を筆者が実見して算定した。

(17)森格也「前田東・中村遺跡の弥生時代中期から後期の土器について」『前田東・中村遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター1995で出現頻度の集計を示している。しかしここで示した数値は，遺物観察表を参考に，筆者の土器編年観に基づき算出したものである。

(18)註2文献

(19)註2文献

(20)註2文献

(21)調査担当の蔵本晋司氏のご教示による。

(22)本書第4章第2節　白石純報告

(23)都出比呂志「弥生土器の地域性」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店１９８９

上記論文で都出氏は土器の移動（の契機と様相）を主として貯蔵形態の移動（容器・運搬具としての移動を反映），セットでの移動（人間の移動反映），庄内甕に見られる「商品」としての移動，墳墓供献土器，土器棺の移動（葬送儀礼に伴う移動）の4種類に類型化して示し，A類型では搬入土器の比率を１～３％，B類型では大阪府四つ池遺跡例などの３～10％の比率を示している。

同論文では拙論で検討する資料よりマクロな，河内から和泉あるいは河内から摂津というように旧国単位かそれに準ずる単位間での移動を分析しており，ここで示された搬入率は直接的に対比することは困難であるが，移動の類型化と共に重要な分析である。

(24)林慎二・谷匡人『土成町北原遺跡』徳島県教育委員会１９８８

(25)たとえば，後期末段階の庄内式土器の搬入量は極めて乏しいし，またその技術的影響もかなり微弱である。

(26)後期初頭段階に限っても，形態及び胎土の点から香東川下流地域産と見られる資料が大阪府芥川遺跡（直口壷A），亀井遺跡（高坏A），巨摩遺跡（高坏A）等にある。

第6節　上天神遺跡の他系統「在地」土器

1．はじめに

第2節で示したように，上天神遺跡における後期初頭段階の土器組成は極めて変化に富んだ多様な内容から成り立っている。たとえば壷類では，主要な形態だけでも広口壷・直口壷など大別5種，細別20種類前後となる。甕，高坏でも各々細別5種，6種を数える。この全てが各大別器種内での細かい機能分化に基づく形態の多様性だけで解釈しうるものではない。また第3節で簡単に見たように，その全てが上天神遺跡資料の直前段階，すなわち中期末葉段階までに本地方において準備された形態の漸移的変化の結果ではない。一定量の他地方からの影響を想定しなければならない。

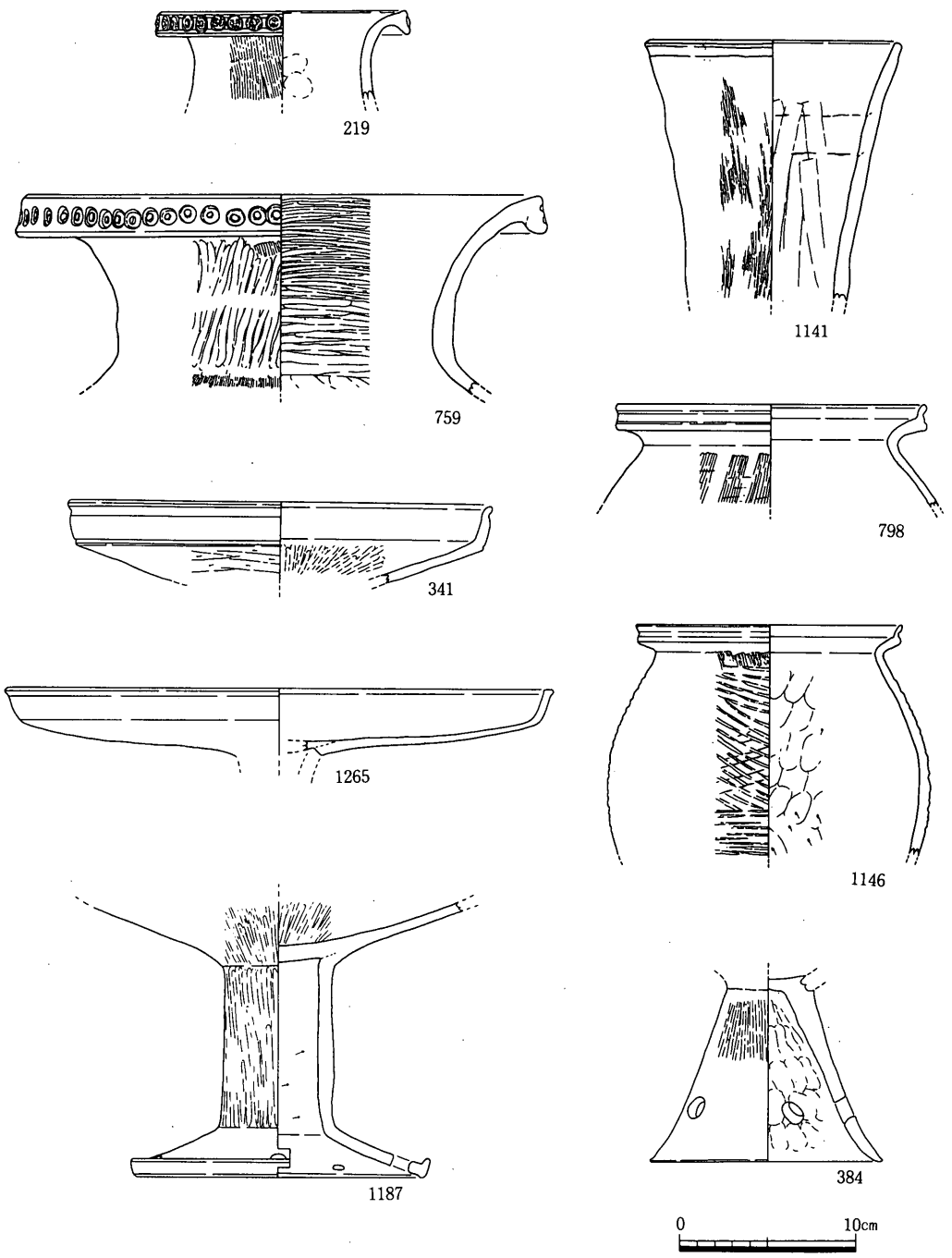
ここで検討するのは，第5節で規定した搬入品を除外したもの，つまり角閃石細粒を多量に含む「胎土1類」に比定できる資料ですでに見たように上天神及び周辺で製作された蓋然性が高いものの，形態・製作技法の上で明らかに他地方の影響を指摘できる土器である。それらについてここでは他系統「在地」土器と称する。

2．他系統「在地」土器の構成

本地方の伝統的形態・製作技法とは距離をおいた形態は多くの大別器種にまたがって確認できる。以下列記すると広口壷D類，直口壷G類，甕D・E類，高坏D・E類，脚B～D類，把手付鉢A・B類である。これらはいずれも近畿地方において発展した形態である。細頸壷，装飾高坏も中期末葉以前に全く祖形的形態が確認できず，かえって上天神遺跡資料段階と同時期かやや先行する時期に近畿地方に同系統の形態を認めるので，これに含めるべきかもしれない。また直口壷B類や甕B類は先行する段階から少例ずつ認められるが，むしろ吉備南部地方で盛行する形態である。

さてこれらの一群は施文その他について他系統の要素を部分的に導入したというにはとどまらない際だった全体的特徴を有している。例えば，高坏D類は形態的な点に関わらず，調整手法の面でも主流的な高坏A類などが内外面分割篦ミガキ仕上げを厳密に守ることに対して，放射状ミガキを専らとする。

また脚D・E類は円柱状の軸部と強く開く裾部を持ち，この特徴的な形態は近畿地方で弥生中期後半から認められるものであるが，本地方には先行する時期に類似した形態はないので，この点だけからも近畿地方系の型式であることが容易に推定される。さらに調整



第481図　近畿地方系統の「在地」土器

手法などの点でも，主流的な脚A類が内面の強い横ケズリ仕上げを原則とするのに対して，この類型では多くの場合それを欠くし，裾部の円形透かしが針穴状の小形透かしであるのに対して，やや大形の透かし孔を穿つことを原則とする。

特徴的な垂下口縁形態の広口壷D類も，単に形態的な類似にとどまらず調整面においても特徴を示す。他の広口壷諸形態が，おそらく凹線文の多用と密接に関係して，横ナデ調整によって仕上げることが多いにも関わらず，この類型ではやや幅広い縦ミガキ調整を多くみる。

同様に甕D・E類も特徴的な口縁部形態に限らず，体部形態や内外面の調整に至るまで主流的な甕A類，あるいはC類と大きく異なる。

器種	系統	数量	構成比
広口壺A	(讃岐)	1.25	0.091
B	(讃岐)	3.88	0.283
C	(吉備？)	3.9	0.284
D	(近畿)	4.68	0.341
		13.71	
甕A	(讃岐)		
B	(吉備)	61.23	0.751
C	(吉備・讃岐)	13.5	0.166
D	(近畿)	5.37	0.066
E	(近畿)	1.42	0.017
		81.52	
高坏A	(吉備・讃岐)	29.01	0.657
B	(讃岐)	4.49	0.102
D	(近畿)	10.15	0.230
E	(近畿)	0.53	0.012
		44.18	
脚A	(吉備・讃岐)	22.51	0.639
B	(近畿)	3.33	0.094
C	(近畿)	7.91	0.224
D	(近畿？)	1.5	0.043
		35.25	

第33表　他系統「在地」土器の出現頻度

このようなかなり忠実な形態・技法の「模倣」は，一般論的に緊密な交流というだけではなく，本地方の伝統とは異なる別地方，特に近畿地方の土器製作技術を熟知した製作主体を想定しなければならないであろう。そして胎土の点から本域での製作を推定できる以上は，このことは人間の「移動」を予測しても構わないであろう。

2．他系統「在地」土器の数量

第33表は4区ＳＤ08資料を対象に，主要な形態に限って他系統「在地」土器の数量及び構成率を算定したものである。吉備南部地方，阿波地方など隣接地方とは全般的に諸器種の形態・製作技法で共通する部分が多く，彼我の技法上の厳密な差異を必ずしも抽出できていないので，ここで必ずしも十分な抽出を行えていないかもしれない。それを考慮しても近畿地方系統の資料が突出していることに注目できる。

壷・高坏では近畿地方の形態・技法を持つものが全体の3割前後を占める。甕類ではやや少ないものの7％に達する。また西部瀬戸内諸地方系統と推定される形態も大形の壷類で少量認められる（4-228）が比率的に問題しがたいほど些少である。

これら他系統「在地」土器は，第5節で示した「搬入」土器の構成率を凌駕する量に達している。したがって単に偶発的な現象でなく，一定数の人間の移動を想定してよいかもしれない。また「搬入」土器としては確認できなかった近畿地方系統の「模倣」が卓越することも注目できる。周辺諸地方との交渉が，一律的なものではなく多様なあり方を有していたこと，すなわち対象によっては，土器の移動に反映される交渉形態と，そうではない形態の交渉形態が存在した点で興味深いといえよう。

第7節　上天神遺跡における石器石材の搬入状況

1．石材別搬入量

上天神遺跡では比較的多量の石器・石製品を確認している。その器種組成などの詳細については第1節において分析している。ここでは最も出土量の多い4区を対象にして，未製品・剥片類を含めた石器石材の全般的な搬入量を簡単に整理しておきたい。第34～36表は4区主要遺構別にサヌカイト・片岩・安山岩系石材の出土重量を示したものである。

製品及び剥片類を合わせた搬入総量は約21kgに達する。うち縄文晩期資料が多数含まれるＳＤ07・17の両遺構を除くと，すなわち弥生後期初頭にほぼ限定される資料で14.3kgとなる。サヌカイトは約10.6kgで74%を占め，片岩・安山岩系統が各々約2.5kgで17.5%，約1.2kgで8.5%となる。ちなみにＳＤ07・17資料ではサヌカイト約5.9kg，安山岩系統約0.6kg，片岩0.2kgを計る。両資料は縄文時代晩期を主体とするものの一定量の弥生後期資料を交えている。このことを考慮すると，サヌカイトと安山岩系統石材の搬入量比は縄文晩期と弥生後期とで差異が見られないが，晩期段階には片岩搬入量は著しく乏しいことが予測される。

有力な産出地，坂出市金山からわずか15kmに位置することからサヌカイト搬入量が極めて高率であることは極めて理解しやすい現象である。また安山岩系統と一括した石材も，石清尾山山塊など周辺丘陵部で容易に採取できるものである。しかし片岩系統石材の産出地は，上天神遺跡から最も近くても，直線距離で30km強を測り，阿讃山地を越えた徳島県吉野川流域中流域に求めざるを得ない。にもかかわらず，弥生時代後期初頭段階には総搬入量の2割弱に達することは注目できる。

なお片岩系石材の用途に注目すると，磨製石斧類がほぼ消滅過程にある弥生後期段階では多くは打製石庖丁に加工されている。ちなみに4区出土石庖丁56点中に，片岩14点，安山岩4点が含まれ，片岩製品が1／4を占める。磨製石斧類は蛤刃石斧を除き，機能上やや軟質の片岩系石材が多用される傾向にあるが，打製石庖丁では機能上の理由から片岩系石材利用の必然性を想定しにくいことは明らかである。

2．石材別製品率

ついで石材別の製品・剥片類（素材を含む）の重量比，すなわち搬入された石材の製品化率に注意しておきたい。もっともここで非製品と見なす資料は素材および製作途上に排

出される残滓に限らず，一定程度の製品「片」を含むであろうがおおよその傾向は反映されると考える。サヌカイトの場合，製品は搬入総重量の35%にとどまる。残りの65%は素材および製作過程で排出される残滓等からなる。ところが片岩では製品率はサヌカイトの2倍の69%に達する。なお安山岩系石材でも64%で片岩に近い。

このことは上天神遺跡においては，片岩系石材はサヌカイトに比べ，相対的に完成度の高い状態か製品として搬入されることが多いことを示すであろう。

こうした格差が石材産出地との距離に関係するものであるのか，全般的なサヌカイト生産・流通体制と片岩系石材のそれの差異を反映するものであるのかは今後の検証を必要とするであろう。

地区名	遺構名称	剝片重量	製品重量(g)	総計(g)	製品率
4区	SH04		15.2	15.2	1
4区	SD02	10.4		10.4	0
4区	SD04		130.9	130.9	1
4区	SD07	42.0		42	0
4区	SD08	202.5	103.2	305.7	0.34
4区	SD16	11.2		11.2	0
4区	SD17	331.7	240.1	571.8	0.42
4区	攪乱土坑	4.3		4.3	0
4区	包含層	42.0	682.9	724.9	0.94
	安山岩　計	644.1	1172.3	1816.4	0.65

第34表　安山岩系統石材搬入量

地区名	遺構名称	剥片重量	製品重量(g)	総計(g)	製品率
4区	SH01	81.3	16.6	97.9	0.17
4区	SH02	2.4		2.4	0
4区	SH05	27.5		27.5	0
4区	SB09	25.6		25.6	0
4区	SB15	12.8		12.8	0
4区	SD01	11.7		11.7	0
4区	SD02	393.8	382.9	776.7	0.49
4区	SD04	471.4		471.4	0
4区	SD05	135.6	238	373.6	0.64
4区	SD06	72	28.2	100.2	0.28
4区	SD07	1779.9	1043.4	2823.3	0.37
4区	SD08	964.4	789.3	1753.7	0.45
4区	SD09	4.5		4.5	0
4区	SD11	12.1		12.1	0
4区	SD16	2182.7	1085.7	3268.4	0.33
4区	SD17	2405.5	651.4	3056.9	0.21
4区	SD18	48.1		48.1	0
4区	SD19	210.3		210.3	0
4区	SD20	3.4		3.4	0
4区	SK01	80.3	10.4	90.7	0.11
4区	SK03	4.5		4.5	0
4区	SK05	66.6	26.3	92.9	0.28
4区	SK06	24.7		24.7	0
4区	SK07	87.6		87.6	0
4区	包含層・他	1626.2	1489.8	3116.0	0.48
	サヌカイト　計	10734.9	5762.0	16496.9	0.35

第35表　サヌカイト搬入量

地区名	遺構名称	剝片重量	製品重量(g)	総計(g)	製品率
4区	SH03		16.7	16.7	1
4区	SH04	2.3		2.3	0
4区	SD07	214.1		214.1	0
4区	SD08	218.4	31.4	249.8	0.13
4区	SD16	282.9	978.4	1261.3	0.78
4区	SK01		206.4	206.4	1
4区	SK08		386.9	386.9	1
4区	SK09		58.4	58.4	1
4区	SK17	12.2		12.2	0
4区	包含層・他	94.8	168.5	263.3	0.64
	片岩　計	824.7	1846.7	2671.4	0.69

第36表　片岩系統石材搬入量

3．集落単位間の格差について

上記したのと同様の分析は現在までのところ，本地域では試みられていないので，直接的な比較データはない。代わりに片岩製打製石庖丁の出土量で周辺遺跡の様相を見ておきたい。上記したように打製石庖丁の場合，他器種ほど機能上の理由によって厳密な石材の選択がなされたとは見なしがたいからである。むしろ獲得の容易さによってそれが選択されたと見てよいであろう。

隣接する後期初頭～前葉の太田下・須川遺跡資料[1]では打製石庖丁34例中4例のみが片岩製である。高松平野東縁に位置する久米池南遺跡[2]の中期末葉資料でも，片岩製打製石庖丁は20例中2例にすぎない。このほかの遺跡においても若干量の片岩製石庖丁を見ることはあっても，せいぜい1割弱にとどまり，上天神遺跡のように石庖丁の1／4を占める状態はない。このことから上天神遺跡における相対的に潤沢な片岩系石材の搬入状況は，当該時期前後の高松平野地域に普遍化できるものではなさそうである。

第9節で示したように上天神遺跡は散在する4個の集落単位からなるが，片岩製石庖丁14点を含む56点からなる4区資料の大部分は，集落単位3に該当するものである。他の3単位に相当する地点で確認した計15点の石庖丁は全てサヌカイト製であった。とすれば，片岩製品あるいは素材・半製品のまとまった搬入は，上天神遺跡でも集落単位3に限定的に見られる現象であるかもしれない。この問題は継続的に検討すべきであるが，集落単位

によって石器石材の獲得状況が異なる可能性が考えられる。換言すれば個別の「集落単位」が石器石材など，物資流通の主体として機能しうることを示唆するかもしれない。

（1）北山健一郎・森下友子他『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター１９９５

（2）藤井雄三・末光甲生他『久米池南遺跡』高松市教育委員会１９８９

第8節　上天神遺跡出土赤色顔料付着資料について

1．はじめに

上天神遺跡では赤色顔料の付着した土器を多量に検出した。しかし石器等、土器以外にこれの付着した資料は皆無である。付着土器は図化掲載した資料に限っても178個体を数える。本地方の弥生時代集落において，これほどまとまった赤色顔料付着資料を確認した例は現在までのところ認められない。うち40点について顔料種別などの分析を実施した。その詳細は第4章3節本田報告に示すように分析資料に付着した赤色を呈する付着物は水銀朱を主成分とすることが確認された。付着資料があまりに膨大な点数に達するため，今回はその全資料について分析を実施することは不可能であったが，上記した分析結果は本遺跡の赤色顔料付着資料全体に普遍化しうる可能性が高いと考えている。

また付着資料は弥生後期初頭段階に帰属しうるもので，明確に後期前葉以降あるいは中期末葉以前に比定しうるものはない。

以下では，上天神遺跡の赤色付着資料の器種構成・数量などについて簡単に整理しておく。

2．赤色顔料付着土器の種類

本遺跡では，赤色顔料の付着した石器類－石杵・石皿など－は一切出土していない。このことは本遺跡における赤色顔料の使用状況を考える点で重要である。

付着器種は大部分が，後に詳述する特殊な容器類－把手付広片口皿－と大形鉢であるが，少数例直口壷・広口壷・細頸壷・甕・高坏・装飾高坏・器台がある。

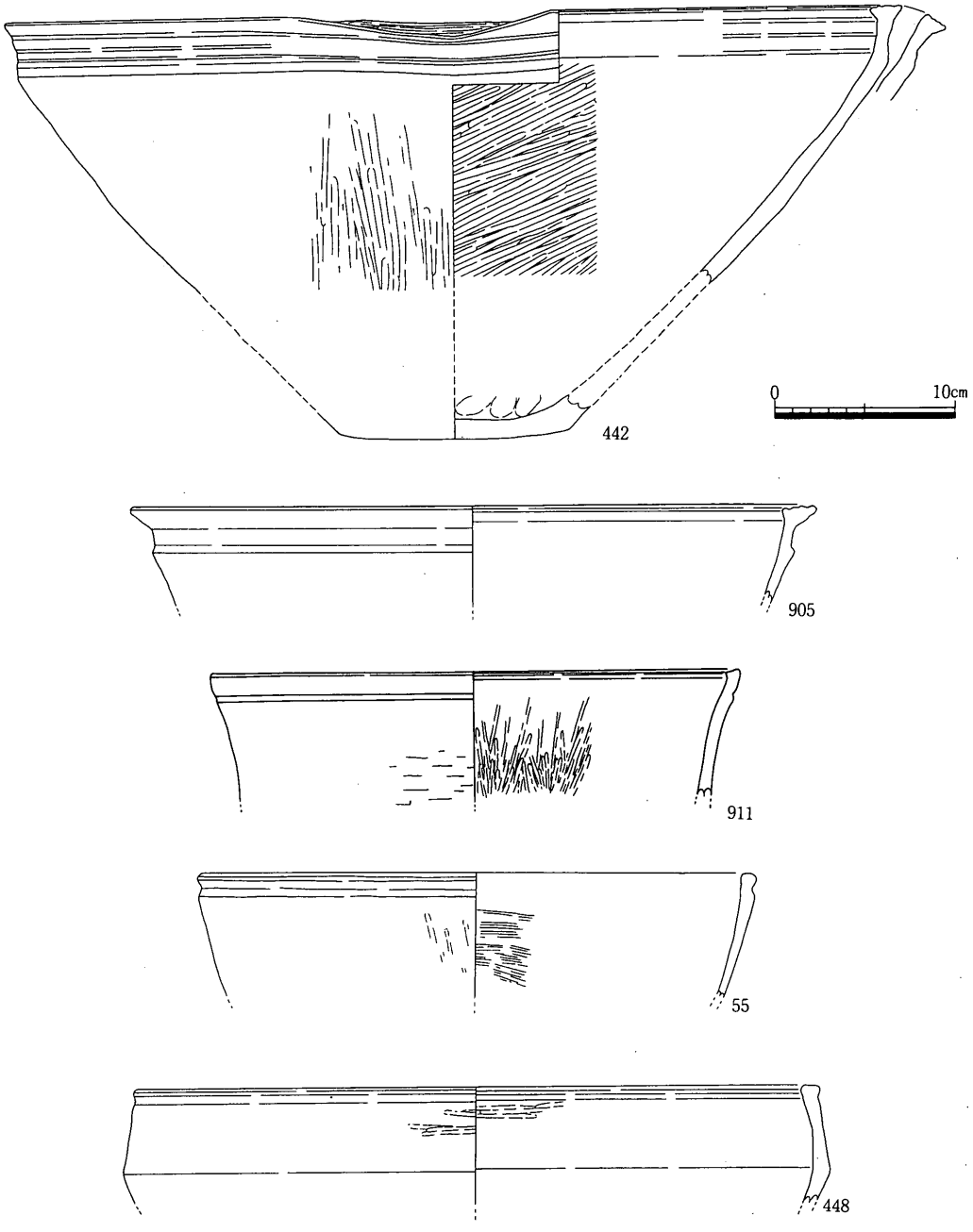
顔料の付着状況では①装飾的に外面に塗布した例，②土器内面に顔料が付着した例がある。

①には全面もしくは器表の比較的広い範囲に面的に塗布したと推定される例（4区－417・419大形器台など）と，列点・線状文などの彩文（3区－460・471等）があるが，いずれにしても例数は多くない。この一群では直口壷・細頸壷・高坏・装飾高坏・器台の各器種がある。

これらは彩色以外にも相対的に加飾の豊富な器種に偏って認められるので装飾的な顔料塗布と見なして問題なかろう。本地方における弥生土器の赤彩例，特に後期段階のそれについての出現頻度は将来的な検討課題であるが，現状では後期終末期以降の一部の墳墓資

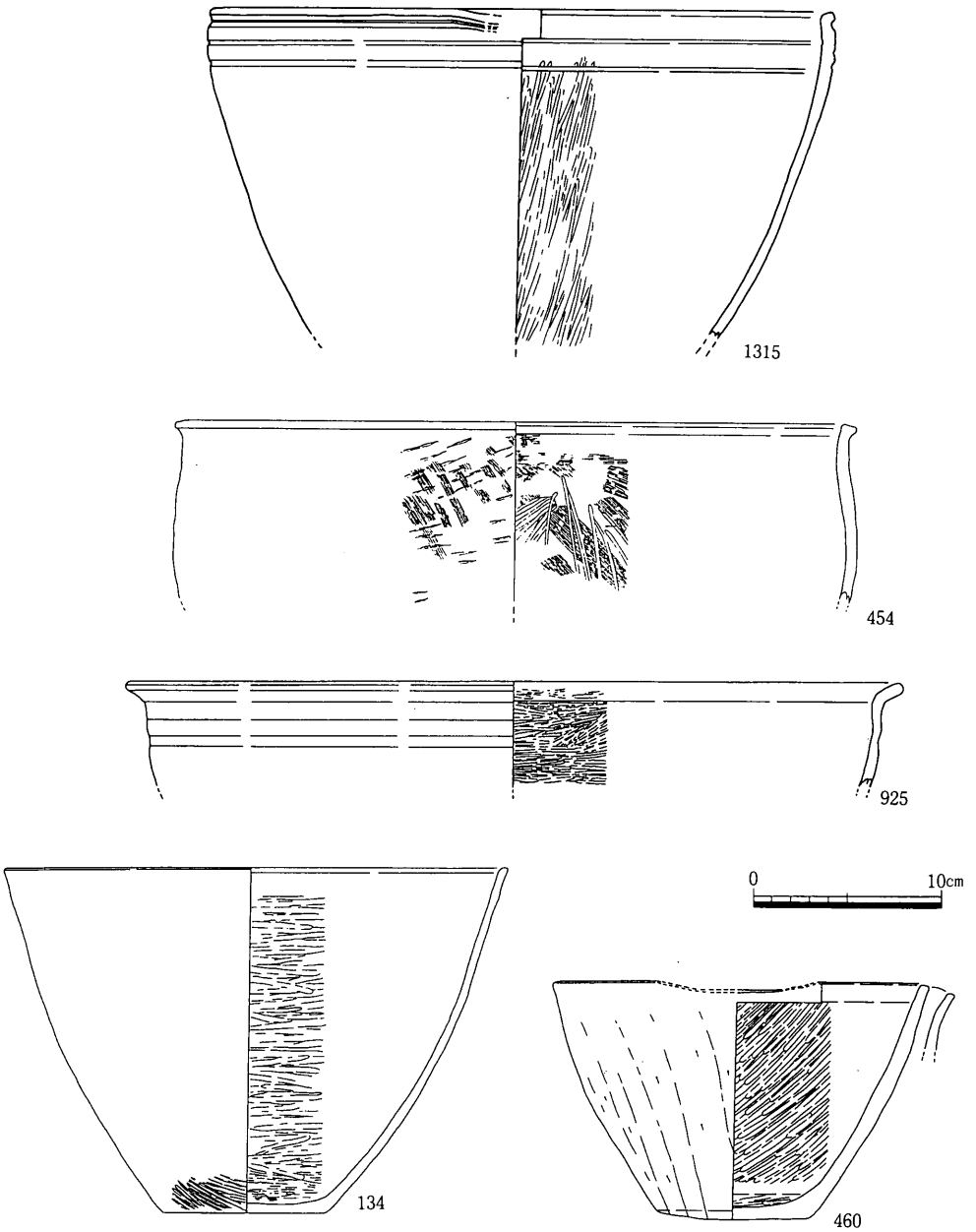
料を除いて一般的ではないと考えられる。上天神遺跡に隣接する太田下・須川遺跡[(1)]のほぼ同時期資料に彩文土器2例が認められる。

②は大部分が把手付広片口皿・大形鉢である。少数例認められる他器種の内面付着資料9例のうち，壷または甕体下半部片（3-445等）は破損後の付着も考慮する必要がある。



第482図　内面赤色顔料付着土器（1）

つまり壷・甕体部片を鉢として利用した可能性もある。しかし広口壷（3-304）甕（3-425）のように少数だが口縁部内面に顔料の付着を認める例も存在する。また甑と推定される有孔鉢底部片（3-505）の例も注意を要する。とはいえこれらが例外的な少数例であることには変わり無い。②資料についても小片が多く，器表の遺存状態も必ずしも良好ではないため付着状況の詳細な検討は難しいが，他遺跡例と同様に細かな亀裂を通じて器壁内部ま



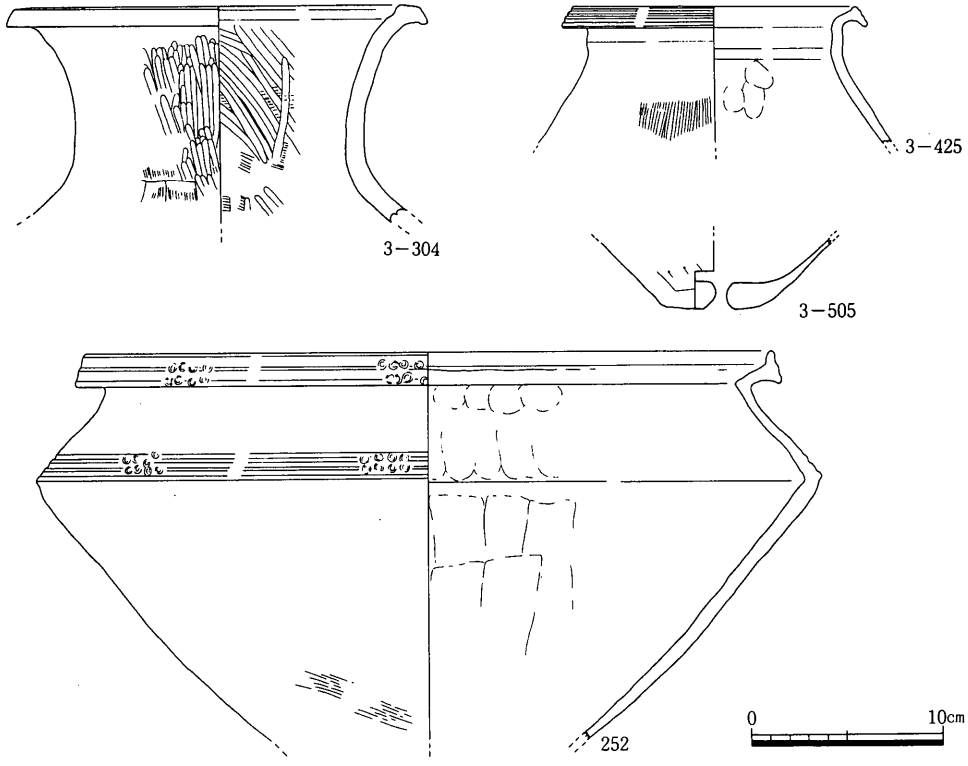
第483図　内面赤色顔料付着土器（2）

で顔料が浸透する事例が少なくないことから，液状の顔料が納められたものと推定できる。(2)

なお図化した赤色顔料付着資料178点のうち①外面塗布例は13点にすぎず，②内面付着例が165点と大部分を占める。

3．大形鉢

上天神遺跡では後期初頭段階に一定の形態差と法量差を備えた一群の大形鉢が存在する。これらは本章第2節で述べたように後期初頭段階に限っても主に口縁部形態の差異から9種類（大形鉢A～H類）に分類できる。しかしいずれも頸部で屈曲することなく口縁部は体部からそのまま開き，片口部を有する形態となる。液体の調合・分配に適した形態といえる。なお口縁部を肥厚・拡張するか凹線文などで加飾するA～G類は前後の時期にも類似した形態が見いだされるが，単純な直口口縁でやや深めのバケツ形を呈するH類は本地方の大形鉢としてはやや特異な形態といえる。酷似した形態で内面に朱の付着した資料が



第484図　内面赤色顔料付着土器（3）

福岡県野方中原遺跡[3]などで報告されていることは注意を要する。

また本章第5節で示したように大形鉢の器種構成比は，4区ＳＤ08で約3.5%，同ＳＤ16ｆ溝で2%を占め，大形器台にほぼ匹敵する。厳密な比較データに乏しいが，経験的に見てこの大形鉢の出現頻度はやや高いと思われる。

さて後期初頭段階の上記した大形鉢諸形態のうち，把手付鉢以外の全ての形態に顔料付着を確認している。肉眼観察では図化した大形鉢129例中55例に赤色顔料の付着を認めることができた。しかし全般的に資料の遺存状況が良好でなく図下資料にも器表面が剥落した個体が多い状況から推定して，本来顔料の付着した資料はさらに多かったものと考えられる。したがって本遺跡出土の大形鉢の主要な用途に赤色顔料に関連する行為があったことが想定できる。

しかし同様の理由から顔料の付着部位及び付着状況等の詳細な観察あるいは器表面の磨耗など大形鉢の使用方法に関する観察は困難であった。[4]

4．把手付広片口皿

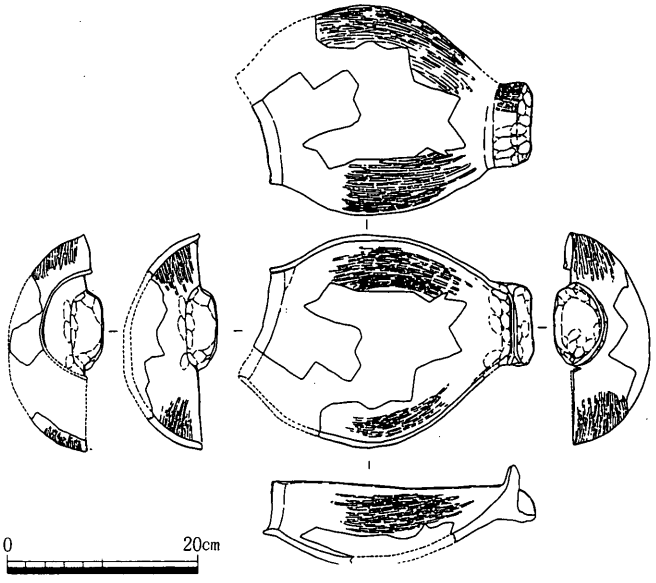
本器種は兵庫県大山遺跡[5]や大阪府巨摩遺跡[6]で早くから知られていたが，類例に乏しく特異な形態として一部で注意されていたにすぎなかった。福岡県辻垣遺跡の調査で初めて，その全体形状が知られると共に赤色顔料（水銀朱）使用に密接に関わる器種であろうことが積極的に考察された。辻垣遺跡資料が体側面に鰭状の把手を付す形態であったため，報告者の柳田康男氏は「広片口三耳鉢」と呼びその具体的な用途についても検討を加えた。[7]その後各地で類例が確認されつつあるが，必ずしも側面に鰭状の把手を持たないことも明らかとなった。そのためここでは同形態を「把手付広片口皿」と称することにしたい。

このほか最近では香川県太田下・須川遺跡，徳島県名東遺跡，[8]福岡県須玖永田遺跡[9]など10遺跡近くで1～数個体程度の出土が確認されている。

上天神遺跡では80個体強の出土を確認している。この点数は他遺跡例とは比べものにならない。上天神遺跡資料についても大部分に肉眼観察によっても赤色顔料の付着が認められる。また23個体について分析を依頼し，19個体に水銀朱の付着が確認されている。大形鉢などと同様の必ずしも良好とは言いがたい残存状況からかかる結果が得られたことから本器種は朱の使用に関する専用土器と判断できる。多くは体部内面に付着を認めるが，尾部立ち上がり部あるいは把手部にも付着する例が少なくない。また粘土帯接合部等の細かい亀裂に沿って器体内に顔料が浸透する例もある。

基本形状

平面形レモン形の呈する浅い皿形で，その一端を広い片口とし，他端には把手状あるいは耳朶状の突出部を付すのが基本的形状であるが，体側面部の鰭状把手の有無をはじめとして，詳細は後で示すように細部の差異はかなり大きい。



第485図　把手付広片口皿の形態

片口部は鈍く折り返して短く伸びる。大形鉢などの口縁部片口に比べはるかに大きく作られているので，液体を入れた場合はごく僅かしか貯えることができない。底部（接地部）に明確な平坦面を作り出さず，安定は極めて悪い。また全形を知り得る資料は多くないが，(938) からすれば片口部は必ずしも主軸に直交しないようである。片口部に向かい合う他方の端部はしばしば，粘土板を貼付して半円形ないしは台形にゆるく隆起し，その外方に耳朶状を呈する突出部を付す。このため一見したところ，ある種の上げ底形態を持つ甕形土器を縦に分割したかのような形状となる。上記したように側面の両側に耳朶状の把手を水平に付す場合もある。(10)

片口部や側縁部端は概ね単純に四角く納め，肥厚・拡張は顕著ではない。体部内面は主軸に並行ないしは直交方向に緻密に箆ミガキするが，対照的に同外面はしばしば主軸方向の箆ケズリもしくは並行叩き目を留める粗雑な調整で終わることが多い。その点で大形鉢H類の調整手法に近似する。また尾部の立ち上がり部の外面や把手部にもミガキ調整が及ばないことが多く，顕著な指押さえを残す。

(4-489) で観察される剝落痕から判断すると，尾部立ち上がり部は体部端にはめ込むように接着して形作ることが想定できる。(4-958) によれば大きく突出した立ち上がり部の上半はさらに粘土帯をこれに継ぎ足して成形している。また尾部把手は立ち上がり部と体部の接着部分外面を連続的に強く押さえつけた結果，若干つまみ出したような形状を呈するにとどまる場合 (4-606) とさらに粘土帯を貼付したと推定される場合 (4-942等) がある。

尾部立ち上がり部の成形状態は，同時期の甕類の多くや大形鉢H類の底部成形法（薄い

粘土円盤の側縁に粘土帯を貼り足して体最下部とする）と共通し，前述の通り，大形鉢H類とは調整手法も共有する部分が大きいが，積極的に鉢ないしは甕体部を成形した後に縦に分割して基本形とした確証はない。後述する佐賀県川寄吉原遺跡[11]の類似形態資料は，明らかに「く」字口縁形態の甕形土器を成形した後に半截して尾部（本来の甕底部）に再調整を加えているが，このような製作法はむしろ特異といえる。

分類

側面に把手を付す形態をB類，付さない形態をA類としておく。また尾部の把手および立ち上がり部の形状から8類に分類する。

1　片口部に相対する端部，つまり立上り部分が隆起せずにほぼ同じ高さで側縁から続く。また（立ち上がり部）下半縁辺を摘み出すだけで，明瞭な把手部と鰭部を作り出さない，つまり鉢あるいは壷甕類体下半部を半截したような形状を示す。上天神遺跡では出土例はない。また側面に把手のつくB類もない。

2　1類同様に立上り部は側縁とほぼ同じ高さにすぎない。ただし（立ち上がり部）下半縁辺に沿って粘土板を貼付し狭い把手を作り出す。上天神遺跡で出土例はないが，兵庫県大山神社遺跡で出土している。

3　立上り部は粘土板を貼付して半月形ないしは台形に側縁部より隆起させる。ただし立ち上がり部下半縁辺を摘み出すだけで，発達した明瞭な把手を作り出していない。

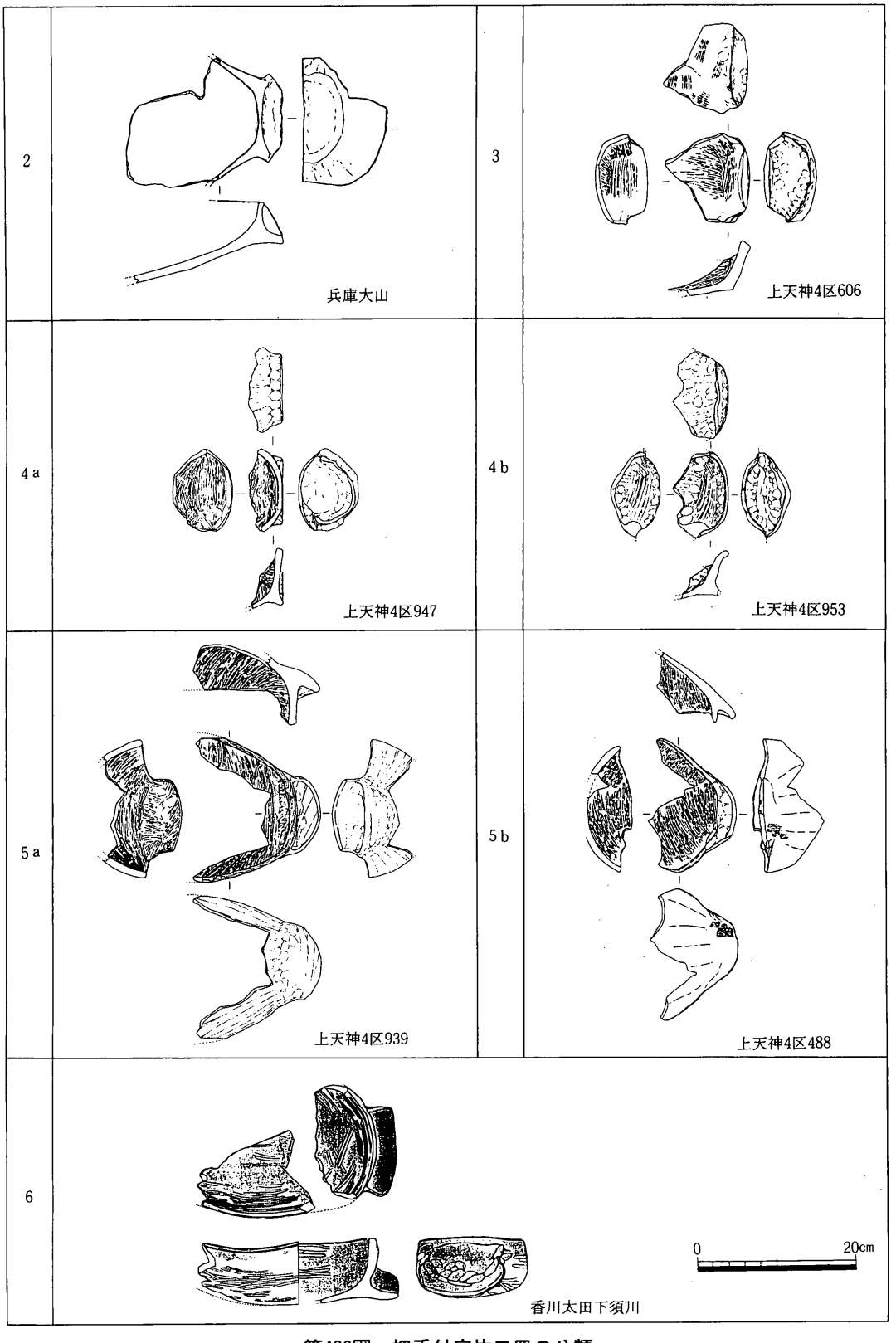
4a　立上り部は粘土板を貼付して，半月形ないしは台形に側縁部より立ち上がる。立ち上がり部下半縁辺に沿って粘土板を貼付し狭い把手を作り出す。

4b　立上り部は粘土板を貼付して，半月形ないしは台形に，側縁部より立ち上がり，外に強く外反する。立ち上がり部下半縁辺に沿って粘土板を貼付し狭い把手を作り出す。

5a　立上り部は粘土板を貼付して，半月形ないしは台形に強く隆起する。立ち上がり部下半縁辺に沿って粘土板を貼付し半月形に発達した把手を作り出す。

5b　立上り部は粘土板を貼付して，半月形ないしは台形に隆起し，外に強く外反する。立ち上がり部下半縁辺に沿って粘土板を貼付し半月形に発達した把手を作り出す。福岡県辻垣遺跡資料はこの形態で側面に鰭状把手を付すものである。

6　深目で幅も広く椀形に近い形態となる。側縁部が立上り部と同じ高さで両者が一体となる。把手は粘土板を貼付し耳朶状に発達する。太田下・須川遺跡に出土例がある。

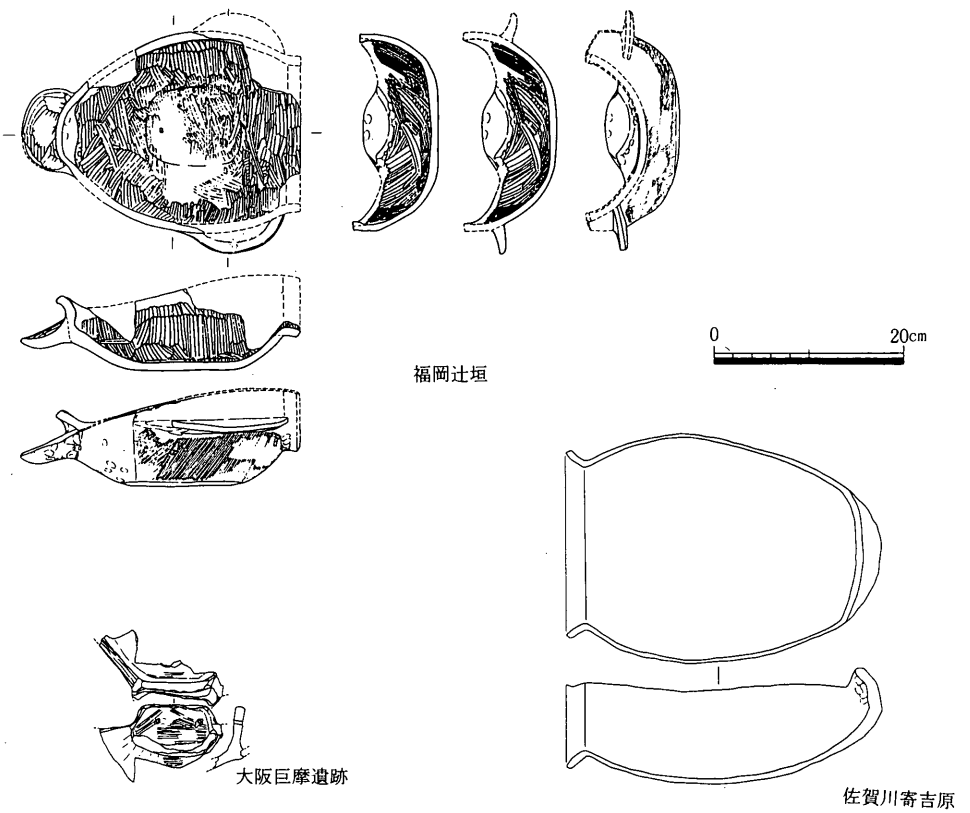


第486図　把手付広片口皿の分類

この他類似した土器に前述した佐賀県川寄吉原遺跡出土資料がある。先に若干述べたように同資料は「く」字口縁形態の甕を縦に分割して形作っており，その点では上記した諸形態とは必ずしも同列には扱えない。しかし同様に内面に顕著に赤色顔料が付着しており，上記諸形態と密接な関係があることは疑いない。

以上示した諸形態のうち，上天神遺跡出土資料は，新古両相に及ぶと思われるものの基本的に弥生後期初頭段階に位置づけられるものである。大山神社遺跡資料は共伴資料は無いものの，遺跡の存続期間自体が中期後葉～後期初頭に限定される。巨摩遺跡資料は中期末葉に比定される沼状遺構下層から出土しており，同遺構資料の時期幅から見て，下ったとしても後期初頭ないしは前葉までであろう。やや形状が特異な6類，太田下・須川遺跡ＳＲ02出土資料も後期初頭～前葉の幅に収まる可能性が高い。また辻垣遺跡大溝3層出土資料は一定の時期幅を持つ資料と混在している。主に高坏の形態から類推すると当地方の後期初頭～後葉の幅に甘んじなければならない。この他ここに図示していないが，徳島県名東遺跡では中期後葉段階の竪穴住居から本器種の出土が報じられている。

今のところ，後期初頭を中心とした時期に比定できる資料が多く，後期初頭を中心とし



第487図　把手付広片口皿の諸形態

た時期の所産であることは疑いないであろうが，現在類例が増加しつつあり，出現時期および変遷等については今少し慎重に検討したい。また当該時期及び先行する時期における既知の弥生土器の組成に，この把手付広片口皿の直接的な祖形となりうる形態は認められない。その原形についても今後の検討課題である。

とはいえ，基本形状及び調整手法－内面の緻密なミガキ調整－はかなりの程度共有しつつも，尾部の発達程度などについて上天神遺跡資料で見られるように，限られた時間幅の資料についても差異が大きいことは確認できる。しかし同時に近畿地方から九州北部まで瀬戸内海沿岸諸地方に限られた時間幅の中で基本形態を共有しつつ分布することも注意しなければならない。

機能

すでに指摘されているように，また上天神遺跡資料においても追認できるように，付着状況から判断して液状化した赤色顔料の使用に関わる用具と考えられる。

辻垣遺跡資料では外面の煤付着などから煮沸機能をも想定しているが，上天神遺跡資料では資料の遺存程度も考慮しなければならないが，被熱痕跡は必ずしも明確ではない。また形態的に見ても煮沸作業を主目的とは想定しにくいであろう。不安定な底部形態や大形の片口部から貯蔵機能を想定するのも不適切であろう。

形態的には液体の撹拌もしくは分配に供する一種の「食事具」的な機能が最も想定しやすい。上天神遺跡に限らず，太田下・須川遺跡や辻垣遺跡においても同時に内面に朱の付着した大形鉢が見られる点も，両者をセット関係と捉えれば理解しやすい。

また大形鉢はとりあえず措くとしても，把手付広片口皿は一般的な液体の撹拌・分配用の一種の食事具としてではなく，赤色顔料専用具として特殊化した存在であることは間違いない。

5．上天神遺跡における内面赤色顔料付着土器の性格

以上見てきたように上天神遺跡では，赤色顔料はごく少数例が土器装飾に供されている他は，大部分が土器内面に一時的であるにせよ液状化した状態で付着して検出されている。計160個体以上のそうした資料の中で壷類・甕類は著しく乏しい。このことは顔料の運搬に土製容器が用いられる度合いが低いことや，上天神遺跡において長期にわたる顔料の貯蔵がなされる機会が少なかったであろうことを予測させる。

また顔料の製造工程，特に辰砂原石の打割・紛状化作業に要する各種石杵類や石皿類が完全に欠落することは重要である。名東遺跡などでは把手付広片口皿ないしはその類似形態と共に石杵類が認められるが，上天神遺跡以外でも辻垣遺跡，太田下・須川遺跡などそれを伴わない例も少なくない。基本的に石杵・石皿を必須とする作業工程とは異なる段階で大形鉢・把手付広片口皿が使用された可能性が高い。したがってこれらの朱付着土器の使用段階としては，製造過程であれば最終工程に近いであろう水簸工程もしくは利用形態に合わせた何らかの調合工程，あるいはそれ以後の顔料使用（消費）過程を想定しなければならない。

いずれにせよ大形鉢・把手付広片口皿を要する行為は地域の各集落において，普遍的になされるものではなく，極めて限定された特定部分で実修される特殊な性格であったと思われる。特に上天神遺跡及び周辺では，ほとんど上天神遺跡の集落単位3で集中的に使用されている。

先に想定した機能が正しいとすれば，それだけを取り出せば今少し多様な形態－基本的機能が同様であっても，例えば壷形土器がいかに地域的変化に富んでいるか－が見られても構わないであろうが，瀬戸内沿岸の広い地域にわたってその基本形態が共有されていることは，おそらくそれに関わる行為の特殊な性格から説明されることであろう。その点で，塗布・装飾等以外の弥生時代における朱使用の一形態として「仙薬」原料を想定し，朱内面付着土器の用途として仙薬の調合等を想定する本田光子氏の見解[12]は重要であろう。

（1）北山健一郎・森下友子『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター　1995

（2）註(10)文献所収の本田光子・成瀬正和「辻垣長通遺跡出土土器に付着している赤色顔料について」で，内面朱付着土器における顔料付着状況の特徴を整理している。

（3）本田光子「野方中原遺跡出土の土器に付着した赤色顔料について」野方久保遺跡Ⅱ　福岡市教育委員会　1994

その他辻垣長通遺跡等にも同様の形態の鉢H類似品を見る。片口形態の大形鉢全てとは言えないが，鉢H類は把手付広片口皿と共に朱専用具と見なしてもよいかもしれない。

（4）平井勝「内面朱付着土器」『百間川原尾島遺跡4』岡山県教育委員会　1995

（5）石野博信『古墳文化出現期の研究』　1985

(6) 大阪文化財センター『巨摩・瓜生堂』 1982

(7) 柳田康雄『辻垣畠田・長通遺跡』福岡県教育委員会 1994

(8)「名東遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報4』徳島県埋蔵文化財センター 1992

(9) 春日市教育委員会『須玖永田遺跡』 1987

(10) 辻垣長通遺跡・須玖永田遺跡例などがある。上天神遺跡資料では体側部の鰭状把手の可能性がある小片1例を見るが確定はできない。

(11)「川寄吉原遺跡」『佐賀県文化財調査報告61』佐賀県教育委員会 1981

(12) 註(3)文献など

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
3-SD02	3-271	把手付広片口皿？	中・普	にぶい褐・黒褐	全体にマメツ	内面付着	角閃石・雲母
3-SD02	3-272	把手付広片口皿？	中・多	にぶい橙	外面マメツ、内面ミガキ・ナデ	内面付着	角閃石
3-SD03	3-359	把手付広片口皿？	中・普	黒褐、暗灰黄・黒	外面ミガキ、内面ミガキ、内面にこげが付着	底部付近割れ口に付着	角閃石　内面煤付着
3-SR01	3-509	把手付広片口皿？	微・少	灰黄褐、にぶい黄褐	外ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、内ﾐｶﾞｷ、外面煤、側・内(赤)	内面付着多量、把手外面付着少量	角閃石・雲母外面煤付着
4-SH04	4-32	把手付広片口皿	細・極多	黒色	体側縁部。端部は四角く納める。内面ﾊｹ。	側縁付着少量	角閃石極多
4-SD06	4-136	把手付広片口皿	細・極多、中・普	にぶい橙色	片口部。口縁部は鈍く屈曲して開き、端部は四角く納める。側縁端は四角く納める。体部外面叩き目残る。	内面付着微量	角閃石極多、赤色粒
4-SD06	4-137	把手付広片口皿	細・極多	浅黄色	把手部。立ち上がり部下端に耳朶状の把手部を貼り足す。台形状に高く突出した立ち上がり部はほぼ直立して丸く納める側縁端は四角く納める。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、体部分割縦ﾐｶﾞｷ。外面体部縦ﾐｶﾞｷ、把手部・立ち上がり部指押さえ 。	把手部付着微量	角閃石極多、雲母多
4-SD06	4-138	把手付広片口皿	細・極多、中・多	橙色	把手部。側縁端に貼り足した立ち上がり部上半・把手部剝落。側縁端は四角く納める。体部外面縦ｹｽﾞﾘ。把手部指押さえ。体部内面の側縁部縦ﾐｶﾞｷ、端部横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多（含粗粒）
4-SD08	4-447	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄橙色	体側縁部。端部は強く内湾して四角く納める。外面縦ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、一部縦ﾐｶﾞｷ。内面ﾅﾃﾞ。	内面付着微量	角閃石極多、雲母
4-SD08	4-478	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄橙色 灰黄褐色	片口部。口縁部は緩く反りかえって伸び、端部は四角く納める。外面叩き目残る。内面指押さえ。	外面付着少量	角閃石極多、雲母多、石英等・赤色粒
4-SD08	4-479	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄色	片口部。口縁部は強く反りかえって短い。端部丸く納める。側縁端部は内外に張り気味に四角く納める。外面叩き目残る。内面ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多、雲母少
4-SD08	4-480	把手付広片口皿	細・極多	灰黄褐色	片口部。口縁部は強く反りかえって短く開き、端部は肥厚気味に丸く納める。側縁端部四角く納める。外面叩き目残る。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多、雲母多
4-SD08	4-481	把手付広片口皿	細・極多	褐色	片口部。口縁部は緩く屈曲して伸びる。端部は肥厚気味に四角く納める。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面・割れ口付着	角閃石極多
4-SD08	4-482	把手付広片口皿	細・極多	橙色	体側縁部。端部は四角く納める。外面縦ﾅﾃﾞ。	内面付着微量	角閃石極多、石英等多
4-SD08	4-483	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄橙色	体側縁部。端部は四角く納める。外面縦ｹｽﾞﾘ、内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着多量	角閃石極多、雲母多

第37表　内面赤色顔料付着土器(1)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
4-SD08	4-484	把手付広片口皿	細・極多、中・多	にぶい黄橙色	把手部。低い半円形に突出した立ち上がり部下縁から舌状の把手部が薄く伸びる。	内面付着微量	角閃石極多、石英等多
4-SD08	4-485	把手付広片口皿	細・極多	灰黄褐色	把手部。半円形に突出した立ち上がり部下縁から耳朶状の把手部が伸びる。指押さえ。	内面付着	角閃石極多、雲母
4-SD08	4-487	把手付広片口皿	細・極多、中・普	灰黄色	把手部。耳朶状に発達した把手部は強く内湾する。半円形に突出した立ち上がり部はほぼ直立して肥厚気味に丸く納める。把手部指押さえ、同内面部分的に横ﾐｶﾞｷ、内面底面・立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、側面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、石英等
4-SD08	4-488	把手付広片口皿	細・極多	黄灰色	把手部。耳朶状の短い把手部はやや内湾して四角く納める。わずかに突出した低い立ち上がり部は直立して端部を丸く納める。側縁部は四角く納める。外面縦ﾅﾃﾞ。内面横ﾐｶﾞｷ。端面ﾅﾃﾞ。	内面付着微量	角閃石極多、朱
4-SD08	4-489	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄橙色	把手部。体部端を緩く折り返して耳朶状に発達した把手部は分厚い。把手基部から貼り足した立ち上がり部は半円形に突出して外反して伸び、端部は尖る。体部外面縦ﾅﾃﾞ。把手部、立ち上がり部指押さえ。	内面・割れ口付着	角閃石極多
4-SD08	4-490	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄橙色	把手部。把手部は立ち上がり部下縁から短く伸びて端部は四角く納める。立ち上がり部剝落。	内面付着微量	角閃石極多、雲母・石英等多
4-SD08	4-491	把手付広片口皿	細・極多、中・少	灰褐色	把手部。立ち上がり部下端を外方に引き出して痕跡的な把手部となす。半円形に突出した立ち上がり部はやや外反して伸び、肥厚気味に丸く納める。外面体部叩き目残る。把手部・立ち上がり部指押さえ。内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多、石英等少　朱
4-SD08	4-492	把手付広片口皿	細・極多	黄橙色	把手部。体部端を緩く折り返した把手部は分厚く短い。把手基部から貼り足した立ち上がり部は剝落。体部外面縦ﾅﾃﾞ。内面横ﾐｶﾞｷ。把手部指押さえ。	内面付着	角閃石極多
4-SD08	4-493	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄褐色	把手部。把手部は半円形に突出した立ち上がり部下縁を鈍く摘み出すのみ。把手部指押さえ。体部外面縦ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着多量・把手外面付着	角閃石極多朱
4-SD08	4-494	把手付広片口皿	細・極多、中・多	にぶい黄褐色	把手部。把手部は低い台形状に発達した立ち上がり部の下端を縁取る鈍い突起にすぎない。立ち上がり部はわずかに外傾して肥厚気味	内外面付着少量	角閃石極多、雲母・石英等多

第38表　内面赤色顔料付着土器(2)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
					に丸く納める。外面立ち上がり部指押さえ、体部縦ｹｽﾞﾘ、内面横ﾐｶﾞｷ。		
4-SD16abc	4-606	把手付広片口皿	細・極多、中・普	黄褐色	把手部。把手部は痕跡的に、立ち上がり部下端をわずかに張り出すのみ。台形状に低く突出した立ち上がり部は外傾して伸び、肥厚気味に四角く納める。外面把手部・立ち上がり部指押さえ。体部叩き目残る。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、体部縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、石英等、赤色粒　朱・砒素？
4-SD16de	4-699	把手付広片口皿	細・極多	灰黄褐色	片口部。口縁部は鈍く屈曲して伸び、端部は四角く納める。側縁部は四角く納める。体部外面縦ｹｽﾞﾘ、片口部横ﾅﾃﾞ。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多、雲母多
4-SD16de	4-700	把手付広片口皿	細・極多	灰黄褐色	把手部。把手部は短く半円形に開き、指押さえ顕著。低い半円形に突出した立ち上がり部はやや外傾して伸び、端部は丸く納める。外面指押さえ、内面横ﾐｶﾞｷで下端部指押さえ、体部外面縦ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量？	角閃石極多、雲母
4-SD16de	4-701	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄橙色	把手部。把手部は立ち上がり部下縁を鈍く摘み出すのみ。立ち上がり部はやや内湾して伸び肥厚気味に尖る。外面ﾅﾃﾞ、内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量？	角閃石極多、雲母
4-SD16de	4-702	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄橙色	把手部。立ち上がり部下端を外方に摘み出し短い把手部。半円形に突出した立ち上がり部は外傾して伸び、肥厚気味に四角く納める。外面指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ。	内外面付着微量	角閃石極多
4-SD16de	4-703	把手付広片口皿	細・極多	灰黄褐色　灰黄色	器種不明。広口皿把手部か。立ち上がり部下縁を鈍く摘み出すのみ。やや外傾する立ち上がり部上半剝落。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。やや上げ底状の鉢底部の可能性も。	内面付着	石英等・角閃石多
4-SD16h	4-710	把手付広片口皿	細・極多、中・普	黄褐色	把手部。把手部は痕跡的な立ち上がり部下端の突起にすぎない。低い半円形に突出する立ち上がり部は直立して伸び、端部は四角く納める。外面指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量？	角閃石極多、雲母多、石英等
4-SD16f	4-938	把手付広片口皿	細・極多、中・普	にぶい橙色	レモン形の平面形を呈する皿形土器。一端は大形の片口をなし、他端は立ち上がり部を介して鰭状の把手を付す。側縁部はほぼ水平で、立ち上がり部は高く台形状に突出する。側縁端は四角く納め、片		角閃石極多（含粗粒）、石英等・赤色粒

第39表　内面赤色顔料付着土器(3)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
					口部は短く伸びて丸く納める。立ち上がり部は内湾気味に伸びて尖り、把手部は内湾気味に丸く納める。体部内外面縦ﾐｶﾞｷ、片口部横ﾅﾃﾞ、立ち上がり部・把手部は指押さえで、外面の一部に縦ﾊｹ。		
4-SD16f	4-939	把手付広片口皿	細・極多	明褐色	把手部。耳朶状の把手部はやや内湾。台形状に突出した立ち上がり部はほぼ直立して端部を四角く納める。側縁端は四角く納める。体部外面縦ｹｽﾞﾘのち把手部基部指押さえ。内面立ち上がり部縦ﾐｶﾞｷのち体部横ﾐｶﾞｷ、把手部・立ち上がり部横ﾅﾃﾞ。端面ﾐｶﾞｷ。	内面付着	角閃石極多朱・砒素？
4-SD16f	4-940	把手付広片口皿	細・極多	灰黄褐色	把手部。立ち上がり部下端から引き出した把手部は短く、押さえ顕著。低い半円形に突出した立ち上がり部はやや反って伸び、肥厚気味に丸く納める。外面指押さえ、内面横ﾐｶﾞｷ、体部外面縦ﾅﾃﾞ。内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、赤色粒・石英等
4-SD16f	4-941	把手付広片口皿	細・極多	灰黄褐色	把手部。耳朶状の把手部はやや内湾する。ほぼ直立する立ち上がり部上半は剝落。指押さえ。	内外面割れ口付着少量	角閃石極多、赤色粒
4-SD16f	4-942	把手付広片口皿	細・極多、中・普	灰黄褐色	把手部。体部に貼り足した把手部剝落。剝落面に貼付前の指押さえ調整残る。低い台形状に突出した立ち上がり部は外反気味に伸び、側縁端は肥厚気味に四角く納める。体部外面縦ﾊｹ、縦ｹｽﾞﾘのち縦ﾐｶﾞｷ。内面立ち上がり部周辺指ﾅﾃﾞ、押さえのち縦ﾐｶﾞｷ、立ち上がり部外面指押さえ。端面ﾊｹ調整。	内面付着微量	角閃石極多、石英等　朱・砒素？
4-SD16f	4-943	把手付広片口皿	細・極多	暗褐色	把手部。短い把手部はやや内湾気味に丸く納める。やや突出した立ち上がり部は強く外反して伸び肥厚気味に丸く納める。外面縦ｹｽﾞﾘのち把手部基部指押さえ。内面立ち上がり部・底面横ﾐｶﾞｷ、側面縦ﾐｶﾞｷ、立ち上がり部外面横ﾐｶﾞｷ、縁辺部指押さえ。		角閃石極多砒素
4-SD16f	4-944	把手付広片口皿	細・極多、中・少	灰黄褐色	把手部。耳朶状に発達した把手部。側縁よりわずかに高い立ち上がり部はほぼ直立して端部を四角く納める。側縁端は四角く納める。外面縦ﾅﾃﾞで把手基部に指押さえ。内面・立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ。	内面付着多量	角閃石極多、石英等少　朱
4-SD16f	4-945	把手付広片	細・極多	褐色	体側縁部。端部は外方に小さく摘	内面付着	角閃石極多、

第40表　内面赤色顔料付着土器(4)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
		口皿			みつつ四角く納める。内面縦ﾐｶﾞｷ、外面横ﾊｹ。		雲母多
4-SD16f	4-946	把手付広片口皿	細・極多	暗灰黄色	体側縁部。端部は内方に張り気味に四角く納める。外面縦ﾊｹで叩き目残る。	内面割れ口付着少量	角閃石極多、雲母多　外面煤
4-SD16f	4-947	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄褐色	把手部。立ち上がり部下端を外方に摘み出して痕跡的な把手部となす。半円形に低く突出した立ち上がり部はほぼ直立して伸び、肥厚気味に四角く納める。外面体部縦ｹｽﾞﾘ、把手部指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多　朱
4-SD16f	4-948	把手付広片口皿	細・極多、中・少	にぶい黄褐色	把手部。把手部は立ち上がり部下縁から短くのびて端部は分厚く尖る。直立する立ち上がり部上半は剝落。外面体部縦ﾅﾃﾞ、立ち上がり部指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ。	内外面付着多量	角閃石極多、石英等少
4-SD16f	4-949	把手付広片口皿	細・極多	灰黄褐色	把手部。把手部は鈍く摘み出して指押さえ顕著。台形状に突出した立ち上がり部は直立し端部四角く納める。側縁端は四角く納める。体部外面縦ｹｽﾞﾘ。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷのち体部分割縦ﾐｶﾞｷ、端面ﾅﾃﾞ。	内面付着	角閃石極多、外面黒変　朱・砒素
4-SD16f	4-950	把手付広片口皿	細・極多、粗・少	橙色	把手部。把手部は立ち上がり部下端を外方に引き出して短い。半円形に低く突出した立ち上がり部は強く外反して端部は尖る。外面体部縦ﾅﾃﾞ、把手部・立ち上がり部指押さえ。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、側面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、石英等少　朱
4-SD16f	4-951	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄褐色	把手部。立ち上がり部下縁から伸びる短い把手部は剝落。やや外傾する立ち上がり部は上半部剝落。外面体部縦ﾐｶﾞｷ、立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ。内側面縦ﾐｶﾞｷ、立ち上がり部・底面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量？	角閃石極多、雲母多、石英等少
4-SD16f	4-952	把手付広片口皿	細・極多	灰黄褐色	把手部。把手部は短く、立ち上がり部下端を縁取る。低い台形状に突出した立ち上がり部はほぼ直立して伸び、四角く納める。外面指押さえ、内面横ﾐｶﾞｷ、体部外面ﾅﾃﾞ。内面縦横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、雲母
4-SD16f	4-953	把手付広片口皿	細・極多	黒褐色	把手部。把手部は短く、立ち上がり部下端を縁取り指押さえ顕著。低い半円形に突出した立ち上がり部は強く外反して伸び、端部は四角く納める。外面指押さえ、内面横ﾐｶﾞｷ、体部外面縦ｹｽﾞﾘ、内面縦	内面付着微量	角閃石極多、雲母多

第41表　内面赤色顔料付着土器(5)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
					ﾐｶﾞｷ。		
4-SD16f	4-954	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄褐色	把手部。立ち上がり部下端を外方に鈍く摘み出して痕跡的な把手部となす。立ち上がり部上半は剝落。外面体部ﾊｹ、立ち上がり部、把手部指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、雲母多
4-SD16f	4-955	把手付広片口皿	細・極多	暗灰黄色	片口部。口縁部はやや反って端部は丸く納める。側縁端部は四角く納める。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多、雲母・石英等
4-SD16f	4-956	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄褐色	片口部。口縁部はゆるく湾曲して開き、端部は尖る。側縁端部は内外に摘み気味に四角く納める。外面叩き目顕著、内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、石英等少
4-SD16f	4-957	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄褐色	把手部。立ち上がり部下端に貼り足した把手部剝落。低い台形状に突出した立ち上がり部はやや内傾して伸び、端部は四角く納める。側縁端は四角く納める。外面体部縦ﾊｹ、立ち上がり部指押さえ、上端横ﾊｹ。内面立ち上がり部横ﾊｹ、体部横ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多、雲母
4-SD16f	4-958	把手付広片口皿	細・極多	暗灰黄色	把手部。立ち上がり部下端を張り出して痕跡的な把手部となす。台形状に突出した立ち上がり部は外傾して伸び、鈍く尖る。外面体部縦ｹｽﾞﾘ、立ち上がり部指押さえ。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、側面横ﾅﾃﾞ。	内面付着	角閃石極多朱・砒素
4-SD16f	4-959	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄橙色	把手部。把手部は立ち上がり部下縁を鈍く摘み出すのみ。半円形に突出した立ち上がり部はやや外反して伸び肥厚気味に丸く納める。外面縦ﾅﾃﾞ、内面立ち上がり部・底面横ﾐｶﾞｷ、側面縦ﾐｶﾞｷ。	内外面付着少量	角閃石極多
4-SD16	4-981	把手付広片口皿	細・極多	黒褐色	把手部。把手部は短く半円形に開き、指押さえ。立ち上がり部はやや外傾して伸びる。外面指押さえ、内面ﾅﾃﾞ。体部外面縦ﾅﾃﾞ、内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、雲母多
4-SD16	4-982	把手付広片口皿	細・極多、中・普	灰黄褐色	把手部。粘土帯を貼り分厚くした立ち上がり部下縁から短い舌状の把手部が伸びる。立ち上がり部剝落。体部内面縦ﾐｶﾞｷ、外面横ﾊｹ。	内面付着微量	角閃石極多、石英等
4-SD16	4-983	把手付広片口皿	細・極多	灰黄色	把手部。把手部は大きく下方に張り出して開く。わずかに突出した立ち上がり部はやや外傾して、端部は丸く納める。外面ﾅﾃﾞ、体部外面縦ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、赤色粒
4-SD19	4-1114	把手付広片	細・極多	にぶい黄褐色	体側縁部。端部は内方に張り気味	内面付着微量	角閃石極多、

第42表　内面赤色顔料付着土器(6)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
		口皿			に四角く納める。ﾅﾃﾞ。		石英等・雲母
4-SD19	4-1127	把手付広片口皿	細・極多、中・普	明黄褐色	把手部。把手部は痕跡的に立ち上がり部下端から摘み出すのみ。低い半円形に突出した立ち上がり部はやや外傾して伸び丸く納める。外面指押さえ。体部外面縦ﾅﾃﾞ。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、体側面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量？	角閃石極多、雲母多、赤色粒
4-SD19	4-1128	把手付広片口皿	細・極多	黄褐色	把手部。立ち上がり部下端から引き出した把手部は短く、内面指押さえ顕著。低い台形状に突出した立ち上がり部はやや外傾して丸く納める。体部外面縦ﾅﾃﾞ。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量？	角閃石極多、雲母多、石英等多
4-SD19	4-1129	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄褐色	片口部。口縁部はゆるく湾曲して伸び、端部は外方に摘み気味に四角く納める。体部内面ﾐｶﾞｷ、口縁部横ﾅﾃﾞ。	内面付着微量？	角閃石極多、雲母多
4-SD19	4-1130	把手付広片口皿	細・極多、中・多	黄褐色	体側縁部片。端部はやや張り気味に四角く納め、局所的に内外から押さえつけ摘み出す部分がある。外面調整不明、内面ﾐｶﾞｷ	内面付着微量	角閃石極多、石英等多　朱
4-SK01	4-1166	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄褐色	片口部。口縁部は鈍く屈曲して伸び、端部は丸く納める。側縁端部は四角く納める。ﾅﾃﾞ。	内面割れ口付着微量	角閃石極多、石英等・赤色粒少　外面煤
4-SK04	4-1246	把手付広片口皿	細・極多	褐色	把手部。台形に大きく発達した把手部はやや内湾する。立ち上がり部はほぼ直立。把手部外面横ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指押さえ。体部内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着多量	角閃石極多　外面煤付着　朱
4-SK05	4-1281	把手付広片口皿	細・極多、中・多	にぶい褐色	片口部。口縁部は鈍く折り返して短く伸び四角く納める。側縁端は肥厚気味に四角く納める。体部内外面縦ﾐｶﾞｷ。片口部横ﾅﾃﾞ	内面付着微量	角閃石極多、赤色粒・石英等多
4-SK05	4-1282	把手付広片口皿	細・極多	橙色　灰褐色	把手部。台形状の把手部は水平に伸びて四角く納める。台形状に突出した立ち上がり部はほぼ直立して伸び、四角く納める。外面体部ｹｽﾞﾘ、立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ。内面体部横ﾐｶﾞｷ、把手部指押さえ。	内外面付着微量	角閃石極多
4-SK09	4-1307	把手付広片口皿	細・極多	橙色	体側縁部。端部は四角く納める。内面ﾊｹ調整後底面部に横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量？	角閃石極多
4-C13SP5	4-1324	把手付広片口皿	細・極多	褐色	体側縁部。端部は四角く納める。外面ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量？	角閃石極多、雲母多、石英等少
4-SD02	4-1385	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄橙色	把手部。把手部は立ち上がり部下端を薄く外方に引き出して丸く納める。台形状に高く突出した立ち上がり部は内湾気味に四角く納め	内面付着微量	角閃石極多、雲母多

第43表　内面赤色顔料付着土器(7)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
					る内面横ﾐｶﾞｷ、外面体部縦ｹｽﾞﾘ。把手部指押さえ。		
4-SD02	4-1386	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄橙色	把手部。側縁部から緩やかに隆起する。側縁端部は肥厚気味に四角く納める。外面ﾅﾃﾞ。	内面付着微量？	角閃石極多、赤色粒
4-SD05	4-1407	把手付広片口皿	細・極多、中・普	黄褐色	立ち上がり部。把手部は剝落。立ち上がり部は外反して伸び、肥厚気味に尖る。立ち上がり部外面指押さえ。体部外面縦ﾅﾃﾞ。	内面付着微量？	角閃石極多、雲母・石英等
4-SD05	4-1408	把手付広片口皿	細・極多、中・少	淡橙色	立上がり部は台形状に外傾気味に大きく立ち上がる。把手部はやや薄く、強く耳朶状に突出する。内面調整不明、外面ｹｽﾞﾘ	内面付着微量	角閃石極多、石英等少　朱
4-SD05	4-1409	把手付広片口皿	細・極多	明黄褐色	把手部。半円形に伸びた把手部端は丸く納め、指押さえ顕著。低い台形状に突出した立ち上がり部はやや内湾気味に伸びて肥厚気味に丸く納める。指押さえ。体部縦ﾅﾃﾞ。	内面付着微量	角閃石極多、雲母多
4-その他	4-1439	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄褐色	把手部。耳朶状に発達した把手部は強く内湾する。低い台形状に突出した立ち上がり部はやや外傾して分厚い。把手部・立ち上がり部指押さえ、体部外面縦ｹｽﾞﾘ後ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量？	角閃石極多
4-その他	4-1440	把手付広片口皿	細・極多、中・少	灰黄褐色	把手部。把手部は短く半円形に開き、指押さえ。低い半円形に突出した立ち上がり部はやや外傾して伸び、端部は四角く納める。指押さえ、体部外面縦ｹｽﾞﾘのち縦ﾐｶﾞｷで、叩き目残る。内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、石英等少
4-その他	4-1441	把手付広片口皿	細・極多	にぶい黄褐色	立ち上がり部。把手部は剝落。低い半円形に突出する立ち上がり部はやや内湾気味に伸び端部は丸く納める。指押さえ。	内面付着微量？	角閃石極多、雲母多、石英等
4-その他	4-1442	把手付広片口皿	細・極多	明黄褐色	把手部。把手部は痕跡的な立ち上がり部下端の隆起にすぎない。立ち上がり部は強く外傾SI。外面指押さえ。側縁端部は四角く納める。体部外面縦ﾅﾃﾞで、叩き目残る。	内面付着微量？	角閃石極多、石英等多
4-SD16f	4-1474	把手付広片口皿？	細・極多、中・少	褐色	内面に緻密なﾐｶﾞｷ調整を認める。	内面付着多量	角閃石極多、石英等　朱
4-SD16f	4-1478	把手付広片口皿？	細・極多	にぶい黄色	把手部の剝落した片口皿か？外面ｹｽﾞﾘ、内面ﾐｶﾞｷ、剝落面にも顔料付着。	内面付着少量	角閃石極多　朱・砒素
4-SD16f	4-1479	把手付広片口皿	細・極多、中粗・少	にぶい黄褐色	立上がり部は半円形に隆起し、把手部は下縁を小さく摘み出すのみ。外面叩き目顕著、内面緻密な横	内面付着微量	角閃石極多、石英等少　朱

第44表　内面赤色顔料付着土器(8)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
					ﾐｶﾞｷ。		
4-SD16f	4-1486	把手付広片口皿	細・極多、中粗・少	褐色、灰褐色	把手付広片口皿体部片。外面ｹｽﾞﾘ後部分的にﾐｶﾞｷ、内面ﾐｶﾞｷか	内面付着多量	角閃石極多、石英等少　朱・砒素
4-SD08	4-465	？	細・極多、中・普	にぶい黄橙色	薄い底部。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面縦ｹｽﾞﾘ。	内底面付着	角閃石極多、石英等
4-SD16f	4-1472	？	細・極多、中・少	にぶい黄褐色	大形鉢もしくは把手付広片口皿。内面緻密なﾐｶﾞｷ調整	内面付着多量	角閃石極多、石英等少　朱
4-SD16f	4-1473	？	細・極多、中・少	褐色	大形鉢もしくは把手付広片口皿。内外面緻密なﾐｶﾞｷ調整	内面付着多量	角閃石極多、石英等少　朱
4-SD16f	4-1476	？	細・極多、中・少	黄褐色	大形鉢もしくは把手付広片口皿。内面ﾊｹ後緻密なﾐｶﾞｷ調整、外面ﾊｹか	内面付着多量	角閃石極多、石英等　朱
4-SH04	4-26	大形鉢	細・極多	橙色	口縁端部は外方に張り気味に四角く納める。口縁部下に鈍い凹線。片口。	口縁付着少量	角閃石極多、石英等少
4-SD06	4-132	大形鉢	細・極多	にぶい橙色	口縁部は小さく反って尖る。口縁部下に凹線４条。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多
4-SD06	4-133	大形鉢	細・極多	にぶい橙色　明褐色	口縁端部は上方に張り気味に四角く納める。外面叩き目残る。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多、雲母
4-SD06	4-134	大形鉢	細・極多、中・普	灰褐色	やや内湾気味に開き口縁端部は上方に張り気味に四角く納める。底部薄い。外面下端に叩き目残る。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着	角閃石極多、石英等　朱・砒素？
4-SD08	4-442	大形鉢	細・極多、粗・普	明赤褐色	底部は比較的薄作り。鈍く屈曲して口縁部はほぼ直立。端部は内外に摘み出して頂部凹線。口縁部横ﾅﾃﾞで、内面鈍い凹線、外面縦ｹｽﾞﾘ後縦ﾐｶﾞｷ、内面斜ﾐｶﾞｷ。	口縁付着微量	角閃石極多（含粗粒）
4-SD08	4-444	大形鉢	細・極多	明褐色	口縁部は緩やかに内湾して端部は丸く納める。外面口縁部凹線、叩き目残る。	口縁付着微量	角閃石極多、石英等多
4-SD08	4-448	大形鉢	細・極多	浅黄色	中位で鈍く屈曲して上半部はやや内傾。端部は内外に張り気味に四角く納める。上半部横ﾐｶﾞｷ。	口縁付着微量	角閃石極多、石英等
4-SD08	4-449	大形鉢	細・極多	橙色　にぶい褐色	口縁部は鈍く肥厚しつつ内外に張り出す。片口。	口縁付着微量	角閃石極多
4-SD08	4-450	大形鉢	細・極多	浅黄色	やや内湾気味に開き端部は四角く納める。弱い片口。外面凹線、内面縦ﾐｶﾞｷ、片口部は横ﾐｶﾞｷ。	口縁付着微量	角閃石極多、雲母多
4-SD08	4-452	大形鉢	細・極多	灰黄褐色	口縁部は小さく折り返して外反。端部は四角く納める。横ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多、雲母、石英等少
4-SD08	4-453	大形鉢	細・極多	灰黄色	口縁部は緩く外反して端部は丸く納める。口縁部直下凹線。外面縦	内面付着少量	角閃石極多、雲母多

第45表　内面赤色顔料付着土器(9)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
					ｹｽﾞﾘ後横ﾅﾃﾞ。内面横ﾊｹ後横ﾐｶﾞｷ。		
4-SD08	4-454	大形鉢	細・極多	にぶい黄橙色	緩やかに湾曲して立ち上がり、端部は外方に鈍く摘み出すと共に内方も張る。外面縦ﾊｹで、叩き目残る。内面ﾊｹ後粗雑な縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多
4-SD08	4-458	大形鉢	細・極多	にぶい黄色　灰黄色	わずかに内湾気味に立ち上がり、端部は外方に鈍く突出。大形の底部は薄い。外面縦ｹｽﾞﾘ後縦ﾐｶﾞｷ。内面ﾐｶﾞｷ。	内面付着	角閃石極多
4-SD08	4-459	大形鉢	細・極多、中・普	灰黄褐色	緩やかに開き、端部は丸く納める。内面横ﾐｶﾞｷ、鈍い片口。	内面付着微量	角閃石極多、石英等、赤色粒少
4-SD08	4-460	大形鉢	細・極多、中・多	明褐色～灰黄色　灰黄色	わずかに内湾気味に開き、底部は薄い。口縁端部は四角く納める。外面縦ｹｽﾞﾘ、内面螺旋状ﾐｶﾞｷ。	内面付着	角閃石極多（含粗粒）　朱・砒素？
4-SD08	4-462	大形鉢	細・極多、中・普	暗褐色	薄作りの底部で外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	内底面付着多量	角閃石極多、石英等　朱・砒素？
4-SD08	4-463	大形鉢	細・極多	褐色	底部はやや薄い。外面縁辺部指押さえ、体部縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	内底面付着多量	角閃石極多
4-SD08	4-466	大形鉢	細・極多、中・多	暗褐色	底部は鈍く突出して分厚い。外面叩き目顕著に残る。内面縦ﾐｶﾞｷ。	内底面付着多量	角閃石極多（含粗粒）　朱
4-SD08	4-468	大形鉢	細・極多	灰黄褐色	体部は直線的に開き底部はかなり薄い。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着	角閃石極多、雲母
4-SD16de	4-694	大形鉢	細・極多	にぶい黄色	口縁部は強く折り返して短く水平に開き、端部は丸く納める。屈曲部凹線。外面疎らな縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多
4-SD16de	4-697	大形鉢	細・極多、中、多	暗褐色	分厚い突出気味の底部。外面叩き目残る。	内底面付着多量	角閃石極多（含粗粒）
4-SD16h	4-709	大形鉢	細・極多	黄褐色	やや外傾して立ち上がり、端部は外方に張り気味に四角く納める。外面口縁部直下に沈線１条。	口縁部付着微量	角閃石極多、雲母多
4-SD16f	4-905	大形鉢	細・極多	にぶい黄褐色	やや外傾して立ち上がり、口縁部下に屈曲部の退化した鈍い段。端部は外方に摘み出すと共に内方も突出。端面凹線。横ﾅﾃﾞ。	内面付着微量	角閃石極多
4-SD16f	4-906	大形鉢	細・極多	にぶい黄色	鈍く屈曲し鈍い段。口縁部はやや内傾する。端部は内外に摘み出し、頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、過半部外面縦ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、石英等
4-SD16f	4-909	大形鉢	細・極多、中・普	黄褐色　灰黄色	中位で屈曲して鈍い段。上半部はやや内傾して端部は内外に摘み出す。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ、内面斜方向のﾅﾃﾞ後放射状ﾐｶﾞｷ部分的に横ﾐｶﾞｷ。	内面付着	角閃石極多、石英等
4-SD16f	4-911	大形鉢	細・極多	にぶい黄橙色	緩く湾曲して立ち上がり、端部は内方に小さく突出。外面口縁部直	内面付着少量	角閃石極多

第46表　内面赤色顔料付着土器(10)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
					下沈線１条。内面縦ﾐｶﾞｷ、外面横ﾅﾃﾞ。		
4-SD16f	4-914	大形鉢	細・極多	にぶい黄色	口縁部は外傾し端部は小さく外方に摘み出す。口縁部直下鈍い凹線。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ内面横ﾊｹ	内面付着微量	角閃石極多、雲母多
4-SD16f	4-915	大形鉢	細・極多	にぶい黄橙色	鈍く屈曲して口縁部は短く直立。端部は四角く納める。外面横ﾊｹ後、口縁部粗雑な篦描沈線・波状文。内面横ﾅﾃﾞ。	内面付着微量	角閃石極多
4-SD16f	4-918	大形鉢	細・極多、中・多	黒色～黄灰色黄褐色	鈍く屈曲して口縁部は直立。端部は肥厚して四角く納める。口縁部外面篦描並行沈線。以下外面横ﾅﾃﾞ後縦ﾐｶﾞｷ。内面上半部横ﾐｶﾞｷ後下半部縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着多量	角閃石極多、石英等多　朱
4-SD16f	4-919	大形鉢	細・極多	褐色	口縁部は小さく外反して丸く納める。口縁部横ﾅﾃﾞ、外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着	角閃石極多
4-SD16f	4-920	大形鉢	細・極多	黄褐色	やや内傾して立ち上がり口縁部は短く外反して端部は肥厚気味に四角く納める。口縁部横ﾅﾃﾞ、体部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ後下半部縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多
4-SD16f	4-922	大形鉢	細・極多	にぶい褐色	口縁部は小さく反り返って尖る。外面口縁部直下に沈線２条。叩き目残る。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多
4-SD16f	4-923	大形鉢	細・極多	褐灰色	口縁端部は小さく内外に摘み出し端面凹線。片口状	内面付着微量	角閃石極多
4-SD16f	4-924	大形鉢	細・極多	灰黄褐色	口縁端部は小さく外方に摘み出す。外面口縁部直下鈍い凹線、叩き目残る。	内面付着少量	角閃石極多、石英等多
4-SD16f	4-925	大形鉢	細・極多	にぶい黄色	口縁部は強く折り返して短い。端部は丸く納める。口縁部横ﾅﾃﾞ、外面直下鈍い凹線、内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多
4-SD16f	4-928	大形鉢	細・極多	にぶい褐色	やや内湾気味に立ち上がり、端部は内外に張り丸く納める。外面篦描沈線。内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量？	角閃石極多
4-SD16f	4-931	大形鉢	細・極多、中・普	黒褐色　暗灰黄色	薄作りの底部から緩やかに開く。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着多量	角閃石極多、石英等　朱
4-SD16f	4-932	大形鉢	細・極多	にぶい黄橙色褐色	底部はやや薄い。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着	角閃石極多
4-SD16f	4-933	大形鉢	細・極多	にぶい黄褐色褐色	外面縁辺部指押さえ、体部縦ﾐｶﾞｷ。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着多量	角閃石極多朱
4-SD16f	4-934	大形鉢	細・極多	黒褐色　明黄褐色	底部はやや薄い。外面縦ﾅﾃﾞ後横ﾊｹ。	内面付着多量	角閃石極多朱・砒素？
4-SD16f	4-935	大形鉢	細・極多	にぶい黄褐色にぶい黄橙色	やや厚手の鈍い突出底。縁辺部指押さえ、外面縦ｸｽﾞﾘ後疎らな縦ﾐｶﾞｷ。内面分割横ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多
4-SD16f	4-936	大形鉢	細・極多	にぶい黄褐色	外面縁辺部叩き目残る。内底面横ﾐｶﾞｷ、体部内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多、石英等

第47表　内面赤色顔料付着土器(11)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
4-SD16	4-980	大形鉢	細・極多	黒褐色　暗褐色	体部は強く開く。放射状ﾐｶﾞｷ。	内面付着多量	角閃石極多朱・砒素？
4-SD19	4-1113	大形鉢	細・極多	にぶい黄橙色	緩やかに湾曲し口縁部は短くやや内傾する。端部は丸く納める。外面口縁部直下凹線、内面上半部横ﾅﾃﾞ、以下横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、雲母多
4-SK01	4-1180	大形鉢	細・極多、中・多	暗褐色	底部は薄い。外面叩き目顕著に残る。内面縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着少量	角閃石極多（含粗粒）、石英等・雲母多
4-SK05	4-1276	大形鉢	細・極多	橙色	口縁部で短く折り返して端部は四角く納める。指押さえ。	内面付着微量	角閃石極多
4-SK11	4-1315	大形鉢	細・極多、中・多	橙色	やや内湾気味に立ち上がり、端部は四角く納める。口縁部直下に凹線３条。内面縦ﾐｶﾞｷ。	口縁付着少量	角閃石極多（含粗粒）
4-SK11	4-1316	大形鉢	細・極多、中・多	橙色	強く屈曲して鈍い段。口縁部は短く直立して端部は外方に引き出し内方も突出。頂部沈線。底部は縁辺がやや張り出すが薄い。口縁部横ﾅﾃﾞ、体部外面縦ﾊｹ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多（含粗粒）、石英等多、赤色粒
4-B14SP54	4-1345	大形鉢	細・極多	橙色	やや内湾気味に開き片口を持つ。端部は内外に張り気味に四角く納める。外面口縁部直下凹線１条。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多
4-撹乱土坑群	4-1364	大形鉢	細・極多	黄橙色	上半部で鈍く屈曲して段。口縁部はほぼ直立し端部は外方に引き出すと共に内方に突出して頂部に平坦面。	口縁付着微量	角閃石極多、雲母・石英等
4-SD05	4-1403	大形鉢	細・極多、中・多	にぶい黄褐色	口縁端部は上方に張り気味に四角く納める。外面叩き目残る。	口縁付着微量	角閃石極多、石英等多
4-その他	4-1434	大形鉢	細・極多	にぶい黄褐色	底部はやや分厚い。内面横ﾐｶﾞｷ、外面ﾅﾃﾞ。	内面・割れ口付着多量	角閃石極多朱・砒素？
4-その他	4-1435	大形鉢	細・極多、中・普、粗・少	にぶい黄橙色	底部は薄い。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	
4-その他	4-1436	大形鉢	細・極多	灰黄色	口縁部は小さく屈曲。端部は肥厚して四角く納める。外面叩き目残る。内面横ﾅﾃﾞ。	口縁付着微量	角閃石極多
4-SD16f	4-1475	大形鉢？	細・極多、中・普	灰黄褐色	底部縁辺部片。外面下端叩き目、他は縦ｹｽﾞﾘ、内面横ﾊｹ後ﾐｶﾞｷ。	内面付着多量	角閃石極多朱・砒素？
4-SD08	4-1477	大形鉢？	細・極多	にぶい黄橙色	内外面緻密な縦ﾐｶﾞｷ	内面付着多量	角閃石極多、雲母　朱
3-SD02	3-252	鉢	細・多、中・多	赤灰、にぶい赤褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目、内面指押え・板ﾅﾃﾞ	内底面付着少量	角閃石
3-SD02	3-254	鉢	細・少	にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ミガキ	内底面付着	角閃石
3-SR01	3-478	鉢	中・多	橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目、内面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ	口縁塗彩？	搬入品
3-SR01	3-482	鉢	中・多	黄灰・黒褐、に	外面ハケ目、内面指押え・ナデ	内底面付着	角閃石・雲母

第48表　内面赤色顔料付着土器(12)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
				ぶい黄			
3-SR01	3-483	鉢	微・少	赤、黒	外面ミガキ、内面ミガキ	内底面付着多量	角閃石・雲母 外面煤付着
3-SR01	3-484	鉢	中・普	にぶい赤褐、灰黄褐	外面ミガキ、内面ミガキ・ナデ	内底面付着	角閃石・雲母
3-SR01	3-485	鉢	細・少	灰黄褐・黒褐、黒	外面ミガキ、内面ミガキ	内底面付着	角閃石・雲母 外面煤付着
3-SR01	3-486	鉢	中・普	灰黄褐・赤橙、灰・黒	外面ミガキ、内面ミガキ	内面付着多量	
4-SH07	4-49	鉢	細・極多	にぶい黄橙色 灰黄色	内湾気味に開き、口縁端部は肥厚気味に丸く納める。外面直下に沈線２条。内面横ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多、石英等少
4-SB02	4-55	鉢	細・極多	黄褐色	やや内湾気味に立ち上がり端部は四角く納める。口縁部直下に凹線１条。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾊｹ。	内面付着微量	角閃石極多、石英等多
4-SD06	4-135	鉢	細・極多	黄褐色	緩く外傾して立ち上がり、端部は外方を張り出して四角く納める。	内面付着多量	角閃石極多、雲母多、石英等 朱
4-SD08	4-443	鉢	細・極多	褐色	口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は四角く納める。外面口縁部直下沈線１条。内面横ﾐｶﾞｷ後下半部放射状ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多
4-SD08	4-446	鉢	細・極多	灰黄色	口縁部で緩く屈曲して端部は丸く納める。縦ﾐｶﾞｷ。	内面付着微量	角閃石極多
4-SK01	4-1174	鉢	細・極多	暗灰黄色	口縁部で短く外傾して端部は張り気味に四角く納める。内面縦ﾐｶﾞｷ。把手付広片口皿側縁部の可能性。	内面付着少量	角閃石極多、石英等・雲母
4-SK05	4-1279	鉢	細・極多、中・多	黄橙色	強く突出した底部で縁辺部はやや張り出す。底部縁辺指押さえ、体部外面縦ｹｽﾞﾘ。	内面付着	角閃石極多、石英等多
4-SK01	4-1157	高坏	細・極多	橙色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は外傾して端部は尖る。上半部外面横ﾅﾃﾞ、他横ﾐｶﾞｷ。	内面付着多量	角閃石極多、石英等 朱
3-SD02	3-158	壷?	粗・少、中・普	にぶい黄、にぶい黄橙	外面ハケ目→ミガキ、内面指押え・ナデ	内底面付着	角閃石
3-SD02	3-162	壷?	粗・少、細・普	黒、褐	外面ケズリ、内面ナデ	内底面付着多量	角閃石・雲母
3-SD03	3-304	壷	微・少、中・少	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、内面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ	頸部付着	角閃石・雲母
4-SD19	4-1112	壷?	細・極多	褐色 にぶい黄橙色	底部薄い。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｹｽﾞﾘ。	内面付着微量	角閃石極多、石英等
3-SR01	3-425	甕	粗・少、細・少	にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ハケ目、内面指押え、ナデ	口縁～肩内面付着	角閃石・雲母
3-SR01	3-445	甕	微・少	灰黄・黒褐	外面ナデ、内面ナデ	内底面付着	雲母 搬入品
3-SR01	3-447	甕	微・少	黒褐・にぶい褐	外面ハケ目、内面ケズリ・板ナデ	内底面付着	角閃石・雲母

第49表　内面赤色顔料付着土器(13)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
				、赤褐			
3-SR01	3-505	甑	中・少	黒褐、灰黄・黄灰	外面ケズリ・ナデ、内面ナデ	内底面付着少量	角閃石・雲母

第50表　内面赤色顔料付着土器(14)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
4-SD16de	4-628	細頸壺	細・極多	にぶい黄橙色 黒褐色	強く張った偏平な体部。最大径部に幅広の低い突帯。頂部を強く横ﾅﾃﾞ。内面最大径部指押さえ顕著。上半部ﾅﾃﾞ。	外面塗彩	角閃石極多
4-SD16de	4-687	広口壺？	細・極多	にぶい褐色	口縁端部は強く外方に摘み出すと共に上方も突出。端面沈線。内面横ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。	外面塗彩	角閃石極多
3-SR01	3-460	高杯	細・少	にぶい赤褐、橙	杯外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、内面ﾐｶﾞｷ、脚外面ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面ｸｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ、円盤充塡	外面塗彩　坏内面列点状彩文	角閃石・雲母
3-SR01	3-471	高杯	中・普	にぶい黄褐	杯外面ﾅﾃﾞ、内面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、脚板ﾅﾃﾞ	脚部外面線状彩文	角閃石
4-SD08	4-342	高坏	細・極多	灰黄褐色	中位で屈曲して上半部やや外傾。端部は外方に小さく摘みつつ四角く納める。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部放射状ﾐｶﾞｷ。	外面塗彩	角閃石極多、石英等・赤色粒少
4-SD08	4-348	装飾高坏	細・極多	灰黄褐色	中位の鈍い屈曲部に断面三角形の突帯２条。外面横ﾅﾃﾞ。	外面塗彩	角閃石極多、赤色粒少
4-SD08	4-417	大形器台	細・極多	にぶい黄色　明褐灰色	口縁部は大きく外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ外方に大きく引き出して上部も突出。端面・口縁部外面凹線。軸上部に大形円形透かし。外面指ﾅﾃﾞ、口縁部内面鈍い凹線、上半部横ｸｽﾞﾘ後指押さえ。中位横ﾅﾃﾞ。	外面塗彩	角閃石極多、石英等・雲母
4-SD08	4-419	大形器台	細・極多、中・多	褐色	口縁部は外反して大きく開く。端部は強く上下に摘み出す。端面鈍い凹線・８個１対２段の円形刺突文。口縁部外面鈍い凹線。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｸｽﾞﾘ後上部横ﾐｶﾞｷ、中位以下指押さえ。中位に大形円形透かし。透かしを８条１単位の沈線文が螺旋状に取り巻く。	外面塗彩	角閃石極多、石英等多
4-SD16f	4-888	大形器台	細・極多	灰黄褐色	口縁部は大きく水平に開く。端部は上下に強く引き出してやや外傾する端面に円形刺突文	外面塗彩	角閃石極多
4-SD16f	4-890	大形器台	細・極多	黄褐色	口縁部大きく水平に開き、端部下方に摘み出し端面沈線。口縁部内面横ﾐｶﾞｷ、外面縦ﾊｹ。	外面塗彩	角閃石極多
4-SD16f	4-900	大形器台	細・極多、中・少	にぶい黄色	脚裾部は強く開き、端部は鈍く上下に摘み出す。端面・裾部外面凹線、横ﾅﾃﾞ。	外面塗彩	角閃石極多、石英等少　ﾍﾟﾝｶﾞﾗ
4-SK05	4-1274	大形器台	細・極多、中・多	黄橙色	脚裾部は強く外反して大きく開く。端部は上方に摘み出して下方も大きく突出。端面・裾部外面凹線	外面塗彩	角閃石極多、石英等多

第51表　外面赤色顔料塗布土器(1)

出土遺構	番号	器種	胎土	色調	形態上の特徴など	付着状況	備考
					。内面横ｹｽﾞﾘ。		
4-SD19	4-1102	器台	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩く開き、端部は小さく内外に張り出す。端面凹線、内面横ﾅﾃﾞ。	外面塗彩	角閃石極多

第52表　外面赤色顔料塗布土器(2)

第9節　上天神遺跡の集落構成

上天神遺跡では4単位の弥生時代後期集落を確認している。本節ではこれら集落単位の内容を整理しておく。

1．集落単位の構成要素

竪穴住居　全般的に著しい削平を蒙っており，ほとんどが主柱穴列から復元推定したものである。4本柱～8本柱構造の規模・形態上の格差がある。柱穴配置などから類推して床面積は約14～55㎡程度と考えられる。うち床面積50㎡を越える大形住居1棟，35～40㎡5棟，25㎡前後のやや小形の住居3棟，20㎡以下の小形住居2棟となる。明確に建て替えが確認できるのは最も大形で推定床面積55㎡のＳＨ04だけである。なお同住居からは大形砥石2個体が出土しており興味深い。またＳＨ01～05では本地方の弥生時代中後期の竪穴住居に通有の中央穴を備えている。ＳＨ01に見られる張り出し部を持つ住居平面形態は後期中～後葉に讃岐・阿波地方および播磨地方で盛行するもので，本地方では後期初頭から散見される。なおＳＨ02・04・05確認した壁際の長方形を呈する住居付帯土坑は，本地方での類例は乏しい。

掘立柱建物　いずれも梁間1間で，桁行2～3間の構造を持つ。棟持柱を有する例はない。

群	遺構名	平面形	規模・長軸	規模・短軸	面積	主柱数	中央穴	付帯土坑	時期	備考
単位3	4-SH01	円形	6.5m	6.4m	34.6㎡	6	有り	なし	弥生後期初頭	
単位3	4-SH02	円形もしくは隅丸方形	5.0m		推20㎡	4	有り	有り1	弥生後期初頭	
単位3	4-SH03				推35㎡	6	有り	なし	弥生後期	
単位3	4-SH04				推55㎡	7ないし8	有り	有り4	弥生後期	中央穴大形砥石出土、付帯土坑大形砥石出土
単位3	4-SH05				推25㎡	5	有り	有り1	弥生後期初頭	
単位3	4-SH06				推15㎡	4	なし	なし	弥生後期	
単位3	4-SH07				推30㎡	5	なし	なし	弥生後期	
単位3	4-SH08				推35㎡	6	なし	なし	弥生後期	
単位3	4-SH09				推25㎡	6	なし	なし	弥生後期	
単位3	4-SH10				推25㎡	5	なし	なし	SD16開削以前	
単位3	4-SH11				推10㎡	7	なし	なし	弥生後期	

第53表　上天神遺跡竪穴住居一覧

また柱掘り方は略方形ないしは円形を呈してやや大形であるが，柱痕から推定される柱材は径10cmと貧弱で，高床建物を想定するには躊躇する。床面積は7㎡前後から20㎡前後までの格差があり，12～15㎡程度が最も多く平均12.6㎡と，小形竪穴住居程度の床面積である。この点から掘立柱建物総体に竪穴住居総体と同じ機能を想定することは難しいと考える。

溝　第10節で検討する大形水路はその性格上集落構成とは直接的に関係がない。4区SH04では外周溝の痕跡と見られる小規模溝（SD09）がある。各住居・建物にこのような外周溝が伴うかどうかは明らかではない。また1区SD06～08は住居・建物群を囲繞する小規模溝である。同様に4区SD17～22，5区SD02・03は4区西端から5区に展開する建

群	遺構名	構造	床面積	桁行規模	梁間規模	柱間寸法・桁行	柱間寸法・梁間	主軸方位	時期	備考
	1-SB01	1×1	－	1.9m	1.8m	1.9m	1.8m	－	近世	
	1-SB02	2×1側柱	11.7㎡	3.9m	3.0m	1.9～2.0m	2.9m	N81W	近世	
	1-SB03	2×2	13.6㎡	4.7m	2.9m	1.2～3.5m	1.3～1.5m	N8E	近世	
	4-SB06	2×2総柱	18.9㎡	5.1m	3.7m	2.5～2.7m	1.7～2.0m	N78W	古代～中世	
単位1	1-SB04	1×1	6.5㎡	2.7m	2.4m	2.7m	2.4m	N56E	弥生後期	竪穴住居？
単位1	1-SB05	2×1側柱	11.3㎡	4.2m	2.7m	1.9～2.2m	2.6～2.7m	N87E	弥生後期	
単位1	1-SB06	1×1	4.3㎡	2.1～2.2m	1.9～2.1m	2.1～2.2m	1.9～2.1m	N12E	弥生後期	竪穴住居？
単位1	1-SB07	1×1以上	－	2.5m	2.0m	2.5m	2.0m	－	弥生後期	
単位2	3-SB04	3×1側柱	13.2㎡	4.4m	3.0m	1.5～1.6m	3.0～3.1m	N56W	弥生後期	
単位2	3-SB05	3×1側柱	10.0㎡	5.0m	2.0m	1.6～1.9m	2.0～2.3m	N56E	弥生後期	
単位2	3-SB01	2×1側柱	7.0㎡	2.5m	2.8m	1.2～1.6m	2.8m	N15E	弥生後期	
単位2	3-SB02	2×1側柱	12.1㎡	3.9m	3.1m	1.9～2.1m	3.0～3.3m	N65W	弥生後期	
単位2	3-SB03	3×1側柱	20.4㎡	6.0m	3.4m	1.8～2.5m	3.3～3.5m	N67E	弥生後期	
単位2	4-SB01	3×1側柱	15.3㎡	5.1m	3.0m	1.5～1.9m	3.0m	N60E	弥生後期	
単位3	4-SB02	3×1側柱	14.9㎡	5.4m	2.7～2.8m	1.5～2.0m	2.7～2.8m	N3W	弥生後期	
単位3	4-SB03	3×1側柱	19.3㎡	5.7～8.0m	3.3～3.4m	1.7～2.1m	3.3～3.4m	N6E	弥生後期	
単位3	4-SB04	2×1側柱	13.3㎡	4.3m	3.1m	2.1～2.2m	3.1m	N4E	弥生後期	
単位3	4-SB05	2×1側柱	14.9㎡	4.8m	3.1m	2.2～2.6m	3.1m	N4W	弥生後期	
単位3	4-SB07	2×1側柱	8.2㎡	3.5m	2.2～2.5m	1.7～1.8m	2.1～2.4m	N47E	弥生後期	
単位3	4-SB08	2×1側柱	6.3㎡	3.0m	2.1m	1.8～1.9m	2.4m	N61W	弥生後期	
単位3	4-SB09	2×1側柱	13.3㎡	5.1m	2.6m	2.1～3.1m	2.8～2.9m	N83W	弥生後期	
単位3	4-SB10	2×1側柱	13.4㎡	4.7m	2.8～2.9m	2.3～2.4m	2.8～3.0m	N84E	弥生後期	
単位3	4-SB11	2×1側柱	11.7㎡	3.9m	3.0～3.1m	1.8～2.0m	3.0～3.1m	N75E	弥生後期	
単位4	4-SB12	2×－	－	4.2m	－	2.4～2.5m	－	N83E	弥生後期	
単位4	4-SB13	2×1側柱	10.0㎡	4.1～4.4m	2.3～4.0m	1.7～2.4m	2.3～2.4m	N71E	弥生後期	
単位4	4-SB14	3×1側柱	14.2㎡	4.9m	2.9m	1.5～1.9m	2.9～3.0m	N67E	弥生後期	
単位4	4-SB15	2×1側柱	11.4㎡	3.8m	2.7～3.3m	1.7～2.1m	2.7～3.3m	N40E	弥生後期	
単位4	4-SB16	2×－	－	4.2m	2.5m以上	2.0～2.2m	－	N37E	弥生後期	

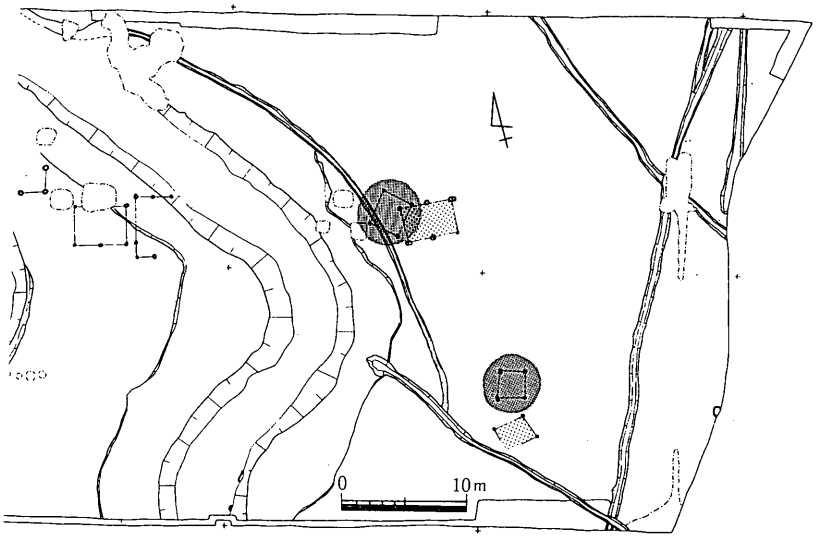
第54表　上天神遺跡掘立柱建物一覧

物群を囲繞する。しかしいずれも小規模な溝で一定の削平を考慮しても防御機能は想定できない。むしろ建物群周辺の排水目的の小溝であろう。

その他　井戸と想定される一群の土坑が4区に集中している。いずれも素掘りで壁面が崩落し，下底部が袋状に広がる。空港跡地遺跡の出水遺構のように導水用の小規模溝は見られない。4区にこの種遺構が集中するのが，地下水脈等との関係か，別の要因かは明らかにできていない。また土器棺墓を含めて埋葬施設は確認していない。

2．上天神遺跡の集落単位

冒頭に述べたように，ほぼ東西に並ぶ3つの微高地と4本の河道および低地部を貫いて今次の上天神遺跡調査は実施している。このうち微高地2に1単位，同3で3単位の集落単位を検出している。これらについて以下では西から集落単位1～4と称する。（微高地名称は第2章参照）



第488図　上天神遺跡　集落単位1

（1）集落単位1（1区）

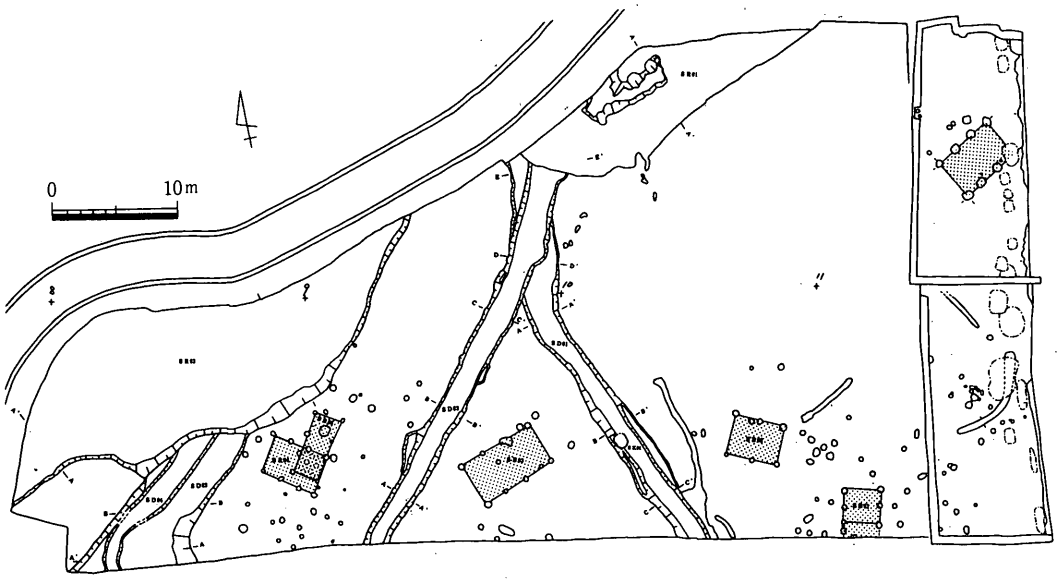
微高地2に位置し，小規模溝ＳＤ06・07・08に区画された東西約20m，南北40m以上の範囲である。南北2群の竪穴住居・掘立柱建物群計4棟を検出しているが，配置関係から竪穴住居・掘立柱建物計2棟群が二時期存在したと推定できる。

伴出遺物は少なく，後期初頭の短期間に限られる。

（2）集落単位2（3・4区）

微高地3西端に位置し，西縁は3区ＳＲ01およびＳＤ03・04に画され，東縁は4区ＳＤ06の，東西約70mの範囲。調査区外南方に連続して南北規模不明となる。1単位と推定し

たが，遺構が散漫に分布し範囲も広いので，３区ＳＤ02を境に東西２単位群とみなすことも可能かもしれない。掘立柱建物４群６棟を復元しているが，まだ周辺に復元不可の柱穴多数分布しており，本来の建物数はまだ多いであろう。



第489図　上天神遺跡　集落単位２

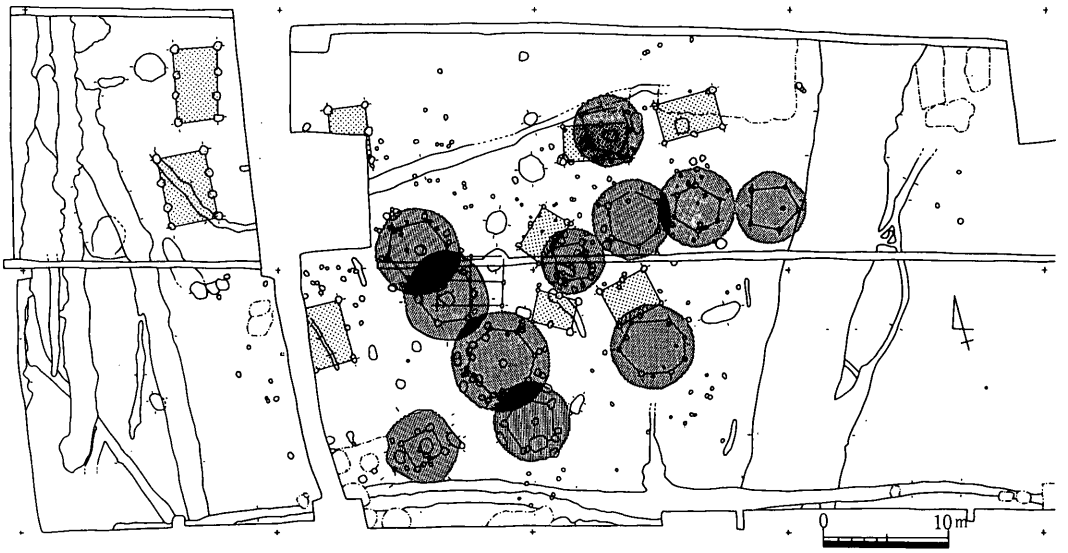
また現在復元している内容では掘立柱建物だけからなる単位であるが，遺構の残存状況は全般的に不良であるので，未復元柱穴群中に竪穴住居も含まれる可能性は残る。しかし掘立柱建物が中心となる単位であることは動かないであろう。同時併存は２～４棟程度と考えられる。

建物遺構の伴出資料は乏しいが，隣接する３区ＳＤ02・03・04，４区ＳＤ06資料から類推して後期初頭を中心に前葉まで存続した単位と考える。

（３）集落単位３（４区）

微高地３中央部に位置し，存続期間は他単位と同様に短いが，遺構の密集度が高く，確認遺構数も多い。４区ＳＤ08とＳＤ16に画された東西50m強の範囲に広がる。調査区外南北に連続するものの地形的に見て北方にはあまり広がらないであろう。位置関係から判断して多量のＳＤ16出土遺物の多くはこの単位に関わるものであろう。

この範囲に竪穴住居11棟以上，掘立柱建物８棟以上，井戸状土坑６基などが見られる。竪穴住居は中央部に密集し，掘立柱建物は概ね２群に分かれ，竪穴群の西および北に位置する。同時併存は調査区の範囲内で竪穴住居２～３棟と掘立柱建物２～４棟程度であろう。

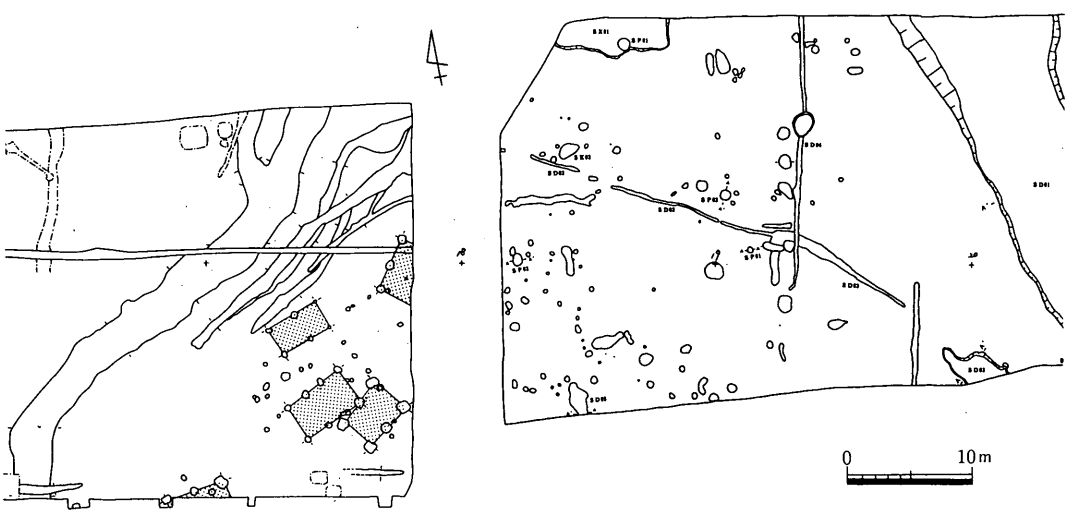


第490図　上天神遺跡　集落単位 3

また井戸は中央部に並ぶが，集落構成上の要因か水脈との関係かは判断できない。

伴出遺物の大部分は後期初頭に属するので，この単位もこの限られた期間の所産と考える。ただし少量だけ後期前葉～中葉に下る資料が混在するので，相対的に小規模な単位が前葉～中葉にも存続した可能性はある。

なお上天神遺跡で特徴的な赤色顔料付着土器のほとんど全てがこの単位から検出されていることは注意しなければならない。また片岩製石庖丁および片岩片の出土量，比率が最も高いのもこの単位である。



第491図　上天神遺跡　集落単位 4

（4）集落単位4（4・5区）

微高地3東縁部に位置する。東西約50mの幅に展開する集落域は調査区外南方に広がり，他3方は4区ＳＤ17～25およびそれに連続する5区ＳＤ02・03に画される。西半部で掘立柱建物5棟を復元している。東半部は未復元だが柱穴群が広がり，この部分に掘立柱建物あるいは竪穴住居が存在した可能性は残る。同時併存は2～最大5棟程度であろう。後期初頭～前葉の資料が建物群を取り巻く溝などで検出されている。

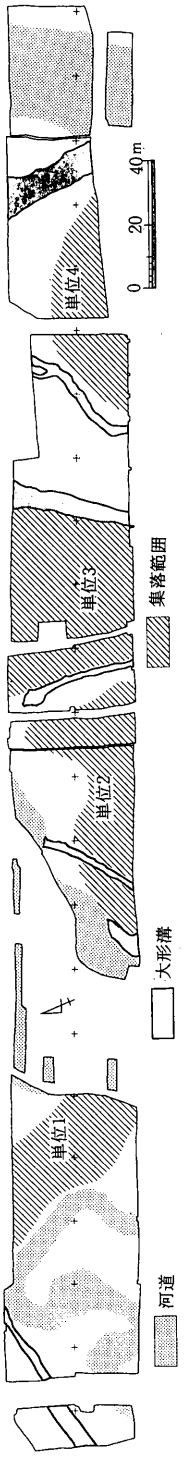
3．集落単位の特徴

以上のように上天神遺跡では，ほぼ同時期の4つの集落単位が分散的に存在している。これら集落単位の特徴について若干の補足を加えておく。

今，ここで上天神遺跡として一括している4個の集落単位が当該時期においても，隣接する太田下・須川遺跡の集落単位とは対峙的に何らかの結束を示した確証はアプリオリに与えられるものではない。隣接する4個の集落単位に冠せられた「上天神遺跡」の名称は，全く行政的な符号にすぎず，当該時期の集団関係の検討に当たってはほとんど意味をなさないものである。

（1）いずれの単位においても掘立柱建物の比率が高い。しかし個別に述べたようにそれだけで完結する単位は確定できない。同様に掘立柱建物が高い比率を占めるあり方は善通寺市矢ノ塚遺跡，西碑殿遺跡等においても認められ，弥生時代中・後期に本地方にかなり普遍的に認められるようである。

（2）集落単位内あるいは隣接地点にも原則的に墓域は営まれていない。土器棺墓を含めて単位付近に埋葬施設を認めることができない。



第492図　上天神遺跡の集落構成

（3）存続期間は短い。同一地点を継続的に集落単位として占有する志向が弱い。このことは1区ＳＤ01，4区ＳＤ16のような大形潅漑水路が長期間維持されることと好対照である。

（4）最も小規模な単位1はおそらく竪穴住居・掘立柱建物各1棟のセットからなるが，たとえば規模の大きな単位3は，単純にそうしたセットの並立という構成をとるわけではない。このことは小規模な単位の逐次的な合流の累積が，より大規模な単位として現象するのではないことを示唆する。単位規模の差異は本来的な性格の相違であろう。

（5）とはいえ，その格差は構成施設に限ってみれば量的な側面が強い。例えば特別な防御設備（環濠など）の有無や，諸設備の有無・配置状態の重大な格差などは明確ではない。

（6）施設面に示された格差以上に，遺物の差が単位間で大きい。単位規模やより偶発的な要因に基づく出土遺物の量的差異以上の相違点を単位間に認めることが出来る。後節で示すように赤色顔料付着資料及び片岩系石材の検出量比に，単位間の差異が顕著に現れている。

こうした点は単位間の分業および他地方集団との接触のあり方の差（このことも分業の一要素である。）を反映するものであろう。単位の機能および相互関係を考慮する際に重要である。

（7）単位1・4では，集落諸施設を取り巻く小規模な溝を認めることができる。おそらく集落域を区画するもので，単位2・3では隣接する潅漑水路が，この一部に相当するかもしれない。しかし，たとえば「環濠」のような防御施設はいずれの単位においても未確認である。おそらく他単位より大規模な単位3も「非武装」状態である。本例に限らず，このことは当地方では集落規模を問わず，遅くとも弥生中期中葉以降に一般的に認めうる可能性が高い。当該時期前後に一般的に見られるように，当遺跡でも戦闘用と目される大形石鏃を多量に検出している。にもかかわらずこのような集落の一般的な「非武装」状態は興味深いといえよう。

第10節　基幹的潅漑水路と潅漑単位

1．上天神遺跡の大形潅漑水路

上天神遺跡では1区ＳＤ01，4区ＳＤ16等の大形溝を検出している。これらは部分的な検出にとどまり，全貌は明らかにし得ていないが，単に規模が大きいだけでなく，流下方向に次第に分岐すること，併走する小規模溝を伴うこと，複数回の改修を経て比較的長期間機能することが特徴である。また位置関係および柵列などの付帯施設を伴わないことから集落外郭を画する防御施設としての環濠ではなく，潅漑用の大形水路と推定できる。やや規模は小さいが，他に3区ＳＤ03・04，5区ＳＤ01等にも類する機能を持つ可能性がある。

1区ＳＤ01は微高地1に位置し延長約50m分を確認している。南西から北東に直線的に流れ，現状で幅3m以上，深さ0.8mを測る。周辺の著しい削平を考慮すると，旧状はこれを上回る大規模な水路であったことが予想できる。開削は遅くとも弥生前期後半に遡り，以後最低3回の改修を経て古墳時代初頭まで機能する。これから分岐して併走する小水路が6条以上確認できる。

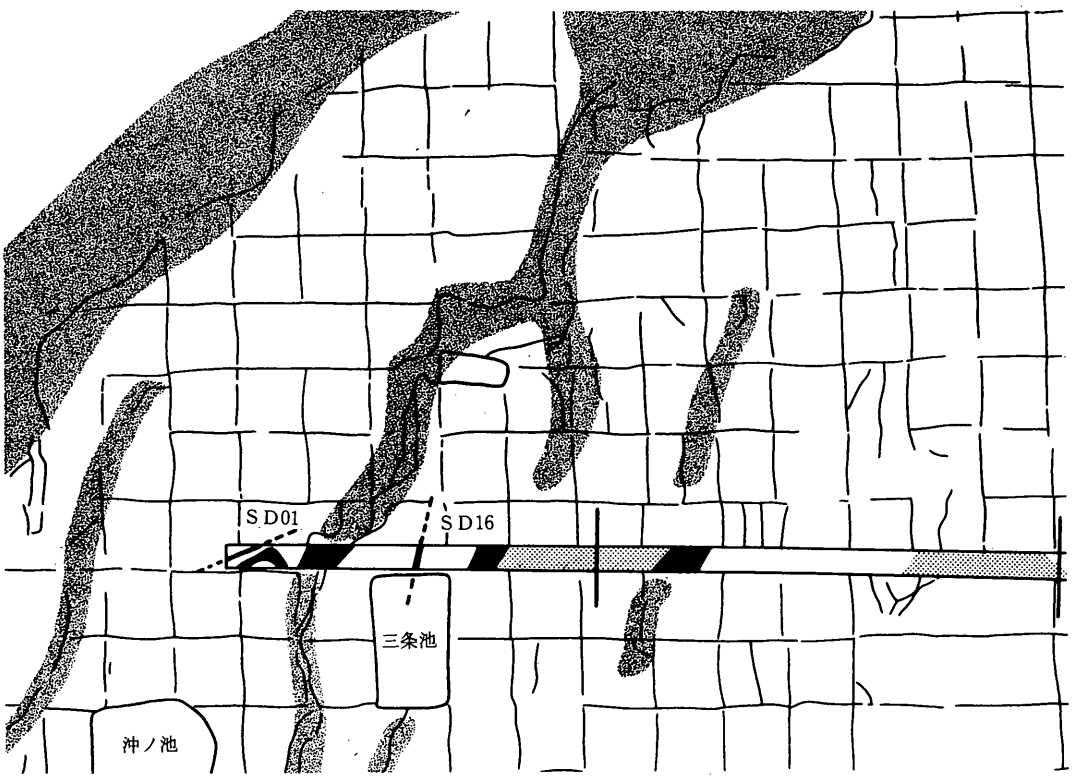
これほどの規模を必要とする大形水路であるので取水源は空港跡地遺跡に見るような小規模な出水群とは考えにくい。ある程度の流量が期待できる自然河川を想定した方がよいであろう。とすれば位置と流下方向から見て，微高地1西方の河道，現沖ノ池西側に痕跡をとどめる旧河道が候補となろう。この推定が正しければ取水源から検出地点までででも200m強の延長距離が必要となる。

4区ＳＤ16は微高地3に位置し延長40m分を確認している。南から北に流れ，現状で幅3m前後，深さ0.6m前後の大形溝2～3条が分岐・併走し小規模溝を伴う。開削時期は後期初頭で，1区ＳＤ01より遅れるが3回以上の改修を経て後期後葉まで機能する。位置と流下方向から，微高地2・3間の河道2もしくは三条池南方から北北東に流下する河道3上流部を取水源とすることが予想できる。やはり検出地点までに限っても200m以上の延長距離を必要とする。

太田下・須川遺跡[1]，居石遺跡[2]等で径1m以下，長2～3m程度の木樋を検出している。この程度の樋管によって，小規模溝ならば，溝同士の交差や地表面の僅かな起伏を渡すことは可能であろうが，ここで検討する大規模溝に対応する規模の樋管は当該時期に確認されていない。

1区ＳＤ01の機能した弥生前期後半～古墳時代初頭には河道１はほぼ埋没過程にあるものの，微高地２西方の河道２は確実に機能しており，同溝の規模とレベルから見て，河道２の形成する幅60m前後，比高２m内外の低地を越えて東方に配水すること，そしておそらくは取水源と想定できる微高地１西方の河道以西への配水も同様に当該時期の技術水準では著しく困難であろう。したがって大規模潅漑水路ＳＤ01のカバーしうる範囲は最大限でも東西200～300m程度の微高地１・２部分に限定されることになる。同様の見地から４区ＳＤ16も東西200m弱，南北方向は最大でも500～700m程度の狭隘な紡錘形を呈する微高地３に限定されるであろう。

とはいえ，これら大形水路を必要とする程度の潅漑用水の需要は，個別集落単位で管理する耕地規模をはるかに越えるものであることが予想できる。また１区ＳＤ01，４区ＳＤ16の規模から試算して両溝の掘削土量は延長100mあたりで200㎥を凌駕する。溝の開削・整備はもとより改修に対しても個別集落単位を越えた規模の労働力の結集が前提となることは容易に推定できる。



第493図上天神遺跡の大形潅漑水路

2．基幹的潅漑水路と潅漑単位

太田下・須川遺跡ＳＲ02，浴・松ノ木遺跡ＳＤ16[3]などはおそらく上記した上天神遺跡の大形水路と同程度の機能を有する潅漑水路と推定されるもので，開削が前期段階に遡る可能性があり，複数回の改修を経て長期間維持されている。全てが弥生時代前期というかなり早い段階に遡るのではなかろうが，少なくともいくつかの事例においては，その段階で個別の集落単位を越えた労働力の結集を前提とする潅漑施設の整備を実現していることに注目したい。

ところで当該時期の高松平野は，第２章で示したように，まだ死滅・埋没しない河道群が網目状に分布し多くは流路として機能していたと復元できる。高松東道路関係調査の成果によれば，上天神遺跡～春日川間で流路および埋没過程にある低地が200～300ｍ間隔で10群以上確認できる。その全てが取水源として機能しうるとは考えられないが，これら多くの低地は上記した１区ＳＤ01・４区ＳＤ16の場合のように，個別大形水路の潅漑範囲を限定づけていたものと推定できる。流路群が形成する連続的な凹地は，潅漑水路相互を連結しようとすれば重大な障碍にならざるを得ない。

つまり潅漑水路網は，網目状に流れる河道群に遮断された幅200～300ｍ，長300～700ｍ程度の紡錘状を呈する微高地単位の狭隘な範囲で完結せざるを得ない。この範囲を越えた水路水路網の相互補完的な拡充は，河川沖積作用の進行による地表の平準化もしくは大形樋管の採用等の技術的革新を待たなければならないであろう。この範囲を基礎的な潅漑単位と考える。この個別集落単位複数を含む「単位」が水路維持などで利害を共有する，したがって農業生産にあたって必然的に結集しうる協業単位である。上天神遺跡と隣接する太田下・須川遺跡を例に取ると，この２遺跡は弥生後期段階にはまだ機能している河道２及び３・４によって三分された複数の基礎潅漑単位に区分されると思われる。上天神遺跡集落単位１および上天神遺跡集落単位２～３と太田下・須川遺跡の２単位である。

同一の香東川水系から取水する限りでは，決して水量が豊富とはいいがたい本地域ではその配分を巡って，この基礎的潅漑単位相互で一定程度の調整を必要とするであろうことは予測できる。そして耕地拡大に伴い用水の需要量が増大するに従って，単位相互の調整は恒常的かつ緊密なものとならざるを得ない。しかしそうではあっても，先に見た限界を克服し得ない限り，この単位が最も基礎的なそして強固なものであることには変わりないであろう。

また上天神遺跡１区ＳＤ01や浴・松ノ木遺跡ＳＤ06で典型的に認められるように，こう

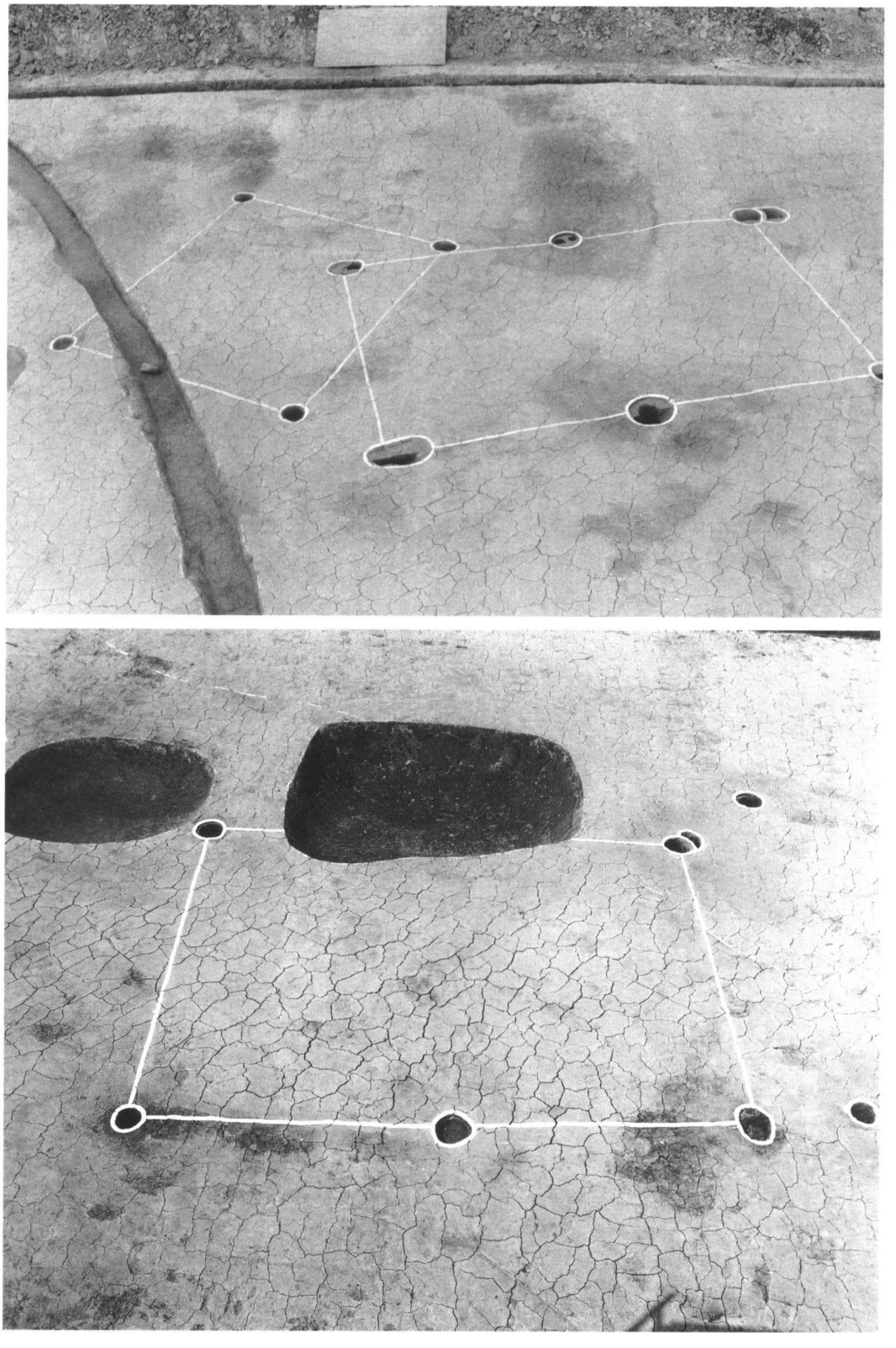
した基幹水路は長期に亙って維持・使用されつつづけることが確認できる。このことは潅漑を基軸とした単位の結合が強固に保持され続けることの反映である。こうした基幹的水路に比べれば一般にはるかに短命な集落の存続期間，すなわち相対的な集落単位の不安定さ・流動性と対照的であることに注意したい。個別の集落単位の消長を超越して，潅漑を基軸とした地域的な結合が強固に機能すると見なすことができる。

（1）北山健一郎・森下友子『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター１９９５

（2）山元敏裕「居石遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会１９９２

（3）山元敏裕『浴・松ノ木遺跡』高松市教育委員会１９９４

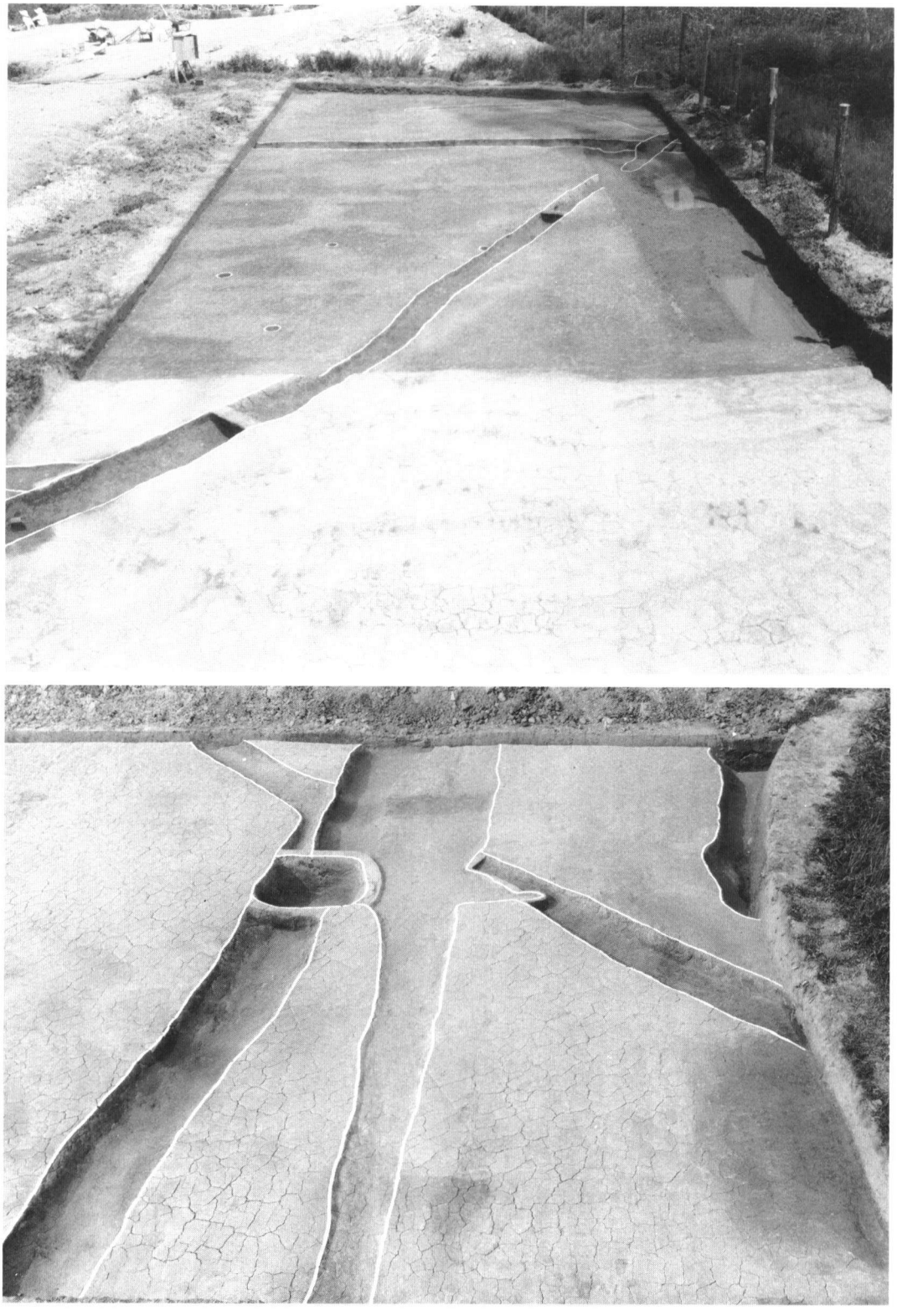
図　　版



1 区ＳＢ04・05（南から），ＳＢ02（南から）

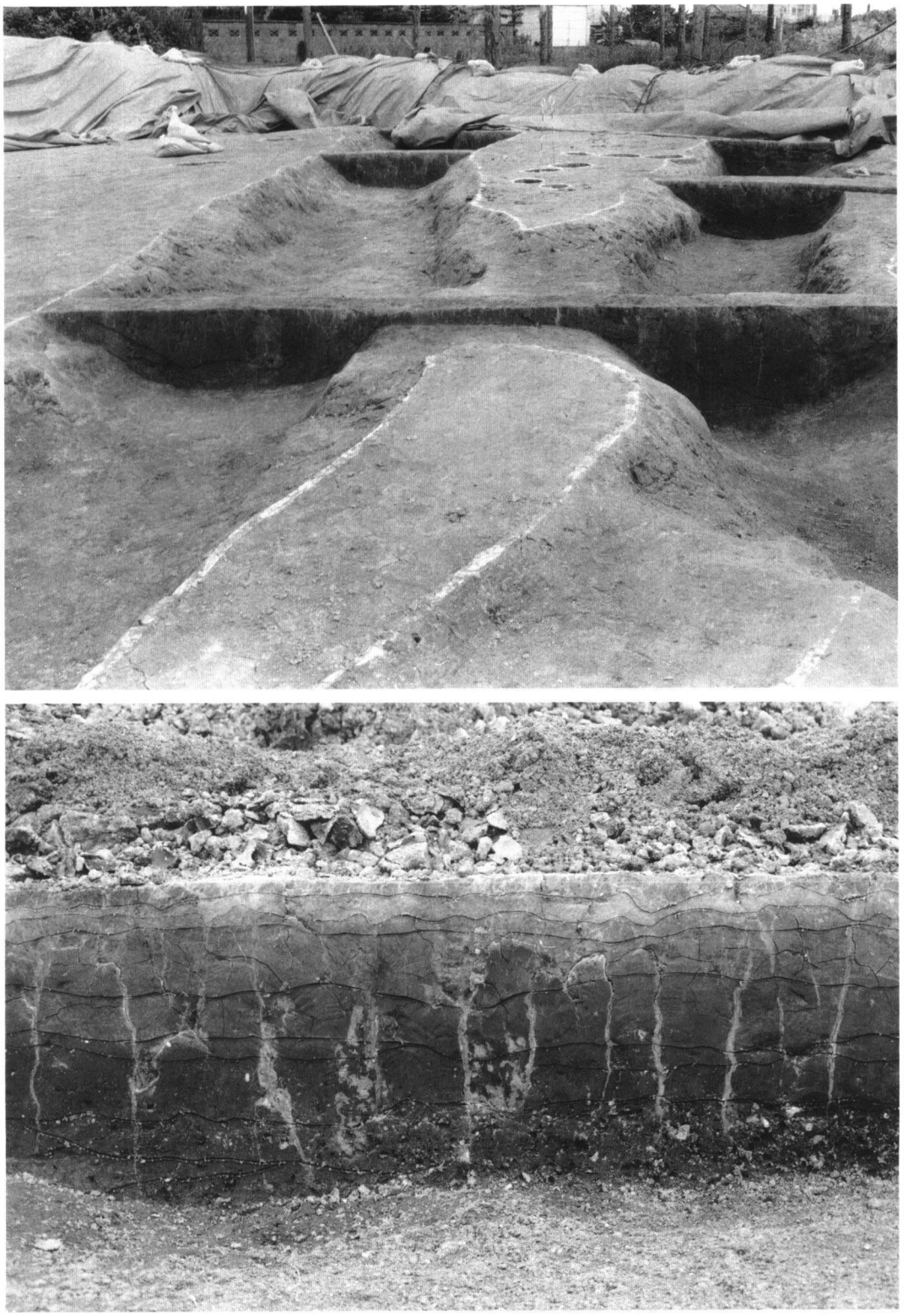
図版 2

1区ＳＤ01検出状態（南から），ＳＤ01上層砂層除去（西から）



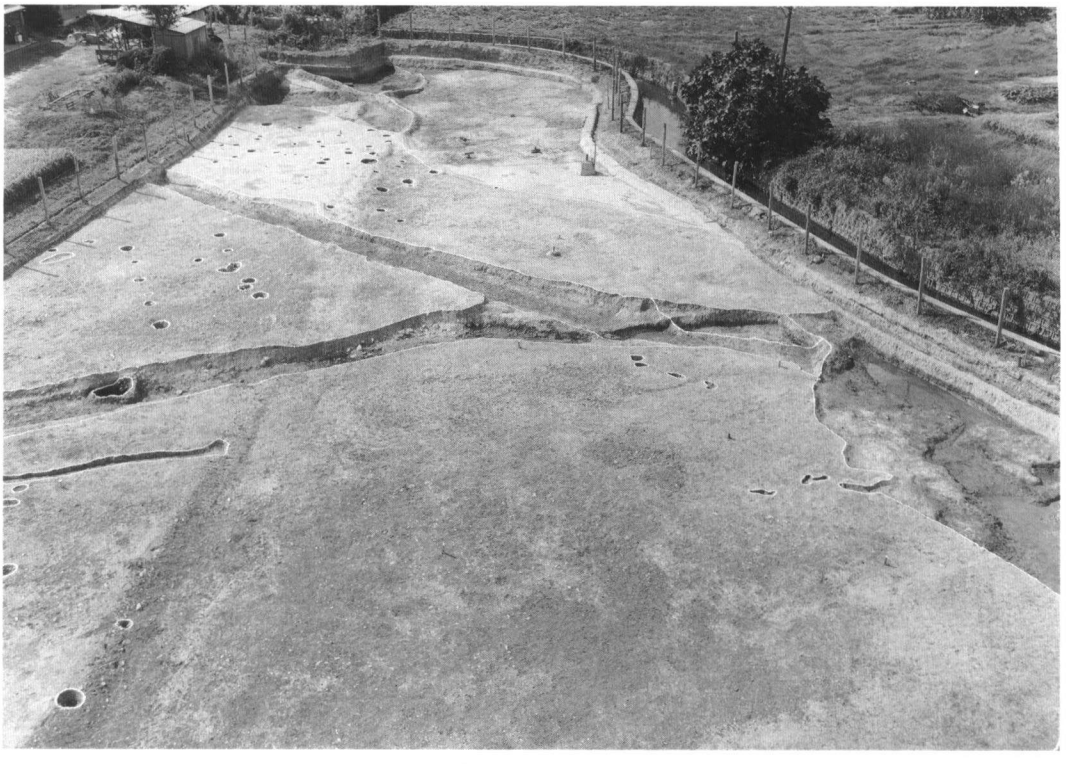
1区ＳＤ07・ＳＢ06・07（西から），ＳＤ08・09（南から）

図版 4



1区ＳＤ10・11（西から），ＳＲ01土層断面（南から）

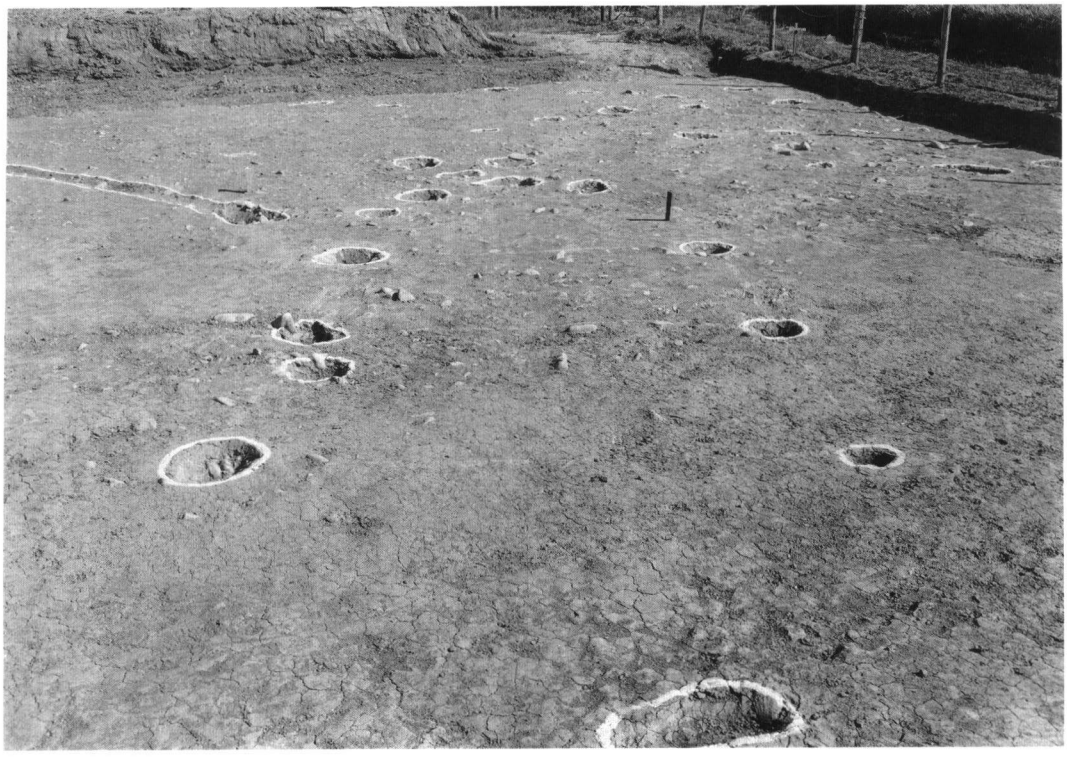
3 区全景



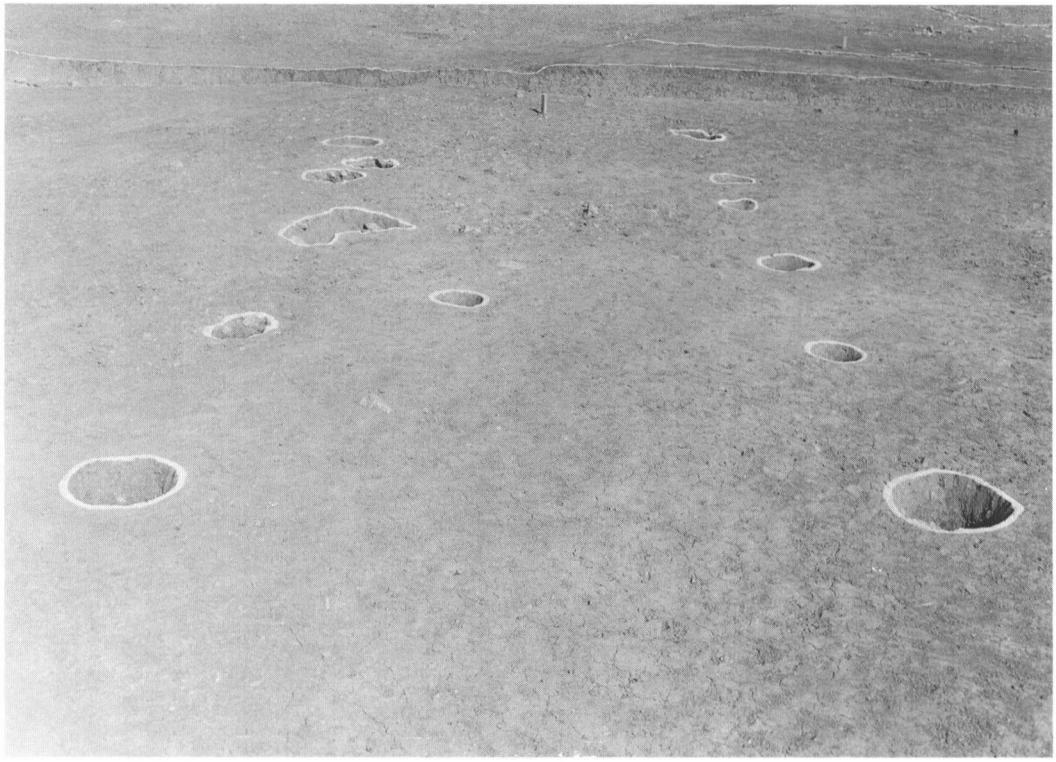
3 区全景（東から）

図版 6

3 区 S B01（北から）



3 区 S B02（西から）



3 区ＳＢ03（西から）

3 区ＳＢ04（東から）

図版 8

3 区ＳＤ01（南から）

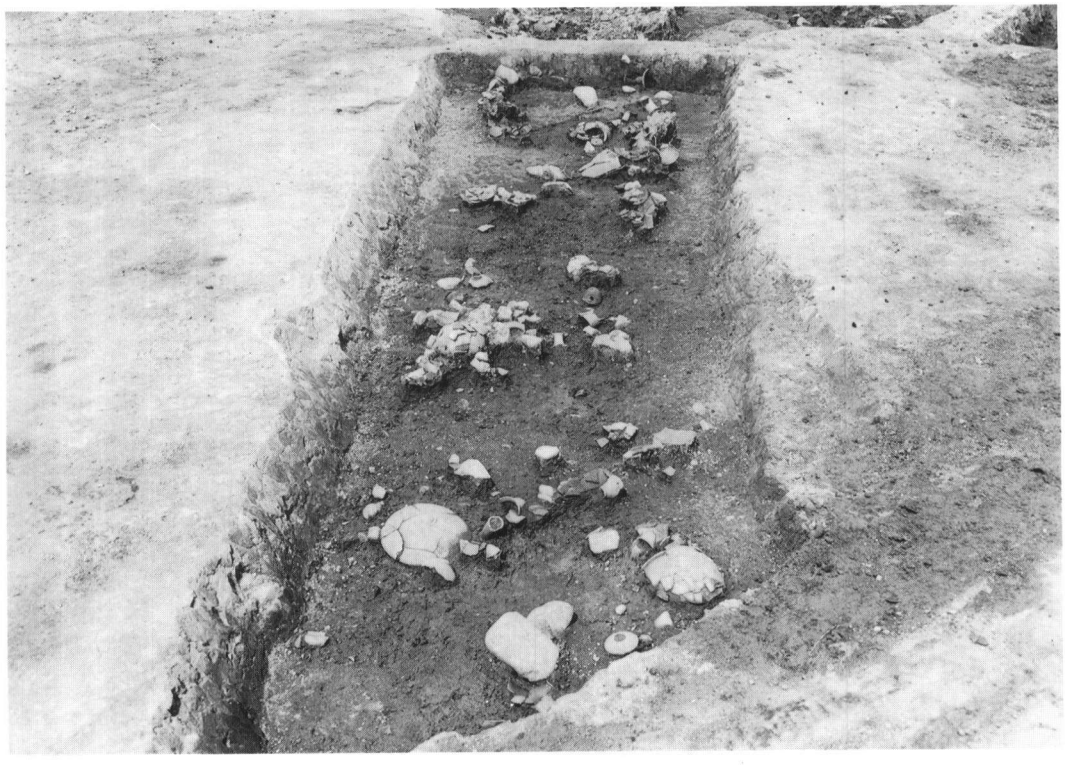
3 区ＳＤ01・02交点部分断面（Ｄ－Ｄ’）（南から）

3 区ＳＤ02（北から）

3 区ＳＤ02遺物出土状況（南から）

図版10

3区ＳＤ02遺物出土状況（北から）



3区ＳＤ02遺物出土状況（南から）

3区ＳＤ02遺物出土状況（西から）

3区ＳＤ04遺物出土状況（北から）

図版12

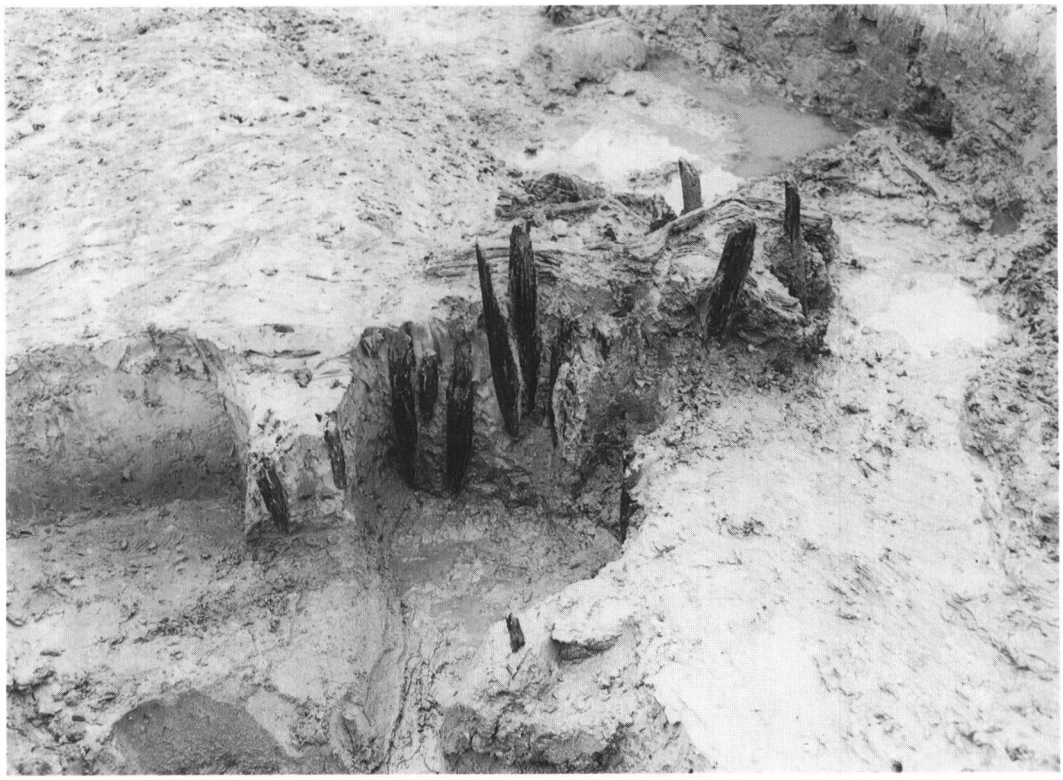
3区ＳＫ01上層遺物出土状況（西から）

3区ＳＫ01中層遺物出土状況

3区ＳＲ01（東から）

3区ＳＲ01井堰（東から）

図版14



3区ＳＲ01井堰（東から）

3区ＳＤ03・ＳＲ02（北東から）

4区全景写真（東から），同上（南から）

図版16

4区調査前風景（西から），同上（南から）